取扱注意

放送大学開設予定授業科目講義内容案

平成３年７月

第　９　版

放　送　大　学

教務部教務課

目　　次

1. 基本・基礎科目		頁	開設年次	作成年度	メディア	単位
一連番号（人文系）						
1	生活と芸術 ……	1	2	1セ	TV	2
2	家政原論 ……	3	3	2	R	2
3	教育学概論 ……	5	2	1	R	2
4	心理学 ……	7	1	63	TV	2
5	行動科学Ⅰ ……	9	2	1	TV	2
6	行動科学Ⅱ ……	11	2	1	TV	2
7	現代の人間観と世界観 …（平成3年度限り）……	13	63	62	R	2
8	哲学の基礎 ……（平成3年度限り）……	15	60	58セ	R	2
9	中国の思想 ……	17	3	2	R	2
10	近代の思想 ……	19	1	63	R	2
11	ことばとコミュニケーション ……	21	63	62セ	TV	2
12	記号論 ……	23	1	63	TV	2
13	比較思想 ……	25	2	1	TV	2
14	日本語学概論 ……	27	2	1	R	2
15	日本語 ……（平成3年度限り）……	29	63	62セ	R	2
16	近代詩歌 ……	31	2	1セ	R	2
17	人間の歴史 ……	33	63	62	R	2
18	歴史にみる日本人と仏教 ……	35	2	1	TV	2
19	世界歴史と国際交流 ……	37	1	63セ	R	2
20	人文地理学の基礎 ……（平成3年度限り）……	39	63	62	TV	2
	（社会系）					
21	法学入門 ……	41	2	1	TV	2
22	憲法概論 ……	43	1	63	TV	2
23	行政法 ……	45	2	1セ	R	2
24	政治学入門 ……（平成3年度限り）……	47	63	62	R	2
25	経済学入門 ……（平成3年度限り）……	49	63	62	R	2
26	経済社会論 ……	51	2	1	R	2
27	社会学入門 ……	53	63	62	R	2
28	比較社会史 ……	55	2	1	R	2
29	民俗学 ……	57	2	1セ	TV	2

		頁	開設年次	作成年度	メディア	単位
30	日本経済と産業と企業 ……	59	1	63	TV	2
31	経営総論 ……（平成3年度限り）……	61	63	62	R	2
32	会計総論 ……（平成3年度限り）……	63	63	62	TV	2
	（自然系）					
33	現代の数学観 ……（平成3年度限り）……	65	63	62	R	2
34	基礎数学Ⅰ ……（平成3年度限り）……	67	63	62	TV	2
35	線形代数学 ……	69	2	1	TV	2
36	確率論 ……	71	1	63	R	2
37	統計学 ……	73	1	63	R	2
38	物理の世界 ……	75	2	1	TV	2
39	基礎化学 ……	77	2	1	TV	2
40	物質の構造と機能 ……	79	2	1	TV	2
41	基礎生物学Ⅰ ……	81	2	1	TV	2
42	基礎生物学Ⅱ ……	83	2	1	TV	2
43	人間の生物学 ……	85	1	63	TV	2
44	生命科学史Ⅰ ……	87	1	63	R	2
45	生命科学史Ⅱ ……	89	1	63	R	2
46	地球と宇宙（地球編）……（平成3年度限り）……	91	63	62	TV	2
47	地球と宇宙（宇宙編）……（平成3年度限り）……	93	63	62	TV	2
48	日本の自然 ……	95	2	1	TV	2
49	科学と実験 ……	97	1	63	TV	2
平成4年度改訂開設科目						
	（人文系）					
	現代の人間観と世界観 ……	99	4	3	R	2
	哲学の基礎 ……	101	4	3	R	2
	推理と分析 ……	103	4	3	R	2
	人文地理学 ……	105	4	3	TV	2
	（社会系）					
	政治学入門 ……	107	4	3	R	2
	経済学入門 ……	109	4	3	R	2
	経営管理総論 ……	111	4	3	R	2
	会計総論 ……	113	4	3	TV	2

		頁	開設年次	作成年度	メディア	単位
	（自然系）					
	数学の歴史	115	4	3セ	R	2
	微分積分学	117	4	3	TV	2
	地球と宇宙（地球編）	119	4	3	TV	2
	地球と宇宙（宇宙編）	121	4	3	TV	2

2. 外 国 語 科 目

50	英語Ⅰ（'90）	123	2	1	R	2
51	英語Ⅱ	125	1	6 3	R	2
52	英語Ⅲ	127	1	6 3	TV	2
53	英語Ⅳ	129	1	6 3	TV	2
54	英語Ⅴ	131	2	1	R	2
55	英語Ⅵ	133	1	6 3	R	2
56	英語Ⅶ	135	2	1	R	2
57	ドイツ語Ⅰ	137	1	6 3	TV	2
58	ドイツ語Ⅱ	139	1	6 3	TV	2
59	ドイツ語Ⅲ	141	1	6 3	R	2
60	ドイツ語Ⅳ	142	2	1	R	2
61	ドイツ語Ⅴ	144	2	1	R	2
62	フランス語Ⅰ	146	1	6 3セ	TV	2
63	フランス語Ⅱ	148	1	6 3セ	TV	2
64	フランス語Ⅲ	150	1	6 3セ	R	2
65	フランス語Ⅳ	152	2	1セ	R	2
66	フランス語Ⅴ	154	2	1セ	R	2
67	中国語Ⅰ	156	1	6 3	R	2
68	中国語Ⅱ	158	1	6 3	R	2
69	中国語Ⅲ ……（平成３年度限り）……	160	6 2	6 1	R	2
70	中国語Ⅳ	162	6 3	6 2	R	2
71	ロシア語Ⅰ	164	1	6 3	R	2
72	ロシア語Ⅱ	166	1	6 3	R	2
73	スペイン語Ⅰ	168	2	1	R	2
74	スペイン語Ⅱ	170	2	1	R	2

		頁	開設年次	作成年度	メディア	単位
75	Japanese Ⅰ	172	1	63	TV	2
76	Japanese Ⅱ	174	1	63	TV	2
	平成4年度改訂開設科目					
	中国語Ⅲ	176	4	3セ	R	2

3. 保 健 体 育

77	保健体育	178	60	59セ	TV	3
78	体育実技					1

4. 専 門 科 目

生活と福祉

79	生活原論	180	2	1	R	2
80	人間と社会環境	182	1	63	TV	2
81	家族関係論	184	3	2	R	2
82	現代家族の社会学	186	3	2セ	R	2
83	家庭の経済 （平成3年度限り）	188	63	62セ	R	2
84	家庭の経営	190	1	63セ	R	2
85	衣生活概論 （平成3年度限り）	192	63	62	TV	2
86	衣服論	194	2	1セ	TV	2
87	衣生活の科学	196	3	2	TV	2
88	食と栄養の生態学	198	3	2	R	2
89	食物総論 （平成3年度限り）	200	63	62	TV	2
90	食物の探究	202	2	1	TV	2
91	住生活史	204	1	63	TV	2
92	住まいと環境	206	2	1	TV	2
93	住居Ⅲ （平成3年度限り）	209	62	61	TV	2
94	人間の病気	211	63	62	R	2
95	母子健康科学Ⅰ	213	3	2	TV	2
96	母子健康科学Ⅱ	215	3	2	TV	2
97	少年期の健康科学	217	2	1	R	2

		頁	開設年次	作成年度	メディア	単位
98	青少年の保健Ⅱ	219	6 2	6 1 セ	R	2
99	成人の保健 （平成３年度限り）	221	6 3	6 2	R	2
100	老人の保健 （平成３年度限り）	223	6 2	6 1	R	2
101	心の生涯健康科学	225	3	2	R	2
102	心の環境健康科学	227	3	2	R	2
103	環境科学	229	1	6 3	TV	2
104	余暇生活	231	1	6 3 セ	TV	2
105	家庭の福祉	233	1	6 3	R	2
106	社会福祉	235	3	2	R	2
107	高齢者の福祉	237	3	2	R	2
108	生活と福祉特論		6 3			6
平成４年度改訂開設科目						
	家庭の経済	239	4	3 セ	R	2
	衣生活論	241	4	3 セ	TV	2
	食物の科学	243	4	3	TV	2
	都市の住まい	245	4	3	TV	2
	成人の健康科学	247	4	3	R	2
	老年期の健康科学	249	4	3	R	2

発達と教育

109	教育思想Ⅰ	251	1	6 3 セ	R	2
110	教育思想Ⅱ	253	1	6 3 セ	R	2
111	学校教育 （平成３年度１学期限り）	255	1	6 3 セ	TV	2
112	教育の方法	257	3	2	TV	2
113	教育の歴史	259	3	2	TV	2
114	言葉と教育	261	3	2	R	2
115	道徳教育	263	3	2	R	2
116	教育評価	265	3	2 セ	R	2
117	家庭教育	267	1	6 3	R	2
118	子供観	269	3	2 セ	R	2
119	生徒指導の実際	271	2	1	R	2

		頁	開設年次	作成年度	メディア	単位
120	生徒指導の理論	273	3	2セ	TV	2
121	幼児教育	275	2	1	R	2
122	情操の教育	277	1	63	R	2
123	青少年文化 （平成3年度限り）	279	1	63	TV	2
124	地域社会と教育	281	3	2セ	TV	2
125	生涯教育論	283	1	63セ	R	2
126	教育社会学Ⅰ	285	2	1	TV	2
127	教育社会学Ⅱ	287	2	1セ	TV	2
128	発達心理学	289	2	1	TV	2
129	発達段階の心理学	291	1	63	TV	2
130	学習心理学 （平成3年度限り）	293	63	62	TV	2
131	学習心理学の応用 （平成3年度限り）	295	63	62	TV	2
132	教育工学	297	3	2	TV	2
133	認知と思考 （平成3年度限り）	299	63	62	TV	2
134	社会心理学	301	1	63	TV	2
135	人間関係論	303	3	2	TV	2
136	パーソナリティ論	305	3	2	TV	2
137	臨床心理学	307	3	2	R	2
138	深層心理学	309	3	2	R	2
139	カウンセリング （平成3年度限り）	311	63	62セ	R	2
140	心理・教育における測定法	313	1	63	TV	2
141	子どもの心身機能の発達と障害	315	3	2	TV	2
142	児童の心理と教育	317	2	1	R	2
143	青年の心理と教育 （平成3年度限り）	319	63	62	R	2
144	老人の心理と教育	321	2	1	R	2
145	障害児の心理と教育	323	1	63	R	2
146	言語障害	325	2	1セ	R	2
147	発達と教育特論		63			6

平成4年度改訂開設科目

	学習心理学	327	4	3セ	TV	2
	認知心理学	329	4	3セ	TV	2
	カウンセリング	331	4	3	R	2
	青年の心理と教育	333	4	3	R	2

	社会と経済	頁	開設年次	作成年度	メディア	単位
148	犯罪と刑法	335	1	63	R	2
149	裁判と市民生活 （平成3年度限り）	337	63	62	TV	2
150	民法	339	2	1	TV	2
151	家族法	341	2	1セ	TV	2
152	商法Ⅰ	343	3	2	R	2
153	商法Ⅱ	345	3	2	R	2
154	現代日本法の特質	347	3	2	R	2
155	国際法	349	2	1	R	2
156	経済法	351	3	2	R	2
157	労働法	353	3	2	R	2
158	日本政治思想	355	1	63	R	2
159	西欧政治思想	357	1	63	R	2
160	現代の政治理論	359	1	63	TV	2
161	現代の政治過程	361	3	2	TV	2
162	現代の国際政治	363	3	2セ	TV	2
163	現代日本の政治	365	2	1	TV	2
164	日本の地方自治	367	2	1	TV	2
165	先進諸国の政治 （平成3年度限り）	369	63	62	R	2
166	第三世界の政治 （平成3年度限り）	371	63	62	R	2
167	日本政治史	373	1	63	R	2
168	西欧政治史	375	1	63	R	2
169	行政学 （平成3年度限り）	377	63	62セ	R	2
170	現代の経済学	379	1	63	TV	2
171	産業組織論 （平成3年度限り）	381	62	61	TV	2
172	国際経済学 （平成3年度限り）	383	63	62	R	2
173	財政学	385	3	2	TV	2
174	金融論	387	3	2	TV	2
175	日本経済史	389	1	63	R	2
176	欧米経済史	391	3	2セ	R	2
177	近代日本の生活と社会	393	1	63	TV	2
178	社会学研究法	395	1	63	TV	2
179	社会構造と社会変動 （平成3年度限り）	397	62	61	R	4
180	地域と生活 （平成3年度限り）	401	62	61	TV	2

		頁	開設年次	作成年度	メディア	単位
181	地域社会学 ……（平成３年度限り）……	403	６２	６１	ＴＶ	2
182	芸能と社会 ……	405	1	６３	ＴＶ	2
183	アジアの社会 ……	407	６３	６２セ	ＴＶ	2
184	社会と経済特論 ……		６３			6
平成４年度改訂開設科目						
	法と手続き ……	409	4	3	ＴＶ	2
	先進諸国の政治 ……	411	4	3	R	2
	第三世界の政治 ……	413	4	3	R	2
	行政の活動 ……	415	4	3セ	R	2
	経済思想 ……	417	4	3	ＴＶ	2
	国際経済学 ……	419	4	3	R	2
	近代性の社会学 ……	421	4	3セ	R	2
	社会調査法 ……	423	4	3	ＴＶ	2
	マスメディアと現代 ……	425	4	3	ＴＶ	2
	日本人の生活と文化 ……	429	4	3セ	ＴＶ	2

産業と技術

185	経営管理 ……	431	1	６３	ＴＶ	2
186	経営戦略 ……（平成３年度限り）……	433	６２	６１	R	2
187	企業と人材 ……	435	1	６３セ	R	2
188	仕事とくらしの経済学 ……	437	2	1	ＴＶ	2
189	管理会計 ……	439	2	1	ＴＶ	2
190	税務会計 ……	441	2	1	R	2
191	マーケティング論 ……	443	1	６３	ＴＶ	2
192	経営組織論 ……	445	3	2	R	2
193	管理経済学 ……	447	3	2	R	2
194	生産管理 ……	449	1	６３	ＴＶ	2
195	財務管理 ……	451	3	2	R	2
196	財務会計 ……	453	1	６３	ＴＶ	2
197	数理計画法 ……	455	1	６３	ＴＶ	2
198	産業と情報 ……（平成３年度限り）……	457	６３	６２	R	2

		頁	開設年次	作成年度	メディア	単位
199	産業と企業 ……	459	1	63	R	2
200	産業と環境・資源 ……	461	2	1	TV	2
201	交通と通信 ……	463	3	2	TV	2
202	流通と商業 ……（平成3年度限り）……	465	63	62	R	2
203	現代社会とサービス経済 ……	467	3	2	R	2
204	産業および生業としての農業 ……	469	1	63	R	2
205	中小企業論 ……（平成3年度限り）……	471	63	62	R	2
206	技術史 ……	473	2	1セ	R	2
207	産業技術の動向Ⅱ ……（平成3年度限り）……	475	63	62セ	TV	2
208	システム工学 ……	477	2	1セ	TV	2
209	人間工学 ……（平成3年度限り）……	479	63	62	TV	2
210	情報工学 ……	481	3	2	TV	2
211	設計工学 ……	483	2	1	TV	2
212	物質工学の世界 ……	485	3	2	TV	2
213	環境とエネルギー工学 ……	487	3	2セ	TV	2
214	都市計画 ……（平成3年度限り）……	489	63	62	TV	2
215	基礎電子工学 ……	491	3	2	TV	2
216	土木工学 ……	493	3	2	TV	2
217	産業と技術特論 ……		63			6

平成4年度改訂開設科目

	経営と創造性 ……	495	4	3	R	2
	産業情報論 ……	498	4	3	R	2
	情報管理学 ……	500	4	3	TV	2
	現代中小企業論 ……	502	4	3	R	2
	生活のための工学 ……	506	4	3	TV	2
	計測・制御工学 ……	509	4	3	TV	2
	都市計画の基礎 ……	511	4	3	TV	2

人間の探究

218	西洋古代中世哲学史 ……	513	3	2	R	2
219	西洋近代哲学史 ……	515	3	3セ	R	2

		頁	開設年次	作成年度	メディア	単位
220	現代哲学	517	3	2セ	R	2
221	社会思想史	519	2	1	R	2
222	宗教学を学ぶ（平成3年度限り）	521	63	62セ	R	2
223	構造と解釈	523	63	62	TV	2
224	哲学的人間学（平成3年度限り）	525	63	62	TV	2
225	日本の言語文化	527	1	63	R	2
226	上代日本文学（平成3年度限り）	529	63	62セ	R	2
227	中古日本文学	531	2	1セ	R	2
228	中世日本文学	533	3	2	R	2
229	和文古典Ⅳ（平成3年度限り）	535	63	62	R	2
230	近代文芸Ⅰ	537	62	61セ	R	2
231	近代文芸Ⅱ	539	63	62	R	2
232	漢文古典Ⅰ（平成3年度限り）	541	62	61	TV	2
233	漢文古典Ⅱ（平成3年度限り）	543	62	61	R	2
234	西洋古典学	545	63	62	R	2
235	日本語教授法	547	63	62セ	TV	2
236	歴史の理論	549	63	62	R	2
237	日本文化史	551	63	62	TV	2
238	近現代の東南アジア	553	3	2	TV	2
239	アジア論Ⅲ	555	1	63	R	2
240	アジア論Ⅳ	557	2	1	R	2
241	ヨーロッパ論Ⅰ	559	3	2	TV	2
242	アメリカ論Ⅱ	561	3	2セ	TV	2
243	文芸史と文芸理論	563	2	1	R	2
244	美術史と美術理論（平成3年度限り）	565	62	61	TV	2
245	演劇史と演劇理論	567	63	62	TV	2
246	音楽史と音楽論（平成3年度限り）	569	63	62	TV	2
247	民族音楽学	571	3	2	R	2
248	文化人類学	573	3	2セ	TV	2
249	博物館学Ⅰ	575	2	1	TV	2
250	博物館学Ⅱ	577	3	2	TV	2
251	イギリスの言語文化Ⅰ	579	2	1	TV	2
252	イギリスの言語文化Ⅱ	581	2	1	R	2

		頁	開設年次	作成年度	メディア	単位
253	アメリカの言語文化Ⅰ	583	1	63	TV	2
254	アメリカの言語文化Ⅱ …（平成3年度限り）	585	63	62	R	2
255	ドイツの言語文化Ⅰ	587	3	2	TV	2
256	ドイツの言語文化Ⅱ ……（平成3年度限り）	589	63	62	TV	2
257	フランスの言語文化Ⅰ	591	1	63セ	TV	2
258	フランスの言語文化Ⅱ …（平成3年度限り）	593	63	62セ	TV	2
259	ロシアの言語文化Ⅰ	595	1	63	TV	2
260	ロシアの言語文化Ⅱ ……（平成3年度限り）	597	63	62	R	2
261	人間の探究特論		63			6
	平成4年度改訂開設科目					
	科学哲学	599	4	3	R	2
	比較宗教学	601	4	3セ	R	2
	哲学的人間学	603	4	3	TV	2
	上代日本文学	605	4	3	R	2
	近世日本文学	607	4	3セ	R	2
	中国の説話と古小説	609	4	3	R	2
	日本古代史	611	4	3セ	TV	2
	日本近代史	613	4	3	R	2
	アメリカ論Ⅰ	615	4	3	TV	2
	美と芸術の理論	617	4	3	TV	2
	美術史と美術理論	619	4	3	TV	2
	音楽の歴史と音楽観	621	4	3	TV	2

自然の理解

262	ベクトル解析	623	2	1	R	2
263	解析学 ……（平成3年度限り）	625	63	62	R	2
264	応用数学	627	3	2	R	2
265	相対論	629	3	2セ	R	2
266	歴史から見た代数学	631	3	2	R	2
267	数学基礎論	633	2	1	R	2
268	標本抽出の計画と方法	635	3	2	R	2

		頁	開設年次	作成年度	メディア	単位
269	データ解析法の基本 ……（平成３年度限り）……	637	６３	６２	ＴＶ	2
270	データ解析法の進歩 ……（平成３年度限り）……	639	６３	６２	ＴＶ	2
271	時系列論 ……（平成３年度限り）……	641	６３	６２	Ｒ	2
272	統計的データ解析とソフトウエア ……	643	１	６３	ＴＶ	2
273	計量生物学・行動計量学 ……	645	２	１	ＴＶ	2
274	量子論 ……	647	１	６３	ＴＶ	2
275	現代物理学Ⅰ ……	649	６３	６２	Ｒ	2
276	現代物理学Ⅱ ……	651	６３	６２	ＴＶ	2
277	物質の科学・化学基礎 ……	653	３	２	ＴＶ	2
278	物質の科学・反応と構造 ……	655	３	２	ＴＶ	2
279	物質の科学Ⅱ ……（平成３年度限り）……	657	６３	６２	ＴＶ	2
280	物質の科学Ⅲ ……（平成３年度限り）……	659	６３	６２	ＴＶ	2
281	物質とエネルギー ……	661	２	１	Ｒ	2
282	力とエネルギー ……	663	２	１	ＴＶ	2
283	生命のしくみⅠ ……	665	１	６３セ	ＴＶ	2
284	生命のしくみⅡ ……（平成３年度限り）……	667	６３	６２セ	ＴＶ	2
285	植物の生理 ……（平成３年度限り）……	669	６３	６２	ＴＶ	2
286	生態学概論 ……	671	２	１	Ｒ	2
287	集団遺伝学 ……	673	１	６３	Ｒ	2
288	動物の進化 ……	675	３	２	ＴＶ	2
289	植物と菌の系統と進化 ……	677	３	２	ＴＶ	2
290	動物の行動と社会 ……（平成３年度限り）……	679	６３	６２	ＴＶ	2
291	脳と行動 ……	681	２	１セ	ＴＶ	2
292	太陽系の科学 ……	683	３	２	ＴＶ	2
293	恒星天文学 ……	684	１	６３	ＴＶ	2
294	宇宙の構造と進化 ……	686	２	１	ＴＶ	2
295	宇宙像の変遷 ……	691	３	２セ	ＴＶ	2
296	固体地球 ……	693	３	２	ＴＶ	2
297	日本列島の地球科学 ……	695	３	２	ＴＶ	2
298	大気と海洋 ……	697	２	１	ＴＶ	2
299	現代資源論 ……	699	２	１	ＴＶ	2
300	自然の理解特論 ……		６３			6

		頁	開設年次	作成年度	メディア	単位
平成4年度改訂開設科目						
	解析学 ……	701	4	3	R	2
	データとデータ解析 ……	703	4	3	R	2
	数量化理論 ……	705	4	3セ	TV	2
	統計的決定 ……	707	4	3	R	2
	カオスとフラクタル入門 ……	709	4	3	TV	2
	物質の科学－物理編 ……	711	4	3	TV	2
	光と電磁場 ……	713	4	3	TV	2
	生物有機化学 ……	715	4	3セ	TV	2
	植物生理学 ……	717	4	3	TV	2
	動物の行動と社会 ……	719	4	3	TV	2

総合科目

301	生活と環境 ……（平成3年度限り）…	721	63	62	R	4
302	心理と教育 ……（平成3年度限り）…	725	63	62	TV	4
303	都市の研究 ……（平成3年度限り）…	729	63	62	TV	4
304	情報化時代の産業・技術 …（平成3年度限り）…	733	63	62	TV	4
305	科学と宗教 ……（平成3年度限り）…	737	63	62	R	4
306	生命論 ……	741	63	62	TV	4
307	文学の東西 ……（平成3年度限り）…	745	63	62	R	4
平成4年度改訂開設科目						
	高齢化社会の生活と福祉 ……	749	4	3	R	4
	子供の世界 ……	753	4	3	TV	4
	現代社会と産業・技術 ……	757	4	3	TV	4
	人間を考える ……	761	4	3	R	4

＝生活と芸術＝（TV）

〔主任講師：熊倉功夫（筑波大学教授）〕

全体のねらい

生活と芸術の接点として芸能、建築、工芸などを取り上げてゆくが、それらの軸になるのは「茶の湯」である。日本独自の茶の湯がどのような展開をしたのか。さらに、茶の湯と関連しながら生活文化がいかに江戸時代から近代に発展してきたのか、そのさまざまの面に目を向ける。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	日本人の生活と芸術	日本人の生活と芸術を総合的にとらえるにはどんな視点があるか。生活文化としての芸術の展開をたどり、ことに室町時代以後における生活に即した新しい芸能として、茶の湯の概要を紹介する。	熊倉功夫（筑波大学教授）
2	茶の文化の成立	中国の茶の文化は、唐代に大きく成長し、日本にも九世紀に伝わってくる。さらに鎌倉時代にふたたび茶の文化が禅宗とともに渡来し、日本的な展開をとげた。	同上
3	南北朝時代の美意識	鎌倉時代末期以後、中国から輸入された書画や工芸品が珍重され、「ばさら」という新しい美意識が流行する。「座敷飾り」は洗練され、それを母胎に茶の湯といけばなが発展した。	同上
4	書院の茶の湯	室町時代の武家文化の発達にともない、新しい生活様式が完成される。そうした様式の1つの核となるのが書院における茶の湯で、書院の茶といわれる。その姿を具体的に述べる。	同上
5	いけばなの歴史	花に対する日本人の信仰や、大陸から渡来した供花の伝統は、やがて室内を飾るいけばなに展開した。室町時代のいけばなの確立と展開を、花伝書などを引いて論ずる。	同上
6	わび茶の成立	京・堺などの都市には豊かな新興町衆が登場する。彼らは武家貴族の遊びであった茶を自らの生活のなかにあみ直した。村田珠光と武野紹鷗の茶をとおしてわび茶の成立をみる。	同上
7	千利休と桃山文化	わび茶の大成者千利休の茶とは、どのようなものであったのか。その生涯をたどりながら、わびを徹底させ、主客の礼法を完成させた利休の茶について考えてみる。	同上

回	テーマ	内容	担当講師 （所属・氏名）
8	茶室の世界	茶の湯の発達はその舞台にもあたる茶室という独自の建築空間を展開させた。中世の書院造りから流れだす茶室の系譜をたどりながら、日本の住宅建築に与えた影響も考えたい。	熊倉功夫
9	寛永文化と二代池坊専好	17世紀前半の文化を寛永文化とよぶ。サロンを中心に繊細で装飾性豊かな芸術が誕生した。この時代にいけばなを革新した二代池坊専好が活躍する。	同上
10	町人文化と建築	元禄時代を中心に町人の文化は遊芸の新しい展開をもたらした。遊芸は地方にも広がってゆく。京都の遊郭の建築、地方都市の町家建築のなかに、その表現をみる。	同上
11	料理文化の系譜	日本の料理は味だけでなく見る料理だといわれる。かつて料理は立派な芸能であった。室町時代から江戸時代後期までの料理文化の流れを概観し、日本料理の特質をみる。	同上
12	生活の中の飾り	祭の屋台などを見ると、驚くべき精巧な飾りで埋められている。こうした飾りの世界には、名人とよばれる人々が活躍した。高山祭の飾り、伊豆の長八の芸をとりあげてみた。	同上
13	近代の工芸運動	日常生活の道具である工芸品に美を見いだし、これを民芸と名づけて評価したのが白樺派の宗教学者柳宗悦であった。民芸運動と柳の思想をたどりながら、その意義を考える。	同上
14	近代数寄者の世界	明治維新で伝統的な茶の湯が衰退したあと、明治時代後半から美術品のコレクターである数寄者が登場する。原三渓を中心に数寄者の文化史上の位置を考えたい。	同上
15	外国人の見た生活文化	日本人に大きな影響を与えた外国人は多い。そのなかから、ことに生活文化のうえで、今日もなお重要な意味をもつエドワード・モースとブルーノ・タウトをとりあげてみる。	同上

＝家政原論＝（R）

〔主任講師：酒井豊子（放送大学教授）〕

全体のねらい

今日、家族や家庭のあり方は多様化しつつあるが、人間関係と暮らしの基本単位であることに変わりはない。本講では、家族と家庭の諸機能を、家庭をとり囲む諸環境とのかかわりで把え、家庭から社会へ向けての、より積極的な働きかけを志向した家庭生活のあり方を、家政学の立場を踏まえて考察する。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	生活と家政	人間の生活のさまざまなありようの中において、家族や家庭を単位とする生活の営み――家政――はどのような意味をもつのであろうか。個人、家族あるいは社会の健康・安全・福祉のために、家庭生活が果たすべき機能について概観する。	酒井豊子（放送大学教授）
2	結婚と夫婦	家族の中心は夫婦だが、その成立となる結婚のしかたが世界的に動揺している。欧米では非登録婚が増え、日本では晩婚化が急速に進行している。その原因と影響を考え、あわせて、日本と欧米の夫婦関係がなぜ大きく異なるのかを分析する。	湯沢雍彦（お茶の水女子大学教授）
3	親子の関係	子供の数が減少して家計は楽になったが、育児はかえって困難になったといわれる。それはなぜか。戦前と親はどう変わったのか。育児観は欧米に近くなったのだろうか。共働きや生活環境が育児を阻害しているのか、等々広い視野から親子関係を考察する。	同上
4	家庭と地域社会	小規模化、小機能化した今日の家庭生活の安定のためには、地域社会との連携が不可欠である。農村型地域社会とは異なる都市型地域社会の再編を、生活環境施設の共同利用や、近隣の生活サービスネットワークの活性化という視点から検討する。	松村祥子（群馬大学教授）
5	家庭外家政	保育、外食、余暇などにみられる生活機能の家庭外での遂行に加え、最近では、企業や公的機関からの生活サービスの宅配（在宅サービス）も盛んである。このようなサービス化の進展の中で、個性的な生活を持続するためにはどうすべきかを考察する。	同上
6	高齢化時代と生活設計	世界に類のない高齢化のスピードは、高齢者のみならず、若者の生活にも大きな影響を与えつつある。人生80年時代をのりきる途は、社会的諸配慮とともに、生計、健康、生き甲斐の三拍子揃った個々人の生活設計にある。特に高齢期以前の家庭生活のあり方と生活設計について述べる。	同上
7	生活時間と家事責任	家族の構成員のうち、特に夫と妻の、収入・労働・家事労働・余暇への時間配分がどのような組合せになっているかを分析する。それをもとに、家庭責任の夫妻による分担協力の現状と問題点を考え、生活時間面から「生活の質とは何か」についても考察する。	伊藤セツ（昭和女子大学教授）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	家庭経済と社会	今日の社会・経済構造の中での、家庭経済の機能とその変化、特にサラリーマン家計の現状と問題点についてとりあげる。世帯の収入と支出の実態をさまざまな角度から分析し、私的・個別的家計と社会・経済の関連と、その望ましい在り方を含めて検討する。	伊藤セツ
9	消費者問題と家政	消費者問題は、今、一国の生産・流通・消費の枠を超え、国際的視点で把握されなければならなくなってきている。国際化した消費者問題に、消費者一人一人がどのように主体的に対応すべきかが問われているが、この問題に家政学の立場から取り組む。	同上
10	食生活の現代的課題	生活の多様化に伴う価値観や家族関係の変化により、食生活も簡便化志向と高級化志向への二極分化現象がすすんでいる。このなかで、外食産業、調理加工食品、市販惣菜などに象徴される食の社会化を中心に、家庭生活における食のあり方を考えてみる。	杉田浩一（昭和女子大学教授）
11	衣生活の現代的課題	現代の衣生活は、量的には充足しているが、質的には必ずしも高いとはいえない。服装の選択は商業主義や社会規制に先行されがちで、所持衣服は狭い家に溢れる一方、人々の服装は自己表現の機能を充分には果たしていない。本章ではこれら衣生活上の矛盾について考察する。	酒井豊子
12	住生活の現代的課題	大都市に見られる過度の集中による居住環境の悪化が健全な家族生活の営みを妨げ、さまざまなひずみをもたらしている。こういった現状を改善するためには望ましい住生活についての国民的な合意の形成が必要である。本章ではこのような観点から適正居住の問題を考える。	本間博文（放送大学教授）
13	家政学の確立	家政学は、家庭を全人的存在の人間形成の生活体と考える。家庭における、食衣住等に対する欲求と消費の関係を知り、ひいてはより大きな生活圏（生態系）における使命を知る。家政学は、人間と環境の両面を包括している統一理論の上に構築されていることを説く。	松島千代野（㈶日本女子社会教育会家庭科学研究所長）
14	世界の家政学	わが国は今日、国際国家主義へ傾注している。家庭・家族を世界共通の基盤とする家政学こそ国際国家の待望に応ずるために、その動向を知ることが必要と考える。世界的視野から家政学の現況を展望する。ひいては世界の中の日本の家政学を位置づける。	同上
15	環境問題と家庭の責任	先ず、生活と環境にかかわる諸問題を、家族単位の生活を出発点として整理する。 人間のこころと伝統文化、社会生活における家族の役割、科学技術のもたらした便益と公害、などを軸として家政学の直面する今日の課題と家族の責任を中心に考察する。	矢部章彦（放送大学客員教授）

＝ 教 育 学 概 論 ＝ （R）

〔主任講師：田浦武雄（愛知学院大学教授）〕

全体のねらい

教育学は、教育現象を学問的に研究し、理論体系化したものである。教育は、文化・社会の動態と、人間の成長・発達との接する領域で、文化と人間との現実構造や変化過程を探究し、よりよい未来を創出するのを助ける営みである。多くの教育問題との関わりを含め、教育の基本問題を検討し、それらの改善の方向を究明する。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	教育学の意義	1ー4の4回にわたって、教育学および教育の意義を検討する。1では、教育学の概念、教育論と教育思想、教育学の動向と変遷等について考察する。	田浦武雄（愛知学院大学教授）
2	教育の構造と機能	素質と環境と教育との関連のダイナミズムの構造について検討する。さらに教育の社会的機能、とくに文化伝達、社会統制、文化改造の諸機能に関して検討を行う。	同 上
3	成長と社会化	人間の成長・発達を焦点におく教育と、社会化・文化化を焦点におく教育とに、教育の働きを区別することができるが、両者の考え方の特質と関連を吟味し検討する。	同 上
4	発達と教育の理論	人間の成長・発達の過程の把握とその処方をめざすものとして、発達の教育学の構築を志向する必要がある。人間的教育・全人的成長の必要性とその構造を検討する。	同 上
5	現代教育学の類型・1	5ー6の2回にわたって、現代教育学の類型を検討する。5では、主として教育哲学の面から、進歩主義、伝統主義、改造主義、実存主義、分析哲学等について、それぞれの特色を検討する。	同 上
6	現代教育学の類型・2	教育人類学、教育社会学、社会科学的教育学、教育人間学等の諸領域について、それぞれの理論的特色を検討する。前の三者は教育科学面からの考察に属するが、教育人間学は教育の哲学的アプローチと、科学的アプローチとの総合をめざしたものとみることができる。	同 上
7	教育の文化的基礎	7ー8の2回にわたって、現代社会と教育との関連構造について検討する。7では、教育が文化と密接に関連している点を、その多様性、文化と人間形成等の側面について考察する。	同 上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	情報化社会と教育	今日の社会は情報化社会の特色をもち、地域社会や家族・社会集団に影響を与えており、教育上の問題も多い。情報化社会に対応する教育のあり方、生涯学習の必要性等について検討する。	田浦武雄
9	学校の機能と目的	9～13の5回にわたって、学校教育の基本問題を広い視野から検討する。9では、学校の歴史的変遷、学校の機能を検討し、学校の教育目的の概念と構造等について検討する。	同上
10	学力論・知識論	学力観の変遷と学力のあり方について検討し、知識と学力との関わり、知識の捉え方のちがいを考察し、教育の人間化の観点から、知識教育の課題について究明する。	同上
11	教育課程と教育方法	何をいかに教えるかは、学校教育の基本問題の一つである。教育課程の類型を検討し、人間中心の教育課程の特色を考察する。あわせて、教育方法の多様化について検討し、学習指導の最適化の必要性について考察する。	同上
12	生徒指導と道徳教育	生徒指導・道徳教育は、教科の学習指導とともに重要な領域である。生徒指導の必要性、生徒指導と自己実現、生徒指導の課題等について検討する。あわせて道徳教育について価値教育との関連、道徳教育の体制の比較検討を行う。	同上
13	情意的教育・創造性教育	情意的教育および創造性教育の必要性を考察し、それぞれの課題を検討する。情意的教育については、その現状と問題点を考察し、創造性教育については、創造性の人間学の面からも探究し、改善の方向について検討する。	同上
14	教育制度と教育行政	教育制度と教育行政の意義を考察し、学校制度の現状と課題、学校体系の改革、教育行政の動向について検討する。歴史的反省とともに、他の国の動向との比較研究を行い、教育上の課題を究明する。	同上
15	教師論	教育の質を左右するものとして、教師の役割は大きい。近年、専門職としての教師の考え方が台頭してきたが、その意義を吟味し、教職観の類型を考察し、あわせて教員養成の課題、教員の研修の問題について検討する。	同上

＝　心　理　学　＝　（TV）

〔主任講師：大山　正（日本大学教授）
主任講師：託摩武俊（東京国際大学教授）〕

全体のねらい

人の心と行動のはたらきを理解するために、まず、人が環境の状態と感覚を通して知り、それによって得た情報を処理して、自分の要求の実現に役立てていく過程を考えてみる。つぎに、このような人の心と行動が、子供から大人へと発達していく過程において、いかに変化していくか、また個人個人によりどのように違うかについて述べる。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	心理学とは	心理学とは何かについて、２回以降の内容を説明しながら具体的に述べ、つぎに、心理学の課題対象方法などをめぐって、歴史的発展の過程と現況を述べる。	大山　正（日本大学教授） 託摩武俊（東京国際大学教授）
2	環境の認知Ⅰ 感覚	人間が環境の中で生活し行動し、環境に適応していくためには、まず環境の状況を把握する必要がある。その手段としての感覚の特性について考える。	大山　正
3	環境の認知Ⅱ 知覚	われわれが環境の状況を見、聞き、感じる場合、それは単なる感覚のよせあつめでも外界の忠実な反映でもない。この観点から知覚の法則、錯覚、空間と運動の知覚について述べる。	同　上
4	情報の処理Ⅰ 注意と探索	われわれが日々接している情報の量はきわめて膨大であるが、われわれはその一部しか利用していない。この観点から注意と知覚的探索について述べる。	大山　正 御領　謙（千葉大学教授）
5	情報の処理Ⅱ 記憶	人間が利用している情報のかなりの部分は記憶として保存されている過去の情報である。この記憶の成立、保持、検索、変容などについて述べる。	大山　正 小谷津孝明（慶應義塾大学教授）
6	情報の処理Ⅲ 思考と言語	選択され、検索された情報を用いて、ある目的のために、人が問題を解決していく過程が、思考である。その際には、人々が長年にわたり作り上げ、個人が幼時より習得してきた言語の体系が大きな役わりを演ずる。	大村彰道（東京大学助教授）
7	経験の効果学習	多くの生物とともに人間は、過去の多くの経験によって、行動の習慣を獲得し、変容している。この学習の過程を、条件づけの原理に基づいて考えてみる。	片桐雅義（宇都宮大学教授）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	要求と感情	人が行動を起こすのは何らかの要求にもとづいている。要求には、多くの動物と共通している生物的要求と、人間の社会生活にもとづく社会的要求がある。また、これらの要求が実現される過程にさまざまの感情と情動が生じる。	大山　正 託摩武俊
9	心の発達Ⅰ 乳児期・幼児期	他の動物に比べて、人には本能的行動が少なく豊かな可塑性をもって生れてくる。赤ちゃんが周りの人々とのかかわり合いの中で、どのように成長していくか、幼児期の心の特徴はどのようなところにあるかについて述べる。	託摩武俊 柏木恵子 （東京女子大学教授）
10	心の発達Ⅱ 青年期から老年期	青年期から成人期、老人期にかけての心の変化、とくに他人との関係、自分自身についての考え方や感じ方の変化について述べ、さらに現代のわが国の青年の特徴や、高齢者の諸問題についても言及する。	託摩武俊
11	個人差Ⅰ 知能	知能とは何か、知能にはどんな働きがあるのか、知能はどんな構造をもっているのか、知能の測定は可能か、天才とは何かなどについて述べる。	伊藤隆二 （横浜市立大学教授）
12	個人差Ⅱ 性格	性格に認められる多様な個人差の形成過程、性格の類型、性格の測定法、性格の認知、性格の好き・嫌いなどについて述べる。	託摩武俊
13	社会的行動	人はつねに他人とのかかわりをもって生きている。個人と集団との関係、他人に対する態度の形成過程、人と人との距離感、人間関係にみられる日本人の特徴などについて述べる。	永田良昭 （学習院大学教授）
14	心の異常	精神病、神経症、性的倒錯、非行、自殺などの実態、現在の特色、これらの原因、対策などを取り上げる。	福島　章 （上智大学教授）
15	心理学の応用	現在の心理学は個人の生活とも社会の諸事象とも密接に関係している。心理学の研究成果や研究法が実際にどのように応用されているかを実例をあげながら述べる。	託摩武俊 大山　正

＝行動科学Ⅰ＝（TV）

〔主任講師：鹿取廣人（帝京大学教授）〕

全体のねらい

人間行動にかかわる諸問題を扱う行動科学は、神経生理学、心理学、社会心理学、文化人類学、社会学、政治学など、幅広い学問分野の領域を含んでいる。ここでは特に人間行動の基礎過程に焦点をおき、人間行動の発生・成立について、主として(1)個体発生（発達）、および(2)系統発生の資料にもとづいて取り挙げることにする。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	行動科学の視点	1. 行動科学とは 2. 行動科学の生いたち 3. 行動科学成立の背景　1 4. 行動科学成立の背景　2 5. 行動科学の展開 6. 行動科学と心の研究	鹿取廣人 （帝京大学教授）
2	行動の基本様式	1. 行動の水準 2. “もの”信号系と“生体”信号系 3. 感覚支配的行動（反射的行動図本能的行動） 4. 条件づけ習得行動 5. 行動の間接化とシンボル機能	同上
3	生得的行動　Ⅰ	1. 新生児の脳 2. 新生児の行動レパートリー 3. 「生得的」とは？	下条信輔 （東京大学助教授）
4	生得的行動　Ⅱ	1. 氏か育ちか ― 2種のインコの養子研究 2. 古典的エソロジストの研究 3. 本能の学習による修正 4. 生得的行動の意義	長谷川寿一 （帝京大学助教授）
5	脳と行動　Ⅰ	1. 脳のなりたち 2. 脳の基本的なはたらき 3. 高次な脳のはたらき ― 前頭連合野のはたらき	渡辺正孝 (東京工科大学助教授)
6	脳と行動　Ⅱ	1. 神経行動学と脳 2. 失語症 3. 脳損傷による視覚認知の障害	河内十郎 （東京大学教授）
7	習得的行動　Ⅰ	1. 古典的条件づけ 2. 道具的条件づけ	山本豊 （帝京大学助教授）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	習得情行動 Ⅱ ―社会的学習―	1. 行動の手がかりとしての他者 2. 社会的強化 3. 代理強化 4. モデリング	片桐雅義 （宇都宮大学教授）
9	情動行動と動機づけ Ⅰ	1. 感情 2. 動機づけ	浜村良久 (東京大学文学部助手)
10	情動行動と動機づけ Ⅱ	1. 表情 2. 恐怖の形成 3. 利他的行動	高橋晃 (武蔵野女子短期大学助教授)
11	情報処理行動 Ⅰ	1. 選好注視 2. 視覚発達 3. 記憶と認知 4. 学習 5. 社会行動の発達 6. まとめ	下条信輔
12	情報処理行動 Ⅱ	1. 記憶の2過程説と貯蔵庫モデル 2. イメージ的処理 3. 処理水準アプローチ 4. 長期記憶の構造	市川伸一 (東京工業大学助教授)
13	コミュニケーション行動 Ⅰ	1. 信号のチャンネルの種類とその特性 2. 信号の発信者と受信者の関係 3. 発信者の自律的な反応 4. 反射的･本能的信号行動―伝達の意図のない交信 5. 条件性･学習性信号行動―伝達の意図をもつ交信	長谷川寿一
14	コミュニケーション行動 Ⅱ	1. 言語的コミュニケーションと非言語的（前言語的）コミュニケーション 2. コミュニケーション行動の定義 3. コミュニケーション行動の分類 4. 言語的コミュニケーション行動の特徴 5. ヒトのコミュニケーション行動の個体発生―LADとLASS 6. 前言語的コミュニケーション行動 7. 個体内コミュニケーション行動―思考の道具と自己調整機能	鹿取廣人
15	行動発達	1. 遺伝と環境 2. 行動発達と2要因の相互作用 3. 個体発生と系統発生 4. 意識の行動学的視点 5. 自己意識の成立 6. 自己鏡映像認知	鹿取廣人 長谷川寿一 下条信輔

＝行動科学Ⅱ＝（TV）

〔主任講師：末永俊郎（帝京大学教授）〕

全体のねらい

「行動科学Ⅱ」では実験や調査など実証的な研究手法に基づいて社会的状況における多様な人間行動の理解を深めてきた社会心理学の諸研究の中から、(1)社会的環境の認知、(2)社会的影響、(3)対人的コミュニケーション、(4)集団過程、(5)集団行動などの問題を取り上げて解説を加える。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	社会的行動の科学	行動科学とは何か、行動とは何か、社会的行動とは何か、といった基礎的な問題点について概観した後、19世紀から20世紀にいたる「社会的行動の科学」の発達史について考察する。	末永俊郎（帝京大学教授）
2	社会的環境の認知Ⅰ	他者の外見や行動から、その人の内的属性を推測したり、全体的な印象を形成する過程を検討する。	今川民雄（北海道教育大学助教授）
3	社会的環境の認知Ⅱ	他者の感情や情動を判断する過程の分析を中心にしながら、表情の果たす役割や、表情の普遍性・生得性について検討をおこなう。	奥田秀宇（中京大学専任講師）
4	社会的環境の認知Ⅲ	社会的環境の中で自分自身をどのように認知するかを「社会的比較」の問題を中心に検討する。	山口勧（東京大学助教授）
5	社会的影響過程Ⅰ	送り手や受け手の特性、メッセージの内容などが説得の過程にどのような影響を与えるのかを考える。	上野徳美（茨城大学助教授）
6	社会的影響過程Ⅱ	他者から承諾を得るために用いられている要請技法（段階的要請法、譲歩的要請法、承諾先取要請法）を取り上げ、それらの基本的実験研究を紹介し、検討を加える。	川名好裕（帝京科学技術大学助教授）
7	社会的影響過程Ⅲ	他者から見られる自分のイメージを操作することによって他者に影響を与えようとする対人的方略（自己提示）が対人関係の中でどのような意味をもつかを検討する。	安藤清志（東京女子大学助教授）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	対人的コミュニケーション Ⅰ	人と人を結ぶものとしての対人的コミュニケーションの基礎的な問題を、非言語的コミュニケーションを中心に解説する。	大坊郁夫（北星学園大学教授）
9	対人的コミュニケーション Ⅱ	教育場面におけるコミュニケーションの役割を、特に教師と生徒の関係を中心にして検討する。	古城和敬（大分大学助教授）
10	対人行動 Ⅰ	援助行動を促進・抑制する要因をさまざまな視点から検討し、併せて援助される側の心理を考察する。	中村陽吉（学習院大学教授）
11	対人行動 Ⅱ	人間の攻撃性はどこまで本能か。精神分析理論など、攻撃行動に関する代表的な考え方を述べ、また現代的視点からの分析を試みる。	大渕憲一（東北大学助教授）
12	集団過程 Ⅰ	集団の中での成員相互の働きかけの過程について基礎的な検討を加えた上で、集団内の意思決定、集団思考などがどのように行われるのかを解説する。	古畑和孝（東京大学教授）
13	集団過程 Ⅱ	リーダーシップの問題を中心にして、集団内のコントロールシステムについて考える。	同上
14	集団間関係	集団と集団の間の葛藤がどのように調整されるのか、その過程が内集団、外集団成員に対する認知にどのような影響を及ぼすのかを考察する。	境忠宏（横浜国立大学助教授）
15	集合行動	多数の人々の集合的な行動の特徴を概説し、そのひとつの事例としての流言をとり上げ、伝えられる情報の歪みや流言が発生するメカニズムについて解説する。	岡部慶三（帝京大学教授）

＝ 現代の人間観と世界観 ＝（R）

〔主任講師；中埜　肇（放送大学教授）〕

全体のねらい

激動しつつある複雑多様な現代の文化・社会・生活の根本に働いている人間観と世界観の本質をさまざまな角度から証明し、現代に生きることの意義を考えたい。第２回以降は２回ずつ担当講師によるそれぞれ専門的な視点からの講義を行い、各２回目の終りには主任講師との対談によって理解を深める。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	序　　論	私たちにとって「現代」はいかなる意味を持つか、現代の文明論的な特質は何か、現代の人間観と世界観はどのようなものか、などについて全般的・総括的に論ずる。	中埜　肇（放送大学教授）
2	現代社会に見られる人間観 ー技術と現代文化(1)	近代の産業社会を「技術」の世界として捉え、そのことを世界観的な意味を考える。そのさい、技術をそれ以前の「ａｒｓ」の観念と比較し、その同じ根から「芸術」の概念が生じたことに注目し、その状況を現代以前の特色として論じる。	山崎正和（大阪大学教授）
3	現代社会に見られる人間観 ー技術と現代文化(2)	前回の論述を受けて、現代の脱産業社会の特色を、技術・芸術分裂の時代の終りの始まりとして論じる。現代の新しい生産と消費動向のなかに、古い「ａｒｓ」の復活の可能性を考えたい。	同　上
4	哲学的思想に現れた現代の人間観と世界観 (1)	現代思想の源流をだいたい今世紀のはじめにもとめ、哲学のさまざまな問題とその解決をめざすさまざまな方法が今日までどのように展開してきたかを、いわばタテに考察する。	塚本明子（東京大学助教授）
5	哲学思想に現れた現代の人間観と世界観 (2)	現代における哲学のおかれた状況とその使命をさぐるため、哲学とともに今世紀さまざまに展開してきた、哲学以外の学問分野との相互連関において、また学問の外の人間の活動や世界の問題との連関において、哲学をいわばヨコに考察する。	同　上
6	科学・技術に見られる現代の人間観と世界観 (1)	この回は、科学・技術の成立を捉し、あるいは逆に科学・技術の進展によって深化された世界観を中心に考えてみる。物質、エネルギー、情報の三つの基本概念によって支えられた現代の世界観はどのような姿をしているか学ぼう。	村上陽一郎（東京大学教授）
7	科学・技術に見られる現代の人間観と世界観 (2)	この回は前回に扱った世界観の中で、人間がどのような位置にあるかを考えてみる。特に心理学、医学の《科学・技術化》が進むのに並行して、人間に対する考え方が大きく変化していることを中心に、人間疎外といわれるものにも触れよう。	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	精神医学を通じてみた現代の人間観と世界観 (1)	精神医学は人間を1)生物学的2)心理学的3)社会学的4)形而上学的な、多元的存在としてとらえる。人間は「生物としてのヒト」であるが、一回的でかけがえのない自覚的存在である。この回は、とりわけ行動研究や脳研究が人間観・世界観に及ぼす影響を考える。	小田　晋 （筑波大学教授）
9	精神医学を通じてみた現代の人間観と世界観 (2)	この回には、現代人のこころの病態と行動の異常を通してみた現代の人間観と世界観の特徴を考える。精神病の軽症化と一般化、異常ー正常の境界喪失、妄想の内容変化などを通じて、現代人における境界線喪失・情報化・物象化などの特徴が浮かび上ってくる。	同　上
10	宗教現象に見られる現代の人間観と世界観 (1)	個別・特殊な宗教の立場からではなく、人類（史）の宗教現象の統一的理解という宗教学の課題・視点から現代世界の宗教（現象）ーそれは多様なものであるーに顕わになっている人間観と世界観の特徴と意味について、とくにまずその多様な現われについて考える。	荒木　美智雄 （筑波大学助教授）
11	宗教現象に見られる現代の人間観と世界観 (2)	現代の多様な宗教現象を人類の宗教史から類型学的に把握し直して、その特徴と意味について考える。	同　上
12	芸術に現れた現代の人間観と世界観 (1)	芸術作品の中には、同時代の本質を映し出したものがある。そういった視点から、20世紀の特に現代的な芸術作品ー　美術、音楽、文芸などのジャンルにおけるいくつかの特色ある作品に映し出された現代の人間の姿を見て、その意味について思想的に考える。	増成　隆士 （筑波大学教授）
13	芸術に現れた現代の人間観と世界観 (2)	(1)と同様の視点から、現代の世界の特色について、この場合は特に現代人の居住空間、生活環境という具体的な局面で見つつ、その意味について考える。建築論・都市論のほか絵画や文芸に描かれた現代世界の様相およびそれについての思想を問題にする。	同　上
14	情報化とマスコミュニケーションに見られる現代の人間観と世界観 (1)	現代人の生活は、新聞・テレビ・雑誌などのマスコミと切り離しては考えられない。特にテレビの影響力は大きい。この映像を中心とした擬似的現実の受容と共有が人間をどう変えたかを論ずる。	青木　彰 （筑波大学教授）
15	情報化とマスコミュニケーションに見られる現代の人間観と世界観 (2)	電気通信と情報処理の技術の発達によってもたらされる「高度情報社会」では、情報の洪水に対する賢明な選択が求められる。ニューメディアの登場など今後の情報環境の変化と人間の関係について考える。	同　上

＝哲学の基礎＝（R）

〔主任講師；山本　信（東京女子大学教授）〕

全体のねらい

哲学は我々の日常生活に根ざし、人生観や世界観の問題に連なるものではあるけれども、学問として理論的にやってゆくためには、どうしても抽象的な概念や問題設定を扱うことができなければならない。そのための最も基礎的な道具立てを整えておきたい。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	哲学とは何か	「哲学」という言葉そのものの意味を考えることから始め、この学問がもっている独自の性格と、それを学ぶときの特殊事情について述べる。	山本　信（東京女子大学教授）
2	哲学史の意義	他の諸学とは事情を異にして、哲学の研究は常にその歴史との内的な連関において行われなければならない。哲学を西洋から移入し、しかも自国の思想的伝統をもっている日本人には、この点でも特別の問題が課されている。	同　上
3	哲学の諸部門	普通哲学に属すると考えられている諸学問を列挙し、それぞれについて多少の説明を加え、それら全体にわたって見とおしをつける。	同　上
4	存在論の基本問題	「ある」ということをめぐる古来の論議をふまえ、「実体」「形相」「本質」など、歴史的にも体系的にも哲学にとって最も基本的な諸概念をとりあげる。	同　上
5	主観概念	「主観」あるいは「主体」と訳される概念の形成過程をかえりみることによって、現代にいたるまでの近代的な思考体制の原点を究明する。	同　上
6	近世的二元論	近世における心と物、精神と物体の二元論は、それ自体が本質的に不安定なものであり、観念論と唯物論という対立的立場もそのことの所産にほかならない所以を論ずる。	同　上
7	認識論の系譜	近世以降の哲学を特徴づける認識論的問題設定について、その端緒における歴史的意義を明らかにし、その後の展開を跡づける。	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	主体性の形而上学	認識し行為する主体としてのあり方をもって原理とする立場が、近代の合理性をになう一方の柱として、どのように展開されてきたかを考察する。	山本　信
9	近代科学の思想史的意味	現在われわれが「科学」とよんでいる知的形態が、近代の合理性をになうもう一方の柱として、思想史的に何を意味しているかを考察する。	同上
10	科学的思考の諸性格	科学的な思考法、それはまたわれわれが小学校以来の教育で叩きこまれてきて常識になっている考え方でもあるが、その特質と帰結とを、いくつかの項目にわけて露わにする。	同上
11	生命と人間性	科学の進歩は、生命現象をも物理的化学的な過程にひきもどし、また人間に対してはその尊厳を剝奪してゆくかのようにみえる。こうした事態に関してどう考えたらよいか。	同上
12	心身問題	からだとの関係において心とは何なのかということは、人類にとって古くからの関心事であり、哲学の主要問題の一つでもあった。特に近世的二元論の文脈のなかで現在どう考えたらよいか。	同上
13	自由と必然	人間の自由に対立するものとして、運命、自然因果性、社会的制約などが語られる。これらの必然的支配を説く決定論に対して、どう考えたらよいか。	同上
14	真理論	何を考え何を語るにせよ、それは真なのかという問が最後までつきまとう。ではそもそも真理とは何か。そして、何かが真であるということはどうやって確かめられるか。	同上
15	現代の哲学的状況	哲学の歴史から見てわれわれがどのような状況におかれ、いかなる問題に直面しているか、ということを知るために、現代の諸学説に現われている思想的動向を概観する。	同上

＝ 中 国 の 思 想 ＝ （R）

〔主任講師：溝口雄三（東京大学教授）〕

全体のねらい

中国思想の特質は何か、それは宋代以降近代に至るまでどのように展開したか、この二つのテーマについて考える。前者は、政治・社会思想の基本概念でもある「天」「理」「自然」「公」などにつき、日本におけるそれらとの比較により中国的特質を明らかにし、後者ではその政治・社会思想がどう展開したかを考える。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	中国の「天」 (I) ―日本との比較―	日本の古代の太陽信仰的傾向に対し、中国古代では天・上帝信仰的傾向があった。この「天」は道家の「道」や陰陽思想と結びついて天人相関説や天人合一説を生みだしていく。こういった中国の「天」の思想的特質を、日本の天道や天の観念と比較しながら、考える。	溝口雄三 （東京大学教授）
2	中国の「天」 (II) ―天譴から天理へ―	漢代に生れた天人相関説は、自然の災異を天の譴責と考える天譴論を生みだしたが、この天譴論は唐から宋にかけて合理主義的な、つまり自然法則的な天理観にとって代られ、ここで中国は政治思想史上、一つの転機を迎えた。そのいきさつを述べる。	同 上
3	中国の「理」 (I) ―日本との比較―	日本では一般に理より情が重んじられていたが、中国では、特に宋代以後、天理観が成立したことと相俟って、自然法則、道徳規範としての「理」が極めて大きな比重をもつようになった。この「理」の中国的特質を日本の「義理」と比較しながら考える。	同 上
4	中国の「理」 (II) ― 理気世界観 ―	宋学は理学とも性理学ともいわれ、その世界観は理気世界観と名づけられる。この理気世界観は、明代に入ってどのような展開をとげ、清代から近代からどのように変質して現代に至っているか、その歴史を辿る。	同 上
5	中 国 の 自 然	「自然」は宇宙自然であると同時に人間の自然、すなわち人間の本質を示す概念である。中国ではこの「自然」概念がどのような特質をもつかを、日本の「おのづから」との比較を通して考え、かつそれが16、7世紀にどのような変化をみせたか、を辿る。	同 上
6	中国の「公」 (I) ―日本との比較―	日本の「おゝやけ」と中国の「公」の原義を比較し、その発生の時期からの違いを明らかにし、それが政治観（君主観・国家観）や社会観にどのような特質を、日中両国にもたらしているか、を述べる。	同 上
7	中国の「公」 (II) ― 天 下 為 公 ―	近代中国の建国の父といわれる孫文は「天下為公」を提唱したが、その「公」は、16、7世紀に新らしく転換したものを発展させたものである。それはどのような転換であり、発展であったのか、その軌跡を辿る。	同 上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	宋学の興り	天譴論から天理論へという天観の転換が宋学の興りの背景にあるが、この、宋子によって集大成された宋学は、中国思想史上どのような意義をもつか、それは社会のどのような変化に対応するか、について述べる。	溝口雄三
9	宋学の展開	朱子学は明代に入って国教化するが、なぜそれは、そのように広汎に中国社会の中にうけ入れられたのか、又、それは朝鮮や日本にも伝播したが、日本でそれを受け入れたのはどのような政治・社会上の要因によったのか、などを考える。	同　上
10	陽明学の興り	朱子学を批判しながら15世紀に新たに興った陽明学は、朱子学の対立物であったのか、継承発展とみなされるべきものか、継承発展とすればどの面においてか、などを、陽明学の特性を考察しながら、述べる。	同　上
11	陽明学の展開 ―日本との比較―	陽明学は16、7世紀に至り、次回、次々回に述べる政治的、社会的な転換に深くかゝわるが、その思想史的な役割を、幕末日本で果たした日本陽明学（大塩中斎ら）との比較を通して、述べる。	同　上
12	16、7世紀の転換(Ⅰ) ―君主観の転換―	16、7世紀すなわち明末清初期に、中国では君主観に大きな変化があらわれるが、そもそも中国の君主観は日本の君主観との間にもともとどんな相異があり、かつその君主観がこの時期にどういう新しい展開を示したか、を述べる。	同　上
13	16、7世紀の転換(Ⅱ) ―田制論の新しい展開―	その明末清初期には、又、田土所有上の私有観念の進展がみられる。それにつれて従来の「王土」観に対する「民土」観や土地配分論などが主張されるに至るが、それが清末の土地公有論とどう関係するかを述べる。	同　上
14	清代から近代へ(1) ―「封建」から地方分権へ―	明末清初にあらわれた上の変化は、政治観や社会観にも影響し、伝統的な「封建」の概念を用いながら、清初から清末にかけて、地方自治や地方分権への要求として、主張されはじめる。その要求がどのような議論としてあらわれたかを、述べる。	同　上
15	清代から近代へ(Ⅱ) ―大同的共和思想―	上のいわば自主的な地方自治の要求が、ヨーロッパからの外来の議院制の受容とどう結びつき、中国の共和革命がどういう筋道をたどったか、又、そこから生れた孫文の三民主義思想の特長がどのようなものであるかを、述べる。	同　上

＝ 近代の思想 ＝ （R）

〔主任講師：中埜　肇（放送大学教授）〕

全体のねらい

近代というものをある時間的な長さをもつひとつの思想的な構造体と見なし、その内実を神・人間・自然という3つの主題にもとづいて分析する。講義の対象は主として西欧の近代であるが、できるかぎり世界全体に及ぶ普遍的な視角をも忘れないようにしたい。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	「近代」の概念(1) 思想としての近代	「近代」という概念を検討することによって、それにまつわる問題点を指摘し、かつ近代をひとつの思想と考え、その内容について考える。	中埜　肇（放送大学教授） 湯川佳一郎（法政大学教授）
2	「近代」の概念(2) 中世と近代	近代は中世に対する明確な対立を自覚することから、その対立の本質を具体的に考察する。	同上
3	近代における「神」の概念(1) 近代初頭の宗教・哲学・科学の関わり	ルネサンスから17世紀までに見られるキリスト教信仰と哲学思想や自然科学との関わりのなかで考える。	同上
4	近代における「神」の概念(2) 近代の宗教運動	神秘改革・宗教改革・ピエティズム・ピューリタニズム・ジャンセニズムなどの宗教運動を近代人が提示した信仰の内面化としてとらえ、その思想的な意味をさぐる。	同上
5	近代における「神」の概念(3) 啓蒙思想と宗教	啓蒙思想によって合理的なものに変容させられたキリスト教の様相を、理神論や無神論について考える。	同上
6	近代における「神」の概念(4) ロマン主義と宗教	19世紀におけるロマン主義の流れのなかで試みられた哲学と宗教との統合を「理性宗教」について考察する。	同上
7	近代における人間像(1) 新しい人間	近代の出発点において理念的・現実的に形成された新しい人間の像を具体的な例示にもとづいて概観する。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	近代における人間像(2) 「心」の優越	近代の思想全体にわたって「心」・「精神」・「自我」・「意識」が優越していたことを、主として哲学の流れのなかでとらえる。	中埜肇 湯川佳一郎
9	近代における人間像(3) 市民社会	近代人の社会性の凝縮的表現とも言うべき「市民社会」の思想的な意味について考える。	同上
10	近代における人間像(4) 国家と歴史	「近代国家」と呼ばれるものの思想的な基礎と、ロマン主義のもとで拡大した「歴史意識」の思想上の意義を検討する。	同上
11	近代における自然観(1) 近代的自然観の特質	近代になって成立した新しい自然像・宇宙像の思想的な意味を、それ以前のものと対比して考察する。	同上
12	近代における自然観(2) 自然科学の成立と自然哲学	「自然科学」の思想的な基礎および近代になっても生き続ける「自然哲学」と自然科学との関係を論ずる。	同上
13	近代における自然観(3) 人間的自然と自然法	「人間的自然」（human nature）の自覚にもとづいて形成された思想の展開と、それに由来する近代の自然法思想について述べる。	同上
14	近代における自然観(4) ロマン主義の自然概念	ロマン主義が構想した「生きた自然」の思想や美的・目的論的自然観について、その否定的・肯定的な意味を考える。	同上
15	近代と現代 近代の否定としての現代	現代は近代の「死」から生れたと言われる。その「死」の意味と、その「死」から生れた現代の思想的な特質や問題点とを考慮する。	同上

＝ ことばとコミュニケイション ＝ （TV）

〔主任講師：吉田夏彦（お茶の水女子大学教授）〕

全体のねらい

ことばがコミュニケイションの中で果す役割を考えることを通じて、心、物、抽象的なもの、の三つのものの間の関係についての知見をえることをめざす。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	はじめに	「コミュニケイション」の語義・表現と内容指示による説明　唯物論　哲学	吉田夏彦（お茶の水女子大学教授）
2	広い意味でのことば	景色　みたて　遺伝子　絵・音楽　メタ言語	同上
3	せまい意味でのことば	心の存在・名詞　話の世界　複数の可能性論理	同上
4	鳥や獣のことば	話す鳥　類人猿の文字　ア・プリオリ主義	同上
5	ことばとコミュニケイション	文の正しさ「良心」　ことばによってつくられた世界	同上
6	ことばと心	五感でさわれるもの　文脈と存在　コンピュータ　機械としての脳	同上
7	物とことば	物体　空間・時間　種類　形而上学　物の世界	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	論理とことば	自然科学と常識　論の単語　数学の応用 お伽噺　集合論への還元　語際性 論証の直観	吉田夏彦
9	計算機とことば	論理設計　「生物」　配号配列の変形 自然言語	同上
10	ことばの背景	母語と外語　文学の翻訳　風物　習慣 身ぶり　感情　木敦どり	同上
11	個物	心　プログラム　個体　種類の限定　自分	同上
12	モデル	人物画　幾分学　数学的な構造　模型　仮説 理論　認知科学　文法　規範　規格	同上
13	表現と内容	写真　俳句　心　正文	同上
14	語法の問題	人工語　主語　「君は悲しい」 「はい」と「いいえ」　模形性	同上
15	終に	「意味」　「外来語をつかうな」　思いやり 正書法　母語　ことば自体の価値	同上

＝記　号　論＝（TV）

〔主任講師：吉田夏彦（お茶の水女子大学教授）〕

全体のねらい

論理学の成果にもとづいて記号の役割についてのべることに第一の重点をおき、ついで、より広い見地から記号について論じ、哲学と記号論との関係についてものべる。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	変項	1. 記号とは何か 2. 変項 3. 論理学 4. 変数 5. 噂話と筋書 6. 代名詞	吉田夏彦 （お茶の水女子大学教授）
2	形式と抽象	1. 抽象と捨象 2. 形式 3. 文脈 4. 俳優	同上
3	そのほかの論理記号	1. 「である」の分析 2. 否定の記号 3. 連言記号 4. しばり変項と存在記号 5. 定義 6. 必要最小限と実用 7. 実例	同上
4	計算と証明	1. 証明問題 2. 論理計算 3. 証明の記号化	同上
5	形式化	1. ブルバキズム 2. つかわれる可能性 3. 不完全性定理 4. メタ理論 5. メタ理論の形式化 6. 科学の理論の形式化	同上
6	記号の濫用	1. 2つの導入のしかた 2. クラス表現 3. 定義の例 4. ラッセルの矛盾 5. 帰謬法	同上
7	ものごと	1. 架空と実際 2. 唯名論 3. 形而上学 4. 名前 5. 実体 6. 心 7. ものごと	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	話	1. 意味 2. 分節性 3. 話の両面 4. 話の多義性 5. 変項としての話	吉田夏彦
9	記号の役割	1. 嘘と本当 2. 矛序 3. 相対的真実 4. 人為 5. 呪文と記号	同上
10	環境としての記号	1. 意識の中の環境 2. 自然環境 3. 風景の描写 4. 心とことば 5. 数字と数 6. 物質	同上
11	記号としての環境	1. 心とひろい意味での記号 2. 記号の独立 3. 設計された環境	同上
12	かたち	1. 宗教美術 2. 図形 3. 美術品	同上
13	楽譜と音楽	1. 歌 2. 楽譜 3. ことばとの比較 4. さまざまな問題	同上
14	自然と記号	1. 天文気象 2. 解読 3. 自然科学の優位 4. 実在	同上
15	終に	1. 1つの図式 2. 記号の変換 3. 読者へのすすめ	同上

＝比　較　思　想＝（TV）

―自然について―

〔主任講師：青山昌文（放送大学助教授）〕

全体のねらい

現代の思想界における最大の課題の一つは、近代的な主観客観図式の乗り越えであり、現代文明における最大の課題の一つは、自然と文明の深い意味での調和の達成である。この講義は、古今東西の自然哲学をとりあげ、非主客図式的・非対象化的な<一と全の哲学>の視点から、これらの自然哲学の現代的意義を探ることにしたい。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	自然哲学の現代的意義	はじめに 1. 地球自然環境の危機 ― 酸性雨とフロンガスを例として 2. 自然に対する近代以降の態度 3. 近代の自然観の根本性格 4. 近代の主観主義 5. 非機械論的＝非近代的自然観を求めて	青山昌文（放送大学助教授）
2	安藤昌益	はじめに 1. 安藤昌益の生涯 2. 稿本『自然真営道』の数奇な運命と主要研究史のいくつかについて 3. 昌益の著作と思想の発展 4. 昌益の自然哲学	同上
3	三浦梅園 ― 一即一一の世界	1. 梅園哲学誕生の条件 2. 哲学の論理 ― 「一即一一」 3. 自然の論理 ― 直円的空間論の世界 4. 梅園哲学から学ぶもの	小川晴久（東京大学教授）
4	方以智 ― ヨーロッパと対決する「気」の哲学	はじめに 1. 方以智の生涯 2. イエズス会士が伝えたヨーロッパ文化 3. 方以智の思想 ― 「気」のパラダイム 4. もうひとつの方法 ― 通幾 5. まとめ	坂出祥伸（関西大学教授）
5	王船山 ― 道器論の世界	1. 志の人王船山（王船山小伝） 2. 王船山の易学の系統 3. 道の探究と実践	小川晴久
6	アフリカ・モシ族	1. 方法の問題 2. モシ族について 3. 自然との現実的なかかわり 4. 自然との観念的なかかわり 5. 人間の領域と自然の領域 6. 「文化」としての「自然」	川田順造（東京外国語大学教授）
7	イブン・スィーナー ― 『医学典範』を中心に	1. 流出論的自然観 2. イブン・スィーナーの『医学典範』 3. アッラーの神の配慮 4. アナロジー的視点	五十嵐一（筑波大学助教授）

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	ソクラテス以前の哲学者たち	1. 「ソクラテス以前」について 2. ピュシス、パンタ、コスモス 3. ピュシスとしての自然万有 4. パンタとしての自然万有 5. 秩序としての自然万有	廣川洋一 （筑波大学教授）
9	ジョルダーノ・ブルーノ ―― 宇宙観の転換	1. 公認の宇宙観 2. 占星・練金・記憶術 3. 天文学の成立 4. ブルーノの思想 5. 新プラトン主義の伝統 6. 近代的世界観のなかで	樺山紘一 （放送教育開発センター教授）
10	ライプニッツ ―― 多様と調和	1. 思索と活動 2. 多様と統一 3. 批判と建設 4. 人間と自然	佐々木能章 （横浜市立大学助教授）
11	ディドロ	はじめに 1. ディドロの生涯と著作のいくつかについて 2. 数学的自然観からの脱却 3. 自然一元論 4. 存在の連鎖 おわりに	青山昌文
12	ゲーテ ―色彩論の創始者	1. 光学ではなく色彩論を 2. 光と闇のあいだ 3. 三原色 4. 色彩環 5. 光と眼の同一性	高橋義人 （京都大学助教授）
13	シェリング ―― あらたな神話	1. 世界霊 2. 近代精神と自然科学 3. 精神の哲学 ―― ドイツ観念論 4. 自然の神話 ―― ドイツ・ロマン派 5. 自然哲学 6. 分極性と上昇 7. 精神の自然学	西村清和 （埼玉大学助教授）
14	ニューサイエンス ―― 東洋思想とのかかわりから	1. 先駆者たち 2. フリッチョフ・カプラ	竹本忠雄 （筑波大学教授）
15	自己組織化とエコロジー	はじめに 1. 自己組織化 ―― イリヤ・プリゴジーヌの散逸構造論 2. 古典科学と現代科学 ―― モランの総括 3. 自然と自由 ―― モスコヴィッシのエコロジスム おわりに	青山昌文

＝ 日本語学概論 ＝ （R）

〔主任講師：古田東朔（鶴見大学教授）〕

全体のねらい

われわれが使っている日本語とは、どういう言語なのか。媒体としての音声、文字、地域による異同、語彙と意味、文法など、基本的基礎的な問題について、語学的な面から取りあげ考察していく。なおその際、日本語に関する他の科目との関係も考慮に入れるようにしたい。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	日本語	日本語とは、どういう言語か。その系統、周辺の言語との関係、また日本語の位置などについて概観する。	古田東朔（鶴見大学教授）
2	日本語の位相	日本語には、どのような違いが見られるか。話しことばと書きことばの違い、地域による違い、性別による違い、階層による違いなどについて、まとめて見ておく。	同上
3	話しことばと書きことば	日本語の位相の章で取りあげた話しことばと書きことばについて、それぞれどのような違いがあり、特色があるのかについて、もう少し詳しくながめる。	尾上圭介（東京大学助教授）
4	日本語・東と西	方言とは何か。その形成、標準語・共通言語と方言の関係、上方語と江戸語との対立から明治以降の新しい標準語・方言の成立などについて考察する。	徳川宗賢（大阪大学教授）
5	日本語の音声	日本語は、どのように区別して発音されているか。音声・音韻、音素、アクセント等について見ていく。	上野善道（東京大学助教授）
6	敬語	敬語の使い方は、よく問題にされる。日本語における敬語は、どう考えられるのか。その特質、分類、使い方などについて述べる。	古田東朔
7	日本語の文字	日本語に用いられる文字には、漢字・平仮名・片仮名等がある。それらはどのようにして用いられるようになったか。その概略についてながめる。	築島裕（中央大学教授）

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	日本語の表記	現代日本語の表記において、前章の日本語の文字で見た各種の文字は、どのように使い分けられ、用いられているか。それらの決まりについて述べる。	古田東朔
9	日本語の語彙	日本語の語彙には、もとからの和語のほか、中国その他からの外来語がある。それらには、どのようなものがあるか。また語彙の調査はどのように行われているかなどについて述べる。	鈴木英夫 （茨城大学教授）
10	「は」と「が」、コソアド	日本語では、外国語と比べて特に「は」と「が」の使い分けが問題となる。また略してコソアドという指示する語の1群がある。これらは、どのように使われているのかについて見る。	古田東朔
11	日本語の品詞	日本語は、どのような品詞に分類されるのか。その考え方、代表的な分類説などについて概観する。	同上
12	語・語句の用法	語・語句の用法として、どのような点が取りあげられるか。特に副用語といわれるものを中心として述べる。	渡辺　実 （上智大学教授）
13	日本語の語順	日本語の語順には、どういう傾向が見られるのか。外国語との違い、語順による意味の違いなどについてもふれる。	清水康行 （日本女子大学 助教授）
14	日本語の文章・文体	日本語の文章・文体は、どう変わってきたか。その結果、現在の文章・文体はどうなのか。その特色について概観する。	古田東朔
15	これからの日本語	これまでの日本語はどう変化してきたのか。これからの日本語はどう変化していくのだろうか。われわれ一人一人の問題として考える。	同上

＝日　本　語＝（R）

主任講師：宮地　裕（帝塚山学院長）
主任講師：水谷　修（国立国語研究所長）

全体のねらい

大学教育の目的の一つは、言語の運用能力の向上にある。この講義においては、全体を三つの部分にわけ、第1部においては、「話すことと聞くこと」、第2部においては「書くことと読むこと」に焦点を当て、日頃使っている日本語に対する自覚を促し、あわせて日本語の基礎的な運用能力の向上を目差す。さらに、第3部は、「応用編」とし、大学の講義の聞き方、レポートのまとめ方、発表と討論の仕方について、実際の場面に則して、応用力を身につけさせることを目標とする。したがって、日本語能力の開発を求める学生のみならず、日本語教育に関心を持つ層に対しても有益な講義となろう。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	国際化と日本語	序論。日本社会の国際化とともに、日本語に対する関心は世界的に高まっている。このような事態の中で、日本人は自国語に対して、どう自覚的である必要があるかを論じる。	宮地　裕（帝塚山学院長） 水谷　修（国立国語研究所長）
2	日本語の母音と子音	音としての日本語の基礎について考える。他の言語との比較を通して日本語の母音と子音の特徴を考察する。外国人の誤用例も取り上げながら、日本語の音の難しさにもふれる。	水谷　修
3	日本語の音節	持続音節、速音節といった日本語の特徴的な音節をとらえ、音節と表記との関係、さらには外来語の表記の問題についても考える。	同上
4	アクセントとイントネーション	日本語の多様性について、各種の方言を中心に考えるとともに、外国人のアクセントやイントネーションの違いについても、その原因を考える。	同上
5	話ことばの特色	終助詞や不完全文など、話しことば特有の言語現象をとらえ、文レベルでの話しことばの特色をとらえるとともに、実際の談話場面でのコミュニケーションについても実例をもとに考える。	同上
6	聞くことの大切さ	コミュニケーションの成立には、いかに相手の言いたいことが聞けるかが鍵だ。中でも最も重要なのは推定の能力である。円滑なコミュニケーションのための聞く態度について考える	同上
7	発音と表記法	発音をそのまま表記することは容易なことではない。発音と表記とのずれについて考え、書くことにまつわる難しさと、注意すべきポイントについて解説する。	水谷　修 竹内俊男（名古屋大学教授）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	書き方の基本	原稿用紙の使い方の基本から説き起こし、句読点のつけ方、縦書きと横書きはどう違うか、数助詞の表記法など、さまざまな文章の決まりについてふれる。	竹内俊男
9	名文と悪文	名文とは、わかりやすくて、説得力のある文章のことである。名文と悪文の違いを、実際に読むことを通して考えてみる。	同上
10	エッセー・小論文の書き方	芸術文と実用文ではどこが違い、どの点で共通しているか。エッセーについては書き出しの難しさ、結びの生かし方を、小論文についてはデータの使い方、構成などを考える。	同上
11	はなしあいの要素	言語的コミュニケーションにおいて、どんなことが表現され、伝えられるか。また、その成立にどんな要素が関与し、言語のどんな機能が問題になるかを考えていく。	清水康行（日本女子大学助教授）
12	聞き違い・行き違い	コミュニケーションに支障が生じる場合、その成立要因のどこに問題があるのか。行き違いの原因・理由を落語「味噌倉」を例に考えてみる。	同上
13	発表の仕方・聞き方	発表、討議の席で、円滑なコミュニケーションを行い、実りのある議論を展開していくためには発表報告者は、どんなことに注意していく必要があるかを、問題点中心に考える。	同上
14	討論の仕方	相手の言いたいことを理解し、その上で自分の考えを相手に納得させなければならない討論の高度のテクニックとはどんなものか。あいづちの打ち方、否定や反論の仕方など討論の要点。	同上
15	まとめと展望（座談会）	コミュニケーションの手段としてのこれからの日本語について、話すこと、書くこと、読むことの各要素の関連についてふれ、全体のまとめとする。	清水康行 宮地裕 水谷修 竹内俊男

＝近代詩歌＝（R）

〔主任講師：野山嘉正（東京大学教授）〕

全体のねらい

この講義は主として明治期の詩歌の歴史を、作品を読みながら考察するのが目的である。「詩歌」には近代の特色とされる新体詩と、短歌、俳句が含まれるが、それら相互の関連を観察し、近代詩歌の全体像を浮び上らせる方法をとる。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	はじめに――「詩歌」ということば	この講義は主として明治期の詩歌の歴史を、作品を読みながら考察するのが目的である。「詩歌」には近代の特色とされる新体詩と、短歌、俳句が含まれるが、それら相互の関連を観察し、近代詩歌の全体像を浮び上らせる方法をとる。第1回はそのために様々な事例を提供する。	野山嘉正（東京大学教授）
2	『新体詩抄』とその周辺	新体詩の源流とされる『新体詩抄』の成立について考えるが、西洋詩からの影響・創作の質・和歌のことばを採用したこと等々、実際に作品を読み、3人の作者の見解を紹介する。それとは別に、讃美歌や唱歌など他の先駆的な試みについても併せ述べる。	同上
3	『於母影』とその影響	鷗外を中心とするグループが発表した訳詩集『於母影』は『新体詩抄』の後をうけて当時の青年に新鮮な感動を与えた。音数律などの実験に発揮された詩的感性の特質を考えるわけだが、さらに、同時代への影響、特に雑誌「文学界」同人の受けとめ方を追跡する。	同上
4	透谷と藤村	「文学界」同人のうち透谷と藤村の詩業を概略述べる。透谷における長詩の試みと挫折、抒情詩の達成。『若菜集』に始まる藤村の様々な模索。藤村の新体詩の歴史的意義と、詩集、詩文集の総体としての理解を心がけたい。	同上
5	子規――俳句	子規は詩歌の全体にわたる改良革新の計画を持っていた。最初に実現したのが俳句革新、発句の重視であることは広く知られている。その理論として「写生」を提唱したことも有名だが、『俳諧大要』について革新の方向を見定めながら、作句の大体を探る。	同上
6	子規――短歌（付. 漢詩と新体詩）	短歌の革新は「写生」によりつつ、ほぼ俳句の延長線上に考えられたが、俳句との本質的相違や長い伝統を持っているための困難など、子規の未来図は想像以上に緊迫に満ちている。子規の理想について考察するとともに、新体詩と漢詩の業績にも触れる。	同上
7	鉄幹・晶子	雑誌「明星」では詩歌を〝図詩〟と呼び、新体詩には〝長詩〟、短歌には〝短詩〟の名称を与えた。詩歌を〝詩〟として統一的に理解したのである。「明星」はこの理念に基づいて総合的な文芸雑誌をめざした。鉄幹・晶子の業績を中心に、明星派の展開（光太郎・勇・啄木・白秋ら）について述べる。	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	有明と法華	藤村以後、難解な詩語を駆使した有明・法華は、文語詩の近代における運命について暗示的な意味を持っている。上田敏の訳詩集『海潮音』に代表される象徴詩の移入によって２人の詩人は或る頂点をきわめたわけだが、口語詩の抬頭によって詩筆を折ることを余儀なくされる。有明・法華と口語詩という歴史の曲り角を概観する。	野山嘉正
9	鷗外と歌壇	鷗外の短歌との関連を考えるとともに、その主宰する観潮楼歌会について素描する。子規・鉄幹の系統に佐佐木信綱を加えて短歌の可能性を探る意図に含まれるのは何か、という問題がそこにある。又、鷗外の実作として『うた日記』を詩歌観の表れとして紹介する。	同上
10	茂吉	子規以後の代表的歌人の一人としての茂吉を、第一歌集『寺光』成立までの時期に限定して考察する。左千夫・赤彦・憲吉らにも触れることになるが、近代短歌のあり得べき姿の一つをきわめたという意味において茂吉は重要な存在である。茂吉の実作を追いながら、短歌のこれ以後の流れにも見通しを立てるのが課題である。	同上
11	白秋	雑誌「文庫」「明星」から巣立った白秋は、短歌と新体詩から始めて、その生涯を詩歌のすべての領域に捧げた。ここでは初期の詩集・歌集の全体像を描くことが課題である。白秋に続いた犀星、朔太郎らについても簡単に述べる。	同上
12	啄木	白秋と同様に「明星」から出発した啄木は、文語詩から口語詩へ、短歌の口語化へ、という詩歌の転回点に位置する。そういう位置に考察を加え、啄木の核心にあるもの、或いはそこに揺れ動く心情を探るのがこの回の課題である。盟友であった哀果にも言及する。	同上
13	虚子	俳句の歴史は子規以後、虚子・碧梧桐の二派に別れて或る意味では現在にまで及んでいるとも言えるが、虚子の伝統重視、碧梧桐の新傾向それぞれの成立過程は単純なものではない。この回は虚子が小説に強い関心を示しながら定型と花鳥諷詠の旗幟を鮮明にするまでの軌跡を辿る。	同上
14	碧梧桐	子規没後俳句の主流に立った碧梧桐は、自由律、無季の俳句の源を切り開く。俳句の伝統的な約束事を離れるのは短い詩としての性格を持つ意味だが、又、俳句であり続けることも要求するのが新傾向である。そういう問題を抱えた碧梧桐を素描する。	同上
15	むすびに代えて	近代詩歌の流れは大正期に入って新しい展開を見せる。口語詩の盛行、欧米の新しい運動の影響、短歌・俳句のその後等々である。明治期の様相を引き継いでの発展を略述して一応のむすびとしたい。なお、付論として漱石の俳句と漢詩に言及する予定である。	同上

＝人間の歴史＝（R）

～日本女性史～

〔主任講師：笠原一男（元放送大学教授）〕

全体のねらい

われわれは、「人間の歴史」として日本の女性史をとりあげてみた。その日本女性史も、原始・古代・中世・近世・近代・現代へと時代を追って、政治的・経済的・文化的等々の女性生活をたどるのではない。ここでは日本の女性が宗教生活という面で、どのような歴史を辿って来たかを仏教を中心とした宗教史のなかで考えるつもりである。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
2	日本仏教にみる女性解放史序章	1. 現代と女性 2. 古代の仏教と女性 3. 中世の仏教と女性 4. 近世の仏教と女性	笠原一男（元放送大学教授） 小栗純子（中央学術研究所講師）
2	女性を差別する古代仏教	1. 『無量寿経釈』と女性 2. 古代仏教の聖域と女性 3. 往生・成仏の障り 4. 聖法師	小栗純子
3	巷の女性と古代仏教	1. 光孝天皇の孫娘 2. 論より証拠 3. 藤原兼経の妻 4. 奈良の女性 5. 往生の条件 6. 人間的条件の優先 7. 正直の心は極楽の門　参考資料	笠原一男
4	女性の差別を否定した鎌倉仏教	1. 念仏と禅と題目 2. 巷に出た鎌倉仏教の開祖 3. 法然の選択本願の理由 4. 伝から論へ	同上
5	法然と念仏と女性	1. 御家人の妻に説いた女人往生 2. 『無量寿経釈』の女人往生 3. 法然の女人往生論 4. 『念仏往生要義抄』の女人往生論 5. 室の遊女 6. 信仰問答	同上
6	念仏に救われた平家物語の女性	1. 平家物語と仏教 2. 祇王と仏 3. 欣求浄土	小栗純子
7	親鸞と悪人正機と女性	1. 法然と親鸞 2. 弥陀の本願は悪人のため 3. 悪人正機 4. 煩悩具足が救われる証拠 5. 女人正機	笠原一男

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	正法眼蔵にみる女性と仏教	1. 深草の道元 2. 礼拝得髄 3. 道元の女性観 4. 女性差別は笑止千万	笠原一男
9	日蓮と女性	1. 女人成仏拒否の諸経 2. 法華経だけが女性を救う 3. 女人為先 4. 日蓮と女人往生 5. 月水御書	同上
10	女人正機の誕生	1. 女人往生聞書 2. 罪深い女性 3. 女人正機	同上
11	戦国時代の女性と蓮如	1. 坊主の妻に説く女人往生 2. 晩年の女人往生思想 3. 娘見玉の死をいたむ 4. 妻如勝をいたむ御文	同上
12	江戸時代の女性と仏教	1. 真宗の女人往生論 2. 真宗の女人往生伝	小栗純子
13	近代における女性と宗教	1. 中川みき～天理教～ 2. 出口なお～大本教～	同上
14	現代社会と女性教祖	1. 小谷喜美～霊友会～ 2. 長沼妙佼～立正佼成会～	同上
15	女性と宗教	1. 古代 2. 中世 3. 近世 4. 近代・現代	笠原一男 小栗純子

＝歴史にみる日本人と仏教＝（TV）

主任講師：速水　侑（東海大学教授）
主任講師：小栗純子（中央学術研究所講師）

全体のねらい

仏教伝来以来1,500年の日本人と仏教の歴史を、日本史を舞台として時代別に究明する。さらに奈良仏教、平安仏教、鎌倉仏教、教派神道、新宗教等々の諸仏教にみられる教団の形成と普及、救いとは何か、女性の救い、転換期の時代と宗教などの諸問題を具体的に史料を解説しながら考える。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	日本仏教の形成と普及	まず、日本仏教の歴史を概観的に眺める。そしてその間に生まれた飛鳥仏教、奈良仏教、平安仏教、鎌倉仏教、江戸仏教、教派神道、新宗教等々をとりあげてその特色を論じ、あわせて日本人が宗教に求めたもの、奈良、平安、鎌倉仏教における救いの条件の相違、日本仏教と女性等について論ずる。	速水侑（東海大学教授）小栗純子（中央学術研究所講師）、大橋俊雄（日本文化研究所講師）長谷川匡俊（叡徳大学教授）、船岡誠（明治大学講師）
2	仏教伝来	インドで生まれた仏教は、中国・朝鮮を経由して、六世紀中ごろ日本に伝来した。当時の日本と朝鮮の関係を背景に、仏教伝来の意義を考えるとともに、豪族たちの間に受け入れられた仏教の性格や、さらに聖徳太子の下で開花した飛鳥の仏教文化における渡来人の役割にふれる。	速水　侑 小栗純子
3	奈良仏教	大化改新によって天皇を頂点とする律令国家が成立し、仏教は国家仏教へと変化する。僧尼の国家奉仕を義務づける僧尼令が制定され、中央に東大寺、諸国に国分寺が建立される。こうした鎮護国家仏教の性格と、その一方で民衆救済をめざした行基らの民間への布教活動を明らかにする。	同上
4	平安仏教	腐敗した奈良仏教の粛正をめざす桓武天皇の下で、山林修行者たちの中から最澄と空海が現れ、天台・真言宗を開き、新たな鎮護国家の理念を説いた。しかし二人の死後、天台・真言宗は国家や貴族へ接近し祈禱宗教化し、密教が仏教界をおおう。こうした新しい平安新仏教の成立の背景とその特色を明らかにする。	同上
5	浄土教の普及	平安時代の中ごろ、古代国家の没落、末法思想の流行などを背景に、極楽往生を説く浄土教が盛んとなった。空也や源信が現れて念仏を広め、往生伝の編纂も行われる。ここでは多彩な浄土教芸術を紹介するとともに、平安浄土教と鎌倉時代に生まれる鎌倉仏教との関係を考える。	同上
6	鎌倉仏教	まず古代仏教を全面的に否定して生まれた鎌倉仏教六宗の特守を概観的にながめ、鎌倉仏教誕生の必然性にふれる。また、古代仏教と鎌倉仏教の救いの条件の違いを明確にし、鎌倉仏教が民衆に受け入れられた理由を、古代仏教との比較のなかで具体的に考える。	同上
7	浄土宗の形成と普及	法然は古代仏教を全面的に否定することによって浄土宗を開いた。法然はなぜ念仏一つを選び、それに救いを求めたのか。法然による浄土宗の形成と普及、それとならんでおこった古代仏教、古代権力からの弾圧などについて、法然の生涯のなかで考える。	速水　侑 小栗純子 大橋俊雄

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	真宗の形成と普及	真宗の開祖親鸞と中興の祖蓮如の生涯を中心に、真宗八百年の歴史を考えてみる。そこでは親鸞の行動と思想を悪人正機の思想の形成と普及のなかで考える。つづいて親鸞亡き後の真宗の発展において蓮如の果たした役割を、戦国乱世における蓮如の行動と思想を通じて考える。	速水侑 小栗純子
9	禅宗の形成と普及	栄西・道元によって開かれた禅は、中世社会を通じて武士層に受容された。このうち道元によって開かれた曹洞宗の形成と普及を、道元の生涯のなかで考える。道元の説いた禅の救いとは何か、道元は古代仏教にあきたらず、なぜ曹洞宗を開いたか等々の問題について考える。	速水侑 小栗純子 船岡誠
10	日蓮宗の形成と普及	法華経の行者日蓮の教えは、東国の武士層のなかに広まっていった。日蓮は蒙古襲来の危機感の下で、理想国家の実現をめざし、たびかさなる弾圧にめげず、鎌倉幕府を諫めつづけた。鎌倉仏教の最後に現われた日蓮宗の特色を日蓮の生涯と社会との関連のなかで考える。	速水侑 小栗純子
11	日本仏教と女性	日本の仏教は女性をどのように扱ってきたかを、古代と中世の仏教を例として論ずる。古代仏教では、聖域と巷における女性の救いが、どのように説かれたかを考える。また、鎌倉仏教と女性の関係を念仏・禅・題目の三つに分けて、法然・道元・日蓮の女人往生論を通じて考える。	同上
12	幕藩体制と仏教	強烈な幕藩権力の下で、仏教が発展をはかるためには、どのような役割を政治と社会のなかで果たしたか。この問題を幕藩による仏教の保護と統制の角度から考える。そこでは、寺院法度、本末、寺請、檀家等々の制度を通して、江戸時代の仏教が生きるためにとった政治権力と民衆に対する姿勢を考える。	速水侑 小栗純子 長谷川匡俊
13	体制宗教と地下信仰	幕藩の「体制宗教」本願寺の説く理想的宗教者像妙好人をとりあげ、幕藩体制下の民衆と宗教との関係を究明する。さらに反「体制宗教」として地下にもぐった「かくれ念仏」「かくれ題目」「かくれキリシタン」をとりあげ、妙好人との比較の中で、江戸時代の民衆宗教を考える。	速水侑 小栗純子
14	近・現代社会と民衆宗教	まず近代・現代約120年の歴史の中で生まれ、発展した教派神道13派と戦後の新宗教多数を概観的にとりあげる。さらに具体的には教派神道では天理教を、新宗教では立正佼成会を例に、近・現代の民衆宗教の誕生から発展のプロセスと民衆と宗教との関係を具体的に考える。	同上
15	日本仏教史の回顧と展望	1～14回までの講義を素材とし、歴史にみる日本人と仏教の関係を、仏典と法語の役割、日本人と現世利益、救いの条件の時代的・宗教的相違、転換期の時代と宗教の関係、日本史にみる政治と宗教等々の問題を通じて整理する。	速水侑 小栗純子 大橋俊雄 長谷川匡俊 船岡誠

＝ 世界歴史と国際交流 ＝（R）

－ 東アジアと日本 －

〔主任講師：田中健夫（東洋大学教授）〕

全体のねらい

現代の世界は多くの民族によって構成される多くの国家群に分裂している。これまでの歴史研究・歴史叙述は民族や国家の枠組みのなかで行われるのが普通であったが、それから離れた広い視野から歴史をみなおすことはできないだろうか。日本の歴史を東アジアの歴史のなかで、それとの関連において再検討してみたい。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	海から歴史をみる	「海国日本」という言葉があるが、果たして日本はふるくから海国だったのであろうか。日本人は海に対してどのような思いをいだいていたのか、またどんな対応をしてきたのか。海の日本人に対する影響はなんであったか等の諸問題を考える。	田中健夫（東洋大学教授）
2	古代日本列島をめぐる国際的環境	日本は、倭国・倭人とよばれる時代から、東アジアの一員として、中国や朝鮮と密接な交流を持ち、その影響を受けながら、次第に国家としての形をととのえていく。その推移について、東アジアにおける国際交流の展開を軸に考えてみたい。	石井正敏（中央大学助教授）
3	遣隋使・遣唐使と文化交流 －民間貿易の展開－	中国で隋・唐が、律令を基礎に中央集権国家を築き、高度の文化を開花させると、日本は積極的に先進文物の輸入に努めた。ここでは、政治・文化に重要な役割を果たした遣隋使・遣唐使の行動を中心に、朝鮮半島の動向を視野にいれて国際交流の様相を見る。	同上
4	中国社会の発展と日宋交流	唐が滅び、五代十国の時代を経て宋が中国を再統一すると、国内の商業・経済が発展し、日本や高麗との海外貿易も盛んに展開されるようになった。この日本・宋・高麗間の交流が、日本の社会・経済・文化にどのような影響をもたらしたかを考えてみる。	同上
5	中世日本の内と外	中世の日本人は、日本をどのようなひろがりとして認識していたか。その空間の内と外および境界は、どんな性格を帯びた場だったか。逆にアジアの人びとは日本をどんな眼で見ていたのか。境界を活動の場として内と外とを媒介した人びとの行動にも注目したい。	村井章介（東京大学助教授）
6	モンゴルの興起と国際関係の変貌	日本の前近代では稀有の経験だった蒙古襲来を、アジア規模の視野から把えなおす。侵略を蒙った諸国（南宋・高麗・ベトナム・ジャワ・日本等）の運命の共通性と差異。また夷秋が中華の主となったことが、国際関係にどんな変貌をもたらしたかを考える。	同上
7	倭寇の活動とその本質	１４世紀から１５世紀にかけ、朝鮮半島を中心に倭寇とよばれた集団が猛威をふるった。倭寇の構成員、その行動の様相、行動の舞台、大規模化の理由などを検討して、これまで通説とされていた倭寇像を修正し、東アジア海域で演じた倭寇の活動の歴史的意義を考える。	田中健夫

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	東アジア通交圏の成立と日明関係	中国大陸で明帝国が起こり、漢民族支配が回復すると、周辺の諸国に朝貢をよびかけた。日本・朝鮮・琉球等はこれに応じて使節を送り、東アジアには新しい通交の秩序が形成された。ここでは室町政権の対明通交や新興貿易商人の活動を中心に述べる。	田中健夫
9	朝鮮および琉球との関係	１５世紀の初め尚王統が琉球王国の統一を完成し、明に入貢するとともに日本・朝鮮・南方諸地域に貿易船を派遣して多彩な海外活動を展開した。一方、東アジア海域に登場したヨーロッパ人は中国僑商や琉球人と接触しながら北上し、やがて日本に到達する。	同　上
10	豊臣秀吉の朝鮮侵略	東アジア世界の征服をめざした秀吉の朝鮮侵略について、(1) 1592 年の侵略にいたるまで、(2) 1592 年から翌年までの第１次侵略（文祿の役）、(3) 1593 年から '96年までの日明講和交渉とその破綻、(4) 1597 年から '98 年までの第２次侵略（慶長の役）を再検討する。	北島万次 （高崎経済大学教授）
11	豊臣政権の世界認識とアジア外交	秀吉は、「日本は神国」であるとして宣教師追放令をだし、「日輪の子」であると称して朝鮮の服属を強要した。この「日本は神国」「日輪の子」の論理を軸として、秀吉は東アジア諸国および南蛮諸国と通交関係を持とうとした。	同　上
12	「鎖国」の再検討	近世日本の対外関係のあり方を「鎖国」とよぶことが定着して久しいが、実態に即してみると、同時代の中国・朝鮮などの「海禁」政策と同じ類型と考えられる。その観点から「鎖国」概念を再検討し、近世日本の対外関係の特質を、東アジアとの関連で考える。	荒野泰典 （立教大学助教授）
13	日本型華夷秩序の成立と展開	近世日本は、長崎・薩摩・対馬・松前でそれぞれ隣接する異国・異民族と恒常的な関係を結ぶとともに、それぞれの関係を、自らを「華」とし、他を「夷」として「華夷主義」的に編成していた（日本型華夷秩序）。ここでは、その秩序の成立と展開について述べる。	同　上
14	幕末維新期の国際関係 ―日朝関係を中心に	多彩な幕末・維新期の国際関係のうち、ヨーロッパ的、近代的な外交体制の創立と、それ以前の東アジア的、伝統的な対外関係のあり方との相克に焦点を絞り、日朝関係を中心に、日本の対外関係の近代化が、同時にアジアに対する侵略を随伴する理由を考える。	同　上
15	東アジアにおける国際相互認識	人と物との交流の歴史を通じて、東アジアの諸国家間にはそれぞれ異なった国際認識が生まれた。文化的落差・経済的需給関係・軍事的緊張等を反映したものであるが、地域別に(1)中華型、(2)中国周辺型、(3)島夷孤立型に分け、その特質を考えてみる。	田中健夫

＝人文地理学の基礎＝（TV）

〔主任講師：西川　治（立正大学教授）〕

全体のねらい

人文地理学は、人間・環境系、社会活動の地域の組織、科学的世界像などの学際的研究及び地域計画、環境管理、景観育成、国際親善などの応用面においても基礎的な役割りを持つ空間的・環境的科学である。本講義では全体を、1.環境を作る人間、2.地域を組織する社会、3.世界を彩る文化、の三つに分けて説明する。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	人の住む星 －人文地理学の視界－	1. 世界像の探求と地理学の理念 2. 人文地理学の成立過程 3. 人文地理学からみた世界像	西川　治 （立正大学教授）
2	比較風土論の系譜	1. 風土の意味 2. 江戸時代の風土思想 3. 啓蒙的風土論と人文地理学	西川　治
3	気候変化と民族移動	1. 人類の描く文様 2. はげしく変る気候 3. 民族移動	鈴木秀夫 （東京大学教授）
4	地形環境と治水および利水	1. 平野の種類－西ヨーロッパとアジアの平野－ 2. 日本の平野の分布と配列 －東北・中央日本と西南日本との比較－ 3. 平野の微地形と開発 －武田信玄による甲府盆地の開発－ 4. 治水と利水の様式－利根川の開発と治水・利水－ 5. まとめ	中山正民 （埼玉大学教授）
5	村落景観にみる歴史	1. 景観の意義 2. 村落景観の構成要素 3. 古代の計画的地割景観 4. 古代方格状地割の意義 5. 中世の地割景観 6. 近世・近代の地割景観 7. 人間生活と地割景観	山田安彦 （千葉大学教授）
6	地域を分ける農業	1. 世界の農業地域区分 2. E．ハーンの世界の農耕形態の地域区分 3. D．ホイットルセーの世界の農業地域区分とその現代的修正の試み 4. 世界の農業の地域類型の若干の特徴 5. 農業地域分化の諸要因 6. 日本の農業地域区分	山本正三 （筑波大学教授）
7	地域を動かす工業	1. 工業の地域的システム 2. 技術革新と機械工業の展開 3. 風土と結びついた地場産業 4. 工業振興と地域活性化	竹内淳彦 （日本工業大学教授）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	地域の人口問題	1. はじめに ー人口問題の地域的多様性ー 2. 世界人口の動向 ー現状と将来ー 3. 人口都市化の進展 4. 高齢化社会への接近	浜　英彦 （成城大学教授）
9	都市プランと機能システム	1. 都市史の概観 2. 日本の都市とヨーロッパの都市 3. 都市の機能 4. クリスタルラーの中心地理論	西川　治
10	大都市地域の構造と動態	1. バージェスの同心円理論 2. ディッキンソンの同心円理論 3. 田辺の同心円理論 4. ホイトの扇形理論 5. ハリス＝アルマンの多核心理論 6. 社会地域分析と因子生態研究	山口岳志 （東京大学教授）
11	大都市化に伴う都市問題	1. 大都市化の進展 2. 大都市問題の発生と対応	井内　昇 （お茶の水女子大学教授）
12	都市情報の作成と利用	1. 情報化と都市 2. 都市の変化と情報 3. 国土と都市の情報 4. 地理情報システムとコンピュータマッピング 5. 地理情報システムの利用	久保幸夫 （慶應義塾大学助教授）
13	ヨーロッパの文化地理	1. 文化領域としてのヨーロッパ 2. ヨーロッパにおける国家と民族 3. ヨーロッパの風景	竹内啓一 （一橋大学教授）
14	民族の住み分けと文化交流	1. 東アジア世界における民族の住み分け 2. ブータンにおける民族の住み分けと文化交流 3. 雲南における農耕文化と牧畜文化の接触	諏訪哲郎 （学習院大学助教授）
15	世界地図の中の日本	1. ヨーロッパ人の日本像 2. 江戸時代の自国認識 3. 明治・大正期の地理的啓蒙思想 4. 地政学から地泰学へ	西川　治

＝法　学　入　門＝（TV）

〔主任講師：矢崎光圀（成城大学教授）〕

全体のねらい

法というものは人間の生活と離れてはありえないのに、限りなく技術化されて専門家の独占物になりやすい。あるローマの法律家はこれに抗して法の知識を一般民衆の手に戻したといわれるが、以来、法学はその両極に揺れつつ今日に至る。以下、近・現代において法学がなぜ人間生活にとって不可欠の意義をもつかを考えてみる。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	だれが法にかかわるのか	1. 一般の人々と法律家 2. 行政官、官僚 3. 政治家 4. 法学者 5. 広い意味の法律家	矢崎光圀（成城大学教授）
2	法の形成と権利の確保	1. 自由と権利 2. ルールの必要 3. 法的権利と主体 4. 人　権 5. 国　家	同　上
3	法の形成と近代国家	1. 近代国家による政治権力の独占 2. 権力をバックにした法の形成と法による権力の正当化 3. 法による強制 4. 強制のいろいろ 5. 強制の正当化 — 同意？	同　上
4	裁判による法形成	1. 社会あるところ紛争あり 2. 紛争解決とさまざまな手順、手続 3. 近代西欧の２つの途 — 大陸と英米 4. 制度・観念をめぐるタテマエとホンネ 5. 近代的裁判制度の前で日本人は	同　上
5	近代実定法	1. 近代の市場取引と法のルール 2. 法の働きと予測可能性 3. 私法と公法 4. 実体法と手続法 5. 法の支配、デュー・プロセスと自由 6. 法律がありさえすれば	同　上
6	法　学	1. 実定法学、法解釈 2. 基礎法学 3. 理論法学と法解釈学 4. 法学教育	同　上
7	近・現代法への法学の歩み	1. 自然の法と人間のつくった法 2. 万民法と個別の法 3. ローマ法の解釈と法典の注釈 4. 法についての権威主義的と自由主義的視点 5. 法についての固い考えと柔らかい考え	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	法学と隣接諸科学	1. 経済学 2. 政治学 3. 社会学 4. 哲　学 5. 歴史学 6. 科学・テクノロジー	矢崎光圀
9	法の知識と世間	1. 渡る世間に鬼はない 2. 個人と共同体 3. 法の不知はこれを許さず。法網をくぐる 4. 常識・通念・慣習 — 法と実生活のパイプ役 5. ふたたび法の支配と世間	同　上
10	法　の　解　釈	1. 文章の解釈 2. 法の解釈 3. 法の解釈、運用 — タテマエと実際 4. 法実証主義とその批判 5. 解釈テクニックの若干 6. エピソード	同　上
11	法をめぐる事実と規範、ルール	1. 事実とは？ 2. 事実とルール、規範 3. 法的ルール、法規範、法システムと事実 4. 法的プラクティス 5. 国際関係と法	同　上
12	法　と　道　徳	1. 恣意的支配への防波堤としての法 2. 崇高な理想には追いつかない法 3. それでも道徳は法とかかわる 4. 法と道徳の重なりとへだたり	同　上
13	所（ところ）、変われば、法変わる	1. 西洋の法は西洋の法？ 2. 西洋法はなぜ西洋以外の地域でも継受されるのか？ 3. 社会主義諸国の法 4. 法文化、法伝統と摩	同　上
14	時がたてば、法も変わる — 近代法から現代法へ	1. 自立的個人とライフ・スタイルの変化 2. 経済的自由の変化と私的生活 3. 道徳的多元主義とパタナリズム 4. 組織化	同　上
15	正義、自由、福祉 — 人類に未来はあるのか？	1. 現代に生きる 2. 法と正義 — 合法性と正当性 3. 相互的正義 4. 巨大な科学・テクノロジーの進展がもたらす光と影	同　上

＝ 憲 法 概 論 ＝（TV）

〔 主任講師：樋口陽一（東京大学教授）〕

全体のねらい

近代憲法発展史の流れの中では日本国憲法を理解し、その主要な諸条項の意味を明らかにするとともに、憲法運用のなかで提起されている法的な問題点について考える。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	憲法から見た「東西」と「南北」	―「4つの'89年」からの問いかけ 1. 1689年・1789年・1889年・1989年 2. 権利保障と権力分立―その具体的なあり方の変遷 3. 「人類普遍の原理」―西洋近代文明の光と影	樋口陽一（東京大学教授）
2	日本の近代にとって憲法とは	―「和魂洋才」と「西洋かぶれ」の間 1. 幕末の開国から帝国憲法の発布へ ―「建国ノ体」と「海外各国ノ成法」の間 2. 帝国憲法の運用―立憲学派と大正デモクラシー 3. 1911・12年と1925年―2つの画期の意味	同上
3	なぜ「国民主権なのか」	―日本国憲法の生まれに即して 1. ポツダム宣言受諾と戦後変革 2. 「国体」は変わったか 3. 「おしつけられた憲法」か	同上
4	なぜ「平和のうちに生存する権利」なのか	―国際化時代の国家とは 1. 戦争の放棄と戦力の不保持 2. 平和の憲法思想＝制度史 3. 「戦争をしない」だけでない平和 ―人権の国際化	同上
5	なぜ「人権」なのか	―「個人の尊厳」の重み 1. 人一般の発見＝個人の解放としての人権 2. 特に「法人の人権」をめぐって 3. 外国人の人権	同上
6	思想・信仰と教育	―自分が自分でなくならないために 1. 信教の自由と政教分離 2. 教育の自由と国家の役割	同上
7	表現の自由	―なぜ「優越的」か 1. 表現の自由の「優越」性 2. 事前抑制、とりわけ検閲の禁止 3. 新しい問題	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	経済的自由と社会権	―「自由」と「公正」の間で 1. 財産権の制約と社会権 2. 経済的自由－現状と問題点	樋口陽一
9	政治的権力からの人権と社会的権力からの人権	―国家の役割はどこまで? 1. 私人間の人権－妨害排除のための国家の役割 2. 私人間の人権―国家の積極的措置	同上
10	選挙権と代表	―議会制民主主義のしくみと前提 1. 選挙権－その実質的平等の問題を中心に 2. 選挙権と表現の自由の交叉 3. 二つの「代表」観と議会制民主主義	同上
11	中央の政治と地方の政治	―政党のはたらきと住民自治の役割 1. 議院内閣制と政党の役割 2. 地方分権と住民自治	同上
12	公正な裁判と裁判の独立	―「人権のとりで」としての期待 1. 人権にとっての裁判 2. 裁判の独立と裁判官の身分保障 3. 裁判の公開	同上
13	違憲審査の積極主義と消極主義	―「憲法の番人」ということの意味 1. 付随的審査制の構造 2. 付随的審査制の機能 3. 「違憲審査制革命」のなかでの日本の経験の特性	同上
14	憲法改正と憲法擁護義務	―「憲法をまもる」とはどんなことか 1. 硬性憲法と、関連する諸論点 2. 憲法擁護の二つの型－憲法忠誠制度と「開かれた」方式 3. 改憲論の推移	同上
15	おわりに 戦後日本の憲法体験	―世界のなかの日本にとって持つ意味は?	同上

＝ 行 政 法 ＝ （R）

〔主任講師：藤田宙靖（東北大学教授）〕

全体のねらい

行政法の制度や理論にこれまで全く触れたことのない人々を対象に、行政法を本格的に勉強するためにその前提として必要となる基礎的な概念・ものの考え方等を修得してもらうことを狙いとして、できる限り解り易く又筋道の立った入門的講義を行うよう努めたい。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	行政法とは何か	憲法・民法・刑法等と異なり、行政法という名称を持った法律は我国には存在しない。それにも拘らず何故行政法という分野が独立に存在するとされるのかにつき説明し、又行政法上の法主体として登場する「行政主体」「私人」の概念等について説明する。	藤田宙靖（東北大学教授）
2	行政法上の法関係	前回の内容を承けて、行政法上の法関係を形成する基本的要素（当事者・行政の行為形成）につき、より詳しい説明を行う。又これを踏まえて、行政法上の法関係の中にも性質の異なるものが存在すること、行政作用法と行政組織法の基本的違い、等を説明する。	同 上
3	法律による行政の原理	行政作用法の最も基本的な法原理とされる「法律による行政の原理」について、その基本的な考え方を説明し、更にその具体的な内容である「法律の優位の原則」「法律の留保の原則」等について、詳しい説明を加える。	同 上
4	法律による行政の原理の例外と限界	「法律による行政の原理」は行政法の最も基本的且つ重要な法原理であるが、しかしそれは、あくまでも原則であるに過ぎない。古くから認められてきたその例外としての「自由裁量」の問題、又今日この原理そのものが対面しているその限界、等につき説明する。	同 上
5	行政過程への私人の参加	「法律による行政の原理の限界」を補う意味もあって、今日、私人が法律の制定過程すなわち立法過程に参加するのみでなく、行政の過程そのものに直接参加することの重要性が説かれている。この問題につき、「行政の事前手続」を中心として説明を加える。	同 上
6	行政行為 その1	行政主体による公権力行使の中で最も代表的な手段である「行政行為」という行為形式につき、この概念の意味、行政法理論上の意義、他の行為形式（契約等）との法的性質の違い、等々についての説明を行う。	同 上
7	行政行為 その2	承前。「行政行為」なる行為形式が有する法的性質を表すために用いられる、自力執行力、不可争力、公定力等々の概念について説明する。又、それとの関係で、行政行為の瑕疵論とりわけ「無効の行政行為」の問題について説明を加える。	同 上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	行　政　立　法	行政主体は行政活動を行う際に、既に見た「行政行為」のみでなく、他にも様々の行政形式を利用する。その一例である政令・省令・通達等々の一種の立法行為について、「法規命令」と「行政規則」の性質の違い等に触れつつ、その法的性質を説明する。	藤田宙靖
9	行政の非権力的活動形式	行政活動に際して用いられる様々の行為形式の中で、前回までに見た「行政行為」「行政立法」のいずれにも含まれないもの、とりわけ「契約」「行政指導」等、公権力の行使とは言えない、非権力的な法的性質を持った活動形式について説明する。	同　上
10	行政の実効性の確保	法令の定めや契約・行政行為等によって行政の相手方に一定の法的義務が負わされている場合、この義務が任意に履行されないときに、行政主体の側でこれを強制し本来の目的を達成するためには、どのような手段があり、又どのような法問題があるかを説明する。	同　上
11	行政訴訟　その１	行政活動が法令に違反して行われ、私人の法的利益を侵害することとなったとき、私人としては自らの利益を護るためどのようなことができるか、について概観し、まず、私人が裁判所に対し行政活動の非を訴え原状回復をめざす「行政訴訟」の制度につき説明する。	同　上
12	行政訴訟　その２	承前。我国現行法上行政訴訟制度はどのような仕組みを以て出来上っているかにつき、行政事件訴訟法の条文を手掛りとしつつ、詳しい説明を行う。	同　上
13	行政上の不服申し立て	前回までに見た行政訴訟制度の他にも、私人が行政活動の非を訴え自らの利益を護るためにとり得る手段は色々存在する。ここではそれらの中で最も重要な「行政上の不服申立て」について、行政不服審査法の規定を参照しつつ、その仕組みを説明する。	同　上
14	国家賠償法 その１	違法な行政活動によって私人の利益が侵害された場合、もはや原状回復が不可能であるようなときには、前回までに見た「行政争訟」の制度は余り意味を持たない。この場合、蒙った損害を金銭によって埋合わせる「国家賠償」の制度について説明を行う。	同　上
15	国家賠償法 その２	承前。我国現行法上の国家賠償制度を、国家賠償法１条及び２条の規定を参照しつつ概観する。時間に余裕があれば、いわゆる「損失補償」制度との関係等についても説明を加えることとしたい。	同　上

＝ 政 治 学 入 門 ＝ （R）

〔 主任講師：阿部　齊（ 放送大学教授 ）〕

全体のねらい

政治学の基礎概念とその相互の関連を明らかにすることで、政治学のより専門的な領域を学習するための出発点を作りたい。同時に政治家の入門的講義として、他の分野を学習する受講者にも、政治学のアウトラインがつかめるようにしたい。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	政治と権力	政治の機能 自治と統治 権力の特性 権威と正統性	阿部　齊 （放送大学教授）
2	国家の機能と諸型態	国家の機能と特性 国民国家 夜警国家と立法国家 福祉国家 行政国家 法治国家と立憲主義	同　上
3	政府の諸類型	現代政府の組織原理 権力分立と混合体制 議院内閣制 大統領制 ソビエト制	同　上
4	代表制と議会	国民代表と地域代表 二院制 議会制の機能 議会機能の転換 現代の立法過程	同　上
5	選挙と世論	選挙の意義 投票率の意味 多数代表制と小選挙区制 少数代表制と比例代表制 中選挙区制と定数不均衡	同　上
6	政党と政党制	政党の意義 政党の機能 政党の発展 二党制と多党制 政党とイデオロギー	同　上
7	利益集団の圧力活動	利益集団の台頭 圧力活動の役割 審議会制度 ロビイストと議会 コーポラティズム	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	官僚制と行政国家	官僚制の概念 管理者国家の成立 現代国家と政軍関係 大きな政府と小さな政府	阿部　齊
9	地方自治と市民参加	地方分権と地方自治 地方自治とコミュニティ 団体自治と住民自治 固有事務と委任事務 住民自治と住民運動	同上
10	民主主義と自由主義	民主主義の成立と発展 自由主義の論理 自由民主主義の形成 代表制民主主義の意義 参加民主主義の機能 平等化と平等主義	同上
11	政治体制と政治変動	政治体制と政治システム 自由民主主義体制 政治システムと政治文化 政治変動の諸形態 革命の意味と条件	同上
12	全体主義と独裁主義	市民社会から大衆社会へ 全体主義の意味 独裁と専制 軍部独裁体制 権威主義体制	同上
13	日本の政治	明治国家の前近代性 明治国家の近代性 戦後の民主主義 保守政党の統治体制 日本の政治的課題	同上
14	内政と外交	内政を動かす国外の要因 国内政治と国際政治 勢力均衡と古典外交 帝国主義とナショナリズム	同上
15	現代の国際社会	集団安全保障と集団防衛体制 核兵器と軍備管理 東西対立と南北格差	同上

＝ 経 済 学 入 門 ＝ （R）

〔 主任講師：嘉治元郎（ 放送大学副学長 ）〕

全体のねらい

我々の日常の経済生活に則して、現代の経済学の骨組みを概説する。家計、企業、政府という経済単位の活動について論じ、経済社会の構造を明らかにする。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	経済生活と経済学	経済学とは何か　人間の経済活動 取引の行なわれる場 ― 市場 消費財・サービスの市場　労働力の市場 企業の経済活動　家計の貯蓄　資本の市場	嘉 治 元 郎 （放送大学副学長）
2	家計の経済活動 Ⅰ 所 得	家計の経済力　家計の所得　家計の資産 資産と所得	同 上
3	家計の経済活動 Ⅱ 消費と貯蓄	所得の処分　可処分所得　貯蓄 消費と貯蓄　日本の貯蓄率　最適な消費支出 個別家計の消費と総消費	同 上
4	企業の経済活動 Ⅰ 財の生産	企業の経済活動　生産とは何か　生産の行程 生産活動の目的　費用と収入　物的資本の費用	同 上
5	企業の経済活動 Ⅱサービスの生産	財とサービス　サービスの重要性 サービスの種類　サービス生産の特色 公務と公共サービス	同 上
6	企業の経済活動 Ⅲ 金 融	金融機関の経済活動　利子とは何か 資金の需要と供給　お金の便利さと利子率 資産の組み合せ	同 上
7	貨 幣 －中央銀行の役割－	貨幣とは何か　金本位制　管理通貨制 通貨管理の目的　貨幣量管理の手段	同 上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	市場の機能	市場とは何か　　市場の種類　　価格の作用 需要供給の均衡　　市場機構の作用	嘉治元郎
9	経済社会の構造	巨視的（マクロ）理論と微視的（ミクロ）理論 集計された経済量　　一大家計の経済行動 一大企業の経済行動 粗投資gross investmentと純投資net investment	同　上
10	総需要と総供給 －雇用問題－	経済の動　　総需要と総供給　GNPの決定 投資の決定　　雇用水準の決定 過大な需要によるインフレーション	同　上
11	経済成長 －技術革新－	総供給能力　　供給能力の決定要因 総供給能力の拡大　　経済発展の諸要因 労働力の変化　　生産設備の変化　　技術の進歩	同　上
12	政府の経済活動 －財政支出－	混合経済体制　　財政支出の種類 財政支出の規模　　「小さい政府」をめぐる論議	同　上
13	政府の経済活動 －租　税－	政府の収入　　租税の種類　　税と所得の再配分 所得配分とその再配分　　財政収支 公債の負担	同　上
14	経済政策の目標	経済政策の役割　　独占の禁止 巨視的経済政策の目標　　完全雇用の達成と維持 経済の安定の実現　　経済発展の促進 巨視的経済政策の手段　　所得配分の公正化 適切な対外経済関係の実現	同　上
15	対外経済関係	対外経済関係とは何か　　対外経済関係の内容 国際収支表　　貿易の理論　　国際通貨 為替レートの変化　　生産要素の国際的移動 経済分析の国際化	同　上

＝ 経 済 社 会 論 ＝ （R）

〔主任講師：坂井素思（放送大学助教授）〕

全体のねらい

経済社会の基礎的な制度・基本的な観念が、どのように成立し、どのような点で問題となっているのか。その学説の考え方と現実に生じている事象との対応関係のなかで明らかにする。とくに、市場経済とはどのような制度なのかという点に焦点があるが、後半では、現代経済社会の多面的性格についても考察を行う。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	経済社会の発見 ―― 経済秩序はどこにあるか	経済社会の印象 経済社会の変化 経済秩序	坂井素思 （放送大学助教授）
2	経済問題の発生 ―― 不確実性について	不確実性とは何か 生存問題と不確実性 生産問題と不確実性 分配問題と不確実性	同 上
3	交 換 ―― なぜ交換を行うのか	交換の観念 経済的交換 社会的交換 相互性のエートス	同 上
4	貨 幣 ―― なぜ人は貨幣を使用するのか	貨幣は誰のものか 販売可能性と貨幣 流動性と貨幣 信頼と貨幣	同 上
5	利 子 ―― なぜ人は儲けようとするのか	利得観念 ウズラ論争にみられる利得観念 経済合理性と利得 利潤という利得観念	同 上
6	所 有 ―― なぜ財産を所有するのか	なぜ所有が問題になるか 所有の権原 労働と所有 所有ルールの経済的役割	同 上
7	市 場 ―― なぜ市場は存在するか	市場とは何か 市場の調整メカニズム 価格メカニズム 競争メカニズム 市場経済の特徴	同 上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	企業組織 ―なぜ企業は組織化されるか	組織とは何か 市場と企業 企業組織のヒエラルヒー	坂井素思
9	家計集団 ―なぜ生計を共にするか	家計とは何か オイコス経済 家計の形成原理 家計生産 ブーリング 家内性	同上
10	政府 ―なぜ政府は必要か	社会的統合 政府の役割 社会契約としての政府 黙約としての政府 政府の二面性	同上
11	福祉社会 ―経済的正義は何を基準とするか	アリストテレスの基準 功績本位と必要本位 必要本位と欲望 格差原理	同上
12	競争社会 ―経済的自由はいかに成り立つか	自由放任 消極的自由 積極的自由 強制と競争	同上
13	技術社会 ―経済進歩とはどのような状態か	経済進歩 適応的進歩 創造的破壊 新結合の遂行 技術進歩と経済進歩	同上
14	消費社会 ―なぜ人は財を求めるのか	消費社会とは 消費の意味 つくられた必要 みせびらかしの消費 消費の限界	同上
15	経済社会の目的 ―なぜ経済秩序は存在するのか	経済の目的 経済の目的と経済社会の目的 経済秩序再論 経済秩序の特性	同上

＝社会学入門＝（R）

〔主任講師：井上　俊（大阪大学教授）〕
〔主任講師：大村英明（大阪大学教授）〕

全体のねらい

社会学は間口の広い学問であり、きわめて多様なテーマを扱っているが、ここでは、その多様性の根もとにある社会学的な「ものの見方」を理解することにねらいを絞る。できるだけ具体的な事例に即しながら、社会学的な見方の面白さを伝えるような形で、話を進めたい。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	＜第1部・社会的存在としての人間＞ 社会のなかの人間	1. 社会学の前提 2. 「自分」の発生 3. 社会的知覚 4. 社会による型どり	井上　俊 （大阪大学教授）
2	文化と価値	1. 言語による世界構築 2. 意味秩序と文化的拘束 3. 文化と価値	大村英昭 （大阪大学教授）
3	集団と個人	1. 共同体と機能集団 2. 未分化と分化 3. 模倣＝欲望の世界 4. 集団参加の諸相	同上
4	知識と現実	1. 意味と社会 2. ＜私＞と社会 3. 社会学という知識	栗場久和 （関西大学助教授）
5	＜第2部・社会学の考え方＞ 自殺と社会 ―デュルケム	1. 社会学と自殺 2. 統計データの分析 3. 自殺と集合意識	大村英昭
6	宗教と資本主義 ―M.ウェーバーの社会学	1. 『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』 2. 利害状況と理念 3. 集合的動機と歴史の皮肉	井上　俊
7	自由からの逃走	1. E．フロムのナチズム研究 2. 権威主義的性格 3. 社会的性格の理論 4. 夫と妻の世界	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	潜在的機能の分析	1. デュルケムの犯罪論 2. 潜在的機能の概念 3. 予言の自己実現	井上　俊
9	場面と体面	―日常的相互作用の秩序 1. 演技者としての人間 2. 相互作用儀礼 3. 相互作用秩序の修復	同上
10	ストレンジャーの世界	1. 都市のライフスタイル 2. ストレンジャー・インタラクション 3. 関与と不関与	同上
11	＜第3部・社会生活と社会秩序＞ 家族のなかの世界	1. 家族の形態 2. 家族の機能 3. 親と子の世界	亀山佳明 （香川大学助教授）
12	逸脱と社会変動	1. 逸脱行動論 2. マートンのアノミー論 3. 社会変動論に向けて	大村英昭
13	社会病理現象 ―子ども問題を中心に―	1. コミュニケーションの病理 2. 学校教育の病理 3. 演技とラベリング	同上
14	統制と権力	1. 内面的制裁の原理 2. 交換と権力 3. 恥による権力	同上
15	＜社会学とは何か＞ ―結びにかえて	1. メガネとしての社会学 2. 集合主義の発想 3. 探偵としての社会学者 4. 皮肉な視線	井上　俊 大村英昭

＝ 比 較 社 会 史 ＝ （R）

〔主任講師：樺山紘一（放送教育開発センター教授）〕

全体のねらい

本講座では、世界史上における歴史文明にあって、社会的諸構成要素が、多様な様相と結合様式をしめすその形式を考察する。高度な文明と未開社会とのあいだにおける相違と類似とが、ともに明らかになるはずである。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	社会史と比較史	1. はじめに 2. 社会史とは何か 3. 比較史の課題	樺山紘一（放送教育開発センター教授）
2	自然環境と社会	1. 人間と環境 2. 気候と文明 3. 地勢 4. 生物相	同上
3	からだと人口	1. 人種 2. 人間のからだ 3. 生と死 4. 歴史と人口	同上
4	人生と家族	1. 男と女 2. 子供の地位 3. 家族の構造 4. 家産の承継	同上
5	社会集団の諸相(1)	1. ゲマインシャフト 2. 親族の構造 3. 共同体 4. ムラ	同上
6	社会集団の諸相(2)	1. 仲間と贈与 2. 盟約団体 3. ソシアビリテ 4. 身分と差別 5. 身分と団体	同上
7	農耕の発展	1. 旧石器文明の遺産 2. 作物 3. 水利技術 4. 農業革命 5. 労働の形態	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	商と工	1. 商い 2. 職人 3. 産業革命	樺山紘一
9	分業と協業	1. 性の分業 2. 階級という概念 3. 企業	同上
10	交通と情報	1. 物の輸送 2. 水路の優越 3. 人的移動 4. 情報とメディア	同上
11	都市の成りたち	1. 都市国家 2. 自治都市 3. 城下町 4. 空間構成 5. 街区と階層	同上
12	日常生活のありさま	1. 日常生活を論ずる　2. お茶とコーヒー 3. パンと米飯　4. 箸とフォークと手 5. サラダと刺身　6. ズボンと着物 7. ベッドと布団　8. 入浴と排泄 9. 散歩と昼寝　10. チェスとトランプ	同上
13	慣習と法	1. アジールとは何か 2. 慣習と慣習法 3. 中国の法 4. ローマ法の世界 5. ローマ法の受容	同上
14	国家と統治	1. 国家の相対化 2. フェーデ 3. 刀狩り 4. 租税について 5. ヨーロッパの税制	同上
15	祭儀と宗教	1. 祭儀の場 2. 巡行 3. 価値の逆転と確認 4. 世俗儀式 5. 通過儀礼 6. セクトの緊密さ	同上

＝民　俗　学＝（TV）

〔主任講師：宮田　登（筑波大学教授）〕

全体のねらい

現代社会の伝統的な民俗文化は大きく変貌しつつある。一方、都市には新しい民俗も形成されるし、いわゆる民俗の再生産の現象もある。日常生活文化の具体的な姿を通して、日本文化の多様な面を民俗学の視点からとらえていきたい。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	民俗学の成立と発達	民俗学は、伝統的な日常生活文化を研究対象として、日本文化の深層を究明しようとする学問である。私たちの身近にあるいい伝えや民具などを素材にして歴史的世界を再構成する方法や意義についてとり上げる。	宮田　登（筑波大学教授）
2	日本民俗学の先達たち	江戸時代の本居宣長、平田篤胤、菅江真澄、屋代弘賢などの系譜をひきつつ日本民俗学を創立した、柳田国男を軸に、南方熊楠、折口信夫、中山太郎、渋沢敬三らの業績をとり上げる。	同　上
3	常民と常民性	日本民俗学の基礎概念となった常民の性格について、いくつかの学説を紹介する。さらに日常生活文化の変容の中で常民性の概念が一般化していることや、近年の「非常民」の位置づけにも言及する。	同　上
4	ハレとケそしてケガレ	ハレとケは常民と並ぶ日本民俗学の基礎概念である。その具体例を、日常生活の表象である衣食住のあり方から説明する。また近年ハレとケの媒介項としてケガレの概念が導入されるようになった動向についても言及する。	同　上
5	ムラとイエ	日本の民俗文化の重要な基盤であるイエを建物としての家そしてそこに展開する家族生活、イエ連合としてのムラの成り立ちやその特徴を、東日本と西日本の差異などに留意しながら、概観する。	同　上
6	稲作と畑作	水田稲作農耕と対置される畑作文化の存在を強調した坪井洋文の学説を、餅なし正月を例として説明し、稲作と畑作の問題を通して日本の民俗が、東アジア文化の中で位置づけられるべきことを説明する。	同　上
7	山民と海民	民俗文化の一方の担い手である非農業民たちの存在を、マタギ、木地屋、漁民をはじめその他の職人たちを含めて概観する。とくに非農業民の漂泊性が、定着民に強い刺激を与えたことを説明する。	同　上

回	テーマ	内容	担当講師 （所属・氏名）
8	女性と子ども	民俗の重要な担い手である女性と子供のもつ文化創造力に注目する。とくに女性でも家の主婦のあり方を中心に、家の祭り、子供の行事などを通して、民間伝承の中で語られている女性と子供のもつ力を考察する。	宮田　登
9	老人の文化	女性、子供と並び、老人のもつ民俗文化をとり上げる。日本の伝統社会に見られる長老制を支えている宮座の行事、うばすて伝説などで語られる老人の知恵などから、老人文化のもつ意味を考える。	同上
10	交際と贈答	社交や贈答は、人間関係を円滑にする機能をもっている。日本の社会に民俗化している贈答の機会である冠婚葬祭の事例を通して、つきあいや贈答から生じてくる人間関係の特徴などについて言及する。	同上
11	盆と正月	日本の年中行事は正月と盆とに二分される。正月は典型的な神祭りの月で、各家に祖霊が来訪するが、同様な構造が盆の時期にも見られる。正月と盆に集約される日本人のカミやホトケに対する考え方を通して、年中行事の特色を探る。	同上
12	カミとヒト	日本人のカミ観念は、もっぱら人間側のニーズによって形成されている。氏神や産土神、流行神、勧請神、漂着神など多量のカミやホトケが日常生活の中で発見されるが、これらは日本の伝統的アニミズム観念の上に成り立っていることを説明する。	同上
13	妖怪と幽霊	人間の怨霊、御霊、また動物・植物霊などから祟りが発生し、妖怪や幽霊になる。これらは民俗宗教の上では否定できない。こうした怪異現象を生み出している基盤は何であるのかを考えたい。	同上
14	仏教と民俗	外来宗教である仏教が民俗化した情況を、彼岸、4月8日などの儀礼行事を通して説明する。これらは教団仏教とは異なり、民俗化した仏教儀礼であり、神仏が習合して生みだされた民俗文化であることそして東アジアの仏教文化圏の中でとらえられることを説明する。	同上
15	都市の民俗	日本各地には都市化した生活環境が拡大している。また各地の都市には伝統的な都市民俗が成長している。日本の都市がつくり出した都市民俗の実態を、欧米の都市民俗と比較しながら考えていく。	同上

＝日本経済と産業と企業＝（TV）

主任講師：小林靖雄（元放送大学副学長）
主任講師：磯部浩一（聖学院大学教授）
主任講師：宮沢健一（一橋大学名誉教授）

全体のねらい

日本経済の国際的地位は最近数年の間に大きく変化し今や世界一の債権国となり、貿易摩擦などの難問に直面し、進むべき方向を真剣に捜索している現状にある。転換期にある「日本経済と産業と企業」の動きを、自分の眼で見、自分の頭で考えるための分析の用具や、枠組みを提供するのが本書のねらいである。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	日本経済の国際的地位	1. はじめに —「日本経済と産業と企業」の狙い 2. 1970年代以降の諸変化 3. 国際的地位を示す指標 4. 諸変化の意味するもの	磯部浩一 （聖学院大学教授）
2	経済の実態把握の方法	1. 方法を取り上げる理由 2. 研究の目的 3. 研究の対象 4. 変化する実態へのアプローチ 5. 方法と価値	同上
3	日本経済の歴史的展開	1. はじめに 2. 日本経済の100年 3. 世界経済の変動期 4. おわりに	同上
4	日本経済の現状 —国民経済計算による	1. はじめに 2. 新SNAについて 3. 新SNAによる日本経済の現状	同上
5	経済基盤の変動	1. はじめに 2. 経済基盤の変動 3. 基層・中層・表層間の変動メカニズム 4. むすび	同上
6	産業経済のとらえ方	1. 活動単位としての産業の二面性 2. 産業経済の分析方法の類別 3. 産業機構の作動と産業政策	宮沢健一 （一橋大学名誉教授）
7	産業構造と経済発展	1. 産業発展の経験法則 2. 工業化と産業構成の変動 3. 産業発展と国際的環境	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	産業連関の仕組み	1. 産業間の連結の型とはたらき 2. 産業間波及と最終需要の構成 3. 日本の産業連関の変貌	宮沢健一
9	産業組織の成り立ち	1. 産業活動と市場および企業 2. 有効競争と企業への公共政策 3. 日本の産業組織の動態	同上
10	産業社会と経済体制	1. 産業社会の機構評価の着眼点 2. 日本の産業発展の体制的側面 3. 産業活動と制度の枠組み	同上
11	企業経営の歴史的展開	1. 日本企業の経営特質の形成 2. 財閥本社の成立と資本支配 3. 終身雇用と年功序列型賃金制度の成立 4. 科学的管理の導入 5. 管理会計の整備 6. 中小企業の下請的利用 7. 稟議制度による意思決定	小林靖雄 （元放送大学副学長）
12	日本企業の国際比較	1. 国際競争力の要因 2. 高度の技術・製品開発力 3. 設備の近代化投資 4. すぐれた人的能力とその育成 5. 経営管理力の充実 6. 諸要因の労働生産性と収益力強化への結実	同上
13	企業の多国籍比	1. 海外直接投資の動向 2. 海外企業の状況 3. 海外日本企業の経営管理 —日本的経営との関係 4. 国際的企業経営のあり方	同上
14	日本的経営とその変化	1. 戦後の日本経営の変貌と職務給 2. 年功型賃金の修正 3. 近代的経営管理と経営土壌—職場集団主義 4. 労使関係における協調主義 5. 日本的経営の長所と国際性	同上
15	日本経済と産業と企業の今後の動向と課題	1. 構造変動から構造調整へ 2. 産業経済の変容の方向と課題 3. 経営管理の発展と環境変化への適応	小林靖雄 宮沢健一 磯部浩一

＝経　営　総　論＝（R）

〔主任講師：栗山盛彦（千葉大学教授）〕

全体のねらい

今日の高度産業社会の中核的組織である「経営（企業）」について研究する場合の基礎的な考え方や概念をできるだけ平易に、包括的に示したい。とくに専攻「産業と技術」という特定の諸専門科目を考慮に入れて、それらと有機的な関連をもたせるように工夫する。新しい時代的要請である技術革新や国際経営にも重点を置く。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	現代の社会と経営	1. はじめに 2. 新しい社会、新しい経営 3. 現代経営の特徴とその志向性	栗山盛彦 （千葉大学教授）
2	経営と経営学	1. 経営とは 2. 経営学の対象としての経営 3. 経営の本質を究明することの必要性 4. 経営の本質へのアプローチ	同　上
3	経済的な経営理論	1. 経済的な見方による経営 2. 「経営の経済」における基本原理 3. 「経営の経済」の活動過程	同　上
4	経営と事業　(1)	1. 事業志向経営の成立 2. 資本と経営の分離 3. 経営の社会的存在意義の意識化	同　上
5	経営と事業　(2)	1. 経営の社会的な見方 2. 社会的な見方をビルド・インした経営理論（「経済・技術的システム－社会的システム」を基礎とする諸理論） 3. 経営二重システム論（「経済・技術的システム」－「社会的システム」） 4. 経営三重・四重システム論	同　上
6	経営目的	1. 経営目的の意義 2. 経営理念について 3. 経営目標について	同　上
7	経営職能の基礎	1. 「事業の営み」としての経営職能 2. 経営基本職能　－維持職能と成長職能との複合的な関係と指導原理 3. 経営維持職能とこのための経営管理活動 4. 経営成長職能とこのための経営管理活動	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	経営管理	1. 2つの経営管理 2. 「人間努力の結集」としての経営管理 3. 「事業遂行」としての経営管理	栗山盛彦
9	経営組織	1. 経営組織の意義 2. 経営組織の基本要素 3. 経営組織の構造	同上
10	経営の成長理論	1. 経営成長に関する2つの見方 2. 初期の2つの古典的経営成長論 —有機的成長過程論と機械的成長論 3. 現代の経営成長論	同上
11	現代の経営計画思想	1. 未来志向的・形成的な経営計画態度 2. 未来志向メンタリティーと経営予測 3. 事業形成メンタリティーと戦略的経営計画	同上
12	新規事業形成と研究開発	1. 新規事業の形成論理 2. 研究開発による新規事業の形成 3. 総合事業経営戦略	同上
13	国際経営論 (1)	1. 現代経営の国際化 2. 国際経営化にともなう対象市場志向性の推移と事業世界観 3. 国際経営の業種別特性と進出動機	同上
14	国際経営論 (2)	1. 国際経営戦略 2. 国際経営の海外事業会社所有関係 3. 現代世界の代表的国際経営－多国籍企業 4. 国際合弁会社の経営－日本の代表的国際経営形態	同上
15	21世紀の経営ビジョン	1. 模倣から創造へ 2. 日本・米国・ドイツの経営 3. 新しい経営ビジョン構築上の問題点 4. 日本経営の未来ビジョンと世界への寄与	同上

＝会　計　総　論＝（TV）

〔主任講師：江村　稔（東京大学名誉教授）〕

全体のねらい

この講義は企業会計の「しくみ」と「はたらき」のあらましを学ぶことを目的とする。企業会計における会計処理は複式簿記として特色づけられるので、これを説明するが、会計処理は期間損益の算定という目的をもつので、その諸相についてもとりあげよう。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	決算書とその役割	企業会計の所産である貸借対照表と損益計算書は株式会社の定時総会に提出され会社の財産と損益の状況（財政状態と経営成績）を報告する役割をもっている。そこでまず、決算書としての貸借対照表と損益計算書について述べる。	江　村　　稔 （東京大学名誉教授）
2	複式簿記と複式記帳	複式簿記は左右両欄式の２つの勘定の間で行われる借方（左側）と貸方（右側）の同額記入としての複式記帳によって特色づけられる。この複式記帳を経済活動のもつ２面性に注目して説明する。	同　　上
3	複式記帳の法則	複式記帳は一定のルールに従って行なわれる。このルールは必ずしも理論的に設定されたものではないが、ぜひとも記憶しておかねばならないものである。	同　　上
4	決算のしくみ	各勘定の残高を借方・貸方の別に従って、１つの勘定にまとめると、その借方と貸方の合計額は一致する。この特長を用いて、記帳と計算の検証がなされるほか、勘定の締め切りとしての決算が完了し、決算が作成されるのである。	同　　上
5	損益計算書の様式	損益計算書に設けられている各種の区分、および、その区分ごとに示される各種の損益につき説明し、また、損益計算書の末尾に当期末処分利益が記載されることを明らかにする。	同　　上
6	利益の処分と留保	損益計算書の末尾に当期未処分利益が記載されることになっている。当期未処分利益は株主に対する配当など、会社が処分することができる利潤を示すものであるが、同時に、この未処分利益の増減計算書を知る必要がある。	同　　上
7	貸借対照表の様式	貸借対照表に設けられる各種の区分について述べるが、この場合、もっとも重要な問題として、流動・固定分類につき詳説しよう。	同　　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	損益計算の原理と方法	ある期間の損益は、その期間の収益からこれに対応する期間費用をさしひくことによって計算される。この計算のもつ理論的な意味について考えてみよう。また、期間収益と期間費用の決定にあたっては、発生主義と呼ばれる考え方がとられるが、現金主義との差を明らかにしながら、その意味につき説明を加える。	江村　稔
9	売上高と売上原価	企業の収益は、売上高から売上原価を差し引くことによって売上総利益または売上総損失として求められる。そこで売上高と売上原価の決定についての問題点を取り扱う。	同　上
10	棚卸資産の貸借対照表価額	商製品の貸借対照表価額は取得原価によるといわれているが、この金額は取得価額から払出価額を減じて求められる金額に期末修正を行ったものと解される。	同　上
11	固定資産の貸借対照表価額	固定資産の貸借対照表価額は、取得価額から減価償却累計額を減ずることによって求められる。取得価額もしくは取得原価の期間配分としての減価償却を中心として説明しよう。	同　上
12	繰延資産とその償却	企業による支出には、その効果が将来の数週間におよぶものがある。期間損益計算では、このような金額は数期間にわたる費用として扱われるが、このための会計技法として繰延資産の計上と償却が行われる。	同　上
13	引当金の設定	企業会計では、将来に生じる事象の金額を、あらかじめ期間費用として計上する処理としての引当経理が、例外的に認められている。引当経理が行われる条件は、きわめてきびしいが、この章では、これらの問題を論述する。	同　上
14	企業内容の開示と財務報告	有価証券報告書の主要部分をなす財務諸表については大蔵省令である財務諸表等規則が適用される。そこで、いわゆるディスクロージャーの諸問題を説明しよう。	同　上
15	財務諸表の監査制度	会社が作成し公表する決算書もしくは財務諸表については、監査役や公認会計士による監査が行われる。この章では、商法特例法と証券取引法による規制を説明する。	同　上

＝現代の数学観＝（R）

〔主任講師：前原昭二（放送大学教授）〕

全体のねらい

数学史のなかから、現代の数学観の形成に強く関係していると思われる事項のみをとり上げ、現代の数学者の大多数がもつ「数学に対する考え方」を解説する。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	論証的数学の起源	タレス　ピタゴラス　黄金分割　無理数　幾何学を知らざるものはこの門に入るべからず	前原昭二（放送大学教授）
2	ユークリッド原論 I	『原論』の著者　ユークリッド原論　原論における証明の性格原論における「命題」命題20の証明のあらすじ	同上
3	ユークリッド原論 II	ユークリッド原論の構成　定義　公準（要請）公理（共通概念）　平行線の公理（＝第5公準）「平行線の公理」の通常の表現　3角形の内角の和	同上
4	非ユークリッド幾何学	非ユークリッド幾何学　3角形の内角の和　リーマンの研究　球面上の幾何学	同上
5	非ユークリッド幾何学の無矛盾性	サッケリの研究　ガウスの研究　ベルトラミのモデル　リーマンの非ユークリット幾何学のモデル　クラインのモデル	同上
6	ヒルベルトの幾何学基礎論	非ユークリッド幾何学の統合的理解　リーマン幾何学　ユークリッド原論の立場の再検討　ヒルベルトの『幾何学基礎論』　ヒルベルトの公理主義　抽象数学	同上
7	アインシュタインの『幾何学と経験』から	アインシュタインの「幾何学と経験」　物理法則と数学との違い　公理主義の数学　自然科学に使われている数学	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	虚　　数	虚数の必要性　複素数　複素数の計算　コーシーによる複素数の定義　ハミルトンによる複素数の定義　複素数についての計算法則	前　原　昭　二
9	無　理　数　論	無理数　無理数の必要性　無理数論　有理数の切断　有理数の切断の例　無理数の定義　実数の連続性	同　　上
10	整数と有理数	整数の定義　有理数の定義	同　　上
11	デデキントの自然数論	ユークリッド幾何学の無矛盾性　一連の無矛盾性証明　自然数　ペアノの公理　ペアノの公理の無矛盾性	同　　上
12	ラッセルの数理哲学	論理主義　公理主義数学における論理　論理の公理化　ハーンの見解　要約	同　　上
13	集合論のパラドックス	カントンの集合論　集合論的数学観　集合論のパラドックス　ラッセルのパラドックス　フレーゲ宛のラッセルの手紙　意味論的パラドックス	同　　上
14	数　学　基　礎　論	ラッセルのパラドックスの分析　論理主義　直観主義　形式主義	同　　上
15	数　学　の　現　状	記号論理学　公理的集合論　数学の現状	同　　上

＝基礎数学Ⅰ＝(TV)

〔主任講師：前原昭二（放送大学教授）〕

全体のねらい

高等学校の微積分に引き続いて、微積分の初等的部分を講述する。計算法に主眼をおくが、最後に、微積分を論理的に構成する筋道の概略を説明する。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	逆三角関数	逆関数　逆正弦　逆余弦　逆正接　逆三角関数　逆三角関数の微分法　逆三角関数になる不定積分　問題	前原昭二（放送大学教授）
2	微分	無限小　高位の無限小　ランダウの記号　微分　置換積分法への応用　$x=a\sin\theta$とおく置換積分　微分の性質　問題	同上
3	有理関数の不定積分	分子の次数を分母の次数より小さくする　分母が異なる1次因数に分解される場合　分母が1次式の累乗になる場合　分母を微分すると分子になる場合　分母が因数分解できない2次式の場合　一般論（その1）　一般論（その2）　問題	同上
4	微分方程式	1階定数係数同次線形微分方程式　定数変化法　2次の行列式　2階定数係数同次線形微分方程式の一般解　特性方程式　定理3の証明　定数変化法（2階の場合）　問題	同上
5	定積分の定義の拡張	本来の意味での定積分　微分積分法の基本定理　第1種の広義積分　第2種の広義積分	同上
6	平均値定理	微分法における平均値定理　平均値定理の表現法　積分法における平均値定理　コーシーの平均値定理　$\frac{0}{0}$という形の極限値　$\frac{\infty}{\infty}$という形の極限値　問題	同上
7	偏導関数	偏導関数　高階の偏導関数　2変数関数の極限・2変数関数の連続性　全微分可能性　全微分　合成関数の微分法　問題	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
8	重　積　分	立体の体積（その１）　立体の体積（その２）　２重積分　楕円体の体積　重積分　問題	前原昭二
9	重積分の変数変換	２次の行列式の幾何学的意味　典線座標　２重積分の変数変換　問題	同　上
10	テイラーの定理	テイラーの近似式　極大極小への応用　テイラーの定理　問題	同　上
11	無　限　級　数	無限級数　正項級数　絶対収束　問題	同　上
12	ベ　キ　級　数	テイラー展開　ベキ級数　項別積分　２項定理　収束半径	同　上
13	平　面　曲　線	媒介変数方程式　典線の長さ　導関数を表わすニュートンの記号　典率　典線 $y=f(x)$ についての公式　円の伸開線	同　上
14	極　限　の　定　義	直観的な定義に対する反省　数列の極限　関数の極限　関数の連続性　その他の極限の定義	同　上
15	微積分の論理的構成	連続関数の性質　微分法の平均値定理　微分積分法の基本公式の証明　積分法の平均値定理　原始関数の存在定理の証明　平均値定理のその他の効用	同　上

＝ 線形代数学 ＝（TV）

〔主任講師：長坂建二（法政大学教授）〕

全体のねらい

ベクトル・行列・一次変換を初歩から解説し、線形代数の基本を直観的に把握する。また、行列論の鍵となる固有値・固有ベクトルを、2次形式の応用面より幾何学的に理解を深めると共に、線形空間の直和分解とスペクトル分解との対応を示し、一次（線形）変換の重要性を認識させ、実社会への応用例についても触れる。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	ベクトル	大きさと方向をもつ量であるベクトルを、実例と共に導入し、和・差・スカラー積の演算の意味を理解する。次いで、ベクトルの内積・外積を定義し、その幾何学上の意味を説明する。ベクトルの効用として、初等幾何の難問のベクトル解法を紹介する。	長坂建二（法政大学教授）
2	行列	2次及び3次の正方行列を定義し、和・差・スカラー積を導入する。次いで、乗法を定義し可換でないことを注意する。また、単位行列、零行列、逆行列を定義し、連立一次方程式の解との関連を見る。一方、行列の巾乗と、ハミルトン・ケーリーの定理を紹介する。	同上
3	一次変換	平面上や空間内の一次（線形）変換が行列で表現できることを示し、点（線）対称移動、回転等の実例を示すと共に、基本的な性質を説明する。また、不動直線を例として、固有値と固有ベクトルについて2直観的な理解を求める。	同上
4	ベクトル空間	n次元数ベクトル、及びn次元ベクトル空間を導入し、1～3章の議論を一般化する。次いで、ベクトル空間の基底と次元について述べる。また、部分ベクトル空間の定義と基本的な性質や、その直和についても言及する。	同上
5	図形のベクトル表現	直線、空間の方程式とベクトル方程式を示し幾何学的な関係をベクトルで表現する。また、2次、3次、4次の行列式を定義し、図形の体積等が表現されることを示し、線形代数の有用性を説明する。	同上
6	行列の基本変形と階数	与えられた行列に、基本変形を施して標準形に変形できることを示し、標準形から行列の階数（ランク）を定義する。応用例として、逆行列の求め方、連立一次方程式の解の性質、一次(線形)変換の次元定理等を示す。	同上
7	直交行列と合同変換	特別な形をした行列の例として、対角行列、三角行列、対称行列、交代行列等を紹介する。また、合同変換を記述する行列は直交行列であることを示し、抽象代数の一部門である群論の有効性に言及する。	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	置換と行列式	置換とその実用例であるアミダくじについて簡単に解説する。次に、置換を用いて一般の正方行列の行列式を定義し、2次～4次の行列の行列式の場合の拡張となっていることを示す。さらに、行列式の基本的な性質と行列の階数の新たな定義を与える。	長坂建二
9	2次形式と2次曲線	対称行列を用いて、2次形式を表現する。次いで、2次曲線を2次形式より定義し、標準形への変換方法を特別な場合について解説し、固有値、固有ベクトルの幾何学的な意味を学ぶ。また、各種の2次曲線の例について述べる。	同　上
10	2次曲線の分類	与えられた2次曲線を、座標変換により標準形に直す一般論を展開する。その際、座標変換に対する不変量から2次曲線が分類されることを示す。	同　上
11	2次曲面とその分類	2次曲線の標準形を紹介し、様々な2次曲面とその性質（線織面、切断面等）を解説する。次いで、2次曲線の場合と同様に直交行列により標準形に変換するやり方を説明し、不変量による分類を与える。	同　上
12	固有値と固有ベクトル	1次変換の固有値、固有ベクトルを導入し、直交性等の基本的な性質を線形空間と行列の両方により表現する。また、固有多項式、固有方程式、最小多項式、ハミルトン・ケーリーの定理、巾等行列等について触れ、対称行列の直交行列による対角化可能性を示す。	同　上
13	射影と一次変換のスペクトル分解	射影変換の性質を示し、線形空間の直和分解との関連を示す。次いで、射影変換と巾等行列、固有ベクトルの直交性と固有空間への射影変換を通じて、対称行列の直交行列による対角化とスペクトル分解が対応することを示す。	同　上
14	線形空間の複素数	固有値を考える範囲は複素数まで考えざるを得ないのに、今までの線形空間は実ベクトル空間であった。そこで、線形空間を複素化して、複素固有値に対応できるようにして、同時に1次変換も複素化する。	同　上
15	一般固有値問題	一般の行列を標準形に直す場合には、対角化可能とは限らないので、一標固有空間を導入し、一般スペクトル分解について論ずる。つまり、行列のジョルダン標準形であり、単因子論との関連についても若干触れておく。	同　上

＝確　率　論＝（R）

〔主任講師：清水良一（統計数理研究所教授）〕

全体のねらい

確率論は偶然現象を記述するための一つの数学的手段である。偶然現象というのは現実に起るのか起らないのか起るとすれば何時どのような形で起るのかということが予測出来ない、という意味でのでたらめさをもっているものをいう。このような現象も一定の条件下で観察を続けていると発生の仕方に一定の法則性が現われて来る。それを見るためには現象を適当にモデル化しなければならないことを説き、その方法と効用を述べる。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	確率とは何か	1. 確率の意味 2. 先験確率と経験的確率	清水良一 （統計数理研究所教授）
2	偶然現象の不規則性と規則性	1. 乱数 2. 硬貨投げの実験 3. 度数分布とヒストグラム	同上
3	偶然現象の記述	1. モデルの利用 2. 標本空間 3. 確率事象	同上
4	確率空間	1. 離散型の確率空間 2. 組合せの数 3. 一般の確率空間	同上
5	つぼのモデル	1. つぼとボール 2. 2項分布 3. 超幾何分布	同上
6	公平な賭け	1. 賭け金の配分 2. 聖ペテルスブルクのパラドクス 3. 宝くじの価値	同上
7	条件つき確率	1. 確率の加法性と連続性 2. 条件つき確率 3. 乗法公式とその応用	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	事象の独立	1. 全確率の公式 2. ベイズの定理 3. 事象の独立	清水良一
9	独立試行	1. 同時分布と周辺分布 2. 独立試行 3. 重複試行	同上
10	確率変数とその分布	1. 確率変数 2. 分布関数 3. 確率的シミュレーション	同上
11	ド・モアブル＝ラプラスの定理	1. 2項分布の特性値 2. ベルヌウイの定理 3. 2項分布の正規近似	同上
12	期待値	1. ポアソン分布 2. 格子型分布の期待値 3. 確率母関数の利用	同上
13	大数の法則	1. 連続分布 2. 待ち時間 3. 大数の法則	同上
14	正規分布	1. 独立な確率変数の和 2. 中心極限定理 3. 正規分布	同上
15	互いに独立でない変数の系列	1. マルコフ系列 2. マルコフ連鎖	同上

＝統　計　学＝（R）

〔主任講師：長坂建二（法政大学教授）〕

全体のねらい

統計データの整理の仕方として、ＥＤＡの手法や伝統的な平均・分散・相関関数等の計算の仕方や性質を紹介し、その一例として暗号解読を考える。後半は、主として正規母集団に対する推定・検定論を標本分布論の基礎の上に展開するが、ベイズ推論や統計的決定理論の一端にも触れ、統計学の意義や将来への展望を考える。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	統計学への招待	統計学の歴史を古代から近代に渡って概観し現在の統計学につながる大量データから一定の法則を発見する基本的な考え方を紹介し、ケトレーによる近代統計学の成立とその行き過ぎを説明し、統計学とは何かを考える。	長坂建二（法政大学教授）
2	資料の整理	統計学データを整理するための基本的な手法を学ぶ。ＥＤＡの手法から、幹葉表示と要約表示の作成と利用法を実例とともに示す。また統計で扱う「変数」の一般的な概念について、及び度数分布、累積度数分布、パーセント点、などについて学習する。	美添泰人（立正大学教授）
3	位置と散らばりの尺度	統計資料を整理した後に、その全体的な状況を説明する数字として、平均、中央値、最頻値などの位置の尺度の計算の仕方と性質、及び最大値、最小値、範囲、分散などの散らばの尺度、さらに尖度、歪度について述べる。	長坂建二
4	関連の尺度	二つの量の間の関連を見るための手段として質的変数に対する分割表、量的変数に対する散布図・相関係数、回帰直線の計算法と、最小二乗法を通じての解釈を説明する。また、分割表の関連度や因果関係と相関関係との差異についても言及する	同上
5	データの変換	データの構造をより明確に理解するための手段として、データの変換という手法について学ぶ。度数分布の対称化、散布図の線形化、時系列データの移動平均値について、例とともに解説する。また、外れ値とその処置についても言及する。	美添泰人
6	ベイズの定理	数学的には極めて単純なベイズの定理は、統計学においては深い内容をもつこと、そして事前確率や事後確率の考え方を紹介し、それが因果推論などに役立つことを示す。	松原望（東京大学教授）
7	暗号と統計推論	文字の出現頻度を理論頻度と比較して、古典的な換字暗号の解読に統計手法が適用可能であることを示すとともに、最近の暗号システム、特に公開鍵暗号法を紹介し、統計手法の限界について論ずる。	長坂建二

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	母集団と標本	統計学の基本的な枠組みである母集団を確率論の上に構成し、統計モデルの考え方を導入する。また、標本も確率論の言葉で定義し、統計推論のパラダイムを確定する。さらに、計数型品質管理技法より、離散分布の例を与えると共に、モデル化の実例をＯＲより紹介する。	長坂建二 牧野都治 （東京理科大学教授）
9	統計量と分布　Ⅰ	測定誤差という見地から正規分布を考え、それが統計学の理想上の分布であることをみた上で、χ^2分布、t分布、F分布と導入してゆく。統計学（数理統計学）の中では、基本的部分である。	松原望
10	統計量と分布　Ⅱ	標本平均と標本分散の性質を、平均演算の性質より示すと共に、重要な極限定理や有限母集団補正について説明する。また、前章の結果に対して数学的に厳密な証明を与える。	長坂建二
11	統計的推定論	不偏・一致・十分・有効などの推定量の性質を紹介し、点推定についてのべる。また、最尤推定量の考え方を説明する。さらに、信頼正間の求め方と正規母集団に対する例を与える。	同上
12	統計的検定論	統計的仮説検定論の考え方と枠組を示し、正規母集団を仮定して平均、分散に対する検定の原理と計算法を解説する。また、独立性の検定、相関係数の検定についても計算法を与える。	同上
13	ベイズ推論	ベイズ的な統計推論についての基本的な考え方を紹介する。ベイズの定理の意味について再考し、主観確率がなぜ必要なのかを解説する。つづいて比率と平均についての応用を示し、最後に非ベイズ的手法の理論的な問題点にも触れる。	美添泰人
14	統計的決定理論	戦略的思考としての統計的決定の理論であり不確実性下での意思決定であることをみたのち、ベイズの定理を用いてデータを取り込む過程を、わかり易く解説する。日常の決定で決しかねる場合も、これによれば一応の解決を見る。	松原望
15	統計学の将来	1) パレート分析の手法とその実例を紹介しＯＲの面から統計学の将来を語る。 2) コンピューターの利用が不可欠となることと、統計教育の将来について。 3) 探索的データ解析と統計手法の頑健法。 4) 統計学の社会的役割について論ずる。	牧野都治 美添泰人 松原望 長坂建二

＝ 物 理 の 世 界 ＝（TV）

〔主任講師：戸田盛和（東京教育大学名誉教授）〕

全体のねらい

自然は面白さと不思議さに満ちている。この面白さと不思議さとの出合いを大切にしよう。自然現象のさまざまな面を物理学の目を通して考えていこう。科学にとって基礎的な事柄、人間の思考方法、社会、技術との関係、空間と時間の概念、物質と重力と宇宙などの本質的な問題にも触れる。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	月と人工衛星	近代の科学は、身近かな現象に注目することから出発した。現代の私達にとって身近かな物理現象は大変豊かになった。たとえば、月はなぜ落ちてこないのか、人工衛星は月と同じように運動しているのだろうか、などという問いから出発しよう。	戸田盛和（東京教育大学名誉教授）
2	運動を見る	地上における落体や放物体の運動を調べたガリレイ。太陽系という広い空間における月や惑星の運動を解明したニュートン。運動の法則と力学の方法の確立は、その後の科学の基礎となった。	同上
3	光と影	光の進み方、反射、屈折はよく知られたことであるが、カメラのレンズ、めがねなど、幾何光学に関係した現象は極めて多い。	遠山紘司（文部省教科書調査官）
4	音の世界	音は空気を伝わる振動であり、私たちは音の世界に生きている。管中の空気や弦の固有振動に応じて楽器は固有の音を出す。共振、ドップラー効果など、振動と波動の基本についても音はわかりやすい例を与えてくれる。	同上
5	音のいろいろ	朝日や夕日はなぜ赤く、空はなぜ青いのだろう。虹やシャボン玉などはなぜ色づいて見えるのだろう。白熱電球と螢光灯の光はどうちがうのだろう。カラー写真、カラーテレビなども含めて、色との出合いをいろいろ考えよう。	同上
6	水と空気	水にもぐると約10mに1気圧の割りで圧力を受ける。大気の圧力は空気の重さによるものである。船の浮力、圧力の伝達、空気などの気体の性質を調べ、気体の圧力と温度の関係なども考察して、分子運動に言及する。	戸田盛和
7	氷と水	水は水蒸気になったり、水になったりする。このように多くの物質は、気体・液体・固体という、いわゆる物質の三態の変化をする。雪などの結晶は原子や分子の規則正しい配列を示している。	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	エントロピーとは	気体は放っておけば広がる性質をもっている。熱は温度の高い方から低いところへ流れる。このように自然の変化にはある向きへ進む性質がある。これに関してエネルギーとエントロピーについて考えよう。	戸田盛和
9	静電気と電池	乾燥した天気のときは、自動車のとっ手などにふれるとバチッと静電気のショックを感じることがある。静電気の話からはじめて、電気がまわりに及ぼす力の場や電流などについて考察する。	遠山紘司
10	家庭の電気	電池は直流の電源であるが、家庭で使っている100ボルトの電気は交流である。直流と交流の性質、利用のちがいを明らかにする。また家庭で使われている電気器具やIC、LSIなどの半導体素子についても触れる。	同上
11	磁石と電磁石	磁石の作用は、磁気カード、カセットテープ、ビデオなどに極めて広く用いられている。もっと広く見れば、地球の磁場もあり、発電気、モーターなども磁気の作用を利用した装置であり、超電導など磁気に関係した技術の応用はますます開けていく。	同上
12	原子の世界	物体の色や、螢光灯のように物質が出す光も、静電気や磁気も、すべて物質を作っている原子によるものである。原子はどんな構造をもっているのか、化学的性質はどこからきているのか、などについて学ぶ。	戸田盛和
13	エネルギーの粒	光がエネルギーの粒からなることが明らかにされ、原子の構造と原子の出す光の研究から現代の物理学とよばれる量子力学が誕生した。原子の化学的性質も量子力学によって明らかにされた。	同上
14	時間とは何か	科学は常識から出発し、常識が間違いであることがわかれば、これを改める。空間と時間について、私たちは常識的によく知っていると思っていたが、これを改めたのはアインシュタインであった。	同上
15	私たちの宇宙	アインシュタインはさらに物理学の中心的課題である重力に対する基本的な考察に進んで、一般相対性理論を構築した。ニュートン以来の宇宙観はこれによって一掃されたのであった。科学の方法を反省し、物理学の最先端の状況と将来に対する展望を述べる。	同上

＝ 基 礎 化 学 ＝（TV）

〔主任講師：平川暁子（放送大学教授）〕

全体のねらい

地球上はもとより、行くことのできない宇宙にも各種各様の物質が存在することが分かっている。これらの物質の本性を統一的に解釈するのが現代の化学である。その体系を理解する基礎を形成することがこの講義の目的である。種類の多い物質も構成元素は100程度であること、元素の単位である原子の構造を物質の性質と結びつけられること、をなるべく実例を使って説明する。理論的な基礎として量子論の講義を参考にすることが望ましい。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	宇宙を構成する物質	地球と宇宙の元素　電波天文学、　星、　石　太陽スペクトル　太陽系外物質　古文化財の銅の産地　処女水 原子核、素粒子、物質の基本粒子　原子核の実在　同位体、原子量、原子番号　原子量、原子番号の実測法 核化学、原子の合成　原子核の壊変　元素の循環、宇宙の元素組成	細 矢 治 夫（お茶の水女子大学教授）
2	物質の様々な状態とエネルギー	純物質と混合物（水を例として）　相変化と化学変化とエネルギー変化　均一相と不均一相　蒸気圧曲線　理想気体、分子運動論、実在気体 液体、固体と結晶　溶解度　分散質と分散媒	橋 谷 卓 成（東京農工大学教授）
3	原 子 の 構 造	ボーア模型　分光学、エネルギー差、発光と吸収 リュドベリーの式 量子数　主量子数　方位量子数　磁気量子数　スピン量子数 イオン化エネルギー　電子親和力　電気陰性度（マリケン）	平 川 暁 子（放送大学教授）
4	物質の多様性と分子の形	立体化学　理想気体、非理想性の導入 低分子化合物　いろいろな形の分子 高分子化合物　金属と非金属 有機化合物と無機化合物　黒鉛、ダイアモンド 分子の可能な形（振動スペクトル）	細 矢 治 夫
5	化 学 結 合	共有結合　不対電子　配位結合 結合エネルギー　0点エネルギー イオン結合　電気陰性度（ポーリング） 分子の極性、分極率、双極子モーメント 水素結合　ファンデルワールス相互作用 疎水相互作用　　分子間力 反応熱と結合エネルギー	同 上
6	いろいろな炭素化合物	炭化水素　鎖式、芳香族、二重結合 異性体　対掌性 芳香族 官能基　解離反応	持 田 邦 夫（学習院大学教授）
7	溶 液	溶けるということ　活動度、溶解度 分子分散とコロイド　均一相と不均一相、界面 理想溶液　化学ポテンシアル　自由エネルギー 界面エネルギー、表面張力　蒸気圧 浸透圧、蒸気圧降下　沸点上昇と融点降下	橋 谷 卓 成

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	イオンとその溶液	気相と液相のイオン　イオン　イオン強度 酸と塩基、pH　解離平衡　緩衝液　ブレンステッド酸　ルイス酸　強電解質と弱電解質 イオン性結晶、格子エネルギー　溶解度 イオン化傾向 電池、自由エネルギー、電気分解　電極電位	橋　谷　卓　成
9	金　　属	金属と分子　ディスクリートでない物質　最密構造、結晶、超格子構造　金属光沢、電気伝導 自由電子　合金、状態図　置換合金と侵入型合金 典型金属元素と遷移金属元素　格子欠陥と機械的性質	同　上
10	炭素化合物と機能	高分子　機能性物質　分子結晶、液晶、ミセル 重合　　縮合	持　田　邦　夫
11	反応と平衡(1)	オーバーオール反応と素反応　素反応の種類 分子の衝突　結合の切断・形成　電子移動　ホモリシスとヘテロリシス　溶媒中の反応　結合の切断・形成　反応速度　速度定数 反応の経路　一次反応、二次反応 活性化状態　エネルギー源　電極反応	同　上
12	反応と平衡(2)	反応の可逆性　化学平衡と可逆反応　ル・シャトリエの原理　平衡定数と自由エネルギー変化 触媒　均一相触媒、不均一相触媒 活性化吸着	同　上
13	錯　　体	銅タンパク質　染料　　水和イオン 配位結合　配位の立体化学、配位子置換反応 キレート反応　　有機金属化合物	橋　谷　卓　成
14	自然界の元素	微量元素 資源、元素の循環	一　国　雅　巳 （東京工業大学教授）
15	ま　と　め	周期律表との関係　同位体存在比、質量分析計 希ガス元素、超ウラン元素　　族の意味 典型元素、遷移元素　　プラズマ	齋　藤　一　夫 （国際基督教大学教授）

＝物質の構造と機能＝（TV）

〔主任講師：齋藤一夫（国際基督教大学教授）〕

全体のねらい

物質は物の形の蔭にかくれて目立たないが、その進歩は文明を支えてきた主役であり、社会発展の原動力である。物質の探求には求心力と遠心力が必要で、多様な物質を整理し体系的理解を探る試みと共に、新しい多様性を求めて新物質創造を目ざす努力が不可欠である。物質構成の基本である原子分子の世界から多様な世界を探ろう。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	物質構成の基本	多様な物質界は約百種の原子の組合せで生ずるが、原子の種類に応じ原子間の結合はほぼ3種に分類される。単原子から複雑な物質系に至る過程は段階的に整理され、光学的・電磁気的・熱的・機械的・化学的諸性質は各段階ごとの属性として理解される。	齋藤一夫（国際基督教大学教授）
2	分子の形成	原子が集って生まれる分子の検出、原子配置の実験的決定方法を概観し、化学結合（共有結合）の近似方法、結合に伴うエネルギーの出入り、基本的性質としての双極子モーメントと分極率について解説する。また宇宙における物質進化の過程を考察する。	同上
3	いろいろの分子	非金属元素のつくる分子について、有機・無機という従来の分類にとらわれず、周期表に基づいた基本的理解をめざす。特に原子が電子を引きつける力（電気陰性度）を柱に分子の物理的化学的性質の体系的解明を試みると共に特殊な性質をもつ異常分子を探求する。	同上
4	小分子の集団	分子間に働く力を調べ、分子から液体・固体・異種分子集団を形成する過程を分子自身の個性に基づいて理解する。特に水素結合と疎水性相互作用を重点的に取上げ、水と氷、水中での酸・塩基関係、有機半導体などの電荷移動錯体等機能性分子集団を探る。	同上
5	金属元素と非金属元素の境界にそって	周期表で金属元素と非金属元素の境界付近にある元素の単体は変態が多く特異な物性を示すと共に、多様性に富む化合物を与える。電子材料としての半導体、多様な機能を示す有機化合物、周期表の孤児といわれるホウ素を中心に特異な物質群を探る。	同上
6	高分子化合物	小分子が化学結合で連結された高分子化合物は自然界・生物界はもとより人工のプラスチックス、合成繊維、陶磁器として広範に人類を取りまいている。一見無秩序無関係に見えるこれら物質群を化学結合の面から整理し、共通点と個性を探る。	同上
7	金属の構造と特性	元素の¾は金属元素で、鉄・銅などは文明の主要な担い手であった。金属中での一見単純な原子配列とその乱れが硬さ、強靱さ、導電性等を支配する機構を観察し、金属結合の特色を考える。また無限ともいえる多様な合金類を系統的に理解するいとぐちを探る。	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	イオン結晶	金属元素と非金属元素の組合せで生まれるイオン結晶中での原子配列の原理、静電相互作用による結合形式のエネルギー関係を調べる。同時に結晶の不完全さ―格子欠陥―、純粋なイオン結合からのずれが物質に多様性を与える状況を原子の個性に基づいて考察する。	齋藤一夫
9	イオンの水溶液	イオン結晶は電解質であり、水溶液となって電離するが、その過程を原子分子レベルから観察し、それに伴うエネルギー関係を明らかにする。また溶液中でのイオンの挙動や溶けてゆく過程を動的に捕えようとする努力を探る。	同上
10	金属からイオンへ	金属がイオンに変わる過程を電池や錆びという現象を通じて観察し、それに伴うエネルギー出入りの関係を調べながら金属元素の個性を解明する。一方これらの現象と人間生活との深い関係を自然現象、工業的な諸過程について考察する。	同上
11	金属錯体	金元化合物の色は古代から注目されてきたが、配位結合を通じて着色の原因を探りながら金属イオンと分子・イオンの間の錯体形成を中心に、いわゆる高次化合物の形成を考察する。錯体の物性・反応性を解明しながら、次章以下の基礎となる重要な原理を導入する。	同上
12	生体機能を支える金属化合物	生体の主成分は炭素原子を中心とする有機化合物であるが、ごく少量の金属元素が特殊な錯体となって、代替の不可能な重要機能を担っている状況を観察する。代表例について生命を支える無機化合物の作用を、構成元素の個性と結びつけて考察する。	同上
13	無機物と有機物をつなぐ	二十世紀前半までの古典化学における有機・無機、金属・非金属といった分類になじまない新化合物を取り上げ、それらが分子・イオン結晶・金属という従来の化合物群の相互関係の解明を通じ、物質界の統一的理解を推進し新物質創造に貢献する状況を探る。	同上
14	先端材料をめぐって	「技術革新は先端材料から」と言われ、新しい物性をもつ機能性材料は文明の発展に不可欠である。新材料には従来用途の少なかった希有金属元素を含むものが多い。いろいろの分野での先端材料を概観すると共に、希土類元素を例に基礎研究と応用の関係を考える。	同上
15	欲しい物質をつくる	新物質の創造は科学とその応用の発展にとり最大の原動力である。新物質合成にも、分子レベルでデザインし段階的に造る場合、原料を反応させてでき易いものを一気に造る場合など異った手法がある。先端材料の創造を例に、新物質への挑戦を探る。	同上

＝基礎生物学Ⅰ＝（TV）

（主任講師：平本幸男（放送大学教授）
主任講師：毛利秀雄（放送大学教授））

全体のねらい

生物学は今世紀になって著しい進展をとげ、基礎的な知識の進歩とともに医学、農学、工学など応用分野との関係も深まっている。本講では生物学の基本となる一般的事実や概念をできるだけわかり易くのべ、生命の探求がきわめて魅力に富んだものであることを伝えたい。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	生物とは何か	細胞単位からなる生物／物質交代を行う生物／増殖能のある生物／反応性を示す生物／ウイルス／植物の分類と系統／動物の分類と系統	平本幸男（放送大学教授） 毛利秀雄（放送大学教授） 小野幹雄（東京都立大学教授）
2	生物のつくり	植物のつくり／根と茎の違い／茎と葉の関係／特殊な形の器官／動物の形態／器官と組織／組織の特徴と機能／形態の発生と進化	福田泰二（千葉大学教授） 八杉貞雄（東京大学助教授）
3	細胞	顕微鏡／細胞の構造／細胞の増殖	平本幸男
4	生体を構成する分子	生体構成分子／生体高分子の特徴／生体高分子／その他の重要な分子／生体における分子の配置	山田晃弘（北海道東海大学教授）
5	タンパク質の機能	タンパク質の合成と分解／タンパク質の一次構造ーアミノ酸の配列順序／タンパク質の立体構造／タンパク質の変性と再生／タンパク質の機能／生体触媒ー酵素の役割／酵素の強力な触媒作用／酵素の特異性／酵素ー基質複合体の形成／酵素の活性中心／酵素活性の変動／酵素活性の制御ーアロステリック酵素	大隅良典（東京大学助教授）
6	生体と物質交代	生体内の反応と酵素／反応とエネルギー／自由エネルギー変化／自由エネルギー変化と酵素／生体内の反応系／解糖のしくみ	山田晃弘
7	生体エネルギーの産生Ⅰ　呼吸	内呼吸のしくみ／ピルビン酸の生成／トリカルボン酸（TCA）回路／電子伝達系とATPの生産／呼吸のエネルギー効率	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	生体エネルギーの産生Ⅱ　光合成	光合成の反応／光合成の明反応／暗反応／光呼吸／C_4－光合成	山田晃弘
9	物質の生産と利用	植物と物質生産／植物のソースとシンク／植物における物質の転流／生体物質の合成／従属栄養生物の生合成／自然界の物質循環	同上
10	神経	個体内の情報伝達における神経の役割／神経系／活動電位／興奮の伝導／興奮の伝達／神経回路による情報の伝達	平本幸男
11	感覚	感覚器／感覚受容のしくみ／機械受容器／光受容器／化学受容器／温度受容器／電気受容器／感覚情報の統合と制御	同上
12	筋肉	生物の運動／筋肉運動／筋収縮のしくみ／神経による筋収縮の調節／アメーバ運動と原形質流動／細胞骨格としてのアクチン	同上
13	運動、発電、発光	真核生物の鞭毛・繊毛の運動／細胞質微小管／細菌の鞭毛運動／発電／発光	同上
14	ホルモン	ホルモンとは？／内分泌器官とホルモン／ホルモンの作用機構／生殖現象に対する各種ホルモンの相互作用	毛利秀雄
15	ホメオスタシス	恒常性の維持／自律神経系／血糖量の調節／体温の調節／浸透圧の調節	同上

＝ 基礎生物学Ⅱ ＝（TV）

〔主任講師：平本幸男（放送大学教授）〕
〔主任講師：毛利秀雄（放送大学教授）〕

全体のねらい

生物学の基本となる一般的事実のうち、遺伝、発生、行動、生態および生命の起元と進化についてのべる。基礎生物学Ⅰとは独立の科目であるが、基礎生物学Ⅰで学んだ生物の構造、物質とエネルギー、個体としての基本的機能をよく理解したうえで学習することが望ましい。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	遺伝とはなにか	遺伝とは何かについて概説する。核は遺伝現象の中心をなすオルガネラであり、核内物質は有糸分裂、減数分裂という二つの様式で分裂し、細胞から細胞へ伝えられる。メンデルは“遺伝子”という単位を想定し、遺伝現象に法則性を見い出した（メンデルの法則）。その後、染色体こそが遺伝子を担う構造体であることが理解されるようになった。性の決定機構、染色体地図などについても概説する。	大隅良典（東京大学助教授）
2	遺伝子の本体	遺伝子の本体であるＤＮＡの発見とその機構の解明にいたる重要な研究の歴史をあとづける。ワトソン・クリックの二重らせんモデルの生物学的意義について理解を深める。特に遺伝情報の複製、即ちＤＮＡの複製機構についてその基本を学ぶ。さらにＤＮＡの修復機構の重要性について概説する。ＤＮＡの核内での存在様式についても述べる。	同上
3	遺伝情報とはなにか	遺伝情報はＤＮＡという生体高分子に担われている。今回はＤＮＡのもつ情報とはなにかについて理解することに努める。ＤＮＡが生命活動に必須のタンパク質の構造を決めていることを示したビードルとテイタムの実験、“一遺伝子＝一酵素説”について概説する。遺伝情報の流れとしてのセントラル・ドグマについて解説する。ＤＮＡからタンパク質への流れを媒介するもう一つの情報高分子であるＲＮＡの役割についての理解を深める。	同上
4	遺伝暗号の解読	ＲＮＡに読みかえられた遺伝情報がどのような原理に基づいてタンパク質の構造―アミノ酸配列を決めることが出来るかを概説する。遺伝暗号の解明の歴史をあとづけ、遺伝暗号の特徴について述べる。さらにＲＮＡからタンパク質への情報の転換過程で重要な役割を果すＲＮＡ分子の構造と機能について理解する。	同上
5	遺伝子の発現機構	セントラル・ドグマ（ＤＮＡ→ＲＮＡ→タンパク質）の最終段階でほん訳過程の巧妙な仕組みについて理解する。この過程はリボソームと呼ばれる構造体の上でmRNAの情報を正確にタンパク質へと読み換える作業が行われる。さらに遺伝情報の発現の調節を大腸のラクトース利用に関与する遺伝子群を例にとって、調節遺伝子の役割について説明する。	同上
6	遺伝子操作	最近２０年の分子生物学の進歩は、遺伝子の本体であるＤＮＡの構造の解析を可能にした。さらにはいわゆる遺伝子操作技術の確立によって、人類にとって応用面での大きな可能性が拓らかれた。遺伝子操作―組み換えＤＮＡ―の基礎を概説する。制限酵素の役割、遺伝子のクローニング、ＤＮＡの塩基配列の決定法について説明する。これらの応用としてのバイオテクノロジーの現状の一端を紹介する。	同上
7	性と生殖	生物の一世代の寿命には限りがある。生物が次代の新個体を生産することにより、生命の連続性を保つ過程が生殖である。いろいろな生殖方法（無性生殖・有性生殖）について述べ、さらに性の意義や特徴について説明する。核相交代や世代交代についてもふれる。	毛利秀雄（放送大学教授）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	受精	生殖にあたって雌雄を生じるものでは、それぞれの配偶子（卵と精子）の合体によって新個体の発生が始まる。まず配偶子の形成について述べ、ついで受精現象の様子をウニの場合を中心にして示す。哺乳類の受精過程についても説明する。	毛利秀雄
9	動物の初期発生	受精によって発生を開始した卵は、細胞分裂（卵割）によって細胞の数を増し、袋状の胞胚になる。ついで内外二層の胚葉よりなる嚢胚になり、さらに第三の胚葉である中胚葉が形成され、幼生から親になっていく。このような初期発生の過程について解説する。	同上
10	分化と形態形成Ⅰ	動物の発生における細胞分化と胚の形態形成のしくみについて、これまでの実験結果から導きだされたいくつかの仮説を紹介し、またこれらの過程における核の役割や、細胞間の相互作用などについて説明する。	同上
11	分化と形態形成Ⅱ 植物の場合	植物の発生は動物の発生とかなり異った様式で進行する。植物の発生の特色を調べ、成長と分化に関するホルモン、環境因子を通して植物の発生のしくみについて学ぶ。	山田晃弘 （北海道東海大学教授）
12	分化と形態形成Ⅲ	発生過程においては、核の中の特定の遺伝子が胚の特定の場所で差次的に発現して、細胞分化や形態形成をもたらす。このようなしくみやその調節機構について、分子レベルで考察する。	毛利秀雄
13	動物行動	動物の行動は大別して本能行動と知能行動に分けられる。本能行動の発現は種に特有な鍵刺激によって解発される。これは生得的な現象で行動の遺伝学であるといえる。知能行動は学習と記憶によっている後天的なものである。動物の行動の発現のメカニズムについて、トリの歌、フクロウの音源定位、動物のコミュニケーションなどの研究を中心に述べる。	青木清 （上智大学生命科学研究所教授）
14	生態と生物社会	地球上における生物は各種の生態系をつくり、生態系間には密接なつながりが見られる。生態系の基本的な構成を理解し、現時点での生態系の生産、エネルギーおよび物質循環を知り、過去から未来への生態系の変遷を学ぶ。そして、人間社会が及ぼした生態系への重大な影響を考える。	山田晃弘 松本忠夫 （東京大学教授）
15	生物の進化	地球上の生物は非生物分子から原始生命体への発達（化学進化）と原始生命体から高等生物への発展（生物進化）を経て今日の繁栄に到達した。その筋道としくみを学び、特に最近の分子レベルでの解明に注目する。	山田晃弘 石川純 （東京大学教授）

＝人間の生物学＝（TV）

〔主任講師：太田次郎（お茶の水女子大学名誉教授）〕

全体のねらい

人間（ヒト）も生物の1種であるが、他の生物とは違ったいくつかの特徴をもっている。それらの特徴とは何か、人間とはどんな生物かを、生物学の立場から探っていく。また、広く生物界に通用する法則性がどこまで人間に適用できるかを調べ、科学的に見た人間像の形成をめざしたい。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	生物としての人間	人間（ヒト）は生物界でどんな位置を占めているのか、人体のおもな特徴は何か、脳を中心にして人間は他の動物とどこが違っているかなどを概説し、生物学の立場で人間をとらえる視点を明らかにする。	太田次郎（お茶の水女子大学名誉教授）
2	人類の誕生と進化	生物の進化の歴史で、人類はいつ、どこで誕生したか、それはいかなる証拠で裏づけされるかなどを述べる。また、化石人類から現代人に至る進化の道筋をたどり、人類進化の歴史を探る。	同上
3	人体の成り立ち	人体は、いかなる成り立ちであるかを、形態的面を中心にして述べる。組織・器官・器官系の成り立ちを調べて人体の特徴を知るとともに、構成の単位となっている細胞の構造と機能について概説する。	同上
4	血液とその働き	人体内の細胞は血液に浸され、血液は細胞の働きを支えている。血液とはどんな組成でそれぞれの成分はいかなる働きをするか、血液循環のしくみ、腎臓での排出作用などを調べ、人体の働きにおける血液の役割を明らかにする。	同上
5	人体の活動とエネルギー	人体は様々な活動を行うが、そのもとになるエネルギーは何か、エネルギー獲得の手段などについて概説する。消化と吸収、呼吸などのエネルギー獲得手段、筋収縮などエネルギーを消費する活動を説明する。	同上
6	脳と神経	人体における情報の伝達と統御にあづかる神経と脳の構造と機能を説明する。神経系の単位となるニューロン、興奮伝達のしくみ、脳のつくりなどを調べ、脳とコンピュータを比較して、脳の働きの特徴を知る。	同上
7	ホルモン	神経と共に人体の働きの調節にあづかるホルモンとは何か、その働きの特徴などを説明する。人体の各内分泌器から分泌されるホルモンの種類、ホルモンの相互作用を調べ、人体の恒常性を維持しているしくみを説明する。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	行動	動物の行動としての本能、学習（刷り込みも含む）、知能の意義を、具体例を示しながら説明する。人間の行動の特徴を、学習と知能を中心にした、他の動物の行動と比較しながら考えていく。	太田次郎
9	生殖と発生	人間も含めて多細胞生物は、1個の受精卵がもとになって発生、成長して成体となる。代表的な動物の発生の経過を説明し、それと人間の発生との共通点や相違点を明らかにする。また、発生のしくみを探る研究にもふれる。	同上
10	遺伝のしくみ	遺伝の法則、遺伝のもとになる遺伝子と染色体の関係、性と遺伝、遺伝子の本体であるDNAの構造と機能などを概説する。生物一般に成り立つ遺伝の法則性が人間にどこまで適用できるかも考える。	同上
11	人間の遺伝	ヒトのどの形質が遺伝し、どの形質が遺伝しないかを探る方法、その結果などを概説する。特に、双生児法をもとにした知能や病気などの遺伝、近親結婚の危険性など、身近かな問題をとり上げて説明する。	同上
12	個と集団	自然界では、動物はふつう集団で生活している。集団生活をしている動物では、1個体で生活している場合とは異なる法則性に支配されることが多い。動物の集団生活の法則性を調べ、人間の集団生活の特徴を調べる。	同上
13	自然と人間	自然界で、生物は環境と密接な関係を保ちながら生活している。自然界での生物どうしのつながり、生物と自然環境との関係を概説し、人間と自然の関係、生態系における人間の位置づけなどを説明する。	同上
14	健康と病気	人間の生物学の特有の問題として、健康と病気をとり上げ、病気とは何かについて、生物学の立場で考える。特に、感染と免疫を中心にして、病気の予防と治療、人間の生活における健康の意味を考える。	同上
15	人間の未来	この講義のしめくくりとして、生物学の発展が未来の人間生活に及ぼす問題をとり上げる。性と生殖、遺伝、脳の研究などが人間の論理に与える問題点、人口問題などを例にして、今後、人間の生物学てもつ課題を概説する。	同上

＝ 生命科学史Ⅰ ＝（R）

〔主任講師：筑波常治（早稲田大学教授）〕

全体のねらい

生物についてどういう研究がおこなわれてきたか、その歴史をたどりながら、科学的態度とはどのようなものか、あきらかにしてゆきたい。科学研究の偉大さはもとより強調されなければならないが、反面たんに絶対化するのではなく、それに宿命的にともなっている偏向ならびに限界も指摘したいと思う。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	「生物学」の源流	「生物学」の語源 独立したいくつもの流れ 学問の名称の時代的変遷 現代生物学の宿命、歴史をかえりみる意義	筑波常治 （早稲田大学教授）
2	統一法則対多様性	ふたつの源流　博物誌の起源 生命論の起源　対照的な方向 生物研究室の変化　生物研究と自然破壊	〃 同上
3	生命観の変遷　Ⅰ	死が生命を意識させた　生気論の起源 古代ギリシアの医学者たち アリストテレスのプシュケー説 ガレノスによる集大成 生命のやどる場所	同上
4	同上　Ⅱ	新たな文化を創造するために　時計の発明と機械論　最初の提唱者はデカルト　デカルトの苦心　自動人形の発明　人間機械論の主張　生体各部の仕掛け　生きることと燃えること　フロジストン説の当否　呼吸の正体　精神の生理的解明 精神と体は基本的にちがわない	同上
5	同上　Ⅲ	機械の分解、生体の分析　細胞の研究がすすむ 生物と機械にちがいがある　全体論の登場 生命論の社会風俗への影響　宗教の基盤 現代社会への影響　全体論と全体主義	同上
6	博物誌と分類学Ⅰ	博物誌のふたつの立場 ギリシアの学問、ローマの学問 ローマ独自の価値観 近代ヨーロッパと博物誌 博物誌から分類学および進化論へ	同上
7	同上　Ⅱ	実用分類の段階 実用を離れた分類 動物分類学と植物分類学 新しい動向と混乱 新しい分類方法の提唱	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	同　上　Ⅲ	人為分類と自然分類　　リンネの業績 生物界に普遍的な基準　種の不変説の根拠 リンネにおけるキリスト教と科学 分類学の理想と現実	筑　波　常　治
9	生殖と個体発生Ⅰ	生物学の第３の源泉　アリストテレスの発生論 研究にとっての障害　ファブリチオとハーベーの業績　顕微鏡と個体発生　顕微鏡学派と前成説 卵子説と精子精	同　上
10	同　上　Ⅱ	生気論と後成説　後成説を支持する観察 哺乳類の卵の発見　脊椎動物の発生を比較 ベアの後継者たち　観察から実験へ 発生機械学の提唱　モザイク卵と調整卵 発生学と関連する領域	同　上
11	進化の思想Ⅰ	悠久の年月の出来事　日常の経験は反対である 古代の進化論的な主張　あまりにも空想的な主張 アリストテレスは進化論者か否か？ 中世における創造説の多様性	同　上
12	同　上　Ⅱ	化石の研究　　新種の発見が進化論を生む 比較解剖学と品種改良　身分制を擁護した創造説 啓蒙主義者たちの活動　進化論者ビュフォン	同　上
13	同　上　Ⅲ	ラマルクの登場　生物は先天的に進化する　キュビェと天変地異説　イギリスの産業革命と進化論 ダーウィン以前の進化論者　ビーグル号の航海 自然淘汰説の提唱　ダーウィン説への賛否 自然界は残酷だ！　生存競争の是非をめぐって	同　上
14	微細な生物界、巨大な生物界	探検が開いた世界　　探検は命がけだった 生物地理学の成立　　顕微鏡による探検 顕微鏡の発明と普及　極度に見にくい顕微鏡 レンズ、固定、切片、染色 細胞内部の解明がすすむ	同　上
15	屈折した科学の軌跡	進歩、停滞、後退の複雑な関係 生命の神秘と個体発生 自然発生説と進化論の癒着 機械論と進化論の矛盾 学問の本領	同　上

＝ 生命科学史Ⅱ ＝（R）

〔主任講師：筑波常治（早稲田大学教授）〕

全体のねらい

Ⅰあるいは Ⅱをそれぞれ単独に履修しても、または両方あわせて履修しても、どちらでも可能である。Ⅱは生命科学の歴史にのこる代表的人物の列伝を中心に構成する。しかしたんなる個人の人物論にとどめず、それぞれの生涯と実績をとおして、それぞれに代表される各分野の歴史をあきらかにするのがねらいである。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	古代最高の生物学者―ヒポクラテス、アリストテレス―	古代ギリシアと近代ヨーロッパ ヒポクラテスの医学　哲学と生物学の関係 アリストテレスとプラトン 幾何学とイデアの世界 アリストテレスの後半生	筑波常治（早稲田大学教授）
2	古代ギリシアおよびローマの生物学者たち―アリストテレス(続)、ガレノス、農学者たち―	アリストテレスによる質料と形相 ブシュケー３段階説　「動物誌」の内容 自然の位階性と目的性　「万学の祖」と呼ばれる 比較的注目されてきたガレノス 農業を重視したローマ	同　上
3	ローマおよび中世の生物学者―プリニウス、クラチアス、ディスコリデス、アビセンナ、アヴェロエス、マグヌス―	多様性と統一法則　ローマの博物誌 プリニウスの業績と限界　図鑑の伝統 中世の動物たちの物語　中中世の再評価 中世末期の博物誌	同　上
4	ルネサンスの生物学者Ⅰ―ゲスナー、アルドロヴァンディ、パラケルスス―	過渡期のルネサンス　ゲスナーとアルドロヴァンディ　偉人物語の主人公たち　迷信や妖術も復興 放浪のパラケルスス　科学に貢献した魔術	同　上
5	同上Ⅱ―ファン・ヘルモント、ダ・ヴィンチ、ベサリウス―	ファン・ヘルモントの植物の実験 近代的な生命観と研究方法 ネズミの自然発生の実験　世紀末の怪奇趣味 人体解剖の実現　ベサリウスの光と影 解剖学の裏面史	同　上
6	機械論者と顕微鏡学派―デカルト、ボレリ、サントリオ、フック、マルピーギ、スワムメルダム、レーウェンフク、他―	力学的自然観と機械論の登場　デカルトとボレリ サントリオの体重測定器　顕微鏡学派の人びと フックとスワムメルダム　微生物を発見したレーウェンフク　観察につぐ観察 趣味に徹した研究者	同　上
7	多彩な18世紀の生物学者Ⅰ―ド・ラ・メトリ、ヴォルフ、スウェーデンボルグ、啓蒙主義者たち―	機械論の徹底化 生気論への逆行と後成説 そのほか注目される出来事 進化論の登場	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	多彩な18世紀の生物学者Ⅱ―リンネ、ビュフォン―	同世代の比較人物論　　リンネの生い立ち あいつぐ後継者の出現　ビュフォンの生い立ち 特権階級ゆえの成功　　両者の共通性 両者の対照的な部分　　反発しあった宿敵同士	筑波常治
9	進化論の提唱者と反対者―ラマルク、キュービェー―	科学的と非科学的の意味　ラマルクの生い立ち 変化しつづける生命　変化が希望ではなくなった時期　キュビエの生い立ち　比較解剖学と進化否定　実証の成果と限界　教養人と行政家 後世の不運な評価	同上
10	進化論の確立者Ⅰ―ダーウィン―	産業革命と進化論　スペンサーとテニスン 生涯と思想の落差　学校に適応できず ダーウィンが愛読した「セルボーンの博物誌」 ダーウィンがあこがれたフンボルト ベイリー神学の影響　ビーグル号への乗船 19世紀イギリスの国家活動	同上
11	同上　Ⅱ	ビーグル号の航海　　進化論の着想 病気の不幸と幸運　　ダーウィンの学習過程 自然淘汰説の提唱　　ダーウィン説への賛否 社会進化論の諸流派	同上
12	遺伝法則の発見者Ⅰ―メンデル―	素人から専門家への伝達　遺伝学史は未開拓？ 古代から17世紀までの研究者 18世紀以降の研究者たち　メンデルの生い立ち 修道院のメンデル　国家試験とウィーン留学	同上
13	同上　Ⅱ―メンデル―(続)	実験を重視する態度　物理学による発想 いわゆる「メンデルの法則」　定量的方法の導入 研究成果の発表と反響　メンデルの後半生 いわゆる法則の再発見	同上
14	自然発生説の否定者Ⅰ―パストゥール―	ダーウィン、メンデル、そしてパストゥール 優等生としての生涯　リービッヒの発酵理論 発酵をめぐる化学と生物　プーシェによる実験と結論　自然発生説との遭遇　古代から常識だった思想	同上
15	同上　Ⅱ―パストゥール―(続)	自然発生説への疑問　ニーダムとスパランツァーニの実験　同一の結果、正反対の結論 ニーダム説が有力になる　「白鳥のフラスコ」を発明する　反論を予測しての再実験 自然発生説を間接的に否定する　医学への進出	同上

＝ 地球と宇宙（地球篇） ＝ （TV）

（主任講師：奈須紀幸（放送大学教授）
主任講師：小尾信彌（放送大学副学長））

全体のねらい

われわれの住む地球は宇宙の一員である。地球は固体地球とその上をおおう水圏および気圏よりなる。まず宇宙の中における地球の位置づけを認識し、ついで地球についての諸々の事象に探究の目を向ける。現在、われわれが目にする地球に加えて地球の歴史についても学ぶ。以上何れも基本・基礎的な立場に立って考究する。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	宇宙の中の地球	地球は太陽系の中で水をたたえた唯一の惑星である。その太陽系は宇宙の中の銀河系に属する。日常われわれが意識する地球は巨大なスケールを持つものであるが、宇宙の中にあっては微小な存在である。このような宇宙の中における地球の位置づけを認識する。	奈須紀幸（放送大学教授） 小尾信彌（放送大学副学長）
2	地球の層圏	地球は気圏・水圏・固体地球の3圏よりなる。それぞれの圏は、さらに幾つかの層圏に分れている。これら地球の層圏について、現在までに知られている知識の内容を学ぶ。	奈須紀幸
3	地球科学の発展	当然のことながら、人類は太古の昔より大地について様々な思索を行なってきた。そして長い年月をかけて地球の本質を解明し、その実像に迫ってきた。そのような地球科学の発展の経緯について学ぶ。	同上
4	大気	気圏を構成する主体は大気である。太陽エネルギーは大気に対し大きな運動を行なう原動力を与える。大気の大循環、気圧、風、前線など大気のダイナミクスについて学ぶ。また天気や気候についても学ぶ。	同上
5	海洋	水圏を構成する水分の大部分は海洋にたくわえられている。海水は流体であるので絶えず動き易いという本質を持つ、海流、潮流、波浪など、いづれも海水の流動のあらわれである。これらの事項について学ぶ。また海底のもつ本質についても学ぶ。	同上
6	固体地球	固体地球は層状構造をもつ、地表から地心へ向って地殻、マントル、外核、内核よりなる。地殻とマントル上層の一部はプレートとして地球表層の固い部分を構成する。このプレートは動いている。これらについて学ぶ。さらに重力と地磁気についても学ぶ。	同上
7	岩石と鉱物	地殻やプレートを構成する単位は種々の鉱物であり、1種または多種の鉱物の集合体が岩石である。岩石は主として造岩鉱物で構成される。岩石は火成岩、堆積岩、変成岩に3大別される。これらのことがらについて学ぶ。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	地層	堆積物は固化して堆積岩となる。堆積物や堆積岩は水平的なひろがりをもつ地層を形成する。地層の中にはよく化石を含む。地層の層序と対比は重要である。地層は変形して断層や褶曲を示すことがある。また整合、不整合関係を示すことがある。これらについて学ぶ。	奈須紀幸
9	地質時代	地球上に水がたたえられるようになってから地表における物質の循環がはじまり堆積岩が形成された。それから以後を地質時代という。対年代、絶対年代を用いて地質時代の実体は解明された。これらのことについて学ぶ。また地質図についても学ぶ。	同上
10	固体地球の表層	固体地球表層の実体とその変遷の歴史については１９世紀後半より解明が大いに進んだ。ゴードワナ大陸、大陸移動説の提唱から古地磁気研究の結果による大陸移動説の復活、中火海嶺系の発見。大洋底拡大説の提唱へと時間経過を追って学ぶ。	同上
11	プレートテクトニクス	大洋底拡大説は数年後プレートテクトニクス説へ進展した。その間に大洋底地磁気異常の縞模様の発見、トランスフォーム断層の提唱、ホットスポット説の提唱があった。これらはプレートテクトニクス説の中でも生かされた。これらの事項について学ぶ。	同上
12	地震	大洋底拡大説およびプレートテクトニクス説が提唱されてから、それらとの関係で地震発生のメカニズムが随分と明らかになってきた。これらの事情について学ぶ。また地震の種類、規模、震度などについて学ぶ。	同上
13	火山	プレート境界にはよく火山が形成される。とくに活動縁辺域であるプレートの潜没帯は火山帯をともなう。さらに中央海嶺系やホットスポットには火山が形成されやすい。このような火山の形成の過程について学ぶ。さらに火山の種類について学ぶ。	同上
14	地球の歴史	地球の創生以来の歴史は近年随分とよく解明されてきた。地質時代以前、それから地質時代に入って生物の発生と進化をともなう地表の変遷の歴史は多彩を極める。先カンブリア時代、古生代、中生代、新生代を通じてこうした地球の変遷の歴史を学ぶ。	同上
15	日本列島	日本列島は大局的には太平洋プレートがユーラシアプレートの下へ潜没する変動帯に位置する。これは現状である。この点についてまず学ぶ。ついで日本列島の地史について学ぶ。さらに地下資源について学ぶ。	同上

＝地球と宇宙（宇宙編）＝（TV）

（主任講師：小尾信彌（放送大学副学長）
主任講師：奈須紀幸（放送大学教授））

全体のねらい

地球と宇宙という私たちの自然環境を学ぶ科目のなかで、ここでは宇宙について学ぶ。人間の宇宙観の歴史に始まって、太陽系や恒星、銀河系や銀河について学習した後に、宇宙全体の構造や進化、そして最後に地球を含む太陽系の起源を学んで地球編につなぐ。全体を定量的に扱うわけではないが、可能な限り事柄を量的に理解させる。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	天文学の歴史 I	天文学は最も古く興った科学の1つである。ここではギリシアの王子学から16～17世紀における太陽系の確立、それに続く古典天文学の発展や恒星天文学の誕生、さらに天体分光学から天体物理学が始まる19世紀末までを扱う。	小尾信彌（放送大学副学長）
2	〃 II	今世紀に入って天文学は面目を一新して、大反射鏡の建造、新しい物理学による物質観や時空観の革新、電波観測や宇宙開発、コンピュータなどの技術開発によって、天文学も大きく発展し、人間の宇宙観も一新した。それらの過程と成果を学ぶ。	同上
3	現代の天体観測	ケプラーの法則からビッグバン宇宙の検証まで、宇宙の知識は宇宙の観測にもとづいている。今日では、光学観測ばかりでなく電波観測や大気圏内の観測が重要な位置をしめているが、それら種々の観測を概観し、また分光観測など観測の再本についても学ぶ。	同上
4	太陽系の運動	惑星は距離が近いため明るく見え、その動きも古くから観測され、占星術が興り、天動説や地動説が唱えられ、ニュートンに至って力学的な太陽系像が確立して、ここでは太陽系における運動の典型的なものとして、惑星の運動について学ぶ。	同上
5	太陽系の天体	惑星や小惑星、衛星、隕石、彗星や流星物質など太陽を回る無数の天体は、呼び名が異なるように、大きさや外観、組織などをはじめとする性質に大きな違いが見られる。ここでは惑星をはじめ太陽系の主要な天体について学ぶ。	同上
6	太陽	太陽系の中心である太陽はふつうの恒星であるが、距離が近いため、表面の現象がその変化が観測できる唯一の恒星である。恒星に関する知識のかなりのものは、太陽の観測や研究が基礎になっているし、また地球に大きな影響をもつ点でも極めて重要な天体である。	同上
7	恒星 I	自分でエネルギーを放って輝いている点で、恒星は太陽と同種の天体がある。しかし、質量や半径、光度は広い範囲にわたっている。恒星についての種々の性質を知る手段は、その結果について学ぶ。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	恒星 II	分光観測によって、表面の温度や化学組成をはじめ恒星についての多くの情報を得ることができる。ここでは分光観測の原理やその成果を学び、また光度や表面温度、質量など個々の性質の間にみられる統計的な関係についても学ぶ。	小尾信彌
9	恒星の進化	恒星は星間雲のなかで誕生し、質量によって異なる寿命を終る。その間で主系列星や巨星、超巨星など特徴の大きく異なる状態を経過する。また寿命を終る際も、質量により様相が異なる。ここでは進化を研究する原理から、進化の各段階の特徴を学ぶ。	同上
10	銀河系の天体	銀河系には新星や超新星などの変わった天体や、星団のような恒星集団も見られる。また星間には星間物質や星間雲、さらに電波天体やX線天体なども見られる。これら銀河系の各種の天体について学ぶ。	同上
11	銀河系の構造	われわれのまわりの恒星は、星間物質や星間雲とともに直径が8～10万光年の薄い円盤状の集団をつくっている。これが銀河系である。ここでは銀河系研究の歴史を概観した後で、銀河系の構造や運動、また銀河系天体の種族について学ぶ。	同上
12	銀河の世界	銀河系の外には、銀河系と対等な別な銀河が無数に観測されている。これら銀河の距離や大きさ、さらに型などについて学ぶ。さらに、銀河やクエーサーなど特異な銀河や銀河集団について学ぶ。	同上
13	宇宙の構造	宇宙の全体的な特徴をまとめて概観したあとで、相対論的宇宙論の基礎になっているフリードマンの宇宙のモデルについて学ぶ。またフリードマンのモデルに基づく膨張宇宙の性質について学ぶ。	同上
14	宇宙の進化	フリードマンのモデルに物質と放射を導入して得られる進化宇宙論を中心に学ぶ。3K宇宙背景放射に基づいて宇宙に転期のあったこと、またビッグバン初期の宇宙の進化についても学ぶ。元素の起源についても述べる。	同上
15	宇宙の進化と地球	宇宙で物質が優勢となった後に、銀河や恒星のような現在われわれが観測する天体が形成され、進化した。その過程のなかで、現在の宇宙に見られる元素も進化した。そのなかで地球をはじめとする太陽系の天体が形成された過程について学ぶ。	小尾信彌 奈須紀幸 （放送大学教授）

＝ 日 本 の 自 然 ＝（TV）

主任講師：奈須紀幸（放送大学教授）
主任講師：西川　治（立正大学教授）

全体のねらい

人口密度が高く、開発の進んだ日本の自然は人為の影響を強く受けている。それでも自然は活力に富み、多彩な景観をくりひろげている。そうした日本の自然の特色を地形、地質、気候、水文、生物などの視点から明らかにする。またこうした自然環境と人間生活の関係、よりよい適応の方向について論及する。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	日本の自然と歴史的風土	日本の国土においても、当然その基盤や背景には人為を超越した自然は厳存するが、その大部分は、生活環境の拡充、土地利用の集約化等によって歴史的風土に変貌している。こうした生活・文化とのかかわりにおいて、日本の自然の特色について概観する。	西川　治（立正大学教授）
2	日本人の自然観とその変遷	日本における伝統的自然観について再検討し、自然観は、時代や生活体験の違いによって多様であることを確認した上で、自然観の東西比較論にも言及する。具体例としては、日本の代表的な景勝地、とくに富士山をめぐる自然観の変遷について考察する。	同　上
3	日本の地質	日本列島の東半は太平洋プレートが、西半はフィリピン海プレートが、アジア大陸の下へ潜没するところに位置し、環太平洋造山帯の北西部を占め、火山、地震も多い。このような状態の下にある日本の地質は複雑である。その全体像について概括する。	奈須紀幸（放送大学教授）
4	日本の地形	日本の地形は細かく変化し多様である。度重なる造山運動や火山活動を受けてできた土地に、風化や水の侵食が働いて地形を複雑にした。こうした地形を系統的にとらえ、環境要因としての性質を理解し易くするために、野外の実例に即して地形の特色を解説する。	式　正英（お茶の水女子大学教授）
5	日本の地形環境と開発史	日本における村落の生活環境は、きめこまかいジェオシステムを基盤にして成立し、住民は、社会組織と農業土木技術の発達につれて、どのように地形環境に適応し、集落を作り、土地を開発し利用してきたか、各地の事例を示しながら説明する。	西川　治
6	日本列島の気候の特色	日本の気候の基本的性格は、列島が中緯度の大陸東岸に没って位置すること、南北に長いこと、背梁山脈の存在、複雑な地形などによって形成されている。このような空間的スケールにより異なる気候や天候の特色を、各季節について説明する。	前島郁雄（東京都立大学教授）
7	日本の気候環境と生活	亜熱帯から亜寒帯に展開する日本の気候は、生活の環境（衣服・冷暖房など）、生産の環境（農業生産力・水資源など）としても地域的な変化に富んでいる。さらに観光・レジャーの立地条件、都市に特有な気候、気象災害などにもふれて、気候環境について説明する。	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	日本の水文環境	日本は世界で最も水に恵まれた国の一つである。その日本の水文環境の特徴を、降水、蒸発散、流出などの水環境を柱として、外国との比較によって明らかにし、さらに地域条件を加味して、水文環境と人間生活との関係について諸述する。信濃川流域を取り上げる。	槻根　勇（筑波大学教授）
9	日本の森林と植生景観	日本の植生は、南北に多様である。この植生を世界の植生帯の中で位置づけるとともに、水平分布と垂直分布の特徴を、主として気候条件と関連させながら考えていく。さらに、各植生帯を代表する森林の構造と動態について現地調査を行い、特性を明らかにする。	大沢雅彦（千葉大学助教授）
10	二次林の成立と日本の文化	日本の森林は雑木林のような二次林が多い。こうした自然と文化の共同の産物といえる二次林について、縄文人の森林利用、古くからの薪炭利用、現在のレクリエーション、環境保全林としての利用などについて現地調査を行い、その保全と活用の方向を探る。	武内和彦（東京大学助教授）
11	日本の動物と生活	現在の日本の自然は、日本列島とそれをとりまく海洋環境の変遷史を反映した歴史的産物である。植生は気候と基盤地質とに支配され、その特性に応じた動物相が成立する。この地生態系は、人類出現以降大きな変化をとげ、自然サイクルとの調和を失いつつある。	濱田隆士（東京大学教授） 樋口廣芳（日本野鳥の会研究センター所長）
12	日本の海	日本列島をめぐる海について、海流、海底地形、海底地質のあり方について学ぶ。プレート潜没の場として海溝やトラフが形成され、活動縁辺域としての特性を示す。また水期、間水期に対応する海水準変動の影響を受けて大陸棚が形成されていることも学ぶ。	奈須紀幸
13	日本の海岸	日本列島は造山帯としての島弧よりなる。そのため、海岸線は陸地の面積に比べて長い。また後背の平野はあっても規模が小さく、山地が直接海岸に迫るところも多い。このような日本の海岸は岩石海岸、砂浜海岸、内湾の海岸に大別される。海岸での営力にも言及する。	同上
14	日本の自然災害と防災	日本の自然の変化は災害と表裏一体である。河川洪水、内水洪水、高潮洪水、津波洪水の災害と平野地形との関係、地震による液状化災害、山崩れについて地形分類図を用いて説明する。また、火山災害とくに火砕流について、さらに防災についても考える。	大矢雅彦（早稲田大学教授）
15	自然環境の利用と保全	自然に対する態度は、国民の文化水準を反映する。日本における高度成長期の乱開発によって損われた自然的景観の修復をはかり、自然的環境によりよく適応するための事業やナショナルトラストについて、河川流域や海岸等の事例に即して説明する。	西川　治

＝ 科 学 と 実 験 ＝ （TV）

〔主任講師：宮代彰一（西東京科学大学教授）〕

全体のねらい

広い科学のなか（工学や技術も含む）の多くの分野での実験的な仕事を横に貫き、共通する問題、考え方、あるいは手法などを抽出して考えてみよう。これらはそれ自体で興味深く、実際的であり、かつ、少し大げさだが、実証科学の本質にも係わるものと思う。なお、面接授業では、いくつかの実験を学生が自ら行えるようにする。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	序論（科学と実験）	科学における実験　実証的な科学のおこり、近代物理、化学、生物学の成立　実験（科学）の限界、再現性　実験の舞台、基礎科学と応用科学 学習実験と研究実験	宮 代 彰 一 （西東京科学大学教授）
2	問題発見と計画	研究者の習性　問題の発見が最初　その手法、流儀、整理による発見、ＢＳ法やＫＪ法 計画性、その手法、フローチャート、ＰＥＲＴ法など　計画実施上の問題	宮 代 彰 一 宮 尾 亘 （東京工科大学）
3	情 報 ・ 文 献	科学は情報の拡大生産　科学技術情報の所在とその形　文献の種類と膨大な量　研究の各段階と調査　検索、原理と方法、機械検索、動向 情報活用のあり方	同 上
4	観察と記録、そして整理	観察からすべてが始まる　観察の例、野外観察 なまのデータを記録　整理は事物把握の基本、周期表　試料の整理、生物の分類学、階級、学名 考え方の整理	吉 田 治 （千葉大学教授）
5	感 覚 と 観 測	五感という窓の性格　刺激量と感覚量、感覚の限界　機械による限界の拡張、例として視覚における機能（大きさ、強度、波長、時間の面での）拡張　感覚と知覚	宮 代 彰 一
6	単 位 ・ 標 準	日常生活と単位　昔の単位、単位の進化 単位はどうあるべきか、物理量と次元、単位 国際単位系（ＳＩ）、その基本単位と標準 社会習慣と単位、慣用の単位	大 井 みさほ （東京学芸大学教授）
7	装置の準備と使用	ものを作り動かす楽しさ　目的に合う測定器、測定値の読み取り　装置の目的と仕様　設計、製図、工作、材料の常識を　ブラックボックス 実験装置の活用、習熟	宮 代 彰 一

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	電気的な手法	実験に欠かせぬ電気・電子的手法　主な電気的量、抵抗の測定　受動素子と能動素子　トランジスタ、論理素子　電子計算機、プログラム 実験システム、自動化	田中清臣 （電気通信大学助教授）
9	実験と安全性	実験は危険と背中合わせ　実験室、家庭、産業での災害、危険への感受性　危険の種類　危険な薬品、火災、爆発、中毒　電気装置と安全 事故が起こったら	若松　茂 （放送教育開発センター教授）
10	データの取り扱い	数値データの扱い、有効数字　データの図式化、グラフ化の効果　グラフの種類、対数目盛りとグラフ　グラフ化の手法、大量データの処理 実験式をつくる	遠山紘司 （文部省教科書調査官）
11	測定の不確かさ	真の値、不確かさと測定の限度　誤差の種類 誤差の伝播　偶然的な誤差とガウス分布 最小2乗法、確からしい線引き　妥当な測定とは	同上
12	観測とゆらぎ	対象自体のあいまいさ　放射線測定でのばらつきとポアソン分布　光量と画像の見え方、情報の不足　ブラウン運動　SN比、散射雑音と熱雑音 マクロなゆらぎ	宮代彰一
13	モデルと実験	対象事物のモデル化と適用範囲　減衰振動、数学的モデル　実体模型実験、寸法効果　計算実験、モンテカルロ法　コンピュータ・シミュレーション	同上
14	報告のまとめ	研究や実験は報告で仕上がる　学習実験でのレポート　報告（論文）の組み立て　よい報告、分かる報告とは、対策は　各種の技術報告、特許という形の報告	同上
15	しめくくり	学習と実験、本当の興味は？　知識と知恵、自分の問題への適用　創造性へのつながり　創造の技法、発散の段階と収束の段階　創造の成否、同時発見、同時発明	同上

＝現代の人間観と世界観＝（Ｒ）

〔主任講師：増成隆士（筑波大学教授）〕

全体のねらい

人間とは何か、世界とは何か、についての現代の見方、考え方の特色について考える講義で、扱うことがらをできるだけ基本的あるいは基礎的なものに限定し、身近のことがらから考えてゆくことによって、何が問題なのかをみずから実感を伴ったかたちで知り、そのあとみずから能動的に考えていく意欲が湧いてくるような動機づけをすることに重点を置いて構成されている。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	序論「意味」への眼差し	そもそも「人間観」「世界観」とは何か、ということを人間の認識の或る方式とそこから成立する意味世界として考えることから始め、この講義を理解するための問題意識を形成すべく、「考える」という営みのウオーミング・アップをおこなう。	増成隆士（筑波大学・教授）	増成隆士（筑波大学・教授）
2	なぜ、「現代」が問題なのか	「現代」がわれわれにとっていかに特別な意味を持つものであるかを、「過去・現在・未来」という位置づけにおける、選択の時としての「現在」という局面と、実像が実は分かりにくい「同時代」という局面との、ふたつの局面で考える。	同上	同上
3	人間の視点	視点ということに関する基本的な問題について考えることから始め、全事象を一望するいわば「神の視点」と対比しながら、不偏中立の絶対的な人間観、世界観などというものは、人間にはありえない、という現代人の自覚について考える。	同上	同上
4	現代の人間観－その１－／人間の地位	人間は、この宇宙において、また、他の生物との関係において、いかなる位置にあるのか。人間は別格の存在なのか、あるいは、進化した動物なのか。こうした問題を、人間はどの視点から見てきたか、そして、現在見ているか、から考える。	同上	同上
5	現代の人間観－その２－／心と身体	人間は複雑に組み立てられている。この組み立ては、いかなる構造のものか。人間は心と身体との合体なのか。そうであるとすると、心はどこにあるのか。あるいは、人間は一種の精巧な機械なのか。これらの考え方の基本部分について考える。	同上	同上
6	現代の人間観－その３－／死と死後	人間の死を何と考え、死後をどのようなものであると考えるかというところに、人間観が端的に反映する。現代において死とは何か。これを、「医学の管理下での死」対「宗教の管理下での死」という対比、臨死体験の問題などから、考える。	同上	同上
7	現代の人間観－その４－／造形芸術に描かれた「現代の人間」	芸術家がその鋭敏な眼によって同時代の人間の本質あるいは特徴的な在り方を見抜き、この洞察を卓越した技よって作品化している場合がある。本章では、肖像作品のいくかつの事例から、現代の人間の本質あるいは特徴的な在り方について考える。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	現代の人間観－その５－／文学に描かれた「現代の人間」	すぐれた文学として高く評価されてきている作品には、その時代を代表する人間観や世界観が息づいている。本章では、現代文学の記念碑的作品である『ユリシーズ』を事例として、現代の人間の本質あるいは特徴的な在り方について考える。	増成隆士（筑波大学・教授）	増成隆士（筑波大学・教授）
9	現代の世界観－その１－／宇宙船「地球号」	「世界」ということで、どの範囲のことが考えられているか。この「範囲」がその時代の世界観の基本的な性格を決めている。過去の事例と対比して、強い現実感を帯びてきている広大な宇宙とその中の地球という現代人の認識の意味について考える。	同上	同上
10	現代の人間観－その２－／世界は、どのようにできているのか、なぜ存在しているのか	世界はどのようにできているのか、なぜ存在しているのか、についての現代の考え方の基本を、古代の神話や自然哲学による説明との対比において見、倫理から独立して「疑い、試す」ことを特色とする近代科学の知と現在の問題について考える。	同上	同上
11	現代の人間観－その３－／他の世界がどこまで見えているか	「他の世界」が多量且つ多様に認識され、現実的に「触れられて」いる現代に生じている、知識と認識の次元での「南北問題」について、そして、それと深く関わっている情報という「擬似現実」による現実認識に潜む問題について考える。	同上	同上
12	現代の人間観－その４－／造形芸術に描かれた「現代の世界」	世界の深層は、同時代にはかえって見えにくい。しかし、芸術家が、同時代の世界の深層を洞察し、これを作品化していてる場合がある。本章では、現代の造形芸術の事例から、現代の世界を「欲望のコラージュ」「錯綜した通路」として考える。	同上	同上
13	現代の人間観－その５－／現代の音楽に反映している現代の世界	音楽はひとの心の奥というか身体の奥というか、なにか奥深いところで感受され、ひとのものの見方考え方と連動している。本章では、現代日本の音楽文化、西洋音楽史における「現代音楽」の思想などから、現代の世界観の一局面について考える。	同上	同上
14	現代の人間の「理想の世界」	かつて宗教が理想世界を説き、描いてきた。理想に向かっての社会政治思想あるいは理論もあった。現代は、理想世界について考えることに冷ややかな時代である。問題はどこにあるのか。「擬似ユートピア」ということを含めて、考える。	同上	同上
15	未来世界への岐路・人間の選択	人間は、その手と頭脳の延長である科学技術を使って、自然世界を大改造し、この世界を「人間の帝国」としてきた。しかし、この「進歩」の原動力である人間の欲望の無限昂進を肯定するとき、世界に果たして「未来」はあるのであろうか。	同上	同上

＝哲 学 の 基 礎 ＝（R）

〔主任講師：山本　信（東京女子大学教授）〕

全体のねらい

哲学は各人の日常生活に根ざし、人生観や世界観に連なるものではあるけれども、しかし、単なる感想や思いつきの域に終始するのでなく、学問として理論的にやってゆくためには、どうしても抽象的な概念や問題設定を扱うことができなければならない。そのための最も基礎的な道具立てを整えておきたい。

回	テ ー マ	内　　容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	哲学とは何か	「哲学」という言葉そのものの意味を考えることから始め、この学問がもっている独自の性格と、それを学ぶときの特殊事情について述べる。	山本　信（東京女子大学教授）	山本　信（東京女子大学教授）
2	哲学史の意義	他の諸学とは事情を異にして、哲学の研究は常にその歴史との内的な連関において行われなければならない。哲学を西洋から移入し、しかも自国の思想的伝統をもっている日本人には、この点で特別の問題が課されている。	同　上	同　上
3	哲学の諸部門	普通、哲学に属すると考えられている諸学問を列挙し、それぞれについて多少の説明を加え、それら全体にわたって見通しをつける。	同　上	同　上
4	存在論の基本問題	「ある」ということをめぐる古来の論議をふまえ、「実体」「形相」「本質」など、歴史的にも体系的にも哲学にとって最も基本的な諸概念をとりあげる。	同　上	同　上
5	主 観 概 念	「主観」あるいは「主体」と訳される概念の形成過程をかえりみることによって、現代にいたるまでの近代的な思考体制の原点を究明する。	同　上	同　上
6	近世的二元論	近世における心と物、精神と物体の二元論は、それ自体が本質的に不安定なものなのであり、観念論と唯物論という対立しあう立場もそのことの所産にほかならない所以を論ずる。	同　上	同　上
7	認識論の系譜	近世以降の哲学を特徴づける認識論的問題設定について、その端緒における歴史的意義を明らかにする。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	主体性の形而上学	認識し行為する主体としてのあり方をもって原理とする立場が、近代の合理性を担う一方の柱としてどのように展開されてきたかを考察する。	山本　信	山本　信
9	近代科学の思想史的意味	現在われわれが「科学」とよんでいる知的形態が、近代の合理性を担うもう一方の柱として、思想史的に何を意味しているかを考察する。	同　上	同　上
10	科学的思考の諸性格	科学的な思考方法、それはまたわれわれが小学校以来の教育でたたきこまれてきて常識になっている考え方でもあるが、その性質と帰結とを、いくつかの項目に分けてあらわにする。	同　上	同　上
11	生命と人間性	科学の進歩は、生命現象をも物理的、化学的な過程にひきもどし、また人間に対してはその尊厳を剥奪してゆくかのようにみえる。こうした事態に関してどう考えたらよいか。	同　上	同　上
12	心身問題	からだとの関係において心とは何なのかということは、人類にとって古くからの関心事であり、哲学の主要問題の一つでもあった。近世的二元論のなかでどう考えたらよいか。	同　上	同　上
13	自由と必然	人間の自由に対立するものとして、運命、自然因果性、社会的制約などが語られる。これらの必然的支配を説く決定論に対して、どう考えたらよいか。	同　上	同　上
14	真理論	何を考え何を語るにせよ、それは真なのかという問いが最後までつきまとう。では、そもそも真理とは何か。そして、何かが真であるということはどうやって確かめられるか。	同　上	同　上
15	現代の哲学的状況	哲学の歴史から見て、われわれがどのような状況におかれ、いかなる問題に直面しているか、とういうことを知るために、現代の諸学説に現れている思想動向を概観する。	同　上	同　上

＝推　理　と　分　析　＝（R）

〔主任講師：内井惣七（京都大学教授）〕

全体のねらい

科学や学問の分野においてだけではなく、日常の実践的事柄においても論理的な思考は大切である。筋道を立てた明晰な思考とはどんなものか、またそのためには何が必要かを明らかにする。全体を通じて、論理的推理の原理を解説するだけでなく、明晰な思考力と分析力を訓練することをもめざす。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	おかしな推理、まちがった論法	論理学など知らなくても、たいていの人は、屁理屈やら詭弁など、おかしな論法に対する感覚はある程度持っているはずである。それを手がかりに、まちがった推論、まちがった論法のどこがおかしいのか、検討してみる。	内井惣七（京都大学教授）	内井惣七（京都大学教授）
2	演繹と帰納	推論や証明を論じる際に忘れてはならない一つの基本的な区別，演繹と帰納。前者は、前提が正しければ結論も必ずとただしいと保証できる推論である。後者は、そのような保証はないが、経験の積み重ねなどにより、たぶんまちがいないだろうと見なされる推論。	同　上	同　上
3	よく考えるための方法，分析	古来、何人かの有名な思想家が、よく考えるための方法や、厳密な証明の原理に関していくつかの提案を行なってきた。ここではデカルトの提案を紹介し、シャーロック・ホームズの「逆方向の推理」との類比を明らかにする。	同　上	同　上
4	消去による推理	演繹的推論の実例として最もわかりやすいのは、「消去による推理」である。これは、ホームズが得意な方法である。記号論理学の技術を使ってこのような消去の原理を明らかにしたのはジェヴォンズであるが、それは簡単な工夫で視覚化できる。	同　上	同　上
5	真　理　表	前章の消去による推論の原理は、現代では真理表の理論によっても説明すことができる。論理的推論のカギとなることばの真理表と記号を導入する。それらを使って、推論の正しさをきちんと定義する。	同　上	同　上
6	三段論法と消去法	消去による推論のテクニックは、命題を単位とした推論の理論だけでなく、アリストテレスの三段論法にも応用できる。ジェヴォンズの論理アルファベットと論理尺を使った三段論法の判定法を紹介する。	同　上	同　上
7	正しい推論とは	少し理論的な問題に踏み込んで、「正しい推論とは何か」をもう一度考えてみよう。三段論法まで含めた場合、先に紹介したトートロジーによる正しさの規定は通用するのだろうか。このような問いをもっと展開するためには、ジェヴォンズの方法では不十分である。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	真理関数と論理回路1	真理表の理論のもう一つの応用例として、コンピュータの設計にも使われる論理回路の作り方を紹介してみよう。たとえば、横断歩道で押しボタン式信号機がついているのをよく見かけるが、その理論的な仕組みはどうなっているのだろうか。	内井惣七	内井惣七
9	真理関数と論理回路2	前章の押しボタン式信号機の回路を完成させる。途中で、すべての情報を0と1の組み合わせで表わすという二値コードの原理も説明される。問題解決の過程で、分析的方法がどのように使われるか、注意して観察していただきたい。	同上	同上
10	現代論理学の成立	真理関数や三段論法の理論は、現代論理学の中では初歩的な一部でしかない。十九世紀の後半、論理学に大改革をもたらしたのは、ドイツの数学者フレーゲであった。彼の『概念記法』という風変わりな本によって、現代論理学の骨格がほぼ完成されたのである。	同上	同上
11	述語論理の基本	自由変項と束縛変項の区別を説明したのち、「すべて」や「ある」が含まれる推論や証明を具体的な例で練習してみよう。このような訓練をやるかやらないかが、論理的なセンスや証明力がつくかつかないの分かれ目である。	同上	同上
12	複雑な関係、単純な妥当性	空所を二つ以上もつ述語で表わされる関係が入ると、述語論理は格段にむずかしくなる。しかし、それは考えるべき可能性が飛躍的に増えるためであり、論理法則自体が複雑になるためではない。論理法則とは、どんな分析表でも反証不可能なのである。	同上	同上
13	論理的分析の応用1	公理的方法について簡単に説明した後、これまで学んできた論理的推論と分析がどのように応用されるか、いくつか有名な例を紹介しよう。「すべて」や集合にかかわる例としてラッセルのパラドックス。形容詞に関するグレリンクのパラドックス。	同上	同上
14	論理的分析の応用2	前章のパラドックスでは、自己言及のようなある種の循環が目立つが、無害あるいは有益な自己言及や循環もありうる。もっと本質的なのは、文やことばの構造を語るのか、意味を語るのかという区別である。パラドックスの分類。	同上	同上
15	明晰に考えるために	論理の力とは、基本的には、知識の項目を増やすとか公式を覚えることで身につくようなものではない。そうではなく、運動や各種の技能のように、基礎体力をつけ、ふだんに使いこなす訓練をして初めて身につくものである。よく考えるためのいくつかのヒント。	同上	同上

＝人 文 地 理 学 ＝（TV）

〔主任講師：西川　治（立正大学教授）〕

全体のねらい

人文地理学の課題は、人間活動と地球環境との織り成す地人模様（人文生態系）の地域的特色と空間システムとの形成過程と要因とを解明して、より快適で美しく、持続的に発展可能な生活環境の創造にとって役立つべき案内図を提供することである。本講義ではとくに地球時代における文化地理学の役割についても考えてみたい。

回	テ ー マ	内　　容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	地 球 の 人	人類の生活空間である地球表面の地理的複合（ジェオシステム）、さまざまな民族や地域住民が形成してきた人文生態系とその空間的システムとを概観し、地球社会化時代における人文地理学の課題と方法、役割について考えてみたい。	西川　治（立正大学教授）	西川　治（立正大学教授）
2	地球環境の移り変わり	地球環境問題についての理解をより深めるために、日本列島を中心に氷期から後氷期にかけて生じた顕著な自然環境の変化、および土地利用と自然環境との関係などについて、数値地図による分析結果をコンピュータグラフィックスを用いて説明する。	野 上 道 男（東京都立大学教授）	野 上 道 男（東京都立大学教授）
3	言語の分析と民族移動	言語の世界的な分布に目を向けて、それによって世界の民族の分布状況をマクロに理解するために、今からおよそ１万年前から以降に生じた気候変化と関連づけて、諸民族の移動の跡を推究してみる。	鈴 木 秀 夫（東京大学教授）	鈴 木 秀 夫（東京大学教授）
4	民族の住み分けと文化交流	東アジアの民族の分布を概観し、様々な民族が独自の伝統的な文化を保持しつつ住み分けを行っていることを、雲南、ブータン、台湾などの例で示す。民族間の文化交流が活発であることや、過去において大小様々な民族の融合や分化があったことにも言及する。	諏 訪 哲 郎（学習院大学教授）	諏 訪 哲 郎（学習院大学教授）
5	食事の文化地理	今日では中南米起源のトウモロコシやジャガイモの比重も大きいが、ユーラシアの食事文化の主役はコメとムギで、様々な調理法が見られることを示す。コメやムギの普及以前に芋や雑穀が重要であったことが、神話や儀礼から伺えることにも言及する。	同　上	同　上
6	衣服の文化地理	服装と装身具は地域社会と密接な関係を有する。湾岸諸国の人々にとっての金の装身具は、貯金通帳よりも重要な経済的意味を持つ。少数民族にとって、民族服は文化的アイデンティの一要素として大切である。これらの例のように「服装飾」から「地誌」を考えたい。	向後紀代美（東京大学非常勤講師）	向後紀代美（東京大学非常勤講師）
7	民 族 音 楽 の 風 土 性	洋楽に対して邦楽と呼ばれ、とかく特殊な存在とみられがちな日本の音楽は、実は広くアジアの諸地域と結びついて展開してきたものである。北方系遊牧民族の長い歌、南方系農耕民族の短い歌との関連性、シルクロード、マリンロードを通じての楽器の交流を探る。	江波戸　昭（明治大学教授）	江波戸　昭（明治大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	日本の風土と国民性（比較風土論の試み）	ユーラシア大陸の東岸に連なる日本列島と、西岸部に位置するドイツ連邦を対象にして、それぞれの風土的特色、農村と都市に見られる差違をふまえて、日本人とドイツ人の自然観や国民性的な対照性についての比較考察を試みる。	西川　治	西川　治
9	山村と漁村の民族文化	日本列島は山がちの地形故、山地まで集落が立地している。また海岸線が長く、海に生活を依存している集落も多い。このような山村や漁村は、林業あるいは漁業のみでなく、農業、自然物採取などが複合的に営まれ、その生業、生活についての民俗も豊かである。	市川健夫（信州短期大学教授）	市川健夫（信州短期大学教授）
10	地域の活性化（村と町おこし）	市町村における地域起しについて概観してから、とくに雪国における過疎化した村の振興事業に目を向けて、洪水災害を契機にして集落移転を断行したり、国際的な村づくりに成功した事例について、動態地誌的な方法で考察を行う。	西川　治	西川　治
11	工業活動と地域社会	工業が国および地域の経済活動において重要な役割を果たしていることを述べた後、(1)技術革新と工業地域システム…について先端技術を柱に、(2)風土に根ざした地場産業…にいて動態的に示し、まとめとして、(3)工業の活性化と地域の発展について述べる。	竹内淳彦（日本工業大学教授）	竹内淳彦（日本工業大学教授）
12	日本企業の海外進出と文化交流	外資系企業の日本進出に支えられた日本の工業は、今日、広く海外に進出し、定着してきている。海外進出は、近代工業だけでなく地場産業でもみられ、合弁、単独の進出形態にかかわらず、その文化交流は、生産・生活（消費）、余暇の分野に及ぶ。地域社会に至った。	宮川泰夫（愛知教育大学教授）	宮川泰夫（愛知教育大学教授）
13	東京－城下町から世界都市へ	中央集権的な封建制度の下で、産業革命を経験しなかった都市としては世界最大人口となった城下町江戸は、近代化・現代化の過程で、世界最大の大都市圏人口をもつ東京圏へと変貌した。そのプロセスを追い、問題点、将来の展望を考察する。	正井泰夫（立正大学教授）	正井泰夫（立正大学教授）
14	世界を結ぶ地理情報システム	企業活動が海外旅行などグローバリゼーションが進む一方、地球規模のさまざまな環境問題が生じている。また、世界を結ぶ通信網を通じて各種の地理情報が流通・利用され、地域発展・環境対策などに用いられている。こうした問題について説明を行う。	久保幸夫（慶應義塾大学教授）	久保幸夫（慶應義塾大学教授）
15	地球社会と日本	外国人と日本人による日本国評価の変遷を世界地図史の中で通観して、地球社会における日本の地位を見定め、地球環境の改善と地球社会の接続的発展に向けて、日本が果たすべき役割を人文地理学の視点から考えてみたい。	西川　治	西川　治

＝政治学入門＝（R）

（主任講師：阿部　齊（放送大学教授））
（主任講師：中野勝郎（放送大学助教授））

全体のねらい

政治学の基礎概念とその相互の関連を明らかにすることで、政治学のより専門的な領域を学習するための出発点を提供したい。同時に、政治学の入門講義として、他の分野を学習する受講者にも、政治学のアウトラインがつかめるようにしたい。政治の世界に起こりつつある最近の変化にも留意する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	選挙	選挙を具体例として、政治の入門的説明を行う。あわせて、世論表明の最も重要な機会である選挙の意義を明らかにし、制限選挙から普通選挙への移行、選挙権の拡大、小選挙区制と比例代表制との比較、日本の選挙制度の特徴といった問題を考えてみたい。	阿部　齊（放送大学教授）	阿部　齊（放送大学教授）
2	政党	政党が選挙で果たす役割を考えながら、政党が現代の政治において占める位置を明らかにする。また、各国の政党制の現状を概観しつつ、多党制と二党制を比較する。さらに、他の国々の政党制との比較を通じて、わが国の政党制の特徴にも言及したい。	同上	同上
3	議会	議会は、現代政治の基本原則の一つである国民主権を実現するための最も重要な機関である。議会の発展の過程を概観しながら、議会が近代国家で中枢的な位置を占めるに至った理由を明らかにする。現在の議会が直面している課題にも言及する予定である。	同上	同上
4	政府の組織	現代政治の組織原理としての権力分立を検討し、政府組織の具体的類型としての議院内閣制と大統領制とを比較する。歴史的には、独自の類型としてソビエト制が存在したが、それが消滅して、大統領制に移行しつつある現状にもふれる。	同上	同上
5	行政の活動	現代政治で大きな比重を占める行政の活動を具体的に検討する。また、肥大の一途をたどってきた政府の規模に対して、小さな政府への転換を求める声が強まっていることにもふれる。さらに、行政を担当する官僚制組織の特徴にも言及したい。	同上	同上
6	利益集団	今世紀に入って、利益集団の圧力活動が活発になった背景をさぐるとともに、現代政治における利益集団の役割を明確にする。さらに、利益集団の圧力活動に伴って現れたロビイングや審議会の問題点を指摘し、最近の傾向である公共利益集団の台頭にもふれる。	同上	同上
7	地方自治	中央集権と地方分権を対比しながら、地方自治の意義を明らかにする。地方自治の徹底した形としての連邦制、中央政府と地方政府との間の政府間関係、団体自治と住民自治の二面性といった問題にふれ、次いで、住民参加や市民運動の意味を明らかにしたい。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	自由主義	自由主義の歴史的発展を概観した後、現代政治における自由主義の位置をさぐる。権力と自由、自由と平等、政治的自由と市民的自由、消極的自由と積極的自由、福祉国家と新自由主義、自由尊重主義と個人主義、日本の自由主義といった問題をとりあげる。	中野勝郎(放送大学助教授)	中野勝郎(放送大学助教授)
9	民主主義	民主主義の歴史的発展を概観した後、現代政治において民主主義が普遍性を獲得したこと明らかにする。19世紀前半における民主主義と自由主義との対抗関係、同後半における自由民主主義の成立、日本における民主主義の起源と発展などにもふれる。	同上	同上
10	社会主義	民主主義のもとで経済的平等を要求する立場から、社会主義が形成されたことを明らかにした後、マルクス主義の成立、フェビアン社会主義の発展、共産主義と社会民主主義の文化などを説明する。1980年代における社会主義の挫折にもふれたい。	同上	同上
11	大衆消費社会	19世紀的市民社会が今世紀前半に大衆社会に変貌したことを論じ、その大衆社会を背景として全体主義が成立したことにもふれる。その後、大衆社会は大衆消費社会に変容し、政治的には安定するが、社会的には管理的側面が肥大したことを明らかにする。	同上	同上
12	社会福祉	市民社会から大衆社会への移行とともに、政治的統合の必要性からも、社会福祉政策の制度化が不可避になることを明らかにする。社会福祉の充実は国民の受益者化を促進するが、それによって利益配分型の政治が支配的になることにもふれたい。	阿部　齊	阿部　齊
13	国家とナショナリズム	国家、社会、政府の区別を明らかにするとともに、国家が観念的な共同体であり、国家への帰属感を強めるためには、国旗や国歌などのシンボルを駆使せざるをえないこともふれる。国際化のもとでナショナリズムが強調される逆説にも言及したい。	中野勝郎	中野勝郎
14	国際化と政治	伝統的な内政と外政の区別が、国際化のもとで曖昧になりつつあることを説明し、内政のあらゆる面に、国際的な要因が影響を与えていることにふれる。また、各国に居住する外国人が増えるとともに「内なる国際化」の課題が生じていることにも注意を向ける。	阿部　齊	阿部　齊
15	日本の政治	日本の政治の現状を分析し、その課題をさぐる。明治国家の遺産と戦後の民主主義、自由民主党の一党優位体制、自民党の優位を支えている後援会活動、野党劣勢の原因とその課題などをとりあげ、日本の民主政治の将来を展望したい。	同上	同上

＝経済学入門＝（R）

〔主任講師：嘉治元郎（放送大学副学長）〕

全体のねらい

我々の日常の経済生活に則して、現代の経済学の骨組みを概説する。家計、企業、政府という経済単位の活動について論じ、経済社会の構造を明らかにする。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	経済生活と経済学	経済学とは何か　人間の経済活動 取引の行なわれる場－市場　消費財・サービスの市場 労働力の市場　企業の経済活動　家計の消費と貯蓄 資本の市場	嘉治元郎（放送大学副学長）	嘉治元郎（放送大学副学長）
2	家計の経済活動 Ⅰ 所得	家計の経済力　家計の所得　家計の資産 資産と所得	同上	同上
3	家計の経済活動 Ⅱ 消費と貯蓄	所得の処分　可処分所得　貯蓄　消費と貯蓄 日本の貯蓄率　最適な消費支出 個別家計の消費と総消費	同上	同上
4	企業の経済活動 Ⅰ 財の生産	企業の生産活動　生産の行程　生産活動の目的 費用と収入　物的資本	同上	同上
5	企業の経済活動 Ⅱ サービスの生産	財とサービス　サービスの重要性　サービスの種類 サービス生産の特色　公務と公共サービス	同上	同上
6	企業の経済活動 Ⅲ 金融	金融機関の経済活動　利子とは何か 資産の需要と供給　お金の便利さと利子率 資産の組み合せ	同上	同上
7	貨幣 －中央銀行の役割－	貨幣とは何か　金本位制　管理通貨制 通貨管理の目的　貨幣量管理の手段	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	市場の機能	市場とは何か　市場の種類　価格の機能 需要供給の均衡　市場機構の作用	嘉治元郎	嘉治元郎
9	経済社会の構造	巨視的（マクロ）理論と微視的（ミクロ）理論集計された経済量　一大家計の経済行動　一大企業の経済行動 粗投資と純投資	同上	同上
10	総需要の理論	経済の変動　消費の決定　投資の決定 ＧＮＰの決定	同上	同上
11	完全雇用をめぐって	雇用水準の決定　生産性　インフレーション	同上	同上
12	経済成長 －技術革新－	総供給能力　供給能力の決定要因　経済発展の諸要因 労働力の変化　生産設備の変化　技術の進歩	同上	同上
13	政府の経済活動	財政支出の種類　財政支出の規模 「小さい政府」をめぐる論議 政府の収入　租税の種類　税と所得の再配分 財政収支　公債の負担	同上	同上
14	対外経済関係	対外経済関係とは何か　対外経済関係の内容 国際収支表　貿易の理論　国際通貨 為替レートの変化　生産要素の国際的移動 経済分析の国際化	同上	同上
15	経済政策の目標	経済政策の役割　独占の禁止　巨視的経済政策の目標 完全雇用の達成と維持　経済の安定の実現 経済発展の促進　巨視的経済政策の手段 所得配分の公正化　適切な対外経済関係の実現	同上	同上

＝経営管理総論＝（Ｒ）

〔主任講師：熊谷智徳（放送大学教授）〕

全体のねらい

多くの経営学は、販売、財務、生産など個別職能学からなっている。本講は、経営体を社会へ、価値提供を継続遂行していく動態としてとらえ、その動く総形から個別課題と方法をとらえ、部分構造が互いに連合して経営目的を果していくのに有用な、思考と方法を与えることをねらいとしている。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	企業経営の実際－事例研究－	企業は、製品の開発・生産・販売で社会へ価値提供する役割を、営利を得て、優れた長期継続で果していく組織体である。 その経営には、調達・生産・販売・労務・財務の諸職能と、トップ・ミドル・第一線、ライン・スタッフの組織が経営合目的へ、一大合成体となって運営され活動していかなければならない。そして経年による環境変化適応への戦略経営を果たしていかなければならない。本講ではまはじめに、企業の戦後の経営発展の事例をあげ、どのような方策をとってきたかを考察する。	熊谷智徳（放送大学教授）	熊谷智徳（放送大学教授）
2	同　上		同　上	同　上
3	経営目的	経営目的を考察する。利潤目的、社会目的が価値目的へ統合されることを示し、産出総価値の長期高位実現に経営目的をおく。それが製品と品質Q、量と時間D、価格とコストCに支配されるとして、経営管理の基本課題を与える。	同　上	同　上
4	品質Qの構造(1)	品質をⅠ保有品質（機能・使用・社会生）、Ⅱ奥行品質（保全・改良・更改）、Ⅲライフサイクル（製品生涯と市場期）の3元総構造でとらえ、品質重点の移行、市場成熟と多品種化の構造などの変化法則を示す。製品と品質方策は変化への優位適応が原理となる。	同　上	同　上
5	品質Qの構造(2)			
6	時間Dとコスト Cの構造	製品工程とリードタイム。ジャストタイム。回転率。製品原価と加工費。利益率と回転率。市場充足率の進行によるＱＤＣの変化。ＱＤＣ行動特性と、企業・社会・民族の特性。	同　上	同　上
7	経営要求構造と性質	経営要素は、価値産出への実現要素で、価値変換対象体と変換手段の設備と労働からなる。各要素がＱＤＣ性能をもち、それが対応的に製品ＱＤＣを支配する性質を明らかにする。これが，経営体要素の設計と「管理」の基点となる。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	経営過程構造と「管理」	経営と管理は、共に計画・実行・評価（plan-do-see, P・D・S）の構造をもつ。これは、目的実現への過程構造である。広義「管理」を経営、狭義「管理」を管理とし、経営が開発・製造・販売としての大きなＰＤＳ、管理はその中の小さなｐｄｓとなる。	熊谷智徳	熊谷智徳
9	経営管理職能の体系構造	経営過程と各段階のＱＤＣ課題を主軸Ｘ、資材・設備・労働の要素軸をＹ、トップ、ミドル第一線の経営階層を垂直軸Ｚとする、立体３元マトリックスで、経営体の全職能が体系的にとらえられる。これは、組織と職能設計、経営情報設計への基礎となる。	同上	同上
10	価値条件経営と管理	製品開発から製造・販売・客先過程へ至る品質経営、各段階の品質課題実施運営の品質管理。同じく、需要の量と時間への経営と管理、コスト課題の経営と管理について、職能行動とそれをとらえる原理を示す。	同上	同上
11	経営要素の経営管理	資材の開発と調達システム開発、市場評価としての資材経営、調達の日常運営、設備開発と就役保全、次代転換としての設備経営、就役保全管理としての設備管理、同様に労務経営と管理について、職能構造とそれをとらえる原理を示す。	同上	同上
12	変化と適応－戦略経営－	製品市場と、経営要素市場と、社会と環境の変化が増している。製品と品質、量と時間、価格とコストへの変革、資材・設備・労働への変革、時には立地移転、事業転換へ至る変革をなしていかなければならない。変革へのマネジメントの高さが要請される。	同上	同上
13	日本的経営管理の発展	戦後日本経営と生産方式が世界的発展を遂げた。1980年代には、日本への視察者が日本からのそれを上回った。移入時代から移出時代へ入ったのである。発展の背景、ＴＱＣ、ＪＩＴ、ＴＰＭに見る日本的方式の内容と特質を探る。	同上	同上
14	経営と社会	経済成長ではいくつかの誤謬を冒してきた。国土の無差別工業開発、社会背観破壊などがある。これは富士山南面地域の工業開発による、富士山眺望の景観破壊に凝集されよう。自企業意識が高く、社会意識の低いための問題、市場原理をこえた問題が起こっている。	同上	同上
15	経営の国際化	第１次には、相手国の輸入規制で、第２次には経済原理で、製品と経営要素市場の国際化が進み、国際生産が進んできた。 そこには日本的経営、生産方式としての得意な問題以上に、異文化の労務、非国際性としてのわれわれの不得意な問題が待っている。	同上	同上

＝会計総論＝（ＴＶ）

〔主任講師：小川　洌（早稲田大学教授）〕

全体のねらい

この講義は企業会計の構造と機能の学習をねらいとしている。企業会計は複式簿記という計算システムによって成り立っているので、このシステムの概要について学び、その結果作成される財務諸表の内容とその観察方法についても解説する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	企業会計の機能と領域	企業会計は、企業の行う経済的諸活動を貨幣的数値によって記録・分類・整理し、その結果を財務諸表として総括する。それによって作り出される会計情報は企業の情報開示の手段であり、同時に企業の内部管理の資料としても役立つ。そこでまず、企業会計のもつこれらの諸機能とそれに関連するシステムの概要について説明する。	小川　洌（早稲田大学教授）	小川　洌（早稲田大学教授）
2	財務諸表の仕組み	財務諸表は複式簿記の計算システムによって作成される。そこでまず、財務諸表を構成する損益計算書と貸借対照表の構造と両者の関係について説明し、利益が損益計算書と貸借対照表の両者によって計算されるプロセスを概観する。	同　上	同　上
3	仕訳と転記	複式簿記は企業の経済活動を借方および貸方の２つの要素に分解し、それらを各項目ごとに分類し、試算表へと集計する。その際用いられる仕訳と転記という計算技法と数字の流れについて説明する。	同　上	同　上
4	試算表と精算表	試算表は計算記録の正確性を自動的に検証する機能を持っている。そこでまず、その仕組みについて説明し、さらに試算表の数値が損益計算書と貸借対照表に集計されるプロセスを精算表によって説明する。	同　上	同　上
5	企業会計の特質	企業会計は一般の計算とは異なるの特質を持っている。その基本的な考え方や計算の方法は「企業会計原則」としてとりまとめられている。ここではその中の一般的な諸原則について解説する。	同　上	同　上
6	損益計算書の様式	損益計算書は企業の損益をいくつかの段階に分けて計算・表示する。その際用いられる様々な損益の意味を明らかにし、段階区分計算の仕組みについて説明する。	同　上	同　上
7	収益・費用の測定と認識	企業の収益は一般に、売上高として計上される。しかし、収益として計上するにはいくつかの基本的に守らなければならないルールがある。また、費用の計上にも同様にいくつかの制約がある。ここでは、これらの基準について説明する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	貸借対照表の様式	貸借対照表に集計された資産・負債・資本の表示の基準について述べ、それぞれの項目の配列の基本的なルールについて詳細に解説する。	小川　洌	小川　洌
9	棚卸資産の評価	貸借対照表に計上する棚卸資産の価額をどのように算出するかについて述べる。この算出方法については、様々な方法が認められており、それらが企業にとってどのような意味をもっているかについて解説する。	同　上	同　上
10	固定資産の評価	貸借対照表に計上する固定資産の価額をどのように算出するかについて述べる。特に、取得価額の算定法と減価償却の諸方法について詳説する。減価償却の諸方法については、それらが企業の利益の算定にいかなる影響を与えるかについても触れる。	同　上	同　上
11	負債の会計	資本調達の重要な源泉である負債の意味について考える。特に、近年問題となっている社債などの取扱いついて説明する。また、負債のなかの一項目としての引当金の概要にも言及する。	同　上	同　上
12	資本の会計	株式会社の資本の性格とその内容について説明する。資本金、資本準備金、利益準備金、任意積立金などの項目について詳説する。また、利益処分の基本的なルールを具体的な処分の事例を挙げながら検討する。	同　上	同　上
13	ディスクロージャーと財務報告	商法の規定によって開示される営業報告書と証券取引法の規定によって開示される有価証券報告書の内容について説明する。また、財務諸表に対する監査の概要についても言及する。	同　上	同　上
14	財務諸表分析の諸方法	財務諸表を利用して企業の内容を観察しようとする際に必要な分析技術について説明する。特に、増減分析法、比率法、趨勢法などの諸方法を具体的に解説する。	同　上	同　上
15	財務諸表の分析指標	財務諸表を分析したデータをどのように評価するかについて検討する。ここでは具体的な事例などを交えながら分析結果の判断に当たっての重要なポイントについて述べる。	同　上	同　上

＝数　学　の　歴　史＝（R）

主任講師：長岡亮介（大東文化大学教授）

全体のねらい

数学とは完成された論理の体系で、厳格ではあるが人間性のないものととらえられがちである。しかしその形成過程を考えるときわめて人間的色彩にいろどられ、誤謬にもとづく論争などにみちている。この講義では不可謬として教えられる数学の可謬な側面、数学に対するもう一つの視野を獲得してもらう。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	序説：数学史とは何か	検　討　中	長岡亮介（大東文化大学教授）	長岡亮介（大東文化大学教授）
2	幾何学時代（Ⅰ）前史	〃	同　上	同　上
3	幾何学時代（Ⅱ）Eukleidesの「原論」第1巻	〃	同　上	同　上
4	幾何学時代（Ⅲ）Eukleidesの「原論」第5、10巻	〃	同　上	同　上
5	幾何学時代（Ⅳ）Archimedesの求積法	〃	同　上	同　上
6	代数解析時代（Ⅰ）Tartaglia、Cardaroによる方程式の研究	〃	同　上	同　上
7	代数解析時代（Ⅱ）Viete、Descartesの記号法	〃	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	代数解析時代(Ⅲ) Fermet、Gregory、Robervalによる接線法	検討中	長岡亮介	長岡亮介
9	代数解析時代(Ⅳ) Newtonの数学	〃	同上	同上
10	自然学との結合時代(Ⅰ) 前史	〃	同上	同上
11	自然学との結合時代(Ⅱ) Newtonの Principia	〃	同上	同上
12	自然学との結合時代(Ⅲ) 18世紀の数理物理学	〃	同上	同上
13	批判主義の時代(Ⅰ) 方程式の理論	〃	同上	同上
14	批判主義の時代(Ⅱ) 純粋数学の精神	〃	同上	同上
15	批判主義の時代(Ⅲ) 実数の理論	〃	同上	同上

＝微分積分学＝（ＴＶ）

〔主任講師：前原昭二（放送大学教授）〕

全体のねらい

微分積分における基本概念の解説とその簡単な応用について述べる。数学の他の分野のみならず、他の諸科学のための基礎科目としての性格から、理論より計算法を重視する。

高等学校程度の数学、とくに高等学校の微分積分についての知識は前提とする。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	導関数と微分	微分係数・導関数についての既知の事項を整理し、微分の概念を導入する。	前原昭二（放送大学教授）	前原昭二（放送大学教授）
2	逆三角関数	高等学校で扱われていない逆三角関数の定義を与え、その微分法を説明する。	同上	同上
3	不定積分	不定積分についての基本的事項の解説をする。	同上	同上
4	有理関数の不定積分	有理関数の不定積分がどのような関数の範囲で求められるかつにき、一般論の筋に沿いながら、具体例によって説明する。	同上	同上
5	平均値定理	平均値定理と、その簡単な応用について述べる。	同上	同上
6	テイラーの定理	テイラーの近似式を主軸にして、テイラーの定理を解説する。	同上	同上
7	無限級数	テイラー級数を理解するための準備として、無限級数についての諸概念を解説する。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	ベキ級数	ベキ級数がテイラー級数であること、および、基本的な関数のテイラー展開と、その収束範囲を示す。	前原昭二	前原昭二
9	平面曲線	微積分法を用いて曲線の性質を調べる方法の一端を示す。	同上	同上
10	定積分の定義の拡張	いわゆる特異積分について解説する。	同上	同上
11	偏導関数	2変数関数を例にとり、多変数関数の微分法について述べる。	同上	同上
12	重積分	2変数関数を例にとり、多変数関数の積分法について述べる。	同上	同上
13	重積分の変数変換	重積分の変数変換と、その簡単な応用を示す。	同上	同上
14	極限の定義	極限の厳密な定義といわれる“エプシロン・デルタ式”の極限の定義について解説する。	同上	同上
15	微積分の論理的構成	一変数の微積分の論理的な構成がどのようになっているかについて説明する。	同上	同上

＝地球と宇宙（地球篇）＝（ＴＶ）

〔主任講師：奈須紀幸（放送大学教授）
主任講師：小尾信彌（放送大学副学長）〕

全体のねらい

われわれの住む地球は宇宙の一員である。地球は固体地球とその上をおおう水圏および気圏よりなる。まず宇宙の中における地球の位置づけを認識し、ついで地球についての諸々の事象に探究の目を向ける。現在、我々が目にする地球に加えて地球の歴史についても学ぶ。以上の何れも基本・基礎的な立場に立って考究する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	宇宙の中の地球	地球は太陽系の中で水をたたえた唯一の惑星である。その太陽系は宇宙の中の銀河系に属する。日常われわれが意識する地球は巨大なスケールを持つものであるが、宇宙の中にあっては微小な存在である。このような宇宙の中における地球の位置づけを認識する。	奈須紀幸（放送大学教授） 小尾信彌（放送大学副学長）	奈須紀幸（放送大学教授） 小尾信彌（放送大学副学長）
2	地球の層圏	地球は気圏・水圏・固体地球の3圏によりなる。それぞれの圏は、さらに幾つかの層圏分れている。これら地球の層圏について、現在までに知られている知識の内容を学ぶ。	奈須紀幸	奈須紀幸
3	地球科学の発展	当然のことながら、人類は太古の昔より大地について様々な思索を行ってきた。そして長い年月をかけて地球の本質を解明し、その実像に迫ってきた。そのような地球科学の発展の経緯について学ぶ。	同上	同上
4	大気	気圏を構成する主体は大気である。太陽エネルギーは大気に対し大きな運動を行なう原動力を与える。大気の大循環、気圧、風、前線など大気のダイナミクスについて学ぶ。また天気や気候についても学ぶ。	同上	同上
5	海洋	水圏を構成する水分の大部分は海洋にたくわえられている。海洋は流体であるので絶えず動き易いという本質をもつ、海流、潮流、波浪など、いづれも海水の流動のあらわれである。これらの事項について学ぶ。また海底のもつ本質についても学ぶ。	同上	同上
6	固体地球	固体地球は層状構造をもつ、地表から地心へ向って、地殻、マントル、外核、内核よりなる。地殻とマントル上層の一部はプレートとして地球表層の固い部分を構成する。このプレートは動いている。これらについて学ぶ。さらに重力と地磁気についても学ぶ。	同上	同上
7	岩石と鉱物	地殻やプレートを構成する単位は種々の鉱物であり、1種または多種の鉱物の集合体が岩石である。岩石は主として造岩鉱物で構成される。岩石は火成岩、堆積岩、変成岩に3大別される。これらのことがらについて学ぶ。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	地層	堆積物は固化して堆積岩となる。堆積物や堆積岩は水平的なひろがりをもつ地層を形成する。地層の中にはよく化石を含む。地層の層序と対比は重要である。地層は変形して断層や褶曲を示すことがある。また整合、不整合関係を示すことがある。これらについて学ぶ。	奈須紀幸	奈須紀幸
9	地質時代	地球上に水がたたえられにようになってから地表における物質の循環がはじまり堆積岩が形成された。それから以後を地質時代という。対年代、絶対年代を用いて地質時代の実体は解明された。これらのことについて学ぶ。また地質図についても学ぶ。	同上	同上
10	固体地球の表層	固体地球表層の実体とその変遷の歴史については19世紀後半より解明が大いに進んだ。ゴードワナ大陸、大陸移動説の提唱から古地磁気研究の結果による大陸移動説の復活、中火海嶺系の発見。大洋底拡大説の提唱へと時間経過を追って学ぶ。	同上	同上
11	プレートテクトニクス	大洋底拡大説は数年後プレートテクトニクス説へ進展した。その間に大洋底地磁気異常の縞模様の発見、トランスフォーム断層の提唱、ホットスポット説の提唱があった。これらはプレートテクトニクス説の中でも生かされた。これらの事項について学ぶ。	同上	同上
12	地震	大洋底拡大説およびプレートテクトニクス説が提唱されてから、それらとの関係で地震発生のメカニズムが随分と明らかになってきた。これらの事情について学ぶ。また地震の種類、規模、震度などについて学ぶ。	同上	同上
13	火山	プレート境界はよく火山が形成される。とくに活動縁辺域であるプレートの沈込み帯は火山帯をともなう。さらに中央海嶺系やホットスポットには火山が形成されやすい。このような火山の形成の過程について学ぶ。さらに火山の種類について学ぶ。	同上	同上
14	地球の歴史	地球の創世以来の歴史は近年随分とよく解明されてきた。地質時代以前、それから地質時代に入って生物の発生と進化をともなう地表の変遷の歴史は多彩を極める。先カンブリア時代、古生代、中生代、新生代を通じてこうした地球の変遷の歴史を学ぶ。	同上	同上
15	日本列島	日本列島は大局的には太平洋プレートがユーラシアプレートの下へ沈み込む変動帯に位置する。これは現状である。この点についてまず学ぶ。ついで日本列島の地史について学ぶ。さらに地下資源について学ぶ。	同上	同上

＝地球と宇宙（宇宙篇）＝（ＴＶ）

主任講師：小尾信彌（放送大学副学長）
（主任講師：奈須紀幸（放送大学教授））

全体のねらい

地球と宇宙という私たちの自然環境を学ぶ科目のなかで、ここでは宇宙について学ぶ。人間の宇宙観の歴史に始まって、太陽系や恒星、銀河系や銀河について学習した後に、宇宙全体の構造や進化、そして最後に地球を含む太陽系の起源を学んで地球編につなぐ。全体を定量的に扱うわけではないが、可能な限り事柄を量的に理解させる。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	天文学の歴史Ⅰ	天文学は最も古く興った科学の１つである。ここではギリシア天文学から16～17世紀における太陽系の確率、それに続く古典天文学の発展や恒星天文学の誕生、さらに天体分光学から天体物理学が始まる19世紀末までを扱う。	小尾信彌（放送大学副学長）	小尾信彌（放送大学副学長）
2	〃　Ⅱ	今世紀に入って天文学は面目を一新して、大反射鏡の建造、新しい物理学による物質観や時空観の革新、電波観測や宇宙開発、コンピューターなどの技術開発によって、天文学も大きく発展し、人間の宇宙観も一新した。それらの発展の経過を学ぶ。	同　上	同　上
3	現代の天体観測	ケプラーの法則からビッグバン宇宙の検証まで、宇宙の知識は宇宙の観測にもとづいている。今日では、光学観測ばかりでなく電波観測や大気圏内の観測が重要な位置をしめているが、それら種々の観測を概観し、また分光観測など観測の基本についても学ぶ。	同　上	同　上
4	太陽系の運動	惑星は距離が近いため明るく見え、その動きも古くから観測され、占星術が興り、天動説や地動説が唱えられ、ニュートンに至って力学的な太陽系像が確立した。ここでは太陽系における運動の典型的なものとして、惑星の運動について学ぶ。	同　上	同　上
5	太陽系の天体	惑星や小惑星、衛生、隕石、彗星や流星物質など太陽を回る無数の天体は、呼び名が異なるように、大きさや外観などをはじめとする性質に大きな違いが見られる。ここでは惑星をはじめ太陽系の主要な天体について学ぶ。	同　上	同　上
6	太　陽	太陽系の中心である太陽はふつうの恒星であるが、距離が近いため、表面の現象やその変化が観測できる唯一の恒星である。恒星に関する知識のかなりのものは、太陽の観測や研究が基礎になっているし、また地球に大きな影響をもつ点でも極めて重要な天体である。	同　上	同　上
7	恒　星　Ⅰ	自分でエネルギーを放って輝いている点で、恒星は太陽と同種の天体である。しかし、質量や半径、光度は広い範囲にわたっている。恒星についての種々の性質を知る手段や、その結果について学ぶ。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	恒星 Ⅱ	分光観測によって、表面の温度や化学組成をはじめ恒星についての多くの情報を得ることができる。ここでは分光観測の原理やその成果を学び、また光度や表面温度、質量などの個々の性質の間にみられる統計的な関係についても学ぶ。	小尾信彌	小尾信彌
9	恒星の進化	恒星は星間雲のなかで誕生し、質量によって異なる寿命を終る。その間で主系列星や巨星、超巨星など特徴の大きく異なる状態を経過する。また寿命を終る際も、質量により様相が異なる。ここでは進化を研究する原理から、進化の各段階の特徴を学ぶ。	同上	同上
10	銀河系の天体	銀河系には新星や超新星などの変わった天体や、星団のような恒星集団も見られる。また星間には星間物質や星間雲、さらに電波天体やX線天体なども見られる。これら銀河系の各種の天体について学ぶ。	同上	同上
11	銀河系の構造	われわれのまわれの恒星は、星間物質や星間雲とともに直径8～10万光年の薄い円盤状の集団をつくっている。これが銀河系である。ここでは銀河系研究の歴史を概観した後で、銀河系の構造や運動、また銀河系天体の種族について学ぶ。	同上	同上
12	銀河の世界	銀河系の外には、銀河系と対等な別な銀河が無数に観測されている。これら銀河の距離や大きさ、電波、さらに型などについて学ぶ。さらに、銀河やクエーサーなど特異な銀河や銀河集団について学ぶ。	同上	同上
13	宇宙の構造	宇宙の全体的な特徴をまとめて概観したあとで、相対論的宇宙論の基礎なっているフリードマンの宇宙のモデルについて学ぶ。またフリードマンのモデルに基づく膨張宇宙の性質について学ぶ。	同上	同上
14	宇宙の進化	われわれの宇宙は、およそ150億年前にビッグ・バンの大爆発で開闢した。その直後に現れた素粒子と光は、膨張し冷えていく宇宙の中で元素をつくり、天体そっくり、それらは進化を続けて現在の宇宙をつくっている。このような膨張宇宙の進化について学ぶ。	同上	同上
15	宇宙の進化と地球	宇宙で物質が優勢となった後に、銀河や恒星のような現在われわれが観測する天体が形成され、進化した。その過程のなかで、現在の宇宙に見られる元素も進化した。そのなかで地球をはじめとする太陽系の天体が形成された過程について学ぶ。	小尾信彌 奈須紀幸 (放送大学教授)	小尾信彌 奈須紀幸 (放送大学教授)

＝英語Ⅰ（'90）＝（R）

－Rebuilding the Foundation of Your English－

〔主任講師：比嘉正範（放送大学教授）
主任講師：平賀正子（放送大学助教授）〕

全体のねらい

高等学校までに学習した英語の活性化をはかり、英語の基礎力を改めて養うことがこの科目の目標である。日本人にとって英語を難しくしている要因を、日本語と英語との比較と文法・語彙・構文の解説などを通して説明し、英語がより易しく使えるようにする。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	はじめに	なぜ英語は難しいのかについて考える。この科目の概要を述べ、学習の仕方を説明する。	比嘉正範（放送大学教授） 平賀正子（放送大学助教授）
2	英文法の復習	基本的な英語の文法について復習する。文型、文の要素、品詞、態、話法、などについて、高等学校までに学習したことを再検討する。	同上
3	日本語からみた英語(1)	日本語と英語の文の構造の違いを、「省略」という点から探る。日本語では省略されるものが、英語では省略されずに表現されることが多い。日本語ではどのように省略がおこり、それが何故英語を学ぶ時の難しさにつながるのかについて説明する。	同上
4	日本語からみた英語(2)	日本語と英語の文や表現の構造の違いを、「曖昧さ」という点から探る。日本語には曖昧な表現が多いと言われているが、それが英語を学ぶ時、どのような影響を与えるのかについて述べる。	同上
5	日本語にない英語の特徴(1)	英語にはあって日本語にはない再帰代名詞、無生物主語などの文法的な特徴を再検討する。	同上
6	日本語にない英語の特徴(2)	英語にはあって日本語にはない仮主語－真主語文のような文の構文的な特徴を再検討する。	同上
7	重要な品詞(1)－動詞	英語の動詞と、動詞に関係する時制、態、などについて再検討する。また、動詞から名詞、形容詞への品詞交換の方法についても説明を加える。	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	重要な品詞(2)ー名詞および形容詞	英語の名詞と形容詞を再検討する。また、それぞれの品詞から他の品詞への交換についても説明を加える。	比嘉正範 平賀正子
9	語　　彙	いくつかの標準的な語彙表の活用法を中心に、語彙力のつけ方を検討する。	同　上
10	難かしい英文(1)ー長文	なぜ文は長くなるか、長文を短文にするにはどうしたらよいか、について説明し、難しい長文を易しく理解できるようにする。	同　上
11	難しい英文(2)ー省略文	省略はなぜおこるかについて説明し、省略のある英文になじませる。	同　上
12	難しい英文(3)ー美文・独創文	文学作品に見るような、美しい表現や独創的な表現がなぜ難しいかについて説明し、それらを理解するてがかりを与える。	同　上
13	難しい英文(4)ー丁寧文	英語に見られる敬語や丁寧表現の特徴について説明し、理解を深めさせる。	同　上
14	難しい英文(5)ー公式文書	公式文書独特の言い回しについて説明する。	同　上
15	ま　と　め	この科目で学んだことの総復習をし、知識を知識のまま終らせることなく、実際の英語の経験の中で役立たせるには、どのようにしたらよいかについて、今後の学習の方向を示す。	同　上

＝ 英　語　Ⅱ ＝ （R）

Creative Communication in Social Situations

〔主任講師：比嘉正範（放送大学教授）
主任講師：平賀正子（放送大学助教授）〕

全体のねらい

これまでに習得した英語の基礎を活用して、自分で英語の文を作り、コミュニケーションを進めていくことができるようになることがこの科目の目標である。コミュニケーションの仕組みを学ぶと同時に、英語文化についての基本的な知識を身につけて、具体的な人間関係・状況・場面に応じた英語が使えるようにする。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	はじめに	心構え、コミュニケーションの構造、人間関係のコミュニケーションの言語的特徴、および印刷教材に関する注意事項に関して説明する。	比嘉正範（放送大学教授） 平賀正子（放送大学助教授）
2	Thanking and Responding	コミュニケーションの基本である、お礼の言い方、感謝の気持の表し方、および問いかけや依頼に対する応じ方や断り方について説明する。	同上
3	Apologizing and Interrupting	あやまり方、わび方、弁解の仕方、および相手の話のさえぎり方について説明する。	同上
4	Openings and Closings	直接対面している相手や電話の相手との話し方などを例にして、出会いのあいさつや別れのあいさつなどを紹介する。	同上
5	Makig Introductions and Starring Conversations	人を紹介する時、紹介された時、あるいは自己紹介をする時の話し方について、また会話の始め方について説明する。呼称、敬称、名前の呼び方などについても説明する。	同上
6	Inviting and Treating	招待をする時、受ける時、断る時、および人にごちそうするときのコミュニケーションについて説明する。	同上
7	Giving and Receiving	人に贈り物をする時、また人から贈り物を受ける時のコミュニケーションを紹介する。また、助力や助言の提供の仕方についても説明する。	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	Asking a Favor and Getting Permission	相手に何か頼みごとをする時の言い方、および相手から許可や承諾を得るための話し方について説明する。「ていねいさ」の度合も検討する。	比嘉正範 平賀正子
9	Requesting Information and Giving Directions	いろいろな情報を得るための物の聞き方、道順などの教え方や用具などの使い方の説明の仕方、またその確認の仕方について説明する。	同　上
10	Complimenting and Correcting	お世辞の言い方、おだて方やほめ方について、またしかり方や注意の仕方、不満や不平の言い方について説明する。	同　上
11	Congraturating and Consoling	お祝いの述べ方、喜びのわかちあい方、なぐさめ方、悲しみのわかちあい方について説明する。	同　上
12	Listening and Interacting	相づちの打ち方も含めて、相手の話の上手な引き出し方や相手の関心の引き方について説明する。	同　上
13	Asking Preferences and Making Choices	好き嫌いの聞き方や表現の仕方について説明する。	同　上
14	Agteeing and Disagreeing	議論の仕方と同意の仕方、反対の仕方、妥協の仕方について説明する。	同　上
15	ま　と　め	本書で取り上げたことや強調したことなどをまとめて復習する。	同　上

＝ 英 語 Ⅲ ＝ （TV）

〔主任講師：鈴木　博（東京大学教授）〕

全体のねらい

映画化された文学作品を二つ使って、普通に話されている英語を聞いて理解する力を養成する。毎回、映画を5、6分ずつ学習し、映画全体を学習し終ったところで映画を通して視聴する。発音の解説と口頭練習も聴解力養成に資する目的で行う。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	The Necklace —1—	モーパッサンの「首飾り」を現代のアメリカに場面を置き換えてドラマ化したもの。 あらすじ：マティは友人ジーンの豪華な暮しぶりを見て意気消沈している。晩の食卓で夫が面白い話をしても乗ってこない。 発音コーナー：母音図の見方	鈴木　博（東京大学教授） 高山一郎（東京大学助教授） Dennis E. Schneider（東京大学外国人教師）
2	The Necklace —2—	前回の復習とテスト あらすじ：妻を喜ばせようとして手にいれたパーティの招待状を見せると妻は着て行くものがないと言う。ドレスを手に入れるとアクセサリーを借りにジーンのところへ行く。 発音コーナー：母音図上の個々の音の位置	同　上
3	The Necklace —3—	前回の復習とテスト あらすじ：パーティで人気の的になり大いに満足して帰宅したマティが首飾りが無くなっているのに気が付く。パーティ会場へ電話すると首飾りの落し物は届いていない。 発音コーナー：二重母音	同　上
4	The Necklace —4—	前回の復習とテスト あらすじ：代わりの首飾りを返そうと宝石商で値段を聞くと7万ドルとのこと。支払い能力を遥かに越えた額である。八方手を尽くし、ジーンには首飾りは修理中と電話する。 発音コーナー：破裂音、破擦音、摩擦音	同　上
5	The Necklace —5—	前回の復習とテスト あらすじ：遂に家を売り多額の借金をしてダイヤモンドの首飾りを作って返す。ジョージは借金返済のために働き続ける。5年たっても借金の半分も返済できない。 発音コーナー：鼻音、〔l〕,〔r〕,〔w〕,〔j〕	同　上
6	The Necklace —6—	前回の復習とテスト あらすじ：やっと借金を返済し終えた10年後のある日マティは湖のほとりでジーンを見て話しかける。マティの話を聞いてジーンは驚く。 発音コーナー：英語のリズム	同　上
7	The Man that Corrupted Hadleyburg —1—	このフィルムはマーク・トウエイン原作「ハドリバーグを堕落させた男」をドラマ化したものである。約40分の作品を8回にわたって学習し、9回目に通して視聴する。 発音コーナー：弱形—その1	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	The Man that Corrupted Hadleyburg —2—	前回の復習とテスト 発音コーナー：弱形—その２	鈴木　博 高山一郎 Dennis E. schneider
9	The Man that Corrupted Hadleyburg —3—	前回の復習とテスト 発音コーナー：同化—その１	同　上
10	The Man that Corrupted Hadleyburg —4—	前回の復習とテスト 発音コーナー：同化—その２	同　上
11	The Man that Corrupted Hadleyburg —5—	前回の復習とテスト 発音コーナー：音の連結	同　上
12	The Man that Corrupted Hadleyburg —6—	前回の復習とテスト 発音コーナー：不完全破裂	同　上
13	The Man that Corrupted Hadleyburg —7—	前回の復習とテスト 発音コーナー：gonna とwanna	同　上
14	The Man that Corrupted Hadleyburg —8—	前回の復習とテスト 発音コーナー：イントネーション	同　上
15	The Man that Corrupted Hadleyburg —9—	前回の復習とテスト 映画を通して視聴する。	同　上

＝ 英　語　Ⅳ ＝（TV）

An Introduction to Living English Speech (2)

― ドラマの英語(2) ―

〔主任講師：國吉丈夫（千葉大学教授）〕

全体のねらい

話されている、ありのままの姿の英語を学習の対象とする。標準的な英語が使われているテレビドラマを素材とし、ことばが使われている場面や、身体的動きなどの非言語情報などと関連させながら、主として音声英語の理解力および表現力の養成を目指す。文字英語の学習にはドラマのスクリプトが音声英語と一体の形で扱われる。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	"An Eye to the Future" ―1―	PHONETICS Corner：英語の母音と子音	國吉丈夫（千葉大学教授）
2	"An Eye to the Future" ―2―	PHONETICS Corner：日本語と英語の音声の流れの違い	同　上
3	"An Eye to the Future" ―3―	PHONETICS Corner：英語の強勢アクセント	同　上
4	"An Eye to the Future" ―4―	PHONETICS Corner：文表現の強勢音節と弱強勢音節	同　上
5	"An Eye to the Future" ―5―	PHONETICS Corner：英語文表現の強調と強勢	同　上
6	"An Eye to the Future" ―6―	PHONETICS Corner：英語のリズム	同　上
7	"An Eye to the Future" ―7―	PHONETICS Corner：英語イントネーション	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	“An Eye to the Future” －8－	PHONETICS Corner：英語イントネーションの基本形	國吉丈夫
9	“Let's Marry Liz” －1－	PHONETICS Corner：文表現とイントネーション	同　上
10	“Let's Marry Liz” －2－	PHONETICS Corner：英語のテンポとポーズ	同　上
11	“Let's Marry Liz” －3－	PHONETICS Corner：声の音量の変化	同　上
12	“Let's Marry Liz” －4－	PHONETICS Corner：声の音質の変化	同　上
13	“Let's Marry Liz” －5－	PHONETICS Corner：音声の流れ：要素の分析と総合的効果	同　上
14	“Let's Marry Liz” －6－	PHONETICS Corner：いろいろな英語：スタイルの違い	同　上
15	“Let's Marry Liz” －7－	PHONETICS Corner：いろいろな英語：方言の違い	同　上

＝　英　語　V　＝（R）

Paraphrasing Difficult English

〔主任講師：比嘉正範（放送大学教授）
主任講師：ニコラス・ジョン・ティール（同志社女子大学教授）〕

全体のねらい

この科目の目的は(1)英語の長い文をいくつかの短い文で言い替えることができるようになること、その結果(2)構造の複雑な英文が読めるようになること、(3)日本に関する教材を読み、日本の歴史、社会、文化などについて英語で語れるようになることである。（この科目は英語Ⅱ－Ｂ１を改訂したものであり、従って、すでに英語Ⅱ－Ｂ１受講し単位を取得した学生の登録は認められない。）

回	テ　ー　マ	内　容	担当講師（所属・氏名）
1	Introduction	構造が複雑で難しい英文をパラフレーズする基本的な方法とこの科目の学習方法などを説明する。	比嘉正範（放送大学教授） ニコラス・ジョン・ティール（同志社女子大学教授）
2	Where They Came From	日本人はどこからやってきたかを人類学的な見地から論じる。	同　上
3	Japan Becomes Buddhist	仏教がどのようにして日本に伝来し、どのように受容されたかを説明する。	同　上
4	The Samurai	日本のかっての封建社会で重要な役割を演じたさむらい（＝武士）の発生、成長、特性などを述べる。	同　上
5	Modern Bureaucracy	日本の官僚制の特徴を説明し、官僚と政治家との関係を論じる。	同　上
6	Educating the Nation	寺小屋教育の発達、特徴、問題点などを説明する。	同　上
7	Japan's Two Constitutions	明治憲法と第二次大戦後の新憲法の特徴を説明し、日本とヨーロッパにおける立憲君主制の差を論じる。	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	Government and Politics	明治維新後における日本政府の成立および議会政治と政党政治の発達と問題点を説明する。	比　嘉　正　範 ニコラス・ジョンティール
9	The Family System	明治時代に法制化された日本の学族制度が、第二次大戦後どのように変化してきているかを説明する。	同　　上
10	Leisure	日本人にとって余暇とは何か、趣味とは何かを論じる。	同　　上
11	Industrial Revolution	十九世紀末に始まった日本の産業革命はどのようにして明治政府によって推進されたかを説明し、日本の産業化が成功した要因を探る。	同　　上
12	Imitators or Innovators ?	日本人は模倣能力に優れ、創造力に欠けていると一般に言われているが、人類の文化を発達させるのに模倣が重要な役割を果たしてきたことを論じる。	同　　上
13	Police and Crime	交番に代表される日本の警察は、外国の警察に比べて犯罪の予防と犯人の検挙に良い成績をあげているが、この要因が何であるかを探る。	同　　上
14	New Town	第二次大戦後の急激な都市化がニュータウンと呼ばれる住宅団地を発達させてきたが、この新しい住宅街の特徴を説明する。	同　　上
15	An Ageing Society	高齢者が増えてきた日本における人口問題、出生率と育児の問題、老人の福祉の問題などを検討する。	同　　上

＝英　語　Ⅵ＝（R）

Advanced Reading Skills

主任講師：山内久明（東京大学教授）
主任講師：グレアム・ロー（恵泉女学園大学助教授）

全体のねらい

英語Ⅰ－Ⅷの中での位置付けによると、英語Ⅵは、文学作品、特にフィクションからの抜萃を読む作業を通じて、文化的コンテクストの中で現代英語に習熟することを目指している。二人の講師の協力によって、テクストの部分的理解を超えて合的理解に到達するよう、さまざまな試みを行いたい。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	From George Orwell's Nineteen Eighty-Four Ⅰ	George Orwell's, Nineteen Eighty Four Ⅰ 1984(1949).	山内久明（東京大学教授）グレアム・ロー（恵泉女学園大学助教授）
2	From George Orwell's Nineteen Eighty-Four Ⅱ	〃 Ⅱ 〃	同上
3	From William Golding's Lord of the Flies Ⅰ	William Golding's, Lord of the Flies (1954).	同上
4	From William Golding's Lord of the Flies Ⅱ	〃	同上
5	From John Wain's Hurry On Down	John Wain's, Hurry On Down (1953).	同上
6	From John Braine's Room at the Top	John Braine's Room at the Top (157).	同上
7	From Iris Murdoch's An Unofficial Rose Ⅰ	Iris Murdoch's An Unofficial Rose Ⅰ (1962).	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	From Iris Murdoch's An Unofficial Rose Ⅱ	Iris Murdoch's An Unofficial Rose Ⅱ (1962).	山内久明 グレアム・ロー
9	From David Lodge's The British Museum is Falling Down	David Lodge's, The British Museum is Falling Down (1965).	同　上
10	From Muriel Spark's The Driver's Seat Ⅰ	Muriel Spark's, The Driver's Seat (1970). Ⅰ	同　上
11	From Muriel Spark's The Driver's Seat Ⅱ	〃 Ⅱ	同　上
12	From Margaret Drabble's The Ice Age	Margaret Drabble's the Ice Age.	同　上
13	From John Fowles's Mantissa	John Fowles's, Mantissa (1982).	同　上
14	From Timothy Mo's Sour Sweet	Timothy Mo's, Sour Sweet (1982).	同　上
15	From Kazuo Ishiguro's A Pale View of Hills	Kozuo Ishiguro's, A Pale View of Hills (1982).	同　上

＝英　語　Ⅶ＝（R）

Reading Academic English

〔主任講師：比嘉正範（放送大学教授）
　主任講師：ニコラス・ジョン・ティール（同志社女子大学教授）〕

全体のねらい

この科目の基本的な目的は、受講者が学術的な内容の英文を読めるようになることである。そのための入門的な教材として、学問分野の紹介文を使うことにした。このような英文に慣れることによって論文調の文章を読む能力を養っていきたい。（この科目は英語Ⅱ－Ｂ２を改訂したものであり、従って、すでに英語Ⅱ－Ｂ２を受講し単位を取得した学生の登録は認められない。

回	テ　ー　マ	内　容	担当講師（所属・氏名）
1	INTRODUCTION	This lesson is an introduction to the goals, structure and content of the course, with advice on how to study for it and suggestions for further reading.	比嘉正範（放送大学教授） ニコラス・ジョン・ティール（同志社女子大学教授）
2	PHILOSOPHY	This lesson is an introduction to Philosophy, the study of knowledge of and belief in reality.	同　上
3	ANTHROPOLOGY	This lesson is an introduction to Anthropology, the study of humanity and human culture.	同　上
4	ARCHAEOLOGY	This lesson is an introduction to Archaeology, the study of the remains of past human cultures.	同　上
5	SOCIOLOGY	This lesson is an introduction to Sociology, the study of the individuals, groups and institutions that make up society.	同　上
6	PSYCHOLOGY	This lesson is an introduction to Psychology, the study of mental processes and behavior.	同　上
7	LEARNING	This lesson is an introduction to Learning, the process by which changes in behavior result from experience or practice.	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	PHYSICS	This lesson is an introduction to Physics, the study of how the world around us is put together and how it changes.	比嘉正範 ニコラス・ジョン・ティール
9	ASTRONOMY	This lesson is an introduction to Astronomy, the study of the stars, planets, and other objects that make up the universe.	同　上
10	HOME ECONOMICS	This lesson is an introduction to Home Economics, the study of the management of a household.	同　上
11	HEALTH	This lesson is an introduction to Health, the study of physical, mental, and social well-being.	同　上
12	ECOLOGY	This lesson is an introduction to Ecology, the branch of biology that deals with relationships which living things have to each other and to their environment.	同　上
13	BUSINESS	This lesson is an introduction to Business, the activities of all commercial producers of goods and services.	同　上
14	LAW	This lesson is an introduction to Law, the rules under which a society is governed.	同　上
15	STATISTICS	This lesson is an introduction to Statistics, a set of methods used to collect and analyze data.	同　上

＝ドイツ語Ⅰ＝（TV）

主任講師：辻　　理（東京大学名誉教授）
主任講師：中山　純（明治学院大学教授）

全体のねらい

ドイツ語Ⅰは全課のカリキュラムを入門編と基礎編に分けて、発音や語形変化の基礎的な知識から始めて、文を作る為の最低限の文法知識を習得するところまでを学習する。具体的にはまず最初の5課で、ドイツ語の発音や読み方の練習を中心に置きながら、難解とされる語形変化の仕組みを見て、ドイツ語の言語として特長の概要を摑むようにする。基礎編では、色々な状況の中でのドイツ語を学びながら、基本語彙を増やしていくように努める。目標は、ドイツ語を学習していく上での土台を作ることである。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	第1課 ドイツ語案内	1.はじめに 1-1 ドイツ語とはどのような言葉か？ 1-2.ドイツ語はどこで使われているか？ 1-3.ドイツ語人口はどのくらいいるか？ 2.発音 2-1.文字の種類 2-2.音の種類 2-3.発音の原則	辻　理（東京大学名誉教授） 中山　純（明治学院大学教授）
2	第2課 品詞について	1.品詞の分類規準 1-1.品詞 2.動詞について 2-1.動詞の不定形と語幹・語尾 2-2.動詞と格	中山　純
3	第3課 変化と一致について	1.動詞の人称変化 1-1.人称とは何か？ 1-2.人称と数 1-3.人称代名詞と変化形 2.名詞の格変化 2-1.名詞の性と冠詞 2-2.定冠詞つきの名詞の格変化 2-3.不定冠詞つきの名詞の格変化 2-4.定形と名詞の格変化 3.呼応一致について	同上
4	第4課 語順と文成分	1.不定句の作り方 2.語順について 2-1.定形の位置 2-2.その他の成分の語順 3.文成分について 4.コンテクストについて	同上
5	第5課 時称と話法	1.時称について 1-1.動詞の3基本形 1-2. sein, haben, werdenの3基本形 1-3. 6時称の作り方 1-4.時称の用法 1-5.時称の相互関係 2.話法について 2-1.動詞による話法 2-2.助動詞による話法 2-3.その他の話法の表現	同上
6	第6課 Was ist das？	1.品物を買う 1-1.発音練習 1-2.Was ist das？ 1-3.動詞の人称変化 2.名詞の性別 2-1.意味による見分け方 2-2.形による見分け方	同上
7	第7課 Was siehst du？	1.発音練習 1-1.Was kaufen Sie？ 2.動詞の人称変化 2-1.語尾変化の練習 2-2.3人称の形の練習 3.名詞の複数形 3-1.複数形の格変化 3-2.特殊な格変化をする名詞 4. 2・3人称単数で幹母音が変音する動詞 4-1. つづりが変わる動詞 4-2. sein, haben, werden の現在人称変化 5. duとSieの使い分け方 6.疑問代名詞	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
8	第8課 Wem gehort Wagen ?	1.発音練習 1-1.動詞essenを使って 2.職業を尋ねる 2-1.発展練習 2-2.Was macht er denn gern? 2-3.発展練習 3.名詞に冠詞をつけない用法 3-1.男性弱変化名詞の格変化 3-2.人称代名詞の格変化 4. 3格目的語をとる動詞	中山　純
9	第9課 Ich schenke dir ein Buch	1.発音練習 1-1.発展練習 1-2.人の名前を尋ねる 2.前置詞を含む文 3.形容詞を使った練習 4.決定疑問文における定形の位置 4-1. 3格と4格目的語を要求する動詞 4-2. 3格と4格の目的語の語順 5.形容詞 6.前置詞について	同　上
10	第10課 In der Stadt	1.発音練習 1-1.発展練習 1-2.nichtを使って 2.前置詞を使った表現 2-1.発展練習 3.否定の表現 4.前置詞について 4-1.3格支配の前置詞 4-3. 3•4格支配の前置詞 5.不定代名詞 jeder	同　上
11	第11課 Die Burgpassage	1.発音練習 1-1.発展練習 2.分離動詞の練習 2-1.発展練習 3.非人称表現 3-1.形容詞の名詞化 3-2.不定代名詞のman 4. 分離動詞 4-1.非分離動詞 4-2.分離・非分離	同　上
12	第12課 Verschiedene Berufe	1.発音練習 1-1.指示代名詞を使った練習 1-2.所有代名詞の練習 1-3.発展練習 2.疑問副詞 3.冠詞類 3-1.定冠詞類の格変化 3-2.不定冠詞類の格変化	同　上
13	第13課 Im Kaufhaus	1. 発音練習 1-1.発展練習 2. 形容詞を使って 2-1.発展練習 3. 形容詞の付加語的用法	同　上
14	第14課 Ein Tag von Herrn Liebau	1.発音練習 2.Ein Tag von Herrn Liebau 2-1.Er steht auf. 2-2.Er zieht sich an. 2-3.Er geht aus seiner Wohnung. 2-4.Wie sieht Ihr Arbeitstag aus? 2-5.Er arbeitet im Buro. 3.指示代名詞 4.副詞 5.再帰動詞と再帰代名詞	同　上
15	第15課 Freizeit	1.発音練習 1-1.話法の助動詞の練習 2. In der Stadt 2-1.ガソリンスタンド 3.数詞 4.話法の助動詞 4-1.話法の助動詞の人称変化 4-2.話法の助動詞の意味 4-3.話法の助動詞の単独用法 4-4.話法の助動詞に準ずる動詞	辻　堤 中山　純

＝ドイツ語Ⅱ＝（TV）

主任講師：辻　　理（東京大学名誉教授）
主任講師：中山　純（明治学院大学教授）

全体のねらい

ドイツ語Ⅱでは、語学スケッチを見ながら、生きたドイツ語の習得を目指す。言葉だけではなく、ドイツでの様々な生活の場面を鑑賞しながら、地誌的な知識をも深めていく。文法知識としては、副文や話法、また「態」等単純な語形変化を越えたものについて練習する。この段階から、積極的に視・聴・覚の語学の3要素を配慮した学習をしていく。ドイツ語Ⅱを修了した時点で、ドイツ語の初級学校文法の知識を習得し、1,500語程度の生活語を中心とする単語能力を身に着けることを目標とする。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	第1課 Wir stellen uns vor	TEXT1 Die Stadt Celle liegt… TEXT2 Selbstverstellung TEXT3 Die Umgebung 1.前置詞と定冠詞の融合 2.形容詞の比較級と最高級 3.形容詞の比較の用法 3-1so＋原級＋wie 3-2比較級＋als 3-3 immer＋比較級；比較級＋比較級 3-4 je＋比較級、desto〔または um so〕＋比較級 3-5 最高級の用法	辻　理（東京大学名誉教授） 中山　純（明治学院大学教授）
2	第2課 Am Fruhstuckstisch	TEXT1 Morgens TEXT2 In der Backerei TEXT3 Am Fruhstuckstisch 1.wissen の人称変化 2.形容詞の名詞化 3.数詞	同　上
3	第3課 Die Hausarbeit	TEXT1 Vormittags TEXT2 In der Reinigung TEXT3 In Lebensmittelgeschaft 1.指示代名詞 2.関係代名詞	同　上
4	第4課 Im Fremdenverkehrsamt	TEXT1 Fahrt zur Arbeit TEXT2 Im Fremdenverkehrsamt 1.時刻の表現	同　上
5	第5課 Am Arbeitsplatz	TEXT Am Arbeitsplatz 1.曜日と月の名称 2.複合時称 2-1.現在完了形の作り方 2-2.未来形の作り方 3.従属接続詞と副文	同　上
6	第6課 Im Lederwarengeschaft	TEXT1 Mittags TEXT2 Beim Mittagessen TEXT3 Im Lederwarengeschaft 1.不定形と不定句 2.過去形の作り方	同　上
7	第7課 Einkaufen im Supermarkt	TEXT1 Einkaufen im Supermarkt TEXT2 Im Supermarkt TEXT3 An der Tankstelle 1.語構成 2.接続法の形式 2-1.接続法第1式 2-2.接続法第Ⅱ式 TEXT4 In der Reinigung	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
8	第8課 Kuchen backen	TEXT1 Feierabend TEXT2 Kuchen backen TEXT3 Planung 1.命令 2.受動態 2-1 受動について 2-2.受動の作り方 2-3.自動詞の受動態 2-4.話法の助動詞と受動態 2-5.状態受動	辻　　理 中山　　純
9	第9課 Ausflug	TEXT1 Am Sonntag/Ausflug TEXT2 Die Schifffahrt TEXT3 Nach der Fahrt 1.前置詞と人称代名詞・疑問代名詞の融合 2.接続法の時称形式 TEXT4 An der Hotelerezeptio	同　　上
10	第10課 Beim Friseur	TEXT1 Friseur TEXT2 Beim Friseur TEXT3 An der Kasse 1.接続法の用法 1-1.要求話法 1-2.非現実話法	同　　上
11	第11課 Celler Grotte	TEXT1 Celler Grotte 1.副文になった疑文 2.間接話法 TEXT2 Im Cafa	同　　上
12	第12課 Planung eines Erholungsgebietes	TEXT1 Der Leiter eines Fremdenverkehrsamtshat TEXT2 Im Amt fur regionale Planung 1.話法の助動詞の接続法第Ⅱ式 2.時称の補足	同　　上
13	第13課 Im Reiseburo	TEXT Im Reiseburo 1.分詞の用法	同　　上
14	第14課 Grillparty (1)	TEXT Grillparty (1) 1.感嘆詞	同　　上
15	第15課 Grillparty (2)	TEXT Grillparty (2) 1.並列の接続詞 2.「初級文法」について	同　　上

＝ドイツ語Ⅲ＝（R）

〔主任講師：辻　　堤（東京大学名誉教授）〕

全体のねらい

読むための文法に多少重点を移し、その復習をした上で、若いドイツ人夫婦の日本体験、特に二人の受けるカルチャー・ショックを軸として、現代ドイツのすぐれた作家や思想家のさまざまな文体に触れていく。同時に、まったくの日常会話から一歩脱して、考えを述べるためのドイツ語に近づきたい。

テーマ

1　構文について　－　定形の位置

2　構文について　－　副文・zu＋不定詞

3　Anne an ihre Eltern

4　Gesprach mit einem japanischen Professor

5　Schwierige Textauswahl

6　Über Tagebucher

7　Gespräch zu „Aufbruch"

8　Das Mittel zum wirklichen Frieden

9　Zum Überleben ?

10　Warum ein Deutsch-Deutsches Worterbuch ?

11　Sprache und Gesellschaft － Mit Wortern lugen ?

12　Der Humor und die Deutschen

13　Kulturschock

14　" Raman "

15　" Erbe "

＝ドイツ語Ⅳ＝（R）

〔主任講師：辻　　理（東京大学名誉教授）〕

全体のねらい

「ドイツ語Ⅲ」で抽象的な思考への糸口を把握したものと考え、「Ⅳ」では印刷教材の量をふやしていきたい。印刷教材をreflexivに扱い、解釈する態度が求められる。世紀の転換期にミュンヘンに活躍した作家たちの作品を取上げるが、1945年のTh.マンの発言までをも視野に収めつつ、政治的状況が文学に複雑な影を落しているさまを言語表現の中に見ていく。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	Brief aus Japan	7年間の日本滞在を終えて、ドイツに帰国したニゲシュティヒ夫人にあてた手紙。南のミュンヘンで暮らす北ドイツ人は、何を感じているだろうか？	辻　　理（東京大学名誉教授）
2	Brief aus München	かつての芸術家居住区シュヴァービングは、今はただ不動産屋が跳梁するところ。かつての面影は全然ないとのむごいご託宣。	同　上
3	Simpl ＜1＞	シュヴァービングの現在がそういうことであるなら、残された作品によって、私たちはこれを再生させなくてはならない。Ringelnatzが描く芸術家酒場ジンプル。	同　上
4	Simpl ＜2＞	芸術家酒場ジンプルの続き。Ringelnatzはついにこのジンプルの座付詩人に昇格する。	同　上
5	Gedichte von Ringelnatz und Mühsam	そのRingelnatzのひりりと皮肉の利いた可愛らしい詩と、ぐさりぐさりと人を刺すアナーキストMühsamの詩。	同　上
6	Die Schutzimpfung ＜1＞	Wedekindは当時のシュヴァービングの大御所。芝居の自作自演もしばしば。そのWedekind がめっぽう不道徳な不倫物語を語って聞かせる。	同　上
7	Die Schutzimpfung＜2＞	こんな予防接種を女房にされたら、世の亭主たるもの生きた心地もしまいという、奇妙な話の続き。	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	Der Herr Fischötter ＜1＞	伯爵家の生まれでミュンヘンのボヘミアンになった女流作家、Franziska Gräfin zu Reventlowの作品。	辻　　瑾
9	Der Herr Fischötter ＜2＞	この作品、やはり世紀末の特徴をそなえていると言えそう。女性と死と動かすことのできない運命がその主題。	同　上
10	Der Herr Fischötter ＜3＞	かわうそ氏のせいで恋人を失った方もかわいそうだし、罪もないのに決闘で殺されるかわうそ氏もかわいそう。かわいそうな人がいて初めて物語ができ上るのだろうか。	同　上
11	Kriegserklärung	不遇な女流作家Lena Christ の作品。第1次世界大戦が勃発したとき、なぜミュンヘンの人々はインテリをも含めて、あんなに喜んだのであろう。	同　上
12	Räterepublik	1919年、たったの一か月足らずのことであるが、ミュンヘンにはレーテ共和国の政府が誕生した。その首班となったErnst Tollerの語る思い出。すごい混乱。	同　上
13	Flucht und Verhaftung	レーテ共和国の首班であったTollerは、今は厳しく追われる身。ようやくかくまってもらった家でも、裏切り者の女に密告されてしまう。	同　上
14	Ohrfeigen und Hausverkauf	これはKarl Valentin の二つの作品。いやでも笑っていただかないと、ミュンヘンから化けて出そう。どこか凍りつくようなValentin の笑い。	同　上
15	Mit Thomas Mann	Thomas Mann はミュンヘンに住み、ミュンヘンを愛し、ミュンヘンで傑作を書きあげた人。そのMann がいかにミュンヘンをまもり、またドイツ文化をまもろうとしたか。	同　上

＝ドイツ語Ⅴ＝（R）

〔主任講師：岩村行雄（日本大学教授）〕

全体のねらい

ドイツ語の学習にあたっては、できるだけ数多くの異なったスタイルを持った文章に接することが望ましい。その配慮をしながら、同時に教材の内容の拡散を避けるために、テーマをワイマール共和国に絞って、歴史学者、政治学者、社会学者、さらには芸術家などの文章を取上げて、主として読解力の訓練を行なう。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	Der Kaiser hat abgedankt	第一次世界大戦に敗れたドイツ皇帝は1918年11月に退位して、ワイマール共和国が成立する。ひとりの政治家がこの時代の政治や社会を詳しく観察し、克明に記録している。その日記によって、直接的に時代の様相を見る。	岩村行雄（日本大学教授）
2	Ausrufung der Republik	1918年11月9日、社会民主党員のシャイデマンは独断で、帝国議会議事堂の窓から、集まった民衆に向かって共和国の成立を宣言した。敗戦時の混乱した社会情勢の中から共和国が生まれてこようとしている様子を、ひとりの政治家の回想を通して見てみる。	同上
3	Weimar	敗戦によって古い秩序は破壊されたが、新しい秩序はまだ生まれてきていないワイマール時代開始時の困難な状況を、歴史学者の視点から眺める。英国首相であったチャーチルの視点も紹介される。	同上
4	Wir Negativen	ワイマール時代の代表的左翼知識人であったクルト・トゥホルスキーの文章を読む。共和国は生まれたが、現実には依然として帝国に郷愁を感じる人びとがいた。トゥホルスキーは、鋭い切れ味のよい文章でこの現実を批判する。	同上
5	Amerikanismus	第一次大戦後、アメリカの影響がにわかに強まった。伝統的な教養市民層の文化に対して、大衆社会を背景にした文明が浮上してきた。ドイツにおけるアメリカニズムとは何かを考察する。	同上
6	〃	〃	同上
7	Das Ende der privaten Sphäre	1923年に初めてベルリンからラジオが放送されたが、またたくまに一般に普及した。文化の普及が歓迎されると同時に、また思考の画一化に対する憂慮も増大した。この問題に対する女性ジャーナリストの見解を読む。	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	Wege des groBen Spielfilms in Deutschland	1920年代は無声映画の時代、1930年代はトーキーの時代ということができるが、この二つの時代を通じてドイツ映画界はすぐれた作品を生み出した。時代の新しい表現形式として位置づけられた映画に対する考え方を映画監督ラングに聞く。	岩村行雄
9	Der rasende Reporter	大衆社会の成立とともに、ジャーナリズムも事実の報告を求める大衆の要求に応えなければならなくなり、大きく変化していった。ルポライターという新しい職業もこの時代に生まれてきた。その代表者の主張を読む。	同　上
10	Bauhaus Dessau - Grundsätze der Bauhaus-Produktion	一種の造結大学バウハウスはワイマール文化を代表する文化現象のひとつであった。芸術と技術の統一をはかろうとしたそのデザイン思想は今日まで大きな影響を与えている。建築家グロービウスの文章を読む。	同　上
11	Heute und Morgen	若い小説家のエッセイを取り上げる。戦時中に育った世代は戦後自分の方向を探しあぐねていた。この混迷状態にあるヨーロッパの若い世代の精神状況を考察し、精神に対する侮蔑が存在すること、それがスポーツ愛好にも通じていることを指摘する。	同　上
12	Ideologie und Utopie	戦後の社会的変動は伝統的な階級社会を突き崩し、階級の上を浮動する知識人を生み出した。この知識人の発生を考え、それが持つ積極的な意味を考察する社会学者カール・マンハイムの文章を取り上げる。	同　上
13	〃	〃	同　上
14	Wir leben in einer Übergangszeit	1931年、つまりワイマール共和国も末期に近づいた頃の文章を取り上げて時代の雰囲気を見る。共和国の理想を踏みにじって、急速にナチに傾いて行く状況と知識人たちの不安が描かれる。文章は風刺画家として著名なジョージ・グロスのもの。	同　上
15	Vom Geist der Weimarer Republik	政治学者ゾントハイマーが今日ワイマール共和国をどのように分析しているかを見る。少数の理性的共和主義者こそ共和国を擁護していたが、共和国はつねに左右の攻撃にさらされていた。共和国を倒した反民主主義思想とは何かを考察する。	同　上

＝フランス語Ⅰ＝（TV）

〔主任講師：福井芳男（東京大学名誉教授）〕

全体のねらい

フランス語に入りやすくするために、テレビ映像と言葉の結びつきを考え、ある喜劇的なシチュエーションを作り、フランス人の習慣と言語との関係を把握させる。自然なフランス語の習得を目ざすため、教材はフランス語を母国語とする考えが、ふつうに使う表現に限る。コミュニケーションのためのフランス語を中心にして、いわゆるmethodes communicalivesとし、復習、繰り返しを中心とする。なお、ビデオ、写真によるパリ案内も付ける。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	あいさつ	Boniour, Merci, Cest ～／母音の発音〔r〕と〔l〕 単語レッスン＜家族＞ パリの表情(1)　セーヌ河	福井芳男（東京大学名誉教授） 井戸桂子（元放送大学助教授） 田辺保子（放送大学非常勤講師）
2	紹介	Ce nest pas ～ ,Je suis ～，il faut ～， 動詞の不定法／鼻母音／単語レッスン＜職業＞ パリの表情(2)　観光のパリ①	同上
3	数 ～ その1 ～	数・1～12，年齢の尋ね方、avoirの現在形／リエゾン 単語レッスン＜身体＞ パリの表情(3)　鉄道	同上
4	数 ～ その2 ～	数30～900，曜日、月／Ilest ～，Ila～， Quel âge avez-vous ?／発音とつづり字、エリジョン／単語レッスン＜顔＞ パリの表情(4)　公園	同上
5	復習と文法 (1)	発音のまとめ／冠詞、指示形容詞、所有形容詞 動詞、-er動詞／efveとavoir，avoirを使った慣用句／単語レッスン＜食べ物＞	同上
6	時間	時間の数え方、Combieh de ～／アンジェヌマン、イレトネーション／単語レッスン＜飲み物＞ パリの表情(6)　美術館	同上
7	Comment me trouezvous ?（わたしをどう思いますか）	devoir，trouver，疑問副詞／疑問文のイントネーション 単語レッスン＜食器一揃い＞ パリの表情(7)　メトロ	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	Je vais acheter （これから買うんです）	aller, Je voudrais ～／形容詞とリエゾン／単語レッスン＜気晴らし＞ パリの表情(8)　新しいパリ①	福井芳男 井戸桂子 田辺保子
9	Ne vous en faites pas （心配しないで）	中性代名詞 en, Vous ne pouvez pas ～／つづり字と発音、-s-／単語レッスン＜文房具＞ パリの表情(9)　新しいパリ②	同　上
10	復修と文法 (2)	動詞の活用、形容詞の女性形、形容詞の位置、非人称主語／単語レッスン＜衣料(1)＞ パリの表情(10)　マルシェー食料品店	同　上
11	Jen ai assez （もう、うんざりだ）	感嘆文、直接法半過去／単語レッスン＜衣料(2)＞ パリの表情(11)　ローマの遺跡	同　上
12	a l air interessant Ca（それおもしろそうね）	疑問代名詞、avoir Iaivf 形容詞／単語レッスン＜家＞ パリの表情(12)　舗道	同　上
13	Que veux-tu ? （しかたがないじゃないか）	j' espève, Que veux-tu ? en avoir marre de＋不定法、前置詞＋疑問詞／enとリエゾン、エリジョン／単語レッスン＜公共の建物＞ パリの表情(13)　彫像	同　上
14	Qaest-ce quil ya de mal ? （何が悪いんです）	接続詞の que, Je na: pas pu＋不定法、tu sais que…／〔ə〕の脱落／単語レッスン＜交通機関＞ パリの表情(14)　観光のパリ②	同　上
15	復習と文法 (3)	動詞＋不定法、依頼と許可、代名動詞／単語レッスン＜国々＞ パリの表情(15)　光のパリ	同　上

＝フランス語Ⅱ＝（TV）

〔主任講師：福井芳男（東京大学名誉教授）〕

全体のねらい

フランス語Ⅰの復習と兼ねつつ、コミュニケーション言語の習得をはかり、さまざまな情況で使い得るよう多くのシチュエーションを考える。これはフランス人の家庭へのロケーション、フランスから来た人へのインタビューなどを行なう。なお、フランスの地方の案内も行う。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	Il n'y a personne ?	スケッチ①／否定の代名詞／人称代名詞／非人称構文　コミュニケーション－あいさつ－ 楽しくおぼえるマナーとエチケット(1)指 Bonjour France (1)　地形と気候	福井芳男（東京大学名誉教授） 井戸桂子（元放送大学助教授） 田辺保子（放送大学非常勤講師）
2	Je suis content de vois revoir.	スケッチ②／疑問形容詞／近接未来／複合過去　コミュニケーション 楽しくおぼえるマナーとエチケット(2)ぶどう酒 Bonjour France (2)　人口・運輸	同上
3	Ce seva toujours utile.	スケッチ③／Conbien／複合過去／単純未来　コミュニケーション－初対面－ 楽しくおぼえるマナーとエチケット(3)カクテル・パーティー Bonjour France (3)　イル・ド・フランス	同上
4	De quoi te mêles－tu ?	スケッチ④／代名詞／性・数の一致／中性代名詞のy　コミュニケーション－依頼－ 楽しくおぼえるマナーとエチケット(4)お札 Bonjour France (4)　シャンパーニエ，アルザス・ロレーヌ地方	同上
5	Je ferais nímporte quelle foliepour Vous.	スケッチ⑤／間接疑問／条件法 コミュニケーション－呼び掛け，待たせる時－ 楽しくおぼえるマナーとエチケット(5)花 Bonjour France (5)　ブルゴー	同上
6	記述、　のしかた、形容詞	形容詞 インタビュー	同上
7	疑問の出しかた	インタビュー	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	感　情　表　現	インタビュー	福井芳男 井戸桂子 田辺保子
9	過　去　の　表　現	インタビュー	同　上
10	復　　習	インタビュー	同　上
11	許可を求める、許可を与える、拒否する	ディアローグ、スケッチ	同　上
12	賛　意　、　反　対	ディアローグ、スケッチ	同　上
13	不　満　、　怒　り	ディアローグ、スケッチ	同　上
14	非　難　、　無　関　心	ディアローグ、スケッチ	同　上
15	復　　習	インタビュー	同　上

＝フランス語Ⅲ＝（R）

〔主任講師：福井芳男（東京大学名誉教授）〕

全体のねらい

ラジオの特性を生かし、聞く能力の涵養をはかり、Ⅰ、Ⅱで勉強したことのとりまとめとして、文法、構文、知識の整理、基本文の習得をはかる。なお、単語の用法についてもこまかい検討を加える。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	名詞とその周辺	文法：名詞の性・数／名詞標識語 Lecture：「白い服の婦人」①	福井芳男（東京大学名誉教授） 井戸桂子（元放送大学助教授） 田辺保子（放送大学非常勤講師）
2	être，形容詞	文法：efre の直説法・現在形／形容詞女性形／定冠詞の縮約 Lecfure：「白い服の婦人」②	同上
3	avoir,-er 動詞	文法：avoir の直接法・現在形／-er 動詞の直説法・現在形／形容詞の位置 Lecfure：「白い服の婦人」③	同上
4	代名動詞、tvouver	文法：代名動詞／動詞の現在形 Lecture：「白い服の婦人」④	同上
5	場所	文法：場所の副詞（句）・前置詞（句） Lecture：「白い服の婦人」⑤	同上
6	時、時制	文法：時の副詞（句）／時制（複合過去形、半過去形、大過去形、未来形、前未来形） Lecture：「白い服の婦人」⑥	同上
7	疑問	文法：疑問代名詞／疑問形容詞／疑問副詞 Lecture：「白い服の婦人」⑦	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	否定	文法：否定のいろいろな型 Lecture：「白い服の婦人」⑧	福井芳男 井戸桂子 田辺保子
9	人称代名詞、中性代名詞	文法：人称代名詞／中性代名詞／二重目的に置かれた代名詞の語順 Lecture：「フランスのジャーナリズム」①	同上
10	si＋半過去、条件法	文法：副詞節／Si…／条件法 Lecture：「フランスのジャーナリズム」②	同上
11	ジェロンディフ、使役の助動詞	文法：laisser, faire＋inf／現在分詞／ジェロンディフ Lecture：「フランスのジャーナリズム」③	同上
12	間接話法	文法：直接話法と間接話法／時制の一致／間接疑問 Lecture：「フランスのジャーナリズム」④	同上
13	接続法、名詞節と形容詞節	文法：接続法／名詞節と接続法／形容詞節と接続法／関係代名詞 Lecture：「フランスのジャーナリズム」⑤	同上
14	副詞節と接続法	文法：副詞節と接続法／前置詞（句）finf…接続詞（句）＋que＋inf Lecture：「フランスのジャーナリズム」⑥	同上
15	成句	文法：成句 Lecture：「フランスのジャーナリズム」⑦	同上

＝ フランス語 Ⅳ ＝ (R)

― 文の論理的構造 ―

〔主任講師：福井芳男（東京大学名誉教授）〕

全体のねらい

フランス語は理くつぽく、抽象的だと言われるが、それは文と文をつなぐ接続詞あるいはそれにかわる諸表現がかなり完備していることによる。フランス的な発想・表現を習得するためこれらの問題を中心に、発表、作文能力の涵養につとめる。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	原因・理由 (1)	原因・理由を示す接続詞、節を学び、作文能力の向上を図る。	福井芳男（東京大学名誉教授） 井戸桂子（元放送大学助教授） 田辺保子（放送大学非常勤講師）
2	原因・理由 (2)	接続詞を使う節以外の表現により、いかにこの原因・理由を表わすか、さまざまの表現法を勉強する。	同上
3	結果 (1)	結果を表わす接続詞、節を学び、日本語のさまざまな言いかたをいかにフランス語にうつすかを習得する。	同上
4	結果 (2)	接続詞以外の表現により、いかに結果を表わすか、さまざまの表現手段を勉強する。	同上
5	復習（フランス語の複文構造）	1～4課までの表現に応じた成句、ことわざなどを学び、表現の幅をつけることを目的とする。	同上
6	目的 (1)	目的を表わす接続詞、節を学習して、さまざまな表現法を学ぶ。	同上
7	目的 (2)	接続詞、節以外の表現法で、目的を示す表現を学び、それに応じた表現能力を習得する。	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
8	条件、仮定　(1)	条件・仮定を表わす、接続詞、節を学習し表現のさまざまなニュアンスの出し方を習得する。	福井芳男 井戸桂子 田辺保子
9	条件、仮定　(2)	接続詞、節以外の表現法で、条件・仮定を表す。	同　上
10	復　習（動詞・形容詞の名詞化）	6－9までを中心にした、成句、和文仏次など	同　上
11	比　較　(1)	比較の表現、円等接続詞　節を中心とする。ニュアンスを出すのに必要な表現を習得する。	同　上
12	比　較　(2)	さまざまな比較の表現、特に国等の表現を習得する。	同　上
13	対立、譲歩　(1)	接続詞・節による対立・譲歩の表現・接続詞の練習も含む。	同　上
14	対立、譲歩　(2)	接続詞・節以外の表現法	同　上
15	復　習（Ecrire en francais）	1: －14を中心に成句、和文仏節	同　上

＝ フランス語 V ＝ (R)

― フランス社会を理解しよう ―

〔主任講師：福井芳男（東京大学名誉教授）〕

全体のねらい

文を読む訓練は必要であり、それも多様な文を読んで語いを増大させなくてはならない、しかも必要なことは現代に関し、ジャーナリズムが述べることがわかる必要がある。それを目標として語解練習を行う。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	Région: Ile-de-France	イル＝ド＝フランス地方 ・インタビュー：M. Xavier DENIAU①	福井芳男（東京大学名誉教授） 井戸桂子（元放送大学助教授） 田辺保子（放送大学非常勤講師）
2	Le bonheur d'Ariane...	アリアーヌの幸せ ・インタビュー：M. Xavier DENIAU②	同上
3	Un pari pour le XXIe siècle	21世紀への賭け ・インタビュー：M. Jacques HEBRARD①	同上
4	Pourquoi vos enfants lisent si mal	なぜ子供たちは読みがへたか ・インタビュー：M. Jacques HEBRARD②	同上
5	Le printemps des parfums	香水の春 ・インタビュー：M. Jacques HEBRARD③	同上
6	Bataille pour la qualité	品質のための戦い ・インタビュー：M. Jean LACOUTURE①	同上
7	Les porte-plume de la République	共和国のペン ・インタビュー：M. Jean LACOUTURE②	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	Jardins : un patrimoine bien cultivé	庭園：よく手入れされた財産 ・インタビュー：M. Jean LACOUTURE③	福井芳男 井戸桂子 田辺保子
9	La France riche et La France pauvre	富めるフランスと貧しいフランス ・インタビュー：M. Jean-Claude REDONNET①	同　上
10	Un sondage sur les 16－24 ans	16歳から24歳の青年へのアンケート調査 ・インタビュー：M. Jean-Claude REDONNET②	同　上
11	La haute cuisine, modèle haute couture	オート・キュイズィヌ、 オオート・クチュールを手本に ・インタビュー：Mme Marie-Claude PEYRACHE①	同　上
12	France : poussière de tradition	フランス：伝統の埃 ・インタビュー：Mme Marie-Claude PEYRACHE②	同　上
13	Carrière, famille, séduction Mais comment font-elles ?	仕事、家庭、魅力 だが、彼女達はどのようにしているのか ・インタビュー：Mme Marie-Claude P PEYRACHE③	同　上
14	Europe : l'épouvantail de 1992	ヨーロッパ：1992年の脅威 ・インタビュー：M. Phillipe PONS ①	同　上
15	Etre français	フランス人であること ・インタビュー：M. Phillipe PONS ②	同　上

＝中国語Ⅰ＝（R）

〔主任講師：傳田　章（東京大学教授）〕

全体のねらい

やさしいスキットを読みながら、中国語の発音と文法の基礎を学習する。文法は全体の枠組みを見通しての把握を心がけつつ、中国語Ⅰで統語構造、品詞の機能の最も基本的な部分から始めて、中国語Ⅱに接続し、2個学期で基礎課程を終える予定である。その間、機能語を中心に基本的語彙を習得出来るようにする。

回	テ　ー　マ	内　容	担当講師（所属・氏名）
1	発音　Ⅰ	四つの声調 単韻母(1)　a，e 声母(1)　b，p，m，f 声母(2)　j，q，x	傳　田　　章 （東京大学教授）
2	発音　Ⅱ S—P V—O_d	声母(3)　zh，ch，sh，r 声母(4)　d，t，n，l 複韻母(1)　ai，ei，ao，ou 複韻母(2)　an，en，ang，eng 第三声の連続　主語と述語　動詞と目的語	同　上
3	発音　Ⅲ 疑問　Ⅰ	軽声 声母(5)　g，k，h 修飾語　連続修飾語，副詞 構造の重層 指示疑問　疑問詞疑問文	同　上
4	発音　Ⅳ V—C 断定　Ⅰ 相　Ⅰ	声母(6)　z，c，s zhi，zi の韻母 断定　動詞 shì（是） 状況の相　助詞 le（了），ne（呢）	同　上
5	発音　Ⅴ 疑問　Ⅱ	単韻母(2)　i，i で始まる複韻母 単韻母(3)　u，u で始まる複韻母 単韻母(4)　ü，ü で始まる複韻母 選択疑問(1)　肯定否定 bù（不）の声調変化	同　上
6	限定 語気　Ⅰ	限定修飾語(1)　連体修飾語，助詞 de（的） 限定修飾語(2)　名詞句代理 当否疑問　助詞 ma（吗） 推量　助詞 ba（吧）	同　上
7	語気　Ⅱ	意志・勧誘　助詞 ba（吧） 感情の露出　助詞 a（啊） 助詞 a（啊）の連声 文の三層構造	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	V—O_1 移動・授与 状態　Ⅰ 人称・指示	場所目的語　　所在、移動動詞 zài（在），qù（去） 二重目的語　　授与動詞 gěi（給） 形容詞述語(1) 人称代名詞 指示詞・指示代名詞	傅　田　　章
9	発音　Ⅵ 数　　Ⅰ	韻母 ê　　韻母 er 限定詞—助数詞構造 数詞　　基数と序数 末尾桁助数詞省略 yī（一）の声調変化	同　上
10	数　Ⅱ 相　Ⅱ	疑問数詞　　jǐ（几）と duōshao（多少） 完了相　　動詞接尾辞 -le（了） 未然　　副詞 méi (you)（没（有）） 状況の相と動詞の相	同　上
11	相　　Ⅲ 疑問　Ⅲ	持続相　　副詞 zài（在），動詞接尾辞 -zhe（着） 経験相　　動詞接尾辞 -guo（过） 選択疑問(2)　　已然未然	同　上
12	動　作　量	動作量補語(1)　　動作の回数 動作量補語(2)　　動詞の助数詞転用 動作量補語(3)　　動作の期間 動作量補語と目的語	同　上
13	動作認定	動詞句補語を伴う動詞　　néng（能） 動作量補語(4)　　性質の量	同　上
14	心理内容	文補語を伴う動詞　　xiǎng（想） 文目的語をとる動詞　　gàosu（告诉） 文補語と文目的語	同　上
15	V—O—OC 使役	目的補語を伴う動詞(1)　　使役動詞 qǐng（请） 使役をいう動詞　　jiào（叫），ràng（让）	同　上

＝ 中 国 語 Ⅱ ＝ (R)

〔主任講師：傳田　章（東京大学教授）〕

全体のねらい

中国語Ⅰに接続して文法の基礎を続ける。文の核になる動詞句のやや複雑な形のものから、さらに複文へと進み、文法の大枠の学習を終える。また発音についても、音節の仕組みや発話の際のアクセント・イントネーションなどに及んで整理した理解をはかりたい。中国語Ⅱで一応の基礎課程の学習を終える。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	存　在 現象描写	存在の表現　動詞 yǒu（有） 現象描写 場面の提示　方位詞 shàng（上），lǐ（里） 個体叙述と現象描写 目的補語を伴う動詞(2)	傳　田　章 （東京大学教授）
2	連用　Ⅰ	動詞句連用(1)　VP_1 lái（来），VP_1 qù（去） 動詞句連用(2)　lái（来）VP_2 ，qù（去）VP_2 動詞句連用(3)　V-zhe（着）VP_2	同　上
3	連用　Ⅱ 性質と状態 断定　Ⅱ	前置詞句連用(1)　zài（在） 前置詞句連用(2)　bi（比） 形容詞述語(2)　性質と状態 主題としての動作対象 事態の断定　shì … de（是…的）	同　上
4	連用　Ⅲ	前置詞句連用(3)　dào（到），lí（离），gěi（给） 前置詞句連用(4)　gēn（跟），hé（和） 前置詞句連用(5)　bèi（被） 前置詞句連用(6)　bǎ（把）	同　上
5	包　括	包括(1)　lián（连） 包括(2)　yī cì ye …（一次也…） 包括(3)　shénme dōu …（什么都…）	同　上
6	動作結果　Ⅰ	動作の評価　V—de（得）AP 結果の事態　V—de（得）S 動作結果結合(1)	同　上
7	動作結果　Ⅱ	動作結果結合(2)　-shanglai（上来） 動作結果結合(3)　-de-（得），-bu-（不） 動作結果結合(4)　-buliǎo（不了）	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	動作結果　Ⅲ	動作結果結合(5)　-dào（到） 動作結果結合(6)　-zhù（住） 動作結果結合(7)　-zháo（着） 動作結果結合(8)　-zài（在）	傳田　章
9	動作結果　Ⅳ 相　Ⅳ r化	動作結果結合(9)　-jíle（极了） 試行相　動詞の重ね型 r化	同上
10	相　Ⅴ	起動相　-qilai（起来） 継続相　-xiaqu（下去） 経過相　-guò（过）	同上
11	接続　Ⅰ	接続(1)　yòu … yòu …（又…又） 接続(2)　yī … jiù …（一…就）	同上
12	接続　Ⅱ	接続(3)　yàoshì … jiù …（要是…就…） 接続(4)　yīnwei … suǒyǐ …（因为…所以…） 選択疑問(3)　A háishi（还是）B？	同上
13	接続　Ⅲ 状態　Ⅱ	不定称接続　shénme … shénme …（什么…什么…） 描写形容詞　形容詞の重ね型 de（的）でくくられる描写修飾語	同上
14	補遺　Ⅰ	名詞句述語 承前疑問 過度　tài … le（太…了）	同上
15	補遺　Ⅱ	不信疑問 付加疑問 文・節末の助詞に近い語句	同上

＝ 中 国 語 Ⅲ ＝ (R)

～論理と接続関係～

〔主任講師：伊藤敬一（中京大学教授）〕

全体のねらい

中国語Ⅰ、Ⅱで基礎課程を終了したので、この中国語Ⅲでは、やや長い文章や少しむずかしい作品を取り上げる。その中で、中国語の孤立語的性質の背後にある中国語の論理を把握すること。およびそれによって表現された中国的作品世界へのアプローチが読書力をつけるカギであると考える。これらを重点に学習して行く。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	有的人（ある人）	著名な現代中国の詩人臧克家が魯迅を記念して詠んだ詩。ここで中国語の主述関係、句と句節と節、文と文の接続関係、および文章全体の論理の問題を語法の観点から分析してみたい。	伊藤敬一（東京大学教授） 中国人講師 黄麗華
2	魯迅詩文両則（魯迅の詩と文二つ）	第1課との関連で、魯迅の有名な旧体詩≪自嘲≫と散文≪；野草；題辞≫を読む。ここでも接続と論理の問題を考えると共に，参考としてこの二つの作品に関する評論の一部を収めた。なおローマ字 かち書きの規則と品詞分類をとり上げる。	同上
3	牛郎织女 (1)（牽牛と織女・その一）	第3課から第6課は中国の代表的童話作家葉紹鈞（聖陶）が書いた七夕伝説（羽衣伝説）である。きわめて調子のよい名文で朗読や聞きとりの練習に適している。語法のポイントとしては、やはり文の接続関係と論理の展開の問題を論じたい。	同上
4	牛郎织女 (2)（牽牛と織女・その二）		同上
5	牛郎织女 (3)（牽牛と織女・その三）		同上
6	牛郎织女 (4)（牽牛と織女・その四）		同上
7	火车上的威风 (1)（バカ大将汽車に乗る・その二）	第7課から第10課は文革の初期1966年8月に、紅征兵の迫害を受けて非業の死をとげた作家老舎が、1959年頃ひそかに書き、未発表のまま、死後13年目の1979年、名誉回復後天人の手によって発表された一幕劇。老舎の初期のユーモア短篇小説≪馬 先生≫（1933年）を自分の手で改編脚色したもの	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	火车上的威风 (2) （バカ大将汽車に乗る・その二）	で、きわめて中国的な作品であり、「かけあいまんざい」を思わせる会話は絶妙である。作品鑑賞と共に、ここでも中国語特有の接続と論理展開の問題を探める。 また、練習として、旧作の小説の一部もとり上げたい。	伊藤敬一 （東京大学教授） 中国人講師 黄麗華
9	火车上的威风 (3) （バカ大将汽車に乗る・その三）		同上
10	火车上的威风 (4) （バカ大将汽車に乗る・その四）		同上
11	夜　（之一） （夜・その一）	第11課から第15課は中国の代表的な女流作家丁の円熟期とも云える延安時代の代表作'夜'を読む。作品鑑賞と同時に、ここでも論理と接続関係の問題を考える。なお、時代背景を知る上で、内容的に若干関連した同時期の問題作である随筆「三八節有感」の一部を練習でとり上げたい。	同上
12	夜　（之二） （夜・その二）		同上
13	夜　（之三） （夜・その三）		同上
14	夜　（之四） （夜・その四）		同上
15	夜　（之五） （夜・その五）		同上

＝ 中 国 語 Ⅳ ＝ （R）

～文革をめぐる中国人の心～

〔主任講師：伊藤敬一（中京大学教授）〕

全体のねらい

中国語Ⅲで中国語の論理と接続関係を学んだので、その応用として、今回は比較的長い作品を読む。文革後の中国人の心を知るため、老世代を代表する　金と若い世代を代表する張抗抗の作品を選んだ。最近の新しい語　や全般的な語法の問題も随時とりあげる予定である。

回	テ　ー　マ	内　容	担当講師（所属・氏名）
1	怀念蕭珊（之一）〔シアオ・シャンを憶う・その一〕	第1課から第6課は、中国文学界の長老であり、世界的にも著名な作家　金の作品である。 金は、「文革」中の迫害の中で、最愛の妻蕭珊を亡くした。その深い心の傷は読者の心を打たずにはおかない。そしてその傷が　金の現在の生き方の支えともなっている。	伊藤敬一
2	怀念蕭珊（之二）〔シアオ・シャンを憶う・その二〕		同上
3	怀念蕭珊（之三）〔シアオ・シャンを憶う・その三〕		同上
4	怀念蕭珊（之四）〔シアオ・シャンを憶う・その四〕		同上
5	怀念蕭珊（之五）〔シアオ・シャンを憶う・その五〕		同上
6	怀念蕭珊（之六）〔シアオ・シャンを憶う・その六〕		同上
7	夏　（之一）	第7課から第15課は、文革中黒龍江の酷寒の農場に八年間下放した経験をもつ若い女流作家張抗抗の作品で、古い倫理的規範や共同体的な規制にひややかな目を向けるが、同時に祖国の未来と人間の個性の自由な発展を求める青春の血は、さわやかに躍動する。	同上 （発音指導） 黄麗華

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	夏　（之二）		伊藤敬一 （発音指導） 黄麗華
9	夏　（之三）		同　上
10	夏　（之四）		同　上
11	夏　（之五）		同　上
12	夏　（之六）		同　上
13	夏　（之七）		同　上
14	夏　（之八）		同　上
15	夏　（之九）		同　上

＝ロシア語Ⅰ＝（R）

〔主任講師：川端香男里（東京大学教授）〕

全体のねらい

ロシア語学習の基本を習得させる。発音と文字、基本的語彙の学習を中心にし、ついでやさしい会話的表現を軸に基本的な格変化、人話変化になじませると同時に、いかにもロシア的と思える表現法に興味をもたせることを主眼におく

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	第1課 文字と発音に慣れる (1)	これは～です 疑問文 接続詞иとa イントネーション(1)	川端香男里 （東京大学教授） 安岡治子 （東京外国語大学専任講師）
2	第2課 文字と発音に慣れる (2)	いる、ある 人称代名詞 否定の表現 Кто вы 「～も」の表現 イントネーション(2)	同上
3	第3課 文字と発音に慣れる (3)	名詞の性 所有代名詞（性と数） 名詞の複数形	同上
4	第4課	指示代名詞 этот、тот（性と数） 形容詞（長語尾形） 形容詞を使った日常表現 形容詞の形をもつロシア人の姓 形容詞の形をもつ名詞	同上
5	第5課 名詞と代名詞	動詞現在人称変化・第一変化（正副） 現在時制の動詞の意味 動詞を使った疑問文 副詞 動詞現在人称変化・第二変化（正副） по-русски の用法	同上
6	第6課	格 前置格の形態 前置格を要求する前置詞в、на、о 動詞の現在人称変化（特殊変化など） 動詞の過去形 動詞 быть の過去	同上
7	第7課	生格の形態　у＋性格、в、на＋前置格の表現 生格の用法　所有以外のу＋生格 所有の表現 否定生格	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
8	第８課	対格の形態、時点を表すв＋対格 対格の用法、交通手段を表すна＋前置格 動詞の人称変化（特殊変化） 不定人称文 名前の尋ね方 идти と ехать	川端　香男里 安岡　治子
9	第９課	与格の形態、идти(ехать)＋к＋与格 与格の用法、к＋抽象名詞を使った挿入句 動詞の人称変化（特殊変化）、通信手段を表すпо＋与格 出没母音　емотреть の用法 -ся 動詞	同　上
10	第１０課	形容詞短語尾形の形態、нрáвиться の表現 短語尾形の用法 副詞として使われる短語尾形 無人称文の述語としての短語尾形 述語副詞と不定形が述語である無人称文 月の言い方	同　上
11	第１１課	動詞の体 完了体・不完了体の形成 体と時制 体の用法 動詞の人称変化（特殊変化）	同　上
12	第１２課	造格の形態、造格を要求する前置詞с 造格の用法 動作の様態を表す造語 職業・身分などを表す造語 造格を要求する動詞 述語の造格	同　上
13	第１３課	定動詞と不定動詞 不定動詞の用法 идти を使った表現 接頭辞をもつ運動の動詞 運動の起点を表す前置詞из、с、от	同　上
14	第１４課	個数詞と順序数詞（1～30） 個数詞と名詞の結合 時間の表現 年齢の表現 月日の表現	同　上
15	第１５課	命令法 命令法の動詞の形態 命令法の体 пожáдуйстя の用法 関係代名詞котóрый котóрый の用法	同　上

＝ロシア語Ⅱ＝（R）

〔主任講師：川端香男里（東京大学教授）〕

全体のねらい

ゆっくりと基本を学習したロシア語Ⅰを受けて、主法的語彙的にも若干学習のスピードをあげて高度の文章表現になじませ、最終的には辞書の助けを借りて、比較的読みやすい古典、プーシキンの詩、チエーホフの短編が読めるようなレベルまで持って行く。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	第１課	動詞の体の復習 形容詞の長語尾複数変化	川　端　香男里 （東京大学教授）
2	第２課	定動詞・不定動詞 運動の動詞の特殊用法 前置詞の用法	同　上
3	第３課	名詞複数の格変化 個数詞の格変化 数量を示す生格	同　上
4	第４課	不定代名詞、不定副詞 定代名詞 再帰所有（物主）代名詞 свой	同　上
5	第５課	否定代名詞 ничегó と нéчего 否定副詞	同　上
6	第６課	動詞の体の形成 сходитъ　съездитъ の用法 Выходúтъ とВыхóдите？	同　上
7	第７課	形容詞の比較級 副詞の比較級	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	第８課	形容詞の最上級 副詞の最上級 год　человек　час と数詞・概数の表現	川　端　香男里 安　岡　治　子 （東京外国語大学 専任講師）
9	第９課	能動形動詞 被動形動詞 形動詞から派生した形容詞・名詞	同　上
10	第１０課	２人称の命令形のつくり方 ２人称命令法の用法 １人称、３人称の命令法 быの用法	同　上
11	第１１課	関係代名詞 関係副詞 従属節	同　上
12	第１２課	副動詞現在 副動詞過去	同　上
13	第１３課	仮定法 仮定法の従属節 譲歩・認容の従属節	同　上
14	第１４課	ロシア語動詞の相（залóг） 被動相 -ся動詞の表現性	同　上
15	第１５課	語法	同　上

＝ スペイン語Ⅰ ＝ (R)

〔主任講師：山口羔正（放送大学助教授）〕

全体のねらい

初めて学ぶスペイン語に早く馴れるために、平易な会話（国語）体の文を中心に、スペイン語圏の世界の日常生活のさまざまな場面でよく用いられる表現と初等文法を、種々の練習を通して学習していく。学習者は単に頭の中で理解するだけの受身の学習」でなく、簡単なことをスペイン語で表現できるよう「積極的な」語学力をめざして勉強してほしい。

回	テ　ー　マ	内　容	担当講師（所属・氏名）
1	¡Bienvenido!	発音練習／アクセント符号／男女の人名	山口羔正（放送大学助教授）
2	¿Dónde estás ahora? ¿Dónde está el hotel?	人称代名詞の主格／動詞Estar－その1 名詞の性と教／定冠詞／発音練習	同上
3	¿De dónde eres? ¿Estás contento?	動詞Ser　－その1／形容詞 動詞Estar－その2	同上
4	¿Qué es esto? Compramos unos libros.	動詞Ser－その2 名詞と形容詞の性・数による変化の一致 疑問詞Qué／Sí とNo 規則活用　-AR動詞／不定冠詞	同上
5	¿Qué lengua aprende? ¿No vive usted con su familia?	規則活用　-ER動詞・-IR動詞	同上
6	Hay mucho tráfico en las calles. ¿Cuántos hijos tienes?	Haberの特殊形Hay／基数詞－その1 疑問詞Cuánto／動詞Tener －その1	同上
7	No tengo sueño. ¿Qué hacen los niños?	Tener－その2／動詞Hacer 基数詞－その2／Tener que ＋不定詞	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	¿Qué hora es? ¿A qué hora sale este autobús?	時刻／動詞 Salir／指示形容詞	山口羔正
9	¿Adónde vas? ¿La pongo aquí abajo?	動詞 Ir／Venir／Poner 所有形容詞短縮形／Ir＋a＋不定詞	同上
10	¿Cuándo empieza el curso? Generalmente vuelves a casa más tarde.	動詞Empezar／Volver 指示代名詞／所有形容詞完全形	同上
11	¿Qué dices? No te oigo bien.	動詞Decir／Oir／Ver 人称代名詞目的格—その1／不定詞—その1	同上
12	Te lo pido con todo mi corazón. Es difícil explicárselo.	動詞Dar／Traer／Pedir 人称代名詞目的格—その2／不定詞—その2	同上
13	No la conozco mucho. Me gusta la paella.	動詞Conocer／Saber／Gustar 人称代名詞前置詞格	同上
14	¿Cuándo te casas?	再帰代名詞／再帰動詞—その1	同上
15	¿Se quitan los zapatos en casa?	再帰動詞—その2	同上

＝ スペイン語Ⅱ ＝ (R)

〔主任講師：山口羔正（放送大学助教授）〕

全体のねらい

すでに学んだ初歩的なスペイン語の知識を基礎に、スペイン語圏のさまざまなテーマを背景にした平易な会話・口語体の文を用いて、初級スペイン語の後半の学習を行なう。スペイン語Ⅰで見た通り、動詞の活用は初級スペイン語の学習において中心的な課題で、このスペイン語Ⅱでも直説法過去を始めとして接続法までいくつかの時制について練習を更に続ける。また、いままではほとんど単文であったが、このスペイン語Ⅱでは複文の基礎的なところを学習する。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	¿Cuándo llueve? El clima de España	無人称表現 単人称動詞 Vocabulario	山口羔正 （放送大学助教授）
2	¿Qué están haciendo los niños? En una plazoleta	現在分詞／進行形／過去分詞 -mente のつく副詞 Vocabulario	同上
3	Dicen que en su país se produce el mejor café. Geografía de Sudamérica	接続詞と複文 比較（優劣比較、同等比較、最上級） Vocabulario	同上
4	Echele más sal. Cocina española	命令―その1（tú，vosotros に対する肯定・否定命令） Vocabulario	同上
5	Ahora, acuéstese usted aquí. Un problema de salud	命令―その2（Vd., Vds. に対する命令、人称代名詞目的格を伴う命令、再帰動詞の命令） Vocabulario	同上
6	¿Estudiasteis mucho? Dos universidades antiguas	直説法完了過去 規則活用 -AR，-ER，-IR動詞 関係代名詞―その1 Vocabulario	同上
7	¿Cuándo se construyó? La Alhambra	直説法完了過去 不規則活用動詞―1 関係代名詞―その2 Vocabulario	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
8	Lo que hice en las vacaciones. Acapulco	直説法完了過去 不規則活用動詞－その２ 関係代名詞－その３ 関係副詞 Vocabulario	山口羔正
9	¿Qué pensaba usted cuando era niño? Francisco Javier	直説法不完了過去／不完了過去の複文 Vocabulario	同上
10	Ellos llegarán pronto. Zarzuela	直説法未来 Vocabulario	同上
11	¿Ha estado usted en Latinoamérica? Un aspecto de las relaciones entre Japón y América Latina	直説法現在完了／助動詞 Haber の現在形／受身 Vocabulario	同上
12	Dijeron que saldrían al día siguiente. Extremadura	直説法可能（過去未来） 直説法過去完了 Vocabulario	同上
13	¿Quieres que bailemos? El tango argentino	接続法現在－その１（規則活用動詞・語根母音変化動詞１／名詞節・副詞節での用法） Vocabulario	同上
14	Es mejor que vengamos otra vez. El Museo del Prado	接続法現在－その２（不規則活用動詞／副詞節における直説法と接続法） Vocabulario	同上
15	¡Ojalá que encontremos una casa que nos guste! En la Costa del Sol.	接続法現在－その３（形容詞節・独立文での用法）、接続法過去 Vocabulario	同上

＝ Japanese Ⅰ ＝　　（TV）

〔主任講師：アントニオ・アルフォンソ（明海大学教授）
主任講師：西原鈴子（国立国語研究所言語教育研究部長）〕

全体のねらい

日本語のもっとも基本的な構造を、単なる詰め込みでなく応用可能な知識として正しく理解させ、それによって日本人の物の考え方、日本人の生活と文化を広く世界に紹介することを目的とする。

日本語を一見流暢に話しながら、その実正確に学んでこなかったような人々の「やりなおし日本語」としても活用されるように、コミュニケーションの流れの中で自然に使用できる表現を発展的に組み立て、有効な解説と適切な映像によって効率的に提示する。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	STEP 1	UNIT 1 “Where are you going？” UNIT 2 “Yes or No？”	アントニオ・アルフォンソ（明海大学教授） 西原鈴子（国立国語研究所言語教育研究部長）
2	STEP 2	UNIT 1 “What are you going to do？” UNIT 2 “Where did you see it？”	同上
3	STEP 3	UNIT 1 The Topic of the Sentence UNIT 2 “What are you doing？”	同上
4	STEP 4	UNIT 1 “Have you done it already？” UNIT 2 “Can you wait a moment, please？”	同上
5	STEP 5	UNIT 1 “Where are you？” UNIT 2 “I have a problem” UNIT 3 Reading	同上
6	STEP 6	UNIT 1 “Dont do that, please” UNIT 2 “What sort of people？” UNIT 3 Reading	同上
7	STEP 7	UNIT 1 “How many people？” UNIT 2 “How much is it？” UNIT 3 Reading	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	STEP 8	UNIT 1 “ It s a long night ” UNIT 2 On the Boundary and the Focus UNIT 3 Reading	アントニオ・アルフォンソ 西 原 鈴 子
9	STEP 9	UNIT 1 “Which one is better ? ” UNIT 2 Introducing Plain Forms UNIT 3 Reading	同　　上
10	STEP10	UNIT 1 “ Mannequins that talk and walk ” UNIT 2 “ I like watching people ” UNIT 3 Reading	同　　上
11	STEP11	UNIT 1 Explanatory Sentences UNIT 2 “ I think so ? ” UNIT 3 Reading	同　　上
12	STEP12	UNIT 1 “ What did he say ? ” UNIT 2 “ I want to talk to you ” UNIT 3 Reading	同　　上
13	STEP13	UNIT 1 “ Give and you shall receive ” UNIT 2 “ I must do it ” UNIT 3 Reading	同　　上
14	STEP14	UNIT 1 Suru … Suru … Suru … UNIT 2 Doing and Becoming UNIT 3 Reading	同　　上
15	STEP15	UNIT 1 “ Come quickly ” UNIT 2 Clustering Verbs UNIT 3 Reading	同　　上

＝ Japanese Ⅱ ＝　（TV）

主任講師：アントニオ・アルフォンソ（明海大学教授）
主任講師：西原鈴子（国立国語研究所言語教育研究部長）

全体のねらい

Japanese Ⅰ を基礎にし、より高度な日本語の知識を得、かつ、より複雑な表現の運用を習熟することを目的とする。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	STEP 1	UNIT 1 Lining Up Facts and Causes UNIT 2 "Yes, but …" UNIT 3 Reading	アントニオ・アルフォンソ（明海大学教授） 西原鈴子（国立国語研究所言語教育研究部長）
2	STEP 2	UNIT 1 "What time do you get up ?" UNIT 2 When, Before and After UNIT 3 Reading	同上
3	STEP 3	UNIT 1 "While there is life there is hope" UNIT 2 The Best Way to Learn a Language UNIT 3 Reading	同上
4	STEP 4	UNIT 1 "Talk loud so that we can hear you" UNIT 2 Sometime, Somewhere UNIT 3 Reading	同上
5	STEP 5	UNIT 1 Every Time, Everywhere UNIT 2 Anytime, Anywhere UNIT 3 Reading	同上
6	STEP 6	UNIT 1 "It's quite the opposite" UNIT 2 This and That and That TNIT 3 Reading	同上
7	STEP 7	UNIT 1 "Sensei, what does -TARA mean ?" UNIT 2 "That's a hypothetical question" UNIT 3 Reading	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	STEP 8	UNIT 1 Natural Outcomes UNIT 2 " Even a child can do that " UNIT 3 Reading	アントニオ・アルフォンソ 西 原 鈴 子
9	STEP 9	UNIT 1 " Come as soon as possible " UNIT 2 " Make him do it. Let him do it " UNIT 3 Reading	同　上
10	STEP10	UNIT 1 " We call it Passive " UNIT 2 " We were caught in the rain " UNIT 3 Reading	同　上
11	STEP11	UNIT 1 Doing, Being, Becoming UNIT 2 On-going and Completed Facts UNIT 3 Reading	同　上
12	STEP12	UNIT 1 " I was about to leave, when … " UNIT 2 On the Looks of Things UNIT 3 Reading	同　上
13	STEP13	UNIT 1 Talking on the Nature of Things UNIT 2 " How du you explain that ? " UNIT 3 Reading	同　上
14	STEP14	UNIT 1 Discourse Referents UNIT 2 Discourse Adverbs UNIT 3 Reading	同　上
15	STEP15	UNIT 1 On the Familiar Language(A) UNIT 2 On the Familiar Language(B) UNIT 3 Reading	同　上

＝中国語Ⅲ＝（Ｒ）

〔主任講師：傅田　章（東京大学教授）〕

全体のねらい

中国語Ⅰ・Ⅱの基礎の文法学習の上にたって、比較的にやさしいものから始めて散文文学作品にいたる文章の講読を中心に授業を進める。単なる語彙の拡大にとどまらないで、Ⅰ・Ⅱで学習した文法項目の主要な部分を随時復習しながら、さらにアクセント、語構成、複文など、文法の学習を系統的に深化させることを主眼とする。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	発音Ⅶ	強弱アクセント 二音節のアクセント型	傅田　章（東京大学教授）	傅田　章（東京大学教授）
2	発音Ⅷ	三・四音節のアクセント型	同上	同上
3	発音Ⅸ	“重念” 論理上の述語 文音調	同上	同上
4	定・不定	不定を示す助数詞 動詞・形容詞句の名詞句化	同上	同上
5	意志動詞	意志動詞と非意志動詞 意志動詞の活用	同上	同上
6	非意志動詞Ⅰ	変化動詞 変化動詞の活用	同上	同上
7	非意志動詞Ⅱ	属性動詞 属性動詞の活用	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	語構成Ⅰ	語構成の型 S－P型、V－O型、V－R型、修飾型	傳田　章	傳田　章
9	離合詞Ⅰ	V－O型離合詞 分離の型 目的語の形式的修飾語化	同　上	同　上
10	離合詞Ⅱ	目的語成分の助数詞転用 その他の型の離合詞	同　上	同　上
11	補助動詞Ⅰ	動作結果型結合 分離の型 移動動詞の意味の転化(1)	同　上	同　上
12	補助動詞Ⅱ	移動動詞の意味の転化(2) 補助動詞化	同　上	同　上
13	語構成Ⅱ	並列型 付加型 重ね型	同　上	同　上
14	複文Ⅰ	条件－帰結接続 並列接続	同　上	同　上
15	複文Ⅱ	文の展開 省略接続 同格、到置、独立句	同　上	同　上

＝ 保 健 体 育 ＝ （TV）

― 新しい人体論 ―

〔主任講師：平沢弼一郎（放送大学教授）〕

全体のねらい

人は２本の足のうらで立つ。そこで、その足のうらに関与するさまざまな因子から、すべての動作の基本である直立能力を定量的に評価する。これをスタシオロジー（身体静止学）という。本講義はこのスタシオロジーの観点に立って「人」と「からだ」の関わりを解説する。なお毎回自己診断と調整のための基礎体操Medico physical Therapyを紹介する。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	見る人聴く人別の人	美しい人を見たり、美しい音楽を聞くと心のときめきを感じる。ここでは知覚の内省的把握が、健康の自己管理の基礎条件であることを中心課題とし、視覚と聴覚の分析能力の比較から、「見る人」から「聴く人」への転換について考える。	平沢弼一郎（放送大学教授）
2	息 こ ら え	「息こらえ」の時間の長短は、その人の、その時の身体的および精神的能力の総和である。これは心身の持久力を知るための最も簡便な方法である。運動負荷や姿勢変化にともなう実験結果と、長期間継続して測定した資料に基づいて解説する。	同 上
3	偉 人 と 健 康	健全な精神ははたして健全な身体にのみ宿り、健全な身体には必ず健全な精神が宿るのだろうか。ユベナリスの言葉を出発点として、いわゆる偉人と呼ばれた２４人の体格について考察しながら、心身の「健康」・「不健康」を考える。	同 上
4	か ら だ の 形	人のからだの形はなぜこのようになったのだろうか。ここではソボッタ（J・Sobotta）の体表の地理図、サリウス（A. Vesalius）解剖図によって骨格の仕組みを学習する。また、カバラの思想によるセフィーロスのからだの部分の意味づけについて言及する。	同 上
5	膝 小 僧	「膝小僧」とは膝関節のこと。この関節を中心に、脚の筋肉の起始部と停止部、神経支配とそのはたらきについて、実際に解剖をしている画面によって学習を展開してゆく。「膝小僧」は前方には曲がるが後方には曲がらないのはなぜか、も解明する。	同 上
6	直立人の歩む道	ヒトはいつどのようなきっかけで、またどのような道のりをたどって「直立人」になったのだろうか。ヒト化（hominization）における「直立人」への進化の過程を系統発生学的見地から考察する。われわれ直立姿勢に完全に適応しきっているのだろうか。	同 上
7	新 生 児 の 反 抗	人は出生後約１０か月でだれからも手ほどきをうけないで一人で立つことができる。その機序（要因と過程）の解明はいまだに明らかではない。ここでは出生直後の新生児の姿勢制御と神経発達との関連について個体発生学的見地から解説をする。	同 上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	か　ら　だ　ち	「からだ」の語源は、人が大地に両足を踏まえて立つさまを表す「からだち」（軀立ち）というやまとことばに由来する。「からだ」に関連する文字や言葉から、「からだ」の価値観の変遷について解説する。	平　沢　弼一郎
9	ス タ シ オ ロ ジ ー	アリストテレスの「動物運動論」から、からだの動的固定（Steady setting）の機序について解説する。スタシオロジーの原論、評価の方法、装置、応用面（平衡神経科学・整形外科学・神経内科学・神経眼科学）の現況について述べる。	同　上
10	日本人の直立能力	両足をきちんとそろえて立つロンベルグの姿勢を２０秒間とらせた時の重心図（重心動揺面積）から、日本人の直立能力について、年齢差、性差、環境差（地理的・社会的）、病経別、民族差を解説する。	同　上
11	左　足　と　右　足	左足と右足のあいだには、機能的な一側優位性（ラテラリゼーション）が存在する。左足は前進の方向性と全身の安定の支持作用、右足はスピードのコントロールと器用性の役割分担がある。また、左足は遺伝因子、右足は環境因子によることを解説する。	同　上
12	はだしとすあし	近ごろ全国各地で「はだし教育」がはじめられている。「はだし」と「すあし」の相異から、ここでは「足のうらをはかる」目的、方法、解析法、評価法について解説する。また、「足とはきもの」の問題についてもふれてゆく。	同　上
13	立つことと歩くこと	ヒトは立つことができてはじめて歩くことができる。ヒトは片足歩行である。正常な歩行はその重心軌跡がゆるやかなサインカーブを描く。脳性麻痺患者の歩容から、「立つこと」と「歩くこと」の関連を解説する。	同　上
14	ふんぞりかえった日本人	昭和５２年から日本各地の遺跡から沢山の古代人の足跡が発見された。この足跡から日本人の立ち構え（身構えと気構え）を考察したところ、平安時代あたりから変わったことが推定される。縄文晩期から年代を追ってその変化を解説する。	同　上
15	現　代　人　の　足	この20年くらいのあいだに、現代人の踵が丸くて大きくなっている。これは重心位置の後退現象を物語る。もしこのことが直立能力の衰退であると考えることができるとすれば、ことは重大である。人類の存亡の危機について論説を試みる。	同　上

＝ 生 活 原 論 ＝ （R）

〔主任講師：山手　茂（東洋大学教授）〕

全体のねらい

私たちの生活は、多くの要素から成り立っており、急激に変動する社会からさまざまな影響を受けつつ、不断に変化している。この科目では、私たちの生活を社会との関連において全体的・総合的に認識する方法を検討し、現代人の生活課題を明らかにし、２１世紀に向かって主体的によりよい生活を創造するための方法を考える。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	生活原論の課題と方法	生活に関する科学は、多くの専門分野に分かれているが、「生活原論」は、生活を総合的、全体的にとらえ、生活の基本的課題を明らかにし、私たちが主体的によりよい生活を創造するための方法を確立することをめざすものである。	山手　茂（東洋大学教授）
2	生活構造の変化と社会構造の変化	私たちの生活を構成している多くの要素は全体としてのまとまりを持っており、これを生活構造としてとらえることができる。この生活構造は、社会構造によって規定されており、現代社会の構造的変化によって、大きく変化し、社会化と不安定化が進んでいる。	同　上
3	生活意識と生活文化	人間の生ききかたは、社会的・経済的要因によってばかりではなく、精神的・文化的要因によっても影響されている。現代において、人びとの生活意識・ライフスタイル・生活文化がどのように変化し、生きかたがどのように再検討されつつあるかを考える。	牧野暢男（日本女子大学教授）
4	世代とライフスタイル	最近の若い世代は、「新人類」と称されるほど、親の世代と異る性格やライフスタイルを持っている。世代とはなにか、各世代の特徴はどうして生じたかを理解し、異る世代の相互理解・相互尊重協力・連帯などについて考える。	同　上
5	生活史とライフコース	人間は、社会のなかで、社会の歴史的変化の影響を受けながら生きており、ひとりひとり独自な生活の歴史を持っておる。歴史のなかの人生、「人生８０年時代」の生活周期などについて認識し、さらに主体的に人生を生きるライフコースについて考える。	牧野カツコ（お茶の水女子大学助教授）
6	生活問題の構造・原因・対策	私たちの生活には、家計・消費生活・余暇生活や夫婦関係・親子関係・老後不安など多くの問題がある。それらを全体的・構造的にとらえ、それらの原因および発生のメカニズムを考察し、問題の解決・予防のための対策について検討する。	山手　茂
7	生活水準・生活指標・生活の質	国民生活の実態を把握し生活政策・社会政策の課題を明らかにするために、生活水準の測定や生活指標の開発などが行われ、生活の量的豊かさのみならず、生活の質的向上が図られてきた。このような生活実態と生活課題のとらえかたについて検討する。	庄司洋子（立教大学教授）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	生活権と生活政策	生活の社会化が進展するにともなって、生活問題は、個人や家庭の課題としてばかりではなく、社会や国家の課題としてとりあげられている。現代国家においては、生活権が確立され、それを保障するために生活政策が拡充されていることを述べる。	山手　茂
9	生活保障・生活福祉	社会保障・社会福祉を中心にして、生活問題を解決し、生活不安を解消するとともに、積極的に生活向上させるための政策と実践の課題を検討する。現代においては、国民の主体的参加による福祉国家の形成・維持が課題になっている。	庄司洋子
10	生活設計の学習と実践	生活の安定と向上のためには、国家の福祉政策の拡充とともに、個人や家庭の主体的な生活設計の確立と実践が、重要な課題になっている。学校教育・社会教育・家庭教育においてとりあげられるべき生活設計学習の内容および方法について検討する。	牧野カツコ
11	これからの国民生活	今日まで産業化・都市化・核家族化などによって私たちの生活は変化してきたが、これから21世紀にかけては、長寿化・国際化・情報化などがいっそう進展し、国民生活もさらに変化すると予想される。このような国民生活をとりまく条件の変化への対応策を考える。	山手　茂
12	これからの地域生活	都市化・核家族化・長寿化・情報化などに対応し、生活を安定・向上させるためには、地域社会において新しいコミュニティを創造することが重要な課題になっている。このような観点から、コミュニティ形成の動向と今後の課題について検討する。	牧野暢男
13	これからの家庭生活	21世紀に向かって、社会の変化に主体的に対応しながら、私たちの生活を安定・向上させるためには、新しい家庭生活を創造することが必要である。これからの夫婦関係・親子関係など家族関係や家庭経営の課題について検討する。	牧野カツコ
14	これからの男性・女性関係	これからの生活の安定・充実は、家庭・学校・職場・地域社会などあらゆる生活の場において、男性と女性が対等の立場にたって協力することによって実現される。このような観点から、男性と女性との関係の問題点・課題について考える。	庄司洋子
15	自立と共生のネットワーキング	現代社会においては、心身障害者や老人なども参加した「自立と共生をめざすネットワーキング」が活発化している。その社会的背景や意義を検討し、これからの国民生活の安定・向上・充実のためのネットワーキングの課題を考える。	山手　茂

＝人間と社会環境＝（TV）

〔主任講師：大橋　力（放送教育開発センター教授）〕

全体のねらい

複雑なからだとこころを持つ生き物・人間と、その人間たちの多岐にわたる活動のステージになっている社会環境とについて、情報環境学の立場から包括的に学ぶ。動物行動学・分子生物学などの新しい生物学、生態人類学の諸領域、システム論・制御論などの情報科学を主要な学問的基盤におき、実際的に論を展開する。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	"人間と社会環境"についてどう学ぶか	人間の社会行動の多様性を的確に捉えるためには専門分化した学問は限界が大きい。その限界を打破する新しい学問のひとつとしてこの科目で起用する情報環境学について、物質・エネルギー・情報の三つの次元から有機的に対象に接近する方法論を述べる。	大橋　力（放送教育開発センター教授）
2	生命と環境	まず、生命とは何かについて、自己増殖オートマトンの理論を出発点に説明する。次に地球型生命の特徴と地球の生態系について述べる。さらに、生命主体と、それを囲む環境との関係について、システム理論を導入して整理を行う。	同上
3	環境としての社会	生き物の中には、特別な秩序を持った群れをつくるものがある。その群れ一種社会一は生き物にどのような利益をもたらすのかを考える。こうしてつくられる"社会"を、新たに造成された環境として捉え、その構造・機能について検討する接近法を述べる。	藤井宏一（筑波大学教授）
4	社会をつくる動物たち	動物の中には、さまざまな社会をつくるものがある。その多様な姿について、動物行動学の観点から整理して学ぶ。また、動物の社会行動の過程を制御している生得的解発機構の理論等についても知識を得る。さらに、これらの原則が人類にもあてはまることを知る。	日高敏隆（京都大学教授）
5	人類社会だけの特異な多様性	社会をつくる動物たちを見ると、その社会の構造は種ごとに決まったパターンを持っていることがわかる。ところが人類だけは、きわめて多種多様な社会を生み出してきた。この多様性を生態人類学の観点から分類し、概観してみる。	掛谷誠（弘前大学教授）
6	自然性を重視した社会とその環境	さまざまな人類社会の中には、生存上、人間の持つ生物としての自然性を比較的重視したライフスタイルを維持してきたものがある。発展よりは安定を志向する社会といえる。その代表例である狩猟採集社会について、実際のフィールドワークに基づいた知識を得る。	市川光雄（京都大学助教授）
7	加工性を重視した社会とその環境	人為的な加工とその蓄積に高い価値をおく社会がある。安定よりは発展を志向する社会といえる。いわゆる文明社会は総じてこのカテゴリーに入る。このような発想を持った社会システムの本質を探り、そこに生まれる環境の特性について検討する。	樺山紘一（放送教育開発センター教授）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	棲みわけ型"の社会・非棲みわけ型"の社会	いわゆる"棲みわけ"は地球上の生物社会の原則といえる。ところが、人類では、この原則が守られている"棲みわけ型"の社会だけでなく、これを放棄した"非棲みわけ型"の社会が存在する。この社会の生態系に及ぼす影響、および環境特性について論じる。	大橋　力
9	本来と適応	すべての生命は、情報物質"核酸"に書き込まれたプログラムの指令下におかれている。そのプログラムには、基本的なライフスタイルに対応する"本来"のものと、状況の特殊化に対応する"適応"のためのものとがある。この二重構造と社会環境との関連を検討する。	村上和雄（筑波大学遺伝子実験センター長）
10	人間社会のシステム化機能する二つのプログラム	種社会をつくる動物たちの社会行動のプログラムも遺伝子の支配下にあり、人類もその例外ではないと考えられる。一方人間社会には法律、戒律など社会行動のもうひとつの規範ープログラムーが存在する場合がある。この両者が一致しない社会の環境を論じる。	大橋　力
11	人間の生物特性と社会環境との不適合(1)　物質・エネルギー・環境について	人間の生物特性は、その柔軟性の範囲を含めて、遺伝情報の支配下にあり、ほとんど固定されている。それと現実の社会環境との間に無視できない不一致が発生し、持続すると、社会は存続をおびやかされる。この問題を物質・エネルギー面について検討する。	岩城英夫（筑波大学教授）
12	人間の生物特性と社会環境との不適合(2)情報環境について	人間の心は脳という物質機械の活動に他ならない。脳は情報代謝装置であり、環境からのある種の情報入力で打撃を受けるだけでなく、ある種の情報欠損によっても異常を呈する。社会の情報環境が人間の脳にとって不適合になった場合の病理現象について検討する。	小田　晋（筑波大学教授）
13	自然性と加工性との調和を重視した社会とその環境	現存する多種多様な人間社会の中に、自然性と加工性との両者の調和を重視する発想を持つものが少数存在する。この種の社会の環境は、現状況下にあっても人間生存とのかなり高度な適合性を示している。実例にのっとって、このような社会環境について知識を得る。	河合徳枝（国際科学振興財団専任研究員）
14	社会の自己組織化を導く"情動"の役割	自然性と加工性との調和に成功している社会のひとつの特徴として、情動、ことにパフォーマンスの誘起する快感が社会の結集や葛藤緩和に有効に機能している。自我の制御と利他行動の活性化とを通じてシステム化をもたらす情動のメカニズムについて論じる。	猪原真知子（聖徳大学附属聖徳高等学校教諭） 河合徳枝
15	新しい調和の発見のために	加工性重視社会の頂点に立つ科学技術文明の社会環境は特に精神世界の面でけわしい限界に直面している。この危機の当面の打開策として人間に適合した情報環境の再建を欠かすことはできない。そのために精神活動領域における自然性と加工性との調和の道を探る。	大橋　力

＝家族関係論＝（R）

〔主任講師：望月　嵩（大正大学教授）〕

全体のねらい

家族の人間関係は、他の集団の人間関係と異なって、情緒的色彩が強い。しかも、人間の生活全般にかかわる関係である。本講では、そうした家族関係の諸相を、家族の発達過程にそいながら検討するとともに、家族生活に生じた諸困難に対応する家族関係のありかたについても考える。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	家族関係の意味	家族関係とは、家族を構成する人々の関係という意味であり、夫婦関係、親子関係、同胞関係といった要素的関係に分類できる。こうした家族関係の特徴や性格について、家族の集団としての側面と関連させて解説する。	望月　嵩（大正大学教授）
2	青年期の異性交際	結婚前の青年期の異性交際は、デイティングとコートシップという目的も性格も異なった二つの交際に分類できることを中心に、異性交際の機能や実態について解説する。	同上
3	配偶者の選択	配偶者選択に関する社会的制約や選択のメカニズムを解明し、配偶者選択の過程がどのように展開するかを解説する。	同上
4	結婚と夫婦関係	家族形成の契機となる結婚の社会的異味を明らかにするとともに、それによって形成される夫婦関係の性格、現代家族における夫婦関係の重要性について解説する。	同上
5	子どもの社会化と親子関係	子どもを生み育てることは、家族の主要な機能であることを確認し、子どもの成長・発達にともなって、親子関係がどのように変化していくか、また、現代の家族の教育機能の低下は、どのような要因によるのかなどについて解説する。	同上
6	中年期の家族関係	平均寿命の伸長、少産化傾向といった人口学的要因によって、家族のライフサイクルに変化が生じた。とくに、中年期の女性の生き方をめぐってこれまでにない状況が観察されることを解説する。	同上
7	老年期の家族関係	高齢化社会を迎え、老後生活を安定させるためには、どのようなことが考えられねばならないかを、子どもとの同・別居問題を中心として解説する。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	共働きと家族関係	家族関係のあり方に大きな影響を与える現代的な現象として、共働き家族の問題がある。共働き家族が増加してきた背景や、共働きによって生ずる問題点、それへの対応などについて解説する。	望月　嵩
9	単身赴任と家族関係	産業化の進展によって増加したサラリーマン家族に生じた単身赴任について、その理由や問題点について解説する。	同　上
10	家族の情緒関係	家族関係の特徴は、情緒的色彩が強い人間関係であることである。現代家族における情緒性の意義や問題発生に情緒性がどのようにからみあっているかを解説する。	同　上
11	家族危機と家族関係	家族の生活過程には、さまざまな出来事が発生する。そうした出来事に適切に対応することができないと、家族は崩壊するということさえ生じかねない。そこで、家族危機はどのようにして発生するのか、危機への適切な対処はどうしたらよいかについて解説する。	同　上
12	離婚・再婚と家族関係	最近、離婚の増加が問題となっている。離婚はなぜ発生するのか、離婚者の再婚はどうなっているのか、そうした離婚や再婚は家族関係にどのような影響を与えるかなどについて解説する。	同　上
13	家族のコミュニケーション	円滑な家族関係を実現するためには、家族間の適切なコミュニケーションが必要である。コミュニケーションのメカニズムや、家族間のコミュニケーションのあり方などについて解説する。	同　上
14	親族関係	家族は決して孤立状態で存在するのではない。社会の諸集団と密接な関連をもっている。なかでも、親族関係は、家族生活を支える重要なネットワークである。そうした親族関係の意味や役割について解説する。	同　上
15	これからの家族関係	現代の家族は、変動の中にある。家族関係も大きく変わってきている。そうした現状を踏まえて、これからの家族関係はどうあったらいいのかを考える。	同　上

＝現代家族の社会学＝（R）

〔主任講師：森岡清美（成城大学教授）〕

全体のねらい

現代日本の家族を中心として、構造・機能・意識等の諸側面についてその変動の実張と要因を考究し、多様な変化相を示す現代家族の理解に資する。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	家族とは	1 家族は集団 2 法令用語としての家族 3 日常語としての家族 4 家族の定義 5 形態面の特色 6 関係面の特色 7 機能面の特色	森岡清美（成城大学教授）
2	家族・家庭・世帯 ― 三つの類語の略歴	1 家族 2 家庭 3 世帯 4 家族・家庭・世帯	同上
3	核家族 ― 家族の要素的単位を問う	1 家族の要素的単位 2 核家族説 3 小集団としての核家族 4 核家族の二面性 5 核家族の世代間関係	同上
4	類型と分類 ― 家族をどう類別するか	1 居住規則と家族の類型 2 夫婦家族制 3 直系家族制 4 複合家族制 5 家族類型の地域的分布 6 類型・典型・分類 7 家族の分類 8 類型と分類との関係 9 家族の再分類	同上
5	核家族化 ― 家族構成の単純化	1 核家族化 2 家族と世帯 3 産業化と核家族化 4 日本の核家族化の歩み 5 核家族化の諸要因	同上
6	小家族化 ― 家族規模の縮小	1 小家族、小家族化 2 家族規模の近似値 3 わが国の小家族化 4 小家族化の国際比較 5 小家族化のアメリカ型 6 小家族化のイギリス型 7 小家族化の諸要因	同上
7	家族のライフサイクル	1 ライフサイクルの発想 2 ライフサイクル研究の発端 3 家族のライフサイクル 4 ライフサイクルの捉え方 5 発達段階の設定 6 直系制家族のライフサイクル 7 複合制家族のライフサイクル	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	ライフサイクルの変化	1 ひとの一生の変化 2 日本におけるライフサイクルの変化 3 ライフサイクルの変化によって生じた新局面 4 ライフサイクルの問題点 5 ライフコースの発想	森岡清美
9	役割構造 ― 家族の内部構造(1)	1 家族の内部構造 2 家族的地位 3 家族的役割 4 役割期待・役割認知・役割遂行 5 役割取得・役割葛藤 6 役割遂行による欲求充足 7 生物学的差異が役割配分を規定するか 8 役割配分の規定要因 9 役割構造の変化	同上
10	勢力構造 ― 家族の内部構造(2)	1 地位の序列 2 権力の序列 3 権威の序列 4 勢力の序列 5 権力構造の実態 6 夫婦の勢力関係 7 親子の勢力関係 8 勢力構造を規定するもの 9 勢力構造の変化	同上
11	家族をめぐる親族関係	1 親族・親族関係・親族集団 2 血族と姻族、血縁と姻縁 3 親族の類別 4 親族関係 5 親族集団 6 夫婦家族制と異居近親関係 7 直系家族制の場合、とくに日本の同族と親類について	同上
12	先祖観と先祖祭祀	1 先祖とは 2 先祖の類別 3 死者と先祖 4 個別の先祖と全一的祖霊 5 家的先祖祭祀の機能 6 家的社会での非家的先祖祭祀とその機能 7 家の変化にともなう先祖観の変化 8 仏壇保持率の推移 9 先祖祭祀の変化	同上
13	家族機能の変化 ― 果たして縮少したか	1 家族の機能 2 オグバーンの家族機能縮小説 3 機能縮小のより積極的把握 4 産業化と家族機能の変化 5 社会の変化でなぜ家族が変わる？ 6 パーソナリティ機能の分化 7 家族の機能復権 8 家族の機能はほんとうに縮小したか？	同上
14	家族意識の変化 ― 家意識の持続と変容	1 家族意識とは 2 家族意識は果たして捉えうるか？ 3 「家族意識の変化」の捉え方 4 子がない場合養子は必要か？ 5 先祖を尊ぶか？ 6 どの子に財産や事業を相続させるか？ 7 老後を子どもに頼るつもりか？	同上
15	家族の未来 ― 家族は消滅するか	1 未来論への要請 2 家族の未来に対する悲観論と楽観論 3 日本人による未来家族論の試み 4 家族は消滅するか？ 5 ソ連邦の家族政策 6 家族は存続しうるか？ 7 欧米における家族の最近動向 8 日本の現代家族はどうか？ 9 家族はどこへ？ 10 家族のゆくえと政治	同上

＝家　庭　の　経　済＝（R）

〔主任講師：今井光映（金城学院大学教授）
主任講師：古郡鞆子（明海大学教授）〕

全体のねらい

1.家庭経済は家庭・個人の自己実現という目的価値を実現するために、生産・消費・貯蓄の経済行為を営むがそれを経済全体の中でシステム的にとらえる。

2.家庭経済の行為をシステム的にとらえる場合、とくに生活する者の視座・視点で主体的にとらえることによって、中核的なエコシステムである家庭経済の本質的な機能と位地づけを浮きぼりにする。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	家庭経済の本質意義と機能	家庭経済の本質意義　国民所得を決定する4つの柱　個人消費と国民経済　民間投資と国民経済と家庭経済　金融政策と国民経済と家庭経済　財政政策と国民経済と家庭経済　税政策と国民経済と家庭経済　国民経済の成長の質と家庭経済の行動の質	今井光映（金城学院大学教授）
2	家庭内生産と家事労働	家計の存在意義　家庭内生産とは何か　家計生産の特徴　家計サービスのコスト　家庭内生産と相互依存関係	坂井素思（放送大学助教授）
3	家事労働の経済的評価	家事労働の変化　家事労働の評価　これからの家事労働	古郡鞆子（明海大学教授）
4	労働と家庭経済	労働供給と稼得の二重機能　家内的分業　労働供給と家内的分業　労働供給量の決定　女性労働の供給　家計のブーリング機能	坂井素思
5	流通機構と家庭経済	流通機構問題　生鮮食料品の流通と家庭経済　産直と家庭経済　衣料品の流通と家庭経済　医薬品・化粧品の流通と家庭経済　再販制度と家庭経済　家庭経済の価格形成参加権の自覚	今井光映
6	消費の理論	選好の自律性と他律性　経済学の伝統的アプローチ　依存効果　誇示効果　記号的消費	坂井素思
7	家庭経済の生活内容	生活水準　家計の収支構造　共働き世帯の増加と家計の変化　消費のサービス化	古郡鞆子

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	家計のライフサイクルと経済管理	家庭での生活設計　ライフサイクルと生活設計 お金と利子	古郡鞆子
9	貯蓄と家庭経済	貯蓄の意味　貯蓄の目的　貯蓄・負債の内容 高い貯蓄率	同上
10	家計の資産選択	資産保有の意味　なぜ資産を保有するのか　不確実性の存在　家計の資産選択　権力・名誉と資産保有	坂井素思
11	物価と家庭経済	物価についての基本的な概念　インフレと家計 物価抑制のいろいろ　物価上昇が家計に及ぼす影響　物価の安定こそ生活設計のカギ　円高の物価への波及効果	今井光映
12	税と家計	なぜ税は必要なのか　公共財・サービスの供給 所得の再分配　経済の安定化　課税原則	坂井素思
13	長寿社会と家庭経済	長寿社会の実態　長寿社会の中での生活設計 長寿社会と年金の改正　老後生活資金の設計 企業年金の自覚　個人年金の自覚　人生80年時代の生活設計にこそ必要なシステムの考え方 長寿社会と社会的生活設計	今井光映
14	社会構造の変化と家庭経済	産業化とはなにか　産業化への適合　産業化との拮抗　家計の柔軟性	坂井素思
15	これからの家庭経済を考える	安定成長経済社会と家庭経済　付加価値社会と家庭経済　高負担社会と家庭経済　サービス化社会と家庭経済　キャッシュレス社会と家庭経済　長寿社会と家庭経済　高度情報化社会と家庭経済　国際化社会と家庭経済	今井光映

＝ 家 庭 の 経 営 ＝ (R)

〔主任講師：原ひろ子（お茶の水女子大学教授）〕

全体のねらい

家庭のあり方を比較文化的に考察することによって、人間にとって、家庭や家庭のあり方が多様であることを認識し、その上で、現代日本の家庭を、それをとりまく環境との関連において検討する。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	家族・家庭・家庭経営	誰が家族なのか。一人ひとりにとって家庭とは何か、家庭経営という言葉をどうとらえるかを、考える。	原 ひろ子（お茶の水女子大学教授）
2	家族の多様性と普遍性	人間の諸文化に計られる家族の多様化を眺め、人間にとっての家族の普遍性は、どのようにとらえられるかを考える。	同 上
3	家 族 と 家 庭	欧米や日本の近代史のなかで、収入を得る場としての職場と、消費の場としての家庭が分離し、家族という人間の制度のもつ機能が限定されてくる変貌過程を考察する。	同 上
4	日本文化の中の家庭	夫と妻、親と子、祖父母と孫など、家庭の中でさまざまな立場にある、個人の自己実現についての欲求が高まってきている今日、それぞれの欲求を持つ個人の自己実現を促しつつ、サービスや情報や心のつながりが保証される「生活の港」としての家庭をどのように経営していくかについての可能性の巾を考える。それと同時に家庭をめぐる、さまざまな「危機」への対応を考える。	同 上
5	家事労働と市場労働	家庭における家事労働と、労働市場における労働とが、どのようにとらえられてきたか、を考える。	篠塚英子（お茶の水女子大学助教授）
6	家 庭 と 経 済	今日の家庭生活の経済的基盤が社会の経済システムとどのように関連しているかを眺める。	同 上
7	女性の働き方の変化	日本における男女雇用機会均等法の施行と労働基準法の改正が、女性の働き方にどのように関わり、家庭生活の多様化をもたらしうる基盤となっているかを考える。	同 上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	家計運営の変化	世帯単位や個人単位の消費行動や貯蓄・財テクなどをめぐって、夫婦や親子がどのようにコミュニケートし、意志決定しているのかを眺め、さらに、個々の家庭の家計運営をどのように変化しているかを考察する。	篠塚英子
9	家庭と空間	一つの住宅における家族の生活のしかた、家族員の隣居・近居や単身赴任など、家族と空間の関係から、家庭経営を考える。	小澤紀美子 (東京学芸大学助教授)
10	生活空間のネットワーキング	公園、病院、保育園、幼稚園、学校、保健所、地域の集会所、図書館、相談サービス、老人のためのディホーム、身障者の活動の場、家族間の職場などを含む生活空間を生活者が主体的にネットワークしていくためのシステムについて考察する。	同　上
11	ライフサイクルの変化と家庭	生れてから死ぬまでの個人の加齢や、ライフ・ステージの移行と家庭生活のあり方が近年どのような変化をとげてきたかをとらえるとともに、各ステージにおける危機とその解消方法を明らかにする。	袖井孝子 （お茶の水女子大学助教授）
12	老人・家族・コミュニティ	老人にとっての家庭を家族やコミュニティとの関連で眺める。	同　上
13	子ども・家族・コミュニティ	子どもにとっての家庭を家族やコミュニティとの関連で眺める。特に雇用されて働く父母とそうでない父母をもっている子どもがそれぞれにかかえる問題を考える。	原　ひろ子
14	単身家庭シングルライフ・単身赴任・共働き別居	現代日本に見られる諸現象を家庭経営の視点から考察する。	同　上
15	ライフスタイルの選択と異質なものとの共存	今日の日本では個人が選択するライフスタイルは多様化しつつある。多様化したライフスタイルが存在する社会及び老若男女が共存する時代の家庭経営を考える。	同　上

＝衣生活概論＝（TV）

〔主任講師：矢部章彦（お茶の水女子大学名誉教授）〕

全体のねらい

“生活の中の衣服”という視点から、今日の衣生活にかかわる諸問題を、多くの事例をあげて通観する。

流れの筋を、衣服が語る人間、衣生活を支える科学に大別し、それぞれの立場から概説し、さらに高度な専門への橋渡しとする。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	生活の中の衣服	衣服は身体をおおうとか、寒暑を防ぐとか、上べを着飾るとか云った、バラバラの機能の寄せ集めではない。むしろ衣服をまとう人間がその根源にあることを、概論的叙述の中ではっきりさせておきたい。	矢部章彦（お茶の水女子大学名誉教授）
2	衣服の意味(1) ―衣服と人間―	衣服は単に寒暑や外敵・外傷から身を守る物理的機能をもつだけではなく、着る人の心と結びついた様々の機能をもっている。夏目漱石の作品の中の服飾描写を引用しながら述べる。	小池三枝（お茶の水女子大学教授）
3	衣服の意味(2) ―衣服と心情―	着る人間の心情とのかかわり方を中心にした着心地について、内田百閒の文章を手がかりに述べる。	同上
4	衣服の意味(3) ―衣服と社会―	衣服は個人の社会の一員たることを保証して、社会生活における保護の役目をもつ。衣服の社会的機能について、西欧中世の二つの習慣をとりあげて考える。	徳井淑子（お茶の水女子大学助教授）
5	衣服の意味(4) ―流行―	新しい流行は常に社会の批判をうけるが、一方流行に遅れた衣服もまた常に社会に入れられない。西洋の中世から近代に至る歴史の中に、流行に対する人々の反応を探り、その理由を考える。	同上
6	衣服の意味(5) ―制服―	現代社会において衣服の社会的機能の最も顕著な例は、制服に求められる。制服がもつ三つの性格、保護・主張・排除について、西洋服飾史の事例によって考える。	同上
7	衣服と人体	衣服は人体の体温調節や運動性などの機能をどのように補助しているか。また、妨げとなるのはどのような場合かを、衣服の素材、形、着方などの面から考える。	酒井豊子（放送大学教授）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	衣服の素材(1)	天然繊維から合成繊維まで、各種繊維の特質を、衣服の実用上の諸特性との関係などから把える。またそれらの改良、改質の方向についても触れる。綿、毛などの輸入や、繊維消費などについても考えてみたい。	酒井豊子
9	衣服の素材(2)	織物・編物などの布を中心に、衣服を構成する種々な材料について、その製法、用途などを概観し、衣服の取り扱い易さや着心地のよさなどの上に関係の深い性能について考察する。	同上
10	衣服の色(1) －色とは何か－	形・文様・周囲の風物に托した情緒の表現など、人間の内面と外の世界との調和、人間の体験や学習効果と結びついた色の世界。 色の見方と見え方について、広範囲な視点から編ずる。色名（固有色名・基本色名）から、色の定量的記述にまで言及する。	矢部章彦 小池三枝
11	衣服の色(2) －染めについて－	染めの技法の伝統。染料・繊維の組合わせにもとずく近代染色技法ならびに染色理論。 染色物の、日光・洗濯・汗・マサツ等による変退色とその評価など、主として科学的な立場からの解説を試みる。	矢部章彦
12	衣服と表示	市販の衣料品につけられている種々の表示は、消費者にとって、その衣料品が自分の求める品質のものであるかどうかを判断する手がかりとなる。表示の種類や、それらのきまりについて、理解を深める。	酒井豊子
13	衣服の製作	既製服は、すでにわれわれの衣生活に欠かせない存在となっている。ここでは、既製服の企画から製造に至る工程を追って、既製服がどのようにわれわれに提供されているかを理解する。また布から衣服をつくる上で重要な作業である「縫合」と「接着」の問題を取り扱う。	同上
14	衣服の手入れ	新しい衣服を長持ちさせる手だてについて考える。平常の手入れ、保管のほか、最も重要な課題として、洗濯についてやゝくわしく論ずる。 衣服のいたみを、系統的に整理して、それぞれについての対策を考える。	矢部章彦(故)
15	衣生活と環境 (付)衣生活の総合的考察	衣生活を社会的に見たときの諸問題を、衣服の廃棄と再利用、繊維処理剤の安全性、洗剤にかかわる諸問題の三点にしぼり、概要を説明する。 最後のまとめとして、人文・社会・自然の三つの立場を融合して、人間にとっての着ることの意味を再考する。	同上

＝衣服論＝（TV）－服飾の歴史と現代－

［主任講師：小池三枝（お茶の水女子大学教授）
主任講師：徳井淑子（お茶の水女子大学助教授）］

全体のねらい

衣服を人間の意識とのかかわりの面から考察し、日本および西洋の服飾の歴史にあらわれたさまざまな事象が人間の心の多様な表われであったことを理解する。この理解が、現代日本の服飾のあり方を見つめ、ひいては現代日本人の生活態度や思想を見つめることにつながるであろう

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	衣服の諸相	本講全体の構成を概観し、衣服を人間の心情とのかかわりの面からとらえる方針を説明する。また、衣服および着装を示すさまざまな語（被服・服飾・衣裳・clothes・costume dress・garments等々）の意味の違いをのべ、本講が服飾の語を用いることを確認する。	小池三枝（お茶の水女子大学教授） 徳井淑子（お茶の水女子大学助教授）
2	服飾の本質論－服飾の機能を中心に－	服飾は、社会の中でどのような伝達の機能をもつかということを中心に、その記号性・象徴性・精神性などの構造についてのべる。	杉野正（横浜国立大学助教授）
3	中世フランスの社会と服飾 (1)－印としての服装－	中世社会において服装は、人の社会的立場はもとより、精神的情況を含めた一個の人間を定義するものとしてあるように思う。このような服飾の記号と象徴を考えるため、文学や絵画の人物描写から、服装についての決った型をとりあげる。	徳井淑子
4	中世フランスの社会と服飾 (2)－印の両義性－	上のテーマについて、ここでは、制度化された、または慣習化された服飾をとりあげる。	同上
5	絵画の中の服飾表現 (1)－南蛮風俗－	異種の文化との接触の中で、絵画は人物表現に、現実とは遠くかけはなれた空想の産物を混じえることがある。日本の例として、南蛮文化の受け容れ方を考える。	坂本満（国立歴史民俗博物館教授）
6	絵画の中の服飾表現 (2)西洋近世のエグゾティスム	上のテーマの西洋の例として、近世絵画にみられる異国人の表現をとりあげ、服飾における空想的なものについて考える。	同上
7	近世日本の服飾 (1)小袖文様の展開	現代の和装に直接連なる近世服飾について3回にわたって述べる。第1回は、小袖文様の主題と表現上の技巧について解説する	小池三枝

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	近世日本の服飾 (2)　趣向の種々相	西鶴作品ほか近世文学には服飾の多様な趣向が表されている。町人が服飾に示したさまざまな趣向についてのべる。	小池三枝
9	近世日本の服飾 (3)「通」と「いき」	近世後期に新たな様相を見せる江戸風の服飾の好尚について考察する。	同　上
10	近代日本の服飾 (1)西洋化と「ハイカラ」	洋服導入による男子服の変容について、過程を紹介しながら、西洋化の意味を考える。	同　上
11	近代日本の服飾 (2)　洋風趣味と女性像	明治後期から大正期にかけての女性服飾における洋風趣味について、女学生の姿を中心にのべる。また洋風趣味の背景をなす生活空間を文学作品によって考える。	鈴木すゞ江 （放送大学非常勤講師）
12	近代日本の服飾 (3)失われゆく美感	明治大正期を通じ次第に失われつつあった近世的美感についての論述、たとえば九鬼周造の「いき」の構造などの著された意味を考える。	小池三枝
13	西洋近代市民服の諸相	１９世紀初頭、市民社会の確立とともに定着する市民服について、成立の過程をのべ、これを支えるダンディスムの意識を世紀末まで追う。	徳井淑子
14	機能と装飾 －十九世紀から二十世紀へ－	１９世紀後半から２０世紀初めにかけて西洋で展開した生活造形の思想とその作品をとりあげ機能及装飾の意味を考える。	利光　功 （玉川大学教授）
15	服飾の現代	現代の服飾現象と意識はどのような分析が可能か、過去の服飾意義との類似点や相違点は何かなどについてのべる。また、服飾は自己を他に示す表現の機能をもつだけでなく、着る人のさまざまな想いが投入されるものであることをのべる。	杉野　正 小池三枝 徳井淑子

＝衣生活の科学＝（TV）

〔主任講師：酒井豊子（放送大学教授）〕

全体のねらい

衣服およびそれを構成する素材、さらに衣服の利用や取り扱いといった衣生活の諸事象を、主に自然科学的側面から考察し、知識を整理することにより、快適な衣生活を営む上で要求される諸機能と、人と衣服のかかわりについて、科学的理解を深める。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	衣服の機能と素材の性能	人が衣服に期待する機能を、衣服の素材、寸法、形などの諸要素、洗濯、保管などの取り扱い、着装や着心地などの諸事象に関連して、主として自然科学的側面から通観する。また、衣服の品質に仕立てや、布や繊維の特質がどのようにかかわるかを概説する。	酒井豊子（放送大学教授）
2	水に関係した衣服素材の性質	衣服の着心地や、収縮、型くずれなどの取り扱い性に関係の深い繊維の吸湿性を中心に繊維を構成する高分子化合物の性質にまでさかのぼって考察する。	同上
3	熱に関係した繊維の性質	合成繊維は熱により収縮、融解しやすい反面、熱固定によるプリーツ加工ができるなどの利点もある。これら、衣服の熱的な性質と繊維を構成する高分子の物理的性質との関係を述べる。	同上
4	布から衣服へ	平面状の布から立体的、活動的な人体を包む衣服をつくるため、布を裁断、縫製加工するが、その間にはダーツ、いせ込み、伸ばしなどのテクニックが使われる。これら縫製加工および仕立て映えと、布の構造・性質との関係を考える。	平山順之（実践女子大学教授）
5	衣服と身体寸法	衣服は、人の体型・寸法に合わせて形づくられる。衣服の既製化時代は、体型などをとらえる対象を個人から集団へと変えた。体格調査データを基につくられたサイズシステムの必要性とその内容を中心に衣服と身体寸法について理解する。	林隆子（都立立川短期大学教授）
6	衣服と色(1)染色	色は、形と並んで衣服の重要な要素である。衣服素材はどのようにして着色―染色するか。どのような染料が使用されているか、その性質、繊維との組合せ、さらになぜ繊維は染まるかといった染色の理論を解説する。	駒城素子（お茶の水女子大学助教授）
7	衣服と色(2)色の堅牢性と表色	染色物の耐久性―堅牢性は実用上大変重要である。堅牢性に関係する要因を述べ、変退色の評価にふれる。また、色の表し方の基本を解説する。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	洗濯 (1) 洗浄理論	複雑な汚れ成分を分析し、種々なよごれが洗浄除去される様子を理論的な面から考察する。洗剤各成分、洗濯機の作用や繊維とよごれ除去との関連性などについても基本的な面から洗浄作用を考える。よりよい洗濯を行うための科学を学ぶ。	角田光雄（東京家政学院大学教授）
9	洗濯 (2) 洗剤と洗浄効果	衣料用洗剤は、主成分である界面活性剤に洗浄や仕上りの効果を高めるための補助剤などを配合したものである。界面活性剤や補助剤の特性を知り、洗剤の効果的な使い方を考える。また、洗浄力を評価するための試験方法や、その問題点などについても考察する。	阿部幸子（青山学院女子短期大学教授）
10	漂白・増白と布の白さ	布の白さは繊維の種類や仕上げ処理法によっても異なる。白さはどのように評価されるか、漂白、青味づけ、螢光増白の原理とその効果を述べる。また、日常服に触れ好んでいる白さについてもふれる。	駒城素子
11	衣服の劣化	衣服は着用、保管や洗濯操作などの間に、各種の機械的、化学的な作用を受け、それによって強度、外観その他の機能性に損傷を受ける。これら外的作用による衣服の劣化のメカニズムとその評価方法について考える。	平山順之
12	ヒトの体温調節と衣服	ヒトの体温調節機構、快適衣服気候の形成条件など、衣服による気候調節作用の基礎的事項をふまえて、衣服の諸要素——布地、デザイン、着装方法——が、皮膚表面から外界への熱移動とどのような関係にあるかを検討し、寒暑に応じた着方の実際について考える。	田村照子（文化女子大学教授）
13	人体の動きと衣服の運動機能性	衣服の運動機能性——動作への適応性——は、その衣服の着心地を左右し、着用者の疲労感や作業効率とも関連する重要な条件である。本章では衣服の運動機能性を追求する基礎として生体の運動時変形、衣服の拘束性とゆとり、衣服圧の影響などについて述べる。	同上
14	衣生活と環境問題	衣服には、繊維や布の段階で、あるいはできあがった製品に、さまざまな化学加工や処理が施されることが多い。これらに用いられる薬剤の安全性などの問題や、各家庭から出る洗濯排水の水質汚濁の問題など、環境保全にかかわる衣生活の側面について考える。	阿部幸子
15	衣服・衣生活研究の課題	14回までの講義を総括して、衣生活を支えている科学の広がりを概観。いっそう快適で、安全で、調和のとれた衣生活をめざした、被服科学諸領域の研究動向を紹介する。	酒井豊子

＝食と栄養の生態学＝（R）

〔主任講師：鈴木継美（東京大学教授）〕

全体のねらい

人間の食生活と栄養状態が、人類生態学的な諸条件によって規制されること、またそれによって人間の生活環境も変化することを理解させるのが第1のねらいである。さらに具体的な研究例をとりあげ、問題が常に各種要因の錯綜する中で生じていることを説明する。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・職名）
1	生態系と人間の食物	生態系とバイオームについて説明を加え、雑食性の生物としてのヒトの特徴、さらに文化をもった人間がどのような食物を利用しているかをのべる。	鈴木継美（東京大学教授）
2	食物生産の技術と組織	食物の生産様式は、生息地の環境条件とそれぞれの集団がもつ文化によって異なっている。時間的な変化と空間的な多様性を中心に、食物生産について、とくに技術的側面と、社会・経済的側面から解説する。	大塚柳太郎（東京大学助教授）
3	食物消費の技術と組織	生産された食物が消費されるまでに介在する保存・加工という技術的側面と、分配・売買という社会・経済的側面を、人間の生存と関連づけて解説する。さらに、調理と食事のもつ意味やその変化についても考察する。	同上
4	食習慣と食文化	はじめに食物の受容と忌避について解説し、嗜好・食習慣にふれ、次に、ある地域の食文化は食材料の入手可能性と加工・調理技術を軸としてつくられることをのべる。料理・献立・食具・食制についても説明を加える。	鈴木継美
5	ヒトの栄養素要求	ヒトの身体の元素組織をまずとりあげる。次にエネルギーやタンパク質の必要量についてその測定方法を含めて解説する。他の栄養素についても必要量と所要量の説明を行う。	同上
6	食物の栄養生態学的特性	食物にはどのような成分が含まれるか、その組成は食物の種類によってどのように異なっているのかを、栄養学と生態学の両方の視点から論じる。それによって、それぞれの食物のもつ特性を明らかにする。	本郷哲郎（東京大学助手）
7	食物摂取調査－方法論的検討	栄養状態を判定する方法の1つに、食物摂取の状況を把握する方法がある。現状および過去の摂取状況を知るには、どのような方法を採用することが適切であるか。また、それぞれの方法にはどんな問題点があるのか。これらについて解説する。	岡崎光子（女子栄養短期大学教授）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・職名）
8	栄養状態の評価	栄養状態とは何かを説明し、ついでその評価を個人および集団について実施する場合の具体的な進め方をのべる。さらに栄養欠陥による世界の健康障害の現状について触れる。	鈴木継美
9	ケース・スタディ(1) －サゴとタロ	サゴヤシからとるデンプンとタロをはじめとする根茎類は、オセアニア地域のもっとも重要な食物である。この地域に住む人々の食と栄養について、パプアニューギニアのギデラ族とオク族を例に具体的に解説する。	大塚柳太郎
10	ケース・スタディ(2) －トウモロコシ	トウモロコシは世界中の気候温暖な地域で栽培され、その生産高はコムギとイネについで多い。その起源と伝播、作物としての特徴、種類や利用方法、中米諸国独特の調理技術であるアルカリ処理の栄養生態学的意義について解説する。	柏崎浩 （東京大学講師）
11	ケース・スタディ(3) －キャッサバ	キャッサバは、かんばつや病害虫に耐性があり、収量も多く、低エネルギーコストの熱帯作物資源として重要性が増している。このキャッサバに含まれるシアン化合物をめぐり、その除去技術、慢性毒性、マラリア抵抗性について解説する。	同上
12	ケース・スタディ(4) －ジャガイモ	ジャガイモはアンデス高地で数千年前から栽培されてきた。原産地アンデス高地に住むアイマラ農民のジャガイモ栽培と、その自然環境を利用した加工法、および世界各地への伝播について解説する。	高坂宏一 （杏林大学教授）
13	ケース・スタディ(5) －コメ	コメは広範な環境適応性と安定した連続生産性によってアジアの主食となり、地域社会は水田稲作を基盤として成熟していった。コメ食の利点とともに、脚気やその他のビタミン欠乏など、コメ食の問題点について解説する。	門司和彦 （長崎大学助教授）
14	都市化と食生活	都市化の進行とともに供給食品の多様化。食品供給網の広域化、食生活の社会化が生じている。食品産業の発展、消費者行動、供給食品の安全性確保、都市の暮らしと栄養などの問題について解説する。	柏崎浩
15	人類の未来 －その食と栄養	地球の人口支持力の予測、人口の就業構造の変化、人口の高齢化と身体活動の減少、食物の商品化とその影響を説明し、終わりに地球全体としての栄養問題を考察する。	鈴木継美

＝食　物　総　論＝　（ＴＶ）

〔主任講師：宮崎基嘉（元放送大学教授）〕

全体のねらい

食物の持つ意味、食物の役割は生活のなかで、また健康との係りあいにおいて近年いろいろの問題を提起している。また食物をめぐる諸科学の進歩もあり新しい視点から食物を理解することが日常生活の上においても必要になった。食物の種類は極めて多いが、全体に通じる問題を栄養、健康、嗜好、品質、保蔵の面から学習する。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	生活と食物	食生活の変化は生活の変化と深く関係している。食物の変化は技術の進歩もあるが需要の変化にもよる。今、食物は健康とのかかわりで見直しを迫まられている。食物と栄養の問題を中心に考えていく。	宮崎基嘉（元放送大学教授）
2	炭水化物の役割	食物成分のうち最も量的に多く、また種類も多い炭水化物について主に栄養的役割について述べる。食物の調理や加工など食物を扱う上での炭水化物の変化やその栄養に及ぼす影響など多角的な解説をする。	加藤博通（東京大学教授）
3	脂質の働き	この20年間に最も摂取量の増加した成分で、食生活の変化を象徴する成分でありまた健康の視点からも注目されている成分である。研究の進歩も著るしく新知見を中心に解説する。	五十嵐脩（お茶の水女子大学教授）
4	たんぱく質とアミノ酸	たんぱく質は生命の基本物質であり、アミノ酸はそれを構成する成分である。たんぱく質の重要性について認識する。食物たんぱく質の栄養上の価値の相異について、アミノ酸組成との関係を述べる。	宮崎基嘉
5	ミネラルの働き	ミネラル（無機質）は種類が多い。それぞれ個別の働きがあると同時に相互に関連して働いている。体内での動きも極めて能動的である。ミネラルの吸収、利用について新しい研究が展開されている。微量ミネラルについても最近注目されている。	内藤博（東京大学教授）
6	ビタミンの役割	ビタミンの種類も極めて多く、その作用も多彩である。系統的にビタミン類全般について解説する。特にビタミンA、D、B、C などについて詳述するとともに、食物、食事によるビタミン補給についても述べる。	荒川信彦（お茶の水女子大学教授）
7	非栄養の役割	食物の成分の中には栄養素に分類されていない多くの成分がある。これら非栄養素の役割について近年研究が発展してきている。食物繊維は健康との関係で広く研究が発展している成分である。	綾野雄幸（千葉大学教授）

回	テーマ	内容	担当講師 （所属・氏名）
8	栄養所要量と食事	前章までの知識を総括し、日常生活活動において摂取すべき望ましい栄養量の基準となっている栄養所要量について解説する。また日常食事の構成について説明する。さらに運動付加の意味について述べる。	宮崎基嘉
9	食物の色・味・香り	食物の具備すべき重要な機能に嗜好適性の問題がある。この章では嗜好に関係の深い、食物の色、味、香りの成分について解説する。この分野の研究は驚くほど広く深く行なわれていることが理解されよう。	小林彰夫 （お茶の水女子大学教授）
10	食物の品質	食物の品質が問われる時代である。食物の品質を規定する因子を分析し、これを保証する手段としての国際食品規格、国内食品規格の問題を探る。品質の一つである食物のうまさとはどのようなことなのか。うまさを形成する食物の物性に触れる。	吉川誠次 （共立女子大学講師）
11	食物の保蔵	食物の生産と消費を結ぶ中間技術としての保蔵の重要性は世界の食糧問題の一環としてその研究開発が急がれている。食物の品質を保持しつつ貯蔵するために新しい技術が駆使されている。中間水分食品もその1つである。	荒井綜一 （東京大学助教授）
12	食物の調理科学	食物の調理は食物をおいしくするための操作を考えてもよい。また食物を処理したとき起る物理・化学的変化をみてもよい。どのような操作がどのような意味をもつのか、科学的、体系的にこれを解説する。	杉田浩一 （昭和女子大学教授）
13	食品の衛生と安全性	食物の安全性を確保するために食品衛生学の領域において活発な研究が行なわれている。食中毒の問題、食品添加物の問題、安全性の考え方、法規制などにつき述べる。	細貝祐太郎 （女子栄養大学教授）
14	食物をめぐるトピックス	特に新しい問題を扱うわけではない。13章までに入りきらなかった重要なテーマ3題について述べる。すなわち、(1)食物のエネルギー、(2)水、(3)微生物利用の3題である。	宮崎基嘉
15	食物の未来像	食物はこれからどのように変っていくのだろうか。過去に行なわれた未来予測の結果を検証し、新らしい未来予測に触れる。食物の機能について新しい見方がなされ、機能性食品の研究が開発されている。	同上

＝ 食 物 の 探 究 ＝ （TV）

〔主任講師：宮崎基嘉（元放送大学教授）〕

全体のねらい

食物の世界の変貌は著しい。しかし食物に関する知識や情報は必ずしもそれほど深くはない。この講義では食物の総てをとり扱うわけにはいかないが、いくつかの食物をとりあげて解説する。その視点は「食文化・食の歴史」から「食物の現状」に移り、さらに「食物の社会学」、「食物の科学」を探る。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	日本の食物	我が国の食物の歴史は日本人の生活の歴史の重要な部分を形成する。縄文、弥生の時代から現在に至る間、その歴史は時代区分に沿って変ってきている。最近４０年間における変貌は特に著るしく、食物のもつ意味が社会の動きを背景として大きく変ってきている。	宮崎基嘉（元放送大学教授）
2	食と味覚	民族や地域によって人々の味にたいする嗜好が大きく異なる。味覚は食物選択にとって重要な位置を占めているだけに、味覚を決める因子が何であるかを知ることは、健康や、食文化の面からも興味ある問題である。ここではとくに栄養生理的面から追求してみたい。	木村修一（東北大学教授）
3	香辛料の世界	先史時代から人々に用いられてきた香辛料は食品に風味を賦与して嗜好性を高めるのみでなく、食品の劣化抑制、腐敗防止などの保存効果も備えている。これらの機能特性とそれを発現する成分について解説する。	中谷延二（大阪市立大学教授）
4	甘味を求めて	甘味は基本的な食物の味の一種であるが、食の歴史とともに人の求める甘味は変ってきている。現在、甘味料の主役はショ糖である。さらに、ショ糖の欠点を補うものとして、低う蝕性、低カロリー、腸内細菌叢改善などの機能特性をもつ甘味料についても述べる。	不破英次（福山大学教授）
5	変わりゆく野菜	野菜の消費量はここ数年間増減がない。しかし消費動向は多品目・少数量化基調にあり、栄養源としての野菜というより、キャラクター商品としての野菜の価値が重視されている。これが種類・品種・栽培技術・栽培方法に至るまで「野菜」を変えていることを解説する。	伊東正（千葉大学助教授）
6	きのこ、野生から栽培へ	きのこは種類も多く、木材や落葉を分解したり、樹木と共生するなど、自然界における働きも大きい。近年、きのこの栽培技術が進み、野生のものが次々と栽培化されており、生産量や輸出入量を年々増加している。利用の範囲も食用から医薬用へと拡大している。	小川真（農林水産省森林総合研究所機能開発部きのこ科長）
7	昆布ロードを探る	昆布の主産地は北海道で、最近まで他で栽培されることがなかった。それが、薩摩を経て沖縄、中国にまで運ばれ、昆布食類型分布という地域独特の消費形態を作った。また運ばれた経路も一定していて、これを昆布ロードと称し、その生成理由について解説する。	大石圭一（函館短期大学教授）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	日本酒の伝統 ―― 創意と工夫	すぐれた文化はうるわしい酒を生む。米・米こうじ・水を主たる原料とする日本酒は、単なる技術の伝承ではなく、わが国の気候風土のもとに独創的な創意工夫により育てられてきた、きめ細かい配慮のもとにあくなき探究をしてきたこと自体が日本酒の伝統といえるのである。	矢野圭司（東京大学教授）
9	牛乳と日本人	牛乳飲用の歴史は奈良時代にさかのぼるが、わが国において一般的になったのは明治以後である。牛乳と日本人の係りあいについて技術論もまじえて探る。	古我可一（女子栄養大学教授）
10	食肉の選択	食肉を生産するためにわが国で飼育されている肉用家畜の品種を紹介し、肉用家畜から食肉に供するために必要な処理工程について述べる。生産された枝肉及び部分肉がどのような基準（規格）に基づいてどのように選別（格付）されるかについて解説する。	中井博康（農林水産省畜産試験場室長）
11	魚食の軌跡	日本人は魚食民族といわれるほど、太古から魚と深くかかわり、魚をおいしく食べる技術も世界に類例をみない。私たちの祖先は海の幸をくらしにいかすことをひとつの文化にまで高めたが、その軌跡をたどるとともに魚の生産、流通、消費の変遷を解説する。	山川健重（東海大学教授）
12	海を渡った水産練製品	日本の伝統的水産食品である水産練製品は最近ではSURIMIとよばれて国際的に愛好され海外でも生産されるようになった。水産練製品の製造原理を解説するとともに、地域的特色、新しい製品、製法、原料魚の開発について解説する。	岡田稔（元東海区水産研究所部長）
13	豆食の進歩	豆類の食用は世界各国において見られるが、わが国においては大陸文化の影響を受けつぎながら独自の豆食文化を築いている。わが国の豆食は米食と深く係りあい日本食文化の形成に重要な役割を果たしている。諸種の豆利用形態がどのように進んできたかを探る。	宮崎基嘉
14	米をめぐって	米は日本の食糧を支える基幹的食物であり、昔も今もそのことは変らない、しかし米の位置づけは最近著るしく変ってきた。その変化の過程を食生活全体の中で考えたい。また、米自体の生産、供給、品質などの諸問題を科学的に考えてみたい。	同上
15	食物を考える	15回にわたるこの講義全体を通しての日本の食物の姿を全体像としてとらえる。また、これから日本の食物がどう変っていくのか。食文化、食物科学の視点から考える。	同上

＝ 住 生 活 史 ＝　（TV）

〔主任講師：平井　聖（昭和女子大学教授）〕

全体のねらい

何時の時代にも、人間は生まれた時から、家族の構成員である。子どもが初めて意識した時、普通はそばに親がいる。兄弟がいるかもしれない。少くとも、母と子は密接な関係にある。全く親族がいなかったとしても、廻りに誰もいないということはない。住まいは、家族のためのものである。家族の構成が違えば、住まいが変わる。社会の変化に対応して生活様式が変わり、住み方が変わる。住み方が変われば、住まいもその変化に応じて変わっていく。

通常は、家族は社会の中の最小単位で、これが一つの住居に収まるが、時代によっては、血縁のある最小単位が、集落を構成していることもある。このようなときは、一つの住居だけでなく、集落を対象としなければならないことになる。　この講義では家族と住まいの対応関係に焦点をあて、併せて家族の構成員それぞれの側からも、住まいをみていこうと考えている。そして、家族の構成員の中では、できるだけ家族の中心的な存在であった女性の生活を、追ってみたいと思っている。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	Ⅰ　はじめに 住居と家族の生活・個人の生活	日本における家族の移り変わりと、住居形式との対応関係について概要を説明する。また、いくつかの形式について、家族あるいは男と女がどのようにその生活空間を占めているか、生活様式にどのように外国からの影響がみられるかについても簡単に解説する。	平井　聖 （昭和女子大学教授）
2	先史時代の住居 住居と集落	縄文時代になると、住居跡が沢山発見されるようになる。遺物は少ないが、炉と竈と関係や集落の構成から、当時の人々の生活を類推することも出来ないことではない。弥生時代になると稲作が拡まる。住居の種類もふえる。生活用具の出土も多い。古墳時代になると、埴輪や鏡太刀の束飾などに家屋をかたどったものがあらわれ、住居の形がはじめて明らかになる。埴輪から当時の人々の姿も具体的になる。	同　上
3	古代の住居（一） 奈良の都と 都での生活	考古学の成果をもとにした平城京・平安京の再現と、出土品から都での生活を推測する。特に、寝殿造にいたる奈良時代の住居と、奈良・平安時代の都での庶民の住居について、発掘の成果と文献・絵画史料から復源、解説する。	同　上
4	古代の住居（二） 平安時代の 都での生活	寝殿造と寝殿造にいたる平安時代初期の上層住宅について、考古学の成果、日記・日記文学や絵巻物、そして結婚の形式ほかの習慣などから、家族と建物の対応やその中での生活を考えてみよう。	同　上
5	中世の住居 武家の生活・ 公家の生活	寝殿造から主殿造への移り変わりを、住居そのものの変化を追うと共に、家族と住居の対応関係の変化、結婚形態の変化、相続関係などを背景に考えてみることにしよう。対屋の消滅、小御所の成立、主殿内部の機能構成等が問題となる。	同　上
6	桃山時代の住居 武の生活・ 公家の生活	最近の発掘の成果と文献史料とくに絵図類から、戦国時代から江戸時代初期にいたる上層階級の生活と住宅との関係をみる。	同　上
7	江戸時代の住居（一） 大名の屋敷と生活	将軍や藩主の生活を、史料と指図を用いて、建物と対応させながら考える。特に書院の主室を飾った座敷飾については、その原型と成立過程を考察する。	同　上
8	江戸時代の住居（二） －中・下級武士 の住居と生活－	江戸における旗本、各藩の藩士たちの住居は身分によって差があり、大藩の家老の場合は大名屋敷に匹敵するが、一般にはそれほどの規模ではなかった。そこで家老以下すまいと生活について考えてみることにする。また、江戸詰めの時のすまいについても、考えてみたい。	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
9	江戸時代の住居(三) 数寄屋風の意匠と遊び	数寄屋風の意匠をもつ建築をとりあげ、平安時代から存在していたその系譜について、絵巻物や屏風絵を用いて解説し、江戸時代においてはいくつかの数寄屋風の建物、特に桂離宮の書院群を例に、具体的に建物と用例を対比させながら考える。	平井　聖
10	近世・都会の生活	近世になると京都や江戸での生活が屏風絵などで明らかになるだけでなく、地方の城下町での生活も絵巻物・屏風・浮世絵・道中記・日記等様々な史料から探ることが出来る。また、近世には各地に町屋の遺構もまだまだ残されているので、それらを用いて庶民の日常生活を描いてみたい。	同　上
11	近世・庶民の生活	近世のはじめ、桃山時代から江戸時代初期の農村や宿場町での生活は、史料が乏しく具体的に描きだすことはむつかしい。農家の遺構も桃山時代以前にまでさかのぼれるものは、ごくわずかである。近世に入って、18世紀になると限られた地域ではあるが、農村の一村全体の構成を知ることが出来る史料が見つかっている。しかし、生活に関しては、残っている道具等を通して、推察できる程度である。	同　上
12	近代化の系譜 (一)	江戸時代以来の和風住宅に住み、伝統的な日常生活を続けてきた多くの人々が、西欧文明のどのような面から影響を受け、生活様式がどのように変わり、住居にどのような具体的な変化がおこったかを見ていく。茶の間での生活と座敷の使い方がどのように変っていったか、洋風の生活様式が住宅内部でどのように広まっていったか等が中心となる。	同　上
13	近代化の系譜 (二)	欧米式の生活様式をそのまま取り入え、洋風住宅に生活したのは、明治から昭和の敗戦に至るまでの時期には、ごく限られた人々であった。しかし、一方では庶民を相手に純粋にアメリカ式の住宅を輸入し、あるいは設計して、純洋式住宅の普及に努めただけでなく、啓蒙するために住宅雑誌をだして教育に心をくだいた人もいた。純洋式がどのように受け取られ、受け入れられたかを追ってみたい。	同　上
14	現代の住居 理論と実践	大正時代の後期から、新しい集合住宅が公共的機関によって提供されはじめる。不特定の居住者に対する複数の住宅の設計に建築家がかかわるようになって、科学的研究対象として住居が扱われる機会が生じ、実態調査にもとづく、住み方や使い方の類型化や標準化が行なわれはじめる。その結果、食寝分離論などが提示され、公共の集合住宅にダイニングキッチンが設計されることになった。	同　上
15	新しい生活様式 家族とすまい	敗戦後、建築家たちは極端に悪い住宅事情の中で、様々な試みを展開してきた。ダイニングキッチン、就寝分離、家族室としてのリビングルーム、2つのリビングルームなどを提案し、家族のくらしをよりよいものとするために努力してきた。最後に近年のいくつかの試みを紹介し、家族とすまいの関係を考える。	同　上

＝ 住まいと環境 ＝ （TV）

（主任講師：本間　博文（放送大学教授）
主任講師：梅干野　晃（東京工業大学助教授））

全体のねらい

外部の環境を調整して人間の居住に適した環境を造りだすことは住まいの重要な機能である。そのためには、住宅を取り巻く外部環境（気候、風土）に対する正しい知識と、それを制御する有効な手段を知る必要がある。本講義では、主に熱、光、空気、音、などの環境に関する科学的な理解を深め、同じ温帯にありながらわが国と対称的な気候風土のヨーロッパ地域を比較しながら、住戸内外の環境の調整手法について学ぶ。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	序論	「住まいは生活の容器である」といわれる。当然外界をコントロールして人間の居住の場にふさわしい環境を作り出すことが住まいの主要な役割である。しかしながら今日我々の住まいは、都市化の進展に伴う外部環境の悪化と居住者の要求水準の向上という困難な問題の解決を迫られている。本講義では快適な住まいを作り出すための諸要因の科学的な分析と解決の方法を探ることを目指している。	本間博文（放送大学教授）
2	気候・風土と住まい	わが国のほとんどの地域では、夏と冬の両方で気候調節を必要とするため、年間を通じて快適な居住環境をつくり出すことはきわめてむずかしい。また、地勢の変化に富むことから特有の局地気候が形成される。本章では、気候・風土と住まいとの関係の重要性を指摘するとともに、具体的な気候特性の把握方法について述べる。	梅干野　晃（東京工業大学助教授）
3	住形式と室内環境	住宅の室内環境はその住宅の平面形式、構造、あるいは使われている材料によって極端に影響を受ける。しかし、明らかに特種な環境でもなければ自分が居住している住居がどのような環境特性を持っているのかを気づくことは少ない。本章では住形式による室内環境の特性についていくつかの事例をもとに概説する。	本間博文
4	都市気候	都市にはヒートアイランド現象のように、郊外とは異なった気候が形成される。まずはじめに、都市気候についてその特徴と形成要因を概説する。次に、都市気候を形成する基本単位となり、また、室内気候を直接的に規定する建築外部空間の微細気候に着目し、その形成メカニズムを示す。さらに、リモートセンシングによる観測結果を紹介しながら、土地被覆の改変と表面温度との関係を明らかにする。	梅干野　晃
5	大気汚染と騒音	都市は、大気汚染、騒音、生活排水など多くの公学および環境問題を抱えている。ここでは住環境の保健性、快適性を確保する立場から大気汚染、騒音の実騒と対策を中心に述べる。	山下恭弘（信州大学助教授）
6	日照と日射－1	わが国は地理的にもまた気候風土的にも日照の効用を活用して室内環境の調整を可能とする条件が整っている。当然、日当りを有効に利用する住慣習が確立されて今日に至っている。本章においては各地の日照条件の違いを明らかにした上で日照計画上のいくつかの技法を紹介する。	本間博文

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
7	日照と日射－2	日照は冬期にはその活用が期待されるが、反対に夏は出来るだけ住宅にそのエネルギーが入り込まないようにしなければならない。本章では主として太陽光線の熱エネルギーの特性を紹介し、日照を効果的に活用し、あるいはそれを防ぐための基本的な知識を紹介する。	本間博文
8	住まいと光	視覚は生活上の情報の8－9割を支配するともいわれており、視環境は快適な住まいづくりにとって大きなウェイトを占めている。本章では、まずはじめに、視環境を規定する主な要素について概説する。さらに、昼光照明と人工照明について、それぞれ光源の特徴や明るさの基準など、快適な視環境をつくりだすための基本的な考え方や具体的な方法を述べる。	梅干野晃
9	室内気候と快適性	屋外の気候変動を和らげ、快適な室内気候をつくり出すことは、住宅のシェルターとしての主要な役割である。まずはじめに、人間が熱的に快適であるとはどのようなことであるかを考える。次にこれを規定する主な要素について概説するとともに、これらの要素を用いた快適性の評価指標を紹介する。最後に快適な室内気候を得るために住宅として要求される熱的な性能について整理し、室内気候に関連する第10、11、12、14章の位置付けを明確にする。	同上
10	暖かい住まい	暖かい住まいづくりのために建物に要求される熱的な性能は、高い断熱性能と気密性能である。建物の熱容量を増すことも安定した暖かさを保つ上で有効である。本章では、断熱性能に着目し、これを理解するための基礎知識と定量的な把握方法について概説する。次に、建物の熱的性能と室内気候との関係について論ずる。さらに、室内から逃げる熱を補うための熱源として暖房設備が必要となるが、その種類と特徴についてもふれる。	同上
11	涼しい住まい	わが国の梅雨から夏にかけての高温多湿な気候をしのぐには、強烈な日射を徹底的に遮ることと、通風・換気を積極的に利用することが基本となる。本章では、日射遮蔽の基本的な考え方を述べ具体的な手法として植栽による日射遮蔽効果を紹介するとともに、通風計画について概説する。	梅干野晃
12	湿気と結露	近年、住宅の断熱、気密化に伴い熱的に弱い部分での結露の危険性が増し、被害も顕在化しつつある。本章では湿気に関する基礎事項を示した上で、結露のメカニズムについて述べる。さらにその被害実態を明らかにするとともに、結露の防止対策について考える。	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
13	住まいと音	私たちにとって音は身近に存在する。言葉を使って意志の伝達を行い、音楽は私たちの心、感情を動かす。すべて音によるものである。住まいの音を考えてみると、そこには第5章で扱ったピアノ、ステレオなどAV機器からの音、洗濯機、クーラーなどの音に代表される生活騒音が存在する。また、住まいの中に侵入してくる道路交通騒音、工場騒音、航空機騒音、カラオケ音などあらゆる音が存在する。 ここでは、音の性質、音の伝搬減衰、および制御と評価方法について述べる。	山下恭弘
14	パッシブシステム	日射や風などの自然の力を生かした建築的な工夫は、古くから民家などで行われてきているが、近年、パッシブシステムと呼ばれ、機械力にたよらずに建築そのものによって積極的に自然のポテンシャルを生かし、冬暖かく夏涼しい快適な住まいを実現しようとする設計手法の科学的アプローチが試みられている。本章ではその基本的な考え方と具体的な手法について概説するとともに、主な手法の効果について紹介する。	梅干野　晃
15	これからの住まい	わが国は夏暑くその割に冬寒いという住環境上難しい条件におかれている。地域による気候的な条件の違いも大きい。さらに都市化の進展によって自然気候調節が困難になってきている。本章では15回の講義のまとめとして、室内環境の上からこれからの日本のすまいのあるべき姿を考え、具体的な提案を行なう。	本間博文

＝住　居　Ⅲ＝（ＴＶ）

－住　計　画　論－

〔主任講師：清家　清（東京工業大学名誉教授）
　主任講師：本間博文（放送大学教授）〕

全体のねらい

住居は住むための機械であると言われている。人間の行動に支障なくかつその行動を快適に安全に営むことを可能とすることが最大の役割であると言って良いだろう。また、外部の環境を適切に調整して人間の生命活動に最適なように環境を調整することも重要な機能である。住居Ⅲでは住居Ⅰ、Ⅱで学習した内容をふまえて、物としての住居が快適で利便性に富む住生活を可能とするための計画課題を様々な角度から検討する。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	住計画とは何か	「住居Ⅲ－住計画論－」の講義を展開するにあたり、その目的や課題、あるいは方法について解説し、望ましい住計画の条件を考える。	清家　清（東京工業大学名誉教授） 本間博文（放送大学教授）
2	風土と住計画－1 －沖縄の住まい	住計画論の最初に、わが国としては特殊な気候条件における住まいのあり方を概観し、気候風土と住計画の関連を考察する。本章では沖縄の住居を取りあげる。	本間博文
3	風土と住計画－2 －寒冷地の住まい	北海道はわが国としては寒冷な地域で、本州の住計画とは異なった問題点がある。このような寒冷地における住生活の特徴を明らかにし、住宅のあり方を考える。	同　上
4	平面計画－1	第２次大戦後の住宅には、戦前の中廊下型とは全く異なった平面型の住宅が登場し、モダンリビングと呼ばれた。この定着の過程と平面型の特質について述べる。	同　上
5	平面計画－2	前章に続いてモダンリビングの構成原理とその変遷について述べ、このモダンリビングが庶民の住宅にどのような影響を与え、今日に至っているかを検討する。	同　上
6	規模計画－1	住宅の室内空間の設計には、人体寸法が重要な決定要因となる。本章においては、人体寸法に基づいた室内空間の規模決定の問題について検討し、住宅の規模決定の為の基礎的な知見を得る。	清家　清 本間博文
7	規模計画－2	住宅の規模はどの程度あれば良いのだろうか。この点の国民的合意が得られなければ、居住状態の根本的改善は難しい。本章では、最低居住水準、適正居住水準を基に日本人としての住宅規模について考える。	本間博文

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	室　内　計　画	外敵や猛獣などに対して比較的安全な島国に住む日本人と、大陸に住む民族との間の室内(インテリア)という言葉に対する感覚の相違、日本人の古来からの考え方の移りかわりなどから、室内計画の本質を考えてゆく。	清　家　　清
9	構造計画－1	建築物は、地震、積雪、強風、その他もろもろの災害に対して安全でなければならない。どうすれば安全な構造体にすることができるのか。基本的な事項から考察をすすめてゆく。	同　　上
10	構造計画－2	構造計画は、結局は各部位の平衡条件を検討し、力とその支持方法と変形の幾何学的・物理的・力学的な相互関係をしらべることに帰する。この章では、その問題を、いくつかの具体例について考える。	同　　上
11	構造計画－3	実際の建築物は、どのような構造計画のもとに建てられているのであろうか。いろいろな構造のメリット・デメリット、わが国に多い木造の場合の留意点などについてふれる。	同　　上
12	安　全　計　画	住生活は、安全であることがもっとも基本である。本章においては、日常生活における各種の危険に対して、安全な住計画の課題を考える。	本　間　博　文
13	防　災　計　画	わが国のように、地震や台風を始めとする各種の自然災害の多い国では、災害に強い家を造ることは絶対的な条件である。本章では、主として地震を取り上げ、地震に安全な住宅について考える。	同　　上
14	住居の維持管理	住居の維持・管理は日常の住生活に直接関連し、住宅の居住性を大きく左右する。本章においては、集合住宅の管理と戸建て木造住宅のメンテナンスを取り上げ、現状の問題と今後の課題を明らかにする。	同　　上
15	おわりに これからの住まい	本章においては、住居Ⅰ「住生活論」、住居Ⅱ「住環境論」と今回の住居Ⅲ「住計画論」を合わせた45章の講義のまとめとして、日本における住生活の現状と今後の方向について総括的な展望を行う。	清　家　　清 本　間　博　文

＝人　間　の　病　気＝（R）

〔主任講師：香月秀雄（元放送大学長）〕

全体のねらい

人間は太古から現在に至る間そうであった様に、恐らくは将来とも、病気なるものとの対決を強いられることになろう。病気は個人のものに止まらず、人間が社会を形成するに至った時点では、個人のもつものが集団に影響を与え、また社会を維持する絆が往々にして個人の身心に影響を及ぼす。人間の病気を教養の概念として述る。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	病　気　と　は	健康と対比されるものとして病気が定義される。肉体的にも精神的にも安定した状態が健康の理想であるが、その破綻が病気であろう。また病気には個人差があり、社会の移り変わりとともに病因も新しく加わってくる。	香月秀雄（元放送大学長）
2	病気と人間との闘いの歴史	古代にはほとんどの病気の病因が明らかでなかった。このため病気を呪術的、宗教的にとらえていた。これを破り、病気の真の原因に近づくきっかけになったのは伝染病の流行であった。	同　上
3	病気の原因と成立	大部分の病気は内因、外因によって全身レベルで起こっている変化として考えられる。病気と関係があると考えられる条件のすべてを病因としてとらえることには問題がある。	同　上
4	病気を診断すること	診断の方法はいろいろある。ここでは従来からの問診などのほか、急速に発達した検査法を紹介する。しかし病人は診断を望んでいるのではなく治療を望んでいるのである。	同　上
5	病　気　の　症　状	病気の症状は千差万別である。年齢、性、職業などの人間生活とのかかわりも病気を診断する重要な手がかりとなる。また病気を分類する必要もある。	同　上
6	科　学　の　参　入	科学の参入によって医療技術は飛躍的に進歩した。電流，放射線の医学分野での応用、さらに生理学、生化学の関与は病態だけでなく生命現象の解明にも灯をともした。その反面、医学と医療との乖離も伴った。	同　上
7	医　学　と　医　療	医学は医療の世界から出発し、他の学問分野から知識と知恵をもらい受けて成長してきた。医療は医学に基礎づけを求めなければならないが、情感の世界と社会科学の関与を医学に問いかけることも必要である。	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	心と体の分裂	心と体はそれぞれ単独では十分存在できない。心身相関の問題を臨床のケースを通して考える。心と体を分裂に導くものは何か、心身症はどのようにして生じるかを検討する。	織田尚生（甲南大学教授）
9	心と体をつなぐもの	心と体の統合の機制について、第8章のケースを取り上げながら心理療法学の立場から検討する。心身症治療とイメージの関係、情動のシンボリズムの果たす役割、非因果律の意義について考える。	同上
10	病気と経済	経済学の視点から病める現代医療の制度を考える。医療費はなぜ上がるのか、医療の技術革新との関係。医療保険をどう改善したらよいか。21世紀へ向け、福祉税の設置を提案する。	伊東光晴（京都大学名誉教授）
11	病気の治療	医学の存在する理由は病気の治療であり、予防である。ここでは、さまざまな治療法の現状を紹介するとともにその功罪、個人の資質、環境とのかかわりなどについても触れる。	香月秀雄
12	治療の適応	病因と治療手断は常に直結するというものではない。病人自身の生理的条件、家族や社会的条件によっても治療手段は選択されなければならない。病気の治療は治療手段の選択―治療適応―がよいかどうかが問題である。	同上
13	加齢と病気	加齢とは人間が生を享け、死に至るまでの現象である。その後半の過程を老化として取り上げ、この時期にみられる病気の特徴、現れる病態がどのようにして起きるかをみる。	同上
14	病気の予後	病気の予後とは病気の成り行きであり、予後がよいというのは治る見込みの高いことを意味する。しかし薬品や治療方法の開発によって予後の判断も変わってくる。	同上
15	人間の病気と社会	病気は単に個人的なものでなく、人集団、社会組織とも切り離せない問題をかかえている。そこで医療、医学の進歩のあとをたどり、医療体制のあり方を考え、医療の将来を展望する。	同上

＝母子健康科学Ⅰ＝（ＴＶ）

〔主任講師：古谷　博（放送大学教授）〕

全体のねらい

母子健康科学は、受精から誕生までの「Ⅰ」と、出生から乳児期「Ⅱ」の２科目に分けられているが、この時期の健康は母と子どもを離しては考えられない。この母と子どもの間にある精緻で美しい健康の営みを母子一体で把えて学ぶのが母子健康科学のねらいである。そして生涯健康科学の基盤、出発点として考えていきたい。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・職名）
1	母と子の健康科学のねらい	母と子の健康について学ぶことは、人間の出発点からの生理・形態などの身体的発達を理解するだけでなく、母子の間で交わされる心理や行動を原点から知ることになる。環境からの刺激、それに対する母と子の反応の機序を理解し、生涯の健康の出発点の重要性を解説したい。	古谷　博（放送大学教授）
2	女性のバイオリズムと排卵	女性の生活活動にはホルモンの影響が大きい。女性には男性と共通したバイオリズムの他に、女性だけに特有なホルモンの周期性、波動性変化に基づいたバイオリズムがある。これが排卵、性機能のみならず生活活動の周期的調節を維持していることを解説する。	鈴木秋悦（慶應義塾大学助教授）
3	精子と卵子	生命は生殖細胞、すなわち精子と卵子を起点としてはじまる。したがって生殖細胞の発生、成熟の段階を知ることは極めて重要である。ここでは、まず胎児期から開始する卵子の成熟過程について詳しく述べる。また精子・卵子の減数分裂のプロセスを理解してもらう。	同上
4	受精と着床	排卵した卵子は、受精能を獲得した精子と卵管膨大部で受精するが、１個の精子だけが卵子に進入するメカニズムが次第に明らかにされてきた。最近の体外受精の知識、受精卵の子宮内膜への着床にみられる現象についての新しいトピックスにもふれたい。	同上
5	胎芽の発育	着床した受精卵は、次第に整然とした細胞分裂による増殖を重ね、胎芽は内胚葉、外胚葉、中胚葉へと分化し、それぞれから器官、臓器が形成されて胎児へ移行する。この胎芽の発育過程を概説するとともに、この時期の発育異常についても若干ふれたい。	同上
6	胎児の発育と行動	近年胎児情報の検出技術が進歩し、胎児の発育過程を臓器別にも認知が可能になった。また単純な胎児の体動だけでなく、眼球運動、膀胱収縮による排尿、血液の循環動態、心拍動、呼吸様運動などから、神経系発育の判定も行われ、胎児発育の評価が詳細になった。	太田孝夫（帝京大学教授）
7	胎盤・臍器・羊水	胎盤の形成、発達は、胎児、母体における代謝、内分泌、血行などに対して、妊娠経過を追って重要な働きをしている。この特殊な臓器である胎盤の構造と機能を理解することは、妊娠の健康科学の中で最も重要な事項で、ことに機能の判定は胎児の予後に関係する。	同上

回	テーマ	内容	担当講師 （所属・職名）
8	性とホルモン	妊娠すると母体には各種のホルモンが増加し、妊娠の維持に合目的的な平衡状態を示してくる。この経過には胎盤から産生されるホルモンが重要な役割を果たし、胎児のホルモンも関与している。母体－胎盤－胎児の間のホルモンの相互関係について解説したい。	伊藤博之 （聖路加国際病院院長）
9	妊婦の栄養と代謝	妊婦は妊娠の維持と胎児の発育のために特有な代謝機構のもとにあり、そのために栄養には特別の配慮が必要である。この栄養、代謝の変化はホルモンの動態と密接な関係がある。妊婦の糖代謝異常、高脂血症、鉄欠乏、妊娠中毒症などの栄養、代謝にもふれたい。	古谷博 望月眞人 （神戸大学教授）
10	胎児の栄養と代謝	胎児は旺盛な成長、発達に必要な物質をすべて母体に依存し、特有な物質代謝を独立して、また母児相関の下に営み、一方では出生後に備えた代謝機構の準備もしている。胎児の発育には胎盤の機能が大きく関与する。胎児発育障害の機序にもふれたい。	古谷博
11	妊婦の心とからだ	妊婦には、全身的、局所的に著しい変化が認められる。これらの変化は母体の妊娠に対する順応であるとともに胎児の発育に関与し、また出産に向けての準備状態でもある。また妊婦にみられる心の変化を理解する必要がある。出産への期待と不安が錯綜している。	伊藤博之
12	妊婦の環境と生活	妊婦が生活している家庭や社会の環境はさまざまである。環境から妊婦が受ける因子や妊婦の生活様式のあり方は、妊娠経過に種々の影響を及ぼす。健康志向の高まっている今日の妊娠像を、色々な視点から述べる。	同上
13	お産とは	周産期医学の研究・技術の進歩によって、今日のお産は従来に比べて格段と安全になったが、その反面、複雑な生活面から早産、未熟児出産、予測し難い母児の緊急的異常などが異常産の前面に出てきた。お産の様式への希望にも多様化がみられるので考察したい。	太田孝夫
14	乳汁とその分泌	母乳は乳児の発育に必要な栄養素と、感染防御物質などを含むが、ときには環境汚染物質やウイルスなどの混在、母体の栄養不足などが問題になる。母乳の生成と分泌には、乳腺の構造の発達のみならず、各種ホルモンの作用が複雑に関与している。	古谷博
15	家族計画	家族計画は受胎調節・避妊による出生の抑制だけでなく、不妊に対する出生の促進も含み、さらには多分に社会医学的側面をもっている。したがって、社会事情や国民感情に合致した方策のみが成果を期待できる。国の内外におけるその今日的課題をのべたい。	同上

＝母子健康科学Ⅱ＝（TV）

〔主任講師：古谷　博（放送大学教授）
主任講師：川崎富作（日本心臓財団川崎病研究情報センター所長）〕

全体のねらい

乳幼児期は生涯の中で最も生長・発達が著しい時期であり、子どもは独立した個体として生命と健康を維持している。しかし出生と同時に母を認識し、さらに家族から集団へ、社会へと適応していく子どもと、これを慈しみ育てる母との間には強い絆があり、母と子の健康は、母子のふれあいの中で学ばなければならない。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	子どもとは	子どもには個人差があることを忘れてはならない。ライフサイクルにおける乳幼児期の特長を考察し、生涯の健康における位置づけを解説する。子どもにとって環境因子の影響や社会への参加にとってのしつけや健康教育の問題も述べたい。	川崎富作（日本心臓財団川崎病研究情報センター所長） 古谷　博（放送大学教授）
2	母と子のふれ合い	母と子のふれあい、母と子の心の発達において、母児の早期接触の重要性、母子結合を促進するための育児のあり方、また問題になっている被虐待症候群などについて解説する。	多田　裕（東邦大学教授）
3	子どもの成長	身体の形態的成熟過程とその評価の意義、および評価の具体的方法について解説する。また肥満、やせなどの問題、これらと母あるいは家族との関係もとり上げたい。	渡辺言夫（杏林大学教授）
4	子どもの発達	乳幼児の運動機能、知能や心の発達過程、およびそれらの評価判定について述べるとともに、運動機能を順調に発達させる養育のあり方、母や家族の心がけなどについて考察する。	同上
5	産声から言葉まで	産ぶ声から喃語、さらに言葉へと発達していく段階を、母と子、環境などとの関わりの中で考えていく。また言葉の発達の個人差やおくれにもふれる。	巷野悟郎（日本児童手当協会こどもの城小児保健部長）
6	子どもの生理	乳幼児の体温、睡眠、排泄などの生理的機能について述べる。とくに乳幼児の体温調節機能の特長を取上げ、冷暖房や運動、衣服など生活環境との関係について詳しく解説する。	同上
7	子どもの栄養と代謝	母乳・人工乳による哺育が行われる時期から、離乳、幼児食へと子どもの栄養法が変わっていくが、これに応じて子どもの体内における代謝の状態も変化する。肥満、やせ、牛乳ぎらい、小食、偏食などについても述べる。	川崎富作

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	子どもの体質	子どもがカゼを引き易い、お腹をこわし易いとか、アトピー体質（ぜをそく、じんま疹、しっ疹などになり易い体質）、アレルギーなどのことがある。その遺伝や環境との関係を日常生活の面から述べる。	川崎富作
9	子どもの生活	乳幼児は次第に家庭から社会へと適応していくが、そのための日常生活のあり方、つまり睡眠、排泄、摂食などが自律的になっていく過程について述べ、母や家族とのかかわり合いも考察する。	巷野悟郎
10	子どもと環境	子どもの健康は環境によって大きく変化する。子どもの遊び、事故、ストレスに対する心身の反応などを考える場合、環境との関わりを無視できない。母は子どもにとって最も重要な環境因子と考えられる。	同上
11	子どもの病気の予防	子どもは発育につれて、おこり易い病気の種類、症状の現れ方、予後などにちがいがみられる。それについて免疫系の発達の観点から、子どもの生体防御機能について述べ、また予防接種による種々の病気の予防を解説する。	川崎富作
12	子どもの健康増進	子どもの自律神経系の働きが、年齢とともにどのように変化するか、環境に適応するために、日常生活における自律神経系の役割は何かなどを考え、子どもの健康増進のあり方について述べる。	同上
13	子どもの保健サービス	子どもの健康に対する公的支援としては、母子健康手帳の交付、健康診査、マス・スクリーニング、母子感染予防事業などの保健サービスと、医療援助が実施され、幼稚園での健康教育、保育所での保育サービスの充実がある。	古谷博
14	委託保育	乳幼児の集団保育は益々拡大している。その意義とあり方を考え、特に委託保育における子どもの健康の問題、事故防止などについて考える。また委託保育の現況、とくに具体的内容や家庭保育との関連など将来を考える視点で解説する。	坂田堯（日赤医療センター付属乳児院院長）
15	我が国の子育て	各国の子育てをみると、それぞれの国の歴史、伝統、文化を基盤とする特長がある。わが国の子育て、母と子の関係などを西欧と比較しても、長短一様ではない。それらについて過去、現在、将来を見通して、わが国の子育てを展望したい。	巷野悟郎

＝少年期の健康科学＝　（R）

〔主任講師：古谷　博（放送大学教授）〕

全体のねらい

この少年期の健康科学は、母子健康科学に続くもので、学童から、思春期を経て青年に達するまでの子どもを対象にしている。この時期の子どもは、学校、家庭、社会の中にあり、著しい発達・生長を示して、次第にひとり立ちしていく。その健康は生涯の基盤ともなるものである。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	序論 ― 少年期の健康科学のねらい	少年、少女の健康な発達・成長は、長い人生にわたる活動にとって極めて重要である。少年期の健康科学のねらいについて述べる。	古谷　博（放送大学教授）
2	少年の特徴と問題点	最近の学童から年長児にいたる子どもの身体的、精神的発育の特徴について述べ、また家庭・学校・社会の中で、子どもの心身の成長にみられる問題点を指摘して、健康科学の視点から考察する。	巷野悟郎（日本児童手当協会こどもの城小児保健部長）
3	素因と健康と環境	少年期には、素因・体質・環境によって発達・成長に個体差が著明に現われ、性的発育にもこれが認められる。これらの関連を包括的に考察する。	川崎富作（日本心臓財団川崎病研究情報センター所長）
4	成長と発達（Ⅰ）	全身各臓器、器官の発達について、系統的にそれらの構造と機能の変化を概説する。さらにこれら身体的発育が子どもの情緒、行動などに及ぼす影響について考察する。	渡辺言夫（杏林大学教授）
5	成長と発達（Ⅱ）	とくに脳神系、感覚器系、免疫系など高次機能に関する生長・発達について個別的、包括的に概説し、それらの発達が子ども精神面への影響とその意義についてのべる。	同上
6	運動機能、体力とスポーツ	少年期の発達・生長にともなう身体の鍛練、運動機能の訓練、スポーツの適性、習熟の評価などについて述べ、体力と情緒的発達との関連を考察する。	江口篤寿（前筑波大学教授）
7	学校の健康管理と健康教育	学校の健康管理は、地域の組織的活動によって支持され著しく充実してきたが、健康教育は保健学習、保健指導、安全指導、給食指導、事故防止など、多岐にわたり、や・形式的になりやすい。健康教育のあり方を考察する。	高野陽（国立公衆衛生院母子保健学部長）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	病気と異常	成長の過程で個人的、集団的に罹患しやすい疾患や、少年期に発症する異常など、少年期における疾患像も概説し、それらの予防、早期発見、対処のしかた、学業との関係について概説する。また予防接種、慢性疾患の子どものケアを述べる。	川崎富作
9	栄養と食事	最近の子どもの食事のパターン、摂食行動などをふまえて、少年期の栄養と健康との重要な関連について述べる。また偏食、多食や、食物アレルギー、食中毒、神経性食思不振症（思春期やせ症）などの病態についても述べる。	前田和一（埼玉医科大学教授）
10	学校給食	戦後まもなく児童・生徒を救済する応急的措置として発足した学校給食は、学校給食法の制定（昭29）、その後の整備と普及により完全実施率は約85％に達している。現在、嗜好、食事時間、家庭との連けい、食生活の自己開発の問題がある。	高野陽
11	強い子と弱い子	子ども全体的に観察すると、健康・不健康という視点からの区別の他に、強い子・弱い子という評価からの見方もできる。登校拒否、心身症、不適応徴候、情緒障害、非行など、現在とくに年長児に増加している弱い子の問題について述べる。	巷野悟郎
12	おとなの病気のはじまり－予防と健康管理－	子どもの時からおとなの病気がはじまっている。子どもの肥満と将来の動脈硬化や糖尿病との関係や、その危険因子などを考察する。また身体障害、精神遅滞のある子どもの健康管理、生活指導について述べる。	加藤精彦（山梨医科大学教授）
13	思春期の発来（Ⅰ）－男子－	男子の第二次性徴、性機能の発達をもたらす視床下部－下垂体－性腺系のホルモンの動き、精通現象、異性への関心、男子に対する性教育などについて述べる。	同上
14	思春期の発来（Ⅱ）－女子－	女子の第二次性徴、性機能の発達をもたらす視床下部－下垂体－性腺系のホルモンの動き、初経、排卵、女性特有の代謝、女子に対する性教育などについて述べ、思春期女子の婦人科的健康管理、主なる疾病などについて解説する。	古谷博
15	少年期から青年期へ	成年に達すると、実業に就くもの、学業を続けるものなど、子どもは青年となって独立していく、新しい次の世代の父や母なる準備も始められる。この時期の健康について統括した考察をしたい。	同上

＝青少年の保健 II＝（R）

［主任講師：本間日臣（元放送大学教授）
主任講師：丸井英二（東京大学教授）］

全体のねらい

この科目では、青少年の保健(1)に引き続き、一生にわたる健康科学の一環としての青年期を扱う。この時期は、身体的にほとんど成人と変わらないほどに成長している。しかし、環境が拡大していくにつれ、精神的な問題が様々な形で生じてくる。従って、生物学的な側面だけでなく、心理的、社会的な側面にも注目していく。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	青年期のからだ(1) 生理機能の成熟と問題点	からだの全機能がピークに達する少・青年期における遺伝的素因と環境諸因子との相互反応が、人間形成と以後の人生の健康維持にいかに大きく影響するかを、序説的に述べる。	本間日臣（元放送大学教授） 丸井英二（東京大学教授）
2	青年期のからだ(2) 男性を中心に	思春期男子にみられる身体的変化、とくに性成熟過程を中心に解説する。また、思春期早発症や遅発症の原因やその治療、さらにその他の疾患についてもふれる。	白井将文（東邦大学教授）
3	青年期のからだ(3) 女性を中心に	思春期から青年期にかけての女性の性成熟について概説し、よくみられる産婦人科疾患に関して保健学の立場からとらえる。また、結婚前にチェックすべき女性の健康問題についてもふれる。	林謙治（公衆衛生院学校衛生室長）
4	青年期のからだ(4) 思春期発現のメカニズム	思春期の概念・定義を復習したのち、性機能に関与するホルモンを説明する。これらホルモンの思春期における変化と、それを調節するメカニズムについて述べる。	玉田太朗（自治医科大学教授）
5	青年期のこころ(1) 中学生	中学生の年齢の人々は、からだ以上に、こころの問題の多い時期である。この時期に特徴的にみられる心理的課題をとおしてながめてみる。	小倉清（関東中央病院精神科部長）
6	青年期のこころ(2) 高校生	高校生のこころの動きについて考えてみる。この時期に避けて通ることのできないこころの成長の過程は、心身の両面に反映されてくることを理解する。	同上
7	青年期のこころとからだその相関に注目して	人のこころとからだは、元来ひとつのものである。その深い相関に注目して、人の成長について考え、青年期についての理解をさらに深めていく。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	青年期の体力とスポーツ	青年期の体力の特徴と、トレーニングの基本について述べ、次いで、青年期のスポーツの意義・環境、および傷害の実態とメカニズムなどにふれ、青年期の体力・スポーツを多角的にとらえる。	武藤芳照（東京大学助教授）
9	思春期の問題行動と相談	思春期は自立の時期でもあり、また受験期でもある。問題行動の要素の複雑さと、対応の困難さについて事例をとおして、多角的にふれていく。	江幡玲子（思春期問題研究所研究員）
10	青年期の栄養と食事	身体発育のいちじるしい青年期の栄養所要量について解説する。さらに、青年をとりまく食生活の今日的特徴を整理し、その後の人生の健康を左右する健全な食生活習慣を身につけることの必要性を講述する。	金子佳代子（女子栄養大学講師）
11	学生の性に関する問題	学生生活においても、さまざまな問題がある。それらを検討し、なかでもこの時期に問題となる性の問題について、学生という立場に焦点をあてて考える。	武田敏夫（千葉大学教授）
12	青年と労働環境	人の健康は環境とのかかわりの中でつくられる。労働環境は学齢期までは経験しない環境であり、健康阻害要因も少なくない。それらを例示して労働環境の概要を述べる。	滝川寛（三重大学助教授）
13	青年期のライフスタイル	人の健康に重大な影響を及ぼしうる飲酒と喫煙は、青年期に習慣性が確立されることが多い。この成年期になる以前でできあがるライフスタイルについて、酒とタバコを中心に考えていく。	片本哲郎（東京大学助手） 本間日臣
14	青年の健康と社会環境	青少年期は、一生のライフスタイルを決定する重要な時期であることを認識し、とくに社会的因子とのつながりの強い性行為感染症と薬物依存を中心に考えていく。	中江公裕（独協医科大学助教授）
15	青少年期の健康科学（まとめ）	青年期を死亡・疾病構造からみると、成年期以後への重要な入り口である。にもかかわらず青年の健康意識は高くない。そこから、望ましい生活習慣についても言及する。	本間日臣 丸井英二

＝ 成人の保健－成人期・壮年期の健康科学 ＝ （R）

〔主任講師：本間日臣（元放送大学教授）〕

全体のねらい

母子健康科学、少年期・青年期の健康科学につづき、一生の中で最も生産活動の盛な成人・壮年期の健康科学であり、次の老年期健康科学へ続くものである。健康保持や成人病の予防は、生活様式（食事、運動、休養、睡眠、働き方、嗜好品など）と密接に関係するので、日常生活の中の刺激に対する生体反応の理解を目標として解説する。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	成人期・壮年期健康科学序論 健康の指標としての検査値の読み方	成人期・壮年期の健康科学講座では、日常生活でわれわれが直接経験する様々のエピソードを取り上げ、その際の生体反応のメカニズムを解説し、それを積み上げて全体としてこの年代の健康についての知識がまとまるように企画した。まず検査値に影響する諸因子について述べる	本間日臣 （元放送大学教授）
2	日常生活における生体反応統御のメカニズム (1) 睡眠と覚醒	睡眠の覚醒のメカニズムとパターン、その周期性に伴なう自律神経系、呼吸循環系、内分必代謝系の日周リズムと健康保持に関わる意義と役割について解説する。	同上
3	〃 (2) 運動・安静と生体反応	運動を負荷するとからだの中でどのような反応がおこるか、その功罪、安静時にはからだの中でどのような反応がおこるか、その功罪について述べる。	同上
4	〃 (3) ストレスおよび疲労と生体反応	ストレスは一般に生体に有害な刺激と受けとられているが、広義のストレスは、生命維持、からだの成育に必要な刺激ともいえる。ストレスに対しどのような生体反応がおこるか、また疲労とはどのような状態でどのような変化が生じているかを解説する。	吉田尚 （千葉大学教授）
5	〃 (4) 肥満の生理学	肥満とは何か、肥満の原因とは何か、肥満時に呼吸、循環、代謝などの諸機能はどのように変化しているか、肥満にどのように対処すべきかについて述べる。	同上
6	〃 (5) 食事・飲酒と生体反応	食物の消化吸収のメカニズムとそれに影響を及ぼす諸因子、消化をよくする食べ方、腸内常在菌業の役割、アルコールと生体反応について解説する。	本間日臣
7	〃 (6) 入浴・水浴と生体反応	入浴・水浴に際して、体温、呼吸、血圧、心拍、血液、消化機能、自律神経機能はどのような刺激を受けどのように反応するかを解説する。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	日常生活における生体反応統御のメカニズム (7) 外傷と生体反応	外傷すなわち生体組織の損傷の種類は広義では多収にわたるが、日常生活で遭遇する創傷を中心に局所反応と全身反応発生の機序、すなわち生体防御反応発動のメカニズムを解説する。	香月秀雄 （元放送大学長）
9	〃 (8) 環境と生体反応① 高地・大気汚染・喫煙の影響	高地・高所への移動、大気汚染、喫煙の際にみられる生体反応を解説する。	本間日臣
10	〃 (9) 環境と生体反応② 家庭・職場と生体反応	日常生活の大部分を占める家庭と職場という環境内の多種多様の刺激因子と生体反応の解明は健康保持または増進に大きな意義がある。これらについて述べる。	丸井英二 （東京大学教授）
11	〃 (10) 病気と薬剤と生体反応	病気については深く触れないが、病気の際にどのような生体反応がおこり、その際に用いられる薬剤がからだの中でどのような反応をおこし、効果をあらわしたり副作用を示すかについて述べる。	本間日臣
12	〃 (11) ジェット症候群（時差ボケ）の成因	生体のバイオリズムは、1年、季節、1月1日を周期とするものの他、瞬時も絶えることのない律動的リズムなどいろいろある、いわゆる時差ボケの成因を生体バイオリズムの立場から眺めてみる。	同上
13	生活々動と右悩・左悩	人類の約9割は右手利きであるかそれはなぜだろうか、手足をふくめ人のからだの形は左右対象にみえるが、諸機能は左右同じではない。右悩と左悩の機能の違いと生活々動との関わりについて考える。	朝長正徳 （東京大学教授）
14	更年期女性の生体反応の変化	女性の生殖期から生殖不能期への移行期にあたる更年期（閉経期）には、からだの中でホルモン分泌の変化がおこり、いろいろの不定愁訴の原因となる。これらについて解説する。	古谷博 （放送大学教授）
15	ライフスタイルと健康 成人・壮年期健康科学のまとめ	成人病や老年病の多くはライフスタイル病(生活習慣病）と呼ばれる程、長年にわたる生活様式を背景として発生する。これ迄述べてきた日常生活における生体反応をふり返り、健康の維持増進への方策を考える。	本間日臣

＝老　人　の　保　健＝（R）

〔主任講師：本間日臣（元放送大学教授）〕

―老年期の健康科学―

全体のねらい

健康に関する本学の講座は母と子の健康科学、少青年期の健康科学、成人壮年期の健康科学、老年期の健康科学からなり、受精卵の分裂から高齢末期までの加齢変化と各年代の生体反応を一貫した基本理念に基いて解説する。一人の個性の確立、自己同一性の完成の時期に相当するこの年代の健康について科学的総合的理解を目指す。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	老年期の健康科学序論	健康科学講義シリーズ構成の骨格すなわち総論と各論の解説、つづいて各章のテーマとねらい、老年期加齢変化（老化）に関与する諸因子、寿命と個人差の原因の解説。	本間日臣（元放送大学教授）
2	老化とは―老化の諸学説	老化のメカニズムは現在なお未知の部分が多く、昔から多数の学説がある。大きく分けて内因性の遺伝子説やホルモン説、外因性のストレス説や放射線説などがある。	朝長正徳（東京大学教授）
3	老化度の測定について―検査値のよみ方	老化度測定法の基礎となる老化のパラメーターとその意義を解説する。種々の健康診断検査値の青年や成人との相違、したがって検査値をよむときの注意を述べる。	同上
4	臓器・組織の変化(1)細胞の変化	細胞はからだの最小構成成分であり、加齢とともに分裂速度や様式が変わるか、すべての臓器・組織の構胞が同時性に変化するわけではない。また個人差も大きい。	本間日臣
5	臓器・組織の変化(2)神経の変化(1)	睡眠が中断される、物忘れをする、運動機能が低下するなどの現状から運動神経系の加齢変化を中心にそのメカニズムを解説。	朝長正徳
6	臓器・組織の変化(3)神経の変化(2)	老年期の視覚、聴覚、味覚、皮膚感覚の変化とそのおこり方、すなわち知覚神経系の反応性の低下の機序について解説する。	同上
7	臓器・組織の変化(4)呼吸・循環系の変化	階段や坂道を登るときの息切れ、夕方の足のむくみ、夜入眠時のせき・たん、夜尿など日常変化の背後にある呼吸循環系の反応の加齢変化を解説する。	本間日臣

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	臓器・組織の変化(5) 内分泌・代謝機能の変化	骨折しやすい現象の背後には骨粗鬆症と呼ぶ状態があるが、これに関係するカルシウムやビタミン代謝の変化をはじめ糖代謝、諸種内分泌機能の加齢変化を解説。	朝長正徳
9	臓器・組織の変化(6) 消化機能・腎機能の変化	薬剤服用後の吸収、代謝、排泄の加齢変化のため老人では副作用がおこりやすい。解毒と排泄を担当する肝臓と腎臓機能の変化を中心に解説する。	同上
10	臓器・組織の変化(7) 防御・免疫機能の変化	高齢者の直接死因の第一は肺炎である。なぜか。肺の防御・免疫機能の加齢変化、つづいて生体の防御・免疫機構全般の発動様式と変化を解説する。	本間日臣
11	外見の変化 顔つき、体型、歩き方などの変化	白髪、顔のしわやしみ、爪の変化、身長、姿勢、皮下脂肪、歩き方など外見の変化をもたらす生体内の変化を分析し、これまで解説してきた諸臓器・組織の変化をまとめて考える。	同上
12	知能の老化とボケ(1) －知能の老化と老年痴呆	“もの忘れ”がひどくなり認知能力が低下すること、すなわち知能の老化の特徴は何か、そして影響する因子はどのようなものがあるか、ボケとはどう違うかを解説する。	長谷川和夫（聖マリアンナ医科大教授）
13	知能の老化とボケ(2) －痴呆性老人の実態	ボケは脳の器質性障害を基礎としておこる知能障害である。ボケと似た意識障害やうつ状態がある。その鑑別点やボケの予防法を述べる。	同上
14	知能の老化とボケ(3) －痴呆性老人の対策	ボケにはいろいろな原因があるので、個別的に原因対策を立てる必要がある。原因不明のアルツハイマー型は対応がむずかしい。介護の原則と社会的対策を解説。	同上
15	老年期の光と影 －自己同一性の完成とその栄光	人の肉体の諸機能は思春期を頂点として弱化するが、精神活動は60歳以後まで上昇をつづける。自己同一性の完成、それが老年期の栄光である。	本間日臣

＝心の生涯健康科学＝（R）

〔主任講師：岡田康伸（京都大学助教授）〕

全体のねらい

心の健康に関する問題を「生涯（ライフサイクル）」の視点からとらえようとする。人は、誕生して死ぬまで、心を発達させ、個性化を遂げようと努力する中で、さまざまの問題に出会う。それが、どのような問題であり、それをどのように解決していくかなどを解説する。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	心の健康科学とは	人が成長し、一人前になり、生産を全っとうするために、働く要因、人生の目的などを概説するとともに、本書のねらいを述べる。	岡田康伸（京都大学助教授）
2	男性の生き方または原性原理	男子、男性にとっての人生の問題、心の健康、生きていくのに必要な事柄などを心理療法学的視点から論じる。	氏原寛（大阪市立大学教授）
3	女性の生き方	女子、女性にとっての人生の問題、心の健康、生きていくのに必要な事柄などを心理療法に携さわっている経験をもとに論じる。	東山弘子（奈良大学助教授）
4	家族の大切さ	人が成長するのに、一番影響があり、基になる家族をとりあげる。現代の家族のあり方、家族内の人間関係などに言及する。	同上
5	母性	「日本は母性社会であり、父性性に欠ける」と言われるが、はたしてそうであろうか？日本の父性、母性に関してのみならず、子どもの成長とのかかわりにも言及しながら、父性、母性の問題をとりあげる。	氏原寛
6	子どもの心の発達と健康 (1)	胎生期から乳児期・幼児期を中心に、子どものこころの発達と問題行動を概説する。	岡田康伸
7	子どもの心の発達と健康 (2)	児童期を中心に、子どものこころの発達と問題行動を概説する。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	子どもの心の発達と健康 (3) ― プレイセラピー ―	子どもの心理治療のプレイセラピーについて、事例を示しながら概説する。	岡田康伸
9	思春期・青年期の心の健康 (1)	思春期・青年期の心の健康について、傷つきやすく、平衡を欠いた状態であるとともに、強靱な生命力、たくましい行動力の両面に配慮しつつ、論じる。	村瀬孝雄（学習院大学教授）
10	思春期・青年期の心の健康 (2)	思春期・青年期の心の健康について、事例を中心に述べる。	同上
11	壮年期の心の健康	職場拒否、心身症などの問題が壮年期に多発していることが指摘されてきている。この実年と名づけられた人たちの心の健康について検討する。	山中康裕（京都大学助教授）
12	老年期の心の健康	老年期は、人生最後の仕上げの時である。今までの人生をふり返えり、有意義な人生とするために、老人がいかにあるかを論ずる。	同上
13	死の問題	誰もが避けることのできない死。医学で問題にされている死の問題とは違った角度から、死の問題を論じる。	同上
14	人間関係について	人はさまざまの人たちと関係をもって生きている。それらを精神力動的な立場から分析し、解説する。	氏原寛
15	心の健康について ― 愛と性と攻撃をめぐって ―	心理学的に、人に大切なものは、愛と性と攻撃の3つにしぼられるのではないかという考えにもとづき、精神力動的な立場から、愛、性、攻撃について論じる。	同上

＝心の環境健康科学＝（R）

〔主任講師：織田尚生（甲南大学教授）〕

全体のねらい

心の健康に関する科学は多岐にわたるが、ここでは人が社会と接触することによって生じるさまざまの問題を、どのようにして克服し、それをいかに心の成長につなげていくかという点に焦点をしぼり、例をあげながら、できるだけわかりやすく解説する。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	心の健康とは何か	心が健康であるとはどのような状態をさすのかを検討し、メンタルヘルスの全体像を概説する。	織田尚生（甲南大学教授）
2	心の健康——その歴史と現状——	メンタルヘルスの歴史について述べ、現状のもつ問題点と今後の展望を明らかにする。	同上
3	健康と病気	健康と病気との相互の関連について、精神力動的な立場から、総論的に考える。	河合隼雄（京都大学教授）
4	文化と心の健康	心の健康のとらえ方も文化によって異なる。文化人類学の立場からこの点を検討する。	祖父江孝雄（放送大学教授）
5	病気から健康を考える (1)	心理・社会的要因による精神障害を検討することによって、心の健康を増進する手段について考える。	狭間秀文（鳥取大学教授）
6	病気から健康を考える (2)	身体因による精神障害を検討することによって、心の健康を増進する手段について考える。	同上
7	睡眠と心の健康	睡眠と心の健康とのかかわりについて検討する。	川原隆造（鳥取大学助教授）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	文化差と心の健康	日本人の海外生活、さらには帰国後の再適応の際に生じる問題について、心の健康の面から考える。	稲村　博（筑波大学助教授）
9	自殺防止の活動	自殺と心の健康との関連を検討し、自殺防止の活動について述べる。	同上
10	アルコールと人間	アルコールと人間との関わりについて述べ、それに対してどう対処すべきか、メンタルヘルスの立場から検討する。	後藤　裕（東北大学助手）
11	薬物の乱用と依存	薬物乱用によって生じる心の障害について概説し、それに対する対応の仕方を検討する。	佐藤光源（東北大学教授）
12	心の健康と精神治療薬	精神薬物が心に影響するあり方を通して、メンタルヘルスを回復させる手段を考える。	小椋　力（琉球大学教授）
13	地域社会における活動	心の健康を増進させるために、地域社会で実際にどのような活動がおこなわれているかについて述べる。	松島嘉彦（島根県精神保健センター所長）
14	心の健康と心理療法	形のない心を用いて、心の健康を回復させようとする場合、その基本構造を明らかにする。	織田尚生
15	心の危機と宗教	心の危機に際してクローズアップされる宗教とその心理学的側面とについて検討する。	同上

＝環　境　科　学＝　（TV）

〔主任講師：山根靖弘（千葉大学教授）〕

全体のねらい

健康な生活を守り、快適に暮らすためには、我々の環境について十分な理解が必要である。本講座は、水および大気の自然環境、食品や毒性の問題にもふれ、また緑化と生活などの社会環境などについて科学的な基礎概念を論じ、環境への知識を深めようとするものである。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	健康な生活を守るために	環境汚染の歴史的背景として、環境汚染の移り変わりを述べつつ、「環境科学」の一般的概念について説明する。また、本講座で述べる内容についての概論を説明し、全体像を理解してもらう。	山根靖弘（千葉大学教授）
2	水環境 (1) 水と健康	我々の生活における水利用の重大さと、健康と水との関連について飲料水を中心にのべるが、日本の特色である温泉と健康との関連について説明する。	同　上
3	水環境 (2) 水の汚れ	環境中の水は物理、化学、生物学的に公共用水として好ましくない方向に変化し、汚濁がおこる。水質汚濁の進行過程を論じ、富栄養化やアオコの発生などを述べる。また、水質汚濁の基準値を説明する。	同　上
4	水環境 (3) 水の浄化	水質の汚濁状態を検査する方法すなわち水質汚濁の測定法を簡潔に説明し、さらに水質汚濁の浄化法として、下水道の普及、工場排水の規制、終末処理場における浄化方法などを解説する。	同　上
5	空気環境 (1) 環境大気	人間の生命維持の上に基本的に重要な環境大気を構成する成分やその役割を述べ、環境大気を汚染する成分について、最近の動向と健康に及ぼす影響を解説する。	中澤裕之（国立公衆衛生院室長）
6	空気環境 (2) 室内空気	人間の一日の生活の中で室内における生活時間は時として大きく、室内環境の重要性を述べる。又、室内空気の有害成分として一酸化炭素、窒素酸化物及びたばこの煙等を紹介する。	同　上
7	環境と緑 (1) 緑と人間	人間と緑のかかわりあいについて、八重群島竹富島の農民の暮らしを守る緑の態様や、旭川・帯広市のように人為的に自然林を切りひらいて生産空間をつくりだして居住している開拓地、そして、奈良の都・平城宮などの古代の都市に生きる人々の生活と緑の関係を基に解説する。	田畑貞壽（千葉大学教授）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	環境と緑 (2) 都市化の進む水辺と緑	市街地の水辺と緑、災害と緑などを中心に長崎市稲佐山山頂で収録。急傾斜地の緑の状況、宅地化した山なみで集中豪雨の時の災害状況、そして仙台杜の都の広瀬川を中心に都市化した水辺環境の保全運動について紹介し、特に丘陵地の宅地化、広瀬川の環境悪化の原因についても論及する。そして、特に近年重要視されている都市の緑とウォーターフロントについて解説する。	田畑貞壽
9	環境と緑 (3) 緑計画	ヴァチカルな地形、人為的な干渉、緑の施策などを事例に富士山五合目より学校林、自然公園、リゾート地区、ゴルフ場、農村集落工場、海岸など土地利用の違いを緑の環境について特に地域生態系の問題を中心に緑とのかかわりあいを解説する。	同上
10	土環境と廃棄物処理	土壌汚染に関係する主な汚染物質として農薬、重金属等を取り上げ、その汚染原因と動植物を含む生体への影響を解説する。さらに一般及び産業廃棄物の処理対策についても述べる。	中澤裕之
11	環境と健康 (1) 重金属の毒	環境中に放出された水銀、カドニウム、鉛およびクロムなどの重金属の汚濁状況と、それが体内にとり込まれた場合の生体影響について説明する。	山根靖弘
12	環境と健康 (2) 農薬など有機物の毒	DDT、BHCなどの農薬類の環境汚染と、これら農薬の特性、残留性と生体影響との関連、またPCBなどの化学物質の汚染と生体への影響など、環境汚染有機物質について論ずる。	同上
13	環境と健康 (3) 自然毒（有毒植物）	生活の周辺にある有毒植物、キノコなどによる中毒の実態を知り、それらがどのような毒なのか、どうしたら中毒を防止できるかについて学ぶ。	山崎幹夫（千葉大学教授）
14	環境と健康 (4) 自然毒（有毒微生物）	前回にひき続き身の周りの毒のなかから微生物の生産する毒に注目する。この中には穀類など大切な食糧を汚染するカビ毒や微生物毒を起源とするフグ毒やホタテ、バイ貝などのような魚貝類の毒も含まれる。	同上
15	環境と発がん	環境中には発がん物質が存在し、発がんの原因となるので、化学発がんを中心として述べ、終りに本講座のまとめについて論ずる。	山根靖弘

＝余　暇　生　活＝　（ＴＶ）

〔主任講師：一番ヶ瀬康子（日本女子大学教授）〕

全体のねらい

いまや余暇は、国民の大きな生活課題であり、権利である。ことに寿命が延び、生涯のなかで余暇生活の時間が増加し、労働時間短縮などで余暇時間がふえたことなどがその背景にある。そのなかで受け身の余暇生活ではなく、自発的そして創造的な余暇活動をもつより、またその探求のための視点と視座を明らかにする。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	はじめに 人権としての余暇生活	余暇とは何か。その概念・語源、および権利性について考察し、この講義の目的と意義とを述べ、講義全体の導入とする。	一番ヶ瀬　康子 （日本女子大学教授）
2	1〕現代社会と余暇 (1)　高齢化と余暇	現代社会の焦点の一つである高齢化によって、余暇生活は、どのような影響をうけているか。また、それに対して、どういうことが、早急に考えられねばならない課題であるかなどについて、問題提起をふくめ、課題を検討する。	同　　上
3	(2)　情報化と余暇	現代社会の一つの大きな焦点となっている情報化によって、余暇生活は、いったいどのような影響をうけ、変化してきたのか。またそのなかで現実には、どのような課題が生じ、どんな問題が存在するのかなど、実態をふまえて検討する。	薗田碩哉 （日本レクリエーション協会調査研究室部長）
4	(3)　国際化と余暇	現代は、余暇そのものも国際化しているといわれている。その国際化傾向のなかで、現実には、どのような問題が存在するか、さらにどんなことが、その焦点となっていくかなどについて、現実の動向ち問題をとらえ、課題を検討する。	牧野暢男 （日本女子大学教授）
5	2〕余暇生活の歴史 (1) 近代前	余暇生活は、歴史のなかで変化していく。とくに自給自足経済のもとで、身分制のきびしかった前近代では、どのような余暇生活が展開されていたか。また、日本の風土のなかで生み出されたものが、どのようなものであったかについて述べる。	薗田碩哉
6	(2)　近　代	近代に入って工業化・産業化が進展していくなかで余暇生活が、どのように変化してきたか、とりわけ賃金生活者のそれについては、どのような問題が存在したか、さらに娯楽をふくんだ余暇生活の実態はどうであったか、その推移について述べる。	同　　上
7	(3)　現　代	現代とりわけマスレジャーが発達し、とくに余暇産業が盛んになってきた時代において、余暇生活は、どのように変化していったか、一方多くを占める賃金生活者側からとらえて、どのような問題があるかなどについて、日本の推移を中心に述べる。	同　　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	3)日本人のライフスパンと余暇問題 (1)余暇歴とライフスパン	長くなった人生において、それぞれのライフ・ステージにおける余暇歴が、その人の人生をどのように規定するものであるか。人生をトータルにみて、いかに余暇は大きな課題であり、それぞれのライフ・ステージに具体的な意味をもつかについて述べる。	一番ケ瀬　康子
9	(2)平均的日本人の余暇生活	現在、日本における賃金生活者の平均像をとらえ、その賃金生活者の余暇生活は、いったいどのようなものであるか、またどういう傾向をもっているのかなどを探究する。そしてその状況をふまえながら、日本人の余暇生活の問題点をさぐる。	牧野　暢男
10	(3)海外の余暇生活	とくに欧米の賃金生活者の余暇生活、またアジア諸国の賃金生活者の余暇生活などについて述べ、日本の賃金生活者の余暇生活との比較をこころみる。そしてそれぞれの特徴をつかみ、日本人のこれからの余暇生活の検討をする。	同上
11	4)余暇生活の条件づくり (1)子ども時代からの主体形成	余暇歴が、人々の余暇の在り方を大きく規制することを考えたとき、余暇については、その子ども時代からの在り方が検討される必要がある。そのことをどう考えるか、具体的に、どのような活動があるのか、改善点は何かなどを述べる。	同上
12	(2)労働時間短縮	余暇活動は、一方で労働時間によって大きく規制される。現在の日本人の最大の課題となっている労働時間短縮問題とは、どういうことなのか。現状はいったいどうなのかなどから問題を探究し、余暇時間との関連を探究する。	一番ケ瀬　康子
13	(3)余暇の設備・環境	余暇が活発になるためには、そのための空間および環境が、それにふさわしくなることが必要である。とくにその点についての日本の現実がどうかをとらえ、またそれについての環境整備がいかにあるべきかにふれ、問題の提起をする。	薗田　碩哉
14	(4)余暇政策をめぐって	余暇生活を向上させるためには、個人的な努力のみならず、それ以上に地方自治体および国の政策の在り方が大きく問われる。とくに、諸外国のそれとくらべてみた場合、日本の政策はどうなのかなどについて、具体的に解説し問題点を述べる。	牧野　暢男
15	おわりに 創造的余暇生活をめざして	この講義のまとめとして、余暇生活を創造的に、積極的に営むことの意義を認識する。そしてそのような余暇生活を営むための方法について個人レベルの努力をふくめ、余暇生活の権利をまもるための社会的な在り方での展望を論じ、まとめとする。	一番ケ瀬　康子

＝家　庭　の　福　祉＝　(R)

〔主任講師：仲村優一（放送大学教授）〕

全体のねらい

この科目は、家庭の福祉を社会福祉の視点からとらえて解明することをねらいとする。すなわち、家族の共同生活体である家庭にとって福祉とは何か。また、福祉に欠ける状態とはどんなもので、それを生み出す要因は何か。問題解決のための福祉施策やサービスおよびその問題点は何か、等の諸点を明らかにする。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	家族と家庭および家庭生活	家族と家庭の概念規定を明らかにした上で、家族の生活共同体としての家庭の生活の構造をどうとらえるかを考察する。生活の理解については「生活と福祉」専攻における生活に関する諸科目でえた知見をできるだけ活用する。	仲村優一（放送大学教授）
2	家庭の福祉とは何か	「福祉」ということばは多義的であり、とらえ方を限定しておかないと「家庭の福祉」についても理解があいまいになる。福祉を抽象的な「さいわい」ということでなく、生活の諸側面における快適さ(アメニティ)としてとらえて、その総体としての「家庭の福祉」の意味を検討する。	同　上
3	家庭福祉問題の構造	家庭生活の内容を生活構造の諸部面に照らして吟味した上で、家庭生活全体における福祉の不足もしくは欠如を家庭福祉問題としてとらえ、その構造を明らかにする。	同　上
4	生活問題としての家庭福祉問題	前章を受け、家庭福祉問題を社会問題としての生活問題の一つとして理解する立場から、その様相論と原因論を究明する。生活構造に関する指標を用いて、家庭のレベルで生ずる家庭福祉問題とはいかなるものかを究明する。	同　上
5	現代日本の家庭福祉問題(1) －児童	現代社会の社会変動が家庭に与えるマイナスの影響および、それが家庭福祉問題を生み出すメカニズムを明らかにするなかで、その問題の具体的な体現者としての児童に表われる諸問題を究明する。	同　上
6	現代日本の家庭福祉問題(2) －老人	前章に続き、都市化、高齢化、核家族化等が家庭生活に及ぼす影響を明らかにするなかで、それによって老人福祉問題が生み出されるメカニズムを究明する。	同　上
7	現代日本の家庭福祉問題(3) －家族関係	前の２章で取り上げた問題は、観点を変えると、家庭内における家族関係にかかわる問題としてもとらえられる。より具体的に、現代日本の夫婦関係、親子関係、三世代関係等に関する諸問題がどのような形をとって表われているかを明らかにする。	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	家庭福祉事業の成立と展開(1) －欧米の場合	英国や米国においては、家庭問題を社会福祉課題として取り上げ、社会福祉事業の一環としての家庭福祉事業（ファミリー・ソーシャルワーク）が発展して今日にいたっている。その成立と展開の歴史をふりかえってみる。	仲村優一
9	家庭福祉事業の成立と展開(2) －日本の場合	わが国の場合は家庭福祉問題の顕在化が遅れたこともあって、家庭福祉事業が未成熟であるが、最近になってやっとその萌芽が見られるにいたっている。その辺の歴史的事情と今後の方向について検討する。	同上
10	家族政策と家庭福祉	家庭の福祉を社会的に支えるものとしての家族・家庭に関する社会政策、社会保障、社会サービス等の政策体系を家族政策としてとらえ、その現状と問題点を概観する。	同上
11	家庭福祉の施策とサービス(1)	家庭福祉事業の範疇でとらえられる各種の施策が社会福祉の各分野（公的扶助、児童福祉、老人福祉、障害者福祉等）においてどのように展開されているか。また、その問題点はどこにあるか、等を明らかにする。その場合これまでの福祉サービスが分野ごとに対象を家族の一員としての個人としてとらえる視点が不十分であったことに特に注目する必要がある。この章は主として児童福祉をとりあげる。	同上
12	家庭福祉の施策とサービス(2)	前章に引きつづき、本章では主として老人福祉をとりあげる。	
13	家庭福祉の実践技術(1)	家庭福祉事業の実践技術としては、家族ソーシャルワークとしてケースワークを中心にグループワーク、コミュニティワーク等の方法が体系化されて今日にいたっている。本章では、ソーシャルワークの過程のうち、インテークを中心に事例をとりあげ、検討する。	同上
14	家庭福祉の実践技術(2)	前章に続き、家族ソーシャルワークの過程のうち、社会診断から社会治療にいたる部分を概観する。とくに、家族診断および家族療法について、事例をとりあげ、そのあらましを学習する。	同上
15	家庭福祉の現段階と今後の課題	家庭福祉事業の充実が期待されながら、その充分な発展を見ることができないでいるわが国の社会福祉の現状について、その実態を明らかにし、今後の課題を探ってみる。	同上

＝社　会　福　祉＝（R）

〔主任講師：仲村優一（放送大学教授）〕

全体のねらい

今日の社会福祉は、80万人のマンパワーを擁する一つの大きな社会的制度になっており、高齢化社会の到来とともに、その重要性を一段と増し加えている。

本講は、社会福祉がなぜ必要なのかを明らかにし、複雑な社会福祉の現状と問題点を検討した上で、その在るべき展開の方向を探ることをねらいとする。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	福祉と社会福祉	福祉、社会福祉、社会保障等の諸概念の意味を整理しながら、その中で、社会福祉が独自の目的と機能をもって存在する制度であることを明らかにする。社会福祉の広狭両義の用い方や社会福祉と社会保障の関係、社会福祉と関連をもつ諸概念についても吟味する。	仲村優一（放送大学教授）
2	現代社会と社会福祉	現代社会における社会福祉の意義を、社会福祉に関する諸定義の吟味、社会福祉の補充性の検討の中から明らかにする。特に、社会福祉が社会問題としての生活問題に対処する社会的施策であり、それが公的扶助と福祉サービスから成り立つものであることを示す。	同　上
3	社会福祉の展開(1)―欧米の場合	慈善事業→社会事業→社会福祉という今日までの社会福祉の歴史的展開の過程を、欧米、特に英国の場合を中心に明らかにする。それがかつては救貧施策に止まるものであった段階から、今日の普遍的な福祉サービスの体系が構築されるに至った過程を重視する。	同　上
4	社会福祉の展開(2)―日本の場合	前章と同じ課題を日本の場合について究明する。その際、特に高度経済成長期を境にして、かつての救貧施策としての社会事業が、福祉サービス中心の社会福祉へと発展するにいたった展開のプロセスを明らかにし、特に高齢化の進行に伴う福祉改革の動きに注目する。	同　上
5	社会福祉の制度と仕組(1)法制のあらまし	社会福祉の制度と仕組について、この章では、社会福祉の政策や法制の面から明らかにする。具体的には、社会福祉法制の原理と仕組、社会福祉法制の概要、現状と問題点をとり上げる。社会福祉事業法と社会福祉の六法の検討が中心のテーマとなる。	同　上
6	社会福祉の制度と仕組(2)行財政の仕組	社会福祉の行財政の仕組と原則、国と地方の行政組織と行政機関、行財政における国と地方の関係等の諸課題を検討する。以上との関連において、公私社会福祉事業の関係についても吟味する。	同　上
7	社会福祉の制度と仕組(3)社会福祉改革の動き	社会福祉制度の改革問題が1980年代に入って大きな政策課題となり、その後半以降具体化されるにいたった。この社会福祉政策の意味を、選別的・救貧的福祉からの脱却、在宅福祉の重視、地方分権化等の動きに重点を置いて吟味してみる。	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	社会福祉の分野 (1)分野の分け方・公的扶助	社会福祉の発展とともに、その分野も拡大し分化してきている。本章では、社会福祉の分野をどのように分けるかについて、分野論の歴史的変遷をふまえて整理する。その上で4大分野の中の公的扶助について、その現状と問題点を概説する。	仲村優一
9	社会福祉の分野 (2)児童福祉・老人福祉・障害者福祉	社会福祉の代表的な分野としての児童福祉、老人福祉、障害者福祉をとりあげ、その現状と問題点を明らかにする。併せて、今日の社会福祉がますます広い分野に拡大しつつあることについても注目する。	同上
10	社会福祉の方法 (1)ケースワークとグループワーク	福祉サービスの提供の過程で用いられる援助技術には、直接サービスとしての個別援助技術（ケースワーク）、集団援助技術（グループワーク）をはじめ、多くの方法がある。これらのうちケースワークとグループワークについて、その原理原則を明らかにする。	同上
11	社会福祉の方法 (2)コミュニティ・オーガニゼーションとその他の方法	社会福祉のサービスを地域社会単位に組織化する方法としてのコミュニティ・オーガニゼイションやその他の方法論、たとえば、ソーシャル・リサーチやソーシャル・アドミニストレーションについて、そのあらましを述べる。	同上
12	社会福祉のマンパワー問題	社会福祉マンパワーのうち、社会福祉固有の直接処遇職員（ソーシャルワーカー、ケアワーカー等）を中心に、その量的確保と質的充実の方途について究明する。併せて、社会福祉士・介護福祉士をめぐる問題、ボランティに関する問題等もとり上げ検討する。	同上
13	在宅福祉と施設福祉	近来の在宅福祉重視の動きは決定的なものがあるが、これは在宅福祉・施設福祉の両者がバランスを保って発展することを目指すものでなければならないとされる。この両者の関係について、新しい社会福祉の原理、たとえばノーマリゼーションに照らして吟味する。	同上
14	社会福祉施設をめぐる問題	近来、在宅福祉の強調によって社会福祉施設のもつ意義が軽視される傾向無きにしもあらずであるが、今日の社会福祉施設は、地域における福祉サービスのネットワーク化を図る上で不可欠の存在である。この新しい流れに即した施設の今日的意義を明らかにする。	同上
15	社会福祉と国際化	社会福祉も今日では国際化の流れの中でその意義のとらえ直しが問われている。福祉について問われる国際化とはどういうことか、わが国社会福祉の近代化・現代化と国際化の関連、社会福祉の国際化の課題等について、広い視野から吟味してみる。	同上

＝高齢者の福祉＝（R）

〔主任講師：山下袈裟男（東洋大学教授）〕

全体のねらい

かつては人生50年といわれたが、今日では人生80年といわれるようになった。それだけ老年期は長くなり、高齢者にとっては老後の生活設計が必要な時代になった。こうした高齢者の生活に対して、今日さまざまな社会的手助けが行われているが、ここでは主に国の福祉施策とこれをめぐる諸課題を広くとりあげ解説したい。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	現代社会と老人問題	はじめに、現代社会を特徴づけている福祉にかかわる制度体系を概観し、次いで老人福祉施策の背景となっている老人問題成立の基本的要因として産業化による経済・社会上の変動や家族の変容及び人口構造上の変化等をとりあげて解説したい。	山下　袈裟男（東洋大学教授）
2	高齢化社会と社会・経済的影響	ここでは主に人口高齢化に伴う高齢化社会の展開過程を厚生省の人口推計から考えてみたい。人口推計からみたわが国の老年人口の特徴や人口構造からみた社会・経済的影響、とりわけ福祉、医療、年金等の社会保障負担及び地域社会への影響等について概観する。	同上
3	老化と健康 (1)高齢者の身体的特性	老化に伴って、身体的諸機能は変化し、形態的にも多くの変化が生じる。脊柱の変曲、皮膚の弾力性の低下、白髪、脱毛が生じる。また、白内障、聴力の低下、予備機能・防衛機能の低下、反応速度の遅れ、病後の回復の遅れなどが現れる。	菅野　重道（元東洋大学教授）
4	老化と健康 (2)高齢者の心理的特性	記銘力・記憶力の障害、知的能力の障害、老年痴呆、保守性、孤独感、また意識障害を起こしやすく、不眠、不安、邪推、さらに幻覚、忘想、徘徊、不潔など、情動的神経症的症状から、うつ状態、精神病的症状も生ずる。以上、高齢者の特性から老化と健康を考える。	同上
5	高齢者福祉政策の形成と政策動向	はじめに戦前の高齢者に対する処遇動向及び戦後では老人福祉法成立時までの高齢者施策をとりあげ、次いで老人福祉法を中核として、雇用、年金、保健・医療等の関連制度の成立展開の動向を概観し、以下の各論への導入的役割を果したい。	山下　袈裟男
6	高齢者の雇用・就労状況と対策動向	高齢者の雇用・福祉対策には、定年退職から65歳未満層を主たる対象とする労働政策と65歳以上の高齢者を対象とするいわゆる生きがい対策としての福祉対策がある。そこでまず、高齢者の雇用・就業の動向を概観し、次いで両政策の内容と課題を明らかにする。	同上
7	高齢者の所得保障と福祉問題 －公的年金制度を中心に－	公的年金制度には、いわゆる被用者年金制度（7制度）と自営業者、農林漁業従事者などに適用されている国民年金制度があるが、まず、これら制度について概観し、次いで1986年4月以降の基礎年金制度と年金改革の動向を明らかにし、今後の課題を展望する。	天野　マキ（東洋大学教授）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	高齢者の保健医療と福祉問題 —老人保健法を中心に—	高齢者に対する保健医療対策には、医療保険各法による医療保障と1982年成立の老人保健法による制度などがある。ここでは主に後者に重点をおいて考察するが、まず、その成立と改正の背景を明らかにし、次いで、医療、保健及び老人保健施設等をとりあげ検討したい。	天野マキ
9	高齢者と住環境	老年期には、退職や心身機能の低下によって生活圏が縮小しがちであり、住環境の重要性が高まる。住宅は在宅福祉の基本的条件でもある。ここでは高齢者をとりまく住環境の現状と問題、およびこれに対する施策の動向を踏えて、今後の課題を考察する。	在塚礼子（埼玉大学助教授）
10	高齢者の余暇生活	老年期には、社会的にも、個人的にも職業生活の機会が縮小したり、職業からの引退が行われるので、余暇時間が増大する。そこで老年期の余暇時間と余暇行動及び地域社会における社会参加の動向について調査事例などを参考にしながら老年期の余暇生活を考える。	山下裘紫男
11	老人福祉法と老人福祉サービス	この回から3回にわたり、老人福祉法とこれにもとづく施策について考察する。まず、第1回目は、老人福祉法の原理・基本的理念について解説し、同時に老人福祉法で取り扱う老人福祉サービスの体系を歴史的に改訂されてきた点と併せて考察したい。	同上
12	施設福祉サービスの体系の処遇	ここでは老人福祉法における施設福祉サービスの体系をまず概観し、次いで老人ホームの体系について、その種類と特色等、制度上の主要な内容について解説し、また、処遇上の内容にもふれ、併せて老人ホームをめぐる今日的課題について考察する。	宇留野功一（社会福祉法人芳香会青嵐荘特別養護老人ホーム施設長）
13	在宅福祉サービスの体系と処遇	在宅福祉サービスの体系には、要援護老人対策と健康な老人を対象とする社会参加促進対策があるが、まず、これらの体系によるサービスの種類と主たる内容について解説する。次いで民間団体のそれにもふれ、最後に在宅福祉サービスをめぐる今日的課題を考える。	同上
14	高齢者福祉の技術援助 (1)その原理について	今回と次回にわたり、高齢者に働きかける際の技術援助の原理と実際について考察する。まず、第1回目は、技術援助を活用する際の価値的・倫理的側面について解説し、さらに高齢者処遇の一般原理および痴呆性老人等に対する特殊原理について解説する。	佐藤豊道（東洋大学助教授）
15	高齢者福祉の技術援助 (2)その実際について	ここでは、高齢者の援助方法・処遇技術の実際面に焦点をあてる。ソーシャル・ケアを構成する在宅ケアおよび施設ケアの実際の事例を、ソーシャルワーク及びケアワークの視点から取り上げ、高齢者に働きかける援助方法・処遇技術について考察する。	同上

＝家庭の経済＝（Ｒ）

〔主任講師：坂井素思（放送大学助教授）〕

全体のねらい

わたしたちが経済活動を行うときに、まず最初に出会う経済組織が家計（Household）である。この家計がかかわってる経済上の秩序がどのようなものであるか、ということを家計内と家計外の経済関係のなかにみていく。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	家計とは何か	家庭の経済（Household Economy）の基本的な特徴について考える。	坂井素思（放送大学助教授）	坂井素思（放送大学助教授）
2	経済のなかの家計	家計という経済主体が経済システム全体のなかで、どのように位置づけられるのかをみる。	同上	同上
3	家計の収入と支出	家計の収入構造と支出構造との関係について、具体的な家計調査データなどを参考にして、そこにみられる問題点を考える。	同上	同上
4	家計収入	賃金・地代・利子・利潤などの家計収入のさまざまな種類と、その役割を考える。	同上	同上
5	家計所得	家計にもたらされる所得がどのようにして家計の構成員に分配・移転されるのかをみる。	同上	同上
6	家計貯蓄	家計員の生涯にわたって、あるいは世代間にわたって、家計の貯蓄がどのように行われるかについて考える。	同上	同上
7	家計のファイナンス	家計の資産と負債とが現代経済社会との関係のなかでどのような役割をもっているかについて考察する。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	家計支出	家計支出のさまざまなタイプを取りあげ、その基本的な特徴について整理・検討を行なう。	坂井素思	坂井素思
9	家計消費	家計消費の特性について、消費理論と実証的研究とを取りあげ考察を加える。	同上	同上
10	家計投資	住宅、耐久消費財などの物的投資と、教育などの人的投資について、家計に占める基本的な特徴を探る。	同上	同上
11	労働供給	家計の労働供給について、それによって家計が経済全体との間に結ぶ関係を考える。	同上	同上
12	家内的分業	家計の内部にある経済関係のなかで、とりわけ重要な役割をもっている家事労働について考える。	同上	同上
13	家計生産	家計の内部には、現代では消極的な形態になってしまっているが、それでも生産プロセスに類した活動が行われている。この意味ついて考察を加える。	同上	同上
14	家計のサーヴィス化	家計の経済構造変化について、その現状と意義を探る。	同上	同上
15	経済組織としての家計と経済社会	家計は家計内と家計外にさまざまな経済関係を成立させている。これらの経済関係がいかに組織され、秩序だてられているのか、その全体像をみる。	同上	同上

＝衣　生　活　論＝(TV)

〔主任講師：酒井豊子（放送大学教授）〕

全体のねらい

日常の生活の中の衣服にかかわる事象を、さまざまな側面からとりあげ、現代の衣生活におけるライフスタイルの特質を確認するとともに、それらが、時間的、空間的にいずれから生り来たっているか、社会のあり方とどのようかかわっているかなどを考察する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	衣生活のライフスタイル	ひと昔前まで、主に家庭内で行われて来た衣生活の諸作業の多くは、今では家庭外から提供されるようになり、家庭内に残った作業についても家庭電化などにより著しく軽減された。このような、主として最後の、衣生活のライフスタイルの変化について概観する。	酒井豊子（放送大学教授）	酒井豊子（放送大学教授）
2	近代化と衣服	わが国で洋服が着られるようになったのは明治時代以後といってよい。また、服装が全国的に広く洋風化したのは戦後のことである。ここでは、洋服の導入から広くゆきわたるまでの間の事情について述べる。	鈴木すゞ江（青山学院女子短大講師）	鈴木すゞ江（青山学院女子短大講師）
3	衣生活の社会化	作る、装う、洗う、縫う、しまうなどの衣生活の諸作業は、それぞれ既製服、美容院の着付け、商業クリーニング、リフォームショップ、トランクルームに、大部分あるいは一部分が移行している。これらの利用の実態と意味について考察する。	酒井豊子	酒井豊子
4	衣服の消費と廃棄	わが国の衣生活の量的レベルは，世界の繊維資源や消費の実状の中でどのように位置づけられるのであろうか。統計資料などからわが国の繊維消費について認識を深めると共に家庭などから排出される衣服の処分方法ならびに廃品衣料のゆくえを探る。	同上	同上
5	アパレル産業	消費者の好みをきめ細かく把える商品企画、それを速く安く製品化する生産システム（生地、CAD、縫製システム）、専門店化する販売などの実情について概観、既製服の生産から流通にわたり歴史と工程を追うことによって理解を深める。	風間健（武庫川女子大学教授）	風間健（武庫川女子大学教授）
6	衣服の表示	市販の衣料品につけられている種々のラベルは、消費者にとって、自分の求める品質のものであるかどうかを判断する手がかりとなる。品質表示、サイズ表示などについて、表示のきまりと意味について概説する。	酒井豊子	酒井豊子
7	衣服の品質	消費者の期待に応える良い品質とはどういうものかを考察する。すなわち目で見た美しさ，着た心地よさ，動きやすさ，洗濯のしやすさ，長もち，防菌加工，また消費者の苦情などから，それらを探る。	風間健	風間健

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	繊維の利用	天然繊維、科学繊維について、わが国における生産・消費・輸出入などの状況を、主として統計資料から把握し、現在われわれの衣生活を支える各種繊維の特質について概観する。	酒井豊子	酒井豊子
9	新しい衣服素材	消費者のニーズに応え、あるいは、新たなニーズを発掘するため、さまざまな新しい衣服素材が登場している。それらの考え方と実際の製品について解説する。シルキー調、吸汗、伸縮性、抗菌性、新世代ウール、その他素材など。	風間　健	風間　健
10	衣服素材の歴史	衣服に亜麻、羊毛、絹、綿などの素材がどのように用いられて来たか、ヨーロッパを中心に概観する。ファッションの移り変わりに果たした染め・織りの技術の開発や外国の影響などについて言及する。	道明三保子（文化女子大学教授）	道明三保子（文化女子大学教授）
11	衣服の歴史	われわれの用いる洋服と和服とは、裁断法、縫製法、着装法などにおいて、著しく異なる特徴をもっている。衣服の形態のちがいは、歴史的にそれぞれどのような流れの上に位置づけられるのであろうか。ここでは西洋における衣服形態の歴史をたどってみる。	徳井淑子（お茶の水女子大学助教授）	徳井淑子（お茶の水女子大学助教授）
12	衣生活と心情	紡ぐ、織る、染める、裁つ、縫う、着る、洗う、繕うなど、衣生活にかかわる人間の行動と心情を、日本の古典文学を通して考えてみる。時代ごとの衣裳の様子についても触れる。	鈴木すゞ江	鈴木すゞ江
13	衣服観と思想	服装や流行に対する考え方や倫理感は、個人や社会や文化によって異なる。さまざまな衣服観と、それを支える思想を、西洋の歴史の中で考えてみる。	徳井淑子	徳井淑子
14	衣服の意味	人間は衣服を換えることにより、様々な人間に変容する。衣服によって人は何を顕し、隠すのか。西洋の服飾史の事象をとりあげて、衣服を着ることの意味を考える。	同　上	同　上
15	人と衣生活	衣生活は個人に属す事象であるとともに、その人の属す家庭や社会に依存する場合も少なくない。ここでは、子供、高令者、障害者など、衣生活を他の人に依存せざるを得ない人々の、衣服や衣生活の問題を考えてみたい。	酒井豊子	酒井豊子

＝食 物 の 科 学＝(TV)

主任講師：五十嵐　脩　（お茶の水女子大学教授）
〔主任講師：今井　悦子　（放 送 大 学 教 授）〕

全体のねらい

食物をめぐる諸科学の進歩にはめざましいものがある。そこで、新しい知識をもとに食物を見つめ理解することが日常生活の上においても必要となってきた。この講義では、「食品」がわれわれの口にすることのできる「食べ物」になる過程と、食物としての役割に焦点をあて、科学的面から学習する。栄養素も含め食品に含まれる各成分の特性と変化、食物の貯蔵と品質、新しい食品素材とその利用などを解説する。

回	テ ー マ	内　　容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	食 物 の 機 能	食物には栄養機能のほかに、食べ物のおいしさに係わる感覚機能、生理的働きを持つある種の成分による生体調節機能などいくつかの機能がある。ここでは、食物のもつ様々な機能について解説する。	五十嵐　脩(お茶の水女子大学教授) 今 井 悦 子(放送大学助教授)	五十嵐　脩(お茶の水女子大学教授) 今井悦子(放送大学助教授)
2	食品の主要成分	食品に含まれる成分のうち量的に多い炭水化物、たんぱく質、脂質について概説する。これらは3大栄養素といわれ、栄養的にも重要であるが、ここでは食品の品質に影響を及ぼす特性を中心に解説する。	今 井 悦 子	今 井 悦 子
3	食品の微量成分	食品は、量的には少ないが無機質、ビタミンなどの供給源として重要である。ここでは、調理・加工・貯蔵中のこれらの成分の変化と機能に中心をおいて解説する。	同　上	同　上
4	食 品 成 分 表	食品は、それぞれに含有する成分が異なっている。四訂日本食品標準成分表は、1621食品について1つの成分値を示したものである。また、アミノ酸組成表、脂溶性成分表もファローアップとして公表された。これらの成分表の使用法と限界について解説する。	五十嵐　脩	五十嵐　脩
5	食　品　と　水	殆どの食品は多かれ少なかれ水を含んでいる。この水は、食品の品質を制御する上で、非常に重要な働きを果たしている。食品中の水の存在の状態、水と微生物の管理などとの関係を解決する。	倉 田 忠 男(お茶の水女子大学教授)	倉 田 忠 男(お茶の水女子大学教授)
6	植物性蛋白質の利用と応用	小麦や大豆の蛋白質は、既に植物性蛋白質と総称されて商品化され、新しい食品素材として加工食品への利用が増大している。植物性蛋白質製品の種類と製造法及び用途を中心に概説する。	五十嵐　脩	五十嵐　脩
7	広がる加工油脂の用途	油脂原料から採油、精製して得られた油脂は、そのまま食用にされるが、さらに水素添加、エステル交換などいろいろの処理をして物性の改良を行い、加工油脂としても利用されている。これらの加工法と用途について述べる。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	青果物の貯蔵と追熟	青果物は水分含量が高く、収穫後も生命活動が営まれる。そのため、貯蔵性が劣るという欠点がある反面、生命活動を調節して追熟が行われる。貯蔵性を高める方法には、生の状態で鮮度を保つ方法と、加工による方法とがある。	中川弘毅(千葉大学助教授)	中川弘毅(千葉大学助教授)
9	微生物を利用した食品	古くからわれわれは、微生物を利用して多くの優れた食品を生み出してきた。近年に至り、その応用はさらに飛躍的な発展をみせている。ここでは、日本古来の伝統食品である大豆加工食品に重点を置き、最近の技術革新も加えて概観する。	一島英治(東北大学教授)	一島英治(東北大学教授)
10	油脂の酸化	加工・貯蔵中に起こる食品成分の変化は、食品の品質に重要な影響を及ぼす。その中でも油脂の酸化は好ましくない変化の代表的なものである。油脂の酸化の機構とその防止法について解説する。	五十嵐脩	五十嵐脩
11	食品の色と変化	食品の色は、食物がもつ重要な機能の一つ、嗜好性と関係が深い。ここでは、加工・貯蔵中に食品成分が様々な化学的反応を起こすことにより誘因される色の変化を中心に解説する。変色を巧みに利用し好ましい色調を得る食品もあるが、変色が好ましくない食品の方がはるかに多い。	本間清一(お茶の水女子大学教授)	本間清一(お茶の水女子大学教授)
12	食品の呈味成分と変化	食品の味は、主要な五原味の他、多岐に亘る呈味成分が複雑に絡み合って形成されている。ここでは、呈味成分の生成機構、調和など味の持つ深みについて解説する。	小林彰夫(お茶の水女子大学教授)	小林彰夫(お茶の水女子大学教授)
13	食品の香気と変化	前章と同様な観点から、食品の香気について解説する。食べる時には食品は加熱されることが多いが、加熱により特有の加熱香気が生成され、食品に香ばしい香りや好ましい香りを与える。ここでは、生の食品に特有の生鮮香気と加熱香気を区別して解説する。	同上	同上
14	食物の物性	食物は、嗜好的要素としても重要な因子である粘り、かたさ、弾力、もろさなど様々な力学的性質をもっている。ここでは、それぞれの食物を特徴づけている力学的性質について解説する。さらに、食物の構造との関係も探ってみたい。	今井悦子	今井悦子
15	食品加工貯蔵技術の将来	われわれの食物は、その原料が世界的規模で供給されている。しかもその原料となる植物・動物については、最新の科学的技術により様々な方面から研究が行われている。現在までに探られた成果を基に、将来の食品素材、加工・貯蔵技術・包装材料・技術などを展望してみたい。	五十嵐脩 今井悦子	五十嵐脩 今井悦子

＝都市の住まい＝(TV)

主任講師：平井　聖(昭和女子大学教授)
主任講師：本間博文(放送大学教授)

全体のねらい

近年我が国が住宅事情は大都市圏を中心に都市の病理的な症状が一層進みつつある中で様々な矛盾を内包し大きな社会問題となっている。本講義では第一部で日本人の集まって住むことに対する意識を探り、第二部で現代社会において惹き起こされつつある都市居住の跛行的な状況を正しくとられ、その改善を目指した計画の可能性と限界を明らかにし、望ましい都市居住のあり方を考える。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	集まって住む	現代の住居にかかわる様々な問題を探るために、その基本に存在する日本人の集まって住むことに対する意識と、近代以降西欧から導入された意識について、両者の日本でのかかわり合いを含めて考察する。	平井　聖(昭和女子大学教授)	平井　聖(昭和女子大学教授)
2	家族と住居	現在、集まって住むもっとも小さな集団として家族が考えられる。歴史的にあるいは地域的に見ると、常に今と同じ集団であるとは限らない。現在我々が何の為に集まって住むのか、その容器である住居との関係はといった課題を考える。	同上	同上
3	集落をつくる	家族一住居の一つの上の集団である集落について、何を求めて集落をつくるのか、共同で行なうことはどのようなことで、どのようなルールが見られるか、住居の側から探ってみる。	同上	同上
4	集落の構成	集落は当然適正な規模があるはずである。集落がつくられる目的と規模などの関係を様々な角度から一特に住居と住み方の面を通して一探る。	同上	同上
5	集落から都市へ	都市が形成されても、その中に様々な形の集団が存在する。封建時代の都市には、その成り立ちにかかわる侍や町人の集団があった。現在でも町会、住区、学区など様々な集団がある。これら都市に存在する、あるいはかって存在した集団について考える	同上	同上
6	都市の構成	封建時代にも大きな都市になると、その中に小さな都市に相当する集団があり、それらが複合されていた。歴史的に都市構成の経緯を概観する。	同上	同上
7	我が国の住宅事情	我が国の戦後の住宅事情、住宅政策の推移を概説しいくつかの統計的な指標をもとに現在の住宅事情を解説する。とりわけ大都市の、中でも首都圏を中心とした地域の住宅事情が他の地方都市と際だった違いが見られることを指摘し他の地域とは異なった取り組みが必要なことを明らかにする。	本間博文(放送大学教授)	本間博文(放送大学教授)

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	首都圏の住宅事情	1980年代の後半から東京の国際都市としての役割の上昇と戦後一貫して続いている東京への一極集中とが相俟って深刻な住宅地価の急騰をもたらし首都圏の住宅事情は従来以上に困難な状況に追い込まれている。近年惹き起こされている都市居住者の生活破壊の様々な現象を明らかにし巨大都市における居住環境の整備が極めて困難であることを明らかにする。	本間博文	本間博文
9	都市居住の諸層	上述したような状況のもとで家庭生活がどのような影響を受け、どう変化しつつあるのかを明らかにする。さらに「マルチハビテーション」に代表されるように新しい都市居住の形態として喧伝されているいくつかの提案を取り上げその問題点を考える	初見学(東京理科大学助教授)	初見学(東京理科大学助教授)
10	新しい都市居住－1	過密化と地価の高騰の下で住宅は必然的に高層化するか低層密集住宅の形を取らざるを得ない。この二つの集住形態がどのような住宅性能を持っているのか家庭生活との関連で検討する。	同上	同上
11	新しい都市居住－2	現在首都圏では住宅地開発に関連した様々なプロジェクトが提案され、一部は実際に建設されている。これらの新しいプロジェクトを紹介しそれらの持つ可能性と問題点や限界を明らかにし、今後の都市住宅のあり方を考える。	同上	同上
12	安全なすまい	大都市の住宅ほど様々な事故や災害あるいは住宅犯罪の発生頻度が高く、都市の過密化によってその危険性は一層高まっている。住まいがそういった各種の災害などに対し、安全であることが最も基本的な機能の一つであることは言うまでもない。本章においては都市住宅の安全性についてその現状と対策について考える。	同上	同上
13	多摩ニュータウンの20年	多摩ニュータウンは東京の西部に建設され完成時には30万を超す人口を持つ新しい町である。第一期の入居が開始されてから既に20年以上を経過し、その間の我が国の都市造り、あるいは住宅造りの辿ってきた過程が全て集約されている。この多摩ニュータウンの歴史を辿り我が国の都市住宅の今後を考える。	本間博文	本間博文
14	地方都市の住まい	地方都市では首都圏とは異なった住宅事情が存在し、我が国の都市住宅のあり方を考えるうえで巨大都市とは異なった可能性を秘めている。しかし、ともすると大都市圏の住宅計画の手法がそのまま持ち込まれ居住環境の悪化をもらたすことになりかねない。本章ではケーススタディとして仙台地域を取り上げ、仙台圏における住宅事情を明らかにし、現状の問題点と新しい都市住宅の可能性を探る。	同上	同上
15	海外の都市住宅	欧米諸国は長い都市生活の歴史を持ちそれぞれに固有な都市居住を展開している。本章ではこのような欧米の都市住宅をいくつか取り上げ我が国の事例と比較しながら都市住宅のあるべき姿を考える。	西村一朗(奈良女子大学教授)	西村一朗(奈良女子大学教授)

＝成人の健康科学＝（Ｒ）

〔主任講師：鬼頭昭三（放送大学教授）〕

全体のねらい

青年期の健康科学にひきつづく、成人の健康科学で重要なことは、この時期が生産活動が最も盛んであり、社会的責任に基くストレスが多い時期であるとともに、健康な老年期への布石でもあるという事実でもある。生活習慣病としての成人病を予防するための、この時期における気配りの程度が、各個人の将来の活動可能年数の長短と密接な関係を持つ。

この観点から、成人の健康科学について、日常生活と生体反応を中心として、概括的に論ずることを目的とする。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	成人の健康科学序論	成人期は、日常生活が最も多様な時代である。それに伴って精神的及び肉体的負担が大きい。成人期における生活習慣がそのまま老年期の生活を左右することも大きい。本章では健康、健康科学の定義と概念を明らかにすると共に健康診断のあり方、受け方について述べ、健康な生活の基盤を考える。	鬼頭昭三（放送大学教授）	鬼頭昭三（放送大学教授）
2	細胞・組織・臓器・個体	人体は、細胞、組織、器官、個体という、次第に複雑化する階層構造にしたがって理解されることが多い。こうした階層のそれぞれは具体的にはどんなものか。こうした分け方は、どのような視点から生じ、どのような意味を持っているか。	養老孟司（東京大学教授）	養老孟司（東京大学教授）
3	体内時計と生活リズム	生命活動の周期性は、一日、一ケ月、季節、一年を周期とするものの他、瞬時も絶えることのない律動リズムなどいろいろある。時差ボケを例にとってこれを考え、日常生活への応用を考える。	本間日臣（元放送大学教授）	本間日臣（元放送大学教授）
4	遺伝と外的因子の関わり合い	遺伝は、親から与えられたもので不変のものであろうと考えられがちである。近年、分子生物学の進歩に伴って、遺伝子の発現様式が外からのいろいろの要因によって変化をうけることが益々明らかになった。環境は遺伝子にどのような影響を与えるであろうか？	鬼頭昭三	鬼頭昭三
5	運動、安静と健康	運動と安静時にどのような生体反応が体の中で起こるか、その功罪を点検し、健康的な習慣づくりのためにどのように応用するかについて述べる。	本間日臣	本間日臣
6	高温、低温、高所、大気汚染と生体反応	入浴・水浴に際して、体温、呼吸、血圧、心拍、血液、消化機能、自律神経機能はどのような刺激を受け、どのように反応するか。また、高地・高所への移動、大気汚染の際にみられる生体反応を解説する。	同上	同上
7	肥満とその対策	肥満は成人病（高血圧症、糖尿病など）の成因として重要である。何故太るのか、肥満の中でも特に健康によくないタイプがあるのか、その対策（食事療法、運動療法、行動療法、薬物療法）などを解説する。	吉田尚（千葉大学教授）	吉田尚（千葉大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	飲酒、喫煙とその影響	有史以来、人類の嗜好品として知られる酒とタバコについて、その摂取時にみられる生体反応を解説し健康への影響を考える。	本間日臣	本間日臣
9	食生活と保健	食物の過剰時代を迎え、栄養不足による疾患は減少したが、栄養の偏り又は、過剰による疾患が表面化してきた。これらは生活様式の変化による運動不足とあいまって、快適な生活及び生命の予後にどのような影響を与えているか、又、予防が可能であるかを考える。	金澤康徳(自治医科大学教授)	金澤康徳(自治医科大学教授)
10	くすりの効き方	いろいろな常用薬を使っている人は意外に多い。睡眠薬等は、その代表であろう。薬の効き方は、従来考えられていたよりはるかに複雑である。医師から処方されているからと言っても必ずしも安心できない場合がある。薬とはどのようなものであるか、どのように使うべきかについて解説することを目的とする。	三好理絵(東京女子医科大学助手)	三好理絵(東京女子医科大学助手)
11	ストレス、疲労、睡眠	ストレスは生体に種々の負担が加わった状態である。慢性の疲労はストレス状態の結果として一時生体の精神・肉体機能が低下した状態と言える。睡眠障害はそのような疲労の結果とも言える。ストレスとは何か、それにより起こる生体反応はどのようなものかを述べる。	吉田　尚	吉田　尚
12	女性の内分泌と代謝	女性の生殖期から生殖不能期への移行期としての更年期には内分泌学的変化が大きい。そこに他の要因も加わり治療困難な不定愁訴症候群を形成することが多い。これらについて解説する。さらに女性性機能の復雑な調節機序を、主として内分泌学の立場から述べる。	古谷　博(放送大学教授)	古谷　博(放送大学教授)
13	職域環境と保健	成人の多くは1日うち約1／3を職域で生活する。しかも、職域では一般環境に比べ有害性因子の質や量が高く影響大である。有害因子には、①化学因子（産業化学物質）②物理的因子（熱、音など）③生物的因子（微生物など）があり、各々特有の健康障害がある。しかし、近年、産業保健の発展で職業病の発生は少なく、逆にメンタルヘルスや局所疲労が重視されている。	和田　攻(東京大学教授)	和田　攻(東京大学教授)
14	成人期と老化	成人と老人の間には明らかな生物学的環境線はない。成人期は老化の進む時代であり、老人期への移行の時期でもある。老化の一般論に次いで成人期の老人について成人健康科学の立場から述べる。	鬼頭昭三	鬼頭昭三
15	健康科学からみた成人期の生き方	老年期における健康、自立、輝きは、遺伝子によってプログラムされた宿命である要素も多いが、成人期の生活態度によって、決定される面が多いことも事実である。成人期、そして老年期を生き抜く為の成人期のありかたについてまとめを述べる。	同　上	同　上

＝老年期の健康科学＝（R）

〔主任講師：鬼頭昭三（放送大学教授）〕

全体のねらい

生物学的には、老化は20歳以後、着実に進行するが、社会的存在としての人間では、65歳以上を意味する老年期は、一つの時代的単位であり、高齢化社会の到来とともに、その持つ意味が大きい。又、老年期は健康度の個人的差が最もおおきい時期でもある。光りある老年期を各個人が迎えることが、次の時代の社会の活性化を来す。この意味をこめて生物学的な現象としての老化、それを基盤とした老年期の健康科学について述べることとする。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	老年期健康科学序論	老年期は、健康及び社会的条件の個人差が激しい時代である。80、90歳まで社会で活躍する人、健康上は活動能力がありながら、場が与えられない人、病床に就いたままの人、いわゆる老人ボケになって家庭内の若い人の社会的活動に支障を与える人等、幅が広い。本講座では、老年期のもつ問題をあげ、光ある老年期を送るための健康上の問題を解説する。本章では“老年期とは何か”という一般論を中心に述べる。	鬼頭昭三（放送大学教授）	鬼頭昭三（筑波大学教授）
2	分子・細胞レベルからみた老化とメカニズム	最近老化のメカニズムは分子、細胞レベルの研究を通じて論じられることが多い。老化は遺伝子によってプログラムされた生物の宿命であると同時に、二次的な老化として作られる面もある。アルコールの多飲、日光浴等は後者の例である。老化のメカニズムとその生物学的意味は老年期健康科学の基本である。	三好理絵（東京女子医科大学助手	三好理絵（東京女子医科大学助手）
3	ホメオスターシスと老化	ホメオスターシスは生体の内部環境を維持する機構があり、生命現象として最も基本的な機能の一つである。しかし、この機能といえども老化を免れない。老化をホメオスターシスの観点からみると、ストレスや有害刺激が加わった時、内部環境を維持する予備力が加齢により乏しくなった状態というこうができる。水や電解質に関するホメオスターシス機構を例にとり解説する。	吉田　尚（千葉大学教授）	吉田　尚（千葉大学教授）
4	外見的老化と検査値からみた老化	白髪、顔のしわやしみ、身長、姿勢、皮下脂肪、歩き方など外見の変化をもたらす生体内の変化を、検査値の加齢変化と対応させながら考える。	本間日臣（元放送大学教授）	本間日臣（元放送大学教授）
5	神経系の老化－脳・脊髄・末梢神経	神経系は、最も老化しやすい組織、臓器である。脳の老化に伴って、全身的な機能が低下し、一方では、人格が円満になる、などの現象が現れる。神経系の老化を現実の形として把握するのが本章の目的である。	平井俊策（群馬大学教授）	平井俊策（群馬大学教授）
6	神経系の老化－感覚器	神経系の一部としての感覚器の老化も著明である。老人は、聴覚、視覚等が低下することによって生きる気力を失い、それが老化を促進することになる。また刺激に対する反応性の低下は老人の特徴である。	同　上	同　上
7	呼吸・循環系の老化	階段や坂を登る際の息切れ、夕方に現れる足のむくみ、夜就寝時のせき、夜間の頻尿など日常みられる変化の背後にある呼吸・循環系の加齢変化を解説する。	本間日臣	本間日臣

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	内分泌・代謝機能の老化(1)	高齢者になると糖尿病や高脂血症など種々の内分泌代謝障害がおこりやすい。また、このような障害は動脈硬化症の発症、進展に重要な役割を果たしている。高齢者の内分泌代謝障害のうち脂質代謝、糖代謝、水・電解質代謝等の障害とその対策について述べる。	吉田　尚	吉田　尚
9	内分泌・代謝機能の老化(2)	骨が脆くなり、骨折り易い原因として、カルシウムやビタミンの変化による骨粗しょう症がある。女性では特に問題となる。その他の内分泌機能の低下についても述べる。	古谷　博（放送大学教授）	古谷　博（放送大学教授）
10	消化機能、腎機能の変化	老人では、呼吸、代謝、排泄機能がすべて低下し、薬による副作用もでやすく中毒も起こし易い。これらの老化が老年期の生活に与える意味を解説する。	長沢俊彦（杏林大学教授）	長沢俊彦（杏林大学教授）
11	防御・免疫機能の老化	生体の防御・免疫機構の発動様式全般について解説し、これがどのような加齢変化をおこし、そのためにどのような病気がおこり易く、かつ治りにくいかを考える。	本間日臣	本間日臣
12	老年痴呆－脳の変化と症状	老年期痴呆は、変性性のアルツハイマー型老年痴呆と脳血管性痴呆に大別される。脳の変化と萎縮と脳血管障害（脳梗塞が多い）が中心である。症状は、記銘力、記憶力の著明な低下、見当識障害、計算力障害、思考障害、情緒障害、異常行動などである。	大友英一（社会福祉法人浴風会病院長）	大友英一（社会福祉法人浴風会病院長）
13	老年痴呆－実態と対策	老年期痴呆は、老年期の増加と共に、毎年約10%内外増加する計算となる。85歳以上では約25%は発病する。一旦罹患すると治療は不可能な状態であり、薬物などによる治療もごく一部の症状の対応療法のみである。予防については確実なものはない。	同　上	同　上
14	寿命・老年期の病気、死	寿命を支配するもの、老年者によくみられる病気、老年者の宿命である死について医学的立場からみた老年期のまとめを述べる。	鬼頭昭三	鬼頭昭三
15	健康科学からみた老年期の生き方	老年期は人生の集大成の時期である。光に満ちたものでなければならない。老年期こそ残された人生に希望を持つ生き方が大切である。その成否は少年期、青年期、成人期を通じての個人の心がけに左右されることが多い。この章で栄光に満ちた老年期を迎えるための青年期から要求される問題を引きおこし本講座のまとめとする。	同　上	同　上

＝教育思想（I）＝（R）

〔主任講師：村井　実（大東文化大学教授）〕

全体のねらい

教育の思想というのは、子どもたちを善くしようとする工夫や活動を支えるさまざまの考えである。それが、歴史上、時々の経済や政治、あるいは文化の状況の中でどう変化し、どう発展してきたかを代表的な思想家たちについて見ながら、古代より近代の始まりにまで及びたい。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	教育思想のはじまり (1) 教育ということば	教育ということばが生まれるということは、教育が問題として人々の意識に上ることを意味する。それは、人間の歴史の上で、いつごろ、どのようにして起こったか。	村井　実（大東文化大学教授）
2	教育思想のはじまり (2)子どもを善くする	子どもを善くしたいというところから、そもそも何が善いのか、また、どうしたら善くすることができるのか、などが問題として生ずる。これが教育思想の始まりである。	同上
3	ソクラテス	「善さ」とは何か、「善くする」とは何か、などの問題を生涯にかけて問うと同時に、その問いかたについて、「産婆術」「問答法」などの主張を行ったソクラテスの歴史的意味は何か。	同上
4	プラトン	ソクラテスの弟子として、プラトンは、ソクラテスの思想を理論的に整えることに力を注いだ。だが、その思想は、ソクラテスに対して、対極ともいうべき特徴をもつに至った。その吟味。	同上
5	イソクラテス	イソクラテスは、ソクラテス、プラトンとほぼ同時代のアテナイの町で、さらに独自の修辞学校を開くことによって、教育思想の第三の原型ともいうべきものを展開してみせた。それは何か。	同上
6	人間主義・理想主義・現実主義	子どもたちを善くしたいという、教育の思想に子どもたち、および善さをどう考えるかに応じて、教育思想の三つの原型が生まれた。ソクラテスの人間主義、プラトンの理想主義、イソクラテスの現実主義である。	同上
7	クインティリアヌス	ローマの共和制社会では、討議と説得の術としての弁論をもって教育の理想とするに至った。その思想の集大成としての、クインティリアヌスの『弁論家の教育』の特色。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	アウグスティヌス	キリスト教が社会に力を強めるに至って、そのキリスト教的「神」との関わりにおいて人間の教育が考えられる。それと、ギリシア—ローマの時代の教育思想との比較。	村井　実
9	中世の教育思想 (1)教会の教育—神への形成としての教育	子どもたちを善くしたいという、その善さが、理想としての神とされ、その神にむかって子どもたちを形成することが教育と考えられた。しかし、神を求めることよりも、神に基づいての形成が強制された。還相の理想主義といえる。	同　上
10	中世の教育思想 (2) 世俗の教育	教会が掲げる神の理想の下で、世俗の世界では宮廷は宮廷なりに、商人は商人なりに、職人は職人なりに、社会階層ごとに現実主義的な教育を展開した。思想上、理想主義と現実主義との癒着が生じたのである。	同　上
11	ルネサンスの教育思想	久しい中世の教会による桎梏からの解放を求める動きが、ギリシャ、ラテン時代の人間像を理想に掲げる人文主義の教育思想を生んだ。代表的な人物にエラスムス、トーマス・モアなどが挙げられる。	同　上
12	宗教改革の教育思想 ールターとカルヴァン	中世は、人間にとっての「善さ」＝神が教会に独占された時代といえる。それを教会から開放して、聖書を通しての人間との直接の関係に置こうとしたのが、ルターとカルヴァン、宗教改革の思想家たちであった。その教育上の意味は何か。	同　上
13	ラブレーとモンテーニュ	人文主義の教育が形式化して「キケロ主義」と評されるようになるのに対して、形式よりも内容、ことばよりも感覚や理性、知識よりも経験を重んじようとする実学主義が台頭した。中世以来の理想主義的な大勢に対しては、現実主義的な思想の新しい形での復活である。	同　上
14	コメニウス	「知る」という働きの重要性、万人にとっての可能性への着眼を中心として、それを現実化する方法と組織が考察される。—近代を支配するに至った実学主義的教育思想のスタート	同　上
15	思想の系譜 現実主義の再生	教育の思想は、子どもを善くしたいという人々の意欲に貫かれて、人間主義的、理想主義的など、時どきの政治的、経済的、文化的等の状況に応じて変化しながら発展していく。その経過の回顧と展望。	同　上

＝教育思想（II）＝（R）

〔主任講師：村井　実(大東文化大学教授)〕

全体のねらい

教育の思想というのは、子どもたちを善くしようとする工夫や活動を支えるさまざまの考えである。それが、歴史上、時々の経済や政治、あるいは文化の状況の中でどう出現し、どう変化し、どう発展してきたかを、とくに近代の始まりから現代までについて、振り返ってみたい。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	現実主義の広がり―階層性と子ども観	ロックは、イギリス紳士階層の教育思想の代弁者として出現した。この階層的現実主義が絶対主義国家に広がるその際、子ども、あるいは人間は、どういうものと見られたか。―子ども観の問題	村井　実（大東文化大学教授）
2	ルソー	「造物主の手が出るときはすべてが善いのだが人間の手にかかってすべてがダメにされている」という革命的な宣言。―その教育思想的な意味は何か。	同上
3	汎愛派の人々	ルソーの影響下に、人間、自然、感覚と身体との関心等をもとに、ドイツに汎愛派の運動が生じた。バゼドウ、ザルツマンなどを代表とするが、とくにザルツマンについてその特色を見てみた。	同上
4	カント	人間と自然を重んずるというルソーの系譜に立ち、同時に実践上では汎愛派の実践に同調したが、カントは、両者の現実主義的な関心をはるかに越え出る、独特の思想を説いた。これは、人間性理念の完成という、その意味での新しい理想主義思想―理念主義―ともいうべきものの力強い宣言であった。	同上
5	コンドルセ―フランス革命の教育思想	フランス革命は、教育上、歴史的な二つの問題を提起した。第一は、圧制への抵抗としての自由と平等の強調であり、第二は、国家による公教育という考えである。この二つの、ほとんど矛盾的といってよい要求の、最初の調停者として、コンドルセが出現した。	同上
6	ペスタロッチー	政治への関心、経済への関心と、教育への関心との関係、したがって、政治思想・経済思想と教育思想との関係、こうした関係が、ペスタロッチーによって、どう把握されていたか。	同上
7	フレーベル	アウグスティヌスやルターのばあいの教育思想の中心にあった「神」が、新しい意味をもって出現する。子どもの中の「神」―それが教育の歴史にどういう新しい動きを作り出したか。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	オーウェン ー産業革命と教育	産業革命の進展とともに、社会が労働者の子弟の啓蒙を必要とし、そこから、社会の側からの労働者階級への教育的関心が生じた。こうして社会主義の教育思想が生まれる。その代表者としてのロバート・オーウエンの思想を吟味する。	村井　実
9	ホーレス・マン ーアメリカの教育思想	フランス革命によって提起された、自由・平等と公教育との緊張の解決への道が、新大陸の新国家アメリカにおいて、デモクラシーの理念のもとに拓かれることとなった。その代表的教育思想家、行政家としてホーレス・マンが出現した。	同　上
10	ヘルバルト ー思想と科学	近代に入って、教育に科学の成果としての知識・技術を取り入れると同時に、教育の思想を科学化する関心が高まっていった。その最初の積極的な試みがヘルバルトによって企てられた。ここでは、その試みの意味と限界とを考察する。	同　上
11	デューイ	国家と、知識・技術と、市民と、人間と、この四者の必然的なもつれ合いをどういう方向に解決して理想の教育を実現するか。この視点から、デューイの教育的民主主義の思想を吟味する。	同　上
12	森有礼	日本における国家と教育の関係をどう考え、どう調整するか、森有礼の国家主義的教育思想の成立を吟味する。	同　上
13	福沢諭吉	森有礼と同時に、同じ国家近代化の意図をもってスタートした福沢諭吉の教育思想が、どういう異なった主張に結晶していったか。その両者の相違の意味。	同　上
14	教育の民主主義 (1)　新しい出発	明治以来の日本での教育、戦争と敗戦、米国教育使節団報告書、教育基本法と新教育、新教育の運命、現在の日本の教育現実等は、教育思想上の問題として何を意味するか。	同　上
15	教育の民主主義 (1)　歩みの現実	日本の戦後の教育は、民主主義を旗印として進められたが、いつの間にか、その理想にかえって遠ざかる方向に進んでいるかに見える。これは何を意味するか、これを、明治以来の潜在的な教育的国家主義の問題として吟味する。	同　上

＝学　校　教　育＝（TV）

〔主任講師：深谷昌志（静岡大学教授）〕

全体のねらい

学校教育がどんな意味を持っているかを考えていく。この講義は教育関係の入門的な性格を持たせてあるので、基礎的な事実を深めていく。なお、この科目は昭和58年に作成したものを手直ししたので、放送・印刷教材ともに工夫をこらしてある。学習しやすさを配慮したつもりなので、頑張って学習してほしい。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	子どもの発達と学校	子どもの発達にとって、学校の果たす役割を、“いくつかの教育実践”を紹介しながら考えてみる。	深谷昌志（静岡大学教授）
2	日本の学校	諸外国の学校の姿との対比の中で、日本の学校の特色を、歴史的な背景を含めてとらえ、問題を掘り下げていく。	同　上
3	学校行事	学校のあり方は社会の歴史的変化に対応して変わる。ここでは、近代学校をそれ以前にあった藩学や寺子屋などと対比して考える。	同　上
4	教師の仕事	教師の専門職化とのかかわりで、教職のあり方をとらえる。特に、教職の特性を教員養成のあり方の点から考える。	同　上
5	学級集団の構造	小学校教育の中心は学校にある。そこで、学級の持つ意味を集団構造の視点からとらえて、その特色を明らかにする。	同　上
6	授業と学習	戦後の教育改革の原点を確かめるために、「教育基本法」の理念や、6・3制の成立事情などを考察する。	同　上
7	地域社会と学校	学校の役割を地域社会や家庭との関連で考えていく。それと同時に、教育と学校との違いもとらえる。	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	日本の近代学校の成立	学校のあり方は歴史とともに変わる。日本の近代学校の歴史的性格を、それ以前の教育機関との対比において考察する。	中　野　　光 （中央大学教授）
9	国家による教育の統制	戦前における国家主義教育の目標と様相を理解する。同時にそのような教育とはちがった考え方もあったことに関心をよせる。	同　　上
10	子どものための学校を求めて	大正デモクラシーの時代、といわれた第一次世界大戦後の教育界におこした教育改造の動きをとらえ、学校改革の遺産について理解を深める。	同　　上
11	戦後教育の原点	戦後教育がいかなる原点から出発し、その理念はどのようなものであったのか、ということを、教育基本法と6・3制の成立に焦点づけて考察する。	同　　上
12	学校をめぐる法規	学校の諸活動を支える法規の役割を明らかにし、学校と法規との結びつきについて、実態をふまえながら理解を深める。	天　笠　　茂 （千葉大学助教授）
13	学校経営の仕組み	学校内部の分業と協業の実態を把握するとともに、ティーム・ティーチングの実践をふまえながら、特色ある学校づくりの条件としての学校経営のあり方を探る。	同　　上
14	学校論の系譜	近代以降に限ってみても、さまざまな学校論が提起されてきている。そうした系譜を現代の視角から分析し、あとづける。	深　谷　昌　志
15	学校改革の可能性	さまざまな問題点をふまえて、これからの日本の学校改革の可能性を、諸外国の学校改革の状況を視野においてとらえられる。	同　　上

＝教育の方法＝（TV）

〔主任講師：吉田章宏（東京大学教授）〕

全体のねらい

教育という「生きられた世界の出会い」における「人間の経験」を、授業を中心とする多様な具体的事象と事例に即して、明示化することを通して「教育」、「方法」、「教育の方法」について私達ひとりひとりが持つ前理解を、可能な限り多面的で豊かな理解へと、次第に高め深めてゆく道を共に歩むことを狙いとも願いともする。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	開講にあたって	私達ひとりひとりは、既に常に「教育の方法」についての一定の暗黙の理解……これを前理解と呼ぶ……をもち、それよりもさらに深い理解を求めている。では、「教育」、「方法」、「教育の方法」とは何か。私達の前理解からより深い理解へと進み行く道を考える。	吉田章宏（東京大学教授）
2	私の「教育の方法」	「教育の方法」は「生きられた教育」から意識化され、自覚化、述語化、言語化、典型化、社会化、普遍化などされていく。「教育」と「方法」の多様性と統一性、変化の中の不変、不変の中の変化、そして、その不変性の追求の本質的な非完結性について考察する。	同上
3	人間としての私の生	私の生の営みである「教育」の「方法」の意味と構造を探究していくと、その地平に「生と死」が浮かび上がってくる。人間の生きられる世界の構造（時間、空間、身体、自己、他者、言葉等）、人が育つ道、学ぶ人から教える人への生きられる世界の変遷を考察する。	同上
4	世界との私の出会い	私の生きる世界は、時の流れの中で、私が出会う世界との交わりによって、次第に多様化し、豊富化する。生物一般の世界……知覚世界と作用世界（ユクスキュール）……と人間の世界との共通性と差異性を考え、人間の生きる世界の歴史的社会性へと考え進める。	同上
5	他者との私の出会い	人間である私の生きる世界が豊かになる道には、他者との出会いによってはじめて可能になる仕方がある。他者との「出会い」が持つ意味と構造を「地平」に置いて、教える人と学ぶ人の「出会い」と「教育の方法」の意味と構造を考察していく方向を見定める。	同上
6	沈黙	人と人との「出会い」の始まりにある「沈黙」の意味と構造を考察し、教育における「黙の力」を解明し明示化する。「黙」についてのさまざまな考察に学びつつ、「教育」一般および学校の「授業」でのさまざまな沈黙の、「教育の方法」としての意味を考察する。	同上
7	見る	「見る」は、「聞く」と共に、「教育におけるすべて」ともされる。見えない状態から、見える状態にいたる可視化から能視化への道を、「見る」の具体例に即して考える。「見る力」により可能となる、沈黙、肯定、否定により教育、実践体験による「見る力」の変化と教育現実の「見え」の変化など、「見る」による教育の道を考察する。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	問う	教育における「問う」の構造とその意味を考察する。まず、「問う」の素朴な在り方について考察する。ついで、「教師の問い」に限定して、教師にも「答え」がわからない「わからない未知」を含む、その多様な在り方を、学ぶ人と教える人の生きられる「問いの経験」に即して「問い」、「説明」と「理解」へと導いて行く「問う」を考察する。	吉田章宏
9	答える　応える	教育における「問い」への応答としての、「こたえ（答え／応え）」の構造と意味を考察する。学ぶ人と教える人それぞれの、自問自答、自問他答、他問自答、他問他答、説明と理解などの意味と構造を、生きられた「こたえ（応答）」の経験に即して考察する。	同上
10	「私の世界」を変える	人間は、自らが生きる「私の世界」を多様な仕方で変える。「私の世界」は、現実への働きかけの中で、また回想・予想・想像の中で変わる。その諸変化は密接な相互関係にある。世界の現実性・必然性・可能性に向かう人間の在り方の変化を生む方法を考察する。	同上
11	私を変える　私が変わる	「私の世界」が変わると、「私」は変わる。「私」が変わるとは「私の世界」が変わることである。私の「生きられた身体」の変化もまた「私」の変化である。「私」の変化が、生きられた歴史を負う「私の世界」への働きかけを介して可能となることを考察する。	同上
12	世界を創り表現し、共にする	「私の世界」は表出と表現を通して表れる。「表れること」、「表すこと」を通じて「私の世界」と「私」は変わる。表現は他者との世界の共有を誘う。私たちは世界を表現し、共有し、共に創ることで、共に育つ。教育は「共に育つこと」であると確認する。	同上
13	「私の世界」の多様化と統一化	「私の世界」は、人類の歴史の流れに参加する私の生の歴史の流れの中で、次第に多様化すると共に統一化され、豊富化し普遍化もする。教え学ぶ教育の実践に活かされる、多様な技術・技法を「私の世界」が発展した「身体の技術」として、統一的にとらえる。	同上
14	教育における「出会い」と「別れ」	人と人とのすべての「出会い」と同様に、教育における「出会い」にもやがて「別れ」が訪れる。むしろ、依存から自立への教育は本質的に「別れ」を目指す営みでさえもある。依存から自立への変化の構造と意味、自立を促す教育の在り方について考察する。	同上
15	「私の共有」への道	本講座自体が、「教育＝共育」の一事例である。私達はここで共に育ち、世界を共有した。私達の考察は、私達自身の「共育」での「出会い」にも自然に生かされる。この「終わり」で「別れ」、自らの自立への道を歩み「始める」あなたに「文献紹介」を餞とする。	同上

＝教育の歴史＝（TV）

〔主任講師：石川松太郎（日本女子大学教授）〕

全体のねらい

本講は、現代の社会において多くの人びとが直面する教育の事態と特徴とについて、その史的な掘りさげをねらいとする。内容は、教育の思想・理念、制度・政策、内容・方法など広汎な分野に及ぶが、焦点は組織的・計画的に文字を授ける教育、文字によってさまざまのことがらを学ばせる教育の成立と発達過程にすえたい。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	教育の歴史を研修する意味	現代教育を特徴づける一つ、前記した文字を授ける教育、文字による教育を事例として、その起源を索めて、近代の小学校、近世の寺子屋・郷校・私塾、中世寺院の世俗教育、古代の諸教育施設とさかのぼりながら、この間に教育史を研修する意味・価値を考える。	石川松太郎（日本女子大学教授）
2	古代の教育	古代における仮名や漢字を用いた教育・教科書の成立と普及、大学寮・国学の創設と展開、博士家の活動、庶民の生産技術教育などを事例にして、古代教育の実態へのアプローチを試み、その教育史上の意義について検討する。	大戸安弘（東京学芸大学助教授）
3	中世の教育	中世において多様化した教育機関ならびに、教材・教科書、直系制家族制度の成立と「家」の教育、寺院の僧侶養成、「座」の組織と民衆教育、遊行者の出現と民衆教育などを事例にして、中世教育の実態へのアプローチを試み、その教育史上の意義を検討する。	同上
4	近世の教育(1)～教育思想を中心に～	近世にいたって教育理念の大宗となった儒教（朱子学派・陽明学派・古学派）をとりあげ、また国学の思想（本居宣長・平田篤胤等）、さらには民間に興った社会教化思想（心学・報徳等）を採りあげ、これらと近代教育思想とのかかわりを吟味する。	石川松太郎
5	近世の教育(2)～教育機関を中心に～	近世はまた、文字および文字による教育が庶民階層にまであまねく滲透した時代であった。ここでは、武士の子弟を対象とした藩校等とともに、庶民の子どもを対象に自然に成立・普及した寺子屋・郷校・私塾を採りあげ、近代教育とのかかわりについて考える。	同上
6	幕末維新期の教育	天保（1830代）より明治初年（1870代）にかけては、日本では有数の社会変革期であった。この期における教育思想ならびに教育諸機関に生じた革新の動向とその教育史的意義について検討する。とくに、欧米先進諸国よりのインパクトに注意したい。	神辺靖光（兵庫教育大学教授）
7	近代市民社会(1)～教育思想の展開～	17・18世紀以降、西欧において成立し、めざましい勢いで発展した近代市民社会ならびに国家にあって、どのような教育思想が産みだされ、子ども観が普及したかについて検討する。ここでは特に、日本に強い影響を及ぼしたルソー・ペスタロッチ等に注目する。	上野耕三郎（小樽商科大学助教授）

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	近代市民社会　(2) ～教育制度～	上記の子ども観や教育思想とかかわりながら、西欧の市民社会ならびに国家では、いかなる教育政策が採られ、労働者や農民の教育に対する動きと対応しながら、どのような教育制度が創られていったのかについて検討する。フランス・アメリカに重点をおく。	上　野　耕三郎
9	明治期における義務教育の展開	日本の近代社会において、初等校を中核とする初等教育機関が成立し普及していくなかで、義務教育制が国家至上主義とのかかわりのなかで、実施・定着していく史的過程を検討する。なお、「教育勅語」発布前後の道徳教育史も、ここで扱いたい。	神　辺　靖　光
10	明治期における中等・高等教育機関の成立と展開	日本では、上記の初等教育機関と雁行して、あるいはこれとは関係なく独自に、種々の中等・高等教育機関が創設されて普及した。その史的な過程と意義について考察する。なお、ここでは日本では特有の意味をもった女子中等・専門教育機関についても検討する。	同　　上
11	児童中心の教育理念と実践　－(1)－ 西欧市民社会の場合	19世紀以降、産業革命を経て近代的な子ども観にもとづく児童中心の教育理念と実践に展開したかを究明する。ジョン・デューイ等の教育思想、英国におけるアボッツホルムの学校、フランスにおけるローシュの学校等を事例とする。	上　野　耕三郎
12	児童中心の教育理念と実践　－(2)－ 日本の場合	大正期自由教育運動を頂点として、以前は明治前期にさかのぼり、以後は昭和前期に及んで、日本における児童中心の教育理念と実践が刻んだ軌跡をたどる。とくに、カリキュラム改造の動きと作文教育の系譜とを重視したい。	石　川　松太郎
13	戦時下の教育 －「皇国民錬成」－	昭和６年の満州事変勃発より同20年第２次世界大戦終了時まで、日本では上記の自由教育は官憲によって弾圧され、極端な国家主義の教育が断行された。特に、昭和10年ころ国体明徴の政策が行われて以降、「錬成」の理念による教育が滲透した軌跡を検討する。	清　水　康　幸 (野間教育研究所所員)
14	戦後教育改革 －占領軍の教育政策と日本の対応－	昭和20～26年、日本は連合軍の統治下におかれ、教育政策もその統制・指導を受けることとなった。これに対応する日本側の動き、特に教育刷新委員会の活動と併せながら、また同じ境遇下にあったドイツの場合と対照しつつ、新学制成立の経緯を検討する。	清　水　康　幸
15	戦後教育史・教育史研究	戦後の日本を中心に、現代教育史にみられる諸特徴を、古代～近代教育史と比較しつつ、とりだして検討し、今後の教育史研究が取りくまねばならない課題を考える。とくに、アリエスの社会史的な教育史の視点に着目したい。	石　川　松太郎

＝言　葉　と　教　育＝（R）

〔主任講師：福沢周亮（筑波大学教授）〕

全体のねらい

主として、幼児・児童を対象とした言葉に関する教育について、教育心理学・言語心理学の立場から取り上げる。その展開にあたっては、教育の理論的な面のみでなく、指導の実際的な面もできるだけ取り入れ、問題を多角的に考察する。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	言葉と人間(1)	言葉と人間とのかかわりについての問題を考える。(1)言葉と人間とのかかわり、(2)言葉と伝達、(3)言葉と思考。	福沢周亮（筑波大学教授）
2	言葉と人間(2)	言葉と人間とのかかわりについての問題を考える。(1)言葉と記憶、(2)言葉と知能、(3)言葉とパーソナリティ、(4)言葉と環境	同　上
3	言葉の教育の課題	発達段階に応じた言葉の教育の課題を考える。(1)乳幼児期の課題、(2)児童期の課題　(3)青年期の課題。	同　上
4	言葉の発達	言葉の発達について通覧する。(1)言葉の獲得の理論、(2)言葉の発達の様相、(3)言葉の発達段階。	同　上
5	話し言葉の教育	聞くことと話すことに関する教育の問題を考える。(1)伝えることの難しさ、(2)聞くことと話すこと、(3)「ぼく」と「わたし」	同　上
6	文字の教育 ―かな―	かなに関する教育の問題を考える。(1)かなの特徴、(2)かなの学習の機構、(3)入門段階の指導の在り方。	同　上
7	文字の教育 ―漢字―	漢字に関する教育の問題を考える。(1)漢字の読み書きの実態、(2)読字学習の機構、(3)漢字の指導の在り方。	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	語彙の教育(1)	語彙教育の問題を考える。(1)語彙の教育の意義、(2)教育のための基本語彙の選定、(3)語彙学習への動機づけ。	福沢周亮
9	語彙の教育(2)	語彙教育の実際についての問題を考える。(1)語彙の拡充のための指導、(2)語彙の定着のための指導、(3)機能語の指導。	同　上
10	読みの教育(1)	物語文を中心として読みの教育の問題を考える。(1)読みの教育の意義、(2)物語文の読み、(3)物語文とイメージ、(4)物語文の指導。	同　上
11	読みの教育(2)	説明文を中心として読みの教育の問題を考える。(1)説明文の特徴、(2)説明文の読み、(3)説明文の指導。	同　上
12	読みの教育(3)	読書に関する教育の問題を考える。(1)読書の実態、(2)幼児期の指導、(3)読書指導の在り方、(4)読書療法。	同　上
13	作文の教育	作文に関する教育の問題を考える。(1)文章化の意味、(2)作文の能力の発達、(3)イメージと論理。	同　上
14	思考の教育	「一般意味論入門」として、この立場から主題を考える。(1)思考の教育の意義、(2)言葉と事実、(3)言葉の魔術。	同　上
15	言葉の能力の把握	言葉の能力の測定と評価についての問題を考える。(1)言葉の能力の意味、(2)語彙力の把握、(3)読解力の把握、(4)作文力の把握。	同　上

＝道徳教育＝（R）

〔主任講師：木原孝博（岡山大学教授）〕

全体のねらい

教育とは、子どもが社会の一員としての社会人に必要な諸能力を身につけていく過程であるが、道徳教育は、諸能力のうちの道徳的側面の成長発達に関心をむける。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・職名）
1	問題解決能力のある子ども	現代社会は変動社会である。常に新しい問題が生起し解決を迫る社会である。現代社会に生きる人間は、新しい問題に対決し解決していくだけの能力を身につけていかなければならない。問題解決能力を中核とした人格の亡体者とならなければならない。	木原孝博
2	問題解決能力のない子ども	現代の変動社会に生活している人間が、もしも問題解決能力を身につけていなければ、受社会的問題行動か非社会的問題行動を超えざるを得なくなる。犯罪人か精神的病人になるしか道は残されていない。どうしても現代人は、問題解決能力を身につけていかなければならない。	同上
3	学校教育のしくみと道徳教育	子どもの問題解決能力を育成するために、学校はある種のしくみを持っている。学校教育の構造である。学校教育の構造の中で、道徳教育はどのような位置を占めているかを明らかにする。	同上
4	道徳教育の実践原則	問題解決能力を育成するためには、社会の側からの要求を子どもに対する受容が必要不可欠である。道徳教育の実践原則である受容と要求を明らかにする。	同上
5	道徳的体験と道徳教育(1)	学級生活の中で子どもを受容することで、子どもが道徳的価値を学習していく過程を実践に基づいて分析する。	同上
6	道徳的体験と道徳教育(2)	学級の中で、子どもに自己決定の機会を与え、自主的体験をさせることによって、自主的生活態度を身につけていく過程を実践に即して解明する。	同上
7	道徳の授業理論	道徳教育において、間接的体験（道徳的価値）の学習も必要であることを明らかにする。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・職名）
8	道徳の授業(1)	道徳の実際の授業を通して、子どもが道徳的価値を学習していく過程を明らかにする。	木原孝博
9	道徳の授業(2)		同上
10	修身科と文部省『道徳教育のための手引書要綱』（昭和26年）	戦前戦中の道徳の授業であった修身科と『道徳教育のための手引書要綱』の道徳教育としての特徴を明らかにする。	同上
11	都市化と道徳教育（アメリカの場合）	都市化の進展がアメリカ公教育における道徳教育にどのよう問題を投げかけているかを明らかにする。	同上
12	教科の授業構造と道徳教育	子どもの学校生活の大部分は、教科の学習である。教科の授業の中で子どもは知識だけでなく、道徳的価値をどのように学んでいくかを明らかにする。	同上
13	教科の授業と道徳教育	教科の実際の授業を取り上げて、そこでおこなわれている道徳的価値の学習を考える。	同上
14	教育的教授とその限界	教科を通しておこなわれる道徳教育は重要であるが、それだけでは道徳教育としては不十分である。直接体験や間接体験による道徳教育が必要であることを明らかにする。	同上
15	教科の「道徳教育」化	教科の中で道徳教育をおこなうことは必要であり大切なことであるが、それを強調するあまり教科の論理を踏み外すことがあってはならない。	同上

＝教　育　評　価＝（R）

〔主任講師：肥田野　直（東京大学名誉教授）〕

全体のねらい

教育評価は、児童・生徒・学生の個性に応じた指導を行うために必要な情報を集約すると同時に、教育の成果を明確化して教育条件の改善に役立てるものである。しかし、最近は学習者自身による自己評価や教育機関自身が行う機関内評価が重視されるようになった。これらの問題も含めて教育評価を新しい角度から考えてみたい。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	教育評価 ーその歴史と分野ー	教育評価はどんな分野を扱っているのか、また教育評価の現在の体系が成立するまでに、歴史的にどんな発展過程を辿ってきたかについて考察する。その上で、教育評価とはいかなるものかを考えてみる。	肥田野　直 （東京大学名誉教授）
2	自己評価と他者評価	評価の情報フィードバック機能と動機づけ機能の両面から、自己評価と他者評価の役割を考察する。とくに、人格形成に重要な機能を果たす自己概念の発達に及ぼす他者評価と自己評価の役割を考えてみる。	同　上
3	指導の過程と評価	指導の過程を前・中・後の3段階に分け、本章では事前の評価と指導途中の評価を扱う。すなわち、事前評価を教育目標と指導計画の設定に活用し、指導途中の形成的評価に基づいて有効な指導を行う方法を考察する。	同　上
4	知識・思考の評価	指導終了後に行われる総括的評価における相対評価、到達度評価、個人内評価、進歩状況の評価等の特徴と意義を考える。また、認知的領域、とくに知識・思考の評価の方法について、学力検査を中心として考察する。	同　上
5	技能・習慣の評価	精神運動的領域の評価について、技能と習慣の評価を中心として考える。方法としては観察法、面接法、評定法について理解を深める。	同　上
6	興味・態度の評価	情意的領域の評価としては、興味と態度の評価を中心とし、達成動機、価値観などの評価について考察する。また、方法としては、質問紙法に重点をおいて、その作成と実施の方法について理解を深める。	同　上
7	適性の評価	学業および職業において個性を発揮するために、その適性を把握することが望ましい。そのため開発されている各種の適性検査について理解を深める。さらに、進路相談や進路指導において「適性」をいかに考慮すべきかについても考える。	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	性格の評価	性格（パーソナリティ）の検査法としての目録法（質問紙検査法）、作業検査法および投影法について考察する。また、性格検査法、観察法、面接法、評定法などによる性格評価の結果を学習指導と生徒指導に活用する方法について考える。	肥田野　直
9	対人関係の評価	親子関係を主軸とする家庭内の人間関係、学級内の友人関係、児童・生徒―教師関係についての評価の方法を考察する。とくに、相互評価法の意義と問題点について考える。	同　上
10	検査をめぐる諸問題	検査の信頼性と妥当性に影響する諸要因を明らかにするとともに、検査が教育活動に与えている影響を積極的及び消極的の両面から考察する。	同　上
11	評価と指導	評価と指導は車の両輪のような関係にある。個人指導や学級経営に評価結果を活用する方法を考えるとともに、ピグマリオン効果など評価が教師の指導態度に与える影響についても検討する。	同　上
12	指導要録と通知表	学校における評価の公的記録である学籍簿及び指導要録の歴史的変遷と、そこに示される評価観の変化を考察するとともに、通知表（通信簿）の内容やその役割についても考える。	同　上
13	資格試験と選抜試験	資格試験と選抜試験の性格と機能を明確にする。資格試験については、職業資格試験や技能検定を、また、選抜試験は入学試験の歴史を考察する。	同　上
14	生涯学習と評価	発達段階に応じて教育―学習の形態が異なるのと同様、評価もそれぞれの発達段階に応じてその性格・機能が異なるべきである。本章では伝統的な学校教育以外の教育、とくに生涯教育における評価の意義と方法について考察する。	同　上
15	教育条件の評価	教育条件を改善するための評価として、授業分析、学校評価、国内的および国際的学力調査などがある。これらの評価を考察すると共に学習者の評価もさらに検討し、自己評価を基盤とする評価観の意義を確認する。	同　上

＝ 家 庭 教 育 ＝ （R）

〔主任講師：山村賢明（立教大学教授）〕

全体のねらい

家庭教育の問題を、乳幼児にたいするしつけや教育のハウ・ツー的手引としてではなく、人間が一人前の大人になる発達の過程を見通したうえで、日本の社会や文化という広い観点から、原理的・体系的にとらえたい。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	子どもの発達と家庭	家庭教育というものを、子どもが一人前の大人へと発達していく社会化の過程のなかに位置づける。そして、そこでの家族の役割を取り上げ、家庭教育は家族の日常生活に即して、実際的に行われるべきことを示す。	山村賢明（立教大学教授）
2	日本人の形成と家庭	家庭教育は単に一個の人間の成長・発達であるだけでなく、それぞれの社会の文化の再生産の役割をも担う。具体的には、日本語や基本的生活様式の獲得を通しての日本人の形成を考える。	同上
3	家庭の教育・学校の教育	日常的しつけ機関としての家庭と、専門的教育機関としての学校のそれぞれの特質と相違を考え、両者が協力しつつも、それぞれ固有の機能を果たすことによってこそ、子どもの健全な発達が可能になることを明らかにする。	同上
4	母親の役割 ― 愛の原体験 ―	子どもの社会化にとっての母親の役割の本質と子どもの発達に応じたその役割の変化を考える。そして母親の役割の中心が、人間的な愛の感情を子どものなかに原初的に形成することであることを示す。	同上
5	父親の役割 ―権威の原体験―	母親と異なり、人間社会に特徴的に見られるという父親の役割の諸相を取りあげ、とりわけその第一次的役割が、規範意識や道徳の基礎にある権威の感覚を、子どもに最初に与えるところにあることを述べる。	同上
6	性別役割としつけ	男女の性別役割が、まず家庭の中で父親・母親をモデルにして子どもに獲得されるものであること、性別役割は時代や社会によって異なるものであることを示し、男女平等をめざす家庭教育について考える。	同上
7	きょうだい関係の意義	両親の下でのきょうだい間の平等と庇護、親和の競争といった関係が、人間の発達に与える重要な意義を指摘し、今日の一人っ子的状況がもつ問題点について述べる。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	日本の子ども観 －しつけの前提－	しつけや家庭教育の前提としての子ども観は、歴史・社会的に変わるものであることを示し、日本の性善説的子ども観の特徴を明らかにし、しつけにおける明確な言葉による要求の必要性を論じる。	山村賢明
9	母子関係への偏り	日本の親子関係においては、特に母と子の密着が濃厚であることを指摘し、それが結果的に父子関係を疎遠にし、甘えを助長し、規範意識をあいまいにさせるような効果をうみ出すことを問題にする。	同上
10	家庭からの 集団主義	日本人の行動様式の特徴とされる日本的集団主義というものが、先ず家庭のなかからつくられることを示し、そのような家庭のなかで個人の自律性や主体性を伸ばすしつけについて考える。	同上
11	小核家族化の問題	核家族化と情報過多は育児不安を、また子供数の減少と生活水準の向上は過保護を必然的にもたらす傾向をもつことを述べ、さらにそれから脱出する方法や、祖父母の役割についても触れる。	同上
12	「見えない父親」 と子ども	父親の意義の曖昧化は現代の工業化社会一般の問題であるが、ここでは特にその日本的状況を指摘し、父親の回復なしには、家庭教育の機能も、子どもの問題行動への対応も困難になることを論じる。	同上
13	子どもを 「管理する母親」	父親とは逆に、伝統的な母子関係の濃密さも手伝って、現代の母親はますます顕在化し、子どもの生活をすみずみまで管理する傾向があることを述べ、それが子どものパーソナリティに及ぼす影響について指摘する。	同上
14	受験体制と家庭	受験体制のなかに組み込まれてしまった子どもたちの生活、偏差値に振り回され、学校の下請け機関になってしまう家庭のあり方を取りあげ、子どもを見る親の目に、勉強の成績以外の多様な物差が必要であることを述べる。	同上
15	これからの家庭教育	全体の締め括りとして、家庭教育の基本的役割を要約し、現代の社会状況のなかで、本来の家庭教育を再生させ、21世紀の国際社会に向けてしなやかでたくましい子どもを育成する方途を探る。	同上

＝　子　　供　　観　＝（R）

〔主任講師：舘　　昭（学位授与機構教授〕

全体のねらい

本講義では、欧米及び日本における子供観の展開の諸相の分析を通じて、子供観の変化が社会の生産の構造の発展と密接な関係をもち、東西の文化差こそあれ、心理的にはそれが投影の規制と共感的理解との相克の歴史であり、時代の課題が子供観に働く投影の規制の自覚と子供との共感関係の確立にあることを学ぶ。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・職名）
1	子供観の探究	1. 意識の部分性 2. 検討対象として西欧 3. 子供の定義	舘　　昭 （学位授与機構教授）
2	西欧の子供観 －小さな大人	1. 中世西欧の子供観 2. 近代との断絶 3. 子殺しの禁止	同　　上
3	西欧の子供観 －子殺しの禁止	1. 矛盾解明の鍵 2. 律法と罪意識 3. 近代への起動力	同　　上
4	西欧の子供観 －もう一つの断絶	1. 鞭による教育 2. 作り出す善 3. 鞭への批判	同　　上
5	西欧の子供観 －すべての子供の学校	1. 子供と学校 2. すべての子供の学校 3. 宗教と技術	同　　上
6	西欧の子供観 －子供の発見	1. エミール 2. 発見の内容 3.「エミール」以降	同　　上
7	西欧の子供観 －タブラ・ラサ	1. 白紙の運命 2. 学校教育の展開 3. 測られる子供	同　　上

回	テーマ	内容	担当講師 (所属・職名)
8	西欧の子供観 －科学の眼	1. 行動主義の子供観 2. コンピュータ 3. 現代教育の子供観	舘　昭
9	西欧の子供観 －小児性欲の発見	1. 第2の「子供の発見」 2. 子供の性の特質 3. 子供期の文化性	同　上
10	西欧の子供観 －自我の成長	1. 性欲論の受難 2. 心の構造 3. 自我の発達段階	同　上
11	生命の始まり －胚、胎児へのまなざし	1. 生殖テクノロジー 2. 生命の始まりに関する議論	広瀬洋子 (放送教育開発センター助教授)
12	生命の始まり	－日本の文化の中での位置づけ	同　上
13	生命の始まり －生殖技術の文化的背景	1. 生殖テクノロジーはキリスト教の鬼っ子 2. アメリカの代理母産業	同　上
14	生命の始まり －父は母、家族、母性	1. 父と母「血」 2. 産む努力と産まない努力 3. マリアの冒瀆	同　上
15	子供観の考察		舘　昭

＝生徒指導の実際＝（R）

〔主任講師：内山喜久雄（日本赤十字看護大学教授）〕

全体のねらい

生徒指導の目標は生徒の資質・能力・可能性さらには人間性を高めることにある。そのための実際的方策として、まず、生徒理解の諸方法を述べ、次いで、無気力その他の諸問題の解決と、自発性その他の望ましい態度・パーソナリティの育成とをはかるための具体的アプローチを多くの事例をまじえて、体系的に解明・詳述する。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	生徒指導	生徒指導には生徒の可能性の伸長などの積極的側面と問題の解決などの消極的側面とがある。この両者を達成・実現するための重要な課題としての自己指導、集団指導について概観・検討するとともに、生徒指導の体制・組織・役割等について考える。	内山喜久雄（日本赤十字看護大学教授）
2	生徒をどう理解するか ―その理論的背景	生徒が①自己や社会をどのように認識しているか、②そうした意識にはどんな欲求や衝動が隠されているか、そして③社会的存在としてこれらをどう統合し、行動しているか、という三つの側面を理解するための方法論を取り上げ、その理論的背景を考える。	茨木俊夫（埼玉大学教授）
3	生徒理解の方法Ⅰ ―観察法・面接法	生徒理解にとって基本的な方法ともいえる観察法と面接法が取り上げられる。生徒理解におけるそれぞれの方法の利用のしかた、長所・短所、留意点などについて説明する。同時に、生徒指導の技法の基礎ともなるものであるので、その点についても簡単に述べる。	高野清純（筑波大学教授）
4	生徒理解の方法Ⅱ ―テスト法	テストは学校における不可欠の評価法と考えられるが、ここでは特に標準検査を取り上げる。標準検査の具備すべき条件、種類、特徴などについておもに説明するが、近年問題点が指摘されているので、利用上の留意点を考察し、適切な利用法について述べる。	同上
5	生徒理解の方法Ⅲ ―事例研究法	観察法、面接法、テスト法などは、いわば生徒理解のための技法にすぎない。それのみによっては、真の生徒理解に到達することは不可能である。それらの資料を分析・統合してはじめて生徒理解が可能となる。ここでは、そのための方法である事例研究法を取り上げる。	同上
6	性格・行動は変えられるか	教育的な営みは、それを行うことで子どもの可能性が大きく膨らみ、彼らは変わっていくのだという信念をもって初めて可能となる。本章では、子どもたちの性格や行動がどのように変わりうるかという点を確認し、子どもたちへの働きかけの意味について学習する。	坂野雄二（早稲田大学助教授）
7	無気力の克服 ―帰属療法	無気力の問題は、子どもの学習や生活上の重大な問題である。本章では、無気力の原因を探るとともに、無気力を克服するための有効な指導方法である「帰属療法」について、その原理と実際を学習する。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	引っ込み思案の解消 ―主張訓練法	引っ込み思案を4種の型（タイプ）に大別し、それぞれについて考察するとともに、この問題の典型ともいうべき非主張・弱気型の生徒への指導法として主張訓練法を取り上げ、ケースを通してその具体的技法を学習する。	内山　喜久雄
9	不安の克服Ⅰ ―系統的脱感作法	生徒のすべての問題の基本的原因ともいうべき不安の意義について解明するとともに、その克服のための代表的技法として、系統的脱感作法を紹介し、発語不安のケースを通してその実際的手法を理解し、習得する。	同上
10	不安の克服Ⅱ ―セルフコントロール法	指導する教師と指導される生徒という二者関係を脱却し、生徒が、自分の情緒や行動、考え方を自分でコントロールできるようになることが生徒指導の本来の目標であるかもしれない。本章ではそうしたセルフコントロールの目的、方法、実際について学習する。	坂野　雄二
11	登校拒否の指導 ―行動・態度形成法	登校拒否の指導は組織的・系統的に行われなければならない。校内組織を機能的に活用し、家庭との連携を密にしていくことと同時に、専門的な指導技術を学ぶ必要がある。「行動・態度形成法」の具体例を取り上げ、実践的な面から考える。	茨木　俊夫
12	反抗・暴力の指導 ―コーピングスキル学習法	種々のタイプの反抗とその反社会的表出としての暴力について考察するとともに、これに対する一つの効果的技法としてのコーピングスキル学習法について具体的に紹介する。末尾に他技法を援用しながら本技法を適用して奏功した校内暴力の1事例を付した。	内山　喜久雄
13	自発性の開発 ―カウンセリング法	生徒の自発性を最大限に発揮させるには自己理解を深め、自分らしくふるまえるような社会化された方法を身につけていく必要がある。そのための具体的方法としてカウンセリングがあるが、ここでは「学校カウンセリング」の具体的方法を取り上げる。	茨木　俊夫
14	対人関係の改善 ―ロール・プレイング法	学校生活で教師や友人との関係が楽しくて安定している生徒は意欲的に行動できるが、生徒が最も深刻に悩むのも対人関係の問題である。最近、注目されているロール・プレイングの技法を対人関係の改善に活用するための具体的方法を取り上げる。	同上
15	望ましい学習態度の形成 ―シェイピング法	本章では、望ましい学習習慣をどのように形づくることができるかについて、「シェイピング」と呼ばれる指導法の原理を探り、それが実際にどのように行われ、どのような効果をもっているのかを学習する。	坂野　雄二

＝ 生徒指導の理論 ＝（TV）

〔主任講師：武藤孝典（信州大学教授）〕

全体のねらい

生徒指導とは、児童生徒に自分自身についての理解を深めさせ、自己指導の力を育成する教育的いとなみである。学校の協同的生活場面や学習場面の指導を充実するためには、教師は生徒指導観を深く理解せねばならない。生徒指導観の意義、それにもとづく望ましい実践の姿、問題事象への対応の仕方などについて学んでいきたい。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	生徒指導の意義	生徒指導とはガイダンスの訳語として成立し、児童生徒の自己指導の力を育成する教育的いとなみである。この生徒指導観のもとで教育実践がどのように運営されているか、学習指導要領と関連づけながら概説する。	武藤孝典（信州大学教授）
2	児童生徒の理解	児童生徒一人ひとりを理解し、的確な指導の手だてを見いだすためには、一人ひとりの子どもの自己概念がどのように成立しているかを、正しく理解することが大切である。そのための方法を解説する。	同上
3	集団指導の方法	児童生徒相互の人間関係を改善し、それぞれの子どもの健全な生活態度を育成するためには、学級集団内の相互作用を活用することが大切である。学級集団指導の方法を実際の指導例に即して解説する。	同上
4	学級づくり・小学校中学年	学級を単位として学級や学校の生活の充実と向上を図る活動を「学級活動」（学級づくり）という。小学校中学年の学級づくりにおいて人間尊重の生活感覚を育成することは、その後の子どもの成長にとって大切な意義をもつことを解説する。	同上
5	学級づくり・小学校高学年	いじめや仲間はずれ、あだな、男女の対立など学級内にはさまざまの問題が潜在している。学級活動のなかで子どもたちがこれらの問題に取りくみ、問題をみずから解決する経験をもつことの大切さについて考察する。	同上
6	学級づくり・中学校	いじめや校内暴力など、今日の中学校は生徒指導上のさまざまの問題をかかえている。それらの問題に単に対症療法的に対応するのではなく、日常の学級づくりの実践を地道に実現することが、いかに大切であるかについて考察する。	同上
7	生徒指導と道徳教育	道徳教育の実現にあたっては、道徳指導計画の学級化が大切である。道徳指導計画の学級化の視点のもとでは、道徳指導の主題の設定は、それぞれの学級の個性的成長過程に即しながら行われる。このような視点の大切さについて考察する。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	生徒指導と学習指導	生徒指導観のもとでは、学級活動など教科外の領域において児童生徒の育成を行うのみではなく、この教育観を学習指導の領域に浸透させることにより、カウンセリングマインドにもとづいた学習指導を実現することができる。これらの点について考察する。	武藤孝典
9	登校拒否分類と診断	登校拒否の直接のきっかけは、小学生では「親子関係をめぐる問題」がきわ立って多い。登校拒否の原因については、最近とらえ方が多様化しつつある。ここでは、登校拒否の原因をさぐり、子どもの社会性をいかに発達させるかという側面から考察を行う。	中野良顯（筑波大学助教授）
10	登校拒否治療と予防	登校拒否の直接のきっかけは、中学生では「学業不振」「友人関係をめぐる問題」が多くなる。ここでは、望ましい市民的社会的能力の育成という視野のもとで、社会技能訓練の可能性を学習場面や生活場面のなかに求めていく。	同上
11	いじめ	いじめに関する最新のデータをふまえて、その問題の深刻さと、その問題が投げかける後遺症的事実に着目しつつ、いじめの背景を考察し、教師が行なうべき当面の指導と長期的指導のあり方について解説する。	小林剛（福井大学教授）
12	校内怠学—発生の背景と教師の指導原則	校内怠学の多様な実態を明らかにした上で、そうした状況が生まれる背景を、学校や教師の側、家庭や両親の側、その他の側から分析し、そうした生徒に対する教師の指導を、個別的指導、集団的指導に分けて解説する。	同上
13	非行	少年はなぜ非行化するのか、その背景について考察する。学校・家庭・地域は、少年の非行化に関してどのような脈落のもとに関連しあっていくのか、これらの点について実証的に解明する。「見えてきた時ではもう遅い」—これは少年問題のキーフレーズである。	清水賢二（科学警察研究所防犯少年部環境研究室長）
14	高校生徒指導(1)	高校の序列化がいかに生徒の生活行動にひずみをもたらし、高校の生徒指導にとっていかに困難な条件をもたらしているか、高校における生徒指導の実践例に即して考察する。	武藤孝典
15	高校生徒指導(2)	高校のホームルームは、高校における生徒の基礎的な生活集団として編成される。このホームルーム活動の充実と向上を図ることによって、どのように生徒の生き方の指導を実現できるか、実践例に即して考察する。	同上

＝ 幼 児 教 育 ＝ （R）

〔主任講師：萩原元昭（群馬大学教授）
主任講師：高橋恵子（聖心女子大学教授）〕

全体のねらい

この講義の特徴は、幼児教育を教育学と発達心理学の両面からとらえてみようとするところにある。現代の幼児教育にとって重要な思想、方法、実際について述べるだけではなく、教育の対象としての幼児の心理的な性質を知ることで、より一層関心と理解を広め、深めることをねらいとする。

1章では講義のオリエンテーションとして幼児教育とはなにかを述べる。2～8章では幼児教育という点からみて必要と考えられる幼児の発達の心理について述べる。9～11章では幼児が成長につれて通過する集団として、家族、遊び仲間、保育所、幼稚園の諸問題を扱う。12～14章では、幼児教育の思想、内容、方法、評価について述べ、最終章では、幼児教育と学校教育、家庭と地域の連携の問題にふれて子どもの成長における幼児教育の意味を考える。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	幼児教育とはなにか	幼児教育をここでは、前半はコミュニケーション、知能、自己、対人関係など幼児の発達側面を前半に、後半に、家族、遊び仲間、園（幼幼園・保育所）など通園集団の関わる問題についてさらに幼児期の教育の意義や内容、方法、評価についても論ずる。	萩原元昭（群馬大学教授）
2	発達とはなにか	教育、しつけを考える上での鍵となる概念のひとつが発達である。発達は長い間、子どもが一人前のおとなになることとされきた。が、近年この考えかたでよいのかという再検討がされ始めた。この章では、発達をどのように考えるのがよいかを論じる。	高橋恵子（聖心女子大学教授）
3	コミュニケーション能力の発達	人は社会の中で生活してはじめて人となる。人は人から知識を受継ぎ、分かつ、あるいは、人とくらす楽しさを知って、人を愛し、人のためになりたいと願う。こうして人間は社会を造ってくらしてきた。この章では、乳・幼児の人との交渉の能力の成長について述べる。	同上
4	知的能力の発達	最近の乳・幼児の知的能力の発達についての研究は子どもがいかに能力が高いかについての発見に彩られている。新しい研究は、子どもは何も知らないとか、でたらめに答えているとか、考える力がまだないとかいう、これまでの見方を改めさせ、子どもの知的な能力の特徴を明らかにしている。この章では、子どもの真の幸せのためには、幼児期で大切にしたい能力とはなにか、また、そのためにおとなのするべきこと、してはいけないことはなにかについて考えてみる。	無藤隆（お茶の水女子大学助教授）
5	自己の発達	それぞれの人がもっともその人らしくあることを保証する社会を実現したいというのが現代のわれわれの願いだといってよいであろう。その人らしくいられる状態にある時にもっとも人間は幸せを感じるのだと、人類はこれまでに大きな犠牲を払って学んできた。この"その人らしさ"が、自己である。この章では、自己がいかに幼い時から確実に成長しようとしているか、それを保証するためにおとなはなにをすべきかを論じる。	高橋恵子
6	人との関係の発達	子どもはたくさんの人々に囲まれてくらしている。乳児が初めに愛着を持つのは母親であることが多い。母親に依存して生命を守られ、また、可愛がられることで、人間とはいいものだと知る。やがて、母親だけでは満足せずに、母親を安全地帯と頼みながら新しい人々との関係をもつようになっていく。この章では、依存から自立への変化とはどのようなものかを考える。	同上
7	社 会 化	子どもが社会の要求を受入れながら、社会のメンバーとなっていくことを社会化という。これまでの社会化の考え方では、社会が子どもに影響を与えるという、"社会→子ども"、あるいは、"おとな→子ども"という一方向の流れが強調されすぎてきた。しかし、子どもといえども人間は一方的に影響されてしまうようなことはない。新しい研究をもとに、子どもが社会的な影響をどのようにうけとっていくのかについて述べる。	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	現代社会の子ども	おとなの社会が著しく変るにつれて子どもをとりまく社会も急変している。それをもっともよく現しているもののひとつが子どもをとりまくマス・メディアである。テレビ、マンガ、テレビゲーム、パソコンなどを例にとり、現在社会が幼児の生活の中でどのような意味をもっているのか、それが発達に及ぼす影響はどのようなものかを考える。	無藤　隆
9	幼児期の家族と家庭環境	幼児にとって家庭とは、第1次的社会化の機能と、精神安定の機能を備えた最初の場である。共働きやシングルペアレントなど、幼児をめぐる家庭理論の動向に止目しながら、家庭の意義について考える。	萩原元昭
10	幼児の遊びの概念と近所遊び	幼児にとって遊びとはどんな意味をもち、実際にどのような遊び特に、家の近くで集団で遊ぶいわゆる近所遊びに焦点をあて、全国調査の結果にもとづきながら、幼児の遊びの重要性、方法、規定要因などについて考察をすすめたい。	同　上
11	幼稚園・保育所の源流と課題	保育所・幼稚園は、幼児にとり小学校に入学する以前のいわば就学前機関として、家庭や親から精神的に離乳して入る初めての集団で、幼稚園は幼稚園教育要領、保育所指針に基づいて、実際に保育を行っている。幼保一元化や園児減少問題にもふれる。	同　上
12	幼児教育思想の系譜	近代幼児教育の夜明けを思想的に支えてきた内外の思想家例えばロバート・オーエン、フレーベル、モンテッソーリ、ピアジェ、倉橋惣三らの至譜をたどりながら説明してゆく。	林　信二郎 （埼玉大学助教授）
13	幼児教育の内容	幼児期におけるいわゆる見えない幼児教育の特質と、家庭で培われたヒドウン・カリオユラムとの関係、園保育のカリキュラムの編成の原則や内容と方法、保育形態との関連、遊びと学習とのかかわり方などについても、考えてみたい。	萩原元昭
14	幼児教育の方法	幼児教育とりわけ、幼稚園や保育所の保育方法の特質と問題点さらに、保育内容と方法との関連、さらに園保育の評価方法などについても考案をすすめる。また、保育のための方法としては、保育形態やクラスなどについてもふれてゆく。	同　上
15	園と家庭・小学校との連携	幼稚園や保育所が、時間的原利的には、小学校との連帯、さらに、空間的には家庭や地域との連携の重要、その具体的な実例をあげて考察したい。	同　上

＝ 情 操 の 教 育 ＝ （R）

〔主任講師：片岡徳雄（広島大学教授）
主任講師：高萩保治（東京学芸大学教授）〕

全体のねらい

現代社会の非人間的なゆがみの多くは、人間の情操の貧しさから来ている。今こそ、豊かな情操をその育成に期待されるところが大きい。ここでは、この重要な情操の形成と教育について、子ども文化や子どもの生活から考える。とくに、子どもの読み物や音楽や遊びの領域をとりあげ具体的に考えてゆく。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	子ども文化と子どもの情操	子ども自らが音楽するとは、どういうことか。子どもの文化とは。子どもの情操とは。そして、子どもの美的情操とは。文化と情操の一般論から考える。	片岡徳雄（広島大学教授） 高萩保治（東京学芸大学教授）
2	子どもの遊び － 今と昔 －	情操の原点は遊びにある。今と昔の遊びの特性を比較する中で、情操と遊びとの関連を明らかにし、豊かな情操や感性の育ちに対して果たす遊びの役割を検討する。	森 楙（広島大学教授）
3	遊びと授業	「遊び」と「授業」はどのような関係があるだろうか。その理論と実践例をたどりながら、遊びと授業の情操（教育）上の位置について考える。	野村幸治（広島大学助教授）
4	ごっこ遊びからクリエイティブ・ドラマへ	ドラマづくりの過程をたどることで、情操教育におけるドラマの教育的意義について考える。	倉田侃司（広島文教女子大学教授）
5	幼児の本	子どもが最初に出会う本、絵本をとりあげる。幼児にとって絵本とは何か、情操を育てる絵本とはどのようなものか、そして子育てに絵本を生かすにはどうすればよいかについて考える。	植田ひとみ（広島文教女子大学助教授）
6	子どもの本 － 今と昔 －	子どもの本は、歴史の上でどのように現れているか。日本と外国に分けて、考察する。近世はどうか。ジャンル別に、それぞれの時代を考えてみる。	須田康之（比治山女子短期大学助手）
7	子どもの読書生活 I － その影響 －	いまや子どもの情操の基本的トーンは、学校教育よりも、アニメや劇画など映像的マス・メディアを中心とする大衆文化によってかたちづくられているのではないか。ここでは現在の子どもたちの情操の特徴を、子ども大衆文化の内容と関連させながらみていく。	片岡徳雄

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	子どもの読書生活Ⅱ －その方法－	本を読まない子どもが増えてきている現状の中で、情操を育てるための子どもの読書の導き方や本の選び方を、発達の特質に応じた適書を選び読ませるという観点から具体的に考える。	大槻和夫 （広島大学教授）
9	文学の授業	文学の授業の現状は、情操を育てるという観点からみた場合、どういう問題があるか。その問題を克服するためにはどうすればよいか。教材「わらぐつの中の神様」を例にして考える。	同上
10	子どもにとって音楽とは	子どもの発達や指導法に焦点をあてて音楽学習を考察し、音でコミュニケートするという音楽の原点に帰って、学ぶ音楽から楽しむ音楽へと創造的な展開について考える。	高萩保治
11	明治・大正の子どもの音楽（うた） －唱歌教育をとおして－	西洋のメロディーを借りて出発した唱歌は、時代とともに子どもの歌として位置づいていった。それらを言文一致の唱歌、文部省唱歌、童謡などを通して考えてゆく。	澤崎真彦 （東京学芸大学助教授）
12	昭和の子どもの音楽	昭和の初めから今日までの時期における子どもの歌について、マス・メディアと学校の二つの場から概観し、それらの歌が、時代の状況の中からどのように生まれてきたかを考える。	中嶋恒雄 （山梨大学教授）
13	現代の子どもの音楽	現代の子どもの歌を、音楽構造の上から分析し、それらの歌が、子どもたちの生活とどのように関連しながら取り入れられているかを考える。	同上
14	子ども大衆文化 －アニメ・劇画を中心に－	子どもらは氾濫するマスコミ文化の真っただ中で生活し、多くの面で影響を受けている。ここでは、子どもらの情感や感性に特に影響を与えるマンガを中心に、その価値観を探る。	森楙 西田忠男 （島根大学講師）
15	子どもの遊びと自己実現	現代の社会と子どもの病理の多くは、子ども文化と子どもの情操のゆがみから来ている。これからの社会の形態的・価値的変容を予想しつつ情操教育の将来について考える。	片岡徳雄 高萩保治

＝青少年文化＝（TV）

〔主任講師：深谷昌志（静岡大学教授）
〔主任講師：門脇厚司（筑波大学助教授）

全体のねらい

青少年文化を、前半は子ども文化、後半は青年文化とに分けて考察を進めていく。文化論なので、放送教材の中ではロケなどを多用し、印刷教材とデータを紹介する形をとる。したがって、放送と印刷の教材をあわせる形で学習を進めて欲しい。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	青少年文化のとらえ方	青少年文化を、青年文化と子ども文化とに分け、それぞれの文化の特性を明らかにする。そして、青少年文化の現状を概観する。	深谷昌志（静岡大学教授）
2	玩具の変遷	さまざまな玩具を紹介しながら、子どもの心を豊かに育てる玩具はどういうものなのか考えていく。また、現代の玩具がそうした条件を備えているか検討する。	同上
3	遊びの機能	子どもの人間形成にとっての遊びの意味を発達段階をふまえて考察する。続いて「群れ型」から「孤独型」へ、遊びが変遷したことにより、子どもの発達にどのような歪みが生じたのかを掘り下げていく。	同上
4	テレビとのつき合い	テレビとのふれ合いを、子どもたちはどうとらえているのか。子ども番組の変遷をふりかえりつつ、子どもにとっての望ましい視聴態度とは何かを検討していく。	同上
5	仲間集団のゆくえ	現代の子どもはギャング集団を失い、友をもたずに成長していく。そうした現状をふまえ、仲間集団の中で子どもたちが身につけたものは何なのかを考えていく。	同上
6	子どもの金銭観	豊かな社会の中で子どもたちは成長していく。そうした子どもたちの金銭観を子どもの持物などと関連させて考えていく。	同上
7	性差をめぐって	おとなの間では、性差の少ない社会への動きが顕著だが、子どもの間では、性差が拡大する傾向をたどっている。ここでは、少女文化の性質を、女子マンガや交換日記、人形などを手がかりとして掘り下げていく。	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	子ども文化の再生	子ども文化を再生するために、どういう方策が必要なのかを、遊び場や児童公園などと関連させて考える。あわせて、子どものすこやかな成長を保証する環境作りの必要性を考えていきたい。	深　谷　昌　志
9	青年期と青年	青年文化を理解するには、その担い手たる青年集団のさまざまな特性を理解しておく必要がある。そこで、まず青年期に特有の身体的・精神的特性をみる。	門　脇　厚　司
10	青年文化論の成立	青年文化を学問的な分析の対象としはじめた時代的背景と青年文化論にみられる代表的な見解を紹介する。	同　上
11	青年文化とその発生条件	青年文化の一般的な特質を整理し理解につとめると同時に、そうした青年文化があらわれる時代的・社会的特徴にもふれる。	同　上
12	現代社会と若者文化の変容	現在のわが国の青年文化を生み出してきた戦後日本の社会的特徴をみつつ、今日の若者文化がどのような質的変化をとげてきたかについて言及する。	同　上
13	現代の若者文化・1	―浮遊文化の諸相 今日の若者文化の1つの特徴を“浮遊文化”ととらえ、そうした文化を支える青年の意識や価値観を紹介しつつ、海外との比較もまじえその実態を報告する。	同　上
14	現代の若者文化・2	―閉塞文化の諸相 今日の若者文化のあと1つの特徴を“閉塞文化”ととらえ、このような文化を生む若者の気分や生活を考えつつ、海外との比較もまじえその実態を報告する。	同　上
15	青年文化の展望	社会が大きく変わりつつある今日、青年文化は今後どのような方向をたどるのか。強化説と消滅説の2つの見解を軸に、若者文化と若者の将来を展望する。	同　上

＝地域社会と教育＝（ＴＶ）

〔主任講師：岡崎友典（放送大学助教授）〕

全体のねらい

教育と地域社会の関係を、教育の展開する場と教育の対象・内容といった二つの側面から、具体的な教育活動をとらえるとともに、地域社会そのものの教育機能と、教育の地域社会形成に果たす役割について考察する。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・職名）
1	地域社会の変動と教育	現代日本の地域社会がどのような特徴をもつか、また教育とどこでかかわるかについて、戦後日本の地域開発政策の展開過程に沿って素描し、「地域社会と教育」研究上の課題を提示する。とくに人口地域分布変動に焦点を合わせ、教育現象の地域差をとらえる。	岡崎友典（放送大学助教授）
2	地域社会学と教育社会学	地域社会の分析方法を地域社会学の成果に学ぶとともに、教育社会学における地域教育研究の歴史をレヴューし、現代日本の地域社会の再編と教育の再編をめぐる課題をさぐる。また、学校の成立・再編の過程、学校と地域の連携のあり方を考察するための枠組を提示する。	同上
3	学校の成立と地域	社会的機関としての学校が地域に成立する過程を、新潟県内の松之山を中心に考察する。	新井郁男（上越教育大学副学長）
4	教育内容と地域社会	教育内容の中に地域をどのような形で取り入れるか。生活をどのように教材化するか。この問題をコミュニティ・スクールや松之山の小学校を中心に考察する。	同上
5	子どもの校外生活	かつての子どもの校外生活といえば遊びの世界であったが、最近の子どもの校外生活は大きく様変わりしてきた。一体に子どもの校外生活はどのような生活領域から成り立っており、それがどのように変化してきたのか、そしてその理由は何なのかについて考える。	住田正樹（九州大学助教授）
6	学校と地域社会組織	学校と地域社会とが協力して子どもを教育することが今日の重要課題となっているが、なぜ学校と地域社会とが協力・連携する必要があるのかを考える。また、子どもの教育にかかわる地域社会組織の具体例としてＰＴＡを取り上げ、活動上の問題点について考察する。	同上
7	教育環境Ⅰ　－自然－	環境としての自然を教育実践にどのような形で取り入れることができる。上智大学の学生サークル「四本足のにわとり」の、栃木県栗山村での活動を通して、人間の成長・発達に自然が果たす役割を考察する。	岡崎友典

回	テーマ	内容	担当講師 (所属・職名)
8	教育環境Ⅱ　－大都市－	地域特性に着目して、教育環境としての社会を「大都市」と「地方」に二分して考察する。大都市の居住区の子どもの生活実態と教育施設を東京都板橋区の大規模集合住宅「高島平団地」と港区青山にある広域施設「こどもの城」をモデルに学習する。	岡崎友典
9	教育環境Ⅲ　－地方－	大都市生活圏域に対する地方生活圏域といった形で「地方」をとらえ、その地理的空間で展開される住民の活動がもつ教育機能を長野県佐久地方の望月町の町民まつりと小海町の郷土芸能の伝承形態を取り上げて考察する。	同上
10	教育機会の地域性	教育の機会とくに学校教育への就学機会が、地域によってどのように異なるか。高等学校および大学進学率の地域間比較、進学に伴う地域間移動の実態などを歴史的に明らかにし、教育機会の地域差（県間格差）の規定要因を、全国的な視野から考察する。	吉本圭一 (日本労働研究機構研究員)
11	就職機会と地域	地域で養成された人材が、学校卒業後どのような進路をたどるか。長崎県島原半島の高等学校の事例を手掛かりに、学卒者の職業選択、地域選択の動向を示すとともに、労働市場における職業紹介、求人活動と地域の産業構造とのかかわりについて考察する。	同上
12	人材の移動と地域	就職・進学に伴う人材の地域間移動について、地域社会への適応・同化といった視点から学習する。沖縄県の高等学校の事例を通して、若者の職業・地域希望、地元企業への雇用慣行、県内県外就職の実態、更に進路指導上の課題について考察する。	同上
13	地域住民の文化・学習活動	急激な社会の変動、その一方での自由時間の増大のなかで、人々の精神的な豊かさを求めての文化的欲求は高まり、生涯学習活動が各地で盛んに行われるようになった。そうした地域の人々の生涯学習活動の実態を探るとともに今後の生涯学習の活動のあり方を考える。	住田正樹
14	国際化と地域社会	地域社会のなかで国際化が、どのような形で進行しているかを、地域住民の国際化といった視点から考える。国際文化観光都市松江市での行政の取組み、ミッションスクールの教育実践などの事例を通して学習する。	岡崎友典
15	地域社会の形成と生涯学習	全体のまとめとして、地域社会を場面として展開す生涯学習活動が、変動する日本社会の教育態勢のなかでいかなる位置を占めるか、また地域社会の形成にどのような役割を果たすかについて、東京都臨海部開発事業の一貫、中央区佃島居住区再編成の事例を通して考察する。	同上

＝ 生 涯 教 育 論 ＝ （R）

―生涯学習社会の発展をめざして―

〔主任講師：麻生　誠（大阪大学教授）〕

全体のねらい

生涯教育理念は、わが国でも漸次、教育政策や教育制度、教育組織、教育課程などに影響を及ぼすようになった。だが、生涯教育は、教育の自由と平等、学習と教育との間の矛盾に代表されるような二律背反的要素を内に含んでいる。このような生涯教育の理念と現実を今日の教育状況と関連させながら、学習者の立場に立って新しい生涯教育学を構想してみよう。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	生涯教育の理念	生涯教育は、人々の自己実現を達成させるために、人々の全生涯を通して人間的、社会的、職業的な発達を援助する教育の仕組みである。ややもすれば抽象的な言葉の遊びに終わってしまう恐れのある生涯教育理念を、総合的・統一的な観点からとらえ直してみよう。	麻生　誠（大阪大学教授）
2	生涯教育の社会的背景	「人間は生涯にわたって学ばねばならぬ」ということは古くから言われてきた。この意味で、生涯教育は古き理念である。しかし、最近生涯教育論が提唱されてきたのは、この古き理念の新しい意義を要請する社会的条件が発生してきたからである。このことを考えてみよう。	同　上
3	生涯教育と学習要求	生涯教育は、何よりも国民の生涯にわたる学習要求を前提としている。だが、あらゆる人間が生涯教育を享受しうる継続的な学習要求を持っているものであろうか。この問題を考えてみよう。	同　上
4	日本の生涯教育のルーツを探る	その生涯教育理念は、それぞれの社会や国によってニュアンスが異っている。その理由の一つは、国々の文化的、教育的伝統が異っているからである。わが国の生涯教育のルーツを近世の在野の儒者、中江藤樹の思想と江戸時代の教育書に探ってみよう。	同　上
5	教育政策のなかの生涯教育	1965年、ユネスコにおいてはじめて唱えられた生涯教育論も、20数年の歳月を経て、人間にたとえれば成人に達する齢を重ねたことになる。それはわが国の教育政策に、もろもろの影響を与え続けている。だがその成果たるや未だしの感が深い。生涯教育論が、わが国の政府や地方自治体の教育政策のなかに、どのような影響を与え、どのような成果をもたらしたかを明らかにしてみよう。そして生涯教育の理念と現実のギャップを探ってみよう。	同　上
6	生涯教育と放送利用	放送は、生涯教育機会を社会に拡散させるのに大きな力を持っている。しかしまた、それは教育上無視できない限界もあわせ持っている。これら限界を克服し、放送を生涯教育に生かす手だてを考えてみよう。そのなかで、最近のニューメディアの役割もあわせて考えていこう。	同　上
7	生涯教育を欧米に見る(I) ーアメリカの生涯教育ー	欧米の生涯教育政策・制度を概観しながら、生涯教育の教育政策や教育制度上の課題を考えていこう。まず、生涯教育の先進国といえるアメリカの生涯教育の特徴をみてみよう。	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
8	生涯教育を欧米に見る(Ⅱ) ースウェーデンの生涯教育ー	福祉国家として名高いスウェーデンの生涯教育は学ぶべき点が多い。高等教育の開放、北欧の伝統的な成人教育としての学習サークル、有給教育休暇や奨学金政策などの種々な学習保障活動をみてみよう。	麻生　誠
9	生涯教育を欧米に見る(Ⅲ) ーソビエトの生涯教育ー	社会主義体制下の生涯教育の事例としてソビエトをみてみよう。そこでは、政府主導型・官僚制・画一性などのデメリットが生じやすい。これらがいかに克服され、どのような社会主義的人間類型が形成されているかをみてみよう。さらに、最近のペレストロイカの動きが、ソビエトの生涯教育をどのように変えていくか予想してみよう。	同　上
10	生涯教育の谷間 ー夜間中学に学ぶ人々ー	わが国は高学歴社会となり、国民の平均的学歴水準は大きく上昇した。高学歴者は、生涯学習にも熱心だし、生涯教育の機会も高学歴者向けのものが多いのが実情である。このような傾向のなかで、低い学歴の者や、義務教育未修了者などの「教育的不利益者」の問題が忘れられていないだろうか。この問題を考えてみよう。	同　上
11	生涯教育の体系と行・財政問題	生涯教育論には、行・財政論が欠けていると批判される。誰でもが「何時でも何処でも学習できる」という生涯教育システムの行・財政的基盤を探り、生涯教育システムを確立するには、行政がどう変わるべきかを検討してみよう。	同　上
12	地域社会と生涯教育	私たちの生活は、私たちの生活圏としての地域社会を基盤として行われている。このような地域社会のなかで、地域住民に対してどのような教育機会が提供され、住民の学習要求をどのように充足させているのかを、一つの地域事例を取り挙げて考えてみよう。そして、地域社会の生涯教育を回復させる道を探ってみよう。	同　上
13	発達課題と生涯教育	人間の発達過程のそれぞれの時期に現れる達成すべき課題を発達課題という。これらの課題を首尾よく達成することによって健康な人格が形成される。現代日本の発達課題とその解決に生涯教育の果たす役割を考えよう。	同　上
14	成人教育学（アンドラゴジー）をもとめて	これまでの教育学は、子どもを対象とするものであった。生涯教育の時代とともに、成人が対象とする教育方法論や教育課程論が必要となる。このような要請に答えて誕生した成人教育学（アンドラゴジー）である。その成果を紹介しよう。	同　上
15	生涯学習社会の可能性と課題	わが国の生涯教育を支える三本柱である学校教育システム、社会教育システム、職業能力開発システムの実態と問題点を明らかにし、それらをどのように組み合わせていけばわが国の生涯教育システムが確立されるようになるか、その可能性を考えてみよう。	同　上

＝教育社会学Ⅰ＝（TV）

〔主任講師：新井郁男（上越教育大学教授）〕

全体のねらい

教育はどこの社会にも、いつの時代にも共通にみられるが、その目的、内容、方法、形態などは異なっている。それは一体何故であろうか。このように教育の本質を社会との関連において考える。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	社会事象としての教育	教育はどこの社会にも、いつの時代にも共通にみられる。しかし、その目的、内容、方法、形態などは異なっている。それは一体なぜであろうか。このような教育の本質を社会との関連において考える。	新井郁男（上越教育大学教授）
2	人間の発達の社会的性格	人間の発達は、単に生物学的・心理学的現象なのではなく、人間が人間として発達するためには、社会・文化の働きかけが不可欠だという意味で、すぐれて社会的現象であるということについて考える。	同上
3	生涯発達と発達課題	かつては発達というと、せいぜい青年期までの問題であると考えられてきた。しかし、発達は人間の一生の課題である。それはどうしてなのか。具体的にどのような課題があるのだろうか。	同上
4	子どもの発達と教育	「こども」はいつの時代にも、どこの社会にも存在するのだろうか。子ども期は近代社会に誕生したものである。子どもの教育は子どもの発見によって発達したものである。	同上
5	青年期の社会的意義	「こども」が「おとな」になるためには、さまざまな体験を試行錯誤的にできる自由が必要である。青年期はそのような意義をもった発達段階として社会的に設けられたものである。しかし、現実はどうであろうか。	同上
6	成人の生活と発達	成人とは何か。成人の生活がなぜ教育と関係があるのか。学習は青少年期にとどまらず成人になっても必要であることを考える。	同上
7	発達の病理と教育	教育過程において非行、自殺、いじめ、登校拒否などさまざまの現象が生まれている。しかし、それは教育が意図した結果ではない。なぜそのような現象が生ずるのだろうか。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	家庭の役割と機能	人間の発達、特に子どもの発達にとって、家庭はどのような役割を期待されているのか。現実には親の子どもに対する関係の違いによって、子どもに大きな違いが生まれてくる。	新井郁男
9	学校の役割と機能(1)	社会化を最も計画的・組織的に行う社会的制度としての学校が、どのような形で発達してきたのか。それは社会の発展とどのような関係があるのか。	同上
10	学校の役割と機能(2)	学校が社会から期待されている機能は何なのか。また学校が現実に果たしている機能は何なのか。その役割と機能との間にはどのようなギャップが生じているのであろうか。	同上
11	地域社会の機能	地域社会もさまざまな形において人間の発達に大きな影響力をもっている。そのことから学校も地域との密接な関連のもとにその教育の在り方を考える必要がある。また、地域社会は子どもにとってのみでなく、青年にとっても、成人にとっても重要な意味をもっている。	同上
12	職業と教育	社会的地位と結びついた職業の選択は、現代社会においては教育の機会均等と密接不可分であるという意味から、「能力に応じた機会均等」について社会学的に考えてみる。	同上
13	余暇と学習	絶えざる学習は、職業のためだけでなく、生活の質全体を高めるためにも必要となっている。それはなぜなのか。どうすれば生活の質が高まるのか。余暇の社会的意味は何か。	同上
14	異文化理解と教育	国際化や価値の多元化のなかで、人間の相互理解の必要性が高まっている。異文化理解の能力を養うにはどうしたらよいのか。外国語が堪能になればそれでよいのだろうか。	同上
15	生涯学習と生涯教育	生涯学習とは。生涯教育とは。生涯学習と生涯教育との関係をどのようにとらえたらよいのか。生涯学習・生涯教育の目的は。このようなことについて社会学的観点から考える。	同上

＝教育社会学Ⅱ＝（TV）

〔主任講師：岡崎友典（放送大学助教授）〕

全体のねらい

現代社会の中で生起するさまざまな教育現象を、社会科学的な方法を用いて、体系的に把握する。教育社会学Ⅰでは、人間の発達段階を、また教育の対象を軸にしたが、教育社会学Ⅱではとくに教育の構造を、「集団・組織および体制の側面」から明らかにする。

教育という営みは、個人の社会化を、社会・集団・組織の目的・役割に即して、意図的に展開するものである。

教育社会学がこれまでに構築してきた理論・方法、とくに社会学を基礎とした手法を用いて、教育の社会的特質を考察する。具体的な教育が展開する集団場面に即して、また全体社会と教育の基本的なつながりを、政治、経済、文化の側面から把える。さらに、現代日本の教育の構図を、現代社会の社会類型に即して、教育態勢として明らかにする。

回	テーマ	内容	ゲスト（所属・氏名）
1	教育社会学の課題(1)	教育現象を社会現象の一つとして、社会科学的にとらえるために、教育の社会的役割を明らかにする。また、教育社会学の研究対象と研究課題について示すとともに、これを具体的な例を通して学ぶためのフィールドとした長野県佐久地区の概要を示す。	
2	教育社会学の課題(2)	教育社会学が、今日の教育現象を、どのような方法で分析するかについて、教育社会学成立の歴史と展開に即して学習する。	清水義弘（東京大学名誉教授）
3	教育社会学の方法(1)	教育現象を科学的・実証的にとらえる方法として、社会調査としての「教育調査法」について取り上げる。(1)では、調査の実際について、教育調査の対象と方法について学習する。	
4	教育社会学の方法(2)	(2)では、統計的調査と事例的調査の調査結果の集計と分析について、統計処理や解釈の方法を含め、具体的な作業を通して学習する。	牟田博光（東京工業大学教授）
5	家族	家族の構造と機能について、歴史的な視点と現代的な視点の両面から、教育に果たす役割を考察する。特に、家族のライフサイクルの変化に焦点をあてる。	庄司洋子（立教大学教授）
6	学校	学校を集団の側面からとらえる。特に、学級の人間形成に果たす役割を、「仲間集団」のもつ教育機能を中心に考察する。	
7	地域社会	地域社会の概念を明らかにし、また、子どもの生活空間としての地域社会について、生活実態、特に放課後の子どもの生活を中心に考察する。	住田正樹（九州大学助教授）

回	テーマ	内容	ゲスト（所属・氏名）
8	職場	職業と教育の関係について、職場で形成される能力について学習する。また、現代青年の職業・職場に対する意識について示す。	吉本圭一（日本労働研究機構研究員）
9	文化と教育	文化の変容が教育のどのような側面に影響を与えてきたか、また与えているかについて考察する。規範としての文化、また下位文化（サブカルチャー）としての学級文化と生徒文化について学習する。	祖父江孝男（放送大学教授）
10	経済と教育	経済発展と教育のかかわりについて、教育計画と教育政策の関連、また教育投資と産業構造の視点から学習する。	牟田博光
11	行政と教育	教育が政策として展開するとき、政治とどう結びつくか、「教育行政と一般行政」の視点から考察する。	小峯勇（帝京大学教授）
12	移動社会	産業構造の高度化に伴う都市化、国際化の進展は、人々の社会的流動性をもたらす。ここでは、教育と移動をめぐる問題について、現代日本の教育課題という視点から考察する。	加藤秀俊（放送教育開発センター所長）
13	管理社会	組織の高度化、情報化の進展、権限の集中化などに伴い、人間の管理化が進んでいる。このような現象が、教育にどのような影響を与えているかについて考察する。	林友三郎（板橋生活と自治研究所代表幹事）
14	高齢社会	人口の高齢化に伴う教育上の課題について、地域社会の生活条件とかかわらせて考察する。特に、「人生80年」の時代に求められる教育について明らかにする。	
15	高学歴社会	変動する社会の中で求められる、教育・学習の内容について、社会全体が高学歴化する実態をふまえ、新たな教育態勢という視点から考察する。また、学歴社会の弊害を除去する方向で、現代日本の教育を再編・再生する可能性をさぐる。	河野重男（お茶の水女子大学長）

＝発達心理学＝（TV）

〔主任講師：宮川知彰（東北大学名誉教授）
主任講師：野呂　正（宮城教育大学教授）〕

全体のねらい

前に発刊された「発達段階の心理学」（放送大学印刷教材）は人生経過における発達を乳児・幼児学童・青年・壮年の6段階に分けて横割的に考察した。これに対して本書は、人間の心理行動の発達を身体・知覚・思考・言語・感情・動機づけ等の側面に分けて縦割的に考察する。両書をあわせて勉強していただきたい。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	発達のなかのからだ	からだが、人の生活にどのようなかかわりをもつのかという問題を、からだと心との関連で、身体像、身体表現、発達加速現象などを通して発達的に考えてみる。	宮川知彰（東北大学名誉教授） 野呂　正（宮城教育大学教授）
2	知覚の世界	人間の乳児は、出生直後から、見ることと聞くこととを始めている。その能力は、さらに年齢を追って、変化し、分化していく。乳児・幼児の知覚の世界を大人のそれとの比較を通して探りつつ、乳・幼児の特質について考えてみよう。	星　薫（放送大学助教授）
3	思考の世界	集中的思考と拡散的思考、洞窟の思考と広場の思考と、思考スタイルを対比しながら、日常の生活の中での人や物とのかかわり方との関係で、思考の発達的特徴を概観してみる。	野呂　正
4	発達のなかの言語	信号体系としての言語、話しことばと書きことば、言語と思考との関係、言語の行動調整機能等の問題を通して、言語が人の全体的な発達過程の中で、どのような特徴を獲得していくか、そしてそれの変化が発達全体にどのような意味をもつのか考えてみる。	同上
5	感情の発達	人の活動にはさまざまな感情が混合し、あるいは先行し、あるいは後続する。そして特定の活動を力づけたり弱めたりしている。また逆に活動が特定の感情を強めたり弱めたりもする。この観点から感情の発達について考えてみたい。	宮川知彰
6	意欲と学習	学習は、単に刺激と反応との機械的な機構をもって展開するのではない。その成立には何よりも学習者の自発的な意欲が必要である。ここでは、いかなる動機づけのもとにどのように意欲が生じ、学習が成立するのかを考える。	寺田　晃（東北大学教授）
7	物とのかかわりあい	人間は、基本的には、物の世界と人の世界という2つの交差する世界の中で発達していく。ここでは、人とのかかわりに留意しながらも、とくに、物の世界とのかかわりに焦点をあて、人がそれをどのように支配していくかということを発達的に概観してみる。	野呂　正

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	人とのかかわりあい	「社会性」とは何か、また「社会性」の発達とはどういうことかを検討して、その発達過程のあるべきすがたを考えてみよう。なお感情と「社会性」とのかかわりについても考え、第5章の「感情と活動」を補充したいと思っている。	宮川知彰
9	愛着と自立	母子相互交渉の発達的意義、「母性」を特徴づけるもの、愛着の発達的変容、愛着の形成がもたらすものについて、人としての「自立」との関係で考えてみる。	野呂正
10	発達のなかの遊び	人間はなぜ遊ぶのか、遊びは人間の発達に何をもたらすのか、遊びの誕生とその発達的変容、遊びと発達の最近接領域の諸問題を検討し、遊びと人の生活とのかかわりについて考えてみる。	同上
11	知能と創造性	知能の概念をめぐる理論を概観した上で、知能を測定する試みとして知能検査がどのように発展してきたか、その有効性と限界などについて考える。最近の知能とパーソナリティーとの統合的理論を紹介した上で、創造性との関係について考える。	柏木恵子（東京女子大学教授）
12	自己意識と人格形成	自己をどのように認知し、自己像、自己概念をどのように形成してゆくかを、乳児から青年にわたって概観する。また、性格がいかに形成されるかを、出生順位と性別との関係についてみ、性格形成のメカニズムについて考える。	同上
13	発達と文化	人間発達における文化・社会の問題について考える。特に、日本の子どもの発達を米国の子どもの場合と対比しながら概観し、その背景にある日米の社会と教育文化 — 家庭のしつけ、学校教育の特質について具体例を挙げながら明らかにしたい。	同上
14	発達診断	発達診断とは何かの定義、発達診断に関する諸理論を説明するとともに、具体的に身体・運動機能、知的能力、人格、学力、適性などの精神的諸機能の発達に関する測定と評価、ならびに発達障害の臨床的な診断・判断の方法と技術、問題点などについて解説する。	寺田晃
15	発達心理学と教育	「学歴社会」がどのように人間形成にかかわってきたかについての調査と実験の結果を提示しながら、発達心理学ないし発達理論が「教育」にいかなる点でどのような貢献をなしうるのかについて考えてみたい。	宮川知彰

＝ 発達段階の心理学 ＝（TV）

〔主任講師：宮川知彰（東北大学名誉教授）〕
〔主任講師：星　　薫（放送大学助教授）〕

全体のねらい

本講では、人生経過を乳児から老年にいたる6段階に分けて、それぞれの発達段階の心理行動の特徴について概述するとともに、養育や訓育、教育上の留意点について考察する。なお、学問としての発達心理学の性格、歴史、研究法、発達と学習の相違、動物と人間の比較、発達障害等の理論的な問題についても概説する。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	乳児	本章では、胎生期および乳児期におけるさまざまな発達的特徴を概観し、この時期にある者に対する養育のあり方を、さぐってみたい。	星　薫（放送大学助教授）
2	幼児	人間の発達段階的特徴は、基本的には教育を介した物及び人との関係の重要な変化の中で形づくられるものであろう。だとするならば、幼児期におけるその変化はどのようなものか。ここでは、「対象的行為」及び「ごっこ遊び」を主軸とした生活に焦点をあてて幼児期の発達的特徴を概観する。	野呂　正（宮城教育大学教授）
3	学童	学童期とは、身体・運動の機能、知的機能、人格・情動、社会的行動などの諸面で、発達的にどんな段階と言えるのだろうか。本講では、このことを、家庭と学校の中で育ちゆく子どもを通して実証的に検討し、あわせて望ましい発達に対する教育の在り方を考える。	寺田　晃（東北大学教授）
4	青年	青年期とは、いつからいつまでのことをいうのか、また青年期の「発達課題」は何かについて概述する。	宮川知彰（東北大学名誉教授）
5	壮年	「精神発達」の過程では、新しい「能力」が獲得されていくと同時にこれまであった「能力」が失われたり減衰したりする。壮年期では若き日の何が失われ、何が新たに獲得されるのだろうか。壮年の社会的責任との関連でこの問題を考えてみよう。	宮川知彰 星　薫
6	老年	老年期の生理的、身体的特徴、知的機能、情動および性格などについての最近の研究を概観し、老年期という時代の特徴を、そこに至るまでの経過を踏まえつつ考えてみる。	星　薫
7	人間と人生	これまで6章にわたって人生各期の特徴を概説してきたが、本章は人生経過を全体として概観し、年齢の推移とともに変化する社会的な地位と関係づけながら、人生経過における人格特性の形成・変化の過程を考えてみよう。	宮川知彰

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	発達心理学とは	発達心理学について、ヨーロッパ特にドイツとアメリカとでは、異なった視野・観点をもっているように思われる。この点を紹介するとともに、発達心理学はいかなる科学であるべきかについて、また発達段階設定の意義について考えてみる。	宮川知彰
9	動物における心理発達	進化の過程において、いかにして心理が発生し、また要素的感覚的心理の段階から知覚的心理の段階へと発展していったかを考察する。その際、動物の生活条件とそこにおける動物の活動に留意して、その心理発達を分析する。	松野豊（東北大学教授）
10	動物と人間	人間に固有の心理は社会的起源をもち、媒介的構造をもち、意識性をもって働く。このような人間心理の生物学的前提は何であろうか。また人間の心理は、どのような新たな生活条件と活動の下に生まれたのかを考察する。	同上
11	発達心理のあゆみ	哲学、教育学、心理学、さらに生物学や医学など、隣接する人文、社会および自然の諸科学の発展とあわせて、発達心理学が科学としていかに台頭し、その体系を整えるにいたったか、本講では発達心理学の今日までのあゆみと問題点とについて具体的に検討する。	寺田晃
12	精神発達の研究法	一つの問題を解決するのには、その問題を解決するのに最も適した方法を創案しなければならない場合が多い。それで発達心理学の領域でも幾多の独特な方法が考案されてきた。本講では、それらのうち基本的なものについて概説しよう。	宮川知彰
13	発達の理論	精神が発達するとはいったいどのようなことを指すのであろうか。そもそも「発達」は何か。この問題について諸家の考え方を概観し、できうれば首肯しうる発達理論を選択するとともに、新しい発達理論の建設の可能性をも考えてみたい。	同上
14	発達と学習	今日の子ども達には、「どうせダメだ」という悲観的な発達観にとらわれている者が多いのではなかろうか。本講では、発達と学習との関連についての諸家の見解を概観して、「やればできる」という積極的な発達観の形成に寄与したい。	野呂正
15	発達と障害	心身の障害とはどのような状態をいうのか。本講では、各種の障害型について、定義、行動特徴、診断の技法等を説明すると共に、教育・訓練・養育の内容と方法、指導上の効果を考察し、総じて発達およびその仕組みに対する障害の位置づけを論じたいと考える。	寺田晃

＝学　習　心　理　学＝(TV)

〔主任講師：小口忠彦（お茶の水女子大学名誉教授）〕

全体のねらい

学習心理学が、人間にとって、どのような役割をしめるか、ということが全体としてのねらいになっている。したがって、「家庭」、「学校」、「社会」がかかわっている。実験的研究、実験的事例などをできるだけ多く取り入れるようにする。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	学習心理学の概要	1. 学習とは 2. 主要な心理現象 3. 学習指導 4. 研究課題	小口忠彦 （お茶の水女子大学名誉教授）
2	学習と発達	1. 経験 2. 形成 3. 成熟	同上
3	学習と目標	1. 意図的学習 2. 偶然的学習 3. 意図的学習と偶然的学習	同上
4	学習の方向	1. 欲求 2. 欲求不満と病理現象 3. 欲求充足と病理現象	同上
5	学習の成立(1) －条件づけ(1)－	1. 新しい行動 2. 古典的条件づけ 3. 道具的条件づけ 4. 反応の連鎖化	同上
6	学習の成立(2) －条件づけ(2)－	1. 人間の水準 2. プログラム学習 3. プログラム学習の問題点 4. 集団の条件づけ 5. 強化説	同上
7	学習の成立(3) －認知構造の変化－	1. 認知構造 2. 認知説 3. 学習説	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	学習と外発的動機づけ	1. 動機づけ 2. 賞と罰 3. 賞と罰の構造	小口忠彦
9	学習と内発的動機づけ	1. 機能的快感 2. 解決の喜び 3. 認知的葛藤	同　上
10	学習と問題解決(1) －模　倣－	1. 問題解決過程 2. 見通し 3. 模倣	同　上
11	学習と問題解決(2) －創　造－	1. 創造 2. 問題をつくる 3. ブレインストーミング 4. 直観と類推 5. 発明と発見	同　上
12	学習と練習(1) －練習曲線－	1. 練習 2. 練習の段階 3. 練習の分配	同　上
13	学習と練習(2) －構造転換－	1. 練習曲線の特徴 2. 極限状態における訓練 3. 他者からの協力 4. 構造転換	同　上
14	学習と転移	1. 経験の効果 2. 転移の条件	同　上
15	学習と個人	1. 個人差 2. 個性 3. いい経験 4. 自己実現	同　上

＝学習心理学の応用＝　（TV）

〔主任講師：小口忠彦（お茶の水女子大学名誉教授）〕

全体のねらい

学習心理学の応用として、学習指導、学習意欲、思考能力、人格形成（人間形成）、心理療法などの諸問題について、要点をのべる。　実験的研究、実験的事例などをできるだけ多く取り入れるようにする。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	学習指導の概要	1. 学習指導と環境 2. 学習指導の概活 3. 学習指導の課題	小口忠彦 （お茶の水女子大学名誉教授）
2	意欲の開発	1. 意欲 2. 内的障壁 3. 外的障壁	同上
3	才能の開発	1. 思考 2. 集中的思考と拡散的思考 3. 分析的思考と直観的思考 4. 体験学習 5. 才能 6. 才能の開発	同上
4	論理的思考	1. 論理的思考 2. 第1段階 3. 第2段階 4. 第3段階 5. 段階間の構造 6. 論理の問題 7. 思考の論理 8. 生活の論理	同上
5	創造的思考(1)	1. 促進する条件 2. 創造の過程 3. 創造の水準 4. 類推と飛躍 5. 妨害する条件 6. 身体と感情の障害 7. 認知と情報の障害 8. 文化と社会の障害 9. 個人の思考の限界	同上
6	創造的思考(2)	1. 教授－学習過程 2. 指導者の条件 3. 集団の創造	同上
7	受容学習	1. 講議法と発見法 2. 受容学習	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	発見学習	1. 発見学習 2. 発見学習の役割	小口忠彦
9	集団主義	1. 自己と他者 2. 集団主義的方法 3. 社会化と個性化	同上
10	生活綴方	1. 自己認知 2. 自己意識と自己認知 3. 自己評価と自己認知 4. 自己洞察と自己認知 5. 生活綴方的方法 6. ヒントの種類 7. ヒントの構造 8. ヒントの活用	同上
11	役割演技	1. 役割演技 2. 役割遊び 3. 自己拡大	同上
12	生涯学習	1. 人生周期 2. 発達課題 3. 人格的活力 4. 人格の生成 5. 成熟と経験	同上
13	自己修復	1. 学習のエラー 2. エラーの発見 3. エラーの種類 4. エラーの訂正 5. エラーの活用 6. 自己修復 7. 自己修復の異常 8. 自己修復の正常	同上
14	学習と心理療法	1. 心理療法 2. 心理療法の種類 3. 精神分析療法 4. 来談者中心カウンセリング 5. グループ・エンカウンター	同上
15	学習と行動療法	1. 行動の療法 2. 学習の種類 3. レスポンデント学習による方法 4. オペラント学習による方法 5. コグニティブ学習による方法 6.学習説	同上

＝教　育　工　学＝（TV）

〔主任講師：坂元　昂（東京工業大学教授）〕

全体のねらい

現実の教育を具体的に改善していくための技術や技法を生み出そうと、教育工学は研究開発を進めている。教育過程の分析、授業の設計；実施・評価・改善、教育メディアやコンピュータの活用、教育情報や教育環境の整備などの各分野で、研究実践の発展はいちじるしい。その現状、考え方、役割、課題を明らかにする。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	教育工学の構造	教育工学の意義、目的、対象を明らかにし、教育工学の歴史、基礎となる関連学問について述べ、教育工学の研究、動向ならびに学会、研修組織の活動等について現状を概説する。	坂元　昂（東京工業大学教授）
2	教育のシステム化	あらゆる教育過程をシステムの観点から総合的、統一的にとらえる。教授学習過程におけるシステム、メディアを活用する際のシステム、学校学級経営のシステム、社会教育、企業内教育のシステムの構造等を概説する。	同　上
3	授業設計	授業をシステムとしてとらえる典型的なモデルを紹介し、授業設計の代表的な流れを解説する。目標分析、教材分析、教材の準備、学習者についての分析、学習集団の扱い、机上授業による授業の設計の修正などについて述べる。	同　上
4	授業技法	名人の授業と教育実習生の授業の違いを比較検討し、効果的な教授方法、授業過程における意思決定の特徴を明らかにする。マイクロティーチングによる教授技法の向上についても述べる。	同　上
5	評価技法	教育における評価は、あらゆる対象についてなされることを明確にし、効果を測定する方法を概説する。主観的な評価法、客観的な評価法についてまとめ、直接授業改善をねらう評価法についても触れる。	同　上
6	学習改善	学習者の学習、思考、認識過程の傾向を明らかにし、学習者の特性に合った指導が重要であることを述べる。学習意欲と学習技能の構造を調べる方法について触れ、学習成績の良い学習者の特性を明らかにする。	同　上
7	教育メディアのはたらき	教授メディアの種類と機能をまとめ、コミュニケーションの特徴を明らかにし、視聴覚メディア、反応分析装置、ティーチングマシン、ニューメディア等の特性と効果的な利用方法について述べる。	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	放送教育	放送教育の意義、長所について述べ、幼稚園、保育所、小学校、中学校、高等学校、大学、社会教育等、放送教育の対象別利用の特徴についてまとめ、放送教育の実態、放送教材制作の過程について解説する。	坂元　昂
9	コンピュータの教育利用1 コンピュータと教育	世界各国のコンピュータ教育の動向について概説し、コンピュータと教育の関わりについてまとめる。各国がコンピュータについて教えることに特に熱心であること、それに対する教育研修に力を入れていることを紹介する。	同上
10	コンピュータの教育利用2 コンピュータによる学習指導の改善	学習指導のためにコンピュータがいかに使われるかを概観し、CAIとCAL、教師の授業の道具としての使い方、学習者の学習の道具としての使い方について解説し、効果的な教材の特性についてまとめる。最新の研究動向としてＩＴＳをとりあげる。	同上
11	コンピュータの教育利用3 コンピュータによる教育経営の改善	授業の準備、学校学級経営にコンピュータが効果的に使われていることを紹介する。文献検索、図書管理、保健データの管理、成績処理、試験問題作成、保管等の現状をまとめる。	同上
12	教育情報通信システム	遠隔教育の意義と機能についてまとめ、光ケーブルによる講義、CATVの利用、遠隔CAI教室、テレラーニング、パソコン通信、通信衛生利用、放送大学などの実例を紹介する。	同上
13	教育環境システム	ＯＨＰやコンピュータが導入されるに伴い、学校施設も変わってくる。コンピュータ教育、オープンスペース等、文教施設の利用の状況、インテリジェントスクールの構想について述べる。	同上
14	教育工学の経済	教育のコストと効果についてＣＡＩや放送大学の例をとりあげ、考察する。教育産業も教科書、機器、材料、教育研修システム等、各方面で展開している。その現状を紹介する。	同上
15	教育変革の担い手	教育工学による教育変革が起こりつつある状況紹介し、行政の積極的対応、教育の条件、情報化社会における能力としての情報活用能力やメディア・リテラシーの特徴とその教育の重要性についてまとめる。	同上

＝ 認 知 と 思 考 ＝　（TV）

［主任講師：中川大倫（信州大学名誉教授）
主任講師：星　　薫（放送大学助教授）］

全体のねらい

認知あるいは認知心理学は、人間の複雑な行動の背景にある内的過程に深くかかわりをもつ。この内的過程は、これまで大きな影響力をもっていた行動主義が、ブラックボックスとして検討をさけた点である。２０世紀後半に至って、情報理論やコンピューターの開発と普及の影響を受けた心理学は、認知に対する関心を強めてきた。このような流れの中で、本講は次のような項目により説述される。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	認　知　と　は	本章のねらい　1.認知とは　2.認知研究の簡単な歴史(1)科学的心理学以前の思想の流れ(2)科学的心理学の始まり(3)現代心理学のかっとう 3.認知心理学の始まり(1)心理学内の動き(2)心理学外からの影響　4.本講の概要	中　川　大　倫（信州大学名誉教授）
2	刺激の受容とパターン認知	本章のねらい　1.刺激の受容(1)適当刺激と刺激閾(2)信号検出理論　2.形の輪郭(1)凝視(2)眼球運動(3)細胞の側方抑制(4)主観的輪郭　3.視覚的パターン認知(1)パンディモニアム・モデル(2)パターン認知とトップダウン処理(3)ボトムアップ処理とトップダウン処理の相互作用　4.情報の表出(1)形の表出(2)文字の表出	同　　上
3	記 憶 の 過 程　Ⅰ	本章ねらい　1.記憶のモデル(1)アトキンソンとシフリンのモデル(2)情報の処理レベル説 2.感覚的記憶(1)視覚情報の一時保存(2)アイコンの持続(3)アイコンは中枢的か末梢的か　3.聴覚情報の一時保存　4.感覚的記憶と日常生活	同　　上
4	記 憶 の 過 程　Ⅱ	本章のねらい　1.短期記憶存在の根拠(1)チャンク(2)臨床的事例(3)ピーターソンらの研究 2.短期記憶と系列位置曲線　3.短期記憶の諸問題(1)情報の符号化(2)情報の検索(3)情報の忘却 4.短期記憶と長期記憶	同　　上
5	記 憶 の 過 程　Ⅲ	本章のねらい　1.記憶とリハーサル　2.リハーサルの種類(1)維持リハーサルと長期記憶(2)精緻化リハーサルと長期記憶　3.長期記憶における情報の型(1)意味的情報と聴覚的情報(2)意味的記憶　4.記憶情報の質的変容	同　　上
6	記 憶 の 過 程　Ⅳ	1.忘却の理論(1)記憶痕跡の変化による忘却理論(2)干渉による忘却理論(3)符号化特性原理 2.注意と記憶(1)選択的注意(2)注意の集中と分配(3)注意のモデル　3.記憶の改善	同　　上
7	記 憶 と 概 念	本章のねらい　1.知識を分類する　2.コンピュータによるアナロジー　3.TLCモデル (1)モデルの概要(2)TLCモデルの問題点　4.特性比較モデル　5.典型性　6.知識の命題的表現(1)意味基本単位としての命題(2)命題表現の方法(3)ACTモデル(4)LNRモデル	星　　薫（放送大学助教授）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	記憶と言語	本章のねらい　1.はじめに　2.既出情報と新出情報　3.ブランスフォードとジョンソンの実験　4.オーウェンスらの実験　5.スキーマの働き　6.スクリプト　7.スクリプトの実在性	星　薫
9	思考と記憶	本章のねらい　1.記憶と思考の関係　2.再生的思考と生産的思考　3.記憶のゆがみ　4.ヒューリスティック(1)利用し易さのヒューリスティック(2)代表性のヒューリスティック(3)アンカー効果　5.顕著性のヒューリスティック　6.問題解決における期待	同　上
10	イメージと認知	本章のねらい　1.イメージの特徴　2.イメージは測定できるか(1)イメージの回転(2)イメージと大きさの認知(3)心の中の時計と角度の比較(4)情緒的意味の測定　3.イメージ効果(1)語のイメージ効果(2)視覚的符号化と言語的符号化	中川大倫
11	推論と理解	本章のねらい　1.推論とは何か　2.推論の文化的背景　3.推論の建て前と本音　4.心的モデルと実用的推論スキーマ　5.まとめ	佐伯　胖（東京大学助教授）
12	問題解決と理解	本章のねらい　1.「問題」とは何か　2.「問題」の問題　3.報酬と競争がもたらすもの　4.「スキーマ」による理解　5.概念と手続きの「バグ」　6.メンタルモデルとアナロジーによる理解　7.おわりに	同　上
13	認知と個人差	本章のねらい　1.　認知の堅さとあいまいさの拒絶　2.認知の場依存性　3.認知の複雑さ　4.帰属のスタイル	山口　勧（東京大学助教授）
14	社会的認知	本章のねらい　1.社会的認知の枠組み　2.スキーマとしての構造　3.社会的認知の構造(1)バランス理論(2)認知的不協和理論	同　上
15	認知のコンピューター・シミュレーションと人工知能	本章のねらい　1.認知研究の道具としてのコンピュータ　2.コンピュータ・シミュレーションと人工知能　3.ニューエル、サイモンらのLTとGPS　4.安西、サイモンの「行いながらの学習」の研究　5.キンチ、デラローザらの「子供の算数」模型　参考文献（全体にわたるもの）　索引	戸田正直（中京大学教授）

＝社会心理学＝（TV）

［主任講師：中川大倫（信州大学名誉教授）
主任講師：山口　勧（東京大学助教授）］

全体のねらい

人間の社会的行動の側面を心理学的に検討し、その間の法則性を明らかにしようとするものであるが、今回は、本書をできるだけ応用社会心理学的な体制化の観点からまとめあげたいと考えている。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	社会的行動の動機	1. 動機（要求）の分類 2. 動機にかかわる諸問題 3. 主要なる動機論	中川大倫 （信州大学名誉教授）
2	社会的認知 Ⅰ	1. 対人認知とは何か 2. 対人認知の正確さ 3. 印象形成	長田雅喜 （名古屋大学教授）
3	社会的認知 Ⅱ －原因帰属－	1. 帰属過程の意味 2. 原因帰属の原則 3. 対人認知における帰属 4. 自己帰属	外山みどり （青山学院女子短期大学部助教授）
4	態度と態度変化Ⅰ	1. 態度の定義 2. 態度の測定法 3. 態度の三要素 4. 態度に影響を与える要因	山口　勧 （東京大学助教授）
5	態度と態度変化Ⅱ	1. 説得的コミュニケーションによる態度変化 2. 要請を受け入れさせる技法 3. 説得への抵抗	安藤清志 （東京女子大学助教授）
6	態度と態度変化Ⅲ	1. 認知的不協和理論 2. 反態度的行動と不協和 3. 不協和情報の回避 4. 不協和理論の修正 5. 認知的不協和による生理的反応	山口　勧
7	対人行動 Ⅰ	1. 対人行動：序 2. 動物の活動に及ぼす集団の影響 3. トリプレットの実験 4. ザイエンスの覚醒理論 5. リングルマン実験 6. 社会的手抜き	白樫三四郎 （大阪大学教授）

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	対人行動 Ⅱ	1. 問題の所在 2. 公正さとは何か 3. 公正さ回復行動 4. いくつかの残された問題点	広田君美 （関西大学教授）
9	対人行動 Ⅲ －対人コミュニケーション－	1. 対人コミュニケーションの種類 2. 対人コミュニケーションの機能 3. 男女差 4. チャネル間の相補的関係と対人的な相関性 5. 関係の展開と対人コミュニケーション 6. 欺瞞のコミュニケーションと解読…	大坊郁夫 （山形大学助教授）
10	対人行動 Ⅳ	1. 援助行動とは何か 2. 援助行動研究の流れ 3. 援助行動の規定因 4. 順社会的行動の生起メカニズム 5. 自立のための分かち合い	白井泰子 （信州大学助教授）
11	対人行動 Ⅴ －異文化間接触における対人行動－	1. 発達論的に見た文化－心の可　性 2. 異文化間接触における対人行動 3. 異文化間対人行動の適正化の方法 － 心の可　性を超えて 4. いくつかの問題点－文化の個人への回帰－	渡辺文夫 （東北歯科大学 助教授）
12	集団内行動 Ⅰ －リーダーシップと対人認知の構造－	1. 垂直的二者関係的アプローチ 2. 対人知覚法（IPM）による二者関係における認知の相互対応比較 3. VDL モデルと対人知覚法（IPM）	藪内　稔 （学習院大学教授）
13	集団内行動 Ⅱ	1. モラール 2. 仕事への動機づけ 3. 目標設定と動機づけ	角山　剛 （東京国際大学 助教授）
14	社会的不適応 Ⅰ	1. 健康と病気に関する研究動向 2. 心臓病とタイプA行動パターン 3. 肥満者と摂食行動 4. 医療場面のストレス	渡辺浪二 （立教大学 非常勤講師）
15	社会的不適応 Ⅱ － 無気力 － ・	1. 社会的不適応の諸相 2. 無気力の心理構造 3. 無気力の修正仮説 4. 無気力の症候群 5. 無気力と抑うつ 6. 無気力の社会的背景 7. 無気力からの脱出	水口礼治 ・ （立教大学教授）

＝人間関係論＝（TV）

〔主任講師：三隅二不二（奈良大学教授）〕

全体のねらい

本講座は、現代科学としての心理学、とくに社会心理学の概念と方法にもとづいて人間関係の諸研究を述べたものである。対人関係、家族、学校、企業、官庁などの職場の人間関係などの諸状況において、グループダイナミックス、集団と規範、同調と逸脱、リーダーシップ、競争と協同、偏見、人間関係のネットワークなどを論じる。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	人間関係の科学	人間の“こころ”の発生、自我の発生と形成を中心に人間関係の問題を論じ、現代の日本社会における新日本人誕生の社会仮説を提示する。マズローの欲求階層説を中心に、大衆の欲求体系の中心転換、新日本人の人間関係の諸問題にふれる。	三隅　二不二（奈良大学教授）
2	対人関係	利得モデルを用いた対人関係の理解、対人関係における公平の原理、対人関係状況における他者を助ける行動の発生機序の解明の探求、責任分散仮説の提示、親密な人間関係の理解に関する最近の諸研究の紹介を行う。	同上 黒川正流（広島大学教授）
3	家族の人間関係	家族関係への新しいアプローチとして家族心理学の視点について述べる。また、家族関係の問題解決へのアプローチとして、ファミリー・カウンセリングの概念と方法について実演を試みる。また、家族関係のダイナミックス、家族危機、家族アセスメント等にふれる。	岡堂哲雄（文教大学教授）
4	人間関係のネットワーク	人間関係を測定する道具としてのソシオメトリー、ソシオグラムの研究をはじめとして、集団構造の解析、その手法、構造の変動とそのモデル、人間関係のネットワーク。	狩野素朗（九州大学教授）
5	グループ・ダイナミックス	人間関係の基礎科学と実践科学としてのグループ・ダイナミックス、二つの実験、民主型指導、専制型指導と放任指導の比較。 集団決定のアクション・リサーチ、日本におけるグループ・ダイナミックスの展開、小集団活動の科学について述べる。	三隅　二不二
6	同調と逸脱	個人主義と集団主義の特徴、同調行動はどのようにして発生するか。その機能、ミルグラムの通行人の実験、知覚判断における同調としてシェリフによる「自動運動」の実験を述べる。個人に対する集団圧力としての実験として、アッシュによる実験を述べる。	同上
7	競争と協同	競争と協同の概念を述べ、集団内競争と集団間競争について述べる。また、ゲーム場面を通しての競争と協同のＰＤゲーム、また、ジグソー技法による小集団協同学習と偏見の低減、集団葛藤の軽減の試み、競争と協同の活用について述べる。	古畑和孝（東京大学教授）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	偏見の心理	偏見の心理学的定義、ラベリングとステレオタイプ。ステレオタイプの自己充足的機能について述べ、偏見の心理的メカニズムとして、権威主義的パーソナリティ、またスケープゴート説、反応増幅仮説等について述べる。また、現代における新たな偏見とその解消について述べる。	白井泰子（信州大学助教授）
9	リーダーシップ	リーダーシップに関する現代の行動科学の研究を述べ、その定義について述べる。またリーダーシップに関する慣用類型による科学的研究の限界にふれ、リーダーシップPM論を提唱、その妥当性について述べる。また、PM型の有効性とPとMの相乗作用について述べる。	三隅二不二
10	意思決定	個人の意思決定のモデルをジャニスとマンのモデルを用いて述べる。また集団の意思決定に関する行動科学的研究について述べる。 即ち、参画的意思決定、勢力格差と参加、参画的意思決定が適合する状況について述べ、また集団決定と行動変容の関係にふれる。	同上
11	職場の人間関係(1)	近代的組織としての近代官僚制の特徴、公式組織におけるインフォーマルな小集団の発見。ホーソン工場での疲労実験、小グループの連帯意識、ヒューマン・リレーションズの時代、モラールサーベイ、モラールの二つの要因、モーティベイター要因とハイジーン要因。	同上
12	職場の人間関係(2)	職場におけるリーダーシップの研究、第一線監督者行動の2つの研究。職場でのPとM行動を測る。P行動とM行動の測定尺度の構成、企業におけるリーダーシップPM4類型と仕事満足度、給与満足度、会社帰属意識、チームワーク、精神衛生との関連を分析する。	同上
13	災害・危機と人間関係	地震・大水害等の危機場面における人間関係のあり方を、実証的事例や、実験的研究を用いて述べる。また、緊急脱出時の避難誘導法として、吸着誘導法と指差誘導法の比較、危機的状況におけるリーダーシップの効果について述べる。	安倍北夫（聖学院大学教授）
14	ゲーム理論と人間関係	実験ゲームと人間関係について述べる。マトリックス型ディレンマゲームの実験、ディレンマゲームの方略構造、個人合理性と社会的ディレンマ、集団合理性について述べる。ディレンマ・ゲーム研究として、競争性の発達、木こりゲームについて述べる。	戸田正直（中京大学教授）
15	日本人の人間関係	日本人の人間関係の第1の特色について述べ、特に義理人情スケールの作成との関連で、義理人情という考え方の筋道を述べる。 調査項目への日本人の反応として、中間的回答が多い。調査方式で人間関係をさぐる諸方法、即ち計量的方法・文化人類学的方法等。	林知己夫（統計数理研究所名誉教授）

＝パーソナリティ論＝（TV）

〔主任講師：佐治守夫（東京大学名誉教授）
主任講師：飯長喜一郎（お茶の水女子大学助教授）〕

全体のねらい

より実証的で体系的なパーソナリティ理論を学び、「自己」と「他者」とを、より広く深く理解することを目的とする。ビデオの特徴を生かして、日常生活の中で、人は他人のパーソナリティを捉えるのにどういう手掛りを用いているか、自分なりの他人を把握する見方は何かなど、それと心理学的な手法との比較も考えてみる。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	日常生活とパーソナリティ	人は、その人なりに外界を認知し、行動している。人の内的世界には一貫性がある。また、人は、“暗黙のパーソナリティ理論”を持ち、「自己」や「他者」を見、判断している。しかし、往々にして、それは表面的であり、間違っていることが多い。	鈴木乙史（聖心女子大学助教授） 放送用教材出演者 佐治守夫 飯長喜一郎 佐々木正宏
2	パーソナリティの発達 Ⅰ．乳幼児期	パーソナリティは、「遺伝」と「環境」との相互作用によって形成されると言われる。ここでは、「気質」の問題、環境要因の中心と考えられる「母子関係」「父子関係」について、考察する。また、「自己」や「自律性」について、実証的に検討する。	鈴木乙史
3	パーソナリティの発達 Ⅱ．青年期	青年期になると「自己」を客観的に見ることができるようになり、現実自己と理想自己とのギャップに気づくようになる。そして、「主体的努力」が現われるようになる。「自我同一性」を獲得し、生家族から自立する。「孤独」や「親密性」の問題が現われる。	同上
4	パーソナリティの発達 Ⅲ．成人期老人期	ライフサイクルの観点から、成人期・老人期をみる。この時期に「自己実現」が可能かどうかは、個人差が大きい。老人期の「性格類型」や「人格の恒常性と変化」の研究をとうして、それぞれの段階にはそれぞれの意義と特質があることを示す。	同上
5	対人関係とパーソナリティ	対人関係の場において、他者のパーソナリティを理解しようとするとき、自他の関係をはじめとする多くの要因が、その理解に影響を及ぼすと考えられる。これらの要因を取り上げ、より正確な理解に近づくために、何が必要なのかを論ずる。	佐々木正宏（国学院大学助教授）
6	パーソナリティ理解の手法	パーソナリティを理解するために、テスト法をはじめとするさまざまな心理学的手法が開発されてきた。このような手法のうち主要なものを解説し、そこにはどのような特徴があり、またどのような問題点があるかを検討する。	同上
7	文化とパーソナリティ	文化とパーソナリティは密接に関係する。しつけや人間関係の型などがどのようにパーソナリティの形成に関与しているかを論じ、あわせて、ある文化の中で生きてきた人が異なる文化に接したときに生じる混乱や適応の過程についても触れる。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	類型論	パーソナリティの全体像を、典型的なタイプを示すことによってとらえようとするのが類型論である。その代表的なものをいくつか紹介し、それとは異なったとらえかたである特性論との比較を試みながら、類型論の特徴や問題点について考える。	佐々木 正宏
9	精神分析的理論(1) —フロイトの考え—	心理療法としての精神分析の基礎となるパーソナリティ理論について考える。フロイトの理論を中心とするが、フロイト以前についても言及する。自我の構造及び防衛機制についてフロイトの事例を紹介しながら概説する。	飯長喜一郎 （お茶の水女子大学助教授）
10	精神分析的理論(2) —フロイト以後の考え—	精神分析理論のうち、フロイト以外の代表的なパーソナリティ理論を解説する。ユング、アドラー、ホーナイ、フロム、エリクソン、クライン、サリバンなどの理論に触れながら、現代の心理療法や文化への影響を考える。	同上
11	行動主義的理論	行動主義的なパーソナリティ理論を考える。行動主義の基本的な考え方や各種の学習理論を解説する。社会的学習理論を含み、精神分析的理論との関係についても触れる。行動療法の基礎的な考え方についても、実例をあげながら解説する。	同上
12	人間学的理論	心理学の第三勢力といわれる人間学的理論を講ずる。ロジャーズ、マズローを中心に、基本的な考え方を解説し、精神分析的理論、行動主義的理論と比較検討する。また、心理療法、カウンセリング、生徒指導などへの影響について論じる。	同上
13	正常と異常	正常と異常を考える基準は、この二つを定義することの困難さを伴って簡単でない。①統計的基準、②理想的基準（社会、文化的基準）、③病理的基準、④発達的基準などがある。また「多軸診断」「重複診断」の可能性も考える。神経症行動など人間や動物の行動についてのべる。	佐治守夫 （東京大学名誉教授）
14	パーソナリティの変化(1) 発達、成長、老化	第2・3・4章で考えた発達を、パーソナリティの変化という点に重点をおいて考えてみる。所謂、二者関係の成立から三者関係への展開、ギャングエイジからピア一関係へなど、統合性や恒常性に完全な安定はなく、試行性とコミットメントの共在が人間の実存である。	同上
15	パーソナリティの変化(2) 治療による人格の変化	心理的不健康、対人関係の偏狭さ、境界例人格障害における虚無やアンビバレンシイの強烈なインパクト。依存、しがみつきと無気力など、多くの問題が、どのように克服されるのか。治療に必要な条件とはなど、4人で論じてみたい。	同上 （放送用教材出演者 飯長喜一郎 鈴木乙史 佐々木正宏）

＝臨床心理学＝（Ｒ）

〔主任講師：村瀬孝雄（学習院大学教授）〕

全体のねらい

実践の学であり、ゆるやかにしか体系化されていない臨床心理学について、入門的水準の知識を示すことにより、この分野への正しい関心と初歩的理解を持ってほしい。この講義を手がかりにして、より基礎的な勉学やさらに進んだ探究を試みるきっかけになれば良いと願っている。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・職名）
1	臨床心理学とは何か	臨床心理学の定義に触れ、次に主要な特性について簡単な解説を試みる。①対象は広義の心の不健康、不適応など広範囲におよぶ ②実践的技術学 ③臨床的態度 ④体系性はゆるやか ⑤学際的であり文化拘束性が高い。臨床家の役割と貢献および臨床心理学の歴史について短く述べる。	村瀬孝雄（学習院大学教授）
2	神経症圏の中心的病理	神経症と心因反応の定義と類型について、解説する。また、人格障害の概念と反社会的性格、気質についても述べる。	福島章（上智大学教授）
3	精神病圏の代表的精神病理	精神病についての最も基本的な理解のための解説を行いあわせて、精神分裂病と躁うつ病の精神病理、分裂病者、躁うつ病者への対応に際して留意すべき心理学的配慮についても解説する。	吉松和哉（東京都精神医学総合研究所参事研究員）
4	臨床心理学的アセスメント(1)	臨床心理学の立場から、病理的現象と病者に対して行う援助的介入を展望するとともに、アセスメント（評価・査定）について、その本質と目的を中心に総論的考察を示す。	村瀬孝雄
5	臨床心理学的アセスメント(2)	アセスメント面接の目的と特異性、面接にあたっての留意点、初回面接の重要性と実例解説をし、さらに臨床面接の信頼性と妥当性についても述べる。	同上
6	臨床心理学的アセスメント(3)	臨床心理検査法をその特殊性を中心に概観し、さらに検査法の分類と評価、活用上の留意点と戦略について解説する。	同上
7	臨床心理学的アセスメント(4)・1	ウェクスラー式知能尺度の基本的考え方と特性を述べるとともにこの検査の解説と実用性にもふれる。また、質問紙の一般的特質、効用と限界、代表的な質問紙検査ＹＧ、ＭＰＩ、ＧＨＱについても解説する。	伊藤研一（大正大学専任講師）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・職名）
8	臨床心理学的アセスメント(4)・2	投映法の特質と分類を解説するとともに、とくにその代表的技法としてロールシャッハ法および樹木描画法（バウム・テスト）について説明し、実例を示す。	村瀬孝雄
9	臨床心理学的アセスメント(5)	アセスメントの解釈とは、仮説をつくりあげる力であることを説明し、この仮説と現実との交流、総合的所見の重要性と困難性、検査報告について解説する。	同上
10	心理療法とは何か	原点としての精神分析療法を粗描した後、心理療法の一般的条件と諸種の立場を、四つの流れに大別して概観するとともに、心理療法の典型的過程について、一つのモデルを示して解説を行う。	同上
11	精神分析	精神分析のもっとも基本的な人間理解の特質として、無意識仮説、心理・性的経験の重視、幼児期の重視をあげて解説し、次いで、この療法の技法と過程について、実例に即して説明する。	同上
12	来談者中心療法	アメリカ生まれのいくつかの立場では、現在の治療者・患者関係を生きること、それ自体をもって治療的とみなした。治療者の提供する成長促進的態度について述べるとともに、個人が自己の内的な体験過程にフォーカスする技法を用いる立場の解説もする。	同上
13	行動療法	行動主義心理学の立場から、完全に客観的にとらえられる行動を、学習心理学の実験的成果に基づき、脱感作等の技法等を用いて変容しようとすることを解説する。	同上
14	森田療法と内観療法	日本で生まれ、発展してきたまったく独自の治療法が森田療法と内観法であり、この両者によって立つ人間観や目指す治療像は、基本的共通性をもつが具体的手続きはまったく対照的である。これらのことについて、ややくわしく解説する。	同上
15	コミュニティ心理学	従来の面接室という場を用いての対人関係中心の治療的観点を補う新しい企てとして、地域社会や共同体の方へ心理臨床家が出ていき、柔軟で多様な働きかけを試み始めている。分裂病者の社会復帰活動、自閉症児の親や家族への支援、自殺予防のための電話相談などがこれにあたる。	同上

＝深層心理学＝（R）

〔主任講師：織田尚生（甲南大学教授）〕

全体のねらい

深層心理学の基本構造である意識と無意識との相互関係について、事例を取り上げながら分かりやすく解説する。ユング派の立場からユングとフロイトの考え方を取り上げ、その異同を明らかにする。さらに分析心理学と精神分析に関して、古典的な考えのみならず、この領域の新しい動きについても触れる。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・職名）
1	無意識の心理学	フロイトとユングがどのようにして、無意識の存在に気づくようになったか、その研究史について述べる。	織田尚生（甲南大学教授）
2	自我とコンプレックス	自我の機能が、さらには自我がコンプレックスの存在によって、いかに強く影響を受けるかを考える。	同上
3	心の発達	精神分析および分析心理学における発達仮説に関して述べる。さらにコンプレックスが解消される過程について、心理療法の実際に触れながら解説する。	同上
4	イメージと象徴	深層心理の内容と密接に関係し、また重要な働きをするイメージと象徴について、例をあげて考える。	同上
5	夢とその特性	無意識の生み出した心的内容である夢を取り上げ、そのさまざまな特徴について検討する。	同上
6	夢の分析	心理療法の技法としての夢分析について、わかりやすく解説する。	同上
7	父と母の元型	親のイメージを検討することよって、普遍的無意識とその内容である元型について述べる。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・職名）
8	影の心理学	個人のみならず集団の心理を理解する場合にも鍵概念になる、影(shadow)の問題を論じる。	織田尚生
9	ペルソナとこころ	ユングのペルソナという概念を取り上げて、人間の外的および内的適応について検討する。	同上
10	心の中の異性	人間の心理的な成長のためには、心の中の異性（アニマとアニムス）の発達が大切であることを述べる。	同上
11	自我とセルフ	意識の中心をなす自我が、無意識の深層からセルフによって統御されている点を論じる。	同上
12	個性化と布置	ユングの考えた心の成長過程である個性化について解説し、心的危機における布置と共時性の問題にも触れる。	同上
13	イニシエーションとコスモロジー	深層心理学と文化人類学（象徴人類学）や比較宗教学との学際領域の問題として、イニシエーションと心理療法との関連性について論じ、さらに内的なコスモロジーの意義にも言及する。	同上
14	神話と昔話の心理学	元型的イメージの表現としての神話と昔話の重要性について述べ、前章につづいて心理療法とコスモロジーとの関係を研究する。	同上
15	日本人の深層	ユングの分析心理学の視点から、日本人心性、特にその特徴である中心志向性について述べる。	同上

＝カウンセリング＝（R）

〔主任講師：佐治守夫（東京大学名誉教授）〕

全体のねらい

カウンセリングについて、その基本的な理論と、実践上の技法を学ぶことを目標とする。そして歴史的な過程をも含めて、今までの著名な理論家達の考え方を紹介し、同時にカウンセラーの態度実践上の倫理的問題、社会からの要請、訓練の方法などにもふれる。事例を適宜、挿入することで理解をふかめる。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	カウンセリングとは何か（序論）	カウンセリング、心理治療、さらに広く、人間援助の方法を概観し、このような領域が現在ますます注目されつつある状況を考える。家庭内の問題、子どもの発達と教育にかかわって、学校での問題、職業、職場にかかわる問題などなど。事例(1)、登校拒否	佐治守夫（日本・精神技術研究所・心理臨床センター所長）（東京大学名誉教授）
2	カウンセリングの定義(1)	カウンセリングの定義は、後にのべる様々の理論によって微妙なちがいがある。ここでは、かなり包括的に、今日通用している定義についてのべる。	同上
3	カウンセリングの定義(2)	カウンセリングの定義(1)をふまえて、様々な立場で特に強調される諸点をとりあげて評説する。カウンセリングは、そのように立つ、パーソナリティ理論と切りはなせないこと、人間の成熟、健康についての考え方と密着していることものべる。事例(2)	同上
4	望ましい特殊な対人関係		同上
5	心理療法の展開(1)	力動精神医学の黎明とその展開。フロイト精神分析が生れるまで 「メスメルと動物磁気術」 「シャルコーとジャネー」その後の展開	同上
6	心理療法の展開(2)	ブロイエル Breuer J.の 除反応(Abreaction)の理論とフロイト Freud S. 「フロイトの基本的理論」 「自由連想法」	同上
7	心理療法の展開(3)	フロイトの基礎的な発見とその理論 「抵抗（resistance）と抑圧（repression）」 「不安と防衛」 「性的衝動」 「精神力学（psychodynamics）」	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	フロイト以後の展開(1) ー特にユングを 中心としてー	「フロイト補遺」 「ユングCarl Gustav Jung. 1875-1961」 「全体的自己 whole self」 「投影、及びその他の症状」 「集合的、普遍的無意識（collective, universal unconscious）」 「ユングのコンプレックス」 「自我と自己 ego-self と真の自己 real self」	佐治守夫
9	フロイト以後の展開(2)	「ユングの精神療法」 「新フロイト派（Neo-Freudian）」	同　上
10	ロジャースの貢献 ークラインス中心療法ー		同　上
11	ロジャースにおける治療関係の意味	「治療によるパーソナリティの変化」 「変化したパーソナリティの特徴」 「パーソナリティ変化の条件」の検討	同　上
12	ロジャースにおける治療的変化の仮説と理論の特徴	この理論で取りあげられなかったもの	同　上
13	治療的面接（カウンセリングの実際(1)	「事例を取りあげる意味と、その際の注意について」 「事例の概要」 「最初の面接に至るまでの接触の重要さ」 「第１回目の面接、沈黙と砂場の作品」	同　上
14	治療的面接（カウンセリングの実際(2)	「第１回目の面接、沈黙と砂場の作品」 「２回目以降のサボテンの意味ある出現」 「３回目から５回目のキャンセルまでサボテンを通じての関係のふかまりと、その結果としての治療者の介入の失敗」 「５回目のキャンセルをめぐって」	同　上
15	治療的面接（カウンセリングの実際(3)	クライエントの陰性転移感情、両向性感情にどのように共感し、対応することができるか、あわせて治療者の反対転移について	同　上

＝心理・教育における測定法＝（TV）

〔主任講師：肥田野直（東北大学名誉教授）〕

全体のねらい

学校や社会において、種々の測定が行われている。それは何を、どんな方法で測っているのであろうか。

測定法の基礎となる原理は何であろうか。また、測定の際にどんな誤差が生じやすいのか、その誤差を除くにはどうしたらよいのか。これらの知識を基礎にして測定値を正しく解釈し、適切に利用する仕方を学びたい。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	測定とは何か (1)	人間を対象とする測定法にはどんな種類があるだろうか。学校生活や社会生活の中で行われている測定の例を考えてみよう。測定の誤差の性質とその扱い方を通じて、測定の基本的概念を学ぶことにする。	肥田野　直（東北大学名誉教授）
2	測定とは何か (2)	ここでは測定の基本的特性について考える。直接測定と間接測定の区別、測定の信頼性や妥当性の問題など、心理学および教育学における測定に共通した基本概念を解説する。	池田　央（立教大学教授）
3	学力の測定	一番身近な測定の例として学校における学力の測定を取り上げる。学力測定の方法、種類、結果の表し方、素点と標準点の違い、集団準拠測定と目標準拠測定の区別などについて触れる。	同　上
4	知能の測定	知能測定法の歴史、知能検査はどの様な必要性から生まれてきたのか。またどのような形で発達してきたのか、知能測定の結果はどの様に表示されるか、知能検査の種類、それによって示される知能の概念などについて解説する。	同　上
5	パーソナリティの測定	パーソナリティの測定はどんな原理に基づいて行われるのか。その測定法はどんな条件の下に実施できるのか。パーソナリティの測定の生じる測定誤差はどうしたら避けられるか。測定結果はどう解釈したらよいかを考える。	肥田野　直
6	人間関係の測定	人間関係の緊密さや集団内の社会的地位を測定するにはどうしたらよいか。また、リーダーシップを測定するにはどうしたらよいか、これらの測定法の基礎とその問題点について考える。	同　上
7	態度の測定	態度はどの様に定義され測定されるのか。その代表的な測定方法と、その根底にある基本的な考え方およびその限界について考える。またこれと関係の深い最近の展開についても触れる。	池田　央

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	価値観の測定	価値観の多様化といわれる現代における、諸種の測定法、把握法とその問題点についてふれる。歴史的な展開の経緯と最近の測定事例を引用する。	吉田正昭（中央大学教授）
9	閾と主観的等価点の測定	閾と主観的等価点につき、具体例をあげて解説を加える。ついで、それらの測定に用いられる精神物理学的方法のうち、ここでは調整法と極限法とを取り上げて説明する。このほか、言葉や文字などを提示材料にしたときの、認知閾の測定方法にも言及する。	鳥居修晃（東京大学教授）
10	色の認知と分光感度	色彩視が成立するための前提条件について述べ、色覚の仕組みを明らかにするための研究例を紹介する。とくに、分光感度測定の具体例として、明所視と暗所視の比視感度の測定結果と増分閾を指標とした分光感度の測定データの一例を取り上げ、検討と考察を試みる。このほか、上下法と恒常法による閾測定の一般的手続についても解説を加える。	同上
11	運動と形の認知	仮現運動に関する古典的研究を紹介し、視覚領域だけでなく、聴覚、触覚の各領域についても仮現運動が起こることを明らかにした近年の研究を取り上げる。ついで、ランダム・ドット・パターンを提示材料とした仮現運動に関する近年の研究例に触れる。さらに、運動対象の形の認知に関する研究例、運動視に及ぼすストロボ照明効果についての研究例にも言及する。	同上
12	香りと手触りの認定	視覚や頭覚のように認識的側面の強い感覚と異り、嗅覚や触覚は感情的好悪と強く結びついている。従って昔は美的感覚の問題とされてきたが、現代では統計学的ないしは計量心理的測定がすすんでいる。その一端を紹介する。	吉田正昭
13	味の測定	味と香りは機器測定が出来ぬといわれているが補助道具としてのマイクロコンピュータなどは有用である。これを用いて人間が感覚量を表現するときの問題点について考察する。	同上
14	重量感・触覚二点閾の測定	重量感あるいは重さの感覚に関する弁別閾の測定結果とそこから導かれたウェーバーの法則その他について紹介する。ついで、シャルパンティエ効果に触れ、その成立条件について考えてみる。さらに、触覚二点閾を測定する方法、とくに恒常法と閾値算出法の一つについて解説を加える。	鳥居修晃
15	測定をめぐる諸問題	測定について種々の角度から考えてきたが、それらに共通する問題や残された問題について、担当講師全体でまとめを行う。	肥田野直

＝ 子どもの心身機能の発達と障害 ＝（TV）

〔主任講師：帆足英一（都立母子保健院乳児養育科部長）〕

全体のねらい

乳児期から幼児期にかけて、子どもはめざましい心身機能の発達をとげていく。その背景には生理的な身体機能の発達と、人格形成にいたる母子関係や自我・自主性の発達といった二つの課題の調和が必要となる。これらの子どものからだと心の発達について、そのトラブルへの対応を含めて理解を深めていきたい。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	母子関係・自我の発達課題と心身機能	子どもの人格形成にとって重要な母子関係と自我・自主性の発達について、乳児期、幼児期、学童期といった成長過程における課題とその獲得過程における心身機能と障害について概説する。	帆足英一（都立母子保健院乳児養育科部長）
2	アタッチメントの形成と母子関係	アタッチメント理論と、それにまつわる子どもの発達、あるいはアタッチメントの形成に関与する乳児期の要因、母親側の要因などについて、最近の研究を含めて紹介しながら、その意義について解説する。	吉田弘道（日本児童手当協会小児保健部専門職員）
3	乳児の発達	新生児期から乳児期にかけて、赤ちゃんはめざましい発達過程をたどっていくが、反射機能、運動機能の発達過程を中心に、脊髄神経レベルから大脳皮質レベルへの歩みと母親を中心とした養育者のかかわりについて解説する。	横井茂夫（都立母子保健院小児科医長）
4	睡眠の発達と障害	睡眠リズムの発達過程を新生児期から乳幼児期、学童期へとたどり、その発達、分化過程で生じるトラブル、夜泣きや夜驚、不眠等についてその原因と対策を述べる。	帆足英一
5	摂食機能の発達と障害	新生児期の哺乳機能、乳児期における咀しゃくやえん下機能など摂食機能の発達過程について解説する。また、ミルク嫌いや拒食症、少食や偏食といった摂食障害について発達的にその原因と対策を述べる。	同上
6	排泄の発達と障害（その1：トイレット・トレーニング）	排尿、排便といった排泄機能の発達を生理的な基盤をもとに述べ、ついで発達段階に対応したトイレット・トレーニングのあり方について解説する。また昼間遺尿や遺糞といった排泄障害とその対応について述べる。	同上
7	排泄の発達と障害（その2：夜尿症）	おねしょ（夜尿）が自立していく過程を生理的に解説し、その発達障害である夜尿症について、病態別（多量遺尿症・排尿機能未熟型・混合型）の原因、生活指導、治療について述べる。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	生活リズムと発達	子どもの生活リズムを構成する主要な要素である睡眠覚醒リズムと摂食リズムの意義について述べ、これらの生活リズム障害が乳幼児の発達にいかに影響するかについて、事例を紹介しながら解説する。	帆足英一
9	ことばの発達と障害	意志（コミュニケーション）の伝達の一手段である言語の獲得過程について解説し、その障害である言語遅滞や吃音、かん黙などについて、事例を紹介しながら、その原因と対応について述べる。	同上
10	移行対象の発達と意義	乳幼児が肌身離さず持ち歩き、それがないと著しい不安を示す毛布、ぬいぐるみ、人形などを移行対象という。この移行対象の出現と消失過程を分析し、その発達的な意義を母子関係とのかかわりを軸に解説する。	井原成男（東京慈恵会医科大学助手）
11	子どものくせ	指しゃぶりやチック、子どものマスターベーションといった乳幼児にみられる習癖について、事例を中心にその背景にある発達的な問題を理解しながら、その問題解決への過程について解説する。	帆足英一
12	病気に対する子どもの心理的反応	子どもが病気になったとき、その子どもと周囲の人々にさまざまな心理的反応がみられる。このような際に真の相互理解と援助を実現し、かつ新たな心理的問題への発展を予防するために、よく生じる心理反応について学ぶ。	奥山真紀子（埼玉小児医療センター附属大宮小児保健センター医長）
13	虐待を受ける子どもたち	虐待を受ける子どもたちは、乳児を含めて年々増加しつつある。その実態と背景を分析すると共に、それらの親子への援助について、乳児院における経験のもとに解説する。	庄司順一（都立母子保健院心理指導員）
14	登校拒否へのアプローチ（その1）	登校拒否児の多くは、過去に一過性の登園拒否を経験していたり、頭痛や腹痛などの不定愁訴といわれる前駆症状からはじまることが多い。これらの子どからのサインをどのように理解し対応すべきかについて、事例を紹介しながら解説する。	帆足英一
15	登校拒否へのアプローチ（その2）	登校拒否児にみられる昼夜逆転例や家庭内暴力例を紹介しながら、乳幼児期から学童期にかけての母子関係や自我・自主性の発達課題が人格形成の上でいかに重要であるかについて理解を深める。	同上

＝児童の心理と教育＝（R）

〔主任講師：三宅　和夫（川村学園女子大学教授）〕

全体のねらい

ヒトが生まれてからおよそ10年間すなわち小学校卒業のころまでの心理的発達の姿について最近の研究成果をふまえて検討し、さらに子どもの発達を促進したりさまたげたりする要因を考察し、どのような教育的な配慮をすることが必要であるかについても考えてみたい。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	子どもの心理的発達と教育―序論―	生後のおよそ十年という期間に子どもは心身ともにめざましい発達をとげる。生物としてのヒトが社会的人間になっていく変化の過程がどのようなメカニズムによって進行するかについてのいくつかの異なる考え方を提示して、2回目以後の導入とする。	三宅和夫（川村学園女子大学教授）
2	新生児・乳児の能力	人生の出発点においてヒトがどのような能力を身につけているのかについて近年の研究が明らかにしたところを説明し、ヒトがはじめからまわりの環境と能動的なかかわりをもって発達していくことを明らかにする。	同上
3	母と子の相互作用	生まれたその日から母と子は毎日いろいろなやりとりをすることになる。以前考えられていたように、母から子へという一方的な影響ではなく、子から母へという方向での影響もまた重視される。このようにして母子が育ちあっていくということについて考える。	同上
4	家族のなかの子ども	現代社会は子育てにとって昔にはなかったようなさまざまな問題を生んでいる。育児ということを母子の関係だけで考えるのでは不十分であり、父親の役割、家庭外からの援助のあり方などを検討することが大切であり、さらにそれらの相互に及ぼす影響についても考える。	同上
5	日本の母子関係の特徴	わが国の母子関係は非常に密着したものであり、母親が子どもを甘やかす傾向が欧米の研究者によって指摘されてきている。今日の核家族少子化の状況では、このような傾向はいっそう顕著になるとも考えられる。そこで最近の研究の結果からこうしたことを検討する。	同上
6	知的能力の発達	子どは誕生以来、世の中の事象や自身のことについて知識を獲得し、構造化していく。こうした知的活動の発達はどのようにおこるのか、そのメカニズムと様相について中心的な発達理論を紹介しながら解説する。	田島信元（東京外国語大学助教授）
7	就学前児の思考の発達	子どは生まれながらに優れた学習・思考能力を持ち、それを発揮することにより徐々に知識を集積する。しかし乳幼児期は知識を表現する手段がイメージに基づくため、非論理的側面を持つといわれる。こうした独自性を中心に、思考能力発揮の条件について考察する。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	知的発達と環境	知的発達の様相は文化的、社会的、教育的環境条件によって異なってくることを比較文化的研究に基づいて解説する。さらに、知的発達の個人差が具体的にどのような環境条件のあり方によって生ずるのか、そのメカニズムについて考えてみる。	田島信元
9	仲間遊びの発達と教育的意義	就学前期から学童期において遊びは子どもの発達にとって非常に重要である。子どもをどのような視点でとらえたらよいかを考えるとともに、今日の子どもの遊びの実態について検討し、遊びの教育的な意義について考察する。	三宅和夫
10	行動基準の形成と社会化	子どもは社会の中で次第に生物としてのヒトから社会的人間になっていく。これは社会化の過程といわれる。このような過程を子どもがさまざまな行動基準を身につけていく一連のものとしてとらえることができる。そこにおいて子どもに生じる問題について考える。	同上
11	自己の発達と社会化	子どもは乳児期にはじまって次第に一個の独立した存在としての姿をはっきりさせていく。これを自己意識の発達という視点から考えてみる。またこのことを家庭、近隣、学校という子どもがかかわりを持つ場との関係で検討する。	同上
12	数量の理解の発達と教育	幼児期から児童期にかけて発達する重要な知識の一つに、数・量概念がある。これは最初、量にかかわる経験（大・多・長など）からはじまり、数概念、さらに演算へと進むが、これらは子ども自身の活動そのものから抽象される。数量の理解と教育の関係について考察を深める。	田島信元
13	読み書き能力の発達と教育	言語発達には幼児期の話しことば（音声言語）の習得に加え、児童期にかけての書きことば（文字言語）の習得という側面がみられ、言語生活は飛躍的に豊かになっていく。文字習得、読書能力、作文能力の発達について、教育との関係を含めて考察する。	同上
14	論理的思考力の発達と教育	幼児期における非論理性を持った思考から、論理的思考能力が十分発揮されるようになる児童期を中心に、抽象的論理操作が可能になる段階までを概観する。その発達には言語・記号を思考の手段にすることとかかわっており、学校教育がそれに果たす役割にも言及する。	同上
15	学校環境と教育・発達	学校教育が子どもの発達にどのような点で影響を及ぼすのだろうか。教授法の違いによる知的達成、創造力、学習への積極性などへの影響過程、また、教師の個性、仲間関係の学校経験への影響などを含め、発達に及ぼす学校教育の影響の功罪について考える。	同上

＝青年の心理と教育＝（R）

〔主任講師：宮川知彰（東北大学名誉教授）〕

全体のねらい

青年期が人生経過の中で、また人の精神発達において、どのような役割・課題・意義をもつかをさまざまな視点から検討し、青年のための教育がどうあるべきかについて考えてみる。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	青年期とは －「青年」の誕生－	青年期の開始期と終期とをどうとらえるのか、青年の心理行動は、児童や成人のそれに比べてどのような特徴的な性質をもつか、そして青年心理学はいかなる課題をもつかについて考えてみる。	宮川知彰 （東北大学名誉教）
2	青年心理学の研究法 －その方法論と方法－	青年を個として把える立場と一般として把える立場がある。こうした目標の違いによって、この方法論と方法は異なっている。ここでは、その二つの立場と方法を解説し、さらに、個と一般（普通）についての問題を考察する。	久世敏雄 （名古屋大学教授）
3	青年期のからだと心 －からだとの出会いと性の問題－	身体的成熟（特に第二次性徴の発現）が青年の心理面にどのような影響を及ぼすのか。性的成熟を通して、青年がどのような問題に直面し解決していかなければならないのか。男の子・女の子から男性・女性としていかに自己を確立していかなければならないのか。	福富護 （東京学芸大学教授）
4	進路選択 －青年の発達課題－	青年期は、複数の進路可能性の中から、自らの進路を決定していく時期でもある。現代の日本社会というしくみの中で、青年達はどのように進路を選択しているのか、青年期の発達課題とのかかわりを通して、その実態と援助のあり方について考察を進める。	片岡彰 （東北大学助手）
5	反抗 －人生・社会と青年－	青年が自我を確立し、主体的な自己であろうと努力する過程で、青年の発達を阻害するかの如く青年が認識する既存の権威に対して“反抗”するのはむしろ当然である。青年の権利である健康な反抗と青年の発達との関係を考えてみたい。	佐竹宣夫 （芝浦工業大学教授）
6	友情と仲間 －青年と集団活動－	青年期に形成される友情は、われわれの生涯にとって極めて重要な意味をもっている。 青年の友情形成と青年の集団活動がどのようにおこなわれているのか、それが青年の発達にとって、どんな意義があるのか考えてみたい。	同上
7	青年の生活構造 －学習と余暇の活動を中心として－	青年期における人間形成にとって特別な重要性を持つ活動として、学習と余暇をあげることが出来る。多くの青年達が高等学校、大学に通う生活を送っている現在、学習と余暇はその生活の中心となる位置を占めている。この二つの活動の意義について考えてみる。	斉藤耕二 （東京学芸大学教授）

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	今日の女子青年 －女子青年と 職業－	ライフ・サイクルの変化、出生率の減少、高学歴化などによって女性の就業が増大している。しかし、雇用均等法が施行されても、雇用条件の性差別が解消される見通しもない。こうした就業構造の中で変動する女子青年の職業観、結婚観や性役割観などを考察する。	江川　亮 （芝浦工業大学教授）
9	今日の勤労青年 －その職業観と 勤労観－	いわゆる技術革新の進展のもとで、人間労働の単純化、細分化、規制化が進行している。その職場で、単調労働を強いられる青年たちの過酷なまでの心理的・生理的負担の実態を明らかにするとともに、欧米における“労働の人間化”の試みについても触れてみたい。	同　上
10	青年の精神病理 －思春期心身症、登校拒否、留年、自殺、性の問題－	青年期には、精神内界の均衡を保ちながらおとな社会に適応できる人格を形成していくことが期待されるが、体の急激な変化や環境刺激がストレスとして作用し非適応状態を招くことがある。ここでは、精神的な病理現象を通して青年の心理について理解を深める。	中村雅知 （東北大学助教授）
11	青年のつまづき －非行・暴力・ いじめ－	青年の非適応のもう一つの現れは、他者とのかかわりの領域においてである。非行・暴力・いじめには、いきいきとした生への意欲と他者への思いやりが失われている。ここでは、逸脱行動を通して、彼らのつまずきと、これへの対処の仕方を考えてみる。	同　上
12	青年の活動意欲 －「やる気」・「生きがい」の問題－	現代の青年は、どのような物や事柄に価値を置いて行動しているのか。現代青年の「生きがい」「価値意識」の実態を検討しながら、青年の行動の源泉としての「やる気」「活動意欲」を考察する。	片岡　彰
13	青年文化論 －青年期における 社会化と世代－	現代社会では、青年達は、成人や子供達とは異なった、独自な文化を持っている。この青年文化の特質、心理的機能を検討して、青年期と社会の関係について理解を深める。	斉藤耕二
14	現代の青年論 －アィデンティティ アパシー、etc－	この問題の考察はさまざまな視点から展開することができるが、ここでは、その基底となる青年心理の諸理論が構成されてきた道筋として、生物学的、社会的、世代的要因、さらに、コーホートと歴史の要因にふれ、現代の青年論－アィデンティティ、アパシーなどについて述べる。	久世敏雄
15	青年心理学と教育 －青年心理学 小史－	青年心理学の成立とその発展の歴史の中でこの学問がこれまでの青年教育において果してきた役割を概観するとともに、今後のこの学問の使命について考えてみる。	宮川知彰

＝老人の心理と教育＝（R）

〔主任講師：荒井保男（飯　山　医　院　長）
主任講師：宮川知彰（東北大学名誉教授）〕

全体のねらい

高齢化社会の到来とともに老人問題は大きな国民的課題として、老人処遇の問題が種々論ぜられているが、これらはいづれも先づ老人の心理を解することから始めなくてはならないであろう。ここでは先づ正常老人及び異常老人の心理について考察し、終りに老年期の生き方について少しく論述してみたい。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	老人の心理を学ぶ社会的背景	なぜ老人の心理を学ぶことが必要になってきたのであろうか。その理由を ①高齢化社会の到来　②ライフサイクルの変化 ③家制度の崩壊　④高度産業社会の到来 ⑤老人能力の開発　⑥死をめぐる諸問題 などを中心に、その社会的背景を考察する。	荒井保男 （飯山医院長）
2	老化の概念	老化とは何か。老化の概念について口述し、老化学説を紹介しながら、脳の老化に言及する。	同　上
3	「老い」の自覚	老人の心理は、「老い」を自覚し、「老い」をどのように受容し、自己をどのように変容させて、「老い」に適応してゆくか、という問題としてとらえることもできる。ここでは「老い」の自覚発現年齢、その契機や社会的要因などを中心に論述する。	同　上
4	老人の感覚と知覚	老年期には感覚器官、知覚機能が低下するために、環境からの情報（刺激）を正確にしかも速く知覚・認知することが困難になりやすい。視覚、聴覚を中心に、加齢に伴う感覚・知覚機能の変化が、行動やパーソナリティに及ぼす影響についても口述する。	長嶋紀一 （日本大学教授）
5	老人の記憶	老年期には、健康な人でも大なり小なり記憶力の衰えを経験する。これは、新しい事を憶えられなくなるためなのか、憶えたことを思い出せなくなるためなのか？記憶減退に関する、最近のいくつかの理論を紹介しつつ、老人の記憶について考えてみよう。	星　薫 （放送大学助教授）
6	老人の知能	年をとると知能が低下する、と思われているが、これは老化性痴呆の病態などが極端に一般化されたものであることが多い。ここでは老人の知能の実際の姿について考察するが、百歳老人の知能や知能の病態としての痴呆についても触れ、考察を深めてみたい。	井上勝也 （筑波大学助教授）
7	老人の人格	老人になると人格は本当に変化するのであろうか、変化するとすればどのように変化するのであろうか？　又変化させる要因は何なのであろうか、以上のようなことに考察を加えながら老人の人格について論述する。	荒井保男

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	老人と性	人間の性は乳児の時代から意識や行動として顕在し、また潜在しながらも成長の過程をたどり、老年期に至っても消滅するものではない、ここでは老年期の性について行われた実態調査を紹介しながら、老年期の性について考察を加え、老婚の問題にもふれたい。	荒井保男
9	老人の生きがい（生きがい論）	生きがい、という問題は、人の口の端にのぼることは多いが、改めて生きがいを概念規定しようとすると、なかなか難しいものである。本講では、老年期になって人はなぜ急に生きがいを必要とするようになるのか、から考察を始め、生きがいの本質について論究する。	井上勝也
10	老人と社会	年をとって仕事から離れると、家族と地域社会の持つ意味が重要になってくる。また多くの人にとって老人のための社会制度やサービスが、生活して行く上で不可欠のものとなる。本講では老人にとって大切な社会のこれら3つの側面の現状と将来について考察する。	前田大作（日本社会事業大学教授）
11	老年期と死	老人は、死と背中合わせで生きている。一体老人は死をどのように受けとめ、そのなかでどのように生きてゆこうとしているのであろうか、ここでは、死の恐怖や、老人の死に対する態度について述べ、更に死にゆく人々の心理についても、考察を加える。	荒井保男
12	老年期の精神障害	老年期の精神障害一般について述べ、とくに老年期の痴呆について少しく詳述したい。	同上
13	痴呆性老人の心理とその扱い方	老年期痴呆の原因となる老年期の疾患と心理的特徴について述べる。ついで痴呆の種類による対応の仕方の違いについて口述する。特に、痴呆のとらえ方については、従来とは異なる考え方について触れながら、その扱い方の違いについて考えてみたい。	長嶋紀一
14	老齢者の言語問題 ―その心理とリハビリテーション―	老人にとって、老化現象は一般的事象で、その代表的問題に耳の「聴え」の衰えがある。いわゆる老人性難聴は言語障害に関連する。また、いわゆる老人病といわれる脳血管障害は、特に、失語症を併発する、失語病問題とそのリハビリテーションについて考察する。	内須川洸（筑波大学教授）
15	老年期を生きる	人が生きていくということは活動するということであろう。活動とは、周囲に対して、他者に対して、また生きんがために生じてくるもろもろの課題に対して、人が関係を実現していく過程である。この活動という観点から老人の問題を考えてみる。	宮川知彰（東北大学名誉教授）

＝障害児の心理と教育＝　（R）

〔主任講師：寺田　晃（東北大学教授）〕

全体のねらい

障害児の教育は、人間の尊厳を問い、教育の本質にせまるものである。本講では、前半に総論として、まずそうした障害児がどんな子どもなのか、診断・判断、研究法などを検討すると共に、後半の各論では、障害の各領域別に、心身の発達的特徴と教育、福祉の在り方などを一連に考え、障害児への一般的な理解を深めたい。

回	テ　ー　マ	内　容	担当講師（所属・氏名）
1	障害児とはどのような子どもか	障害児とはどのような子どもなのか、各障害の別に、その定義と類型を、主に心理学的、社会学的、医学・生理学的な見地から総合的に解説する。	寺田　晃（東北大学教授）
2	障害児教育の目的と歴史的発展	障害児に対する学校教育の理念と目的および目標、普通教育との内容・方法・評価面の違い、特殊教育の現状などを述べ、あわせて障害児に関する研究、教育（養育）一般の歴史的なあゆみについて概説する。	同　上
3	障害児の研究・教育の課題と方法	障害児の病理（身体・諸器官ほか）、心理（認知、人格・情動、社会的行動ほか）、教育（教育内容、方法ほか）の各分野にわたり、従来の研究・教育の概況と傾向を捉えるとともに、現下の教育・心理の研究の課題性を考え、研究法を指摘する。	田中　農夫男（宮城教育大学教授）
4	障害の原因と診断・判断	主に医学・生理学、心理学の見地から、障害児の心身に関する病理と障害の一般的様相を述べ、かつ医学、心理学による障害の測定・評価の方法ないし診断・判断の実際的技法と問題点などを解説する。	寺田　晃 村井　憲男（東北大学助教授）
5	発達と障害　Ⅰ －発達の仕組みと障害－	発達とは一般にどんな機構と段階とを経て展開するものであるのかを、個体発生の側面から検討し、従来の発達理論を紹介するとともに、発達に対処して障害がいかに位置づけられるかを考える。	寺田　晃
6	発達と障害　Ⅱ －障害児と家庭・学校および社会－	発達における親の役割と意義、障害にかかわる家庭的条件、学校教育・社会生活の諸問題などを概観し、その考察から発達と障害の二次的効果を指摘するとともに、家庭・学校・社会の在り方を検討する。	寺田　晃 仁平　義明（東北大学助教授）
7	感覚障害論　Ⅰ －視覚障害児の心理と教育－	視覚障害児の身体、認知能力、学習能力、人格・情動、社会的行動などを通して、視覚障害児の心理的な発達と特徴を概観するとともに、主に盲学校での教育の現状と適切化を検討する。	田中　農夫男

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	感覚障害論　Ⅱ －聴覚障害児の 心理と教育－	聴覚障害者（言語障害を含む）の身体、認知能力、学習能力、人格・情動、社会的行動の各発達と特徴を把握し、主に聾学校教育の現状と最適化を考えることにより、感覚障害論をまとめる。	菅原廣一 （国立特殊教育 総合研究所室長）
9	身体・運動障害論 Ⅰ－肢体不自由児 の心理と教育－	主に医学・生理学、心理学の立場で肢体不自由児の身体・運動の能力の発達と特徴を捉え、治療教育ならびに職業的リハビリテーションの現状と養護学校教育の最適化を検討する。	田川元康 （和歌山大学教授）
10	身体・運動障害論 Ⅱ－病弱児・虚弱 児の心理と教育－	前章と同様な立場で、病弱児・虚弱児の身体と運動面の障害特徴、心身発達の相互関連性を論じ、健常児への復帰、養護学校教育の現状と指導の最適化を考察し、身体・運動障害論をまとめる。	寺田　晃 村井憲男
11	精神発達障害論 Ⅰ－精神薄弱児の 心理と教育－	精神薄弱児の身体・運動の能力、認知能力、人格・情動ならびに社会的行動の発達的特徴を述べ、特殊学級、養護学校、施設における教育・訓練の現状と適切化、社会的適応等をまとめる。	寺田　晃
12	精神発達障害論 Ⅱ－自閉症児の心 理と教育－	自閉症児の心理諸機能の発達と特徴を論じ、あわせて家庭・学校・施設等での教育・訓練および養育の現状と、指導の適切化、社会的適応等を論じ、精神発達障害論をまとめる。	小松教之 （宮城教育大学教授）
13	情緒・行動障害論 Ⅰ－情緒障害児の 心理と教育－	登校拒否、非行等、いわゆる情緒障害児の心身諸機能の諸特徴を述べ、家庭教育と学校教育の現状、指導および教育相談の在り方などを、非社会的ならびに反社会的な問題行動型について論じる。	大山正博 （東北学院大学教授）
14	情緒・行動障害論 Ⅱ－学業不振児の 心理と教育－	学業不振と学習障害の定義および類型、診断と判断等について述べ、心理的、環境的側面からの特徴と不振の原因を指摘することにより、家庭教育と学校教育、教育相談等を中心とした指導、措置の適切な在り方を考える。	寺田　晃
15	障害児の福祉と教育の展望	障害児の福祉の理念と構造、福祉行政実践の現況等を概観するとともに、第7章から第14章までの各障害型の特徴を総括することにより、福祉と教育の今後の在り方、問題点を展望する。	同　上

＝言　語　障　害＝ (R)

〔主任講師：内須川　洸（筑波大学教授）〕

全体のねらい

言語障害の理解に必要な基礎知識を、生理・病理面、発達・学習面、言語関係面から学習する。さらに各論として、言語発達遅滞、吃音、音声障害、構音障害、器質的言語障害（口蓋裂・脳性マヒ・難聴に伴う言語障害等）、および成人の言語障害（失語症等）の各種問題について概述する。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	言語の基本的構造	言語の基本的構造の理解に必要な3点について解説する。(1)言語の2様式（音声言語・文字言語）、(2)言語のフィードバック機構、(3)音声言語の4大機能に関する要点を概述する。 本講義15回のオリエンテーションを行う。	内須川　洸 （筑波大学教授）
2	言語障害とは	言語障害の定義・分類について、主として米国における知見を基にして解説する。各種言語障害の出現率、特徴を概述したのち、言語障害の基本的理解に必須の課題について、いわゆる「ヴェンデル・ジョンソンの言語関係図」を参考にして学習する。	同　上
3	発達と言語障害	発達面より言語障害を考察し以下の点について解説する。(1)スピーチ・レディネス、(2)言語発達遅滞に係わる諸条件、(3)言語障害の心理的要因、(4)言語保健と言語関係。 言語障害の基礎問題に、言語学習と発達の課題が存在し、その基礎的知見を学習する。	同　上
4	言語障害の生理と病理(1)	言語表出面の生理と病理について以下の諸点の学習をする。(1)発声機構（呼吸器・発声器）、(2)構音機構（発語器・構音の仕組み）、(3)聴器の仕組み（外耳・中耳・内耳）但し神経機構を除く。	同　上
5	言語障害の生理と病理(2)	言語理解面の生理と病理について以下の諸点の学習をする。(1)言語活動の基礎としての脳機能、(2)大脳皮質の主要機能、(3)学習の生理学、(4)聴覚に係わる中枢神経過程（聴覚伝導路の仕組み）	同　上
6	言語発達遅滞の評価	本講義（6回目）以降、言語障害の各論に入る。言語発達遅滞の理解を深めるため、発達の診断・評価面を以下の通り重点的に解説する。(1)概念、(2)臨床的評価法、(3)各種検査法、(4)各種言語発達遅滞の臨床鑑別上の留意点。	同　上
7	言語発達遅滞の治療教育	言語発達遅滞の治療・教育面を中心として以下の課題の学習をする。(1)言語発達遅滞の基礎訓練法、(2)各種の言語発達促進法、(3)行動療法の活用、(4)言語関係法の活用、(5)米国のIYREAL法の紹介。	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	吃音の評価	吃音を診断・評価する方法について学習する。そのため言語・身体・心理の3側面の理解に必要な基礎知識について紹介し、吃音の環境論的理解、吃音児の臨床診断法について解説する。	内須川　洸
9	吃音の治療・教育	吃音の治療・指導・教育問題を中心として、幼児吃音、学童吃音、成人吃音の治療・指導上の相違点、共通点について概述する。また吃音児(者)の治療・教育上の留意点、各種治療法の特性を解説し、成人吃音のセルフ・ヘルプ・グループ活動について紹介する。	同　上
10	構音障害の諸問題	構音障害のさまざまな種類について紹介し、分類・原因・言語症状の特徴・治療経過・予後にふれながら、構音障害の診断・評価の手続、治療・訓練法についても解説する。また幼児語と構音問題にも言及する。	同　上
11	音声と音声障害の諸問題	音声障害の基礎問題として、音声の3要素、すなわち大きさ・高さ・音質にふれて考察するとともに、音声障害の発生を音声習得過程の不全、及び病理学的側面から解説する。また音声障害の種類・評価法・改善法についてもふれる。	同　上
12	聴覚と言語障害	聴力・聴覚の障害が言語障害の発生に及ぼす影響を考察し、基礎知識として、難聴の程度・種類・型について解説する。また難聴に伴う言語障害の特性や教育・指導法、補聴器の装用などの諸問題にふれる。	同　上
13	器質的言語障害と重複障害	器質的言語障害のさまざまな種類について解説し、とくに口蓋裂、脳性マヒ、発達性失語、微細脳機能障害などに伴う言語障害問題にふれる。なお障害の重複化傾向に関し、重複害児教育について紹介する。	同　上
14	成人の言語障害とリハビリテーション	新たに成人の言語障害問題をとり上げ、失語症、マヒ性構音障害、発語失行について解説する。失語症の定義、出現率、診断と治療問題について、言語障害面から考察し、合わせてリハビリテーション問題にふれる。	同　上
15	言語障害児教育の現況と展望	最後に、我が国の言語障害問題を概観し、スピーチ・セラピーの現況、言語障害児教育の現状を考察する。また諸外国の状況と対比しつつ、今後の課題、展望について解説する。	同　上

＝学習心理学＝（TV）

〔主任講師：金城辰夫（専修大学教授）〕

全体のねらい

固体は、種々の環境との相互作用のなかで発達していくが、経験や教育を通じて環境への対処の方式が修得され変化していく側面は「学習」とよばれる。その学習の過程あるいは仕組みに関する心理学的な理論や研究を中心に、事例も交えながら解説していく。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	学習とは	発達には成熟的側面と学習的側面のあることを示し、学習のもつ意義ならびに学習の諸定義を述べたうえで、現段階での心理学的アプローチの範囲（各国で取り上げられるテーマ）を紹介し、取り上げられない領域のあることにも言及する。	金城辰夫（専修大学文学部教授）	金城辰夫（専修大学文学部教授）
2	初期的学習	生後比較的間もない時期の経験効果の重要性を示すいくつかの動物研究－体性知覚制限実験、視知覚制限実験、母子分離飼育実験、インプリンティグ（刷り込み）研究－を紹介し解説を加える。	同上	同上
3	条件づけ学習(1)	条件づけの２つのタイプとして、パブロフ型（古典的）とオペラント型（道具的）のあることを示し、とくにパブロフ型の条件づけにおける強化・消去・般化・分化といった基礎的過程について例示しながら解説する。	同上	同上
4	条件づけ学習(2)	オペラント型条件づけとしての報酬訓練、逃避・同避訓練、罰訓練におけるそれぞれの基礎的過程について述べ、弁別学習を詳しく取り上げる。そのほか、味覚嫌悪や学習性無気力の研究例や、できれば行動療法の実例にも触れる。	同上	同上
5	動作学習	知覚―運動競技学習あるいは動作的技能の習熟の過程を中心に、フィードバック情報の重要性も含めていき、練習にあたっての分習法・全習法、集中法・分散法、高原現象の問題にも触れる。	同上	同上
6	言語の習得過程(1)	言語習得装置（ＬＡＤ）をもった乳幼児は、養育者との相互的コミュニケーションに含まれる言語習得支援システム（ＬＡＳＳ）を介して、共同的注目、支持、要請などの対話への原初的形式を習得し、言語使用へとすすむ、という過程について解説する。	萩野美佐子（上智大学講師）	萩野美佐子（上智大学講師）
7	言語の習得過程(2)	ここでは、言語の記号性を中心に、象徴行動や記号行動をみていき、チンパンジーの記号学習研究を紹介し、さらに、外言から内言への移行、内言による言語的思考、言語による行動調整の問題にも触れる。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	記憶の過程	すべての学習は記憶に依存するが、記憶は記銘（符号化）・保持（貯蔵）・想起（検索）の3機能からなることを情報処理模型などにしたがって解説し、手続記憶と命題記憶のあることにも触れる。	篠原彰一（東京都立大学人文学部教授）	篠原彰一（東京都立大学人文学部教授）
9	記銘学習	学習すべき観念や知識が現段階では自分の知識体系には関係づけられず、そのままのかたちで丸暗記する機械的受容学習にあたっての諸現象ならびにその際の忘却過程などについて解説する。	同上	同上
10	有意味受容学習	思考に際してのスキーマとしての意味ネットワークや物語スクリプトあるいは概念の典型（プロトタイプ）について解説し、そうした既得の知識体系に新しい知識を関係づけながら習得する過程を説明し、移転の問題にも触れる。	同上	同上
11	概念形成と推理	概念の外述－内包関係の習得過程を、幼児児童における概念形成研究や成人の概念達成研究を交えて解説し、さらに、推理における類推（転導）的・帰納的・演繹的といった諸形態を事例を用いて示す。	同上	同上
12	問題解決と発見学習	課題状況での行動的・思考的な試行錯誤や見通しや類推を通じての解決過程を解説し、その際の中心転換や水平思考の必要性に触れ、さらに発見学習における諸問題について述べる。	同上	同上
13	観察学習と役割行動形成	他者ないしモデルの行動観察を通じて攻連的行動や援助的行動が習得されることを示した研究を紹介し、代理強化・自己強化などについて解説し、併せて、社会的役割や性役割の認知と行動形成の問題も取り上げる。	安藤清志（東京女子大学文理学部助教授）	安藤清志（東京女子大学文理学部助教授）
14	態度・価値の形成	種々の対象への現象・魅力の形成、好意的非好意的態度の形成、ならびに態度変容にかかわる諸要因を解説し、さらに、規模認知や価値の問題にも触れ、道徳性の形成について発達的視点も交えて言及する。	同上	同上
15	学習と動機づけ	学習にたいする外発的動機づけとしての業と罰、内発的動機づけとしての達成欲求や知的好奇心ならびに自己効力感や自己実現傾向について解説し、それらと学習過程との関係を述べる。	金城辰夫（専修大学文学部教授）	金城辰夫（専修大学文学部教授）

＝認知心理学＝（TV）

（主任講師：小谷津孝明（慶應義塾大学教授）
主任講師：星　　薫（放送大学助教授））

全体のねらい

一言でいえば、認知とは意味づけて知る、創造的に知る、共感的に知る、ことの科学である。そこでは知覚、記憶、学習、理解、思考、推論、問題解決などの科学的研究が中心となる。ただし、ここでいう科学とはWissenschaft の意で、社会・人文科学を含み、単に自然科学のみを意味しない。本講では、素材を日常経験や文学・芸術、あるいは文化人類学等の領域にも求め、従来とかく認知特性の要素的、機械論的研究におわりがちであったのを改め、できるだけ人間の全体像を浮かび上がらせるよう心がけたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	なぜ認知心理学か	まず、認知とは何か、感覚や知覚とはどう区別されるのか、なぜその認知について研究がなされねばならないのか過去の心理学および関連諸学において認知がどのように論じあるいは研究されてきたか等について概述し、現在および将来の認知心理学のあり方（パラダイム）について述べる。	小谷津孝明（慶應義塾大学教授）	小谷津孝明（慶應義塾大学教授） 星　薫（放送大学助教授）
2	“もの”の認知	認知は物理的実在の単なるコピーではない。対象の認知（アイディンティヴィケーション：同定）が知識なくしては成り立たぬこと、その知識との照合のメカニズムの基礎的なモデル、枠組みの効果、補完・分節・平滑化といった能動的処理等について、情報処理的視点から述べる。	小谷津孝明 星　薫	同　上
3	“こと”の認知	われわれは単一の対象についてさえもしばしばそれ自体の同定をこえてその意味するところを認知する。それは概念や“こと”の認知であり、対象が複数であれば関係性の認知である。このことをめぐって「部分と全体」の問題をとりあげる。また“こと”の認識が「生」にたいしてもつ深いかかわりについて“眼と眼の世界”というテーマで話したい。	同　上	同　上
4	記憶の世界(1)	認知したもの・ことは記銘され、保持され、のち必要に応じて検索想起され、認知に資する。その記憶の仕組み（短期記憶と長期記憶、精緻化とスキーマ、注意と処理水準、意味記憶とエピソード記憶、意味ネットワーク、想起の再構成性）について、実験事実にもとづいて考える。	同　上	同　上
5	知的理解とそれを方向づけるもの	言語表現（談話・文章・諺・詩など）の理解とそれを方向づけるもの（フォーカシング：特定の述語・題・詞書など、枠組み：スキーマ・スクリプト・スーパーフレームなど）のはたらき、それらは思い込み、連想、類比、創造等によって支えられており、さらにそれらはメタ認知によって支配されていることなどについて述べる。	同　上	同　上
6	思考・推論・問題解決	思考とは知識構造の操作であり、その操作の方向はしばしば形式的論理よりも生活経験に基づく実際的知識に依拠する。そしてその結果はしばしば誤りや不十分な解に終わるが、大抵の場合現実の行動はその可能性のチェックを含まない。それはなぜか。また逆に、課題が具体的実際的であると解決は容易になるが、それは人の発達的水準や社会文化的水準の違いに対して不変であろうか。	小谷津孝明	同　上
7	記憶の世界(2)	想起からみた4種類の記憶の重層性とその神経生理学的解体と精神医学的解体について、“記憶の座”（左脳・右脳、機能の局在）という視点と“人間の実存”という視点から論じてみたい。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	共感的理解と主客融合の視点	人の実存にとって最も重要なのは自己と他者との「間主観的理解」だ。それは他者の身体的・言語的表現を通してその意図や気持ちを知的のみならず共感的に理解することを要請する。伝説や文学・芸術作品を素材にして記憶と関連させながらのべる	小谷津孝明	小谷津孝明 星　薫
9	記憶の世界(3)	自己の最幼児期記憶はどこまで遡って想起できるか、フロイトの名付けた小児期健忘症は本当に彼のいうようにスクリーンメモリで説明できるのか、記憶喪失は自己像に何をもたらすかなど、自然的状況における記憶について考える。	同　上	同　上
10	こころの原風景	幼児期に経験したシーンの記憶のうち成人してからの自己の認識のありようを大きく支配しているものがある。これを原風景と呼ぶ。これは陽性的なものと陰性的なものがあるが、後者の典型は“精神的外傷”であろう。これらの記憶メカニズムはどのように考えたらよいのか。	小谷津孝明 星　薫	同　上
11	心の構図を描く	これまで主として“心のはたらき”について考えてきた。心理学の中で心という概念を心理学の対象とすることに反対する立場があるが、この辺で“心”の構図を描いてみたい。	同　上	同　上
12	認知の性差 －男性性と女性性－	認知や行動のありようは主体の態度、性格、期待される役割などに大きく依存する。これらの問題は認知スタイル、社会的認知の問題にかかわる。本章ではとくに“期待される性役割”を発達の次元上でとらえ、これと認知のあり方について述べる。	岩男寿美子(慶應義塾大学教授)	岩男寿美子(慶應義塾大学教授) 小谷津孝明 星　薫
13	老人の認知	今日、人の寿命は伸び、一方で子どもの出生率は夫婦一組あたり1.53という。これから間違いなく高齢化社会がやってくる。本章では内科医であり老人心理学者である講師を迎え、老人のこころとそのはたらき、考え方について話して頂く。	荒井保男(飯山医院長)	荒井保男(飯山医院長) 小谷津孝明 星　薫
14	おもいやりと看護のこころ	思いやりは自己中心的思考から他者中心的思考への切り替えを要請する。それを仲立ちするものは共感的理解である。それはまた愛他心、アルトゥルィズムの問題でもある。これらについて看護の問題と絡めて考える。	小谷津孝明	小谷津孝明
15	認知心理学的自己実現のすすめ	最後に再び「なぜ認知心理学か」に立ち返り、自己の今からのありように思いをいたす時をもちたい。そこでは、「知と感動のエートス」が主題となろう。	同　上	同　上

＝カウンセリング＝（R）

〔主任講師：佐治守夫（日精研・心理臨床センター所長／東京大学名誉教授）〕

全体のねらい

カウンセリングについて、その基本的な理論と、実践上の技法を学ぶことを目標とする。その際、歴史的な発展過程を見ながら、著名な理論家の考えを紹介し、カウンセラーとして必要な基本的態度、倫理上の問題、関連する領域や社会一般との関係や要請の問題、訓練の方法などにも触れる。事例をとりあげて理解に役立たせる。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	序論 カウンセリングとは何か	教育相談、カウンセリング、心理治療などさまざまな言葉で広義の人間の「心」の問題に対する援助活動がなされている。その領域は広範で、子供から老人に亘り、個人の問題から、家庭、学校、地域社会への働きかけと限りなくひろがる。その根本の考え方は？	佐治守夫（日精研・心理臨床センター所長）（東京大学名誉教授）	
2	カウンセラー・心理治療者の領域と問題点	医療の領域（エリック・キャッセルの考を援用）、福祉更生施設、教育の施設、矯正・保護・司法の領域、産業の領域、個人開業の領域について、実例を上げて述べる。	同上	同上
3	カウンセリングの定義(1)	カウンセリングの定義は、後にのべる様々な理論によって微妙な相違がある。ここでは包括的に、今日通用していると思われる定義についてのべる。	同上	同上
4	カウンセリングの定義(2)	カウンセリングの定義(1)をふまえて、重要なポイントをとりあげて詳説する。カウンセリングは、様々なパーソナリティ論を基本においていること、人間の成熟、健康についての考え方と密着していることについて考える。	同上	同上
5	クライエントに変化をもらたす要因としての関係	2、3、4回でのべたことを更に進めて、特に「望まして特殊な対人関係」というキイ・ワードをとりあげる。クライリントが今まで体験したこととは異質な「カウンセリングの場」での対人関係が、成立、成熟、より一層の健康への変化をもたらす。	同上	同上
6	カウンセリング、治療理論の曙光（歴史的展開Ⅰ）	フロイトの精神分析学が生まれるまでの力動精神医学・心理学の黎明の時期について、「アントン・メスメルの動物磁気」「シャルニーやジャネー」の考え方を述べる。催眠（療法）として後に成立する見方と、ヒステリーとの関連はこの時期に芽生える。	同上	同上
7	ブロイエルとフロイト（歴史的展開2）	前回をうけて、ブロイエル、フロイトが、アンナ・Oの治療に関して発見した、「除反応」「カタルシス」について述べ、その今日的意味についてのべる。除反応をよびおこすための「催眠法」から、フロイトの「自由連想」への展開を考える。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	フロイトの基本的発見とその理論（歴史的展開Ⅰ）	「自由連想法」を用いることによって、フロイトの、「抵抗」と「抑圧」、「不安と防御」、「性的衝動」、「精神力学」などの発見と、その理論について述べる。	佐治守夫	
9	ユングの理論と実践（フロイト以後1）	ユングのフロイトからの離脱と、彼の理論の発展にふれる。「全体的自己」「投影、その他の症状」「集合的、普遍的無意識」「ユングのコンプレックス」などは、フロイトにはなかった、相補性、夢についての新らしい見方などを展開させる。	同上	同上
10	新フロイト派とロジャースの貢献（フロイト以後Ⅱ）	アメリカで花開いた、サリバン、ホーネイ、フロム、ライヒマンなどのフロイト左派（社会学派）といわれる人達の「文化的影響」の説について述べる。その一つの流れともいえる、ロジャースの「クライエント中心療法」の意味を考える。	同上	同上
11	ロジャースにおける治療関係の意味	ロジャースの「人格変化に必要にして十分な条件」をとりあげて、カウンセリングにおける治療関係の意味を、新らしく見直す作業の大切さを考える。	同上	同上
12	カウンセリングにおける治療的変化の様相	カウンセリング場面で生じる治療的変化について、具体的な変化がどのように公式化されるかを述べる。	同上	同上
13	治療的面接（カウンセリング）の実際(1)	事例をあげて、今までのべてきたことが、どのように実践されるか詳述する。この回では、クライエントとはじめて出会うにあたっての注意すべき点を考える。	同上	同上
14	治療的面接（カウンセリング）の実際(2)	同じ事例について、抵抗、転移、夢の扱い法などを考える。同時にカウンセラー側の反対転移や、以前の面接をどのようにうけとり直し、そこでどのような修正をクライリントとの間で考え、実践するかなどを取りあげる。	同上	同上
15	治療的面接（カウンセリング）の実際(3)	カウンセリングの終始に向ってのカウンセラーの留意すべき諸点をとりあげる。同時にカウンセラーとして今まで見逃していた面がこの時期にあらわれること、一人の人間について、その全体を理解し、うけとることの困難さに言及する。	同上	同上

＝青年の心理と教育＝（R）

〔主任講師：久世敏雄（名古屋大学教授）〕

全体のねらい

子どもからおとなへの過渡期としての青年期は、個性化と社会化の時期であり、主体的、自覚的に人格を形成する時期である。本書では、青年心理学の基本的問題にふれ、青年期の特徴を人格形成の視点からとらえ、青年の意識と行動を理解するとともに、青年に対する働きかけ（教育）について考察することを意図したものである。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	青年期とは―「青年」の誕生	「青年心理学」の誕生は、青年期の存在の発見であり、その発掘の開始であった。このことについて考えてみよう。	宮川知彰（東北大学名誉教授）	宮川知彰（東北大学名誉教授）
2	青年心理学の研究法―方法論と方法	青年心理学の課題を検討し、その課題を明らかにする方法論―研究の基本的考え方と方法について考察する。このさい、青年を対象とすることから生ずる困難さと特殊性についてふれる。さらに、青年心理学で利用されてきた方法、技法について述べる。	久世敏雄（名古屋大学教授）	久世敏雄（名古屋大学教授）
3	青年期のからだと心―からだとの出会いと性の問題	身体的成熟（特に第二次性徴の発現）が青年の心理面にどのような影響を及ぼすのか。性的成熟を通して、青年がどのような問題に直面し解決していかなければならないのか。男の子・女の子から男性・女性としていかに自己を確立していかなければならないのか。	福富護（東京学芸大学教授）	福富護（東京学芸大学教授）
4	進路選択―青年の発達課題	青年期は、複数の進路可能性の中から、自らの進路を決定していく時期でもある。現代の日本社会というしくみの中で、青年達はどのように進路を選択しているのか、青年期の発達課題とのかかわりを通して、その実態と援助のあり方について考察を進める。	片岡彰（東北大学助手）	片岡彰（東北大学助手）
5	反抗―人生・社会と青年	青年期の発達課題が自我の確立であることは、良く知られている事実である。青年が主体的な自己を確立する過程で、常に対面するのは既成社会の権威である。青年が社会とどのように関わりながら発達していくかを「反抗」を中心にして考えてみよう。	佐竹宣夫（芝浦工業大学教授）	佐竹宣夫（芝浦工業大学教授）
6	友情と仲間―青年と集団活動	青年が同年令集団の中で、特定の友人と強い信頼関係を形成するのは、青年の自我の確立の過程で大きな意味を持っている。青年の友情がどのように形成され、それが青年期の発達にどんな意味を持つのかを考えてみよう。	同上	同上
7	青年の生活構造―学習と余暇の活動を中心として	青年期における人間形成にとって特別な重要性を持つ活動として、学習と余暇をあげることが出来る。多くの青年達が高等学校、大学に通う生活を送っている現在、学習と余暇はその生活の中心となる位置を占めている。この二つの活動の意義について考えてみる。	斉藤耕二（東京学芸大学教授）	斉藤耕二（東京学芸大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	今日の女子青年－女子青年と職業	ライフ・サイクルの変化、出生率の減少、高学歴化などによって女性の就業が増大している。男女雇用均等法が施行されても、雇用条件の性差別が解消される見通しもない。こうした就業構造のなかで変動する女子青年の職業観、結婚観や性役割観などを考察する。	江川　亮（芝浦工業大学教授）	江川　亮（芝浦工業大学教授）
9	今日の勤労青年－その職業観と勤労観	いわゆる技術革新の進展のもとで、人間労働の単純化、細分化、規制化が進行している。その職場で、単調労働を強いられる青年たちの職業観や勤労観についての調査からいま、彼らが職場や仕事に求めているものは何かを考えてみたい。	同　上	同　上
10	青年の精神病理－思春期心身症、登校拒否、自殺、留年、性の問題	青年期には、精神内界の均衡を保ちながらおとな社会に適応できる人格を形成していくことが期待されるが、体の急激な変化や環境刺激がストレスとして作用し非適応状態を招くことがある。ここでは、精神的な病理現象を通して青年の心理について理解を深める。	中村雅知（東北大学助教授）	中村雅知（東北大学助教授）
11	青年のつまずき－非行、暴力、いじめ	青年の非適応のもう一つの現れは、他者とのかかわりの領域においてである。非行・暴力・いじめには、いきいきとした生への意欲と他者への思いやりが失われている。ここでは、逸脱行動を通して、彼らのつまずきと、これらへの対処の仕方を考えてみる。	同　上	同　上
12	青年の活動意欲－「やる気」「生きがい」の問題	現代の青年は、どのような物の事柄に価値を置いて行動しているのか。現代青年の「生きがい」「価値意識」の実態を検討しながら、青年の行動の源泉としての「やる気」「活動意欲」を考察する。	片岡　彰	片岡　彰
13	青年文化論－青年期における社会化と世代	現代社会では、青年達は、成人や子供達とは異なった、独自な文化を持っている。この青年文化の特質、心理的機能を検討して、青年期と社会の関係についての理解を深める。	斉藤耕二	斉藤耕二
14	現代の青年論－アイデンティティ、アパシー、etc.	－昭和20年以降の、わが国の「青年理解」がなされてきた道筋に沿って、生物学的、社会的、世代的要因、さらにコーホートと歴史の要因にふれ、現代の青年論－アイデンティティ、アパシーなどについて述べる。	久世敏雄	久世敏雄
15	青年心理学と教育－青年心理学小史	青年心理学はその誕生の当初から、青年の教育について積極的に提言してきた。この事情は、わが国の青年心理学においても変わらない。日本における青年心理学の誕生について考えてみよう。	宮川知彰	宮川知彰

＝犯　罪　と　刑　法＝　(R)

〔主任講師：内藤　謙（創価大学教授）〕

全体のねらい

現代社会における犯罪現象に対して刑法がどのように対応しているかを、近代刑法の展開という視点から検討する。犯罪とは何か、刑罰とは何かという基本的な問題の考察が中心になるが、現代社会が犯罪と刑法について提起しているさまざまの問題を手がかりにして具体的に説明することにしたい。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	犯罪現象と法の機能	犯罪現象に対する法の機能を、犯罪現象は、法を超える領域とも、また、刑事法以外の法領域ともかかわりをもっていることを視野に入れて、近代法の展開という視点から検討する。	内藤　謙（創価大学教授）
2	刑法の基本問題―刑法と国家	近代・現代の社会では、犯罪に対して刑罰を加える権能をもっているのは、国家だけである。そこで、このような国家刑罰権の根拠と限界をどのような方向にむかって考えるべきかを検討する。	同　上
3	罪刑法定主義	近代刑法の基本原理である罪刑法定主義の沿革、実質的・政治的根拠を考察するとともに、罪刑法定主義の内容と現代的意義について検討する。	同　上
4	刑法の機能	近代刑法の機能には、罪刑法定主義と結びつく人権保障機能、および、法益保護機能がある。この法益保護機能の内容を検討し、現代の問題状況と刑法の機能について考察する。	同　上
5	刑法理論の系譜と「学派の争い」	近代刑法理論の展開過程を、市民社会の成立期に形成・展開した前期旧派理論、それに続く後期旧派理論、さらに、旧派に対抗する新派理論について検討し、新旧両派の「学派の争い」を考察する。	同　上
6	日本刑法典の史的展開と現代刑法理論の基本動向	日本の旧刑法典・現行刑法典の成立とその特色を、刑法理論の系譜との関連で考察する。そして、現代刑法理論の基本動向を、日本、英米、フランス、西ドイツについて概観する。	同　上
7	犯罪論の構成と構成要件該当性―犯罪論の諸問題(1)	刑法解釈学における犯罪の定義と犯罪論の構成について、その基本的内容と特色を検討する。そして、作為犯・不作為犯、因果関係を構成要件該当性の問題としてとりあげる。	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	違法性と責任―犯罪論の諸問題(2)	違法の実質、正当防衛、緊急避難、法令行為・正当業務行為を違法性の問題として検討する。さらに、故意・過失、責任能力、違法性の意識、期待可能性を責任の問題として検討する。	内藤　謙
9	未遂犯と共犯、客観主義と主観主義―犯罪論の諸問題(3)	未遂犯に関連する問題と、共犯に関連する問題を検討する。そして、犯罪論における基本的な考え方の違いである、客観主義と主観主義の対立について考察する。	同　上
10	個人的法益に対する罪(1)―生命・身体・自由の保護	殺人罪・傷害罪・住居侵入罪などの個人的法益に対する罪について概観する。そして、脳死・安楽死・尊厳死がどのような視点から刑法上の問題になっているかをも検討する。	同　上
11	個人的法益に対する罪(2)―名誉・信用・秘密の保護、および、財産の保護	名誉などに対する罪、および、窃盗罪・強盗罪・詐欺罪・横領罪・背任罪などの個人の財産に対する罪について概観する。そして、最近の刑法一部改正で規定されたコンピュータ犯罪をもとりあげる。	同　上
12	社会的法益に対する罪―不特定・多数の人びとの生活利益の保護	放火罪などの人びとの生命・身体・財産に対する罪、文書偽造罪などの取引手段の信用に対する罪、猥　文書頒布罪などの性的感情に対する罪について概観し、コンピュータ犯罪にも触れる。	同　上
13	国家的法益に対する罪―国家の存立とその作用の保護	内乱罪などの国家の存立に対する罪、公務執行妨害罪・偽証罪などの国家の作用に対する罪、職権濫用罪・収賄罪などの国家機関による罪について概観する。	同　上
14	刑罰論の基本問題	刑罰の根拠と限界の問題について、応報刑論か目的刑論かという従来の一般的論議を検討し、問題解決の方向を考える。そして、刑罰の種類と内容について、日本の現行法を中心に考察する。	同　上
15	刑事政策の現代的問題	法制度の全面改正が問題になっているものとして、自由刑の執行内容を規定する行刑法と保安処分とがある。この２つの問題について、改正作業の動向に注目しながら、検討する。	同　上

＝裁判と市民生活＝（TV）

〔主任講師：井上治典（九州大学教授）
主任講師：三井　誠（神戸大学教授）〕

全体のねらい

近時、裁判に対する関心は高まってきてはいるが、日常的な市民生活にかかわる問題領域での裁判の「素顔」は、案外知られていない。また、司法といえば、裁判所の手続きだけを思いうかべる傾向がある。いったい裁判とは何なのか、市民生活にとって裁判所はどのような存在なのかを明らかにしていくことを通じて、司法制度とその作用をみるたしかな「眼を養いたい。講義の前半部分は民事（井上）を、後半部分は刑事（三井）を取り扱い、最終会で全体のまとめを行う（井上・三井）。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	紛争とその処理手続き	紛争 紛争解決手続きの諸方式 紛争解決機構一覧 紛争解決手続きの役割と手続き相互の関係 訴訟の位置づけと特徴	井上治典 （九州大学教授）
2	民事手続きの流れと原理	訴訟の準備　　執行手続き 訴訟のはじまり　　民事訴訟法の原理 主張と立証 弁論の終了と手続きの結末 上訴と再審	同　上
3	裁判に対する利用者の期待と弁護士の役割	裁判の理念と現実 正しい裁判に対する期待 裁判における弁護士の役割	同　上
4	法廷における対話のあり方 ― 口頭弁論の意味とあり方を考える	口頭弁論の必要性 現行の口頭弁論の問題点 弁論らしい弁論のために	同　上
5	訴訟と政策形成 ― 嫌煙権訴訟の分析	現代型訴訟の特徴 嫌煙権訴訟 訴訟による法（政策）形成	同　上
6	少額紛争と裁判所 ― 簡易裁判所を考える	少額事件と簡易裁判所 アメリカ合衆国の少額裁判所 わが国の現状といくつかの提言	同　上
7	和解と調停	利用状況と効用 和解と調停と法原則 和解・調停の運用	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	刑事手続きの流れと原理	刑事手続きと民事手続きの異同 捜査 公訴の提起と公判準備 公判 上訴・確定後救済手続き 刑事手続きの流れをどうみるか	三井　誠 （神戸大学教授）
9	捜査と人権	被疑者の取調べ　密室における取調べ 取調べの特徴　取調べ問題の今後 取調べの必要性 取調べ受認義務はあるか 勾留された被疑者はどこに収容されるか	同上
10	検察官の役割	検察官の活動・性格 起訴処分 不起訴処分 制度の特徴 現行制度・運用の功罪 「検察官司法」	同上
11	刑事裁判官の役割	ある事例より 裁判所(官)の活動 事実認定 — 証拠法則 自由心証の内容 事実認定論の今後	同上
12	刑事弁護人の役割	刑事弁護とは 起訴前の弁護活動 被疑者と弁護人との接見交通 接見指定 指定をめぐる論議と接見の実情	同上
13	市民の刑事司法への参加	刑事手続きの関与者 検察審査会制度 陪審制度	同上
14	刑事事件からみた戦後史	「時代を映す鏡」 刑事事件と刑事司法 事件と刑事手続き 戦後「刑事手続き」史	同上
15	司法制度を考える	法廷の傍聴 展望 — 民事の角度から 展望 — 刑事の角度から	井上治典 三井　誠

＝ 民　　法 ＝ （TV）

〔主任講師：山田卓生（横浜国立大学教授）〕

全体のねらい

民法は私人間の紛争を解決する基準（規範）である。民法は財産法と家族法に分けられるが、ここでは財産に関する法を中心にする。民法の全体は量的に膨大なので、基本的な制度を取り上げ、具体的事例をもとにしながら、民法の仕組み、民事紛争を法によって解決することの意味を考え、法的なものの考え方の修得を目指す。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	民法とはなにか	民法とその周辺の特別法の成立過程及び法構造を概観し、更に民法を補充拡充する慣習法、判例法の役割を見る。次に民法を具体的事件に適用するにあたっての種々の解釈方法と、裁判基準、先例と具体的妥当性との関係を考える。	山田卓生（横浜国立大学教授）
2	権利と権利主体	財産取引、財産権の主体として人と法人がある。あらゆる人は生まれながらにして権利主体性（権利能力）をもつが、一定の者は行為能力が制限される。法律の根拠により設立される法人は、経済取引において極めて重要な役割を果している。	同　上
3	法律行為	民法の中心概念として法律行為と意思表示がある。民法においては法律行為自由の原則が支配するが、法律行為の内容は公序良俗に反してはならない。意思が外部的表示とくいちがう場合の表意者の保護制度としての錯誤、詐欺、強迫について考える。	同　上
4	代　理	代理は法律行為を他人に委ねるもので、極めて頻繁に利用されている。代理には本人の能力を補充するものと、本人の活動を拡大するものとがある。代理は便利であり不可欠であるが、代理権のない者が代理人と称した場合どうなるかの問題（表見代理）がある。	同　上
5	時　効	民法は時間の経過により権利の消滅または権利の取得という効力を付与する時効制度を設けている。時効はこれにより利益をうる者の援用を要件としているほか、放棄もできるとされている。時効の援用、中断などは時効制度をどのように理解するかと関連する。	同　上
6	物　権	民法上の権利は物権と債権に大別される。物権は物に対する支配権であり、所有権とその他の物権がある。物権には対世的な効力があるため、権利関係を公示する必要がある。不動産に関する登記制度と動産取引における占有について考える。	同　上
7	担保物権	担保物権は、債権を担保するために物の価値を優先的に把握するものである。不動産を担保にする方法としては、抵当権が代表的であり、変形として仮登記担保がある。動産を担保にする方法として、民法は質権をおくが、他に譲渡担保という方法がある。	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	債権の効力	債権者は債務者に対してどのようなことをもとめうるか。債務者が任意に履行（弁済）すればよいが、履行しない場合、強制的な履行を求めうるほか、債務不履行による損害賠償を求めることができる。債権を他人に譲渡する場合の法律関係（債権譲渡）も考える。	山田卓生
9	債権の保全と担保	債権者は債務の履行を確実なものとするために、債務者の権利を代位行使（債権者代位権）したり、債務者のなした行為を否認する（債権者取消権）ことも出来る。更に事前に保証人を要求するとか、債務を連帯にするかたちで債権の効力を強化することもできる。	同上
10	契約	契約は法律行為の中で最も重要である。契約は当事者が自由に形成できるのが原則である。契約は民法の定めるものの他多種多様のものがあり、有償か、双務か、要式か、等の基準で分類できる。次いで契約の拘束力と契約の解除の場合の法律関係を考える。	同上
11	売買	売買契約は契約の中で最も日常的一般的なものである。売買の成立要件、予約、手付の意味を考えたあと、売買の目的物の瑕疵（欠陥）によって、買主が損害を受けた場合の救済手段を扱う。次いで割賦販売、訪問販売など新しい契約の問題点について考える。	同上
12	賃貸借	賃貸借は他人の物を借りて利用する契約である。とりわけ土地と建物の賃貸借が重要である。土地については民法のほか借地法があり、長期にわたる利用関係を規律している。建物については借家法があり、賃借人の居住を保護している。	同上
13	請負・委任	他人の労務を利用する契約として雇用、請負、委任がある。このうち雇用は労働法で扱われる。建物の建設のような請負契約は、仕事の完成を目的とするものであり、委任は事務処理を委託するもので、受任者の利益を実現する行為に対して報酬が支払われる。	同上
14	不法行為…要件論	テクノロジーの発達、社会生活の複雑化に伴ない、思わぬ損害を与えたり、損害を被むることが起きてくる。そうした場合誰に対して如何なる要件のもとに損害賠償を求めうるか。損害賠償の要件を定める民法と膨大な判例によりながら、各種の責任について考える。	同上
15	不法行為…損害論	損害を受けた者はいかなる内容の賠償を請求できるか。損害は金銭賠償を原則とする。人的損害については、積極損害、消極損害（うべかりし利益）、慰謝料があり、物的損害としては経済的損失が中心になる。損害算定にあたって考慮すべき事由も問題になる。	同上

＝家　族　法＝（TV）

〔主任講師：鍛冶良堅（明治大学教授）〕

全体のねらい

家族は、社会の基礎的単位といわれるように、社会を支える人的結合関係の基礎をなしている。それ故、国家は、家族のあり方に強い関心をはらうのが常である。わが国の家族関係を規律する法律制度の中心は、民法の親族編・相続編であるが、その解説を通じて、それが現実にどのように機能しているかをみてゆきたい。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	家族法の変遷	近代的民法典としてわが国で最初に立案されたいわゆる旧民法が、施行無期延期となった経緯と、その後に制定された明治民法が少しずつ変質しつつ第二次大戦後の「家」制度の廃止につながり、やがて現行親族編・相続編の成立に至った過程を概観する。	鍛冶良堅（明治大学教授）
2	婚姻の成立	わが国は届出婚主義をとっているが、その意義を考えることを通じて、法律婚主義と事実婚主義、婚姻届に対する成立要件説と効力要件説の対立、さらに婚姻成立の形式的要件・実質的要件等について解説する。	同上
3	婚姻の効力	婚姻の成立によって発生する夫婦の身分上の権利・義務について解説し、同時に戸籍制度の仕組についても言及したい。そして、これらの解説と合わせて、法律上の婚姻と内縁との差異についても説明する。	同上
4	夫婦財産制	夫婦の財産関係につき民法は、契約財産制と法定財産制の二つの制度を用意しているが、圧倒的多数は法定財産制に従っている。その法定財産制の構造を、夫婦の団体性とのからみにおいて明らかにしてゆきたい。	同上
5	離婚	わが国は、離婚に関し、協議離婚、調停離婚、審判離婚、判決離婚の四種を認めている。その要点を、1970年代以降に強まっている世界の破綻主義の傾向との対比で説明し、合わせて離婚後の財産や子の措置等についても説明したい。	同上
6	親子関係(1) ―実親子関係	親子関係は、血族関係の基本をなしているが、ここでは自然の血縁に基づく実親子関係をとりあげ、嫡出子と非嫡出子の区別を通じて、親子関係の推定制度および認知制度について説明し、最後に準正制度に及びたい。	同上
7	親子関係(2) ―養親子関係	養子制度は、実親子でないものに対して擬制的親子関係を創設する制度で、現行法が認める唯一の法定血族関係であるが、その存在理由をたずねつつ、従来からある普通養子制度と昭和63年1月から新設施行された特別養子制度について説明し、離縁にも及びたい。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	親権・後見	近代的親権が権利性よりは義務性を中核としていること、その反映として利益相反行為の禁止や親権喪失の問題が生じること、そして、未成年者に親権者が欠けた場合の保護や禁治産者の保護を目的とした後見制度について説明する。	鍛冶良堅
9	扶養	自己の資産収入によって生活することができないものの生存の維持は、親族間の私的扶養もしくは国・地方自治体による公的扶助に頼るほかない。その両者の関係をまず考察しながら、次いで親族間の私的扶養制度の仕組について説明する。	同上
10	相続制度の仕組	死後における財産承継制度の存在理由について考えつつ、法定承継制度と遺言との関係、当然承継の原則と相続の承認・放棄の自由との関係、そして、財産分離の制度についても説明したい。	同上
11	相続人	法定承継制度において、どの範囲のものが相続人となり、それらのものたちの間の順位はどうなるか、また、推定相続人の欠格事由や廃除事由等について説明し、最後に相続人がいない場合の遺産に対する措置についても説明する。	同上
12	相続分	数人のものが同順位で相続人となる場合の相続の割合が相続分であるが、それには法定相続分と指定相続分がある。また、法定相続分によって相続するのでは共同相続人間に具体的不公平が生じる場合に対処する特別受益者の相続分や寄与分制度についても説明する。	同上
13	遺産分割	単独相続の場合には遺産分割は問題とならないが、今日では共同相続が原則といってよい。ここでは、共同相続人間の遺産分割方法について解説し、合わせて、遺産の帰属とくに債務の帰属の問題を考え、さらに相続分の譲渡の問題にも言及したい。	同上
14	遺言の方式	遺言は、自分の死後に、自分の意思に基づいて身分上および財産上の効果が生じることを期待して行うものであるが、その遺言が厳格な方式を要求され、遺言能力や遺言事項が限定されている理由を考えつつ、法律で定められた各種の遺言の方式について説明する。	同上
15	遺言の効力	民法の相続編第七章「遺言」の第三節「遺言の効力」では、主として遺贈の問題を扱っているが、ここでは、その要点を簡単に説明し、さらに、遺言の撤回の自由の問題、および遺言の自由に限界を画する遺留分制度について説明する。	同上

＝商法Ⅰ＝（R）

〔主任講師：関　俊彦（東北大学教授）〕

全体のねらい

我が国には1899年に制定された「商法」がある。商法とは通常、法章典をさすが、すべての国に商法典があるわけではない。

この講義では、日本の商法典を中心に必要ならこれに、民法・証券取引法・独占禁止法など、商法に関連の深い法律にも言及する。そして基本的事項の理解に力点をおきながら、商法の骨格を叙述するようにする。またテクニカル・ターム以外は、日本語を学ぶ外国人にも理解できるような平易な言葉づかいで商法についての理解を深めたいと考えている。

なお「商法Ⅰ」では商法の全体を、「商法Ⅱ」ではとくに会社法を中心に講義を進める予定である。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・職名）
1	商法総論および商業使用人	1.商法総論　2.商法総則	関　俊彦（東北大学教授）
2	商業登記および商号	1.商業登記　2.商業の保護　3.各板貸制度	同　上
3	商行為法総論	1.民法と商法の関係　2.商行為法総論	同　上
4	運送営業	1.運送および運送人の意義　2.物品運送契約　3.物品運送人の責任（損害賠償責任）　4.高価品の特則　5.貨物引換証	同　上
5	金融取引・証券取引	1.銀行取引　2.信託取引　3.リース取引　4.証券取引	同　上
6	保険法・海商法	1.保険法　2.海商法	同　上
7	手形法の全体像	1.手形（約束手形）とはなにか　2.なぜ手形が振出されるのか――手形の原因関係　3.手形は有価証券である　4.手形面上の記載事項　5.手形の流通　6.手形割引　7.手形の支払　8.銀行の関与	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・職名）
8	約束手形の振出	1.手形要件　2.白地手形　3.手形債権と原因債権	関　俊彦
9	裏書	1.裏書の意義　2.裏書の効力　3.裏書の方式　4.裏書禁止手形　5.特殊の裏書	同　上
10	善意取得と手形抗弁	1.善意取得　2.手形抗弁	同　上
11	手形の支払	1.手形の支払　2.利得償還請求権	同　上
12	手形行為論	1.手形行為の概念　2.手形行為の特質　3.手形行為の成立要件	同　上
13	為替手形および小切手	1.為替手形　2.小切手	同　上
14	金融商事実務における手形・小切手	1.手形貸付　2.手形割引　3.当座勘定取引契約　4.買戻請求権（割引手形の買戻）　5.融通手形　6.手形交換・不渡	同　上
15	有価証券論	1.有価証券とは何か　2.有価証券の機能　3.証券の分類　4.有価証券に類似した証券　5.有価証券的特質	同　上

＝商法Ⅱ＝（R）

〔主任講師：関　俊彦（東北大学教授）〕

全体のねらい

「商法Ⅰ」に同じ。ただし、「商法Ⅱ」では会社法を中心に述べていくので、場合によっては取締役へのインタビューなど、より理解を促す方法を取り入れたい。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・職名）
1	会社法の全体像	1.会社法総論　2.会社の法人格　3.会社設立の自由　4.会社の種類　5.会社の規模	関　俊彦（東北大学教授）
2	会社財産と資本	1.会社の財産　2.資本　3.会社の設立	同　上
3	会社の意思決定（株主総会）	1.会社の機関　2.株主総会の決議事項　3.株主総会の招集　4.株主総会の決議　5.株主総会決議の瑕疵　6.株主総会の形骸化と活性化	同　上
4	会社の意思決定（取締役会・代表取締役）	1.取締役および取締役会　2.取締役　3.取締役会の権限　4.取締役会の招集　5.取締役会の決議　6.取締役会の決議を欠く代表取締役の行為　7.取締役会の議事録　8.代表取締役　9.表見代表取締役　10.使用人兼務取締役	同　上
5	会社の監視機構	1.監査役　2.会社と監査役との関係　3.会計監査人	同　上
6	株主の権利・義務	1.株主は出資者である　2.株主の権利　3.株主平等の原則　4.額面株主と無額面株主　5.株主の種類　6.利益供与の禁止　7.株主の義務　8.株式と社債	同　上
7	株式の譲渡	1.株券　2.株券不所持制度　3.株券保管振替制度　4.株主名簿　5.名義書換　6.株式譲渡の自由とその制限	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・職名）
8	株式の保有	1.株式保有の目的　2.株式の買占め　3.株式保有の現状	関　俊彦
9	取締役と会社の関係	1.取締役の一般的義務　2.取締役の報酬・退職慰労金　3.自己取引・利益相反取引　4.競業避止義務	同　上
10	取締役の責任	1.取締役の損害賠償責任　2.代表訴訟　3.取締役の第三者に対する責任	同　上
11	会社の資金調達	1.社債の発行　2.社会の発行手続　3.特殊の社債　4.新株発行　5.株式の発行形態　6.新株発行の効果　7.新株発行の決定　8.新株発行事項　9.新株発行事項の公告・通知	同　上
12	新株発行をめぐる利害の対立	1.株主に対する新株発行　2.第三者に対する新株発行　3.不公正な新株発行に対する措置	同　上
13	計算書類の作成	1.計算書類　2.貸借対照表	同　上
14	利益配当・無償交付	1.利益配当　2.利益配当額の制限　3.違法配当　4.利益配当の手続・方法　5.利益配当請求権　6.中間配当　7.無償交付　8.株式の分割　9.株式の併合・株式の消去　10.株主の帳簿閲覧請求権　11.会社の業務財産状況検査権	同　上
15	企業結合・企業分割	1.合併　2.営業譲渡　3.会社の分割　4.株式を利用した企業結合	同　上

＝現代日本法の特質＝（R）

〔主任講師：碧海純一（関東学院大学教授）〕

全体のねらい

日本という国は、大化の改新以来今日に至るまで、三回に及ぶ大立法改革を経験している。現代日本の成文法は大体において西欧から継受された法である。本書においては、継受法としての現代日本の成立過程とその史的背景とを略説し、特に第二次大戦後の日本社会の急速な発展を可能にした現代法の特質について述べる。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・職名）
1	序説 －立法改革の意義	1.古代における立法　2.自然法論の誕生　3.近代の立法　4.日本における継受立法	碧海純一 （関東学院大学教授）
2	日本法の史的背景	1.古代　2.中世　3.近世　4.天皇制の意義	同上
3	明治期の継受	1.大日本帝国憲法以前の日本における外国法の影響　2.大日本帝国憲法　3.諸法典の成立　4.日本民法典の史的由来	同上
4	占領初期の立法と日本国憲法の成立	1.終戦直後の諸改革　2.農地改革と労働法　3.日本国憲法の成立　4.民主主義法体系の諸類型　5.日本国憲法における民主主義と平和主義	同上
5	憲法第九条を考える	1.占領初期の対日政策　2.占領政策の転換　3.東西間の冷戦と朝鮮戦争　4.冷戦の収束　5.一九九〇年のペルシア湾岸危機　6.第九条がなかったらどうなったか	同上
6	司法部の機能	1.司法権の本質　2.司法審査　3.代替的紛争解決手続	井上達夫 （東京大学助教授）
7	人権保障の現代的課題	1.戦後の人権保障理論の発展　2.新しい人権　3.現代型訴訟	同上

回	テーマ	内容	担当講師 （所属・職名）
8	日本社会の平準化と法	1.戦前の日本の階級構造　2.占領期の改革　3.平準化とその問題点	碧海純一
9	戦後日本経済の発展と法	1.戦後の窮乏期　2.復興から高成長　3.復興の要因　4.公害―日本経済成長の副作用　5.日本経済の発展と法　6.日本経済の将来への問題点	同上
10	土地・住宅問題と法	1.自然条件　2.東京の過密化の社会的要因　3.住宅難・通勤難　4.首都圏における土地問題　5.住宅問題と日本人の権利意識	同上
11	不法行為法	1.損害の賠償　2.無過失責任への接近　3.様々の類型	嶋津格 （亜細亜大学教授）
12	私人の自己決定と法	1.個人の自律（目標としての）　2.具体的問題の例	同上
13	犯罪と法	1.治安と人権　2.犯罪類型　3.刑事手続の問題点	同上
14	日本人の法・権利観念	1.近代法と日本社会　2.「和」　3.契約と話し合い　4.訴訟回避など	同上
15	むすび ―明治期の継受法の性格、「法の支配」、日本の発展と日本の責務	1.明治期の継受法の性格　2.法系と日本法　3.法の支配　4.共産圏の変容　5.経済成長の光と影　6.日本の国際的責務	碧海純一

＝ 国　際　法 ＝ （R）

― 現代国際法を理解するために ―

〔主任講師：栗林忠男（慶應義塾大学教授）〕

全体のねらい

現代の国際社会を存立基盤とする国際法の基本的構造とその問題点について理解を深めることを目的とする。とくに　国際法現象に対してどのようなアプローチをもって臨むか　という問題意識の下に　近代国際法が現代国際社会の政治・経済・社会的変動にともなって質・量ともに変容しつつある。動向を把握するようにしたい。

回	テ　ー　マ	内　容	担当講師（所属・氏名）
1	国際法の生成と発展	国際法の萌芽を古代・中世に遡るとともに近代国際法の生成・発展過程を現代国際法に至るまで辿る。	栗林忠男（慶應義塾大学教授）
2	国際社会の法構造	国際法の存立する社会的基盤である国際社会の基本的構造とそこに機能する法の特質について考える。また　国際法と国内法の関係について一元論と二元論の学説上の対立を説明する。理論的考察に止まらず　国際法の国内的適用について　各国の法実践から理解するように努める。	同　上
3	国際法規の存在形態	国際法の法源とされる国際条約、国際慣習法、法の一般原則などを説明し、国際組織の決議等の法的拘束力について述べる。また、慣習法規を法典化する作業についても触れる。	同　上
4	国際法の主体　1. －国　家	国際法体系において最も基本的な法主体である国家の要件、新国家・新政府の承認、国家承継の問題を取り上げる。	同　上
5	国際法の主体　2. －国際組織・個人	国際組織の権利能力及び個人（企業）の法主体性に関する諸問題を取り上げる。また、企業活動の国際的規制についても言及する。	同　上
6	国際関係を律する主要な法原則	国際法体系における国家の基本的権利・義務をめぐる議論を考え、現代国際関係を規律する国際法上の諸原則のうち、主権、不干渉、戦争違法化、民族自決権、自衛権などの基本的原則を説明する。	同　上
7	外交・領事関係と主権免除に関する国際法	外交・領事関係の開設、大使・公使などの外交使節の特権、領事の特権、軍隊・軍艦・軍用航空機の地位について説明するとともに、国家機関及びその財産の外国における主権免除の原則とその動向について述べる。	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	個人と国際法	国籍、外国人の地位、外交的保護、犯罪人引渡、政治犯罪人、庇護権、難民（亡命）などの問題を取り上げる。	栗林忠男
9	国家領域と国際化地域	領域権の意義ついて考察するとともに、領域の得喪に関する国際法規を説明し、南極大陸、国際河川その他の国際的地域について触れる。	同上
10	海の国際法 (1)	海洋法の歴史的展開を概観し、第三次海洋法会議で採択された国連海洋法条約を中心に、伝統的な海洋区分の再編成として、内水、領海、接続水域、国際海峡、群島水域を取り上げる。	同上
11	海の国際法 (2)	前章に続き、海洋区分の再編成として、大陸棚、排他的経済水域、漁業水域、公海を取り上げるとともに、新たに確立しつつある深海底制度、海洋環境の保護の問題を考察する。	同上
12	空・宇宙の国際法	領空主権原則を中心に領空侵犯、国際航空活動の法的規制がいかに行われているか、また、宇宙開発の進展とともに生成しつつある宇宙法体系について考察する。特に、現在進められている宇宙基地の諸問題を中心に、今後予想される宇宙の国際協力の問題にも触れる。	同上
13	国際責任と国際犯罪の規制	責任に関する国際法構造を概観するとともに、国際責任の原則、私人の行為による国る国際責任、危険責任主義、責任の解除などについて、国際社会の法構造に照らして考える。また、国際公益概念の発達にともなう国際犯罪の規制についても検討する。	同上
14	国際紛争の平和的解決と国際安全保障	国際紛争の処理について一般的に考察するとともに、交渉・審査・仲介・調停・仲裁裁判・司法箇解決・国際機関による解決などの国際紛争の平和的処理システムを考察する。また、集団安全保障体制の問題点を指摘する。	同上
15	現代国際法の主要課題	現代国際法が直面する主要な課題のうち、人権の保護、南北問題、地球環境の保護、軍縮・軍備管理の四つの問題を取上げ、国際法の今後の役割を考える。	同上

＝経済法＝（Ｒ）

―市場機構の維持と補完の法―
〔主任講師：松下満雄（東京大学教授）〕

全体のねらい

現代経済においては、市場機構が中心的制度である。そして、これを支えるための法制として独占禁止法があるが、市場機構も絶対のものではなく、この不完全生を補完するための産業法等も行われている。この両者間の関係について検討し、併せて、国内経済法と国際経済法の接点を探る。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・職名）
1	私企業に対する公的規制の法的枠組み	現代日本は法治国家である以上、国家が経済に介入し、私企業の活動を活発する関係には、法律上の根拠が必要である。これを私有財産と産業の自由の保持、市民法による権利確保等の観点から検討する。	松下満雄（東京大学教授）
2	同上		同上
3	同上		同上
4	独占禁止法(1) 独占禁止法の目的・機能	市場経済の最も重要な産業は「市場機構」であるが、この市場機構の作働を確保するための基本法として、独占禁止法がある。独占禁止法の目的、歴史、それについての基本的な考え方、世界各国における状況などについて検討する。	同上
5	独占禁止法(2) 独占禁止・独占的状態の規制・集中規制	独占禁止法の大きな柱のひとつが、私的独占の禁止である。これは市場において大きな経済力を有する企業の独占行為を禁止するものである。また、これらの確実措置として、独占的状態の規制、集中規制（合併・株式取得の規制）が行われている。これらを概観する。	同上
6	独占禁止法(3) カルテルの禁止・事業者団体の規制・適用場所	カルテルとは、企業間の協定により相互の競争を制限すること（例えば、価格の一斉引上）であるが、これは著しく禁止されている。また、かかるカルテルは事業者団体の行為として行われることもある。これらを検討し、あわせて適用除外カルテルについても検討する。	同上
7	独占禁止法(4) 不公正な取引方法の規制	不公正な取引方法とは、企業が行う取引拒絶、各種の差別的行為、拘束条件の設定、ぎまん的行為、優越的地質の濫用などであるが、これらは私的独占の予防措置であると同時に、消費者保護、中小企業保護の役割をも果す。これらについて検討する。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・職名）
8	独占禁止法 (5) 施行機関・規制措置	独占禁止法の施行機関は、公正取引委員会であるが、これの権限、施行の方法などについて検討する。また、独占禁止法上の指導賠償請求刑事訴訟などについても検討し、独占禁止法はどのような形で施行されているのかについて、実情を探る。	松下満雄
9	産業政策の法 ◦産業政策と市場機構 ◦不況産業救済・基礎技術研究開発	◦現代の日本の経済においては市場機構が中心的制度であるが、市場もまた全能ではなく、市場機構がうまく働かない分野もある。これらの分野においては、政府が市場機構の補実対策として、産業均等を実施する。この産業均等の目的、機能、限界などについて検討する。 ◦このような産業均等の重要分野のひとつとして、不況産業救済がある。これは、不況カルテル制度、構造不況救済のための諸制度より成る。また、基礎技術開発も重要分野であり、これについても技術研究組合法などの制度がある。これらについて検討する。	同上
10	産業の法 中小企業保護育成・価格規制	中小企業については手厚い保護政策がとられているが、これに関連して、中等企業組織化、分野組整などを開発とする各種の法制がある。また、農業を始め、若手の分野において価格規制が行われている。これらの法制について検討する。	同上
11	国際経済法 (1) 国家と国際市場（JMF・ガット体制）	現代においては経済の国際化が進み、「国境的米経済」が現実しつつある。このような状況あって、国際的な市場機構の維持をどのように行うべきか、ガット・IMP体制の将来などのようものが、自由貿易主義の将来はどうか、などについて検討する。	同上
12	国際経済法 (2) 貿易輸入規制（セーフガード）	ガット体制においては、自由貿易を守るため、国家の行う輸入数量制限は原則として禁止されている。しかし、例外として現金輸入制限が認められており、これが最近においては、米国、ECなどを中心として拡がりを見せつつある。この局面について検討する。	同上
13	国際経済法 (3) 輸出自由規制	現在、主要な通商上の問題解決のために、日本と米国・EC間において、輸出自主規制が行われている。主要な分野としては、鉄鋼、自動車、繊維、半導体などがある。これらの輸出自主規制について検討し、問題点を探る。	同上
14	国際経済法 (4) 不公正貿易の規制	不公正な貿易としては、ダンピング、輸出補助金、差別待遇などがあげられるが、これに対抗するために、米国、EC、わが国などではダンピング法を始め、各種の法制を用意して、これに対して特独措置を行っている。これらの実情について検討する。	同上
15	国際経済法 (5) 国家安全保障に基づく国際通商・投資の規制	国際的、自国の安全保護のため、輸出の規制、輸入の規制、及び、国際投資の規制を行っている。これが行われると、その限度において国際市場の作働が制約される。これらの法律の運用の実態と問題点について検討する。	同上

＝　労　　働　　法　＝（R）

〔主任講師：下井隆史（神戸大学教授）〕

全体のねらい

今日のわが国労働法制の主要部分について、基本的に不正確ではなく、しかも十分に具体性を有する認識を受講者に持ってもらうというのが、この講義の狙いである。そこで、法制の仕組みと判例等により形成される法的ルールを説明した上で、裁判所や労働委員会、労働行政の実務、あるいは企業の現場において発生する労働関係のトラブルの法的解決のあり方について論じてみたい。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	わが国労働法の概要・理念・対象	現行労働法が四領域からなること、主要部分が「最低労働条件の法定」と「労働関係に関する法的ルールの設定」から構成されること、法の理念・目的は何か等について説明し、さらに労基法・労組法等の適用範囲を見た上で、「労働法の適用対象」問題を論ずる。	下井隆史（神戸大学教授）
2	労働関係における平等取扱の原則	労働条件の差別的取扱いを禁ずる労基法3条、男女雇用機会均等法等、労働関係における平等取扱いに関する法規定を説明し、関連する「外国人労働者」、「男女雇用平等」、「パートタイム労働」等の問題を論ずる。労働者の人権擁護のための諸規定にもふれる。	同　上
3	雇用関係の成立に関する法的ルール	企業の雇入れの自由に対する障害者雇用促進法等による制約、労働契約締結に関連する労基法による規制（労働条件の明示等）、人材派遣に関する法制度等について説明する。そして、雇用期間、採用内定、試用期間の制度をめぐる問題点を論ずる。	同　上
4	人事異動の法的諸問題	配転、出向、転籍、休職の諸制度につき、実態をふまえつつ、判例により形成された法的ルールを説明する。とくに、配転が権利濫用になるのはどのような場合か、出向はいかなる場合に命じられうるか、出向中の労働関係はどのようになるか等を論ずる。	同　上
5	解雇・定年に関する法制とルール	労基法・労組法が定める解雇の禁止・制限、解雇権濫用禁止の法的ルール、人員整理の合理性をめぐる判例理論を説明し、わが国労働関係の将来との関係をも考察する。さらに、定年制の現状と法的問題点を論じ、高齢者雇用安定法にもふれる。	同　上
6	就業規則制度と法的問題点	就業規則の作成・変更、記載事項、届出、意見聴取、周知措置、効力、労働協約との関係等に関する労基法の制度を説明する。そして、難問である「就業規則の変更の効力」について、「就業規則の法的性質」論と関連させつつ判例理論を中心に論ずる。	同　上
7	業務命令・服務規律と懲戒制度	業務命令とは何か、それが拘束力を持ちえないのはいかなる場合か、業務命令・服務規律違反に対する懲戒処分の形態・事由・濫用に関する問題を論ずる。兼職禁止、企業機密の保持、経歴詐称に対する制裁、業務外行為を理由とする懲戒等も考察する。	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	賃金保護の制度と法的諸問題	賃金保護の諸制度（支払いに関する原則、休業手当、最低賃金、賃金不払いからの救済等）を説明したうえで、退職金・賞与をめぐる問題（懲戒解雇者・支給日不在籍者への不払い等）、賃金カットに関する問題（時期・範囲等）を論ずる	下井隆史
9	労働時間・休暇の法制度	87年の労働時間制度改正の目的・意義・内容を説明し、労働時間短縮問題の展望を試み、各制度（週40時間制、フレックスタイム、計画休暇等）の運用上の問題を論ずる。さらに、超過勤務命令の拘束力、年休時季変更権のあり方等の重要論点をとりあげる。	同上
10	女子・年少者の保護および労災補償制度	女子保護の規定に関する85年の労働法改正を説明し、生理休暇、育児時間の法規定にふれ、また、育児休業の問題をとりあげ、年少者保護の制度も説明する。さらに労働安全衛生の法規にもふれつつ、労働補償制度の説明を行う。	同上
11	労働組合結成と組合活動の自由・権利	組合の結成・加入や組合活動を理由とする不利益取扱いと組合への支配・介入の禁止、組合活動への民・刑事免責、組合の資格審査制度を見た上で、リボン戦術やビラ貼り等の正当性の問題を論ずることにより、指揮命令権・施設管理権と組合活動の関係を考察する。	同上
12	団体交渉の法的ルール	団交権が保障されることの労使関係における意味、団交の当事者・対象事項・手続き等に関するトラブルはどのように解決すべきか、使用者の「誠実交渉義務」とは何か等について論ずる。また、労使協議および苦情処理の制度にもふれる。	同上
13	労働協約制度と法的問題点	労働協約が最も優先的効力を持つことの意味を説明し、規範的効力をめぐる問題（協約による労働条件の不利益変更の可否、余後効等）、債務的効力に関する問題（ユニオン・ショップの効力、平和義務等）、協約の期間、協約の拡張適用制度等を論ずる。	同上
14	争議行為をめぐる法的諸問題	争議行為に対する保護の制度を説明したうえで、各種のスト・怠業やピケ・職場占拠の正当性の基準、違法争議行為の効果、第三者に対する責任、ロックアウトの正当性等の問題を論ずる。また、公務員法・労調法等による争議行為の制限禁止と争議調整にもふれる。	同上
15	不当労働行為制度	現行制度の「原状回復主義」の意味とわが国制度の特色を説明した上で、組合活動と不利益取扱いの因果関係、複数組合併存下の不利益取扱い・支配介入、言論の自由と支配介入等の問題を論ずる。さらに、労働委員会における不当労働行為救済のあり方を考察する。	同上

＝日本政治思想＝（R）

〔主任講師：松沢弘陽（北海道大学教授）〕

全体のねらい

現代日本の病いとして指摘される＜政治の貧困＞において、問われている＜政治＞とは何だろうか。私的・個的な利益・意見の分化を、自主的に公的なものにまで統合する営みがその中心であろう。そのような＜政治＞の成熟を阻んだ戦前日本の政治体制のもとで＜政治＞の問題と格闘した事例から、＜政治＞について学びたい。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	序論		松沢弘陽（北海道大学教授）
2	明治啓蒙の政治思想	国民国家の形成と明治啓蒙思想 福沢諭吉 ― 「政治の診察医」	同上
3		福沢諭吉の政治思想 ― 「一身独立して一国独立す」	同上
4	自由民権論の政治思想	明治啓蒙思想の継承と反逆 植木枝盛 ― 政治運動と「道理」の追求と	同上
5		中江兆民 ― 「東洋のルソー」	同上
6	明治憲法体制形成期の政治思想	明治憲法体制の形成と新世代の登場 徳富蘇峰と平民主義	同上
7		中江兆民 ― 「恩賜の民権」から「回復の民権」へ	

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8		陸　南と国民主義	松沢弘陽
9	明治社会主義の二つの道	明治憲法体制と社会主義 幸徳秋水 — 「志士仁人」の社会主義	同　上
10		片山潜 — 労働者の団結と都市自治の社会主義 直接行動・議会政策論争と「大逆事件」	同　上
11	田中正造の政治思想	田中正造の生涯 — 村から出て村に帰る 田中正造の憲法思想 — 「宇宙間」の憲法と大日本帝国憲法のあいだ	同　上
12	大正デモクラシーの二つの道	大正デモクラシーの知識人と民衆 吉野作造 — 「立憲国の先覚者」	同　上
13		吉野作造の政治思想 — 「民本主義」における民衆と指導者	同　上
14		河上肇 — 東洋的マルクス主義者 河上肇の政治思想 — 「利己心」の否定と肯定のあいだ	同　上
15		むすびにかえて	同　上

＝ 西 欧 政 治 思 想 ＝(R)

〔主任講師：田中治男（成蹊大学教授）〕

全体のねらい

この講義は欧米における政治思想の発展を古典古代と呼ばれるギリシアから現代にいたるまで概説するものであるが、その際、思想家個々人の紹介は最小限にとどめて、政治社会・政治生活を構成し、かつ説明するものとして提起されてきた諸概念を、おおむね歴史的順序に従って叙述し、解説するという方針をとりたい。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	序 ― 政治思想史のテーマ：権力と自由 ― 民主主義理論の歴史的背景	政治社会の基本的原理を権力と自由という二つのものとして捉え、この両者がいかに対立し、また調和しうるかを探求するところに政治思想の課題があるとみる。それはまた、今日的テーマとしての民主主義がその内包を理論的に豊かにしてゆく過程でもあった。	田 中 治 男（成蹊大学教授）
2	Ⅰ. 政体論と理想国家論	古代ギリシアの政治的思考のエッセンスをさまざまな政体についての考察とそれらを越えた理想的国家の追求とに認めて、政治生活の自覚的把握が、ポリスの中での実際的経験とそれの哲学的反省とを通じて深められていったことを学ぶ。	同 上
3	Ⅱ. 自然法および神法の観念の生成とその意義	人間の具体的関係から成り立つ政治社会をより高い次元から規律するものとしての自然についての観念は古典古代の思想の中で育っていたが、これにはさらにキリスト教的な神の観念が加わって、中世から近代にかけて大きな影響をもった自然法思想が出てくる。	同 上
4	Ⅲ. 国家理性の観念と主権理論	ルネサンス期以降登場してきた近代国家を維持し、指導する力に対する要請と、これについての考察が、国家理論に新たな様相を与えることになった。これには、マキアヴェリとボーダンの名が結びつけて論じられる。だがその問題提起の意義は現代にまで及ぶ。	同 上
5	Ⅳ. 宗教改革の政治思想：内面的信仰と抵抗原理	カトリックの信仰箇条に対する挑戦から始まった宗教改革は、中世以来の政治的支配原理とその上に成り立つ政治秩序それ自体をも覆すという現実的帰結を伴った。16、17世紀の宗教戦争を通じて、権力と自由というテーマは良心の内面における葛藤としても現れた。	同 上
6	Ⅴ. 近世的自然法理論の意義と限界	宗教改革以後の状況から出てきた近世的世俗的自然法は、近代国家とその中枢に立つ君主権力とに合理的な法的規範を与えようとするものであったが、同時に、この時期からますます既成体制となっていく政治的支配秩序の大枠を抜け出ることはできなかった。	同 上
7	Ⅵ. 社会契約説と人民主権論 (1) 概説 ― ホッブス	契約説的政治理論は、自由・平等・独立の個人から出発して、政治社会が形成される筋道を論理的に構成しようとした。ホッブズは、人間がその自己保存本能を基に自然的能力を発揮する自然状態から、契約を通じて権力の秩序を創設する過程を原理的に論証した。	同 上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	(2)　スピノザ ——ロック	ホッブズの方法を継承しながら、自然権と自然法の関係、合意と主権の理論、国家権力の目的と機能について、実り豊かな思想を展開したロックが、同じイギリスにおける政治的発展を背景に考察の対象となるが、同時期のオランダのスピノザも看過しえない。	田中治男
9	(3)　ルソーおよびその後	社会契約と形成された政治社会を導く一般意志とについての理論、主権の不可分性とその人民への帰属という観点がルソーの思想の特質であるが、そこに含まれる二律背反性は、一方に革命への方向性を与えるとともに、他方その理論の妥当性への批判をも生み出した。	同　上
10	Ⅶ. ブルジョワ革命と近代政治機構論 (1)　イギリス革命期	前三回では主として原理的レベルで問題を考えたのに対し、ここでは17~18世紀の政治革命の状況の中で新しい安定的秩序を思考する機構論的思考を取上げる。ハリントン、シドニー、そしてロックに代表されるイギリスの政治思想はその代表的な事例なのである。	同　上
11	(2)　フランス啓蒙期から大革命へ	フランスの啓蒙思想は旧体制と批判的に対決しつつ多様な展開を見せているが、ここではヴォルテール、モンテスキュー、ディドロらの政治論を検討するとともに、さらに大革命期の憲法論争を手がかりに、人権思想と権力分立理論の19世紀以後への影響をも考える。	同　上
12	Ⅷ. レパブリカニズムおよびデモクラシーの新しい伝統	独立宣言と合衆国憲法とを通じて表明された新興アメリカの政治理想を、その19世紀中葉までの現実的展開の中で、性格づける。ジェファソンの民主主義観、「フェデラリスト」の政府論、ジャクソン大統領期の政治的現実、リンカーンの政治理念等を中心に検討する。	同　上
13	Ⅸ. 19世紀の思想状況：保守主義・自由主義・社会主義をめぐって (1)　イギリスとフランス	フランス大革命以後のヨーロッパにおける政治イデオロギーの対立・葛藤はそのままわれわれの時代への遺産となっている。バークに始まる保守主義、ベンサム、ミルを代表とする功利主義及び自由主義、それらのフランスでの発現形態 — これらを主に取上げる。	同　上
14	(2)　ドイツ，その他	政治的後進国とされるドイツも、19世紀における思想的寄与は重要である。カント、ヘーゲルの政治哲学は国家理論に深い影響をもつ。マルクスの社会主義理論はその根を英仏独の思想にもちつつ、広く普及した。他方、立憲的自由主義は各国共通の財産となっていった。	同　上
15	Ⅹ. 民主主義の政治理論をめざして — 大衆化時代の問題	本講義全体に内在するテーマとしての民主主義理論の現代における課題を展望するため、トクヴィルの問題提起を手がかりに、今世紀において顕著な大衆化現象の政治的帰結を考え、欧米の何人かの政治思想家ないし政治学者の議論をこの文脈において検討する。	同　上

＝現代の政治理論＝（TV）

〔主任講師：曽根泰教（慶應義塾大学教授）〕

全体のねらい

本書は、現代の政治理論を広く概観することを目指すが、政治の中心を「構成員すべてに関わりをもつような決定を作り出すシステム」として理解する。そこで、民主主義の理論、決定のルール、選挙の制度などの、ルールの側面と、そのルールのもとで動く現実の政治を、ゲームとして捉え、政策の形成過程から考える。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	現代政治理論の広がり	今日政治の果たす役割は、印象とは逆に増加している。それは、経済における非市場（政治）の割合の増加や、政治の場に登場する問題（経済摩擦、税制改革）の増加に見られる。同時に、現代の政治学の扱う領域も拡大しつつある。	曽根泰教（慶應義塾大学教授）
2	「政治理論」は蘇ったか	P・ラスレットが、かつて死んだといった「政治理論」は蘇ったのか。政治理論が死んだ理由、また、　った理由を考えることから、今日の理論の役割、政治学上の変化を、政治哲学、経験理論、政策分析の関連で探る。	同上
3	エリート論から民主主義へ	強力なエリート論者たち（パレート、モスカ、ミヘルス）の民主主義批判の中から、今日に通じる理論的な問題点を考える。ついで、現代の民主主義の理論的出発点をシュンペーターとして、基本的な主張を整理する。	同上
4	現代の民主主義理論	現代の民主主義の理論を、ダールのポリアーキーの概念を基礎として分析を進める。次に、比較の問題、体制（民主主義、権威主義、全体主義）との関連、主流派の考えに対する批判者たちの紹介と、理論的発展の系譜を探る。	同上
5	集合的選択	民主主義の選択理論を進めて、一次元的な民主主義を考える基礎として、決定のためのルール設定はどうしたらできるのか、合理的、最適な方法は何かを探る。ダグラス・レーの議論に従って、最適なルールを求める。	同上
6	多数決と問題点	多数決が仮に集合的選択として最適であるとしても、なお残る問題がある。その中で、特に、アローの提起した「投票のパラドックス」（循環）および「一般可能性定理」の問題と、少数者のインテンシティの問題を扱う。	同上
7	全員一致とコンセンサス	多数決に対するルールの代表として全員一致を考える。合意に基づく全員一致の中で、社会契約の代表としてロールズの正義論を考え、ブキャナンの主張の根拠も探る。「協調の可能性」をアクセルロッドの「囚人のジレンマ」の実験に見る。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	自由主義的政治――代議制のモデル	直接的な集合的選択から代議制のシステムに話を発展させ、自由主義（多数制限）や代表の問題を分析する。次に、ダウンズのモデルを考えることで、選挙を通じた有権者と政党を含んだ2次元的な選択の関係を理解する。	曽根泰数
9	「政府」概念の再検討	公的選択の中で「政府」が存在するモデルを考える。まず、「国家」と「政府」の概念の整理をし、次にミニマリストの考え方から「小さな政府」論の根拠を探り、規模の問題から、政府の役割の問題など、3次元へと議論を進める。	同上
10	意思決定者としての個人と組織	人は情報をどのように認知して、「記憶」をもとに判断し、選択・決定をするのか。個人における決定の枠組みと、集団における決定上の問題について考える。認知心理学やコンピュータの発達を参考にする。	同上
11	政策過程のモデル	まず、アリソンの3モデルや、その他代表的な政治学的モデル（ダイ）の紹介を通じて、政策過程が扱う対象と方法についての枠組みを明らかにする。公共政策の決定と、その背後にある影響力の問題も考える。	同上
12	政治経済モデル	政治と経済の関係を、マクロ経済から論じ、いかに非市場的決定（政治）の果たす役割が大きいかを考える。政治的景気循環、外部性、公共財、利益集団（オルソン）、有権者・消費者（ハーシュマン）などを考えてみる。	同上
13	マクロの政治的構成	政治システムの比較において、特に、現実の政策形成過程の制度化の観点から、多元主義およびコーポラティズムの概念を説明する。団体（労働団体等）、利益表出、具体的制度化の場（審議会等）、政策領域などを明確にする。	同上
14	政策のアウトプットと評価	規範的な考え方（自由、平等、正義、公益）および政策分析に使われるいくつかの分析方法と、その評価基準を示す。目的と手段の関係、政策の構造、また比較政策の考え方を通じて、社会科学の実験の可能性を考える。	同上
15	現代政治学の問題と将来	現在の政治学はどのような理論的発展をしてきたのか。また、どのような成果をあげてきたのかを考え、同時に、日本の政治学の位置づけをする。そして、今後の政治学の方向性、進むべきフロンティアのいくつかを示す。	同上

＝現代の政治過程＝（ＴＶ）

〔主任講師：阿部　齊（放送大学教授）〕

全体のねらい

19世紀までの政治に関する研究は、議会・内閣・政党などのしくみ論と制度論がとりあげられてきたが、20世紀になるとその実際の活動に重点をおいた政治の過程論が中心となった。

この講義では、選挙・政党・圧力団体などの具体的な事例をとりあげるとともに、最近重要な意義をもってきた女性の高齢者の政治的な活動にも目を向ける。また、各テーマを世界的な動きと関わりの中でとりあげていく。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・職名）
1	社会と国家	政治の機能　権力の特性　国家と政府　国家と社会	阿部　齊（放送大学教授）
2	政治過程の意義	政治学の発展　政治過程論の成立　政治過程論の展開　今日の政治過程	同上
3	選挙と世論	選挙の意義　投票率の意味　多数代表制と小選挙区制　少数代表制と比例代表制　中選挙区制と定数不均衡	同上
4	政党と政党制	政党の意義　政党の機能　政党の発展　二党制と多党制　政党とイデオロギー	同上
5	日本の選挙と政党	投票行動の決定要因　一党優位政党制　自民党の集票組織　自民党の多数派戦略　自民党の支配体制	同上
6	利益集団の圧力活動	利益集団の台頭　圧力活動の役割　審議会制度　ロビイストと議会　コーポラティズム	同上
7	大衆運動と市民運動	現代の政治運動　市民社会から大衆社会へ　市民運動と大衆運動　大衆運動の変質　住民運動と市民運動	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・職名）
8	裁判所の政治的機能	司法部と政治過程　アメリカの法令審査権　最高裁判所の政治的役割　日本の最高裁判所　大陸諸国の憲法裁判所	阿部　齊
9	政策形成過程	政策形成過程の特質　日本の政策形成過程　政権党と行政部官僚の役割　議会の復権と野党の役割　利益集団と審議会	同　上
10	社会階層と政治	平等化と平等主義　日本における平等化　社会階層の存在　階層の非構造化　新中間大衆と保守政治	同　上
11	政治意識と政治文化	政治的無関心と政治的有効感　政治的イデオロギー　日本人の政治意識　政治意識と政治文化　日本の政治文化	同　上
12	女性の政治参加	女性の選挙権獲得の歴史　決定過程への女性の参加　アファーマティブ・アクション　選挙とジェンダー・ギャップ　地方政治と女性	同　上
13	子どもの政治的社会化	選挙権の年齢制限　政治的社会化と社会科教育　校則による管理と市民の育成　子どもの権利条約	同　上
14	高齢者と政治	高齢化社会の到来　高齢化社会の政治的争点　高齢者と選挙　高齢者の政治参加　シルバー・デモクラシー	同　上
15	国際化の政治過程	内政を動かす国際的要因　相互依存の増大　内なる国際化　市民運動とＮＧＯ	同　上

＝現代の国際政治＝（ＴＶ）

（主任講師：神谷不二（東洋英和女学院大学教授）
主任講師：高橋和夫（放送大学助教授））

全体のねらい

戦後の国際政治の展開を鳥瞰し、現代史を規定してきた諸要因を考え、さらにその将来を占ってみる。詳細な部分像ではなく簡潔な全体像を事実の羅列ではなく分析のための体系的な枠組を提示したい。言いかえるならば学生自らが国際政治を考えて行く上での案内図を描き出すことが本コースのねらいである。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・職名）
1	『第二次世界対戦後の世界』	戦後の国際政治を(1)冷戦の起源、展開、終焉、(2)南北問題、(3)国際的な経済の相互依存の深化の三つの流れから概観し、本書の全体像を提示する。	神谷不二（東洋英和女学院大学教授） 高橋和夫（放送大学助教授）
2	『ヨーロッパの冷戦』	ポーランドの悲劇に始まるヨーロッパにおける冷戦を解説し、米ソ関係が、大戦中の同盟から戦後の対策へと変貌を遂げる推移を振り返る。	同上
3	『板門店からキューバへ』	朝鮮戦争からキューバ危機までの米ソ関係を扱う。特に両国が核兵器とその長距離運搬手段を保有したことの軍事的・政治的な意味を探り、核戦略を考察する。	同上
4	『デタント』	キューバ危機以降の米ソ関係を概説する。ニクソンとキッシンジャーのデタント、ソ連軍のアフガニスタン介入、レーガンのＳＤＩなどを現代史の中に位置づける。	同上
5	『ゴルバチョフの挑戦』	一九八五年以来のゴルバチョフの国内改革とその外交的波紋を考える。	同上
6	『アジア・アフリカの独立』	戦後、アジア・アフリカ諸国が繰り広げた独立劇を振り返り、その後の新興諸国の苦悩に焦点をあてる。	同上
7	『インドシナ戦争とＡＳＥＡＮ』	米ソ日中の利害の錯綜する東南アジアは、西側寄りのＡＳＥＡＮと共産勢力の支配するインドシナに二極分解した。その過程を分析し、国際政治におけるこの地域の役割を論じる。	同上

回	テーマ	内容	担当講師 （所属・職名）
8	『北京、モスクワ、ワシントン』	共産圏の二大国、ソ連と中国の対立は、米中の接近という事態を導き出した。そして中ソ両国の国内体制の変化が、両国の対話への道を開いた。この米中ソの外交的三角関係の展開の跡をたどり、その将来を占う。	神谷不二 高橋和夫
9	『ドル支配の没落と混乱』	戦後の国際経済体制を支えてきた通貨制度、ブレトン・ウッズ体制の成立と変遷、そして崩壊を論じる。また、一九七〇年代以降採用された変動相場制（フロート）の功罪を考える。	同上
10	『戦後の貿易体制』	日本とヨーロッパの復興と発展を可能にした戦後の自由貿易体制の成熟と変貌を説明し、新しい貿易秩序の姿を探る。	同上
11	『多国籍企業』	最近ますます加速しつつある企業の多国籍化の実態を提示する。また多国籍企業が国際政治の場において果たす役割に関する論争の推移を紹介する。最後に企業の多国籍化の将来を見通す。	同上
12	『南北問題』	先進諸国の生活水準の向上するなか、第三世界の遅れが目立っている。後者の貧困の問題が国際政治の重要なテーマとなっている。その実態、そしてその原因に関する論争に目を向ける。	同上
13	『石油と国際情勢』	世界経済のエネルギーである石油を国際政治の視点から分析する。	同上
14	『国際連合』	国際政治の力学の産物として国際連合をとらえ、その成立と変容を概観する。	同上
15	『冷戦を越えて』	東西の両体制間の競争の勝敗の帰趨が決した今、冷戦後の新しい国際秩序を展望する。	同上

＝現代日本の政治＝（TV）

〔主任講師：新藤宗幸（立教大学教授）〕

全体のねらい

現代日本政治における重要なイシュウを採り上げ、それぞれのイシュウを多角的な視点から教科書と映像によって分析してみることにより、現代政治をみる眼を養うことを目的とする。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	現代日本の政治構図(1)	日本の近現代史を踏まえて、現代日本の政治構造が、どのような特徴をもっているか、また現代日本政治の生理と病理は何かについて論じる。	新藤宗幸（立教大学教授）
2	現代日本の政治構図(2)	1980年代に入って、日本政治学のなかに抬頭してきた「近代主義批判」あるいは「日本モデル」の内容と意味を考えながら、日本政治へのアプローチ方法について述べる。	同上
3	選挙	自由民主党は1955年以来30年余にわたって政権政党の座にあるが、この長期政権の要因を主として選挙の制度、構造、機能について考える。	阿部齊（放送大学教授）
4	労働	日本の経済構造の変化、政権政党の長期化などによって、日本の労働界は再編成されつつある。労働界の再編を統治構造の変化の視点から考えることにする。	同上
5	国際化と経済摩擦	1980年代に入って以来、日本の経済社会は国際化の時代を迎えたとされる。しかしその一方において経済摩擦は強まるばかりである。国際化時代の内政構造について考える。	新藤宗幸
6	安全保障と軍事費	安全保障は常に政治のイシュウとなる。現代日本においても、80年代に入って軍事力の強化が論じられ、多様な議論をよんでいる。安全保障なるものの意味を、軍事費との関連で考えることにする。	同上
7	民営化と規制緩和	“小さい政府”論の下に各国において民営化や経済活動に対する政府規制の緩和が進んでいる。こうした政府活動の変化がもつ意味について、ＪＲ、ＮＴＴなどをケースとして考えることにする。	阿部齊

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	国土構造	東京への政治・行政、経済機能の一極集中が、何故に極だってきたのか、対策はどのようなものであるか、について政治学的に考えることにする。	新藤宗幸
9	反消費文明・エネルギー	現代政治のひとつの流れとして、ポスト物質文明あるいは反消費文明を志向する政治運動が存在する。文明史および国際的視野のもとに、主としてエネルギーの側面から、日本の状況を考える。	同上
10	自然保護	第9回と同様の文脈の下に、緑、自然保護について、日本の状況を考える。	同上
11	少数派	日本政治において女性、障害者、アイヌ、同和地区住民らは、少数派として政治的に正当な地位をもってきたとはいえない側面がある。日本政治を少数派の政治として考察することにする。	阿部齊
12	教育と学習	明治近代以降、教育と学習は高度に整備されてきた。しかし、都市型社会の成熟にともなって、教育と学習は多様な矛盾と課題を抱えるに至った。日本政治の構造と機能の中に教育と学習を位置づけて考えてみることにする。	同上
13	税制改革	税制とその現実的機能は、政治権力の所在を的確に示す。日本の税制ならびに改革過程を素材として、日本政治の構造を考察する。	新藤宗幸
14	財政	財政は、政治権力がいかなる政策を、どのようなプライオリティの下に実施しようとしているかを、数字をもって示してくれる。財の配分を中心として、日本政治を考察する。	同上
15	ナショナリズム	国民国家としての日本のアイデンティティをめぐって、多様な議論をおきている。日本のナショナリズムの思想構造を、国際化時代と照らし合せつつ、考察する。	阿部齊

＝日本の地方自治＝(TV)

〔主任講師：阿部　齊（放送大学教授）〕

全体のねらい

地方自治は、現行の日本国憲法の精神を支える基本的な柱の一つである。しかし、今日の地方自治がその本来の在り方にふさわしい現実を備えているとは必ずしもいえない。ここでは、わが国の地方自治の制度的しくみについて理解を深めるとともに、具体的な争点の分析を通じて、日本の地方自治が直面する課題を提示する。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	地方自治の構図1	アメリカ、イギリス、西ドイツなどの地方自治制度との比較によって、日本の地方自治制度の特徴を明らかにする。さらに、明治憲法下の地方自治制度の展開をたどり、そこで形成された制度的遺産が、戦後改革によって作られた現行制度に与えた影響を検討する。	阿部　齊（放送大学教授）
2	地方自治の構図2	日本の地方自治の戦後の展開を明らかにする。地方自治の確立後も中央政府の税制手段として残された機関委任事務の増大、革新自治体の盛衰、地方の時代から東京一極集中時代への転換、中央政府の財源難による地方への権限委譲などの問題をとりあげる。	同　上
3	首長の役割	日本の地方自治制度において、中心的な役割を果たすのは、各自治体の首長である。自治体の首長が制度上にいかなる位置を占めるかを明らかにした後、自治体首長のリーダーシップの諸類型を検討し、首長主義の現状と課題を明らかにする。	同　上
4	地方議会	地方議会は国の議会とは異なり、自治体の最高機関でも唯一の意見決定機関でもない。しかし、地方議会の正常な機能がなければ、住民自治の実現は困難であろう。地方議会の実態あるいは地方選挙の現状を分析しつつ、地方議会の問題点を明らかにする。	新藤宗幸（立教大学教授）
5	財政	財政的独立は地方自治の最大の課題である。しかし、自治体の財源難のために、地方財政は中央政府からの援助に大幅に依存せざるをえなかった。こうした政府間関係に焦点をあてながら、地方財政の現状を明らかにし、あわせて最近の変化にも言及する。	同　上
6	コミュニティの崩壊	コミュニティは地方自治を支える基盤の一つである。しかし、最近の急激な人口移動に伴う過疎化と過密化は、一方で既存のコミュニティを解体するとともに、他方で新たなコミュニティの形成を困難にした。コミュニティの崩壊が地方自治に与えた影響を探る。	阿部　齊
7	地域医療・保健	地域医療とは、地域住民の健康を維持増進するために、医療提供のしくみを合理化し、地域に包括医療の最適システムをつくることである。その核となるのは、初期診療の充実と継続医療体制の確立であるが、具体例をあげて、自治体の地域医療の現状を検討する。	新藤宗幸

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	福祉政策	現代の国家の特徴の一つは、体制の違いを越えて、福祉国家への傾斜を強めていることに求められる。わが国もまた福祉国家の一つであるが、福祉政策の実施は各自治体にゆだねられている。地方自治体の福祉政策へのとりくみを分析して、その問題点を探りたい。	新藤宗幸
9	生涯学習と社会教育	地方自治の柱の一つである住民自治の実現のためには、住民の自治能力を高める必要がある。社会教育は住民の自治能力の向上をその課題の一つとしてきたが、最近では社会教育よりも住民の自主性に訴える生涯学習を重視する傾向もみられる。その背景を探る。	阿部　齊
10	情報公開とプライバシーの保護	住民の政治参加を拡大するためには、政府の情報が可能な限り公開されなければならない。国の政府の情報公開はまだ制度化されていないが、一部の地方自治体ではすでに制度化されている。その現状を明らかにするとともに、プライバシー保護の必要性を考える。	同上
11	地域交通	過疎地域では、交通機関が採算悪化から運行をとりやめることが多く、過密地域では、道路の渋滞や異常な混雑が大きな問題になっていることが多い。いずれにしても、地域交通は今日の地方自治体が直面する重点課題の一つである。その現状を明らかにしたい。	新藤宗幸
12	環境保全	1960年代後半から、環境汚染は地域社会が直面する最も困難な問題の一つであった。最近では、大気や河川の汚染、騒音、振動による公害に加えて、ハイテク汚染やアヌベスト公害が注目されている。こうした環境保全に関して自治体の果たす役割を探りたい。	阿部　齊
13	自治体外交	日本の国際化が進むとともに、国際交流は国の政府相互間にとどまらず、さまざまなレベルで展開されている。姉妹都市提携や世界大都市会議は、自治体レベルでの国際交流の主要な例といえよう。こうした地方自治体の国際活動の現状と課題を明らかにしたい。	新藤宗幸
14	内なる国際化	国際化は単に国と国との間だけで進展するものではない。国内にも、外国人が激増すれば、内なる国際化を迫られることになろう。わが国の場合、「ヒトの国際化」に対する抵抗が強いが、その理由を考えながら、内なる国際化を促進する条件を検討する。	同上
15	NGO・市民運動	国際化を進展させる窮極的な担い手は、市民の自主的運動である。こうした視点に立って草の根での交流を図っているNGO（非政府的民間組織）に注目するとともに、市民運動が国際交流において果たしうる役割を明らかにする。	阿部　齊

＝ 先進諸国の政治 ＝ （R）

〔主任講師：河合秀和（学習院大学教授）〕

全体のねらい

「一国についてしか知らないものは、その国についてさえ実は知っていない。」この講義は、いわゆる先進諸国の政治 ── その政治的発展と現代の政治過程、政治文化の比較を通じて、各国の政治についての知識を深めると同時に、政治とは何かについての理解を深めることを目的としている。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	比較政治と国民国家	この講義では、もっぱら国と国を比較しながら比較政治論を進める。国家と政治、近代国家の成立、国民国家の誕生、先進諸国の国家群、などについてこの章でふれる。	河合秀和（学習院大学教授）
2	比較の枠組	歴史的方法と構造的方法、国家主義・自由主義・民主主義・社会主義、政治的要求と政治機構、前期と後期の社会、階級という観念、コーポラティズム体制、などにふれる。	同上
3	イギリスの場合 Ⅰ	もっとも早かった先進的発展、四つの民族と四つの地域、早期の統一、法の支配、議会、内閣、議会制民主主義の成立、保守党・労働党、政治の長い連続性などにふれる。	同上
4	イギリスの場合 Ⅱ	バジョットのイギリス憲法論、政党の役割、首相の権限、閣僚と首相、法案、最高法廷にない違憲立法審査権、拮抗する労働党と保守党、利益団体、などにふれる。	同上
5	アメリカの場合 Ⅰ	世界史上最初の新興国家、自由で平等、経済的に豊か、人民の人民による人民のための政治、連邦制と三権分立制、「弱い政府」から「強い政府」へ、などにふれる。	同上
6	アメリカの場合 Ⅱ	大統領の指導力が強化、大統領制度の特色、連邦議会、政党の実状、議員採決の実態、連邦最高裁判所の違憲・合憲の判定、議会による大統領の弾劾などにふれる。	同上
7	フランスの場合 Ⅰ	フランスの「偉大さ」、知識人層の役割、大革命の進展とナポレオンの独裁、未完の革命、憲法の改正、ドゴールの登場、小財産所有者の国、小政党の乱立、などにふれる。	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	フランスの場合　Ⅱ	軍部の叛乱、第五共和制憲法の制定、中道に有利な選挙制度、大統領優位のもと政党選択が単純化、元老院は地方名望家の砦、ドゴールの失脚とその後、などにふれる。	河　合　秀　和
9	ドイツの場合	「上からの」統一、邦とプロイセン、ビスマルクの弾圧政策、世界観政党、ワイマール共和国憲法とヒットラーの登場、敗戦と国の分割、などにふれる。	同　上
10	西ドイツの場合	ドイツ連邦共和国の発足、選挙制度、連邦憲法裁判所、連邦議会選挙における各党得票率と連立関係、アメリカと競争する経済大国への成長、などにふれる。	同　上
11	ＥＣの場合	国民国家の直面する諸問題、ヨーロッパ経済共同体の設立、ヨーロッパ石炭・鉄鋼共同体の発足、ヨーロッパ共同体（EC）の組織、ヨーロッパ理事会・議会、その他にふれる。	同　上
12	ソ連の場合　Ⅰ	社会主義政権の成果、ロシア帝国の終焉、レーニンの革命政権樹立、新経済政策ネップの採用、スターリンの一国社会主義、スターリン以後の後継政権、などにふれる。	同　上
13	ソ連の場合　Ⅱ	ソ連共産党綱領、メンシェヴィキ派とボルシェヴィキ派、プロレタリアートの独裁、上意下達の組織、各級ソヴィエトの代議員の選挙、党と国家の分離、などにふれる。	同　上
14	日本の場合　Ⅰ	比較政治研究の実験室、イギリスと日本の相違、外からの影響と近代的発展、古代国家の成立、日本の封建制、明治新政府の樹立、憲法の公布、軍部の台頭、などにふれる。	同　上
15	日本の場合　Ⅱ	近代日本の政治的文化の特徴、新憲法の制定、世界史上もっとも成功した占領、憲法と軍備について暗黙の国民的合意、日本の政党の歴史、官界、政界、財界などにふれる。	同　上

＝第　三　世　界　の　政　治＝(R)

〔主任講師：小田英郎（慶應義塾大学教授）

全体のねらい

第三世界を構成するアジア、アフリカ、ラテンアメリカの各地域について、「序論」で述べるような共通の角度から分析、考察を進め、各地域の共通性と特殊性を把握しつつ、第三世界の全体像をえがきだすことをめざす。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	序論 －比較地域政治論の試み－	現代における第三世界の比重の増大に触れ、さらに伝統と近代化の相互関係、国民的統合、イデオロギーと政治・社会体制、国際社会に対するイメージと対外行動などから、各地域の特殊性と共通性を検討する。	小田英郎 （慶應義塾大学教授）
2	中国 (1) －革命と近代化－	近代化を目標とする中国が、いかにして伝統の克服をめざして苦悩しているかを、国民的統合の問題にも触れながら論ずる。	岡部達味 （東京都立大学教授）
3	中国 (2) －改革と国際関係－	国内経済改革と対外開放政策のもとで進行する政治改革、および、それらを円滑に遂行するための対外政策について論ずる。	同上
4	東南アジア (1) －独立と国民的統合－	人種、言語、宗教、文化……世界のなかでもっとも多様性に富むといわれるこの地域の植民地支配からの独立と国民的統合の努力のあとを、ベトナム戦争などにも触れながら考察する。	松本三郎 （慶應義塾大学教授）
5	東南アジア (2) －イデオロギー、政治体制、国際環境－	東南アジア諸国の近代化過程に現われたさまざまなイデオロギーや政治体制と業績を考察し、さらにその複雑な国際環境を、とりわけ日本との関係に注目しつつ分析する。	同上
6	南アジア －苦悩するインド亜大陸－	10億の人口の圧力と貧困にあえぐ南アジア諸国のきびしい現状を、混合革命方式で国家建設をはかってきたインドと、これと宿命的対決をつづけるパキスタンを中心に考察する。	同上
7	中東 (1) －古さと新しさのモザイク－	幾多の帝国の盛衰史のなかで豊かな文明と地域的、宗教的一体性を生みだしてきた中東の「古い」歴史を概観し、さらにヨーロッパ列強による「分割」と独立達成にいたる経緯を、現代中東政治との関連において考察する。	青木一能 （日本大学助教授）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	中東 (2) －紛争と対立の図式－	現代中東の重要争点である中東紛争の背景と展開に論及したのち、70年代後半以降の多発する紛争と対立を通して、中東政治の多元化と複雑化について考察する。	青木一能
9	中東 (3) －国家建設の模索と変動－	社会主義体制から君主制にいたる多様な政治体制下の中東諸国が、それぞれに国家建設を模索する状況を考察し、石油産出地域・中東と国際社会との相互作用といった問題を考慮しつつ、中東政治の変動状況を検討する。	同上
10	アフリカ (1) －歴史的復権の志向とナショナリズム－	歴史的復権への志向が現代のアフリカにおいてなぜ強いのか、それはナショナリズムやイデオロギーや政策にどう反映しているか、といった問題を、植民地時代を振り返りながら考察する。	小田英郎
11	アフリカ (2) －近代化と政治体制－	アフリカ的社会主義、一党支配体制、軍部支配体制など、国家建設や近代化の過程で出現したイデオロギーや政治体制を考察し、あわせて南部の白人人種主義体制（アパルトヘイト体制）にも論及する。	同上
12	アフリカ (3) －団結と対立－	アフリカ大陸諸国の連帯・団結をめざす反面、国家的自己主張で対立し、多元化の度合を高めるアフリカ圏内の国際関係、および非同盟運動を軸とした第三世界連帯運動への対応を考察する。	同上
13	ラテンアメリカ(1) －政治の伝統と風土－	植民地時代以来の統治理念や、独立後の国家形成の特徴、および個人独裁的な統治形態などの検討を通じて、この地域の政治の伝統と風土に迫ってみる。	加茂雄三 （青山学院大学教授）
14	ラテンアメリカ(2) －社会改革と政治体制の近代化－	20世紀に入っての中間層や大衆の登場を契機とする社会変動と、それに対応していった政治体制の近代化について、軍部の役割にも論及しつつ考察する。	同上
15	ラテンアメリカ(3) －国際政治の展開－	対米関係の歴史と現段階、1960年代以降の国際政治の多面化、および地域自決主義の動向などに論及しつつ、国際政治の面でのこの地域の政治について考察する。	同上

＝日本政治史＝（R）
1853～1987

〔主任講師：北岡伸一（立教大学教授）〕

全体のねらい

幕末以来の日本の内政と外交を講義する。歴史的事実の説明は最小限度にとどめ、各時代の政治権力の構造と変容の説明に力点を置く。また国際政治史や比較政治の視点を重視して、世界史の中に近代日本を位置づける。聴講者諸君が日本政治の特色を歴史的に把握し、今日の政治権力を見る目を養う一助となれば幸いである。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	幕藩体制の政治的特質	16世紀の日本と西洋 西洋の多元性 幕藩体制の一元性 正統性の問題 崩壊の容易さと統一の容易さ 武士のエトス	北岡伸一 （立教大学教授）
2	西欧の衝撃への対応	日本人の対外意識 幕府リーダーシップへの期待 条約勅許問題の登場 尊攘運動の激発 幕府雄藩連合体制の模索と崩壊 倒幕への道 低コスト革命の条件	同上
3	明治国家の形成	公議輿論の調達 権力の集中 権力基盤の整備―軍事 権力基盤の整備―財政 国民的基盤の創出―西洋文明の導入 人的エネルギーの動員	同上
4	政府批判の噴出	国際秩序の伝統と近代 征韓論 反政府派の発生 宥和政策とその限界 西南戦争 民権運動の発展 明治14年政変 民権運動の高揚と後退	同上
5	明治憲法体制の成立	憲法制定への道 プロイセン流の憲法 憲法付属の制度 明治憲法の特徴 天皇親政論と天皇超政論 条約改正問題 大同団結運動	同上
6	議会政治の定着	議会政治の出発 超然主義 初期議会の諸相 民力休養論の変容 日清戦後経営 隈板内閣成立前後 山県内閣 政友会の成立	同上
7	日清・日露戦争	主権線と利益線 朝鮮をめぐる日清対立 条約改正 日清戦争 清国分割の進展 門戸開放宣言 戊戌変法と義和団事件 日英同盟 日露戦争	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	帝国主義の発展	朝鮮問題から満州問題へ 満州問題と国際関係 ドル外交の展開と日露の接近 中国革命 21か条と反袁政策 寺内内閣の中国政策 シベリア出兵と西原借款	北岡伸一
9	政党政治の発展	伊藤内閣から西園寺内閣へ 桂園時代と藩閥 桂園時代と政党 大正政変 第1次大戦期の藩閥と政党 3党鼎立論の挫折	同上
10	国際協調と政党内閣	原内閣の成立 原敬没後 ワシントン体制の成立 ワシントン体制の崩壊 政党内閣の時代	同上
11	軍部の台頭	軍縮と軍備近代化 昭和軍閥の台頭 満州事変と連盟脱退 連盟脱退後の国際関係 斎藤内閣と岡田内閣 陸軍の派閥対立	同上
12	帝国の崩壊	広田内閣の成立 宇垣から近衛へ 日中戦争と総動員 東亜新秩序 第2次世界大戦の勃発 日米戦争への道 帝国の崩壊	同上
13	敗戦・占領・講和	敗戦 占領 非軍事化と民主化 占領下の政治過程 冷戦と講和	同上
14	自民党政治の発展	55年体制の成立 岸内閣と日米安保 池田内閣と佐藤内閣 派閥の発展 政策決定における自民党と官僚	同上
15	新しい国際的責任	国際関係の変容 田中内閣と対外問題 保革伯仲 西側意識の定着 新たな国際的責任	同上

＝西欧政治史＝（R）

〔主任講師：犬童一男（神戸大学教授）〕

全体のねらい

近代から現代への西欧における議会制民主主義の形成と展開は、各国の歴史的諸条件によって多様であったことを主に講述する。19世紀の民主化から戦後の福祉国家にまでわたるが、その間の民主化の停滞や独裁にも言及し、日本やその他の国の政治を学ぶ上でも有益な素材が提供できるようにしたい。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	西欧における政治の発展	西欧諸国で政治的近代化を意味する民主政の確立がどのように行われたか、R・ダールのポリアーキーへの発展理論に即して説明する。	犬童一男（神戸大学教授）
2	イギリスの古典的民主主義	議会の黄金時代とされるイギリスの古典的民主主義の成立を、それ以前の議会寡頭制の段階に遡って捉えると共に、その実体および問題点を明らかにする。	同上
3	イギリス議会制民主主義の確立	労働者階級が参政権を獲得した第2次選挙改革の成立過程を紹介すると共に、この改革後に生じた政治体制がいかなるものであったかを述べる。	同上
4	フランス議会制民主主義の形成	大いなるフランス革命以来の目まぐるしい政体の変遷をまず概観し、次に、第2帝制の下で国民経済の「離陸」があり、政治的近代化が準備されたことを示す。	同上
5	ドイツ第2帝制の成立と展開	ドイツの政治的統一過程を概観し、ビスマルク時代を中心に第2帝制の国内政策および対外政策がどう展開したか、ヴィルヘルム2世時代と対比して検討する。	同上
6	帝国主義時代の民衆運動	この時代の多様な民衆運動の中で第2インタナショナルに結集した社会主義労働運動を、革命型と改革型に大別して位置づけ、その問題点を探る。	同上
7	第1次大戦の勃発と帰結	帝国主義戦争とみなされる大戦の発生因を考察し、その展開と帰結としてのヴェルサイユ体制の成立にまで触れるが、とくに開戦時の各国議会の機能を問題にする。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	イタリア・ファシズム体制の成立	1920年代にイタリアがファシズム体制に移行したのは、戦前からの国家と国民の乖離を克服できず、戦後は議会政治自体が危機状況に陥っていたことを明らかにする。	犬童一男
9	イギリス労働党の成長	第1次大戦後に英労働党は欧州社会民主主義政党の中で指導的地位に上る。そうなったのは戦時内閣に参加し、抜本的党改革をなし、24年に政権を担当したことによることを論ずる。	同上
10	大恐慌とイギリスの政治過程	大恐慌は、第2次労働党政権成立後に到来した。政府は状況打開の政策作成を迫られたがこれに応え得ず、金融恐慌の中で崩壊し、挙国一致内閣が成立した過程を明示する。	同上
11	ワイマル共和国の崩壊	ナチスの時代と第2次大戦との関連から史上きわめて重大な意味をもつこの出来事を、共和国成立当初からの不安定性の存在を探ると共に、大恐慌の到来で加速された体制崩壊の過程を分析する。	同上
12	2つの人民戦線政府	新しい政治運動である30年代の人民戦線の特質について考察し、フランスおよびスペインの人民戦線とその政府の成立、連合諸党間の不一致による崩壊の過程を捉える。	同上
13	第2次大戦と国内政治体制	ファシズム対民主主義の戦いにおける後者の政治体制の推移を探る。イギリスでは労働側が参加したチャーチル政権、フランスではド・ゴールとレジスタンスが重要だったことを示す。	同上
14	戦後政治体制と福祉国家	第2次大戦後、現在の欧州政治地図が米英ソの協力と対抗の関係から形づくられたこと、またイギリスが戦中・戦後に作った福祉国家が、西欧諸国に拡がったことを明らかにする。	同上
15	小国における民主主義の発展	西欧には多くの小国があり、大国とは異質の民主政が形成された。言語や宗教で同質的な北欧3国では社会民主主義の合意政治が、異質的なオランダ、ベルギー等では多極共存型デモクラシーが形成されたことを検討する。	同上

＝ 行　政　学 ＝ (R)

〔主任講師：西尾　勝（東京大学教授）〕

全体のねらい

現代国家は職能国家・福祉国家・行政国家である。政治権力の正統性は、民意の代表性と共に、行政活動の成果に依存しているが、この行政活動の担い手こそ行政官僚制である。そこで、この講義では、行政官僚制の置かれた位置とその行動の仕組みについて理解を深めることを、主なるねらいとする。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	行政学の背景：現代国家の特質	現代行政学の生成と発展の背後には、近代国家が現代国家に移行する過程で生じた変化、すなわち、国家の職能国家化、福祉国家化、そして行政国家化といった諸現象があった。	西尾　勝（東京大学教授）
2	行政学の対象：三つの「行政」概念	行政学の考察対象となる「行政」の概念には3つの類型がある。すなわち、立法・司法と対比した行政、政治と対比した行政、そして組織の経営管理を行政とみるものである。	同　上
3	行政活動の類型	行政活動の目的別分類、性質別分類、民間活動との関係からみた分類について説明することをとおして、現代国家の行政活動の多種多様さを示し、行政管理活動の必要に論及する。	同　上
4	行政活動の分担(I)中央集権と地方分権	1国の行政活動はその国の政府体系を構成する複数の政府間で分担されている。そこで、この中央地方関係の歴史、類型について考察し、現代の相互依存関係について説明する。	同　上
5	行政活動の分担(II)戦後日本の中央地方関係	戦後日本の中央地方関係について説明し、出先機関・特殊法人の濫設、機関委任事務の増大、補助金等の増大といった新中央集権の諸現象について解説する。	同　上
6	政治家と行政官の関係	国会・内閣といった政治機関と行政機関の関係を政党政治家と行政官の関係からとらえ、各国の特徴を示すとともに、現代日本の官僚制をめぐる論議に言及する。	同　上
7	官僚制の特質	官僚制ということばの由来から説きおこし、マックス＝ウェーバーが指摘した近代官僚制の特質について解説したうえで、日本の行政官僚制にみられる若干の特徴にふれる。	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	官僚制の機能(I)：規律と裁量	組織構造の類似した官僚制でもその作動様式は多様になる原因が階統構造の運用の仕方にあることを示し、官僚制の正常な作動の鍵が規律と裁量のバランスにあることを説く。	西尾　勝
9	官僚制の機能(II)：命令と服従	チェスター＝バーナードの組織均衡理論と権威受容説について解説しながら、上命下服の緊張関係、面従腹背の諸形態、部下の忠誠対象の転移と反逆の関係などについて説明する。	同　上
10	官僚制の機能障害	法規万能主義、繁文　礼、セクショナリズム、権威主義など通常官僚主義として一括される官僚制の機能障害が官僚制の健全な作動のために必要な諸原則と裏腹の関係にあることを説く。	同　上
11	官僚制の意思決定方式	日本の行政官僚制の意思決定方式の基本は稟議制にあるといわれている。この稟議制が実際にはどういうものであるのか詳しく検討して、日本の意思決定方式の特徴を探りたい。	同　上
12	政策過程と政策構造	政策の循環回路について説明し、政策の形成と政策の作成という観点の違いを明らかにしたうえで、政策作成の観点に立って政策の過程と政策の構造について若干の説明を行う。	同　上
13	予算編成と会計検査	法令とならんで重要な政策の表示文書である予算が編成されていく際の意思決定方式について解説して、先の第11講を補うとともに、予算執行に関する会計検査に論及する。	同　上
14	行政活動の評価基準	政策実施活動を評価する基準としては、合法性のほかに、有効性と能率性の基準があるが、このうちの能率性評価の意義と限界について詳しく論じる。	同　上
15	行政統制と行政責任	行政に対する民主的統制は制度的外在的統制をその基本としているが、現代国家の行政を統制する手段は多様になっていることを述べ、合わせて行政統制と行政責任の関係に論及する。	同　上

＝現代の経済学＝(TV)

〔主任講師：嘉治元郎（放送大学副学長）〕

全体のねらい

現代の経済学の理論体系を概説し、日本経済の現状について考える手段を提供する。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	現代経済学の体系	現代経済学の基本的性格を説明し、その内容についての概観を与える。	嘉治元郎（放送大学副学長）
2	消費者の行動	無差別曲線（無差別図）を用いて、消費者行動の理論を説明する。	同上
3	生産者の行動	企業の行動を利潤極大化の原理にもとずいて説明する。	同上
4	競争市場の役割	競争的市場が、経済社会において果している役割について説明する。	同上
5	独占・寡占	完全競争の場合との対比において、独占的立場にある企業の行動について説明する。	同上
6	市場の失敗	いわゆる市場の失敗の現象を、外部経済、公共財の存在などの事例に則して説明する。	同上
7	巨視的経済モデル	一国の経済を示すマクロ（巨視的）モデルについて説明する。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	消費と貯蓄	マクロモデルにおける消費関数、貯蓄関数について説明する。	嘉治元郎
9	投資	マクロモデルにおける投資について、その需要面と供給面から論じる。	同上
10	景気変動	一国の経済活動水準の循環的な変動について説明する。	同上
11	経済成長	一国の経済活動の長期的な成長について説明する。	同上
12	経済政策の目標	混合経済体制の下での、政府の役割について論じる。	同上
13	財政	財政々策の理論と、財政の経済に関する関係を説明する。	同上
14	金融	金融の役割と、金融政策の意義について説明する。	同上
15	国際経済関係	一国の対外経済関係について、理論と政策の両面から論じる。	同上

＝ 産 業 組 織 論 ＝（TV）

〔主任講師：植草　益（東京大学教授）〕

全体のねらい

産業組織論では個別の産業が特定の時点でいかなる構造をもち、その下で各企業がいかなる行動をとり、いかなる経済成果を実現しているかを分析するとともに、企業の行動や産業に対する公共政策がその産業の構造を長期的にどのように変化させてゆくかを解明することをねらいとしている。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	産業組織論の課題と体系	まず産業とはなにかを説明し、そのなかで産業分類の方法について説明する。次に個別産業の分析の方法としての産業組織論の体系を説明し、さらに産業組織に重要な関連をもつ現代技術、産業構造、企業組織および産業に対する公共政策について概観する。	植　草　　益（東京大学教授）
2	産業構造の変化	産業組織論の具体的内容に入るまえに、産業組織論と重要な関連をもつ産業構造の変化と最近の技術革新の動向について論じる。ここではおもに戦後日本の産業構造の変化（重化学工業化、サービス化および情報化）と最近の先端技術開発の動向を論じる。	同　上
3	現代企業の組織	現代企業は所有の形態、企業規模、生産形態、企業結合の形態などにより、多様な形態に分類できる。それらの企業形態の分類を示すとともに、日本の企業組織の特徴をおもに産業組織との関連で考察する。	同　上
4	規模の経済性と範囲の経済性	現代の大企業はその主要製品について大量生産を実現するとともに、多品種にわたって垂直的、多角的に生産している。その実態を分析するとともに、その基礎としての規模の経済性と範囲の経済性について論じる。	同　上
5	売　手　集　中	産業組織論の体系に入って、まず売手集中についてその測定方法を示し、主要産業における売手集中の水準および時系列変化を説明する。さらに売手集中の水準を決定する要因について説明する。	同　上
6	製　品　差　別	製品差別の概念、製品差別を形成する要因、主要産業における製品差別の程度を論じ、さらに製品差別を形成する重要な要因としての広告についてその意義と問題点を論じる。	同　上
7	参　入　障　壁	参入障壁の概念、参入障壁の形成要因および参入阻止行動について論じ、現在の技術革新の進展過程で産業融合が進み、市場の国際化が進展するなかで、参入障壁が低下している実態に触れる。	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	現代企業の価格設定原則	現代の企業はいかなる価格設定原則を採用しているかを考えるため、価格設定原則に関する諸仮説を検討する。おもにフル・コスト原則、参入阻止価格、目標価格設定等を検討して長期利潤最大化仮説を論じ、それと売上高最大化仮説との異同を考える。	植草　益
9	寡占価格	現代の主要産業においては寡占が支配的市場形態である。寡占における価格形成について、クールノ以来の理論をサーベイし、現代における寡占の価格形成について論じる。また寡占における生産効率の向上と価格変化の実態に触れる。	同上
10	カルテルとプライス・リーダーシップ	寡占ばかりでなく原子的競争市場において各企業が協調的行動をとると、独占と同じ価格形成が可能となる。この協調形態の典型としてのカルテルとプライス・リーダーシップについて論じる。	同上
11	資源配分効率	特定産業における市場支配力や複数市場における多角的市場力が存在した場合には、資源配分効率が歪められる可能性をもつ。はたして現代において独占的市場支配力によって資源配分非効率が発生しているか否かを検討する。	同上
12	技術進歩	技術進歩は経済発展の原動力である。産業においていかに技術進歩が追求されているかを考えるため、技術進歩の概念、技術進歩の測定方法、技術進歩の基礎としての研究開発活動について概観する。	同上
13	独占禁止政策	これまでみてきたように、経済の成長・安定・進歩を実現するためには、市場機構にのみ全面的にゆだねておくことはできない。市場の不完全性による失敗が存在する。「市場の失敗」に対処するための産業に対する公共政策の1つとして独占禁止政策を論じる。	同上
14	直接規制政策	産業に対する公共政策の第2の形態としての自然独占分野（おもに公益事業）における政府の規制政策について、おもに価格規制のあり方を論じる。特に総括原価方式、限界費用価格形成、二部料金、ラムゼー方式などについて論じる。	同上
15	産業政策	産業に対する公共政策の第3の形態としての産業政策は多様な政策を含むが、おもに新産業の保護育成と衰退産業の構造調整について論じる。	同上

＝国際経済学＝（R）

〔主任講師：嘉治元郎（放送大学副学長）〕

全体のねらい

国際経済学の主要な内容について解説し、世界経済の現状について理論的に分析を加える。そのことを通して、我が国の国際社会における地位と役割を明らかにする。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	国際経済学とは何か	国際経済学の対象 対外経済取引 対外取引の種類 対外取引と国際通貨 通貨の交換と為替レート 国際収支とその表示	嘉治元郎 （放送大学副学長）
2	国際貿易の理論	貿易活動の目的 比較生産費説 自由貿易の利益	同上
3	自由貿易論	今日の世界貿易体制 貿易自由化とそれに対する反対論 自由貿易論の基本原理 自由化に伴う摩擦	同上
4	保護貿易論	自由貿易論に対する批判 保護貿易政策 自由貿易理論の諸前提 幼稚産業の保護 経済的安全保障への配慮	同上
5	国内経済と対外経済関係	開放巨視モデル（Open Macro Model） 総需要と総供給　政府購入　家計の消費 企業の投資　封鎖巨視モデル　輸入の説明 輸出の説明　乗数の理論　輸出と輸入	同上
6	貿易外収支	貿易外収支とは何か　貿易外収支の内容 サービス取引の特長　サービス需要の増大 金融活動の国際化 貿易外収支と生産要素の国際移動	同上
7	国際資本移動	資本収支の実態　直接投資　延払信用 借款　証券投資　短期資本収支 国際資本移動の原理　利潤率の国際比較 国際投資に伴う危険 自発的収支と調整的収支	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	経済発展と対外経済関係	経済発展の諸段階　　国際収支の段階的変化 若い債務国　　成熟した債務国　　若い債権国 成熟した債権国　　世界諸国の実績 貯蓄・投資と国際収支	嘉治元郎
9	国際金融の理論	国際金融とは何か　　国際通貨とは何か 国際通貨の役割　　現実の国際通貨 国際通貨としてのドル　　国際通貨の適正量 ドルの相対的価値	同　上
10	国際金融の機構	国際金融のシステム　　システムの崩壊 システムの再建 戦後国際経済システムを支える組織 国際通貨基金（International Monetary Fund） 国際復興開発銀行（世界銀行） 国際金融システムの調整	同　上
11	外国為替の理論	為替レートとは何か 為替レートの表示法 外国通貨の価値 外国為替の需要・供給 為替レートの長期的変化	同　上
12	国際収支の均衡	国際収支の均衡とは何か 収支均衡化のメカニズム 金本位制の自動調整機能 経済政策による国際収支の調整 国内均衡と国際均衡の同時達成 為替レートの変動と国際収支	同　上
13	労働力の国際移動	生産要素の国際移動 労働の国際移動の誘因 国際的な賃金格差 労働力の国際移動の実績 労働力の国際移動の経済効果 第二次大戦後の労働力の国際移動	同　上
14	国際経済の現状	世界経済の分析方法 貿易マトリックス（貿易行列） 国際資本移動の分析　　世界諸国の分類 南北関係　　東西関係 世界経済の一体化と国際経済学	同　上
15	日本経済と世界経済	戦後における日本経済の発展 Ⅰ　援助と特需の時期　　朝鮮動乱と特需 Ⅱ　重化学工業化達成の時期　　軽工業から重化学工業へ Ⅲ　貿易黒字、円の為替レート上昇の時期 貿易収支と為替レート Ⅳ　経済大国への移行の時期 Ⅴ　債権国の役割を果すべき時期 自由化と国際化 ― 貿易の場合 国際化と自由化 ― 金融の場合	同　上

＝ 財　政　学 ＝（TV）

〔主任講師：貝塚啓明（東京大学教授）〕

全体のねらい

主として国の財政を中心に、財政の仕組み・機能・政策問題をわかり易く説明したい。その際、資料その他なるべく最新のものを用い、現実の財政問題に関心がもてるようにする。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	財政とは何か	財政とは政府の経済活動を指すが、ここでは話の糸口として、財政問題の実例を二、三あげて、それがなぜ財政の観点から問題になるかを説明し、序論に代えることとする。実例としては、年金、税制、公債発行などを予定している。	貝塚啓明（東京大学教授）
2	民間部門と公共部門	私企業体制を中心とする資本主義経済においても、政府は必要不可欠な役割をもっている。他方、公共部門は長期的に拡大化傾向を示し、多様な活動を行っている。ここではこのような公共部門の拡大を跡づけ、公共部門の行動原理を説明する。	同　上
3	日本の財政システム ―予　算―	公共部門の運営は、予算制度を通じてなされる。予算は、通常1年を単位としており、その年度の支出計画と収入の見積りを示したもので、議会（国会）の議決を経て成立する。ここでは中央政府について予算の概要を説明する。	同　上
4	日本の財政システム ―租税と公債―	予算の歳入面は、租税収入と公債収入に分かれる。ここでは、租税収入の構成と主たる税目の概略、および公債制度のおうよそを説明する。	同　上
5	日本の財政システム ―地方財政―	これまでの説明は、単一の政府を前提にして議論してきたが、現実の公共部門には、複数のレベルの政府が存在する。日本では、国、都道府県、市町村の三つの政府のレベルがあり、その相互関係は複雑である。	同　上
6	公共支出の役割	政府活動が必要不可欠であるのは、民間部門において市場の失敗が生ずるからである。特に社会のすべての構成員にとって共通に消費される財・サービス（公共財）が存在し、民間部門がこれを供給しえないことが政府が最小限必要な理由となる。	同　上
7	多様な公共支出	現実の公共支出は、多様な内容をもっている。防衛、警察、一般行政などの純粋公共財、一般道路、河川改修などの準公共財、さらには、高速道路、鉄道などの私的財に政府が支出している。所得再分配のための移転支出や社会資本形成のための公共投資も重要である。	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	公共支出と所得再分配	公共部門がもつ重要な役割である所得再分配機能は、現在では社会保障システムがこれを行っている。ここでは、最低生活水準の保障から始まる多様な社会保障システムとその問題点をみる。	貝塚啓明
9	租税体系	政府の財源調達のなかでもっとも大きな比重を占める租税をどのような形で課税するかはもっとも重要な問題といってよい。公平で中立的な課税方式が所得、消費、資産などの課税ベースのどれを採用したらよいのかを説明する。	同上
10	所得税	現在ラテン系諸国を除いて先進諸国の租税の中核をなすのが（個人）所得税である。簡単に所得税の仕組みと現行所得税がかかえる問題点を説明する。	同上
11	法人税	日本の国税収入において大きな比重を占める法人税は、法人利得（法人所得）を課税対象としている。ここでは法人税の仕組みとその経済効果を説明する。	同上
12	間接税	転嫁することを前提として課税されるのが間接税である。従来の日本の税制では、特定の個別品目にのみ課税される個別消費税しかなかったが、最近になって広く消費一般に課税される消費税が導入された。ここでは、ヨーロッパ諸国で採用されている消費税にもふれる。	同上
13	公債発行をめぐる問題点	日本の財政は、最近まで大幅な財政赤字を示してきたが、これに伴う公債発行については、賛否両論がある。ここでは主としてこの点をふれる。	同上
14	経済発展と財政	明治以降の日本の経済発展に財政がどのような役割を果したかを、財政支出と税制について検討する。	同上
15	今後の財政問題	1990年代における日本の財政問題を展望する。財政赤字の動向、政府規模の拡大、今後の税制や社会保障の将来などが扱われる。	同上

＝　金　　融　　論　＝（TV）

〔主任講師：貝塚啓明（東京大学教授）〕

全体のねらい

経済活動は物の取引と金融取引に大別される。この講義では、金融取引が物の取引にどのような影響を及ぼすかを説明する。具体的には、さまざまな金融取引の仕組みとそれを仲介する金融仲介機関の機能を説明しつつ、金融や経済成長、雇用、インフレ、貿易などにどのような影響を及ぼすかを明らかにする。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	金融とは何か	金融活動を定義し、金融問題の例を挙げてこの講義のいと口とする。金融の機能としては、貨幣の存在とこれを前提とする貸借が中心となる。金融問題としては、インフレーションと株価の暴落を例として説明する。	貝塚啓明（東京大学教授）
2	金融制度	金融制度の基礎として貨幣制度が定着している必要があり、まず、日本の貨幣制度を概観する。さらに中央銀行、銀行制度、その他の諸制度を日本の実情に即して説明する。	同　上
3	金融構造	金融制度の背後には、金融構造がある。間接金融と直接金融、既発行証券市場の確立、銀行と企業との関係など金融システムの性格を左右するのが金融構造の差異である。これらの問題を日本と先進主要国との比較において説明する。	同　上
4	貨幣の供給	一般的支払手段として機能する貨幣は、一国経済の金融資産のなかでも重要な役割を担っている。この章では、貨幣を定義した上で、それらが中央銀行と民間銀行とからなる銀行部門によって供給されるメカニズムを明らかにする。	岩田規久男（上智大学教授）
5	貨幣の需要と利子率	利子率は投資に影響を及ぼし、投資は国民所得・雇用・物価・インフレ率などに影響を及ぼすという意味で重要な経済変数である。この章では、利子率が貨幣の供給と需要が等しくなるように決定されることを説明する。	同　上
6	通貨と国民総生産・雇用・インフレ	貨幣の供給は経済成長と雇用に投資への影響を通じて影響を及ぼす。この章では、このマクロ経済のメカニズムを説明する。	同　上
7	貨幣とデフレ・不況	1929年に始まるアメリカの大不況はなぜ生じたか。その原因を貨幣供給との関係で探った後、ケインジアンによる原因説明との関係を説明する。	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	貨幣とインフレ	インフレは物の供給量の増加率よりも貨幣供給の増加率の方が大きいときに生ずるという素朴な考え方がある。この考え方の妥当性を短期と長期に分けて実証的に検討する。	岩田規久男
9	財政赤字とインフレ	財政赤字は貨幣供給や国債残高の変化を通じて国民所得・雇用・インフレなどに影響を及ぼす。この章ではこのメカニズムを説明する。	同上
10	金融政策の目的と手段	金融政策の目的は何か、それらの目的を達成する手段としての金融政策にはどのようなものがあるかについて説明する。	同上
11	金融政策のあり方	金融政策のあり方は、金融政策の効果の遅れや市場の自動調整機能をどのように考えるかによって異なる。この章では、歴史的経験を踏まえて、これらの問題を考慮し、金融政策のあり方を検討する。	同上
12	国際金融	今日、国際金融上の重大な問題は、為替レートの変動である。為替レートの変動は私たちの生活にどのような影響を及ぼすか、それはなぜ大きく変動するのか、安定させるための経済政策は如何にあるべきか等を説明する。	同上
13	金融仲介の機能	第10章までは銀行などの金融仲介機関の存在を明確に考慮せずに金融のメカニズムを説明してきた。この章では、金融仲介機関が存在することによって、どのようなメリット（経済成長の促進など）が生ずるかを説明する。	同上
14	金融自由化	銀行を始めとする金融仲介機関はさまざまな規制を受けているが、昭和50年代に入って、規制緩和＝自由化が徐々に進行している。このような事態はなぜ発生したのであろうか。金融自由化はどのように進めるべきであろうか。それは、金融サービスの消費者にとってどのようなメリットをもつであろうか。この章ではこれらの問題を説明する。	同上
15	新しい金融取引	最近では、金利スワップ・金融先物・通貨先物・オプションなど新しい金融取引が活発になっている。これらの新しい金触取引の仕組みと機能を説明する。	同上

＝日本経済史＝ (R)

〔主任講師：三和良一（青山学院大学教授）〕

全体のねらい

近代日本の経済成長は、国際的に比較してみて、際立って急速なものであった。封建社会から資本制社会への移行期、資本制社会の確立期、そして資本制社会の変質期において、日本経済はどのような特質を示したかを見るなかで、急速な経済成長をもたらした要因とその国民生活や国際関係への影響を検討してみよう。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	資本制社会論	高い経済成長が可能な資本制社会の構造をそれ以前の社会と対比して検討する。その構造の特質として共同体が解体した社会、身分的支配のない社会、市場を軸に再生産をおこなう社会という3つの面から見る。	三和良一（青山学院大学教授）
2	幕末の経済と開港	商品経済が発達してきた幕末では農民層の分解が進められる一方、問屋制家内工業やマニュファクチュアも見られるようになった。そして開港によって日本は世界資本主義と接触する。そこでは半植民地化の危機にもさらされた。	同上
3	明治維新	中央集権を確立した明治政府によって、領主支配をささえていた身分的支配体系が解体される。地租改正と秩禄処分によって近代資本制社会が成立するための基本的前提条件が整備される過程を見ながら、明治維新の経済史的意義を考える。	同上
4	殖産興業と松方財政	明治政府は殖産興業に力を入れた。それはまず近代的生産技術の導入であり、近代的企業の育成であった。そのために必要な通貨金融制度の整備がはかられた。また大隈財政と松方財政はインフレとデフレの渦に農民をまき込み、結果として賃金労働者の供給源をつくり出した。	同上
5	近代産業の発達(1) ―軽工業―	松方財政のあとをうけて日本は企業勃興期に入り、日本の産業革命時代あるいは産業資本確立の時代がはじまった。日本の産業革命は当時の最先端技術の導入による後発国型産業革命であった。しかしそこには特殊な歪も生じる。ここでは近代紡績業発展の軌跡もたどる。	同上
6	近代産業の発達(2) ―重工業―	日本の産業革命は前章で触れたように綿工業・石炭業・輸出産業・軍需工業の4つの確立によって完成する。ここでは近代石炭業の確立、近代鉄鋼技術の導入、兵器生産と機械工業の発達、運輸業の発達の様相などを見る。	同上
7	日清・日露戦争と日本経済	戦争は財政規模を一挙に拡大させた。この時期に日本は金本位制を採用、植民地経営に乗り出した。独占化の傾向があらわれ、財閥もコンツェルン形態をととのえた。資本制社会確立期の再生産の構造も概観する。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	第1次世界大戦と日本経済	国際収支の危機に直面していた日本は第一次大戦により債務国から債権国に転化した。しかしやがて反動恐慌に見舞われ、政府は企業の大規模な救済措置をとった。関税改正と商権回復、労働運動についても概観する。	三和良一
9	1920年代	第一次世界大戦後、世界経済の基軸国は交替し、現代資本主義への変容がはじまった。日本経済もまた国内市場を拡大して、新しい局面を迎えた。重化学工業化を進めながらも、資本蓄積と国際収支の危機に見舞われ、新しい経済政策の展開もはじまる。	同上
10	昭和恐慌	片岡蔵相の失言をひきがねに金融恐慌が起こり、やがて銀行の集中化が進められた。1920年代の危機への対策として金解禁と緊縮財政を柱とする井上財政が登場した。しかし、暗黒の木曜日ではじまる世界恐慌と重なり、日本の諸産業は痛烈な打撃を受ける。	同上
11	高橋財政	金本位制を放棄し、景気政策を採用した高橋財政期の日本経済はどう展開したか。各国にさきがけて日本は恐慌から脱出したが、軍事費を抑制しようとした高橋蔵相は2・26事件で倒された。貿易・産業構造は大きく変容し、独占体制も強化されていった。	同上
12	戦時経済	満州事変・日中戦争・太平洋戦争へと突き進んでいった日本の戦時経済の姿を追う。この時期に世界経済はブロック化し、日本は統制経済の道を歩む。また軍需主導の重工業化が進み、財閥が強大化する一方で、地主制は凋落していく。	同上
13	戦後経済改革	戦後の日本経済はアメリカの対日占領政策によって大きな構造改革を迫られる。それは経済的非軍事化政策であった。財閥解体、農地改革、労働改革が次々と実施されていった。しかし東西関係の変化は対日占領政策を転換させることになる。	同上
14	経済復興	戦後の混乱と荒廃から立ち上がり、高度成長へのレールを敷くまでの経済復興の経過を見る。悪性インフレの克服、企業の再建整備、ドッジ・ライン、朝鮮戦争による特需ブームの役割などを確かめ、さらに戦後の経済構造の変化を分析する。	同上
15	高度経済成長	高度成長を可能にした市場的要因や産業・貿易・資本構造の変化を分析する。さらに、この時期に急激に進められた技術革新を概観するとともに、高度成長に果たした経済政策の役割を見る。高度成長の終焉の意味するところを考えよう。	同上

＝欧米経済史＝（改訂版）＝（R）

主任講師：関口尚志（東京大学教授）
〔主任講師：梅津順一（青山学院女子短期大学助教授）〕

全体のねらい

この講義では、一五・六世紀から現代にいたる欧米諸国の経済発展を対象とし、いくつかの主要な問題を比較史的に検討することを狙いとする。具体的には、近代資本主義の発生をめぐる南欧、国民経済の構造をめぐるイギリスとオランダ、産業革命をめぐるイギリスと大陸諸国、後発資本主義としてのドイツとロシアといった比較を行う。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・職名）
1	近代ヨーロッパの商業的拡大と貿易国家の盛衰(1) －ポルトガルとスペイン－	はじめに ポルトガル・スペインの海外進出 スペインの経済的衰退 ＜視角と焦点＞アウグスブルクのフッガー家	梅津順一 （青山学院女子短期大学助教授）
2	近代ヨーロッパの商業的拡大と貿易国家の盛衰(2) －オランダとイギリス－	オランダとイギリスの抬頭 貿易国家オランダの興隆 オランダの衰退 ＜視角と焦点＞オランダ東インド会社	同上
3	近代ヨーロッパにおける農村工業と都市工業(1) －近代化の歴史的起点－	経済的衰退の様相 イギリスの農村工業の基盤 中世の都市と農村 領主的市場経済の衰退 農民的市場経済 ＜視角と焦点＞中世都市の世界史的意義	同上
4	近代ヨーロッパにおける農村工業と都市工業(2) －市場構造と経営形態－	経済発展の経路 都市の商人と農村の生産者 農村都市と新しい流通網 農村生産者の経営形態 ＜視角と焦点＞シュレージエンの農村工業	同上
5	近代ヨーロッパにおける「独占」と「経済的自由」 ―絶対王制と市民革命―	農業経営の変化　日用品工業の定着 絶対王制の経済政策　絶対王制の財政危機 市民革命の経済史的意義 ＜視角と焦点＞近代イギリスにおける食糧危機	同上
6	近代資本主義と宗教意識	ヴェーバー学説の経済史的側面 合理的経営的資本主義と政治指向的資本主義 プロテスタンティズムの禁欲と資本主義の精神 ＜視角と焦点＞ピュウリタニズムと経済生活	同上
7	イギリス重商主義と南北アメリカ	名誉革命体制の財政制度と信用制度 国内産業の保護 スペイン領植民地の経済 英仏のプランテーション植民地と黒人奴隷 アメリカ独立の経済的背景 ＜視角と焦点＞アメリカ大陸の南と北	同上

回	テーマ	内容	担当講師 (所属・職名)
8	イギリス産業革命の世界史的意義	近・現代史把握の基礎視点 イギリス産業革命の展開 イギリス産業革命の革新性・古典性 自生的産業変革の前提諸条件 ＜視角と焦点＞生活水準論争	関口尚志 (東京大学教授)
9	産業化の波及と後進資本主義の経済構造	先進資本主義と後進資本主義 フランス革命と産業革命 独立戦争・南北戦争とアメリカ産業革命 プロシア農民解放とドイツ産業革命 後進資本主義型産業革命の基本性格 ＜視角と焦点＞鉄道と銀行	同上
10	19世紀の世界資本主義	後発生の経済・不経済 自由貿易と国際金本位制－先進国ナショナリズム 自由貿易と帝国主義 世界市場の構造と後進国の保護主義 貿易摩擦と文化摩擦 ＜視角と焦点＞自由貿易帝国主義	同上
11	「大不況」と資本主義の構造変化	「大不況」とその背景 農業不況と保護関税 独占資本の形成－アメリカ－ 独占資本の形成－ドイツ－ 「反独占」運動 ＜視角と焦点＞反独占運動と消費者の利益	同上
12	イギリス産業精神の衰退と植民地支配	「第２次産業革命」とイギリス「工業独占」の解体 多角的貿易（＝決済）機構 「イギリス病」の歴史的起源 「生活権の足枷」と「過去の重荷」 帝国主義と「資本主義の精神」の崩壊 ＜視角と焦点＞新救貧法と福祉国家への道程	同上
13	帝政ドイツ・旧ロシアの経済と社会	帝政ドイツの高度産業化－金融資本の形成 中小企業・農民問題 ユンカー経営の歴史的特質 「ユンカー的・ブルジョア的」帝国主義 ロシアの工業化とミール共同体 ＜視角と焦点＞社会主義的工業化と市民的変革の課題	同上
14	ニューディールとファシズム	両大戦間における資本主義の変容 基軸国アメリカ－高度大衆消費社会 大恐慌と世界経済 ニューディール ナチス統制経済 ＜視角と焦点＞フランスの国有化と経営的革新	同上
15	近代化と現代資本主義	ナチス成立の社会的基盤　下層中産階級の経済的・心理的貧窮化　「社会主義の貧困」と「中産層社会主義」　近代化とファシズム－ドイツ革命の根本問題－近代化と現代資本主義　反独占の視点－現代資本主義をどう捉えるか－　現代資本主義と低開発経済 ＜視角と焦点＞低開発経済の自立・発展と比較経済史	同上

＝近代日本の生活と社会＝（TV）

〔主任講師：大濱徹也（筑波大学教授）
主任講師：熊倉功夫（筑波大学教授）〕

全体のねらい

日本人の生活は、明治維新以来、今日に至るまで大きく変化してきた。その変化は西欧化という側面や合理化機能化といった様々な面をもっているが、しかし生活の実態を支えてきたのは伝統的な生活感覚だった点も見逃せない。日本の近代生活と伝統的社会、地域、日本人の心意とがいかに結ばれ、また切り離されてきたかを考える。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	生活のリズム	勝手口からの眼 国家祝祭日をめぐって 学校行事のなかで ハレ日とハタ日の間で	大濱徹也 （筑波大学教授）
2	開拓地の生活と祈り	移民の動向 入植者への手引き 天塩川流域の町村 共同一致の場を求めて	同上
3	生活のなかの碑	建碑をめぐって 戦争記念碑のこと 記念碑が問いかける世界 心を問う場として かたりとしての歴史	同上
4	世間とつきあい	つきあいとは 神前結婚式の誕生 世間の変容	熊倉功夫 （筑波大学教授）
5	良妻賢母	開化の学問 女学校の誕生 高き志をもって 「女子教育」をめぐって 女子の心得	大濱徹也
6	礼儀作法の近代化	近代の小笠原流 合理性と機能 礼法書の世界	熊倉功夫
7	食事の変化	外来料理の黎明 肉食の登場 新しい味	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	台所と食卓	新しい住まいの基準 台所の機能 箱膳からちゃぶ台へ	熊倉功夫
9	田園都市	東京と大阪 — 産業経済を中心に — 村の革命 「一家団欒」主義の虚実 郊外住宅の形成 近郊農民の生活 「吾等が村」を求めて	大濱徹也
10	サラリーマンの誕生	呼称をめぐって 腰弁 — 俸給生活者の世界 「学歴社会」の誕生 浮き沈みの人生	同上
11	酒と煙草の文化	日本固有の酒の飲み方 洋酒と酒場 煙草の文化	熊倉功夫
12	習いごとの社会学	習いごとと家元制 家元制度の歴史 家元制度の条件の権限 現代の家元 個性と創造性	同上
13	和服と洋服	洋服の導入 女性の洋装 大正・昭和の服装	同上
14	戦争と生活	兵役の義務 「尚武須護陸」の世界 内務班での生活 兵士と家族をめぐって	大濱徹也
15	現代日本人の生活と社会	歴史への視点 生活を読む 世相と風俗 盛り場と娯楽	大濱徹也 熊倉功夫

＝社会学研究法＝（TV）

〔主任講師：甲田和衞（放送大学長）〕
〔主任講師：高坂健次（関西学院大学教授）〕

全体のねらい

社会学研究法とは、社会学説史と対をなす社会調査法のうち、後者すなわち経験社会学の方法をさす。経験社会学の採択している方法は、社会事象の量化と事後実験である。この両者にみあう社会事象はきわめて限定されている。まず、なぜ限定されるかについて考えたい。そこから社会学が歴史学や心理学とどう異なるかがおのずからあきらかとなる。そこで社会学は分析のためのデータを広い意味での人類学に求め、それに統計学・数学を適用しようとする。ついで直接、社会調査を実施することはいうまでもない。その結果はまだ全体社会とよばれるものを説明するにはいたっていない。しかし、婚姻、社会的移動、階層などの人間の選択行動と社会制度との関係の説明が、歴史学、人類学あるいは心理学などといささかは異なり、社会学的説明といわれるものを提出しえたかどうかが、この研究法の課題である。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	社会的行動	社会学の対象のうち数理社会学のアプローチの可能な分野についての解説、とくに使用できるデータは社会人類学が中心となる。	甲田和衞（放送大学長）
2	インセスト・タブー	インセスト・タブーをめぐる解釈と残された課題	同上
3	近親婚	許される婚姻についての範囲	同上
4	南インドの婚姻規制	sisister's daughter 婚と sister exchange との関連	同上
5	系譜空間	系譜空間と呼ばれる構造は存在するか	同上
6	親族体系	出自理論と縁組理論をめぐる諸問題	同上
7	系譜的方法・タイポロジイ	系譜的方法とタイポロジイの限界について	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	社会学研究法の課題	社会学は歴史を説明できるか、歴史を無視することによって成立した機能主義とneo-functionalismについて	甲田和衛
9	年齢階梯制	年齢階梯制のルールと安定条件	高坂健次（関西学院大学教授）
10	呪術と不安	呪術と不安に関する機能論的説明の論理	同上
11	人間集団のモデル	人間集団に関するホーマンズ理論の数学的定式化	同上
12	親族構造のモデル	許される婚姻の条件と社会のタイプについて	同上
13	学歴社会と不平等	教育機会の均等化にもかかわらず社会的不平等がなくならないのはなぜか	同上
14	階層のイメージ	階層のイメージ形成と階層帰属意識	同上
15	意図せざる結果	「相対的剝奪」の概念の数学的定式化	同上

＝社会構造と社会変動＝（R）

― 近代化の理論 ―

〔主任講師：富永健一（東京大学教授）〕

全体のねらい

マクロ社会学理論の視点から、産業化と近代化の解明に一貫した理論的説明を与えることがこの講義の目的である。産業化と近代化は西洋17世紀にはじまって世界をすっかり変えてしまった社会変動である。この社会変動の性質を、構造 ― 機能分析の視点（社会変動とは社会構造の変動であるから）に立ちつつ詳細に分析してみたい。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	Ⅰ　序論 近代化と産業化：問題の出発点	キー・ワード（その１）：産業化 キー・ワード（その２）：近代化 近代産業社会の概念	富永健一 （東京大学教授）
2	近代化・産業化への「先発」と「後発」：日本の位置	近代化と産業化における先発と後発 近代化と産業化における西洋と東洋 非西洋後発社会の近代化と産業化	同　上
3	Ⅱ　社会構造へのアプローチ 社会構造とは何か	「理念型」としての近代産業社会 社会構造の概念 社会構造の変動としての社会変動	同　上
4	社会のミクロ分析対マクロ分析	社会実在論と社会名目論 ミクロ分析 ― 行為理論的アプローチ マクロ分析 ― システム理論的アプローチ	同　上
5	社会の基本類型	ここでの社会とは「狭義の社会」を意味する 全体社会と部分社会 社会の基本類型	同　上
6	近代産業社会の社会構造（総論）	構造分化 ― 家族と組織との分離 組織と市場 地域社会と地域行政組織	同　上
7	Ⅲ　近代産業社会の社会構造(各論) 家族・親族の構造	家族と親族 家族の諸類型と核家族の意味 家族・親族としての機能縮小とゲマインシャフトの最後の拠りどころとしての核家族	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	組織の構造	機能集団としての組織 組織の構造分析 近代産業社会の構造要素としての組織	富永健一
9	地域社会の構造	生態学的アプローチ 村落 都市	同上
10	社会階層の構造	不平等の構造化 身分・階級・社会階層 階層的地位形成の過程論的・多元論的特性	同上
11	国家と国民社会の構造	国民社会 国民国家 世界社会の問題	同上
12	Ⅳ　社会変動へのアプローチ 社会変動とは何か	何が変動するのか 社会成長・社会発展・社会進歩 社会変動の諸類型	同上
13	近代化理論・1 進歩の理論	近代的精神の基礎：啓蒙主義 実証主義・経験主義 「進歩の観念」	同上
14	近代化理論・2 進化の理論	古典社会進化論（その1） 古典社会進化論（その2） ネオ社会進化論へ	同上
15	近代化理論・3 発展の理論	産業化・近代化の社会構造的諸次元 ゲマインシャフトからゲゼルシャフトへ （テンニエス） 伝統的支配から合法的支配へ（ヴェーバー）	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
16	構造―機能理論と社会変動	構造と機能 構造ー機能分析の論理 社会変動の理論化	富　永　健　一
17	社会変動における発展段階（総論）	ネオ社会進化論の理論枠組 社会進化の発展段階図式 社会進化の発展段階と社会構造の変動	同　上
18	Ⅴ　社会変動における発展段階（各論） 家族・親族の変動	未開社会における家族・親族 農業社会と家父長制家族：「家」制度 日本社会における家と同族	同　上
19	組　織　の　変　動	農業社会段階における組織 近代産業社会前期における組織 近代産業社会後期における組織	同　上
20	地域社会の変動	農業社会前期における都市と村落 農業社会後期における都市と村落 共同体の解体としての近代化	同　上
21	社会階層の変動	農業社会前期における社会階層 農業社会後期における社会階層 近代産業社会における社会階層	同　上
22	国家と国民社会の変動	近代以前の国家の諸形態 近代産業社会における国民社会と国民国家 高度産業化と福祉国家化	同　上
23	Ⅵ　世界史の中での近代化と産業化 社会変動の構造―機能主義的解釈	社会進化の共通の方向性 社会進化についての構造ー機能理論的解釈 なぜ世界は一様に進化しなかったのか ―― 予備的考察	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
24	社会進化の動因：「内在的」発展対「伝播的」発展	内生因 ── 先発国における「内在的」発展 外生因 ── 後発国における「伝播的」発展 後発国における社会発展の成否をきめる諸条件	富永健一
25	非西洋後発社会における近代化と産業化・1 ：日本の場合	日本の伝統社会 幕末・明治維新における近代主義対伝統主義 明治・大正・昭和における近代化と産業化	同上
26	非西洋後発社会における近代化と産業化・2 ：中国の場合	中国の伝統社会 清末・辛亥革命と中華民国のもとでの近代化と産業化 中華人民共和国のもとでの近代化と産業化	同上
27	非西洋後発社会における近代化と産業化・3 ：日本と中国の比較	伝統社会の構造についての日中比較 近代化段階における社会変動の日中比較 近代化段階における国際環境についての日中比較	同上
28	Ⅶ　未来へ向けての展望 ポスト工業社会と情報化社会	ポスト工業社会 情報社会 情報社会は知識社会と言えるだろうか	同上
29	高齢化社会と福祉国家	人口構成の高齢化 人口の高齢化と社会の構造変動 国家と自治体の役割	同上
30	回顧と展望：19世紀から20世紀への遺産と20世紀から21世紀への遺産	19世紀から20世紀への遺産としての社会主義 社会主義の思想と運動の正統派としてのマルクス主義 21世紀へ向けての20世紀の遺産は何か	同上

＝ 地 域 と 生 活 ＝ （ＴＶ）

〔主任講師：加藤秀俊（放送教育開発センター所長）〕

全体のねらい

人間は、大地とはなれて生活することはできない。その大地に根をおろした人びとは、おのずから地域社会を形成した。この番組では自然的環境や風土の中での人びとのさまざまな生活のありかたを多様な角度からさぐる。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	地域社会をさぐる	「地域」とはいったいなにを意味するのであろうか。また、地域研究がなぜ必要なのか。さらに、地域研究の方法はどのようなものなのか、「地域と生活」への手がかりを考えてみることにする。	加藤秀俊（放送教育開発センター所長）
2	盆地の世界	日本列島には無数の盆地がある。それらの盆地は、そとにむかって閉ざされた小宇宙であるといってもよい。そしてそこでは、ゆたかな想像力によって民話も生まれた。放送では日本民俗学の成立にもふれる。	同上
3	杉と地域社会	日本の国土の７０％は山林であり、その山林のなかにもたくさんの地域社会がある。日本の林業の現在の状況をふまえながら、主として日本を代表する杉をとりあげる。	同上
4	島の社会	日本は文字どおりの島国である。だがわれわれの多くは、いわゆる「離島」に生活する人びとの姿を知らない。本州に近接した島でさえ、そこには小さな島の地域社会がある。その問題をさぐることにする。	同上
5	雪国日本	太平洋がわに住む人間には想像もできないような積雪地帯が日本海がわにはひろがっている。その雪国のなかでの地域生活はいったいどのようなものなのだろうか。雪と人間生活のかかわりを考察する。	同上
6	地域と住まい	日本の風土的条件は地域によって大きなちがいをもっている。そのちがいが、もっともきわ立って反映されているのは住居であろう。その住居のさまざまを各地でとらえ、研究してみたい。	同上
7	村おこし	日本の人口移動は急激な都市化の波のなかで加速化し、いわゆる「過疎」の村がほうぼうにできてしまった。しかし、そういうなかで、村の再活性化がおこなわれている。その実態を研究する。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	市と鍛冶	地域と地域のあいだには、物資や情報の交流がふるくからあった。その典型として、「市」と、野鍛冶のふたつを題材にしながら地域間交流の形態をさぐってみることにしたい。そしてその伝統のうえでの現代をも考察する。	加藤秀俊
9	のびる郊外	大都市への人口集中と、ぼう大な数の通勤者の誕生によって、「郊外」というものが生まれはじめた。さいきんでは、「超郊外」とでもいうべき状況さえみられる。いったい「郊外」にはどんな問題があるのかを考察する。	同上
10	街道の役割	地域と地域とをむすぶのは道路である。現在では鉄道や高速道路が発達し、交通は便利になったが、むかしは、日本の主要な地点を街道が通っていた。宿場町という町もできあがった。中山道の例で考察する。	同上
11	高齢者と地域	日本はいまや世界一の長寿国になった。そのように変貌してゆく社会のなかで、高齢者の果たすべき役割は大きい。地域社会形成者、そして文化の伝承者としての老人の姿を学習する。	同上
12	地域のイメージ	それぞれの地域には、それぞれのイメージがつきまとう。いったい、なにがイメージをつくるのか、そして、イメージと人間とのかかわりはどのようなものなのか、をとらえてみることにする。	同上
13	ひろばと生活	地域社会、とりわけ都市生活のなかでは、人間どうしの出会いの場としての「ひろば」が大きな意味をもつ。日本の都市の「ひろば」の歴史と現代とを再検討しながら、現代生活を研究する。	同上
14	地域と食生活	第6章で日本の諸地域と住居形態をみたが、ことなった地域それぞれは独自の食文化をも形成してきた。その地域差と背景にある歴史とを研究しておくことは、日本を知るためのだいじな手がかりである。	同上
15	現代都市の祭	むかしの村落共同体には、さまざまな祭礼があった。しかし、都市のなかにも祭の伝統はあるし、また、あらたな祭を形成してゆく力もはたらいている。都市の人間にとっての祭の意味と役割をかんがえて結びとする。	同上

＝ 地 域 社 会 学 ＝ （ＴＶ）

〔主任講師：加藤秀俊（放送教育開発センター所長）〕

全体のねらい

地域社会の成立は比較的あたらしいが、原初的村落から都市にいたる、もろもろの地域社会には、歴史的背景や行政をふくめてそれぞれの特色がある。この番組は地域社会の構造・組織をあきらかにすることを目的とする。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	地域社会学への招待	地域社会学という学問分野がつくられたのは比較的あたらしいことだ。どのようにしてこの学問が成立したのか、またその意味はどこにあるのか。それを国際比較的な視野からもとらえることにする。	加 藤 秀 俊（放送教育開発センター所長）
2	農 耕 と 定 着	人類がムギ、イネなどの栽培植物を発見してから、人びとの特定地域への定着性は急激に向上した。その過程を考古学的な視点をまじえつつ考察し、日本における村落の起源をたずねる。	同 上
3	地 域 と 血 縁	初期の村落は、おそらく人数のすくない血縁集団であったとおもわれる。そのことは一村同姓といった共同体がこんにちも健在であることからもうかがわれるであろう。そのような視点から血縁集団と地域の関係をかんがえる。	同 上
4	土 地 と 神 さ ま	日本のそれぞれの地域社会、そして分割された「土地」には土地神がいらっしゃる。氏神から土地神（うぶすながみ）などの系譜をたどり、同時に、土地神と人間とのかかわりを研究する。	同 上
5	村 ・ 町 ・ 都 市	人間がつくりあげた地域社会は、小さな農村共同体から、さらにそれが拡大した町、そして、こんにちでは巨大都市にまでふくれあがった。こうした集落、ないし居住様式を比較検討する。	同 上
6	地 域 と 宗 教	第4章でみた土地神のほかに、高等宗教の成立・浸透によって形成されてゆくことがある。ここでは日本の代表的な仏教、浄土真宗教団と地域のかかわりをとりあげる。	同 上
7	地 域 と 水 域	日本列島は小河川の網の目のうえに成立している。その小河川は、生活用水であるとともに、農耕に欠かすことのできない灌漑用水としても決定的に重要だ。水域と地域はどのような関係にあるのかを考察する。	同 上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	現代の農村社会	1980年代の日本農業は大きな転換期をむかえつつある。これまでの日本の農政そのものが見直しの時期にさしかかっているといってもよい。主として水田稲作の農業社会と農家の生活を検討する。	加藤秀俊
9	現代の漁村社会	日本は海にかこまれた国である。そのゆたかな海洋資源は、そのまま日本人の栄養資源でもあった。しかし、漁村もまた大きく変貌しつつある。その実態をひとつの個別事例をつうじてかんがえる。	同　上
10	現代の山村社会	かつて、ゆたかな日本の森林はさまざまな恩恵を日本人にもたらした。現在でも、木はわれわれの生活と密着している。山村のなかで木を材料にしてそれを加工する人びとの姿をとらえなおしてみたい。	同　上
11	開拓地の地域社会	農業の生産性の向上と人口増加とのあいだには相互的な因果関係がある。耕作面積を増加させるために、江戸期から新田開発がすすみ、明治から現代までの近代日本にも開拓地ができあがった。諸相をみる。	同　上
12	都市の近隣社会	都市には巨大な人口集積があるが、その巨大な人口も地域的に細分化してみると、町内会などの近隣社会が機能していることに気がつく。都市化時代をむかえつつあるこんにち、この都市内地域社会に焦点をしぼる。	同　上
13	歴史のなかの地域社会	あらゆる地域社会は歴史の産物であり、その延長である。ここでは日本の都市の原型のひとつとしての城下町にその例をとって、歴史的伝統がどのように現代の地域社会にうけつがれているかを考察する。	同　上
14	未来への挑戦	前章にみた過去からの延長としての現在と対照的に、こんどは、現在から未来に延長線をひいて、さまざまな地域社会がどのような未来設計をおこなっているかを検討してみる。そこには自治体の努力がみられる。	同　上
15	主張する地域社会	未来を見つめ、あらたな地域社会をつくってゆく主体はあくまでもそれぞれの地域に住む市民たちである。その市民たちがみずからを主張する姿をとらえて、地域の将来を考える。	同　上

＝芸能と社会＝（TV）

〔主任講師：小沢昭一（劇団しゃぼん玉座主宰）〕

全体のねらい

テレビの発達、普及によって芸能は、社会の前面に押し出てきました。その結果、社会に於ける芸能のしめる位置、そして役割にも変化がおこっていると思われます。この際、社会と芸能との関係を本質的に考察し、あわせてその将来を展望してみたいと思います。折りにふれては、講師が芸能人であるので、その立場から……。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	芸能と私	この教材の最初の章は、講師のわたくしごとから始まります。芸能の原点を、とくに職業芸能者の根本をつかもうと、大道芸の万歳をやってみた講師自身の報告です。	小沢昭一（劇団しゃぼん玉座主宰）
2	遊びと芸能	日本人の遊びの内容を分析して、日本人の遊び観を理解し、神と人とが交流する遊びが、やがて芸能化の道をたどるなど、遊びが発達してゆく過程を考えます。	同上
3	芸能のはじまり	『古事記』に於ける天の岩屋戸の天宇受売命の舞踊、また『日本書紀』のなかの海幸山幸伝説の滑稽演技など、神話にみえる劇的要素を点検するのをはじめ、芸能の起源についてさまざまに考察します。	同上
4	なりわいとしての芸能	権田保之助（1887—1951）は都市に於ける娯楽を調査して「社会生活の推移」と「現代社会に於ける生活の基調」を明らかにしようとしました。その著作の一端にふれつつ、大道芸、及び大道芸人についてさぐります。	同上
5	芸能と差別	「芸能と社会」について考えるとき、芸能民の被差別の歴史をぬきにして語ることは出来ません。多くの日本の文化が、被差別的な土壌から生まれたことを、深く真剣に考えたいと思います。	同上
6	商いと芸能	市での商人たちは、弁説を駆使して人を集め、それは極めて芸能的でしたが、同時に多くの芸能が、市を支配する香具師の傘下にあったのです。そういう商いと芸能との関係を考究します。	同上
7	宴会と芸能	宴会に歌や踊りはつきものですが、『万葉集』の歌謡が古代の饗宴の場を母胎として生まれたように、日本人は宴会を、技芸を公開し養成する場として伝承してきました。そういう宴会の歴史をたどります。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	信仰と芸能	人は理屈だけではなかなか信仰に入れません。そこで布教者はしばしば感覚にうったえます。芸能化した説教は布教方法として極めて効果的でした。そういう芸風説教を研究します。	小沢昭一
9	芸能の盛衰	ひとつの芸能が世の中にうけ入れられる、あるいは捨てられる、その過程をつぶさに点検することによって、民衆の芸能に求めるものは何か、がわかるかもしれません。そこを追求してみたいのです。	同上
10	芸能と悪所	江戸の「かぶき」と「吉原」は、ともに江戸庶民の理想境であり、同時に「悪場所」として社会から隔離されていた世界でした。この2つの世界を考えることで「芸能と社会」の関係をより明確にしたいと思います。	同上
11	芸能の社会学	そもそも芸能は、ふつうにいう意味での社会の秩序からはずれています。芸能人はアウトローです。一般社会を律している規制や道徳とは無関係な社会現象として芸能は存在します ― このことの考察です。	同上
12	スポーツと芸能	今日、スポーツと芸能とはますます近似であると考えます。しかし日本では、もともと相撲は芸能であり、いまも芸能が失った芸能的要素を多く残しています。スポーツと芸能の境果をさぐりたいのです。	同上
13	テレビの社会学	「テレビでは出演者の素顔が透けて見える。だからタレントは地＝素顔で演じなくてはならない。またタレントという存在はさまざまな領域に“軽薄”に越境してくるもの」 ― という論点を中心に、テレビに於けるタレントを考えます。	同上
14	余暇生活に於ける芸能	余暇生活の拡大によって、参加型のレジャーが発達したものの、実演芸能へ足を運ぶ人は減少しています。実演芸能の将来はどうなるのか。くわしく点検したいのです。	同上
15	これからの芸能	「見る芸能とする芸能では、する芸能こそが芸能だ。すべて1人1人の人間自身が芸能者であるという方向へ動きはじめているのではないか」 ― という梅棹理論の展開を考えることでしめくくりとしたいのです。	同上

＝アジアの社会＝（TV）

〔主任講師：祖父江孝男（放送大学教授）〕

全体のねらい

アジアの社会を総合的に理解することを目的として、稲作と米食について主に東アジアに焦点をあてながら、地理学、農学、言語学、気象学、経済学、宗教学、歴史学、文化人類学、生物学など隣接諸学の成果をふまえながら学際的、総合的に理解をすすめる。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	アジアの社会を学ぶ	＊アジアのイメージをとらえる。 ＊アジアの範囲について考える。 ＊この講義の成り立ち、および学習の方法について理解する。	祖父江 孝男 （放送大学教授）
2	長い米と丸い米 ―米と人とのかかわり	＊稲の代表的な分類のしかたを理解する。 ＊情報の集め方について学ぶ。 ＊稲に関連したことばの体系について考える。	同上
3	ライスロード	＊稲の起源に関する研究方法について理解する。 ＊稲の、アッサム・雲南地方起源説を概観する。 ＊日本への稲作の伝播の問題について考える。	同上
4	モンスーンと稲作 ～水と人とのかかわり～	＊アジアの自然環境の鍵をにぎるモンスーン気候についての基礎的な知識を得る。 ＊モンスーンの地域的影響の差を理解する。 ＊水の利用とその管理の問題について考える。	同上
5	連永の連作 ～土と人とのかかわり～	＊水田の稲作における有効性について考える。 ＊水田を使っての稲の連作の土壌学的メカニズムを理解する。 ＊稲の栽培の方法について整理する。	同上
6	稲を育てた人々	＊稲作における種子の重要性を理解する。 ＊稲の収量増加への努力について、自然条件との関連を考える。 ＊「緑の革命」について考える。	同上
7	稲作と宗教	＊日本の風土と神道との関係について考える。 ＊稲作と神道との関わりについて考える。 ＊稲にまつわる東南アジアの信仰について理解する。	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	わらの民俗と信仰	＊日本においてわらがトータルに利用されていることを理解する。 ＊わらの特徴と、わらが利用される原因について考える。 ＊韓国におけるわらの利用との比較を行う。	祖父江　孝　男
9	米の利用と食文化	＊西アジアにおける稲作について理解する。 ＊米の食物としての重要性について考える。 ＊米の調理法、食べ方の多様性に目を向ける。	同　　上
10	稲作と共同組織	＊日本における水田の水管理の重要性を理解する。 ＊「ゆるやかな構造の社会」という概念について考える。 ＊田植え組織と村落共同体の形成の関係について理解する。	同　　上
11	米　と　経　済	＊日本の近代化に農村が果たしてきた役割を考える。 ＊日本の農業の将来について考える。 ＊米の国際市場での位置について理解する。	同　　上
12	アジアの農村1 ～タ　イ～	＊タイの社会の特質を「ゆるやかな構造の社会」の概念で考える。 ＊タイの稲作の特徴を理解する。 ＊日本とタイの農業生産構造の比較を試みる。	同　　上
13	アジアの農村2 ～フィリピン～	＊東南アジアの稲作の基本的性格を農民を軸に考える。 ＊水田所有と社会的ステータスの関係について考える。 ＊「かげの循環」というとらえ方について考える。	同　　上
14	アジアの農村3 ～インドネシア～	＊アジアの米経済について考える。 ＊「分配社会」、「低安定社会」という概念について理解する。 ＊インドネシアの米の流通と特徴について考える。	同　　上
15	アジアの農村4 ～韓国・日本～	＊韓国における米の増産の過程を、品種改良を中心に理解する。 ＊日本と韓国の農村の比較を行う。 ＊アジアの社会について考える。	同　　上

＝法と手続き＝（ＴＶ）

（主任講師：井上治典（九州大学教授））
（主任講師：三井　誠（神戸大学教授））

全体のねらい

「手続き」を通して法をみる、あるいは考える。これが本講義の目的である。民事のもめごとであれ、刑事の犯罪をとりあつかうものであれ、公正な手続きが果たす役割は大きい。手続きは、たんに何かの目的にそる手段ではなく、それ自体が独立の価値をもち、法を実現する源である。民事、刑事それぞれの手続きを学んで、法とは何か、正しさとは何かとを考えてもらいたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	正しさと手続き	芥川「藪の中」を読んで、この世で起ることについて「真相」なるものがいかにわからないものであるかを確認したうえで、正しさとは何か、正しさと手続きとの関係を考えてみる。当事者主義の裁判の構造、証拠や立証責任の原則などをみながら、「手続き」のイメージをつかんでほしい。	井上治典（九州大学教授） 三井　誠（神戸大学教授）	井上治典（九州大学教授） 三井　誠（神戸大学教授）
2	“もめごと（紛争）と救済手続き”	民事の「紛争」、すなわち「もめている」とは、どういうことなのか。人間の本性や行動に眼を向けて、紛争のメカニズムを解明する。つづいて、紛争を取り扱う手続きの態様と役割を考える。あいたい交渉、相談、苦情処理、あっせん、調停、仲裁、訴訟、それぞれの特徴をみる。	井上治典	井上治典
3	交渉と法（その１）－交通事故紛争処理センター	紛争処理手続きの原型としての「交渉」のメカニズムや理論をみる。そのうえで、交通事故紛争処理センターの手続きを具体的に検証しながら、交通事故紛争の処理についての問題点を探り、いかにあるべきかを考えてみる。	同　上	同　上
4	交渉と法（その２）－消費者センターと仲裁センター	取引（契約）と紛争とは、それぞれ非連続の別個のものだろうか。行政型の処理機関を代表する消費者センターと、第二東京弁護士会の仲裁センターそれぞれの紛争処理状況をみながら、紛争過程における「交渉」の役割を考えてみる。	同　上	同　上
5	とりあえずの救済と執行－民事保全と民事執行	紛争に対処する場合に、とりあえずの救済措置が果たす役割は大きい。この観点から、民事保全手続きとしての仮処分、仮差押えをとりあげる。ついで、強制的に要求を実現する民事執行手続きが、どのような構造と役割をになっているのかを考える。	同　上	同　上
6	調停と訴訟	調停制度はどのようなものであり、訴訟手続きとのちがいはなにか。調停の「交互面接方式」は、なぜ一般化しているのか。 また、訴訟における「調整的処理」の高まり、非訟化の傾向は、なぜ現在進行中なのか。訴訟と訴訟以外の手続とのあるべき連携はいかに。	同　上	同　上
7	なぜいまラウンドテーブル方式か－和解兼弁論を考える	近時、民事裁判の審理の中心は、正規の法廷ではない、和解室や準備室でのラウンドテーブル方式に移りつつある。この審理方式が日常化した背景を探り、「弁論」のあり方からみた、この方式への期待と危惧を明らかにしていく。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	倒産と法	「倒産」という緊迫した事態の下で、法や手続きはどのように運用されているのか。なぜ「私的整理」が利用されるのか。債権者間の公平はどのように実現されるのか。また、債務者の更生は。さらに、法的倒産手続きにおける「交渉」の役割はあるのであろうか。	井上治典	井上治典
9	捜査手続きの科学化	検討中	三井誠	三井誠
10	取調べ手続きの可視化	〃	同上	同上
11	事実認定の適正化	〃	同上	同上
12	防御手続きの活性化	〃	同上	同上
13	刑事手続きの市民化	〃	同上	同上
14	量刑手続きの開明化	〃	同上	同上
15	死刑の縮限化	〃	同上	同上

＝先進諸国の政治＝（Ｒ）

（主任講師：下斗米伸夫（法政大学教授））
（主任講師：高橋直樹（東京大学助教授））

全体のねらい

先進諸国の政治を相互に比較することを通して、主要先進国の政治に関する基礎的な理解を深めるとともに、政治とは何かを考えるための手掛かりを与える。各国の政治を個別に取り上げるほか、北アメリカ、西ヨーロッパ、東ヨーロッパ、ロシアの諸地域が、地域として政治的にいかなる特性を持つかについても考えたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	アメリカ(1)	比較政治論の意義や方法について、簡単にふれた後、民主主義国として最も古い歴史を持つアメリカの政治制度を概観する。権力分立の原則、連邦議会、大統領、行政部、裁判所などにふれる。	阿部　齊（放送大学教授）	阿部　齊（放送大学教授）
2	アメリカ(2)	アメリカの政治過程を概観した後アメリカの外交政策の基本的な傾向にふれる。選挙、政党、有権者、利益集団、孤立主義、膨張主義、イデオロギー優位の外交といった項目をとりあげたい。	同　上	同　上
3	カナダ	カナダの政治を概観した後、アメリカの政治とカナダの政治を比較検討し、両国の政治の差異を生み出した要因を明らかにする。憲法、連邦制、政党制といった問題を中心に比較を試みたい。	同　上	同　上
4	西ヨーロッパ政治の全体像	まず、西欧デモクラシーにおける、政治社会の歴史的の特徴と現在の特質を整理する。つぎに、その政治社会の中で発達した政治制度や政治行動について解説する。	高橋直樹（東京大学助教授）	高橋直樹（東京大学助教授）
5	フランスの政治	フランス政治社会の特徴を指摘した後に、その政治制度を解説し、現在の政治問題を解説する。	同　上	同　上
6	ドイツの政治	ドイツ政治社会の特徴を指摘した後に、その政治制度を解説し、現在の政治問題を解説する。	同　上	同　上
7	イギリスの政治	イギリス政治社会の特徴を指摘した後に、その政治制度を解説し、現在の政治問題を解説する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	南欧の政治	スペイン、イタリア、ポルトガルにおける政治社会の特徴を指摘した後に、その政治制度を解説し、現在の政治問題を解説する。	高橋直樹	高橋直樹
9	中欧の政治	ベルギー、オランダ、スイス、オーストリアにおける政治社会の特徴を指摘した後に、その政治制度を解説し、現在の政治問題を解説する。	同上	同上
10	北欧	スウェーデン、ノルウェー、デンマークにおける政治社会の特徴を指摘した後に、その政治制度を解説し、現在の政治問題を解説する。	同上	同上
11	西ヨーロッパの政治今後	西欧デモクラシーに共通する、国内政治の課題を整理し、つぎに、ＥＣの統合を中心とする、国際政治と国内政治の関係を解説する。	同上	同上
12	ソ連の政治(1)	ソ連の政治の従来の仕組みと機能について。共産党の役割、国家の機能、経済革命、市民と政治体制などについて触れる。特に、このようなシステムが生じた歴史的背景にも触れる。これは同時に、東欧についてもイントロダクションとなる。	下斗米伸夫（法政大学教授）	下斗米伸夫（法政大学教授）
13	ソ連の政治(2)	ペレストロイカ革命の現在と展望について。ソ連の転換の背景と理由、市民社会の台頭と経済革命の遅れなどの問題点、国際的影響についても触れたい。	同上	同上
14	東欧の政治(1)	「東欧」という社会が生まれた歴史的理由、それが40年間ほど機能してきた背景、そして、ペレストロイカと1989年革命へといたる過程について考える。	同上	同上
15	東欧の政治(2)	1989年東欧革命がもたらした影響と、その過程、その後の各国での経済革命、政治改革、さらに「ヨーロッパ共通の家」の内容など、欧州統合について触れられる。	同上	同上

＝第三世界の政治＝（Ｒ）

〔主任講師：高橋和夫（放送大学助教授）〕

全体のねらい

中東、アフリカ、ラテン・アメリカ、インド亜大陸の政治の理解のための知的枠組みと基礎的な情報の提供を目指す。同時に比較政治と地域研究の立場から第三世界の政治の理論的な分析を目指す。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	第三世界の政治	コースのアウト・ラインを示す。	高橋和夫（放送大学助教授）	高橋和夫（放送大学助教授） 勝俣誠（明治学院大学助教授） 狐崎知己（常葉学園大学講師）
2	中東の政治(1)	中東の政治の背景となる地域の自然、社会的への導入。	同上	高橋和夫（放送大学助教授）
3	中東の政治(2)	オスマン帝国の統治に代表される帝国主義以前のこの地域の統治の理念と実態を紹介する。	同上	同上
4	中東の政治(3)	アラブ地域の政治を解説する。	同上	同上
5	中東の政治(4)	トルコ、イラン、アフガニスタンそして中央アジアの政治を論ずる。	同上	同上
6	アフリカの政治(1)	アフリカと言う地域を解説する。	勝俣誠（明治学院大学助教授）	勝俣誠（明治学院大学助教授）
7	アフリカの政治(2)	帝国主義の時代のアフリカの政治を論ずる。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	アフリカの政治(3)	独立以後のアフリカの政治を論ずる。	勝俣　誠	勝俣　誠
9	インド亜大陸の政治(1)	インドと言う地域を紹介する。	佐藤　宏(アジア経済研究所主任調査研究員)	佐藤　宏(アジア経済研究所主任調査研究員)
10	インド亜大陸の政治(2)	帝国主義の時代のインド亜大陸の政治を論ずる。	同　上	同　上
11	インド亜大陸の政治(3)	独立以降のインド亜大陸の政治を論ずる。	同　上	同　上
12	ランテ・アメリカの政治(1)	ラテン・アメリカと言う地域を紹介する。	孤崎知己(常葉学園大学講師)	孤崎知己(常葉学園大学講師)
13	ランテ・アメリカの政治(2)	戦前までのラテン・アメリカの政治を論ずる。	同　上	同　上
14	ランテ・アメリカの政治(3)	戦後のラテン・アメリカの政治を論ずる。	同　上	同　上
15	比較と分析	各地域を比較し、地域研究、第三世界研究、そして比較政治のもつ問題点を考える。	高橋和夫	勝俣　誠 高橋和夫 孤崎知己

＝ 行 政 の 活 動 ＝ (R)

〔主任講師：西尾　勝（東京大学教授）〕

全体のねらい

現代国家は職能国家・福祉国家・行政国家である。政治権力の正統性は、民意の代表性と共に、行政活動の成果に依存しているが、この行政活動の担い手こそ行政官僚制である。そこで、この講義では、行政官僚制の置かれた位置とその行動の仕組みについて理解を深めることを、主なるねらいとする。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	行政学の背景：現代国家の特質	現代行政学の生成と発展の背後には、近代国家が現代国家に移行する過程で生じた変化、すなわち、国家の職能国家化、福祉国家化、そして行政国家化といった諸現象があった。	西尾　勝（東京大学教授）
2	行政学の対象：三つの「行政」概念	行政学の考察対象となる「行政」の概念には3つの類型がある。すなわち、立法・司法と対比した行政、政治と対比した行政、そして組織の経営管理を行政とみるものである。	同　上
3	行政活動の類型	行政活動の目的別分類、性質別分類、民間活動との関係からみた分類について説明することをとおして、現代国家の行政活動の多種多様さを示し、行政管理活動の必要に論及する。	同　上
4	行政活動の分担(I)中央集権と地方分権	1国の行政活動はその国の政府体系を構成する複数の政府間で分担されている。そこで、この中央地方関係の歴史、類型について考察し、現代の相互依存関係について説明する。	同　上
5	行政活動の分担(II)戦後日本の中央地方関係	戦後日本の中央地方関係について説明し、出先機関・特殊法人の濫設、機関委任事務の増大、補助金等の増大といった新中央集権の諸現象について解説する。	同　上
6	政治家と行政官の関係	国会・内閣といった政治機関と行政機関の関係を政党政治家と行政官の関係からとらえ、各国の特徴を示すとともに、現代日本の官僚制をめぐる論議に言及する。	同　上
7	官僚制の特質	官僚制ということばの由来から説きおこし、マックス＝ウェーバーが指摘した近代官僚制の特質について解説したうえで、日本の行政官僚制にみられる若干の特徴にふれる。	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	官僚制の機能(I)： 規律と裁量	組織構造の類似した官僚制でもその作動様式は多様になる原因が階統構造の運用の仕方にあることを示し、官僚制の正常な作動の鍵が規律と裁量のバランスにあることを説く。	西尾　勝
9	官僚制の機能(II)： 命令と服従	チェスター＝バーナードの組織均衡理論と権威受容説について解説しながら、上命下服の緊張関係、面従腹背の諸形態、部下の忠誠対象の転移と反逆の関係などについて説明する。	同　上
10	官僚制の機能障害	法規万能主義、繁文　礼、セクショナリズム、権威主義など通常官僚主義として一括される官僚制の機能障害が官僚制の健全な作動のために必要な諸原則と裏腹の関係にあることを説く。	同　上
11	官僚制の意思決定方式	日本の行政官僚制の意思決定方式の基本は稟議制にあるといわれている。この稟議制が実際にはどういうものであるのか詳しく検討して、日本の意思決定方式の特徴を探りたい。	同　上
12	政策過程と政策構造	政策の循環回路について説明し、政策の形成と政策の作成という観点の違いを明らかにしたうえで、政策作成の観点に立って政策の過程と政策の構造について若干の説明を行う。	同　上
13	予算編成と会計検査	法令とならんで重要な政策の表示文書である予算が編成されていく際の意思決定方式について解説して、先の第11講を補うとともに、予算執行に関する会計検査に論及する。	同　上
14	行政活動の評価基準	政策実施活動を評価する基準としては、合法性のほかに、有効性と能率性の基準があるが、このうちの能率性評価の意義と限界について詳しく論じる。	同　上
15	行政統制と行政責任	行政に対する民主的統制は制度的外在的統制をその基本としているが、現代国家の行政を統制する手段は多様になっていることを述べ、合わせて行政統制と行政責任の関係に論及する。	同　上

＝経 済 思 想＝(TV)

〔主任講師：間宮陽介（神奈川大学教授）〕

全体のねらい

経済思想というものは特定の時代の経済社会についての認識であるとともに、特定の問題状況に解答を与えようとする試みでもある。時代と問題状況は、経済思想を理解するうえで欠かすことのできない二つの背景である。本講義では様々な経済思想をこうした背景に照らしながら解説していきたい。

回	テ ー マ	内　　容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	市場の発見	市場とは資源配分の場である以前に社会の一つのあり方である。アダム・スミスの功績は社会としての市場を発見したことである。スミスや彼に先立ってマンデヴィルの見解を見ていく。	坂井素思（放送大学助教授）	間宮陽介（神奈川大学教授）
2	社会主義の思想	19Cも半ばを過ぎると分配の不平等や過剰生産という事態が深刻化するようになり、社会主義の思想が芽生えてくる。J．S．ミル．フランス社会主義者、マルクスの見解をもとに、社会主義思想の成立を探る。	間宮陽介（神奈川大学教授）	同　上
3	経済と国家	経済に対する国家の役割という観点から経済思想をみていく。一方の端には古典派の極小国家説があり、他方の端には社会主義の極大国家説がある。では重商主義や重農主義はどうか。また歴史学派はどうか。	同　上	同　上
4	政治経済学から純粋経済学へ	今回から計3回にわたって新古典は経済思想をみていく。まず今回はいわゆる限界革命でどのような方法的自覚のもとに推し進められていったかを、考える。	同　上	同　上
5	功利主義の思想	新古典法の中でもイギリスのそれは功利主義を基礎にしている点でフランスやオーストリーのそれとは一線を画える。ジェヴォンズやマーシャルの経済学が実践的志向をもっているのもそのためである。では、功利主義がどのような形で経済学と関わっているか。	同　上	同　上
6	一般均衡の思想	ワルラスの一般均衡論は経済の相互依存関係を数理的に表現しようとする点で独創性をもっている。彼は新古典派の創始者であるとともに数理経済学の創始者でもある。この点を彼の一般的均衡論に拠りながら考察する。	同　上	同　上
7	市場社会の変容－ヴェブレンの経済思想	T．ヴェブレンは新古典派経済学の批判者であるとともに、市場社会の変容（産業から金融へ）をいち早く察知した人として知られている。今回はこの特異な思想家の経済学批判、市場社会批判をみていく。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	大転換－K．ポラニーの経済思想	市場はそれが限界をもつゆえに失敗する（「市場の失敗」）のではない。逆に余りにもよく機能しすぎるために失敗する。このようなポラニーの経済思想を彼の時代認識とあわせて解説する。	坂井素思	間宮陽介
9	法人企業の変容－バーリ・ミーンズの見解	経済社会が変容すれば生産を担う企業のあり方も変容する。1932年に書かれたバーリとミーンズの『近代株式会社と私有財産』はこのような変容を「経営者資本主義」として捉えたものとして有名である。今回は彼らの見解を軸に企業概念の変化をみていく。	間宮陽介	同上
10	ケインズ革命	ケインズの『雇用・利子および貨幣の一般理論』は経済学に一大転機をもたらした。いわゆるケインズ革命である。どのような背景の下にケインズ革命が達成されたのか。また革命の本質はどこにあるのか。この点をこれから3回にわたって考えていく。	坂井素思	同上
11	不確定性と「期待」	ケインズ経済学は別名、期待の経済学とも呼ばれている。彼は人間活動における不確定性の意義を強調し、不確定性下の経済活動を期待という観点から考察した。期待は彼の経済理論を理解するうえで不可欠の要素である。	間宮陽介	同上
12	貨幣について	ケインズ経済学はまた貨幣経済論でもある。彼は貨幣を単なる交換の媒体にすぎないとみるのではなく、人々の動機にまで影響を与えるものとみた。彼の経済理論は金融化し投機化していく経済をモデル化したものである。	同上	同上
13	市場と計画	1930年代に繰り広げられた計画経済論争を振り返りながら、経済学における計画の思想を概観する。と同時にこの論争の過程で深まりをみせた市場の思想にも立ち入る。ことにハイエクの市場の理論。	坂井素思	同上
14	マネタリズムとケインズ主義	戦後の経済政策に大きな影響を与えたのはケインズ主義であり、70年代に入ってからは反ケインズ主義としてのマネタリズムが政策立案に対下の影響を与えている。今回は反ケインズ主義としてのマネタリズムに焦点をあわせる。	同上	同上
15	経済学における自由の思想	アダム・スミスから今回に至るまで経済思想家たちは陰に陽に自由の問題を論じてきた。今回は本講義の締めくくりとして経済学における自由思想を論じてみたい。	間宮陽介	同上

＝国際経済学＝（R）

〔主任講師：嘉治元郎（放送大学副学長）〕

全体のねらい

国際経済学の主要な内容について解説し、世界経済の現状について理論的に分析を加える。そのことを通して、我が国の国際社会における地位と役割を明らかにする。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	国際経済学とは何か	国際経済学の対象 対外経済取引 対外取引の種類 対外取引と国際通貨 通貨の交換と為替レート 国際収支とその表示	嘉治元郎（放送大学副学長）	嘉治元郎（放送大学副学長）
2	国際貿易の理論	貿易活動の目的 比較生産費説 自由貿易の利益	同上	同上
3	自由貿易論	今日の世界貿易体制 自由貿易論の基本原理 自由化に伴う摩擦 貿易自由化とそれに対する反対論	同上	同上
4	保護貿易論	保護貿易政策 自由貿易理論の諸前提 幼稚産業の保護 経済的安全保障への配慮	同上	同上
5	国内経済と対外経済関係	開放巨視モデル　総需要と総供給　政府購入 家計の消費　企業の投資　封鎖巨視モデル 輸入の説明　輸出の説明　貿易乗数の理論	同上	同上
6	貿易外収支	貿易外収支とは何か　サービス取引の特長 サービス需要の増大　金融活動の国際化 貿易外収支と生産要素の国際移動	同上	同上
7	国際資本移動	資本収支の実態　直接投資　延払信用　借款 証券投資　短期資本収支　国際資本移動の原理 国際投資に伴う危険　自発的収支と調整的収支	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	経済発展と対外経済関係	経済発展の諸段階　国際収支の段階的変化 若い債務国　成熟した債務国　若い債権国 成熟した債権国　世界諸国の実績 貯蓄・投資と国際収支	嘉治元郎	嘉治元郎
9	国際金融の理論	国際金融とは何か　国際通貨とは何か 国際通貨の役割　現実の国際通貨 国際通貨としてのドル　国際通貨の適正量	同上	同上
10	国際金融の機構	国際金融のシステム　システムの崩壊 システムの再建　戦後国際経済システムを支える組織 国際通貨基金（International Monetary Fund） 国際復興開発銀行（世界銀行） 国際金融システムの調整	同上	同上
11	外国為替の理論	為替レートとは何か 為替レートの表示法 外国為替の需要・供給 為替レートの長期的変化	同上	同上
12	国際収支の均衡	国際収支の均衡とは何か 収支均衡化のメカニズム 金本位制の自動調整機能 経済政策による国際収支の調整 国内均衡と国際均衡の同時達成 為替レートの変動と国際収支	同上	同上
13	労働力の国際移動	生産要素の国際移動 労働の国際移動の誘因 国際的な賃金格差 労働力の国際移動の実績 労働力の国際移動の経済効果 第二次大戦後の労働力の国際移動	同上	同上
14	国際経済の現状	世界経済の分析方法 貿易マトリックス（貿易行列） 国際資本移動の分析 南北関係 東西関係 世界経済の一体化と国際経済学	同上	同上
15	日本経済と世界経済	戦後における日本経済の発展 Ⅰ　援助と特需の時期　朝鮮動乱と特需 Ⅱ　重化学工業化達成の時期　軽工業から重化学工業へ Ⅲ　貿易黒字、円の為替レート上昇の時期 貿易収支と為替レート　Ⅳ　経済大国への移行の時期 Ⅴ　債権国の役割を果すべき時期	同上	同上

＝近代性の社会学（近代社会の構造とゆらぎの視点から）＝ （R）

（主任講師：厚東洋輔（大阪大学助教授））
（主任講師：今田高俊（東京工業大学教授））

全体のねらい

私たちの現在の生活は、「西欧近代」をモデルにして、その骨格が組み立てられている。この前提が、いまや大きく変わろうとしている。本講義では、西欧近代の原理を「モダニティ＝近代性」という言葉で表現し、＜モダニティの構造とゆらぎ＞という視点から、現代社会の構造と変化を解明していくことにする。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	モダニティとは何か？	「現代」がどの程度「近代を乗り越えたもの（ポスト・モダン）」であり、先進諸国に共通に見られる普遍的傾向と言えるかどうかに関して、論争が続いている。こうしたモダニティをめぐる様々な立場を整理するなかで、その本質を明らかにする。	厚東洋輔（大阪大学助教授）	厚東洋輔（大阪大学助教授）
2	国民国家と世界市民	ナショナリズムは昔からあるものではなく、「近代」が発明した理念である。ナショナリズムが作り上げる「国民国家」は、暗黙裡に「近代社会」と同一視される。ではこの「国民国家」は、一体どのように形成され、どのような矛盾をはらんだ制度的装置なのか？	同上	同上
3	産業主義と家庭主義	「近代」は、巨大な生産力を生み出した生産優先の社会である。こうした高度な生産力は、男性が「職業人」に、女性が「主婦」になることによってもたらされた。高度に専門分化した職業活動と、その基礎にある家族の近代化との関連を明らかにする。	同上	同上
4	契約と連帯	近代の集団の典型は、アソシエーションと呼ばれている。集団は、ある特定の目標を追求するために人々によって自発的に形成される。しかしアソシエーションが円滑に機能するためには、その基礎に、コミュニケーションと、呼ばれる連帯的な関係がなくてはならない。	同上	同上
5	科学・宗教・呪術	近代的知識の典型は「科学」である。科学は、社会のあらゆる場面で利用され、人々の生活にたいしてきわめて大きな影響力をもつ。それは、伝統社会において呪術が果たす役割にきわめて類似している。科学と呪術を、人間にとっての意味という観点から比較する。	同上	同上
6	読書と会話	活字印刷の発明は近代にとって致命的な意義をもつ。「書物」が大衆化され、本を書き読むという行為がコミュニケーションの典型となる。こうした変化は全体社会にとってどういう意味をもったのか。また読書することによって人々は一体何を得、何を失ったのか。	同上	同上
7	規律化と欲望解放	近代は人間中心の社会である。自我は伝統や社会のしがらみから解き放たれ、個性的に生きることが奨励される。人々の欲望の追求は、「禁欲」という生活形態を通して行われなければならない。近代の禁欲とは、欲望の否定ではなく肯定を意味するのである。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	これからの産業社会	現在、モダン文明は曲がり角を迎えている。それは、産業社会がどうなるかとか、高度情報化がどのように進むかといった問題ではなく、文明的スケールの変化である。効率と合理性を重視する機能優先の仕組みが、産業の高度化によって自壊しつつあることを述べる。	今田高俊（東京工業大学教授）	今田高俊（東京工業大学教授）
9	ゆらぐモダン	ゆらぎ現象の多発により、モダン社会はその基盤を揺さぶられている。それは機能優先から意味充実へのパラダイム・シフトを予兆する。ゆらぎ社会はかつて中世からモダン社会への移行期にも存在し、人間観・科学観・社会観の問いなおしが四世紀にも及んだ。	同上	同上
10	隠れた階層秩序	自由と平等の理念にもとづく民主主義が御者となり、産業主義、技術主義、官僚主義のたずなをさばく。これがモダン社会の歩むべき道であった。ところが、民主主義はしばしば経済優先に従属し、社会階層の平等性実現も思うように進んでこなかった。	同上	同上
11	管理組織の限界	モダンの発想は、効率や生産性を追求する管理組織を作り上げてきた。なるほどこの組織は、あらかじめ決められた目標を達成するには優れているが、新たなアイディアを探求する付加価値創造には適していない。ポスト・モダンな場面では、その有効性も失われる。	同上	同上
12	豊かさを捉え直す：差異化とライフスタイル	曲がりなりにも豊かな社会が実現したことで、人々の行為する動機にも変化が見られるようになった。満たされない欠乏に動機づけられる状態から、個性的な違いを重視する差異動機が中心になる。こうした状態のもとでは、豊さも以前の「物の豊かさ」ではなくなる。	同上	同上
13	自己組織化の時代	モダン社会の先に見えるのは、自らの手で自分を変える自己組織化の時代である。人間および社会の本質は、環境変化の如何にかかわらず、自らの手でスクラップ・アンド・ビルドを遂げる能力である。それは「さなぎ」の変態にたとえられる変動観である。	同上	同上
14	変態するモダン文明：高度情報化のゆくえ	現在進行中の高度情報化は、機能優先の社会作りをシンボル面でも進めようとするものである。情報ネットワーク社会はモダンを完成に導き、きわめて効率的な社会をもたらす。しかしこれが契機となって、モダンを超える新たな文明への変態が促進されることになる。	同上	同上
15	新たな文明へ向けて：討論	モダン社会のゆらぎの先にどのような文明が立ち上がってくるのか。ゆらぎ現象のなかに、どのような21世紀社会の秩序を読み解くことができるか。価値観、ライフスタイル、宗教、民族性、国際関係などを材料に、社会的想像力を働かせる時である。	厚東洋輔 今田高俊	厚東洋輔 今田高俊

＝社会調査法＝（ＴＶ）

主任講師：盛山和夫（東京大学助教授）
主任講師：近藤博之（静岡大学助教授）
主任講師：岩永雅也（放送大学助教授）

全体のねらい

社会調査は、社会のありさまを社会学的にかつ的確に把握するための重要な手段である。この科目は、まず社会調査とは何かを知り、実際に社会調査を行なうための技法と、調査の結果得られたデータの集計・分析の方法を学ぶことを目的としている。また、それから進んで、さまざまな方法により析出された数値をどのように見たらよいかも学習する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	社会調査と社会学	社会調査の意義と目的 社会調査の種類とその性格 実践と認識・記述と説明 理論とデータとの関わり	盛山和夫（東京大学助教授）	盛山和夫（東京大学助教授）
2	社会調査の設計	問題意識の明確化と調査のテーマの選定 仮説の設定とその図式化 調査対象・調査方法の決定 調査計画の重要性	岩永雅也（放送大学助教授）	岩永雅也（放送大学助教授）
3	サンプリング	サンプリングが調査の成功と失敗を左右する さまざまなサンプリング技法とその得失 ランダム・サンプリングの有効性 単純ランダム・サンプリングとその応用	同上	同上
4	調査票調査	調査票調査への誤解 科学的調査の武器としての調査票の有用性 さまざまな質問技法 調査票作成の実際と留意点	同上	同上
5	調査の実施とデータの整理	調査票調査実施方法のいろいろ 調査実施のプロセス 調査結果の整理・コーディング・欠損値処理 コンピュータの利用	同上	同上
6	集計表の作成とその活用	調査結果の集計と集計表の作成 さまざまな統計量の意味と使い方 グラフ化することの効用 集計表からいえること・いえないこと	同上	同上
7	推定と検定	母集団と標本との関係 標本誤差と標本分布 推定の考え方・検定の考え方 標本数をどのように決めたらよいか	近藤博之（静岡大学助教授）	近藤博之（静岡大学助教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	分布を比較する	複数の標本の分布を比較する際の方法と問題点 平均値の比較、比率の比較 有意水準の与え方 散布度の把握と分位数の利用	近藤博之	近藤博之
9	記述と分析	分析法の種類 質的変数・量的変数・順序変数 「どうなっているか」と「なぜ」との相違 分析課題・目的と分析法との対応	盛山和夫	盛山和夫
10	関連の強さをみる	2変数間の関連の強さをどのように知るか 散布図とクロス表 非直線的な関係をクロス表で見る 第3変数をコントロールする	近藤博之	近藤博之
11	クロス表の分析法	変数の独立性と従属性 独立性のカイ2乗検定 カイ2乗検定の応用—ログリニアー・モデル ログリニアー・モデルを使った分析の実際	同上	同上
12	変動の分析	バラツキを説明する 分散分析・重回帰分析の考え方 ロジット分析の考え方 ログリニアー・モデルからのアプローチ	同上	同上
13	因果関係を考える	因果関係とは何か パス解析と要因分解法 エラボレーション 因果関係・擬似相関関係・共変関係	盛山和夫	盛山和夫
14	マクロとミクロ	ミクロレベルの関連とマクロレベルの関連 アグリゲート変数を考えることの意味 脈絡分析と構造効果 固体と集団	同上	同上
15	理論をデータと関連づける	何のためのデータ分析か 理論とはどういうものか 「仮説構成－検証」図式の誤り 創造的データ分析に向けて	同上	同上

＝マスメディアと現代＝(TV)

〔主任講師：藤竹　暁（学習院大学教授）〕

全体のねらい

現代はメディアの時代である。メディアは人間の皮膚の一部となりつつある。人間はメディアを媒介にして、自己を拡張する。メディアの発達は大量コミニケーションを可能にしたばかりでなく、人間のものの考え方や行動の仕方をも変えている。また人間関係のスタイルにも変化が生じている。マスメディアによる豊かな情報は、人間を拡張させるとともに、より広い生活環境を生み出した。人間はマスメディアが提供するイメージを抜きにしては、現代社会に適応できなくなっている。その反面、過剰な情報は個人的平面においても、また社会的平面においてもストレスを増大させている。

本講義では、コミュニケーションの現代的特質を体系的に考察する。人間関係、社会生活の変化を、様々な角度から分析し、メディア技術の発達が、社会をどのように変化させているかを明らかにするとともに、高度情報社会に生きる人間の姿を描く。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	コミュニケーションとは－人間生活における会話の重要性	ア）コミュニケーションとは、経験の共有の試みである。経験領域の拡大と合意へ到達することへの期待が、コミュニケーションの基礎にある。俵万智「今日風呂が休みだったというようなことを話していたい毎日」は、会話をしあう二人が共通の経験領域をしっかりと確認できるとき、そこに人間としての絆を見出すことを示している。経験の共有は、相手の反応を引き出すことからはじまる。	藤竹　暁（学習院大学教授）	藤竹　暁（学習院大学教授）
2	メディアの発達とパーソナル・コミュニケーション	現代はメディアが介在することによって、コミュニケーションが成立する時代である。現代はメディアの時代である。人間のコミュニケーションのほとんどの局面にメディアが介在している。現代の人間のコミュニケーションはメディエイテッドな（メディアが媒介する）コミュニケーションである。人間はメディアによって、またメディアを通して考え、行動する。そこではメディアの文法とでも呼べるものが力をふるう。こうして、現代はパーソナル・コミュニケーションの領域にメディアが登場することになった電信、電話、コピー、ファックス、パソコン通信などのさまざまなメディアの発達は、会話のスタイルを変化させ、多様化した。	同　上	同　上
3	マス・コミュニケーションの時代	人間と人間の間にメディアが介在することによって、大量コミュニケーション（mass mediated communication)が可能となった。マス・コミュニケーションの活動は、受信能力を有するすべての人びとに、公開された活動であるがそれは寡占的状態にある大規模組織としての送り手から大量の不特定多数の受け手に対して、最高度の機械技術体系を駆使して一方的になされるコミュニケーションである。	同　上	同　上
4	人間環境とマスメディア	人間はメディアを媒介にして自己を拡大する。人間の拡張である。経験の拡大はまず、自分自信の肉体によって行われるが、さらにメディアを介在させることによって、その拡大は速度と範囲を飛躍的に増大させることになる。まず、トランスポーテーション（交通手段）の発達が重要である。移動手段の発達によって人間コミュニケーション・マーケットは拡大した。移動手段の発達がもたらした経験世界の変化であった。こうして、物理的距離と時間的距離の間の乖離が生じた。交通の発達によって、社会的距離に新しい次元が付け加えられることになった。 さらにコミュニケーション・メディアの発達は、人間にとって間接的な世界がその重要性を増大させることを意味していた。擬似環境の成立である。そして擬似環境の環境化が進歩する。こうして直接的環境に代わって、間接的環境が人間生活において優位を占めることになる。それは、自分自信の手で意味づけることのできる環境（直接的環境）のもつ重味が減少し、代わって他人が定義づけた環境（間接的環境）の重味が、増大することを意味している。ここから、代理的定義づけを専門に行う機関が、商業的に成立することになる。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
5	ジャーナリズムの成立	ジャーナリズムは、状況の代理的定義づけの専門機関である。ジャーナリズムが下す環境の定義づけは、社会的、文化的定義として機能している。ジャーナリズムが社会の木鐸と言われるのは、このためである。しかし、またそのジャーナリズムが誤った環境の定義づけを提供することによって、裏切りの主要な舞台ともなることは皮肉である。虚報、捏造、センセーショナリズム、過剰報道など。いずれにせよジャーナリズムは、社会に対して注目の枠組みを提供し、注目の焦点を指定する。その反面、盲点をも作りあげる。	藤竹　暁	藤竹　暁
6	マスメディアの論理	ア）遠感覚と近感覚の問題。従来、メディアの発達によって作られた世界は、遠感覚重視の社会であった。視覚と聴覚の代替をするものがメディアであった。例えば、テレホン、テレグラフ、テレビジョンなど。ここから現代では、近感覚の復権が生じつつある。触覚とか、味覚、臭覚の復権が生じつつある。 イ）活字の論理と映像の論理。人間は活字の発達によって、肉体言語を失った。こうして感覚の世界が認識の世界から追放されることになった。こうした状況の中で、合理主義が優位する時代が生まれた。ところが現代は、ラジオ、テレビなどの視聴覚メディアの発達によって、感覚の復権が生じ、映像的思想が活字的思想とともに重要になってきた。かつてリテラシーと言えば、読み書き能力を意味していたそれは社会的ヒエラルヒーを構成していた。それが西欧文明の秩序であった。活字的思想がフォーマル・エディケーションと密接な関連をもつのに対して、映像的思考はこうした教育的基礎を必要としない。 ウ）それは、メディアの皮膚化、肉体化と密接に結びついている。メディアは外界の出来事を人間の手元に引き寄せる手段であるが、活字の抽象能力は、外界を人間の社会距離ないしは公衆距離に留めていた。しかし、オーディオ・ビシュアルなメディアが登場し、さらには日常化する過程で、メディアは次第に人間の個体距離、そして密接距離へと近づいてゆくことになった。そしてウオークマンなど、メディアが直に人間の肉体と接触する時代がやってきた。こうして文化の質が変化する。大衆化である。感覚レベルがメディア受容能力を左右する時代になった。大衆文化は感覚を基礎とした文化という側面をもっている。ここから、権威と秩序の混乱ないしは崩壊も進行することになる。	同　上	同　上
7	マスコミと時間感覚	マスコミは時計的時間で環境を刻々と定義づける専門機関である。時計が時を刻むパンクチュアリティは現代生活のリズムとなるとともに、それはマスコミのリズムともなった。そして現代では、マスコミのリズムが人間の生活をさまざまな側面で規定し、意味づけている。今晩は何時に家に帰ってテレビを見ようとか、今日は何曜日だから週刊誌を買おうとか・・・。ジャーナリズム的時間は時間の細分化を基礎としている。つまりパンクチュアリティが支配する領域である。ここから、周期性、定期性（リズム）とメディアとの関係が生まれる。また、月、週、日、時刻と時間の切れ目が細分化してゆき、生活のスピード化、インスタント化が進行した。さらに現代では、24時間がジャーナリズムの時間となったことに注意せよ。それは、人間の活動している時間が24時間となったことの反映である。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	マスメディアは人間の生活を変えた	メディア技術の飛躍的な発達は、社会の基本的民主化の動きを促進した。この点は、1989年から1990年にかけての東欧の大変動を考えれば、直ちに理解されよう。また、メディアは価値の相対化を生み出す。それは、権威の喪失を生み出す。とくにテレビの場合、人間をまるごと提示することから、人間それ自体への関心を増大させた。さらにメディアは、メディアへの登場を権威づける機能をもっている。地位付与の機能である。こうして、有名人の時代が登場した。また、メディアの発達は、親の情報統制力を減退させる。とくに、子供へ影響が大きい。それは、子供の成長過程において、かつて存在していた社会的な節目の喪失を促進する。さらにメディアの世界は、現実との混淆が生じ易い世界である。いったい、リアルとは何か。メディアをリアルとして捕らえる社会心理を生み出す。	藤竹　暁	藤竹　暁
9	メディア享受空間の変化	現代では、マスコミは家庭で消費されている。家庭は現代家族にとって、砦のような性格をもっており、そこは圧倒的に消費の場である。かつては、家庭は生産の場でもあったのだが、その生産的側面はほとんど外部化してしまっており、家庭に残されているのは、消費の場としての性格だけである。マスコミの情報は、こうした家庭という消費の場において消費される。さらに、子供の個室が典型的に示しているように、現代に生きる人間は、情報機器に取り囲まれて生活するようになっている。子供の場合には、個室にカギをかけることが一般的であり、親たちはそこに入るときには、ノックしている。家庭という消費性の強い砦の中で、外界の情報に接しているのが、マスコミと人間との関係である。こうして、社会における公と私の領域が曖昧になってきた。それはまた、抑制とか寡黙ということが通用しない社会を生み出す。	同　上	同　上
10	オーディオ・ビジュアルな時代の始まりと大衆文化	19世紀中葉に登場した大衆新聞は、日常生活において娯楽的で、消費的な情報が大きな比重を占める時代を生み出した。さらにレコード、映画、そしてラジオ、テレビの登場とそれらの急速な普及は、20世紀を複製文化の時代として特徴づけることになった。そして、複製文化はまた、大衆文化である。時代の英雄は、大衆文化の世界で活躍する人々の中から生まれ、スターの時代からタレントの時代へと変化している。	同　上	同　上
11	放送の日常と化同時体験の時代	情報が放送、とくにテレビを通して、全社会規模で同時に伝達されることがもっている社会的、経済的、政治的、文化的意味と大きい。専門家と一般人とが、それほど大きな時間的ギャップなしに、情報に接することができる時代である。テレビの同時性は、この専門家と一般人とのあいだの時間的ギャップをなくしてしまっている。まさに基本的民主化の進行である。いまや、同時体験の時代である。同時性によって、世界は劇場的性格を強くしている。劇場革命、劇場政治が展開する時代である。そしてそれを、根底で支えているのがマスコミである。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
12	心理戦争が始まった	マスメディアの発達は、社会的規模で、さらには地球的規模で、ばらばらに生活している人間の心を舞台にして、心理操作が行われる時代を成立させた。第一次世界大戦は、戦争遂行において宣伝が不可欠の手段であることを示した。戦争は戦線でのみ行われるものではなくなった。そして、銃後にいる国民を対象にした心理操作としての宣伝は、戦時中のみならず平時おいても、国際政治にとって必須の政治技術となった。	藤竹　暁	藤竹　暁
13	公告の時代	大量生産と大量消費のメカニズムを円滑に展開させるためには、広告が不可欠である。広告は新しい商品の存在を知らせるばかりでなく、現代では、人々の心の中に眠っている潜在的な欲望を刺激し、その欲望を商品に結びつける力を発揮している。広告は人々にとって望ましてライフスタイルを指示することによって、人間の生き方をも教えているのが現代である。	同　上	同　上
14	テレビが政治手法を変えた	メディアの発達は、政治のスタイルを変えることになる。現代政治においては、マスメディアは不可欠の要素となった。とくに近年、テレビの日常化によって、直接的に一般国民に語りかける政治技法が重要になってきた。湾岸戦争でも、アメリカのブッシュ大統領とイラクのフセイン大統領は、お互いに相手国の国民に対してテレビを通じて語りかけている。国内政治ばかりでなく国際社会を相手にして、同意を獲得し、世論を形成しなければ、現実政治を運営できなくなっている。政治もまた、石鹸と同じように現代人の心の中に密かに売り込まれる時代である。	同　上	同　上
15	高度情報社会に生きる人間	現代は高度情報社会である。豊かな情報は人間を拡張させ、より広い世界での生活を可能にした。刺激の多い生活は活気、軽やかなテンポとリズムを生み、快適を生活環境をつくる。都市的生活様式の浸透である。地縁、血縁などかつて人間を縛ってきた社会的拘束から解放され、現代人は、情報をたよりに自由に生きることができるようなった。しかしその反面、人間は情報ストレスを経験する。ここから、現代人特有の冷たさや無関心も生じる。こうして情報化社会に生きる人間は、過剰な情報をどう処理するかという課題をつきつけられることになる。そして高度情報社会は人間的温かさを求める心理を育てるとともに、また一方では、情報過剰な状態に独特の退屈感覚をも生み出すことになる。	同　上	同　上

＝日本人の生活と文化＝（ＴＶ）
－その生活技術をたずねて－

〔主任講師：須藤　譲（放送教育開発センター助教授）〕

全体のねらい

ここでいう文化とは、私たちの先人が生産活動や経済活動をとおして、日々の生活の中で築き上げてきた生活向上のための技術や知恵をさしている。この番組では自然環境、集落景観、住まい、道具（民具）等の有形民俗文化を取り上げ、日本人の伝統的生活と文化、そして農耕を基盤としてきた庶民社会の特性について考える。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	景観と山の暮らし	人がその土地に住居を定めることは、生産活動にともなう多様な配慮がなされていくことである。その意志の現れが景観のなかに反映されていく。第１回目は生活の組立て方を異にする畑作地帯の二つの山村を対応させながら、景観のなかに現れた人々の意志を探っていく。	須藤　譲（放送教育開発センター助教授）	須藤　譲（放送教育開発センター助教授）
2	畑作の知恵	畑作用具に限られた耕地の多角的活用をとおして、緻密な計算の上に組み立てられた山村の生活サイクルを追う。さらに自然への対応の仕方、生産活動に対する工夫等から、学習性、計画性について学び、日本の社会や日本人の持っている特性について考える。	同　上	同　上
3	狩猟と農耕	日本人と狩猟について考える。山地帯の狩猟と農村地帯の狩猟を対比させることで、日本人の狩猟は農業基盤の上に築かれたものであり、作物を防御するための狩猟であったことを明確にしていく。また焼畑と狩猟の関係について検討を加える。	田口洋美（アジア文化研究所研究員）	田口洋美（アジア文化研究所研究員）
4	木工民の世界	日本の山地帯を漂移しながら、また農閑余業として木製品をつくり、農民や都市生活者に日用雑器を供給してきた人々の生活と技術を追う。また共有山の利用をとおして、日本人の奥山と里山についての意識と村落共同体の機能を探る。	須藤　譲	須藤　譲
5	農耕具の改良と普及	日本人は長い間、米をつくることに多くの努力を費やし、知恵を絞ってきた。緻密な行程を経て行われてきた農作業や、農具の改良、普及に力を注いできた人々をとおして、また稲作用具と畑作用具との比較をしながら日本の稲作文化の特色を探る。	須藤　譲	朝岡康二（国立歴史民俗博物館教授）
6	副業としての産業	稲作地帯に住む人も、畑作地帯に住む人も、様々な生業を組み合わせることで暮らしをたててきた。それによって日本人は多様な生産技術を獲得してきた。その技術と知恵を追うとともに、農山村の副業が日本の産業や生活に果たしてきた役割について考える。	同　上	須藤　譲
7	景観と漁村の暮らし	海で生きてきた人々は、農民や都市生活者に魚介類を供給してきた人々である。その成り立ちを探るとともに、日本を代表する二ヵ所の漁村景観を観察することによって、漁法による集落景観のちがい、漁業と農業とのかかわりについて考える。	森本　孝（放送大学非常勤講師）	森本　孝（放送大学非常勤講師）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	渚の恵み	渚に生息する様々な魚介類の採集は、漁民、農民を問わず大事な仕事である。そのような意味で、山村における山の利用と共通点がある。海に対する日本人の細やかな対応を追うとともに、海を利用するための権利と義務について検討を加える。	森本　孝	森本　孝
9	景観と町の暮らし	町に住む人々の多くは、耕地をもたない人々の集まりであり、人や商品をとおして、広い世界との交流があったことである。日本の代表的な瀬戸内の港町を取り上げ、その町並みや生活の営みの中から町の成り立ちやその後の消長を追うことで、日本の町社会を考える。	須藤　譲	谷澤　明（放送教育開発センター助教授）
10	日本の町と市	日本の農村は自給自足をたてまえとしてきた。しかし、刃物、鉄製農具、食器、塩、魚介類など、生活必需品ではあるが、自給できないものについては、商品としてゆるやかに流通していた。これらの商品の流通に焦点をあて、日本の町の成り立ちや特性を考える。	同　上	岩井宏實（国立歴史民俗博物館教授）
11	住まいと日本人	かつての日本人の住まいの多くは、生業とのかかわりの中で多様な使われ方をしてきた。生業が住まいの形を作り、変えていったといってもいい。ここでは家の建て方の技術や使い方をとおして、日本人の住まいと住まい方について考える。	同　上	須藤　譲
12	食べ物の習俗	食料を確保するために、我々日本人が多大な労力を費やし、知恵を絞ってきた時代はそう昔のことではない。主食、および主食を補う食品、保存食品、調味料などの調理。加工の過程と加工用具をとおして、その技術と知恵を追う。	同　上	同　上
13	暮らしのなかの信仰	日本人の信仰は、日々の生産活動と密接に結びついていた。農業の神様であり、関東圏に多くの信者を集めた榛名神社と、海の神様として日本各地に信者をもつ金比羅神社に、奉納されている奉納物の記録をとおして、日本人の信仰を考える。	同　上	印南敏秀（愛知大学助教授）
14	柔構造と剛構造の技術	柔と剛を代表する素材は藁と鉄であろう。柔の技は親から子へ、子から孫へと伝えられ、剛の技術はきびしい従弟制度のなかで鍛えられていったものが多い。この二つの素材を対比させて、技術の伝承とものをつくり出していくことに対する日本人の特性を考える。	同　上	田村善次郎（武蔵野美術大学教授）
15	技（わざ）から技術へ	日本の近世社会、及び近代社会の中で大量生産、大量輸送に大きな役割をはたしてきた道具類の製作システムや、商品の輸送システムに焦点をあて、近代産業発達の足がかりをつくってきた道具と用具について検討する。	同　上	須藤　譲

＝経　営　管　理＝（TV）

〔主任講師：森本三男（青山学院大学教授）〕

全体のねらい

現代企業における経営管理の内容を体系的に理解し、実践のための基礎能力を育成する。経営管理の内容は多面的であるが、大別すれば、細分化された生産管理、財務管理、労務管理などの各論と、それらの共通基盤となる総論になる。本講義では、総論相当部分を学習する。経営管理が主体的実践行動であることを重視する。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	経営管理の意義	経営管理の課題は、経営目的達成のためにイノベーションと効率化をはかることである。それは、各種経営資源を対象にした計画・組織・コントロールのような機能によって合理的に遂行され、そこに複雑な体系が出現する。本章では、経営管理の機能と体系を学ぶ。	森本三男（青山学院大学教授）
2	経営管理の発展	経営管理の発展は、大略3期から成る。1930年頃までの古典的経営管理、1950年頃までの新古典的経営管理、それ以降の現代的経営管理である。本章では、それぞれの問題意識、技法、システム、特徴を学習する。現代の中に古典や新古典が生きている点に留意する。	同上
3	経営管理と意思決定	戦略や計画の策定、組織の設計など、経営管理のあらゆる問題は、意思決定に還元される。また意思決定は、主体性を発揮する行動の核でもある。このような点から、経営管理の統一視点を意思決定に求める。本章では、意思決定の前提、過程、型、技法を学ぶ。	同上
4	経営管理と情報	意思決定には情報が不可欠であり、意思決定の結果は情報として関係者に伝達される。このようにみれば、経営管理は意思決定と情報伝達のネットワークとしてとらえられ、その機能は、情報の収集、処理、伝達の巧拙によって左右されることになる。	村松司叙（成蹊大学教授）
5	経営者・管理者の役割	経営管理の主体は、経営者と管理者である。彼らは、意思決定によって経営の目標、理念、戦略、計画、組織を策定し、変革し、行動をコントロールする。本章では、経営管理の構造に即して経営者・管理者の役割を明らかにし、必要な資質と行動基準に論及する。	森本三男
6	経営戦略 (1)	企業による資源運用の基本原理を、経営戦略という。経営戦略は、対象とする資源の種類やカバーする行動領域の範囲などにより、各種のものに分けられる。本章では、経営戦略の特質や種類をまず学び、ついで多角化を中心にした内部戦略を学習する。	村松司叙
7	経営戦略 (2)	内部資源の運用基本原理である内部戦略に対照されるのは、外部資源に関連した外部戦略である。本章では、主として外部戦略を勉強する。その主要内容は、M＆A（合併および買収）、合弁、提携、集団形成、連合などである。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	経営計画の意義と役割	戦略を展開するために、計画が策定される。計画は、時間的限定のいた具体的行動予定であり、行動の主体（誰が）、時間的限定（いつ）、具体的行動内容（何を）を明らかにする。本章では、経営計画の特質、種類、体系と、長期経営計画を学習する。	古川浩一（東京工業大学助教授）
9	中期経営計画	長期経営計画と対照され、その内容を詳細化したものが短期経営計画である。それは、日常の業務執行行動にとって不可欠であるばかりでなく、必要に応じて多くの種類を生み出している。本章では、短期経営計画の内容と策定技法について説明する。	同上
10	短期経営計画とコントロール	企業の行動は、計画通りに展開されるとは限らない。そのため、行動の業績を不断にチェックし、その是否を分析し、必要に応じて補正する機能が不可欠となる。この機能がコントロールである。経営管理におけるコントロールの原理と技法を、本章で説明する。	同上
11	経営管理と組織	計画を遂行するため意識的に調整された協働のシステムが組織である。経営管理のための組織が経営管理組織である。本章では、経営管理組織の特質、要素、設計原理、形態などの構造面と、動態化、活性化などの機能面の双方を学習する。	森本三男
12	リーダーシップと動機づけ	最も重要な経営資源は人間である。人間は人格や主体性をもっているから、その管理には特別な配慮が必要になる。その柱となるのは、人間を統合するリーダーシップと、人間の活動力を高めるモチベーション（動機づけ）である。本章では、これらを学習する。	同上
13	イノベーションと研究開発	経営管理の課題であるイノベーションとは、経営に関するすべての抜本的変革をいうが、その中心は、製品ないし事業の変革（プロダクト・イノベーション）と生産方法の変革（プロセス・イノベーション）であり、それらは研究開発によって生み出される。	古川浩一
14	資金の調達と運用	人的資源と並ぶ重要な経営資源は、財務的資源すなわち資本である。必要な資本を必要な時に低いコストで調達し、それを有効に運用することは、経営管理の基本要件である。この要件を満たすための財務の原理、方法、手段、技法を、この章で習得する。	村松司叙
15	経営管理の国際化	日本企業の当面している最大の課題は、国際化である。国際化は、日本的経営とよばれる従来の経営管理を、大きく変化させようとしている。変化の方向、内容、望ましい国際化した経営管理のあり方などを、この章で展望する。国際化は文化の問題である点に留意。	同上

＝経　営　戦　略＝(R)

〔担当講師：河野豊弘（学習院大学教授）〕

全体のねらい

経営戦略とは、企業が環境にどのように対応し、どのような製品やサービスを提供するかを決定することである。即ち製品構成を決定し、そのための新製品を開発し、後方への垂直的統合や前方への垂直的統合をどうするか、海外に子会社を設けるか否か、競争戦略をどう進めてゆくかなどを決定することである。

戦略的意思決定は前例のない一回限り意思決定であり、企業の業績に大きな影響を与える。そのような意思決定をどう行なうか、をこの科目では研究する。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	経営戦略の意義と戦略的意思決定	経営戦略の意義 経営戦略の重要性 戦略的意思決定の特長 戦略的意思決定のタイプ 長期計画の立案 要約	河野豊弘 （学習院大学教授）
2	環境の分析 ── 機会と脅威	戦略情報の意義　　戦略情報の体系 環境情報の体系 アウトサイド・インとインサイド・アウトと 情報の収集・処理・伝達のプロセス 公式情報と非公式情報 予測の方法　　要約	同　上
3	自社分析 ── 強みと弱み	自社分析の目的 自社分析の体系 比較の基準 ＰＰＭ分析 自社資源の分析 企業文化 要約	同　上
4	戦略発想と目標設定	意義 戦略のアイデア形成 目標設定 要約	同　上
5	製品構成と多角化	製品市場戦略の領域 製品構成の原理 製品構成の類型 製品構成と組織構造 要約	同　上
6	新製品開発	新製品の意義と成功条件 新製品開発の成功要因と失敗要因 開発のプロセス 最初のアイデアの形成 方針の類型 新製品のための意識改革とコンセンサス 要約	同　上
7	垂直的統合	概念と類型 統合の原理 統合の不利 統合に適する場合 要約	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	多国籍企業経営	多国籍企業経営の概念と目的からみた類型 有利性の原理 多国籍企業経営の不利 多国籍企業経営の適する領域 多国籍企業経営の成功要因 多国籍企業の問題点 要約	河野豊弘
9	体質の強化	体質とは 要員計画 能力強化の戦略 企業文化の変革 要約	同上
10	戦略の評価	評価の困難性と必要性 評価の種類 評価項目の原理 評価の評価 戦略的評価 要約	同上
11	戦略の実行	問題の所在 戦略の実行とは―上からみて 戦略の実行の過程―下からみて 実行計画の要素 実行への動機づけ 利害対立をとく 実績検討と計画の改訂　　要約	同上
12	戦略の立案と実行の組織	トップマネジメント 企画室 開発部門 プロジェクトチーム 社内ベンチャー制度 SBU 組織の創造性　　要約	同上

＝企業と人材＝（R）

〔主任講師：石田英夫（慶應義塾大学教授）〕

全体のねらい

日本が経済的に成功を収めた要因のひとつとして、人材の育成と活用の巧みさをあげることができる。このコースでは、日本の企業がどのようなしくみで人材を管理しているか、現代の人材管理の主要な問題はなにかを明らかにし、新しい潮流を展望する。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	日本の経営と人材	「企業は人なり」という言葉があるが、これはわが国の経営者が共通に持っている人材観を表している。日本の経営の強みとして、組織の柔軟性とヒラの労働者の労働意欲の高さがあげられる。それは日本人の弾力的な職務観と平等主義の思想から説明できる。	石田英夫（慶應義塾大学教授）
2	人材管理システム	日本企業の人材管理を、環境ー理念ー戦略ー制度・慣行ー目的・成果というシステムとしてとらえ、欧米との比較を念頭におきながら、日本の特色を説明する。人材管理の目的はヒトの能力・意欲・集団意識の向上を通じて生産性と品質をあげることにある。	同上
3	人材の内部化戦略	日本企業の人材に関する基本戦略は「内部化」戦略であり、それは企業の人材ニーズを満たすために外部労働市場に頼ることをできるだけ少なくするという方針である。しかし近年、そのベースをなす長期的雇用慣行を修正する動きが見られる。	同上
4	採用と異動	人材の内部化戦略の下で、企業は新卒採用を重視し、若者にとって就職は一回限りの勝負になり、いろいろな問題を引きおこす。ひとたび入社すると、比較的幅広い職務の異動が行われ、それが仕事をしながらの訓練（OJT）として重要な意味をもつ。	同上
5	人材開発	人材訓練の進め方 人材育成の進め方 組織の効果性を高める	同上
6	人事評価	人事評価は昇進・昇格という賞罰目的だけでなく、適性の発見や配置のためのカギとなる。わが国の人事評価は年功重視の全人格的評価と言われるが、勤続だけでなく能力・業績も考慮され、長い目で見ると能力主義的な評価と言える。	同上
7	昇進ー管理職と専門職	低成長と高齢化のはざまで、かつてのように大多数の人が管理職のポストにつける可能性はなくなった。キャリア開発も従来のように管理職志向一本槍ではなく、専門職などのコースを設けてキャリアの多様化をはかり、多くの人の意欲づけをねらっている。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	賃金と福祉	適正な賃金水準を維持するとともに、賃金を公平に配分する賃金体系が必要である。年功賃金体系から職務給や能力主義賃金への移行が説かれてから久しいが、職能給体系が普及している。従業員福祉は高齢化と社会意識の変化への対応が望まれている。	石田英夫
9	労働時間と欠勤	わが国の労働時間は先進国の中で最も長い。有給休暇は6割程度しか消化されず、残業は恒常化しており、残業代が支払われない「サービス残業」も多いと言う。こういう事態は貿易摩擦がらみで、人間的な生活を犠牲にした競争力強化と外国から批判されている。	同上
10	労使関係と労働組合	わが国の労働組合は企業別組合をベースとしており、過去20年間、経営者主導の協調的労使関係が維持されてきた。組合組織率は低落傾向にあるが、昭和62年秋、労働界の大同団結に向けて「連合」が発足した。労働組合の活性化と交渉力の回復につながるか注目される。	同上
11	経営参加	わが国には労働者重役制のような制度こそないが、労使協議制が普及し、小集団活動など職場での労働者の参加も活発であり、経営参加の先進国だと言えよう。産業民主主義の推進と職場の活性化に向けて経営参加の深耕がのぞまれる。	同上
12	男女雇用平等	女性の職場進出はめざましい。勤続は伸び、就業意欲は向上しているが、管理職の地位にある女性は非常に少ない。雇用における男女差別を廃止し、平等な扱いを促進するための雇用機会均等法が施行され、新たな段階に入った。今後の動きが注目される。	同上
13	高齢化と人材管理	日本の人口は今後長期間にわたり高齢化がハイピッチで進む。当面60歳、更に65歳への定年延長、ピラミッド型の人口構成を前提にした年功制度の大幅修正、退職金・年金制度の再検討、従業員の高齢化に対応した職務設計と仕事の再配分など課題は多い。	同上
14	経営戦略と人材	経営戦略の優劣が問われる時代になって、経営戦略と人材計画の連動が必要になっている。戦略課題の中で研究開発と新規事業開発は最も重要なものである。それを担い、成功させる革新的な人材をいかに育成し、評価し、報いるべきか重要な検討課題である。	同上
15	国際化と人材	日本企業の国際化・グローバル化が進行している。海外での生産・販売・経営を担う人材の育成、本社での外国人の雇用、国境を超えた人材の再配置、世界的視野にたった人事・労務政策の再検討など、国際化時代の人材管理の新たな課題は多い。	同上

＝仕事とくらしの経済学＝（TV）

〔主任講師：島田晴雄（慶應義塾大学教授）〕

全体のねらい

このコースは、人々の仕事と暮しのさまざまな側面を経済分析の観点から明らかにする。経済は、人人のくらしの単位としての家計と仕事の場としての企業とから成り立っている。人々はくらしてゆくために必要な所得を、仕事をする事によって獲得し、それを消費して生活する。企業はそうした人々を雇って生産活動を行い、生産物を人々に売って人々に賃金を支払う。経済社会は家計と企業の間の、労働力と財貨の交換をつうじたこのような循環によって機能している。このコースではそうした経済社会のしくみを、家計の行動、企業の行動、そして労働力の需給を調節する労働市場の構造と変動、賃金の決定、失業、政府のはたらき、などの分析をつうじて明らかにし、さらに現代のトピックスである外国人労働者問題、労働時間短縮問題、日本の経営の特質と海外進出などについても紹介し、解説する。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	労働力の構造と変動	1.はじめに　2.労働力と労働力率　3.労働力率の長期変動　4.労働力率のライフサイクル　5.パートタイム労働　6.教育水準と女子労働力率　7.景気変動と労働力率	島田晴雄（慶應義塾大学教授）
2	家計と労働供給	1.はじめに　2.連続的最適時間選択のモデル　3.就業ー非就業択一モデル　4.賃金の効果　5.所得の効果　6.子供の効果　7.税・所得保障の効果　8.労働時間の効果　9.人的投資の効果　10経済発展と就業構造の変化　11.景気変動と就業行動　12.労働供給関数の計測結果　13.家計単位の労働供給シミュレーション	同上
3	生産技術と労働需要	1.はじめに　2.雇用の変動とその内容　3.生産要素価格の変化と生産要素需要　4.生産変動と雇用変動　5.企業の雇用・賃金制度と労働者の移動・定着　6.雇用行動の主体均衡理論分析　7.要素可変型技術のモデル　8.要素固定型技術のモデル　9.まとめ	同上
4	企業組織と雇用管理	1.はじめに　2.内部労働市場　(1)組織の構造　(2)組織の原理　(3)内部労働市場のルール　3.人的投資の理論　4.経済理論による雇用制度・慣行の解釈　(1)企業内訓練　(2)長期雇用慣行と労働者の定着　(3)「年功」賃金と内部昇進制　(4)定年制と賃金・退職金制度	同上
5	賃金構造と労働市場	1.はじめに　2.賃金格差の諸側面　a性別賃金格差　b年齢別賃金格差　c教育程度（学歴）別格差　d職業別・職種別賃金格差　e企業別格差　f産業別賃金格差　g地域別賃金格差　3.賃金格差の形成と変動の基本的要因　4.賃金格差の理論分析　a労働供給価格の分布　b労働の質の分布　c賃金格差と雇用機会配分の決定　d景気変動と賃金格差・労働移動・失業　e不完全就業　f仕事探しと賃金格差	同上
6	マクロ経済変動の雇用・賃金	1.はじめに　2.マクロ経済指標の変動　(1)国民総生産　(2)物価　(3)雇用ー失業　(4)賃金　3.生産物市場と労働市場　(1)生産物市場の動き　(2)労働市場の動き　4.フィリップス曲線とマクロ経済変動　5.マクロモデルによる分析　(1)生産物市場　(2)労働市場　(3)生産物市場と労働市場の関連	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
7	団体交渉と賃金決定	1.はじめに　2.日本の賃金決定制度の特徴　3.賃金決定制度の発展　4.団体交渉下の賃金決定の理論　5.交渉賃金決定の変動要因　(1)等利潤曲線の変位ー景気変動　(2)等利潤曲線の形状変化ー技術変化　(3)労働者の賃金・雇用選好の変化	島田晴雄
8	労働力需給バランスと失業	1.はじめに　2.失業の変動　3.失業の構造　4.失業変動の分析　(1)自然失業率の分析　(2)U－V分析　(3)グロス・フロー分析　5.労働力不足と労働需給のミスマッチ	同上
9	労働政策	1.はじめに　2.労働基準行政と労働市場の枠組み　(1)労働基準法　(2)労働時間　(3)最低賃金　3.生活保障と労働市場の機能　(1)生活保混　(2)公的年金　(3)雇用保険　4.雇用政策と労働力需給の調節　(1)雇用政策の展開　(2)職業能力開発	同上
10	労働政策の経済的意味	1.はじめに　2.労働政策の基本的要素　3.市場競争と生存条件の保障　4.雇用・賃金の安定化と制度的枠組み	同上
11	外国人労働者問題	1.はじめに　2.外国人労働者問題の背景　3.外国人労働力の入国管理および就業の現状　4.外国人労働力問題をめぐる論点：受け入れのメリット、デメリット　5.外国人労働者受け入れのための提案	同上
12	労働時間の短縮とくらしのゆとり	1.はじめに　2.労働時間の動向　3.労働時間の国際比較　4.労働時間短縮を阻む要因　5.自由時間の意義　6.われわれは何をなすべきか	同上
13	資産の膨張と私たちのくらし	1.はじめに　2.日本経済の第3の奇跡　3.ストック経済化の進展　4.土地資産膨張の錬金術　5.資産格差拡大のメカニズム　6.資産格差拡大の社会経済的インパクト	同上
14	日本の産業とヒューマンウェア技術	1.はじめに　2.ヒューマンウェア技術　3.日本型ヒューマンウェア技術　4.人的資源の管理と開発	同上
15	海外投資と日本の経営	1.はじめに　2.海外直接投資の急増と摩擦　3.受け入れ国から見た直接投資のメリット　4.社会的反発　5.日本型企業行動の問題点　6.同心円型社会と多心円型社会　7.むすびー発展への課題	同上

＝管　理　会　計＝（TV）

〔主任講師：櫻井通晴（専修大学教授）〕

全体のねらい

管理会計は、経営者のために行われる会計である。企業会計は、財務会計と管理会計という２つの領域に区分することができる。財務会計が外部利害関係者のために財務諸表を作成し、報告することを主なねらいとしているのに対して、管理会計は、企業内部の利害関係者のために、経営管理に必要な会計情報を提供することをねらいとしている。本講義では、管理会計の基礎概念、手法を中心にして、会計をいかにして経営管理に役立てるかを述べる。その際、管理会計という学問の性格上、企業のトップにインタビューしたり、事例研究をいくつか試みたいと思う。

回	テ　ー　マ	内　容	担当講師（所属・氏名）
1	管理会計の意義・本質	1　管理会計と財務会計 会計とは　企業会計の領域　会計構造と会計報告 2　経営管理者と会計 企業の目的　経営者の機能　経営計画と統制　経営意思決定 3　経営組織とコントローラー制度 経営組織　ライン・スタッフ、委員会組織　コントローラー制度 4　管理会計の体系と本書の構成 管理会計の体系　本書の構成	櫻井通晴（専修大学教授）
2	財務諸表の分析	1　分析のための基準 収益性と流動性　損益計算書と貸借対照表　分析方法と比率分析 2　収益性の分析 資本利益率　資本回転率　売上利益率 3　流動性の分析 支払能力の分析比率　資本構成の分析比率　資本構成、資産と資本構成の分析比率 4　生産性、成長性、投資収益性、社会性の分析 生産性の分析　成長性の分析　投資収益性の分析　社会性の分析	同　上
3	管理会計上の諸概念	1　管理会計上の基礎概念 実体概念　継続企業の概念　貨幣的評価の概念 2　管理会計上の利益概念 限界利益　管理可能利益　貢献利益 3　計画と統制のための原価概念 操業度の変動と原価　管理可能性と原価　直接費、間接費とその配賦 個別費、共通費とその配賦　標準原価 4　経営意思決定のための原価概念概説 機会原価　増分原価　埋没原価	同　上
4	事業部制会計	1　事業部制組織 分権化と事業部制　事業部制の利点と欠点 2　事業部制の業績評価 責任会計　原価中心点　利益中心点　投資中心点　残余利益　売上利益率 3　本社費・共通費の事業部への配賦 本社費・共通費の性格　貢献利益か純利益か　本社費配賦の方法　社内金利制度 4　社内振替価格の設定 内部振替価格と社内振替価格　社内振替価格設定の基準	同　上
5	損益分岐点分析と直接原価計算	1　損益分岐点分析 損益分岐点分析とCVP分析　損益分岐点図表　損益分岐点分析の算式 2　損益分岐点分析の展開 固定費、変動費の増減　目標利益売上高の算定　目標売上利益率の売上高 安全余裕率 3　直接原価計算 直接原価計算の意義　全部原価計算と直接原価計算の製造原価　営業利益と損益計算書の相違 4　直接原価計算の機能 利益計画への活用　経営意思決定への活用　原価管理への役立ち　公表財務諸表と直接原価計算	同　上
6	利　益　計　画	1　経営戦略と長・中期利益計画 企業環境の変化と経営戦略　戦略的な長期経営計画と長期利益計画　中期経営計画、中期利益計画 2　利益計画のすすめ方 長、中、短期の利益計画　利益計画における費用・収益計画　利益計画の策定過程 3　利益計画における目標利益 目標利益の指標　目標利益における利益概念　目標利益の求め方 4　利益計画と企業予算 利益計画の本質と企業予算　利益計画と予算編制の関係	同　上
7	予　算　管　理	1　企業予算の意義と現状 企業予算とは／予算の体系 2　予算編成 経常予算編成の基礎　予算編成の手順　損益予算の編成　資金予算の編成 3　参加的予算管理とゼロベース予算 参加的予算管理　ゼロベース予算 4　予算統制 変動予算　予算差異分析　予算差異分析の限界	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	標準原価管理	1 標準原価管理とコスト・コントロール 標準原価計算とは　標準原価計算と原価管理（コスト・コントロール） 標準原価の種類 2 標準原価の設定 標準直接材料費の設定　標準直接労務費の設定　標準製造間接費の設定 習熟曲線と経験曲線 3 原価差異分析 標準直接費の差異分析　標準製造間接費の差異分析 4 標準原価管理の特徴と限界 標準原価管理の特徴　標準原価管理の限界	櫻井通晴
9	原価管理と管理工学的手法	1 原価管理の現代的意味 原価管理の２つの意味　原価低減　狭義の原価管理 2 原価低減の構造 経営環境の整備　経営構造の変革　業務執行活動の改善 3 工場自動化と原価管理 プロセス・オートメーションとファクトリー・オートメーション　原価企画（目標原価）　ソフトウェア原価管理 4 管理工学的手法 品質管理　在庫管理　現場の原価管理	同上
10	営業費、研究開発費の管理	1 営業費管理の基礎 営業費管理の重要性　営業費管理の困難性　営業費管理のための原価分類 2 物流費の管理 物流費管理の要点　輸送費の管理　保管費の管理　包装費の管理 3 販売促進費の管理 販売促進費管理の要点　販売促進費管理における貢献利益　販売促進費管理における割当型予算　広告宣伝費の管理　交際費の管理 4 一般管理費の管理 一般管理費管理の要点　事務の合理化と事務費の生産性分析 5 研究開発費の会計と管理 研究開発費の会計処理　研究開発費管理の要点　研究開発プロジェクトの評価	同上
11	資金管理	1 資金管理と資金の意味 資金管理の重要性　黒字経営と黒字倒産　資金の意味 2 資金構造計画と長期資金計画 資金構造計画の重要性　資金調達源泉　長期資金計画 3 資金計画表（資金運用表） 資金計画表とは　資金計画表の作成法　ケース１　資金計画表の具体的例示　ケース２ 4 資金繰り計画表（資金繰り表） 資金繰り計画表とは　資金繰り計画表の形式	同上
12	経営意思決定会計の基礎	1 経営者の意思決定と会計 意思決定とそのプロセス　意思決定会計の区分 2 経営意思決定のための増分分析 増分分析　配賦問題と意思決定　ケース　減価償却費の取扱 3 経営意思決定のための原価 増分原価　埋没原価　機会原価　その他の意思決定原価 4 不確実性への対応 不確実性と意思決定　期待値による不確実性の検討　分散による不確実性の考察　期待効用	同上
13	業務的意思決定のための会計	1 業務的意思決定と経営計画 業務的意思決定　経営計画上の位置づけ 2 自製か購入かの意思決定 一般理論　ケース　解き方 3 新製品（部門）の追加または旧製品（部門）廃棄の決定 一般理論　ケース　解き方 4 プロダクト・ミックスの意思決定 ２製品、販売上の１つの制約条件の組合せ　２製品、生産上の１つの制約条件の組合せ　２製品、販売・生産上の多くの制約条件の組合せ　多品種、多数の制約条件	同上
14	戦略的・業務的な価格決定	1 経営戦略と価格決定 価格政策と価格決定　価格決定の性質 2 経済モデルと価格決定 需要と価格　需要と価格弾力性　価格、生産量の決定　経済モデルの限界 3 会計モデルによる価格決定のメカニズム 全部原価法　部分原価法 4 現実の価格決定の類型と会計モデルの適用 確定価格契約と原価加算契約　ライフサイクルと価格決定　既存製品と新製品の価格決定　独占的製品、競争製品および寡占製品の価格決定　長期価格決定と短期価格決定	同上
15	戦略的意思決定と設備投資計画	1 戦略的意思決定のための会計 戦略的意思決定　設備投資意思決定の特徴 2 設備投資意思決定の基礎概念 現金流出入額（キャッシュ・フロー）　現在価値の概念と利子　資本コスト 3 投資プロジェクトの評価法 投資利益率法　回収期間法　内部利益率法　現在価値法 4 リスク、リース、プロジェクト・コントロールと設備投資意思決定 リスクの評価　リース　プロジェクト・コントロール	同上

＝税　務　会　計＝（R）

〔主任講師：武田隆二（神戸大学教授）〕

全体のねらい

法人税は、法人の各事業年度の所得の金額を課税標準として法人に課せられる税金であるから、法人税法の骨格は課税所得の算定にある。本講座では、課税所得計算の内容を会計学的見地から基礎づけ、かつ、その性格を明らかにすることを狙いとし、企業会計と税務会計との違いを理解できるように進めたい。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	法人税の仕組み	1　税金の意味　　2　課税の公平性と所得 3　税金の種類と分類　　4　税体系 5　法人税と法人税法　　6　法人税の仕組み 7　青色申告と帳簿備付義務 8　記帳義務の一般化	武田隆二 （神戸大学教授）
2	税務会計の制度的基礎	課税所得はどのように求められるのかという所得計算の仕組み、収費・費用計算の基礎におかれる「一般に公正妥当と認められる会計処理の基準」の意味、さらに、税法と商法とを橋渡しする「確定決算主義」の意義について説明する。	同　上
3	損金概念と債務確定主義	課税所得は益金の額から損金の額を控除して求められるが、ここでの損金の概念を規定する法概念が債務確定主義である。債務の確定という法的に安定した状態で損金を認識・測定しようとする債務確定主義の内容を会計学上の発生原則と対比する形で明らかにする。	同　上
4	益金概念と権利確定主義	課税所得算定における積極要素としての益金の額は、損金の額と同様に、法的に安定的となった債権確定の段階で認識・測定される。このような権利確定主義が、会計学上の実現原則とどのような関連にするのかを明らかにする。	同　上
5	売買損益等と益金の計算	益金の額に算入される典型的な取引について取り上げ、検討する。売買損益（一般販売、特殊販売、請負工事等に係る損益、有価証券の譲渡益、固定資産の譲渡益）のほか、受贈益や受取配当金の益金不算入等の諸問題を扱う。	同　上
6	たな卸資産の税務	たな卸資産とは、固定資産とどのような点で違いがあるのか、たな卸資産の取得価額をどのように認識するのか（原価集合論）、さらにその取得価額を各期間にどのように割当てたらよいか（原価配分論）、評価減、低価法の適用等について扱う。	同　上
7	有価証券の税務	有価証券の範囲とその取得価額、転換社債と新株引受権付社債の取扱い、身代り株式の付替計算、原価配分と評価換え（低価法・評価減）等、有価証券の税務の特徴について解説する。	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	固定資産の税務	固定資産会計もたな卸資産会計と同様に、原価集合論と原価配分論とから成り立っている。原価集合論では固定資産の範囲とその取得価額の問題が、また原価配分論では減価償却方法、定額法から定率法への変更等、耐用年数の適用の問題が扱われる。	武田隆二
9	資本的支出・評価換え・除却特別償却の税務	固定資産に係る支出が修繕費として扱われるか、あるいは帳簿価額に加えなければならないか（資本的支出）、技術進歩等により固定資産が陳腐化した場合どのように扱われるか、さらに、耐用年数をまたずに除却等された場合の取扱いについて解説する。	同上
10	圧縮記帳の税務	国庫補助金、工事負担金等で取得した固定資産、保険金で取得した固定資産、交換により取得した固定資産について、租税政策的見地から固定資産の取得価額を圧縮するという手続により当該圧縮額を損金の額に導入する方式の会計処理と効果について考察する。	同上
11	繰延資産の税務	代価の支払が完了し、役務の提供を受けたにもかかわらず、その効果が将来発現すると期待されるものが繰延資産といわれるが、その範囲、償却方法について説明するとともに、税法特有のいわゆる9号繰延資産について解説する。	同上
12	引当金、準備金の税務	引当金は債務確定主義の例外として税法上六つの引当金に限って、その設定が認められている。これら引当金の特徴を個別に考察するとともに、措置法で容認する各種準備金のうち日常性のある準備金についてその特徴を説明する。	同上
13	リース取引に伴う損益	法人によるリース利用状況の普及に伴い、リースの仕組み、リース取引に係る法人税の取扱いを、賃借人側の会計処理問題とリース会社側の会計処理問題とを含めて解説する。	同上
14	企業会計と税務会計との差異	企業利益と課税所得との差異の原因を類型化して説明し、その差異の形態と効果について解明することによって、税務会計と企業会計との性格の相違を浮彫りにしたい。最後に、税効果会計についても簡単に説明することにしたい。	同上
15	消費税の仕組み	1　消費税の特質　　2　消費税の仕組み 3　課税対象　　4　資産の譲渡等の時期 5　仕入税額控除 6　販売税と仕入税の算出過程のまとめ 7　消費税の会計処理	同上

＝ マーケティング論 ＝（TV）

〔主任講師：八巻俊雄（東京経済大学教授）〕

全体のねらい

マーケティングはマーケット（市場）をつくるということばから発生した企業経営の考え方である。需要のつかみきれなくなった大恐慌以後が特に関心を集めた。その基本的考え方は消費者志向ということである。それまでの企業志向の考え方と180度異なる。本講では日本企業のマーケティングの実践を紹介しながら理論的理解も深める。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	マーケティングとは何か	マーケティングの基本的考え方は消費者志向（Consumer Oriented）ということである。消費者志向はただ消費者に頭を下げ、お世辞をいうことではない。それが企業者志向とどう違うかをまず事例をまじえて説明する。	八巻俊雄（東京経済大学教授）
2	企業競争とマーケティング及びマーケティング理論の発展	マーケティングは需要を上回る供給体制となった資本主義社会の成熟期に生まれた。企業競争も価格競争から非価格競争へ移り、またマス・メディアの発達もあって、セールス中心の売り方から広告へ重点を移しつつある。	同上
3	マーケティング戦略、市場細分化と戦略ドメインの決定	このところ需要は高度化し、つかみにくくなっている。消費者研究を進めていくと市場は限りなく細分化されていく。地理的、人口学的、経済学的、社会学的さらに心理学的に細分し、どこに自社、及び自社製品を位置づけるか、戦略ドメインの決定をどうするか。	同上
4	需要予測と消費者行動	消費者志向の第一歩は需要予測である。マーケティングのスタート時は心理学が使われ、次いで社会学、文化人類学、意味論なども応用されるようになった。コンピュータ利用で、需要予測は大がかりになり、またこまめになっている。実例に即した需要予測を紹介。	同上
5	製品開発から商品開発まで	需要予測にもとづいた製品づくり、次いで商品開発について解説する。需要予測から想定される商品を500とすると、このうちテスト・マーケティングに回る商品が100で実際に売り出される商品は10という。製品計画と商品化とは異なる点も理解してほしい。	同上
6	マーケティング・ミックス	マーケティング戦力には価格、商品、流通、プロモーション、セールス、ＳＰ、広告などがある。各戦力の力を説明し、その配分をどうするか。商品のライフサイクルによって、競争条件によって各戦力の配分は変わってこよう。	同上
7	価格決定	価格を決める要因は原価と需給関係できめる。その兼ね合いに苦心する。原価以下では利潤が出ない。かといって消費者意識で高いと思われるような価格では売れない。短時日で原価を回収するか長期間で回収するかによっても価格の決定は変化する。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	流通戦略	直販組織を使えればそれにこしたことはない。しかし、これには多額な費用がかかり、販売店が利益を確保できるかがかぎを握っている。合販組織ではどう自社製品のシェアをふやすかがかぎを握っている。いずれにしてもその維持、拡大をどうするかが問題である。	八巻俊雄
9	セールスマン活動	マーケティング戦力の中で最も古くから存在し、かつ基本をなす戦力である。セールスマン配置、管理とセールスマン活動とに分かれる。セールスマン活動の基本は人間関係である。初めての顧客を百年の知己にしてしまう技術は一流セールスマンの秘伝でもある。	同上
10	ＳＰ．イベント	マーケティング戦力の中で人間（セールス）と物（広告）の中間にあって、強力な役割を果たす活動がＳＰ（セールスプロモーション）である。おまけ（プレミアム）サンプリング作戦、マネキン、展示会、見本市など豊富な手段が使われている。	同上
11	広告、クリエイティブと媒体選択	広告はターゲット（対象）をきめてからスタートする。ターゲットに向けて商品の持っているコンセプトをどう伝えていくかが基本である。伝える手段は媒体が担う。これにはマス媒体からミニ媒体まで多様である。	同上
12	顧客サービス	マーケティングは顧客志向の経営である。商品を売ったあとどう顧客のロイヤリティを保持していくかが問題である。耐久財と包装商品では対応策が異なるが、それだれ基本は顧客志向ということである。	同上
13	マーケティング組織と人材	以上のようなマーケティングを展開するうえにどのような社内外の組織を作っていったらよいか。販売会社をメーカーと同一にした場合の利害得失、作戦部門と営業部門のウエイトは、また営業部門は商品別か顧客別かなどを検討する。	同上
14	マーケティング法	マーケティング活動はシェア拡大を目ざす経済行動でもある。したがってマーケティング活動は独占禁止法、その下部法の景品と表示に関する法律の規制を受ける。ほかに特許法、商標法、あるいは業界ごとに配慮しなければならない法規制、自主規制がある。	同上
15	マーケティングの新潮流	エレクトロニクスとコンピュータの発達によって、消費者をとらえる方法、これにアプローチする方法も大がかりになった。このためのデータ・ベースの利用、処理技術など、各項でふれられなかった問題についてふれる。ほかに無店舗販売、ニューメディアを扱う。	同上

＝ 経 営 組 織 論 ＝ （ R ）

〔主任講師：森本三男（青山学院大学教授）〕

全体のねらい

経営組織の構造と行動に関する諸問題を理解してもらうよう努める。全体の前半部分は主として理論的命題の説明に充当し、後半部分は主として実践的課題の分析に向けている。現代が組織社会であることに留意することとともに、組織が変動する環境に主体的に適応する動態的システムであることを重視する。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	経営組織の意義	1.個人と協働 2.協働システムと組織 3.経営と経営組織 4.経営組織の３要素 5.３要素と組織の諸問題領域 6.組織の環境適応	森本三男 （青山学院大学教授）
2	経営組織論の発展と系譜	1.理論展開の潮流 2.各種の組織理論(1)－古典的組織論 3.各種の組織理論(2)－人間関係論 4.各種の組織理論(3)－現代組織論 5.各種組織論の分類	同上
3	経営組織の構造(1) 設計原理	1.組織構造の意義と次元 2.組織原則(1)－課業分担の設計原理 3.組織原則(2)－伝達システムの設計原理 4.組織原則に対する批判 5.組織原則から組織戦略へ	同上
4	経営組織の構造(2) 組織形態	1.組織単位と組織形態 2.経営組織におけるラインとスタッフ 3.組織形態の発展的分類 4.各種組織形態の特質 5.現実の組織形態	同上
5	経営組織の行動(1) 意思決定	1.組織行動の意義と問題性 2.意思決定の過程・前提・合理性 3.意思決定の性格と意思決定技術 4.規範的意思決定技術 5.組織影響力と権限	同上
6	経営組織の行動(2) 組織活性化	1.組織活性化の意義 2.リーダーシップ 3.動機づけ 4.葛藤とその解消	同上
7	経営組織の有効性	1.組織有効性の意義と展開 2.組織有効性の目標モデル 3.組織有効性のシステム・モデル 4.組織有効性と組織開発 5.日本における組織開発 6.組織開発から創造性開発へ	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	経営組織の成長	1.組織の成長の意義 2.組織成長の規模的接近 3.組織成長と組織学習 4.組織成長の細胞分裂モデル 5.組織成長の構造均衡モデル(1) 6.組織成長の構造均衡モデル(2) 7.組織成長の変容モデル 8.組織成長の鬼火モデル	森本三男
9	経営の組織戦略	1.経営組織と戦略 2.経営戦略と組織構造 3.経営戦略(1)－技術と組織構造 4.経営戦略(2)－規模と組織構造 5.組織間関係戦略 6.統合化戦略	同上
10	組織の環境適応	1.環境変化と組織の課題 2.情報プロセッシング・アプローチと組織戦略 3.ＯＡと経営組織 4.組織構成員の多様化と統合の維持 5.キャリア開発	同上
11	経営組織の中枢機能	1.組織の中枢機能 2.経営者組織としての取締役会 3.経営執行委員会（米）と常務会（日） 4.本社の機能と組織 5.本社組織の新しい動向	同上
12	経営組織の動態化	1.組織動態化の意義 2.組織の簡素化－課制廃止 3.組織の弾力化－プロジェクト組織 4.組織の多元化－マトリックス組織	同上
13	経営組織の人間化	1.組織の非人間化現象 2.職務設計の人間化(1)－職務拡大 3.職務設計の人間化(2)－職務充実 4.小集団活動 5.意思決定参加	同上
14	経営組織の国際比較	1.国際比較の意義と方法 2.定性的差異分析による国際比較 3.主観的測定手段による国際比較 4.客観的測定手段による国際比較 5.普遍理論の命題による国際比較 6.総合的国際比較	同上
15	経営組織の国際化	1.経営の国際化と組織問題 2.国際化による組織構造変容の普遍モデル 3.日本企業の国際化と普遍モデル 4.グローバル構造と経営戦略 5.日本的経営の海外移植	同上

＝管理経済学＝（R）

〔主任講師：黒澤一清（放送大学教授）〕

全体のねらい

企業経営管理の基本問題を経済学の立場から考察する。経済学一般におけるマイクロ・エコノミクスそのものよりも、よりいっそう具体的な経営問題の上で、管理科学的に徹底したい。計量的・システム的、かつ応用的である点にも特徴をもつ。なお本講義は「経済学入門」及び「現代の経済学」（嘉治元郎教授担当）を前提にしている。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	対象と方法	現代社会における対象の位置／類似の・関連する学問領域／経営と管理／企業の経営・管理活動の構造／管理経済学の方法／管理経済学のフィールドとしての管理のフェイズ／本講義の鳥瞰	黒澤一清（放送大学教授）
2	生産の分析	生産関数／可変要素が1つであるケース／総生産量と限界生産量の関係／平均と限界の関係／生産の弾力性／単一可変投入の場合の最適投入準則／可変投入要素に対する需要関数としてのMRP／複数の可変投入要素の生産関数／要素－要素関係、等量曲線／技術的な限界代替率／等量曲線の形／等量曲線の経済的領域／生産均衡：複数投入要素の最適組み合わせ／複数の可変的投入要素の場合の利潤最大化／生産の拡大と規模効果／規模効果	Seo, K. K（ハワイ大学教授）
3	費用の分析	1)費用の性質／コストの性質／適切なコストの概念／会計コストと機会コスト／増分コストと意志決定 2)コストの理論／固定費と変動費／短期と長期とのコスト／総コストと限界コスト／平均コスト・限界コスト／コストと生産の諸関係／総コストの弾力性／短期コスト関数の特性／3次のコスト関数 3)長期のコスト挙動	同上
4	意志決定の分析 その1	1)意志決定環境／確実性の概念／危険性の概念／不確実性の概念 2)確実性下での意志決定：最適化分析／限界分析／増分利潤分析／1つの例 3)リスクと不確実性のもとでの意志決定／意志決定マトリクス／リスクのもとでの意志決定／経験的方法／期待値／リスクの尺度範囲と標準偏差／相対的危険性測定：変動係数／危険－収益のトレード・オフ	同上
5	意志決定の分析 その2	1)効用・危険回避およびリスクプレミアム／効用と意志決定／危険および限界効用逓減／リスク・プレミアム／リスクの調整／リスク調整割引率／確実性等価法／確実性等価法とリスク調整割引率法の比較 2)不確実性下での意志決定－不確実性の程度／ワルドの基準／ハーウィッチの基準／サヴェジの決定基準／ラプラスの決定基準／簡単な結び	同上
6	需要と分析と予測	1)需要関数と需要の弾力性／需要関数／需要量と需要の変化／需要関数の性質／需要の弾力性／需要の価格弾力性／点弾力性／弧弾力性／需要・収入および価格弾力性／総収入と価格弾力性、限界収入と価格弾力性	同上
7	利益と値付け その1	1)利益の計画と統制－損益分岐点分析／直線の損益分岐点分析／貢献利益／代数的テクニーク／利益計画／損益分岐点の代替案／利益の販売弾力性：経営レバレッジ	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	利益と値付け その2	1)値付け問題と決定 値付けの目的／投資利益の達成と値付け 2)値付けの諸方法 コストープラス・プライシング／プラス・イン・コストプラス／コストーコストと利潤最大化／コストープラス・プライシングと価格弾力性／コストープラス・プライシングの評価	Seo, K. K
9	付加価値を基礎とする企業経営 その1	経営パートナー・シップと企業経営生産性 企業付加価値の意義と限界／企業経営パートナー・シップ／外延的発展と内包的発展／付加価値と収益性／付加価値タームの生産性の構造／付加価値生産性の変動効果／付加価値の変動分析	黒澤一清
10	付加価値を基礎とする企業経営 その2	付加価値率と総コストの生産性および収益性 1)付加価値率の構造と挙動／付加価値率の構造／付加価値率の趨勢／付加価値率の超長期趨勢 2)付加価値の総コスト生産性と収益性／付加価値総生産性と収益性／付加価値総生産性の二重性 3)付加価値を基礎とする企業経営：その3－企業多目的・満足基準／企業目標指標の解析的吟味の前提／付加価値生産性関数とそれの内部構造の解析的表現	同上
11	ホワイトカラーとりわけ知識集約型スタッフの企業成果への貢献度分析 その1	本社活動の工場パフォーマンスへの貢献度分析 1)知識集約型スタッフ管理の組織的基礎／ＫＩＳ対N－ＫＩＳ 2)本社活動の工場生産性への貢献度分析－一般的枠組み／事例研究／スキームの限界と展開の方向	同上
12	企業パフォーマンスへの知識集約型スタッフの貢献度分析	挑戦／記号の定義と意味／付加価値労働生産性ベースの体系／付加価値総コスト生産性ベースの体系／本社の寄与、本社の責任／生産性と収益性／事例研究／限界と意義	同上
13	ホワイトカラー生産性の日・米比較	1)ＬＡＰイン・ホワイトカラー 2)日・米工業のホワイトカラー／ＫＩＳ労働生産性 3)労働原単位－ＫＩＳの省力効果	阿部克己 （九州東海大学助教授）
14	国際競争力の評価 その1	1)生産性国際比較の方法 2)労働生産性の国際比較	同上
15	国際競争力の評価 その2	1)日・米工業国際競争力の性格／国際競争力の意味・内容 2)日・米工業の総生産性－収益性の関係とその分析／ＡＩＰＲシステムによる分析／絶対値による分析体系／計算実例と解釈／グラフ的表現／相対値体系の分析結果／絶対値体系の分析結果／為替レートと購買力平価の変化効果 3)ＡＩＰＲサブシステムによる分析／総生産性、労働生産性と賃金関係の統合と名目・実質タームの分割／分析結果の解釈／日本の国際競争力	同上

＝生　産　管　理＝（TV）

〔主任講師：秋庭雅夫（東京工業大学教授）
主任講師：横山雅夫（福島大学助教授）〕

全体のねらい

生産に当たって、市場の要求に適合する製品の産出、材料・動力・設備などの効果的な活用、作業者の人間性尊重などの課題に応え、また自動化にも対応できるように、生産とその管理活動の体系を適切に計画し運用していく考え方、技法を説く。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	生産管理の体系	生産とは何か。基本的な生産の見方である過程（資材調達、工程稼働、製品産出）、特性（品質、数量、時間、金額）、段階（企画、設計、計画、作業、統制）の各概念を説明し、それらを組み合わせて体系的に生産活動をとらえ管理していく考え方と仕組みを示す。	秋庭雅夫（東京工業大学教授） 横山雅夫（福島大学助教授）
2	生産方式	生産活動の体系に基づいて各種の生産方式を区分する考え方を示し、それぞれの生産方式について管理上の特徴を説く。さらに、これから生産方式がどのように移り変わっていくのか、その趨勢と現在の課題を示す。	秋庭雅夫
3	製品企画と品質管理	市場の品質に対する要求を技術的、統計的に分析し、製品に何が期待されているのかを導き出す製品企画の方式とその結果を示す。さらに、そのような品質の製品をどのように造り出していくのか、品質管理の基本と管理図法および抜取検査の考え方、手法を示す。	同上
4	工程分析	工程図記号と、それに基づく各種工程図（工程計画図、工程分析図）の作り方を説明し、これを生産工程の分析、設計、改善にどのように活用するのか、その方法を示す。	同上
5	作業管理	適切な作業方法を設計するための動作分析および作業分析など方法技術と動作経済の原則、標準作業時間を設定するための既定時間法および標準資料法など作業測定、それらに関連して複式活動分析の考え方と活用の仕方を示す。	秋庭雅夫 木村敏郎（IE・生産管理事務所長）
6	生産計画	生産計画における意思決定問題について線形計画法によるモデル化を取り上げ、具体的解法として図式解法およびシンプレックス法の仕組みと解の求め方について示す。	横山雅夫
7	日程計画1（ジョブ・ショップ・タイプ）	複数の仕事をいくつかの機械で処理するときの日程計画のたて方について説明する。そのさいに用いられるガント・チャートにより日程問題の意味を説明し、またジョンソンおよびペトロフの解法を示す。	秋庭雅夫 横山雅夫

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	日程計画2（プロジェクト・タイプ）	プロジェクトに含まれる仕事の順序関係が与えられたときに進度管理を行う手法としてPERT・CPMを取り上げ、アロー・ダイヤグラム、日程計算、クリティカル・パス、人員配置、3点見積り、時間短縮に関する方法とその意味を説明する。	秋庭雅夫 横山雅夫
9	ライン・バランシング	流れ作業において、作業負荷を平準化、効率化するためのライン・バランシングの基本について説く。また、ライン編成効率、山崩しの考え方とともに、列挙消去法および位置重みづけ法による解き方を示す。	秋庭雅夫
10	設備能力の決定	設置された設備能力と到着した仕事の状況から、その処理と待ちとの関係をモデル化し、その一般化を図る。さらに設置能力の水準が仕事の待ちに与える影響をモンテカルロ・シミュレーションによって分析する方法を示す。	同上
11	資材調達	資材調達に関する各種発注方式および経済的発注数量の考え方と決め方について示し、それと関連して、在庫されている理由を体系的に明らかにして在庫ゼロ方式への取り組み方を説く。また、外注とその目的について考える。	同上
12	多段階の生産・流通計画	生産、流通を多段階からなる品物の流れとしてとらえると、小売店での需要があるからこそ生産が必要になってくるというように、各段階での品物の流れは互いに従属している。生産・流通計画を効率的に行うためには、その従属性に着目した概念が不可欠であり、それに基づく計画方式・環境条件について説く。	圓川隆夫 （東京工業大学教授）
13	コンピュータ労働科学	コンピュータを利用して行う作業に対する問題点、要因およびマン－マシン・システム実現の方法を説明する。さらに、このようなコンピュータ作業を設計・管理するための方法として、コンピュータ労働科学の活用の仕方を示す。	伊藤謙治 （東京工業大学助手）
14	生産合理化	生産合理化の総合目標を設定し、その目標を生産各部門に重点的に展開して具体的な個別目標を決め、そのための施策を生産活動全般にわたって求め、生産性を体系的に向上させていく取り組み方を示す。	秋庭雅夫
15	生産自動化	生産自動化の傾向と、トランスファ方式および群管理方式における自動化への取り組み方ならびに自動化機器とその活用について示す。さらに自動化の経営に与える影響とそこでの問題点について説く。	秋庭雅夫 下地脩亮 （㈱未廣技研）

＝ 財 務 管 理 ＝（R）

〔主任講師：村松司叙（成 蹊 大 学 教 授）〕
〔主任講師：古川浩一（東京工業大学助教授）〕

全体のねらい

経営学の一分科目である財務管理を、企業資本の流れの研究と位置づけ、前半章では、主として資本市場と企業との間の資金調達問題を扱う。他方、企業内部での投資・資金管理・利益処分など内部マネジメント問題を後半章で取り扱う。ポイントとしては、財務の新しい手法もできるだけ取り入れた財務管理の内容とすることにある。

回	テ ー マ	内 容	担 当 講 師（所属・氏名）
1	財務管理の意義と課題	財務管理の意義　リスクと不確実性 財務管理論の成立 新しい財務管理論 資本の流れ 時間の経済的価値とリスク 時間の経済価値	村 松 司 叙 （成蹊大学教授）
2	リターンとリスク	資金の流れに影響する要因 投 資 リターンとリスクの関係 リスク回避の方法	古 川 浩 一 （東京工業大学助教授）
3	企業の資金源泉	企業をめぐる資金の流れ 直接金融と間接金融 内部金融と外部金融 運転資本と設備資本 資金源泉とリスクの負担	同 上
4	市場における株式会社の評価	資本コスト 自己資本企業のコスト 負債企業の利益 モジリアニ・ミラーの命題 MM命題と裁定取引 MM命題の意義	同 上
5	投資家の資産選択 (1) ポートフォリオ選択の理論	資産選択問題の基本的性質　数値例 ポートフォリオとは　効率的フロンティア 投資家についての仮定 資本市場に関する仮定 証券のリターンとリスク 2証券からなるポートフォリオ	同 上
6	投資家の資産選択 (2) 資本資産評価モデル	安全資産の存在と効率的フロンティア 市場ポートフォリオ 資本市場線 資本資産評価モデル 裁定取引理論（APT）	同 上
7	投資家の資産選択 (3) オプション評価モデル	オプションとは オプションの概要 オプションの損益 オプション評価の基本的考え方 ブラック・ショールズのオプション評価モデル オプションの役割	同 上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	内部化された資金の物的資産への投資の経済的評価	物的資産への投資の経済的評価の役割 設備投資の経済的評価とキャッシュ・フロー 経済性評価の考え方 現在価値法 内部収益率法 回収期間法　　会計的利益率法	古川浩一
9	企業内部の価値的管理の役割	企業内部の財務マネジメント問題 財務流動性 財務安全性 収益性 回転率 財務計画と財務統制	村松司叙
10	資金管理	運転資金の意義　　売上・買掛債務管理 資金の流れ 現金管理 資金繰り表 財テク 在庫管理	同上
11	予算管理	予算管理の意義　　経営計画と予算 予算の編成 予算体系 予算のコントロール機能 予算差異分析の方法 差異の原因追求とフィードバック	同上
12	期間計画の価値的側面	利益計画の意義　　資本運用表分析 損益分岐点分析 損益分岐点の図表による求め方 損益分岐点の公式による算出 損益分岐点分析の限界 資本回収点分析	同上
13	製品と事業の選択と資金フロー	経営戦略の分析 ＰＰＭの考え方 ＰＰＭと現金の流出入パターン ＰＰＭの戦略的意義とその限界	同上
14	M&Aと企業評価	企業成長戦略とM&A M&Aの動機と米国における最近の動向 ＬＢＯの財務テクニックと負債増加 ＬＢＯと企業評価	同上
15	財務活動の国際化と財務戦略	国際化と為替リスク 外国為替取引のメカニズム 為替レートの機能と決定要因 為替レート変動と国際企業の財務マネジャー 為替変動リスクの回避策	同上

＝財　務　会　計＝（TV）

〔主任講師：若杉　明（横浜国立大学教授）〕

全体のねらい

企業の実施する会計は財務会計、管理会計および税務会計から成る。財務会計は、企業が株主や債権者などの利害関係者に、受託責任等に基づいて、その経済的意思決定に役立つよう、必要な会計情報を測定・伝達する領域である。この財務会計の社会的意義、仕組み、原理などにつき、基礎にある考え方にふれながら述べてゆく。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	企業会計と会計学	企業の情報測定・伝達システムである企業会計がどのような性格を有し、社会的役割を果たしているかについて述べ、さらに企業会計の学である会計学の体系を明らかにして、そこにおける財務会計の位置づけを行う。	若杉　明（横浜国立大学教授）
2	企業内容開示制度	財務会計は企業内容の開示制度にほかならない。そこで開示制度を構成する商法会計および証券取引法会計に関し、その基礎原理、目的、理論的性格などについて述べる。	同　上
3	企業会計の働き	企業会計が社会的制度として存在意義をもつのは、これが種々の職能を果たしうるからである。そこで会計のもつ、測定、伝達、財産保全、計画設定、業績評価、社会的統制等の各種の職能について取扱う。	同　上
4	一般に認められた会計原則	財務会計は、法令に基づいて行われる制度会計を中核とする。制度会計において法令に定めのない部分は一般に認められた会計基準に準拠することになっている。そこでこの会計基準の性格、役割り、具体的内容等について明らかにする。	同　上
5	財　務　諸　表	財務会計において、企業の財務内容の開示は財務諸表、すなわち貸借対照表、損益計算書などによって行われる。財務諸表の性格、役割り、体系、限界などについて取扱う。	同　上
6	収益力の測定と損益計算書	企業の財務報告の内容は多様であり、その1つの柱として企業の収益力の表示がある。企業の収益力は各種の利益数値によって表される。損益計算書は企業利益の算定表示を役う財務表であり、そこでこの計算表の性格構造、構成等に言及する。	同　上
7	期間損益計算の構造と諸原則	損益計算書において行われる利益の計算表示は、一定の理論に基づく計算構造と計算原理に基礎づけられている。そこで利益計算構造の特質と計算原理について述べ、またこれらの原理の相互関連にふれる。	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	財政状態の測定と貸借対照表	企業の財務報告の柱の1つとしての企業の財政状態の測定・伝達に言及する。そしてそのための財務表である貸借対照表の性格、構造、構成等について明らかにする。	若杉　明
9	資産の貸借対照表価額の算定	貸借対照表に記載される資産は、一定の評価原則に基づいて、会計数値として表される。そこで資産の評価の基本原則について述べ、さらに個々の資産ごとの評価方式に関する商法や会計基準の規定を解説する。	同上
10	減価償却	固定資産は、時の経過、経営目的のための使用等によってその価値を次第に減少してゆく。そこで固定資産の取得原価は減価償却の方法によって、一定の会計期間に配分される。この減価償却の特質、具体的方法、これのもたらす効果等について述べる。	同上
11	繰延経理	会社の創立費、開業費、研究開発費などの諸支出で相当額にのぼるものは、これをすべて当期の費用に計上すると、当期の収益力の表示がゆがめられることがある。そこでこのような場合にこの支出を資産化して、数期間に費用配分する方法が選択適用される。	同上
12	引当経理	将来の期において実現する費用や損失などで、その原因がそれ以前の期に生じているものについては、関連する期に見越計上される。このような引当経理とよばれる会計処理法の性格、目的、効果等に言及する。	同上
13	資本金と資本剰余金	企業の元手たる資本が調達されたり、他の形態に転換される場合の会計処理法、貸借対照表における表示法などについて明らかにする。具体的には資本金と資本剰余金をめぐる会計上の諸問題について取扱う。	同上
14	利益処分	企業の獲得した利益は、法人税等の支払い、配当金、役員賞与などとして企業外に流出するが一部は社内に留保されて、将来の資金的必要に備えられる。そこで利益処分とこれに関する会計処理に言及する。	同上
15	財務諸表の見方	今日の企業は個々に独立の会社がグループを形成して一体となって経営活動を展開する。かかる企業グループの財務報告のための連結財務諸表制度につき、その特質、計算原理、開示方法などについて述べる。	同上

＝数理計画法＝（TV）

〔主任講師：加瀬滋男（放送大学教授）
主任講師：横山雅夫（福島大学助教授）〕

全体のねらい

数理計画法と総称されている多くの技法のうち、特に線形計画法（LP）について講述する。具体的には、その根源的な計算手法を解説するとともに、応用例も数多くとりあげＬＰの有効性を認識させる。あわせてＯＲや経営科学における基礎的知識の習得にも寄与しようとするものである。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	数理計画法概説	計画問題における数理的アプローチの内容を述べるとともに数理計画法の全般を概説する。	加瀬滋男（放送大学教授）
2	ＬＰの具体例	若干の解説的な問題と、それらのモデルを例示し、ＬＰ応用の可能性の大きさを説く。	横山雅夫（福島大学助教授）
3	ＬＰの構造	ＬＰの各種形式を列挙し、さらに平易な図解によりＬＰの構造に対する十分な理解を誘導する。	同上
4	シンプレクス法〔1〕	シンプレクス法の核心を成すシンプレクス表の意味と作成につき基礎的概念を略記する。	同上
5	シンプレクス法〔2〕	シンプレクス法における計算の意義と実際を詳述し、シンプレクス法の理解を助ける。	同上
6	各種の特殊解法	簡易シンプレクス法などについて略説し、場合における解法の実際を呈示する。	同上
7	2段階シンプレクス法	ＬＰの応用可能範囲を広げるための２段階法の根拠と手法を説き、ＬＰの妙味を紹介する。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	応用例	ＬＰを効果的に活用している数社の実態を紹介し、ＬＰに対する理解を深める。	横山雅夫 高井英造 （三菱石油㈱ 企画二部次長） 加瀬滋男
9	実施上の検討〔1〕	現実の問題に最適解を適用するに際し、留意すべき若干の事項を論ずる。	加瀬滋男
10	実施上の検討〔2〕	最適解そのものを再検討する方法を考察し、あわせてシャドウプライスを解明する。	同上
11	モデルの改変	問題自体のかなり大幅な変転に即応するための便法を理論的な立場から探求する。	同上
12	双対問題と整数解問題	双対性を介して最大化問題と最小化問題の関連を説き、計画法にも言及する。	同上
13	特殊問題の解法	割当問題を含む輸送問題の解法を述べ、あわせてネットワーク問題の概要にふれる。	同上
14	企業における数理計画法の実際	石油精製問題における検討料により、シャドウプライスの有用性を立証する。	高井英造
15	総括	補遺的事項ならびに数理計画法の未来像等につき、各講師がそれぞれの意見を開陳する。	加瀬滋男 横山雅夫 高井英造

＝産　業　と　情　報＝(R)

〔主任講師：加瀬滋男（放送大学教授）〕

全体のねらい

近時企業環境の複雑化に伴い、経営に関する情報の重要性は、以前にも増して広く認識されるようになった。他面、情報の処理や伝達の技術も、文字どおり日進月歩の様相を呈しつつある。この時流に沿い、企業内外の技術情報を中心に産業と情報の関連を論述する。また随時、一般産業人の情報に対する望ましい心構えにもふれる。

回	テ　ー　マ	内　容	担当講師（所属・氏名）
1	情報概論(1) ー情報とは何かー	情報一般、ビジネス情報についての若干の特徴を述べ、本講義を進める上でのイメージとコンセンサスの確立を試みる。	加瀬滋男 （放送大学教授）
2	情報概論(2) ー情報活用ー	情報の探索と収集の具体的方法、収集から活用を経て、保管・管理に至るまでの実際的手法を解説する。	同　上
3	情報の収集(1) ー技術情報の種類ー	技術情報の種類を、形式・生産場所・加工度から分類し、1次情報の種類と特徴に関しては、特に詳しく講述する。	同　上
4	情報の収集(2) ー情報調査ー	情報調査の要点を論ずるほか、2次・3次情報の活用法を示唆する。主な総合情報機関や各種の文献・資料も紹介する。	同　上
5	情報の収集(3) ー情報検索ー	情報検索の発展過程と内実につき説き、次に情報検索に関連してデータベースの基礎的事項を略説する。	同　上
6	情報の創出(1) ー情報産出の意義ー	情報の研究・開発に対する個人や企業の責任の重要性を強調し、研究者や技術者も情報流通活動に積極的参加を促す。	同　上
7	情報の創出(2) ー新情報の産出例ー	最近新素材として脚光を浴びているファインセラミックスの重要特性である曲げ強さデータの解析を例に、新情報の創出を解説する。	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	情報の創出(3) －関連情報への 展開－	前章で提起された新しい情報から、関連情報の産出へと展開されて行った事例を呈示する。	加瀬滋男
9	オフィスオートメーション(1) －ＯＡの内容と その影響－	ＯＡの目的・対象・手段について述べ、OAの目ざすところを明らかにする。日米のＯＡの相違およびＯＡの影響にも話を進める。	魚田勝臣 （専修大学教授）
10	オフィスオートメーション(2) －ＯＡ機器の 活用－	ＯＡ機器の主なものを概説し、通信手段・通信規約の標準化にもふれる。また、ＯＡへのアプローチの方法について解説する。	同　上
11	オフィスオートメーション(3) －ＯＡの近未来 像－	ＯＡ機器の変化の傾向について論じ、さらなる飛躍のために基礎的な研究の確立と日本独自のＯＡの展開の必要性を強調する。	同　上
12	情報の伝達(1) －データ通信－	各種データ通信サービスの要点を概説し、電気通信事業法を解説してから、最近とみに叫ばれてきたＶＡＮ（付加価値通信網）にも言及する。	加瀬滋男
13	情報の伝達(2) －行政面における 電気通信の長期 構想－	電気通信システムに関する国（郵政省）の構想を要約し、あわせて情報通信産業の充実・強化についての電気通信審議会による答申の概要を解説する。	同　上
14	情報産業(1) －産業人と 情報産業－	産業人が情報産業を理解することの意義を強調してから、情報処理技術者試験を例示して読者の情報へ向けての関心を高め意欲を鼓舞する。	同　上
15	情報産業(2) －産業の情報化と 情報の産業化－	総合商社の新情報商社への転針を例に新情報産業の胎動を瞥見するほか、諸産業の情報部門にふさわしい人材の育成にも論及し、本講義の趣旨を総括する。	同　上

＝産業と企業＝（R）

〔主任講師：黒澤一清（放送大学教授）〕

全体のねらい

マクロな水準で認識される産業の仕組みの形成と発展と、マイクロな水準の行動主体である企業の活動との相互作用関係域をユニークな対象として考察する。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	産業－企業系の諸問題への接近方法	産業－企業系が多元・重層構造をもった実体であることを述べ、これを把握するための本講義での方法を概観する。	黒澤一清（放送大学教授）
2	国民経済－産業系の計量システム(1)…一般的フレーム・ワーク	表記システムの一般的フレーム・ワークを論じ、次章への序説とする。	同上
3	国民経済－産業系の計量システム(2)…ＣＩＬＩＮシステム	ＣＩＬＩＮシステムと名づけられる国民経済－産業系の計量システムの一般的フレーム・ワークを示す。	同上
4	国民経済－産業系の計量システム(3)…ＣＩＬＩＮシステムの国際経済比較への適用のための準備	ＣＩＬＩＮシステムの国際経済比較への適用を準備する。	同上
5	国民経済－産業系の計量システム(4)…ＰＣＩ－ＮＰシステムによる日本経済を中心としてみた国際比較	国民経済生産性と国民経済福祉を連結するＰＣＩ－ＮＰシステムによる日本経済を中心とした国際比較を試みる。	同上
6	国民経済－産業系の計量システム(5)…ＮＡＰ－ＨＩＳシステムによる日本経済を中心としてみた国際比較	国民経済生産性とそれを構成する諸産業の生産性の動向とを連結したＮＡＰ－ＨＩＳシステムによる日本経済を中心としてみた国際比較を試みる。	同上
7	付加価値生産性(1)…マクロとミクロを媒介するカテゴリー	社会経済水準と産業及び企業の水準における価値生産性を媒介するカテゴリーとしての付加価値の構成を論じる。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	付加価値生産性(2) …マクロとミクロを媒介するカテゴリー	前章に続く。	黒澤一清
9	付加価値生産性(3) …付加価値労働生産性格差形成法則	産業間、企業間に現われる労働の付加価値生産性格差を形成する基本法則を規定する。	同上
10	日本製造業の拡張主義 (1) …その一般的背景と展開	第5及び第6章にひき続いて、それのより内容的問題としての日本製造業の発達過程に形成された拡張主義とその働き・役割及び今日の問題を論じる。	同上
11	日本製造業の拡張主義 (2) …第2次大戦後の構造と挙動	前章にひき続く議論であるが、さらに大企業－中小企業系の日・米比較生産性分析を行う。	同上
12	産業－企業系の総生産性－収益性の関係とその分析(1) …ＡＩＰＲシステム	産業レベルの経済成果と企業の主体性を表現する経済成果とを統合・連結した成果分析体系としてのＡＩＰＲシステムを論じる。	同上
13	産業－企業系の総生産性－収益性の関係とその分析(2)	ＡＩＰＲシステムによる日・米間の製造業及び自動車工業の比較分析を行う。	同上
14	産業－企業系におけるホワイトカラー生産性の計測	ホワイトカラー生産性を労働生産性、ホワイトカラー比率との関連で分析的に把握するシステムとその応用を考える。	同上
15	プロダクティヴィティ・スキームと産業－企業系	生産性向上のための政策と運動の体系の形成とその構造を論じる。	同上

＝産業と環境・資源＝（TV）

〔主任講師：黒澤一清（放送大学教授）〕

全体のねらい

産業と環境の関係を、産業をめぐる物的・技術的関係ばかりでなく、また社会的・文化的関係をも含む、より一般化された構造的視野で扱う。こうすることによって、今日見られる産業資源問題、あるいは産業環境問題の、一方ではそれの根源への科学的研究を全面的に進める見通しが与えられるばかりでなく、他方ではこれらの問題の解決への洞察をも与えることが可能になる。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	産業 ― 環境・資源系問題研究へのヴィジョン	1.産業－環境・資源系問題の時代相年表　認識論上の狙い、時代相年表の設計　2.時代相の構造化　時代位相の要約的表現：第Ⅰ期、時代位相の要約的表現：第Ⅱ期	黒澤一清（放送大学教授）
2	産業 ― 環境・資源系の学問的特徴	1.複合領域科学　現象の複雑さの意味、ユニークな境界領域科学、具体化的・総合化的方法と意味の形成・把握　2.統合者としての生産性科学・産業学　複合領域科学の統合者、生産性科学と産業学	同上
3	産業 ― 環境・資源系の基礎構造	1.構造的認識　構造、構造の動態、構造の重層性と歴史性、最も発達した構造の意味、後進国の急速な近代化がもたらす構造の複雑さ	同上
4	産業 ― 環境・資源系の構造：産業社会のメタ構造	1.産業社会のメタ構造と産業構造　人間－自然系と人間－人間系の交差構造、より発達した構造、産業社会メタ構造の一般性　2.産業－環境・資源系のメタ水準での構造　資源と環境の構造：自然と人間、文化資激と意味論的環境、経営資源、産業－環境・資源系のアンサンブル	同上
5	産業 ― 環境・資源系の基礎構造：M－N系の構造	1.M－N系の4つの相の概観　2.S－s－f系の構造　人間生態系：M－S－N、科学・工学系：M－s－N、生産技術系：M－f－N系　3.M－N系における環境・資源　自然科学系、工学系及び生産技術系の関係、環境と資源、保全と技術進行　4.生産力の構造　生産力系：M－F－N、M－N系認識の歴史性と生産性原理	同上
6	産業 ― 環境・資源系の基礎構造：M－M系とトータル・システム	1.M－M系の構造　価値体系：M－S－M、秩序体系：M－s－M、行政と管理の系：M－f－M及び産業経済関係：M－F－M、M－M系の原理としての人間性原理　2.情報系と管理系、それらの構造　情報系と人間生産性原理、情報系の構造、管理系の構造、人間生産性原理、生産性美学の原理　3.全体構造　S－Fスキームによる表現　4.環境・資源問題の背後構造　人間社会・経済の再生産構造の限界、構造化の主体性	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
7	産業 ― 環境系における評価の基本問題	1.巨視的評価指標　GNP、GDP指標の意義と限界　国民生活指標、その意義と限界　2.セミマクローマイクロ評価指標　社会的費用の内部化　意義と限界　3.環境アセスメント　環境影響評価のフレーム・ワーク　環境影響評価の手続き	黒澤一清
8	産業 ― 地域社会 ― 企業系における環境問題の構造：その一般性	1.地域社会の複合体の適正な設計　地域社会の構成　人間生体－技術系と地域社会　2.産業・企業－社会環境系の物的基礎　3.環境利用の適正化の考え方　4.地域社会のソーシアル・システム	同上
9	産業 ― 地域社会 ― 企業系における環境問題の構造：その一典型例	1.新しい問題の提起とその時代背景　2.いわゆる横浜方式の形成と確立　第1期：工業化と生活環境悪化の対立：1955～1963　第2期：住民運動－自治体系の形成：1964～　横浜方式の性格　3.日本鋼管京浜製鉄所扇島建設設計画をめぐる横浜方式の実践　背景　横浜方式の広域環境問題への拡張　扇島問題の教訓	同上
10	原子力発電をめぐる討論より	1.背景　2.原子力発電の意義についての討議　3.問題の背後の構造	同上
11	人間 ― 海洋系における産業 ― 環境・資源問題と管理	1.議論の一般的背景と基礎　テーマの背景　資源の構造性　2.漁業資源の特徴と漁業生産力の構造　資源の特性による分類　漁業生産力の構造　自然資源の生産力　自然資源の生産力、労働手段の生産力、技術水準　再生資源のポテンシャル	同上
12	漁業における資源管理の基本問題	1.生産関数の背後の構造：収穫逓減傾向の根拠　漁業生産関数の特徴　収穫逓減傾向のパターンと根拠　2.漁業における資源管理基準と資源乱獲　MSY基準　密度依存型自律再生資源におけるMSY　公開資源の競争的利用　収穫逓減則再説　資源－漁業管理の原則	同上
13	漁業 ― 資源系管理のモデルと実践	1.漁業の生物－経済管理モデル　モデルの一般的枠組み　政策の仕組み　2.ひとつの実例：マグロ延縄漁業　システム・ダイナミクスモデル　資源サブシステム　3.シミュレーションの結果　漁業経済セクターの挙動　資源セクターシステムの挙動　4.結び	同上
14	人間 ― 産業 ― 自然　コンプレックスのシステム・シミュレーション	1.社会的・経済的システムについての実験　2.瀬戸内海シミュレーション・モデル　3.瀬戸内海シミュレーション・モデルの構造　4.実験　5.結び	同上
15	産業 ― 環境・資源系研究への期待	1.環境問題の背景となっている構造と環境問題解決への基本方針　2.国際産業－地球系の再編成　3.環境問題のイコン	同上

＝交通と通信＝（ＴＶ）

〔主任講師：岡野行秀（創価大学教授）〕

全体のねらい

現代の社会にとって、交通と通信のネットワークは欠くことのできない社会的インフラストラクチャーである。交通と通信は、今日の経済・社会の活動においてどのような役割を果たしているか、交通・通信サービスはどのように供給されているのか、近年、規制緩和、競争促進政策がとられているのは何故か等を考える。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	交通と通信の役割	1.交通と通信の意義 2.交通と通信の関係 3.経済活動と交通・通信	岡野行秀 （創価大学教授）
2	交通の発達と影響	1.地域開発における交通の役割 2.交通の改善の影響 3.交通条件と地価（地代）	同上
3	交通（サービス）の需要	1.空間的移動の需要 2.派生需要とその性質 3.交通（サービス）の需要に影響を与える要因 4.交通（サービス）の需要の変動	同上
4	交通（サービス）の供給	1.２つの特性　－交通（サービス）の質と費用構造 2.トリップの費用 3.交通サービスの費用構造 4.各交通手段の費用構造 5.混雑の費用	同上
5	運賃・料金の決定	1.運賃・料金の資源配分機能 2.運賃・料金の規制 3.運賃形態 4.運賃・料金規制の問題点 5.道路の費用負担	同上
6	交通市場の変化	1.輸送構造の変化 2.貨物輸送 3.人の輸送 4.交通市場の変化　－競争市場へ	同上
7	交通政策	1.交通政策の目的と枠組み 2.交通政策の評価　－市場介入への疑問 3.市場介入から競争促進へ	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	今日の交通問題	1.鉄道の再編成　－国鉄の分割・民営化 2.規制緩和 3.都市交通 4.人口稀薄地域の交通 5.外部不経済と混雑の問題 6.展　望	岡野行秀
9	通信ネットワーク	1.電気通信の役割 2.テレコム・ネットワーク 3.テレコム・サービスの種類 4.社会へのインパクト 5.テレコムの政策課題	南部鶴彦 （学習院大学教授）
10	通信の需要	1.市場と取引の形態 2.電話需要の形態 3.電話需要の今後	同上
11	通信サービスの供給	1.テレコム・ネットワークの３要素について 2.ネットワークの形状について 3.ネットワークと規模の経済性について 4.テレコム・ネットワークの特異性について 5.テレコム市場での競争	同上
12	通信における競争と規制	1.市場メカニズムと競争 2.規模の経済性と供給 3.ネットワーク型消費と需要 4.固定費用と平均費用 5.独占と規制	同上
13	通信の規制制度	1.供給の形態 2.規制の特色 3.内部相互補助の問題	同上
14	海外の通信事業	1.各国の特色 2.アメリカ 3.イギリス 4.フランス	同上
15	通信の将来と通信政策	1.国際電気通信の特色 2.国際通信のネットワーク 3.国際通信料金 4.国際機関 5.通信の将来と政策課題	同上

＝流　通　と　商　業＝(R)

〔主任講師：鈴木安昭（青山学院大学教授）〕

全体のねらい

われわれの生活にも、また企業の生産活動にも、流通活動は不可欠である。その中心的な担い手である商業は就業人口の二割余が従事している。そのような重要性にも拘らず流通や商業は十分理解されていないどころか誤解されてもいる。本講座ではそれらを理解するための基礎知識を平易に解説することを目的としている。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	流通の社会的役割と流通機構	流通は必要悪で無い方が良いのだろうか。それとも流通は望ましい社会的役割を果しているし、今後も一層必要性を増してくるのだろうか。	鈴木安昭（青山学院大学教授）
2	流通機能(1)	流通の社会的役割の達成には流通機能が遂行される必要がある。社会的分業の結果として生産しない財は購入して所有権を入手しなければ消費できず、また購売を目的として生産が行われるが、そこには危険が伴うことも理解する。	同　上
3	流通機能(2)	生産と消費の地点と時点それぞれに発生する懸隔（へだたり）をうめるためには、輸送され、保管されなければならない。また、その過程で集められ、分割され、組合せがつくられる。	同　上
4	流通機能(3)	消費に関する情報をもとに生産され、生産された商品に関する情報を伝達して消費の意欲を換起する。それに対して消費者から購入の意図が情報として伝達される。こうして情報を伝達することが流通の不可欠の要素となる。	同　上
5	流通機能担当者の分化と統合	流通機能は、多くの担当者に多様に分化して遂行されるとともに、分化していたものが統合される。そこに参加するのは、不可欠の生産者と消費者から中間商人としての卸売業者と小売業者、さらに輸送業者や広告業など専門機能業者である。	同　上
6	消費者と流通	われわれの生活にとって流通活動はどのような意義があり、また福祉とはどのような関係であるか、消費者の買物場所選択行動の基礎にあるもの、消費者の買物費用、そしてそれらが小売業に与える影響などを学ぶ。	同　上
7	生産者と流通	生産者は財の生産に必要な原材料や機械・設備の購入に関して、そして生産した財の販売において流通機構と深いかかわりをもつのみでなく、生産した財の最終的な販売にいたるまでも管理の対象とするにいたった。	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	商業の存立基盤	生産者と消費者の中間の部門として商業部門が存立し、しかもそれが存立するほうが社会的に合理的である場合の根拠は何だろうか。さらに商業内部が多段階になる場合も考察しなければならない。	鈴木安昭
9	小売業の役割と機能	流通機構のうちわれわれ消費者にとって最も身近かな存在である小売業の果す社会的役割を確認し、その果している流通機能を整理してみよう。	同上
10	小売業の構造	小売業は多様な単位を構成要素として成立っている。その全体と変化の方向を把握するために、それを規模別、業種別、地域別そして形態別に整理し、それらの変化を、環境諸要因とかかわらせて学ぶ。	同上
11	小売業の諸形態(1)	小売業の店舗、企業そして企業間の組織には多様な形態がある。百貨店、スーパー、専門店チェーン・ストア、中小小売業者、ボランタリー・チェーン、フランチャイズ・システム、商店街、ショッピング・センター、生活協同組合などの諸形態の特徴を知るばかりでなく、そのような諸形態がなぜ生ずるのか、同一名称で呼ばれていればそれらは同質なのか、新形態の出現についての試論にはどのようなものがあるかなどを論ずる。	同上
12	小売業の諸形態(2)		同上
13	卸売業の役割と機能	卸売業は一般的には小売業よりも理解し難いものであろう。ここでは卸売業が果している会社的役割とその機能を整理し、さらにその存立基盤に影響を与える諸要因を考察する。	同上
14	卸売業の構造と諸形態	卸売業には巨大な総合商社から、食品など業種別総合卸売業者、地場産業と密接に結びついた産地的な市場を対象とした零細卸売業者、輸出あるいは輸入を地域的品目別に扱う専門商社など多様な構成要素が存在する。	同上
15	流通・商業に対する公共政策	流通・商業のあり方に対して、政府や地方公共団体は公権力によって介入している。それらはより望ましい方向を目指して、民間の経済主体の行動を規制し、助成し、あるいは紛争の調整を行っている。	同上

＝現代社会とサービス経済＝（R）

〔主任講師：磯部浩一（聖学院大学教授）
主任講師：古郡鞆子（明海大学教授）〕

全体のねらい

経済の成長と成熟はサービス経済として、現代社会を特徴づけるものとなっている。サービス経済化と情報化とは産業経済の基底にある動向として、需要構造の変化を媒介として、産業構造を変革している。このような文脈においてサービス産業の分析を進めることが、本講義のねらいである。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	サービス産業へのアプローチ	現代社会とサービス経済の枠組みのもとでサービス産業を分析する。対象を狭義のサービス業から、理念的に物財産業に対応する広義のサービス産業まで広く設定する。サービス生産の社会的分業の展開過程の背後にある変動要因の１つをサービス経済化として規定する。次に、分析の基礎となるサービスの意味、性質、種類などについて検討する。	磯部浩一（聖学院大学教授）
2	サービス産業の分類と統計	サービス産業は現在、生成分化の変動の過程にある。サービス産業の現状を分析するためには、現行の利用しうる統計では十分ではない。現行の日本標準産業分類における問題点を検討し、今後の分析のために必要な統計のあり方を考察する。	同上
3	サービス産業の長期的動向	広義のサービス産業は、統計的には第三次産業として、近似的に把握できる。わが国の第三次産業の就業者構成比は、第二次世界大戦後に著しく増大したこと、経済発展と第三次産業の関連についての統計的分析の成果を明らかにする。	同上
4	サービス業の成長	第三次産業のなかに含まれる狭義のサービス業に注目しながら、第三次産業のなかでも、とくにサービス業の就業者構成比の増加傾向の大きいことを明らかにする。家計消費における「モノ」離れとサービスへの移行化傾向、サービス経済化傾向が低成長経済のもとでも継続していること、その理由を明らかにする。	同上
5	サービス・情報経済と産業構造	サービス経済化と情報化の進展は、単なる並列関係ではなく、情報産業の急成長に見られるように、両者の結合は複合化し、企業間関係は業際化、さらにはネットワーク化の現象を展開する方向へ向かっている。サービス産業部門と物財産業部門の相互依存の関係は、複雑に絡みあっており、サービス・情報経済の成立は、物財産業部門の空洞化を意味するのではなく、サービス・情報化された物財産業部門への移行を意味するものと言えよう。	同上
6	サービス経済と就業構造	日本経済のサービス化の状況を就業構造の面から明らかにする。就業構造の実態を産業別、職業別に考察し、サービス経済の促進要因、サービス就業者の特徴などにふれる。	古郡鞆子（明海大学教授）
7	サービス経済と労働のコンティンジェント化	サービス経済の下で、就業形態や勤務形態が多様化している。サービス経済化が労働に与える影響を“コンティンジェスト経済”のなかで考える。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	サービス経済下の労働問題	サービス経済下で、労働市場には構造変化がおきている。ここでは、雇用・賃金・労働時間がどうなっているかなど、サービス経済下における労働経済的諸問題を考える。	古郡鞆子
9	サービス経済のための経済政策	サービス経済の諸問題をとりあげ、必要な経済政策を考える。サービスの分野に特化する産業構造のあり方は果たして健全なことなのか、サービス経済にはどのような弊害があるか、などを検討する。	同上
10	サービス経済と個人消費	サービス経済化は家計のなかでも進展している。家計の消費内容はどのように変化しているのか。消費行動や家計のサービス需要の実態を明らかにし、今後の消費の方向をさぐる。	同上
11	政府とサービス経済	サービスを公的に供給する必要性を考える。その上で、公共サービスの実態と問題点を明らかにし、公共サービスのあり方、公共サービスにおける政府の基本的役割などにふれる。	磯部浩一
12	企業とサービス・情報経済	企業のサービス・情報化への関連・対応の経過を考察する。はじめに製造業の「サービス・情報化」への対応としてソフト業務の内生・外生の状況をとりあげる。次に、全産業における対事業所サービスについて考察する。	同上
13	サービス業の生成展開	業種別サービス業の成長と衰退とを考察する。最初にサービス業の規模別構成、中小サービス業の流動性と成長性、サービス業の低成長業種と成長業種、さらに、サービス業の先端業種をとりあげる。	同上
14	サービス経済と国際経済	国際経済的視点からサービス経済化を比較するには、多くの制約点がある。この点を前提としたうえで、主要諸国のサービス経済化の進展状況、サービス経済化の内容、そしてサービス消費支出の国際比較とを行う。次に、サービス貿易の具体例と定義をとり上げ、サービス貿易の現状を説明する。	同上
15	サービス産業の展望	展望のための諸前提、サービス・情報化の限界、物財生産部門のサービス・情報化現象をとりあげる。将来展望に関する調査結果および、その後の大企業の多角化調査の紹介、さらにニュービジネス、先端的サービス産業の類型、新しい産業社会は企画融合者の時代、消費者の在り方などにふれる。	同上

＝産業および生業としての農業＝（R）

〔主任講師：渡部忠世（放送大学教授）〕

全体のねらい

人類の生存に不可欠な食糧などを供給する農業は、人類の歴史とともに発展して、各地に独自な技術と文化を形成した。その発展の中で、農業は農民を支える生業としての側面から、社会に食糧・生産物を供給する産業としての側面を強化した。農業のこの両側面を世界と日本の農業発達史をたどりつつ考察する。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	農業の2つの側面	産業、生産、なりわい 農業の定義、特徴 「貴農論 ― 農業の貴重なる所以」	渡部忠世 （放送大学教授）
2	農業の地域的ひろがり	農業の分類 農業類型の地域区分 文化としての農業 農耕文化基本複合	同上
3	世界の農耕文化(1) 根栽農耕文化と稲作農耕文化	作物起源の大中心 農耕起源の一元説、多元説 根栽農耕文化 稲作農耕文化	同上
4	世界の農耕文化(2) サバンナ農耕文化、地中海農耕文化、新大陸農耕文化	サバンナ農耕文化 地中海農耕文化 新大陸農耕文化 農耕文化の重層的発展	同上
5	農耕文化の発展―自給農業の成熟	焼畑農耕のシステム 焼畑農耕から定着農耕へ 輪作体系の成立と集約化	同上
6	東アジア水田農業の展開	日本へ渡来した稲作 中国における稲作技術の発展 わが国近世のイネの収量 近世農書の示す稲作技術	同上
7	南アジア畑作農業の展開	南アジアの畑作と雑穀の種類 南インド、デカン高原の畑作 南インドの農業体系の特徴 華北畑作との対比	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	ヨーロッパの「農業革命」	南ヨーロッパの農業 三圃式農法から穀草式農法へ 「農業革命」以降	渡部忠世
9	アジアとヨーロッパの農業を比較して	アジアとヨーロッパの農業構造の比較 アジア農業の発展方向 ヨーロッパ農業の発展過程	同上
10	植民地拡大と企業的農業の成立(1) 新大陸と熱帯圏のプランテーション農業	アメリカの農業類型、その発展 アメリカの稲作 プランテーション農業の登場	同上
11	植民地拡大と企業的農業の成立(2) ヨーロッパによる世界農業の再編	アジアにおけるプランテーション農業の展開 プランテーション農業の特徴と変遷 プランテーション農業の残したもの	同上
12	自給的農業と企業的農業の性格	再び、農業の２つの側面 農業におけるエネルギー収支 商業的農業と近代化	同上
13	日本の農業をかえりみて	近代における稲作収量の増加 明治時代後半の技術革新 戦後の水稲収量の増加 伝統的農業の終焉へ	同上
14	戦後の日本農業	日本農業の転換 ― 基本法の成立 減反政策と稲作の動き 農業技術の現況と問題点	同上
15	日本農業の将来	農業のいくつかの特性 農業、特に稲作の役割 日本農業の選択 まとめとして	同上

＝中小企業論＝（R）

〔主任講師：磯部浩一（聖学院大学教授）〕

全体のねらい

1970年代以降、世界各国の中小企業に対する国民的関心は大きな高まりを見せている。わが国のこれまでの特殊・日本的と考えられていた中小企業問題は、日本経済が先進国段階に到達した現在、国際的視野からとらえ直す必要がある。出来る限りこの観点を加味することが、この中小企業論の狙いである。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	中小企業論の課題	研究対象としての中小企業 中小企業に対する社会的認識 中小企業の問題性 世界の中小企業	磯部浩一 (聖学院大学教授)
2	中小企業問題の展開と政策の推移	中小企業問題の発生 戦時経済下の中小企業問題 戦後の中小企業問題 高度成長と中小企業問題 中小企業問題の新展開	同上
3	中小企業理論の形成	先進資本主義国における小工業問題の展開	同上
4	中小企業の定義	定義の必要性 外国の中小企業の定義 中小企業の定義と本質	同上
5	中小企業の地位と役割	中小企業の地位 中小企業の役割	同上
6	日本経済の構造的特質と中小企業	日本経済に対する構造的接近 日本経済の構造的特質 大企業と中小企業の諸格差	同上
7	流通機構と中小企業	流通過程の基礎的な諸概念 流通機構における中小企業 日本の流通機構 低成長経済と流通機構	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	中小企業の存立条件と存立分野	中小企業の存立条件 中小企業の存立分野 経済展開と中小企業の存立分野 産業構造の変化と中小企業の存立分野	磯部浩一
9	中小企業の存立形態と下請・系列	下請制の研究と評価 下請中小企業 下請中小企業の問題性	同上
10	中小企業の経営者	中小企業の創業者 中小企業の成長と経営者 中小企業経営者の意識構造	同上
11	中小企業の経営・1	中小企業の経営管理の実状 中小企業経営の規模的特質 中小企業経営の新しい課題	同上
12	中小企業の経営・2	中小企業の業種類型 伝統工業型中小企業の経営 近代的工業型中小企業の経営 ベンチャー・ビジネス 業種間移動と事業転換	同上
13	環境変化と中小企業	はじめに 環境問題の重大化 経済環境の変化 中小企業の対応 地域の環境変化と中小企業	同上
14	中小企業の組織化	はじめに 中小企業の組織化の意義 中小企業の組織の必要性と目的 中小企業組織化の阻害要因と限界 中小企業組合の諸形態 中小商業組織化の諸形態 低成長経済へ移行後の組織化	同上
15	中小企業基本法と中小企業政策	中小企業政策の体系 中小企業政策の展開 今後の中小企業政策 おわりに	同上

＝技　術　史＝（R）

―人間と技術のふれ合い

〔主任講師：飯田賢一（東京工科大学教授）〕

全体のねらい

人間の生活とともにある技術、生きてゆくためにものをつくることは、どの民族にとっても、あらゆる文化の基礎である。現代の技術がいかに高度に発達しても、人間の技（わざ）と思想（知恵）が原点である。人間にとって真の技術とは何か。この視座をふまえ、東と西の比較を交えつつ、日本の産業技術のあゆみを考察する。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	開講にさいして―身近な生活の中に「技術」と「歴史を考える。	序説。歴史とは現在と過去とのつきることのない対話である、との見地から、技術とその歴史を学ぶことの意味を考える。 (1) 「技術」と「歴史」について (2) 技術史の三つの段階 (3) 箸一（あた）半と現代の技術。	飯田賢一 （東京工科大学教授）
2	現代をどうとらえるか	総論（その１）。現実は、目にみえるものと、目にはみえないが肝心なもの（本質）をとらえると、ほんとうに理解できる。世界技術史の大きな流れの中での現代日本を考える。 (1) 日本の戦後技術史の意味。 (2) 鉄砲をすてた日本人。 (3) ブータンの鋼の切手。	同上
3	近世日本の技術と文化	西欧と同じく18世紀の日本には、すでに新しい産業技術を生み出す土壌が整えられており、それが近代技術受容の原動力となった。その諸状況を探究する。 (1) 18世紀の技術思想。 (2) 産業技術書の普及。 (3) 和算とそろばん。	同上
4	東と西の科学と技術	近世ともなると、東洋（日本）でも西欧でもそれぞれの風土に即して個有の技術観が成立し、産業技術の道を開拓していった。歴史的にどんな道がよいかをかえりみる。 (1) 『天工開物』と『デ・レ・メタリカ』 (2) 江戸のメカニズム (3) 産業革命の教訓	同上
5	近代日本の夜あけ	アヘン戦争を機にくずれゆく中華帝国の情勢と、イギリス産業革命の進展が、日本を明治維新へ向わせる国際環境を形成する。これに対応し、日本技術の西欧化が開始される。 (1) 明治維新前後の世界。 (2) 西欧科学の受容。 (3) 洋　高炉への道。	同上
6	東と西の出会い	日米修好条約交換のため太平洋を渡ったのが東と西の直接の出会いである。欧米の技術文化・機械文明を日本人はどううけとめ、また先進諸国は日本人に何を期待したか。 (1) 万延元年（1860年）の使節たち。 (2) 鉄道の開幕。 (3) 福沢諭吉の『民情一新』。	同上
7	日本の産業革命(1)	日本の近代工業化を支えた最初の産業は、製糸であり綿糸紡績業である。在来技術はどのように生かされ、国産工業がおこったか。 (1) 絹の道 (2) ガラ紡の発明 (3) 国産第１号機関車の出現	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	1890年の技術選択 ― 近代日本の光と影	明治国家の体制が確立した1890年（明治23年）ともなると、近代日本産業には光とともに影の部分が発生する。日本の東と西でどういう技術の道が選ばれたか。 (1) 足尾鉱毒事件の発生。 (2) 近代技術教育の形成。 (3) 琵琶湖 水と京都市電。	飯田賢一
9	日本の産業革命(2)	軽工業から重工業へ。その転回点で重要な役割をはたした官営八幡製鉄所の確立過程の技術史的解明は、今日の第三世界工業化の問題に対して多くの示唆を投げかける。 (1) 重工業化の展開。 (2) 官営八幡製鉄所の成立・失敗・自立。 (3) 外人科学者の眼。	同上
10	近代日本の発明のあゆみ	総論（その２）。1885年の特許制度施行以来の日本人の創造性のあゆみを概説し、近現代の産業技術発展の原動力は何かを考える。 (1) 風土と技術と文化 (2) 産業構造と技術水準 (3) 技術発展の原動力	同上
11	大正デモクラシーと科学技術	第１次大戦前後の国際交流の高まりと大正デモクラシーの流れの中で、日本の産業技術はようやく科学的技術としての基礎を確立しはじめる。ことに理化学研究所の意義を考える。 (1) 理工学研究機関の成立。 (2) 民衆の生活と科学技術。 (3) 理化学研究所の意義。	同上
12	両大戦間の時代	軍事主導型の暗い谷間といわれるアウタルキー時代にも、国際性・創造性豊かな先駆者たちの仕事が底流にあった。そのいくつかを発掘し再評価する。 (1) 北の大地をひらく。 (2) エレクトロニクスの先駆者たち。 (3) 工業美学の思想。	同上
13	戦争から平和へ	平和経済の到来をまって、日本の技術革新は導入技術をテコとしつつ漸次自主開発技術へと向った。その担い手としての技術者たちの科学的精神と詩のこころにも言及する。 (1) 科学技術者であるまえに人間であること。 (2) 日本の技術革新。 (3) 自主開発技術へ。	同上
14	日米比較技術史	1950～60年代の日本の鉄鋼や自動車産業は、米国1920～30年代のそれと歴史的に類似し、対比が可能である。日本の技術は米国にどう追いつき、追いこしたか？ (1) 米国が「日本」だったころ。 (2) 日米の自動車競争。 (3) 「重厚長大」と「軽薄短小」	同上
15	おわりに ― 日本の技術100年	これまでの講義を総合し、この100年の日本の産業技術のあゆみを回顧し、あらためて今日の国際化社会の中での日本の課題を考える。 (1) 創造と市民社会 (2) 現代技術と伝統文化 (3) 第三世界の工業化と日本	同上

＝産業技術の動向Ⅱ＝（TV）

〔主任講師：道家達将(電気通信大学教授)〕

全体のねらい

今後の日本の産業技術の発展の保障は、日本における基礎科学・基礎技術の創造的発展が達成されるか否かにかかっている。日本の最先端の研究室で行なわれている研究の幾つかを紹介し、産業技術の動向を総合的に展望してみることにする。この研究は日本だけでなく人類の幸福のために必要であることが御理解いただけよう。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	材料工学(1) ―有機材料工学	1. はじめに 2. 高分子の種類と特徴 3. 構造材料としての発展 4. 複合材料 5. 機能材料 6. 結び	高久　明 （東京工業大学教授）
2	材料工学(2) ―無機材料工学	1. 無機化学と無機材料工学の定義 2. 新金属材料とエレクトロニクス材料 3. センサ材料 4. 無機材料の研究の将来	後藤和弘 （東京工業大学教授）
3	機械工学(1) ―自動制御とロボット工学	1. はじめに 2. 自動制御におけるフィードバック系 3. ロボットにおけるフィードバック系 4. 知能機械としてのロボット 5. 自動化とロボット化の今後の展開	梅谷陽二 （東京工業大学教授）
4	機械工学(2) ―医工学	1. 医工学とは何か 2. 医工学の範疇 3. 医工学の例 ― 関節の構造と摩擦 4. 人工関節の設計	笹田　直 （東京工業大学教授）
5	合成化学	1. はじめに 2. 天然物の利用から人工物の創製へ 3. 化学工業と触媒 4. 有機合成科学と化学工業 5. 石油資源に頼らない産業技術は？	森川　陽 （東京工業大学教授）
6	生物工学	1. はじめに 2. なぜバイオなのか 3. 生物工学を支える基盤技術 4. 産業技術としての生物工学	相沢益男 （東京工業大学教授）
7	電子工学(1) ―太陽電池	1. はじめに 2. 太陽電池とは何か 3. アモルファス太陽電池 4. その他の太陽電池 5. 太陽電池の高効率化 6. 着々進む太陽光発電の実用化 7. おわりに	高橋　清 （東京工業大学教授）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	電子工学(2) —光通信	1. はじめに 2. 光通信のしくみ 3. 光ファイバ 4. 光デバイス 5. 光伝送システム 6. むすび	末松安春 （東京工業大学教授）
9	システム工学 —ゆらぎと予測	1. 「ゆらぎ」はどのような意味で重要か？ 2. 日常生活における「予測」行為 3. 予測の必要条件 4. 予測はどのようにして行うか 5. 予測理論から作曲をする	武者利光 （東京工業大学教授）
10	情報工学(1) —パターン認識	1. はじめに 2. 人間と機械の間の接点 3. 認識とは何か 4. パターン認識とは 5. パターン認識を可能とするために 6. パターン認識技術の動向と今後の課題	飯島泰蔵 （東京工科大学教授）
11	情報工学(2) —ホログラフィー	1. まえがき 2. ホログラフィーの原理 3. ホログラムの種類 4. 立体像のディスプレイ 5. 計測への応用 6. ホログラフィック光学素子 7. むすび	辻内順平 （東京工業大学教授）
12	エネルギー工学(1) —MHD発電	1. はじめに — MHD発電とは 2. MHD発電の開発研究の必要性 3. MHD発電の電気出力 4. 発電機の種類 5. 熱源と発電方式 6. 研究開発 7. エネルギーの有効利用	椛島成治 （東京工業大学教授）
13	エネルギー工学(2) —核分裂と核融合	1. はじめに 2. 核分裂反応の特質　3. 核融合反応の特質 4. DT核融合システムが核分裂システムより有利となる可能性のある点 5. DT核融合システムの弱点 6. 核融合開発が成功するための要件 7. 結び	垣花秀武 （上智大学教授）
14	環境工学(1) —景観工学	1. はじめに 2. 景観の要素と成り立ち 3. 課題と方法 4. 景観の予測手法 5. 景観の評価 6. 今後の展望	中村良夫 （東京工業大学教授）
15	環境工学(2) —都市工学	1. 都市と都市工学 2. 都市機能を支える物的要素 3. 日本の都市化と都市問題 4. 現代都市問題の特徴 5. 日本の都市の今後の課題 6. 都市工学のとりくみ　7. 計画案の立案 8. 計画案の評価と合意形成　9. 今後の展望	渡辺貴介 （東京工業大学教授）

＝システム工学＝(TV)

〔主任講師：浅居喜代治（大阪工業大学教授）〕

全体のねらい

大規模・複雑なシステムの計画・設計・運用のためのシステム工学への理解を深めるために、まず、その発達の歴史・アプローチ・応用例を示したのち、次にアプローチについて、各段階での方法論を、順次説明し、終りに最近の総合的な実際例を挙げて、系統的かつ具体的に講義を進め、システム概念の把握と、システム思考の基礎を与えようとする。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	序論 システムとは	システム工学の概要 システムの定義・特性・考え方	浅居喜代治 （大阪工業大学教授）
2	種々のシステム	システムの分類 種々のシステムの例	同上
3	システム工学とは	システム工学の発達・考え方・他のシステム科学や技術との比較	同上
4	システム工学のアプローチ	システム工学のアプローチと方法論の概説	同上
5	システムの表し方（モデリング）	システム表現の考え方と注意 数学的モデルと図的モデル	平井一正 （神戸大学教授）
6	種々のシステム・モデル	システムモデルの分類 モデルの例	同上
7	構造モデル	構造モデルの意義と作成	寺野寿郎 （法政大学教授）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	ファジィモデル	ファジィモデルの意義・理論・種類 モデル作成上の注意	寺野寿郎
9	システムの特性と解析(1)	システムの基本的特性（安定性・可制御性・可観測性・感度）の意義と解析法	北森俊行 （東京大学教授）
10	システムの特性と解析(2)	システムの基本的特性（信頼性・保全性・安全性など）の意義と解析法	同上
11	良いシステムの求め方	種々のシステム最適化法	浅居喜代治
12	シミュレーションと試行法	シミュレーションの方法 種々の試行法	同上
13	システム・ダイナミクス	システムダイナミックスの考え方と理論 動的モデルへの適用	榛沢芳雄 （日本大学教授）
14	都市システムへの応用	システムダイナミックスによる都市モデル シミュレーションによるシステム計画	同上
15	OA、FA、CIMなどのシステムへの応用	OA、FA、CIMなどのシステムの計画・設計・運用	浅井喜代治

＝人　間　工　学＝(TV)

〔主任講師：加藤一郎（早稲田大学教授）〕

全体のねらい

人間工学というのは発生的に二つの面をもっている。労働科学と経営工学がそれである。

しかし時代は推移しつつあり、大きな転回をみせようとしている。それは人間福祉への傾斜である。もちろん人間工学も新たな変化に対応しつつあるが、私は少し視野を広げ、人間と人間のあり方に焦点を合わせたい。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	人間工学とは ── 工学的人間学	人間は工学とどのようにかかわってきたか。人間機械論から人間システム論に至る人間と機械の問題について述べ、これからの展開に対する理解を深める。	加藤一郎 （早稲田大学教授）
2	ブラックボックスとしての人間 ── 自動人形	人間機械論は、人間を外部からながめ、一種の機械として理解してゆくのが特徴である。技術の進歩にささえられて変遷し近代に至るその歴史と現状を展望する。	同　上
3	内側からみた人体 ── 生理工学	学問の分化と共に、人間を内側から理解することに重心が移った。レオナルドの解剖から近代の電気生理学に至る流れは、生理工学として現代的展開をみせはじめた。	同　上
4	脳のサイバネティクス ── 人工知能	人間の頭脳とコンピュータの間には大きなギャップがあるが、その一部を代行させることはできる。人工知能の開発と、それによる脳機能の理解の試みについて述べる。	同　上
5	情報チャンネルとしての皮膚 ── 官能検査	皮膚感覚の特異説は根拠のうすいモデルとなりつつある。これを例に、仮説・検証のプロセスを呈示する。代行情報チャンネルとしての応用と官能検査の人工化などにふれる。	同　上
6	発声のメカニズム ── 人工の口	言語が人間システムの中でもつ特質と、言語の構造、言語の習得、思考と言語の関係、さらに、音声発生の機構と、人工的に音声を発生させる方法について述べる。	白井克彦 （早稲田大学教授）
7	聴覚のメカニズム ── 人工の耳	聴覚の機構と、その心理現象を含めた複雑な機能について、工学的な立場から考察する。さらに、音声の理解と人工の耳の可能性について言及する。	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	視覚のメカニズム ── 人工の目	われわれは物を見てその形を知り、意味を理解し、色彩豊かな3次元の空間を知覚する。このたくみな視覚のしくみと、視覚障害者に対する技術補助の問題について述べる。	大頭　仁 （早稲田大学教授）
9	身体リズムのメカニズム ── 電気刺激	人間の体内では、神経によって情報が伝達されている。神経に電気刺激を与えて心臓や腸管などのリズムを制御し、痛みをおさえるなど、人工的な身体制御も可能である。	内山明彦 （早稲田大学教授）
10	血液循環系のメカニズム ── 人工心臓	血液循環系を構成している心臓、血管、血管網、肺などのメカニズムと機能を工学的に解説し、あわせて心臓病治療と医工学、人工臓器の現況についても言及する。	土屋喜一 （早稲田大学教授）
11	骨と筋のメカニズム ── 人工関節・筋	骨生成の電気機械的メカニズム、筋の構造特性などの特有な性質をしらべる。また、これらの代替機器としての人工関節や人工筋についても紹介する。	加藤一郎
12	手のメカニズム ── 人工の手	手の感覚系・運動系はともに人間特有のシステムをもつ。その巧緻性について、機械的構造や運動制御について調べる。また、義手やロボットについて現状を述べる。	同上
13	足のメカニズム ── 人工の足	2足歩行の意義と問題点をさぐる。歩行の分析と、その正常・異常について考える。歩行機械によって足のメカニズムを解明し、義足への技術波及にまでふれる。	同上
14	内面からみた人間 ── 心理工学	人間は心と体をもつ。心理学的知見をもとに、意識と情動の問題に工学的像を与え、バイオフィードバックを例に心と体の問題を考える。	同上
15	人間と機械の共生 ── サイボット社会	人間とロボットが共生する社会における人間学としてサイボトロジーを提唱する。21世紀へ向けてホモ・ファーベルからホモ・ルーデンス、ホモ・サピエンスへの道を探る。	同上

＝ 情 報 工 学 ＝（TV）

〔主任講師：都倉信樹（大阪大学教授）〕

全体のねらい

コンピュータの本質および実際を見極めるため、その仕組み・原理・構成などのハードウェア面、アルゴリズム・プログラムなどのソフトウェア面にわたって基礎的な内容を説明する。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	コンピュータはどう使われているか	いまコンピュータはどのようなところで、どのように用いられているかを紹介しながら、種々のコンピュータが多方面で活用されていることを説明し、コンピュータとはなにかに話を進める。	都倉信樹（大阪大学教授）
2	計算機ではどのようにデータを表現するか	コンピュータは単なる計算器というより、データ処理機械である。そのデータをどう表現し扱うのかについて説明する。	同上
3	プログラムとは	コンピュータはプログラム次第で、さまざまの仕事をこなす。そのプログラムとはどういうものか？ もっとも基本的な機械語プログラムについて学ぶ。	同上
4	コンピュータでのデータ処理	コンピュータの内部の仕組みをみる。レジスタ、算術論理演算部、メモリ、バス、入出力装置などをまなぶ。	同上
5	コンピュータの仕組み－1 組み合わせ回路	ゲートなど、コンピュータの回路を基本的な構成要素とその働きをみよう。	同上
6	コンピュータの仕組み－ＡＬＵ	算術論理演算部の仕組みについてまなび、また、フリップフロップについて説明する。	同上
7	コンピュータの仕組み 順序回路	順序回路の概念、バスの動作、制御回路について説明する。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	コンピュータの仕組み サブルーチンと割り込み	スタックとサブルーチンの概念、入出力と割り込みについて説明する。	都倉信樹
9	オペレーティングシステムの役割り	コンピュータのハードウェアだけでは使えない。そのうえで動くオペレーティングシステムの助けが必要である。	同上
10	プログラムと言語	現在、機械語でプログラムすることはまずないであろう。高水準言語が用いられている。処理系の概念と高水準言語の歴史や特色などを説明する。	同上
11	アルゴリズムとその記述	アルゴリズムとその記述法としてのフローチャート、NSチャートを紹介する。再帰アルゴリズムについても学ぶ。	同上
12	基本的なアルゴリズム－1	探索アルゴリズムについて、また、アルゴリズムの評価基準について説明する。	同上
13	基本的なアルゴリズム－2	ソートアルゴリズムについて検討する。	同上
14	ソフトウェア開発の問題点	ソフトウェアを作るとき、要求をまとめ、仕様を決定し、設計し、プログラムを組むという手順をふむ。プログラムが書けただけではだめで、デバッグ、テストという作業が欠かせない。さらに、保守の問題も大きい。ソフトウェア開発の環境と人員の問題を考えよう。	同上
15	動向と展望 さらに勉強するために	コンピュータなしの社会はもはや考えられない。コンピュータは広範囲に利用され、また、ネットワークに接続されるようになっている。また、大規模なデータベースも利用される。コンピュータと人間、社会との関係について、いくつかの問題を考えてみよう。	同上

＝設　計　工　学＝（TV）

―解　析　と　総　合―

〔主任講師：塚田忠夫（東京工業大学教授）〕

全体のねらい

本講義は、学問ならびに工業技術における設計の位置付けと設計の思考過程、及びその総合的評価について論じ、社会に貢献し得る設計を会得するための教養講義である。講義の構成は、設計工学の基礎事項、設計目的の具体化のための技術的基本事項、設計の総合化事項からなる。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	設計と創造性	設計を工業社会におけるエンジニアリング的なアプローチからその位置付け、思考過程を論じ、そのための基本を述べる。さらに、設計は総合する技術であり、設計過程で強く要求される創造性についても述べる。	塚田忠夫（東京工業大学教授）
2	総合的評価を考えた設計	設計は一つの構想を図面にして完了ではない。複数の設計案を創り、その中から全ての機能的要求を総合的に評価して最適な設計案を選び、さらにそれを改良しなければならない。ここでは、情報積算法を用いて総合的評価を考える設計法について述べる。	中沢　弘（早稲田大学教授）
3	情報伝達手段	人間が創造した構想を他人に正確に伝える手段に言語（図面）がある。三次元空間での物体の正確な情報は、二次元的な広がりをもつ図面によって伝達される。そのために、国際的に共通な理解ができる図面の約束ごとや表現法の基礎を述べる。	塚田忠夫
4	コンピュータ援用設計（CAD）	機械的作業を得意とするコンピュータと創造的思考を得意とする設計者との相互の長所を結合すれば効率のよい設計が行える。道具としてのコンピュータとこれを利用する人間とのかかわり合い、及び作業分担について述べる。	同　上
5	機械要素	次回以降に例示される設計構造の基礎知識として、種々の機械に共通して使用される部品の形態、機能、使用目的を述べ、さらに機械要素と機械設計の係わりを考える。	舟橋宏明（東京工業大学教授）
6	解析と総合	設計にあらわれる二つの正反対の思考プロセス、すなわち設計解の諸支配因子を細かく分けて調べる解析と既存の知識から最適解を得る総合について述べる。	同　上
7	機械運動系の解析と総合（I）	機械を運動系としてとらえ、運動の変換・伝達の基本形式を示し、系内の物体の数や入力の数などの間に成立する関係を解析し、また数の適合条件を満たす運動系の総合を行う。	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	機械運動系の解析と総合（Ⅱ）	機械運動系の入力および出力運動の量的関係について解析し、また所要の入出力関係を満足する運動系の総合を行う。	舟橋宏明
9	設計と材料の選択	材料の性質は、本来部品として完成された性能を目標に選ばれる。しかし、素材から種々の加工を経るに従ってその材料の性質は変化する。このようなことを考慮した材料の選択法について述べる。	塚田忠夫
10	強度設計	機械の寿命の究極状態は壊れることである。予想される使用条件に耐え、繰り返し力が働く条件下で、強度と剛性を保証する設計を述べる。	同上
11	精度設計	高精度機械では、その構成部品に非常に高い精度が要求される。機械全体の組合せ精度を損なわずに、部品に適切な精度の配分をする考え方を精度設計と云う。	同上
12	信頼性設計	設計対象の機械、部品、システムなどが、規定の条件のもとで、所定の期間にわたって、所要の機能を維持し、遂行する確率を高いレベルに保つための考え方について述べる。	舟橋宏明
13	設計と加工	設計するという行為は、ものをつくることが最終の目標であるから、性能・コスト・納期などが満足される最良の加工法を考慮した設計が行われなければならない。ここでは、設計者の観点から再構築した加工法の概要を述べる。	中沢弘
14	機能の独立性の原理	設計をする際に、本質的に良くない設計に貴重な時間を浪費してしまうことがよくある。このような無駄を防いでくれる原理がある。その一つが機能の独立性の原理である。具体的事例を通してこの原理の意味と重要性を述べる。	同上
15	トータル設計の原理	設計を成功に導くもう一つの原理がトータル設計の原理である。この原理は、新たな機能的要求が追加されたとき、それを含めて全ての機能的要求を同時に総合的に最適化を図るのがよい設計法であることを教えている。これを具体的事例を通して解説する。	同上

＝物質工学の世界＝（TV）

〔主任講師：滝口利夫（放送大学教授）〕
〔主任講師：東　千秋（放送大学助教授）〕

全体のねらい

明日の先端技術の基盤となる物質工学は、従来にないすぐれた特性や機能をもつ材料を創造し利用するために、材料の特性や機能を物質の構造との関連から総合的統一的にとらえる材料学の新しい体系である。この講義は、特に物質工学のトピックスを中心にその基本概念を紹介するとともに、そこから未来の社会システムをも展望する。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	物質工学の道程	文明と材料、資源と材料、物質工学の体系、物質工学の構成、物質工学の目標、材料設計とコンピュータなどを取り上げ、物質工学の道程を解説する。	滝口利夫（放送大学教授） 東　千秋（放送大学助教授）
2	物質の構造と特性	原子から分子、集合体としての物質、複合材料と傾斜機能材料を解説し、物質および材料の構造と特性、さらにその機能の発現のしくみについて例を上げて考える。	同上
3	物質工学と超の技術 ― オングストローム材料技術	極低温、超高真空、光ビーム、原子ビーム、イオンビーム、分子ビーム、などの超の技術を駆使してアモルファス、人工格子、超薄膜、などの材料を作成するオングストローム材料プロセス技術と、さらに一つ一つの原子を見る顕微鏡を用いて原子を一つ一つ操作するアトマニュピレーターなどの、物質工学の最先端技術について解説する。	清水　勇（東京工業大学教授）
4	新しいエレクトロニクス素子と材料技術	エレクトロニクスにおける主役は、電子の振舞を自在に操ることを目的としてつくられる電子素子である。その物理的限界への挑戦、光を導入する新しい流れ、新しい原理に基づく素子つくり、などを概観し、そのために必要とされる材料技術について解説する。	田中一宣（工業技術院・電子技術総合研究所・材料科学部長）
5	画像表示とその材料	液晶、ＬＥＤ、ＥＬＤ、ＥＣＤなどの表示機能材料について歴史的背景をふまえて概説し、今後のこれらの材料の展開について考える。	浜川圭弘（大阪大学教授）
6	エネルギー変換とセンサ	エネルギー変換材料の例としてセンサ機能と材料を取り上げ、無機センサ、有機センサ、バイオセンサなどを例にそのしくみと材料の構造との関係について歴史的背景と今後の展開をふまえて解説する。	雀部博之（理化学研究所主任研究員）
7	高温超伝導材料―超伝導体内部界面の役割	導電性金属材料、導電性高分子など導電性材料と超伝導材料を概説し、特に高温超伝導体が社会に与えるインパクトとこれら機能の発現における超伝導体内部界面の役割について、今後の展望をふまえて解説する。	石田洋一（東京大学教授）

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	超塑性と形状記憶	超塑性と形状記憶というユニークな力学的性質を示す材料について今後の展望をふまえて解説する。	石田洋一
9	高比強度材料―セラミックスと複合材料	セラミックスとその複合材料を中心に取り上げ、材料破壊のメカニズムと材料の信頼性、評価技術について解説し、そこから材料の高強度化の手法について考える。	岸　輝雄 （東京大学教授）
10	高配向性高分子材料―液晶ポリマー	液晶ポリマーは高強度高分子材料として注目されている高配向性ポリマーである。これは、また光エレクトロニクス用の非線形光学材料として期待されている。ここでは、液晶ポリマーについて今後の展望をふまえて解説する。	小出直之 （東京理科大学教授）
11	高機能性分離膜	分離膜の発展について、分離膜の構造と機能の発現のしくみおよびそのつくり方などを歴史的に解説し、さらに高機能性分離膜の開発の現状とそれがもたらす社会へのインパクトなどについて考える。	讃井浩平 （上智大学教授）
12	物質工学と人工臓器	人工臓器など生体用材料が支える未来医学について概説し、その中心的話題として抗血栓性材料などの研究の歴史的展開と今後の発展について解説する。	片岡一則 （東京理科大学助教授）
13	ドラッグデリバリーシステム	薬用のメカニズムを歴史的に概説し、現在注目されているドラッグ　デリバリーシステムの研究の現状と未来について解説する。	岡野光夫 （東京女子医科大学助教授）
14	材料技術の産業展開とそのインパクト	材料を制するものはハイテク技術を制するといわれるこれからの技術革新の時代において、材料技術の重要性とその意義を総合的に解説し、これからの材料産業の展開が産業構造変革と社会経済に与えるインパクトについて考える。	弘岡正明 （神戸大学教授）
15	自然との共存と物質工学	太陽エネルギーを利用するための材料やオゾン破壊の原因とされるフロンの代替物の開発、CO_2の資源化、バイオマスの利用と生分解性プラスチックの開発など環境保全のための材料開発の現状を紹介し、自然と共存する物質工学を解説する。また、最後にこの科目のまとめをする。	滝口利夫 東　千秋

＝環境とエネルギー工学＝（TV）

〔主任講師：牛山　泉（足利工業大学教授）〕

全体のねらい

身近な人間の生活とエネルギーとの関係から出発し、常に環境問題を意識しつつ、エネルギー利用の歴史、社会学、エネルギー資源としての化石燃料、原子力、そして自然エネルギーについて調べる。さらに、各種エネルギー間の変換技術とエネルギーの評価の考察を行い、最後に環境問題とエネルギー技術の課題と展望を調べる。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	人間生活とエネルギー	1. エネルギーの原点 2. 生活の中のエネルギー 3. エネルギーの潮流 4. エネルギーと環境	牛山　泉 （足利工業大学教授）
2	エネルギー利用の歴史	1. 火の発見と人力・畜力の利用 2. 自然エネルギーの利用 3. 産業革命期のエネルギー源 4. エネルギー革命と近代化	同　上
3	エネルギーとその概念	1. エネルギーの工学的意味 2. エネルギー保存と熱力学の第一法則 3. エネルギー散逸と熱力学の第二法則 4. エネルギーの変換、貯蔵および輸送	同　上
4	エネルギーの社会学	1. エネルギー問題と社会 2. 経済成長とエネルギー 3. エネルギーと環境との調和 4. エネルギーの安全保障 5. エントロピーと世界観	同　上
5	エネルギー資源	1. 資源エネルギーと環境エネルギー 2. 自然界のエネルギー 3. 世界のエネルギー資源 4. 二次エネルギー源と利用システム	同　上
6	エネルギー・システム	1. エネルギー・フロー 2. エネルギー供給システム 3. エネルギー変換システム 4. エネルギーの貯蔵・輸送システム	同　上
7	化石燃料システム	1. 化石熱料システムとその特質 2. 化石燃料の種類 3. 化石燃料の採集と転換 4. これからの化石燃料	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	原子力エネルギー・システム	1. 世界の原子力発電 2. 原子力発電のしくみ 3. 原子力燃料サイクル 4. 原子力利用と安全 5. 原子力発電の経済性	牛山　泉
9	自然エネルギー・システム (I)	1. 自然エネルギー利用の意義 2. 太陽エネルギー 3. 海洋熱エネルギー 4. 地熱エネルギー 5. バイオマス・エネルギー	同　上
10	自然エネルギー・システム (II)	1. 流体エネルギーとしての自然エネルギー 2. 水力エネルギー 3. 風力エネルギー 4. 波力エネルギー	同　上
11	エネルギー変換の技術 (I)	1. エネルギー変換 2. 力学エネルギーの変換 3. 熱エネルギーの変換	同　上
12	エネルギー変換の技術 (II)	1. 化学エネルギーの変換 2. 電気エネルギーの変換 3. 光・放射線エネルギーの変換	同　上
13	エネルギーの評価	1. エネルギーの価値尺度 2. エクセルギーの導入 3. エクセルギーの視点からの資源と環境 4. エネルギー利用効率の評価 5. エクセルギーの応用	同　上
14	エネルギー公害と環境問題	1. 顕在化する公害・環境問題 2. 石炭・石油の公害とその防止技術 3. 内燃機関の公害とその防止技術 4. 原子力公害とその防止技術 5. 地球環境保全の三つの柱	同　上
15	エネルギー工学の課題と展望	1. エネルギーと環境危機 2. エネルギー技術の目標 3. エネルギー消費の将来 4. エネルギーパスの選択	同　上

＝都　市　計　画＝（TV）

〔主任講師：石原舜介（明 海 大 学 教 授）
主任講師：阪本一郎（東京工業大学助教授）〕

全体のねらい

現在の都市問題に対処し将来に向けて都市をより住み良いものにしていくためには、都市に参加する人々が都市について深い認識を持つことが不可欠である。本講義は、都市計画の法律制度を解説するものではなく、また、都市計画の全体像を示すものでもない。今日の都市が抱える代表的課題を取り上げ、都市そのものへの理解を深めつつ都市計画の基本的考え方を学ぶことをねらいとする。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	都市をとりまく環境の変化	1. わが国の都市化 2. 都市をとりまく環境の変化	石　原　舜　介 （明海大学教授）
2	土地利用のコントロール	1. 都市の形成について 2. 土地利用計画の必要性 3. 市街化区域および市街化調整区域 4. 地域・地区制 5. 地区計画制度 6. その他の制度と今後の展望	同　上
3	土地利用の基礎	1. 土地利用の指標 2. 土地利用と環境 3. 土地利用の実態	阪　本　一　郎 （東京工業大学助教授）
4	土地利用のしくみ	1. 土地利用の諸現象 2. 都市立地者の土地要求 3. 土地利用決定の均衡論的理解	同　上
5	土地利用の推移	1. 土地利用変化の促進要因 2. 土地利用変化の抵抗要因 3. 用途混合地域の成立	同　上
6	土地価格の形成	1. 土地の資産としての評価 2. 土地価格を表す数値 3. 価格形成の基礎的なしくみ 4. 土地価格に影響をもたらす要因	同　上
7	土　地　の　供　給	1. 土地需要への対応 2. 高度利用の方法	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	公共投資と都市振興	1. わが国の都市基盤施設の遅れ 2. 都市基盤施設整備の計画 3. 公共投資と地域振興	石原舜介
9	宅地開発と開発利益	1. 宅地開発の現状 2. 宅地開発の予測 3. 宅地供給事業 4. 開発利益の還元	同上
10	都市再生の課題と方法	1. 都市再開発の目的 2. 再開発事業の方法 3. 再開発の種類 4. 区域の大きさと再開発 5. 日本の再開発の流れ	深海隆恒 (東京工業大学助教授)
11	コミュニティ・デベロップメント	1. コミュニティの形成 2. 都市住宅の種類 3. 住宅、住宅地の整備 4. わが国の住宅および住環境整備	同上
12	都市産業の振興	1. 産業構造の変化 2. 産業構造変化の背景 3. 産業振興のメカニズム 4. 都市の情況 5. 産業振興の例	同上
13	快適環境の創造	1. うるおいのあるまちづくり 2. 都市美運動 3. 楽しい空間の例	同上
14	都市災害への対策	1. 物的被害から機能被害へ 2. 地域の危険度と被害の想定 3. 災害対策の概要 4. 災害に強いまちづくりへむけて	梶秀樹 （筑波大学教授）
15	都市計画の新たな視点	1. わが国の都市社会の変化 2. 均衡のとれた国土開発 3. 土地の合理的利用 4. 住宅・都市の再生 5. 都市インフラストラクチャーの整備 6. 都市の環境	石原舜介

＝基礎電子工学＝（TV）

〔主任講師：小川鑛一（東京電機大学教授）〕

全体のねらい

電子応用技術は航空宇宙機器、ロボットなどの先端技術から一般家庭用電気製品に到るまであらゆる分野に浸透している。電子技術なくして今日の日常生活は成り立たないと言っても過言でないほどこの分野は発達した。こうした電子応用技術の一端が少しでも理解できるようにとの願いをこめ、本講義は極めて基礎的な電子工学について実験を交えながら分かり易く解説する。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	直流回路	電流、電圧、抵抗との間に成りたつ電気回路の基本オームの法則をまず説明する。続いて、抵抗の直列回路、並列回路、回路計算上の基礎となるキリヒホッフの法則について説明し、直流回路の電流と電圧との関係について考察する。	小川鑛一（東京電機大学教授）
2	交流波形と信号波形	交流とは正負交互に繰り返す電力や電気信号である。交流波形には各種様々なものがある。ここでは、次章以降で学習する交流回路理論の基礎として、基本交流波形（正弦波）の数学的表現や特徴について述べる。	同上
3	交流回路解析の基礎	交流電気が通る道を交流回路という。交流回路では抵抗に加え、交流に対する広義の抵抗であるコイルやコンデンサが使用される。それらはインピーダンスといい、数学的には複素数や交流ベクトルを用い回路解析を行うことが多い。ここではそれらの数学的基礎について詳しく述べる。	同上
4	交流回路	直列回路・並列回路のインピーダンス、交流の複素数・ベクトル表示、交流回路の電圧と電流との関係、回路の周波数特性、直列共振など交流回路に関する基本事項について述べる。	同上
5	ダイオード回路	ダイオードには交流を直流に変換する整流作用がある。この整流特性についてまず述べ、続いて整流作用を利用した半波整流回路、全波整流回路、理想の直流に近付けるための平滑回路、さらにはその応用としてクリッパー回路、論理回路の一端について述べる。	同上
6	トランジスターの基礎	トランジスタには電流の増幅作用とスイッチング作用がある。ここではトランジスタの増幅作用を理解するため、入力特性、電流伝達特性、出力特性からなる静特性と負荷線について述べ、増幅の基本原理について考える。	同上
7	トランジスタによる電圧増幅	トランジスタで信号増幅を行うためには使用するトランジスタに抵抗、コンデンサなどの回路素子を接続し、さらに直流電源から電圧を加える必要がある。ここでは入力信号を増幅するため、トランジスタに抵抗を接続し、電源から適切な電圧を加える方法について述べる。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	特殊半導体	ダイオードやトランジスタ以外にもサーミスタ、ホトダイオード、ホトトランジスタ、CdS、ツェナー、ダイオード、発光ダイオード、サイリスタなど数多くの半導体素子がある。ここでは、それら半導体の特性の概要と基本動作について述べる。	小川鑛一
9	オペアンプの基礎	オペアンプとは演算増幅器と訳され、応用範囲の広い半導体増幅要素である。これは、トランジスタを数十個使用した増幅度の極めて高いリニア集積回路（ＩＣ）である。ここでは、この素子の特徴とその動作原理について述べる。	同上
10	オペアンプ増幅演算回路	オペアンプは、加減算、微積分などの演算が行えるアナログ増幅器として広く電子回路に応用されている。ここでは、そのようなアナログ演算の動作原理について述べる。また、その特徴と具体的な応用の一端についても触れる。	同上
11	センサと制御	測定量を信号に変換する系の最初の要素をセンサという。最近のセンサには検出機能と増幅機能を持たせ一段とエレクトロニクスを進めたものもある。ここでは、電子工学的に見たセンサと制御系との関係について考察する。	同上
12	電子制御	制御とは目的に適合するように対象に所要の操作を加えることをいう。ここでは電圧、電流、温度、照明などのように動きが見えない制御対象の電子制御について述べる。	同上
13	機械制御	機械に所要の動きを与えるためには電子回路が必要である。このような機械工学と電子工学を融合させたものをメカトロニクスという。ここでは、機械の原動力であるモータを電子的に動かすための方法について述べる。	同上
14	デジタル技術	身近な家庭電気製品にもエレクトロニクス技術が導入されている。これら技術の背景にはセンサ技術、デジタル技術がある。ここでは、デジタル技術が各種製品に利用される理由とその基礎であるＡＮＤ、ＯＲ論理回路をリレー回路とＩＣ回路で比較検討する。	同上
15	論理回路	電子技術が広く普及したのは、各種のアナログ、デジタル半導体集積回路と大小様々なデジタル・コンピュータが発達したお蔭であるといえる。ここでは、デジタル技術において重要な役割を果たす論理回路による電子的記憶の原理とフリップ・フロップの動作原理について考察する。	同上

＝土木工学＝（ＴＶ）

〔主任講師：中村英夫（東京大学教授）〕

全体のねらい
社会を支える基盤施設（インフラストラクチャー）をつくる技術体系である土木工学の大要を理解することを目指す。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	社会資本と土木工学	1.社会資本とその特質 2.社会資本整備の目的と効果 3.土木工学の体系 4.土木事業の計画から運用まで	中村英夫 （東京大学教授）
2	土木の歴史	1.古代…ギリシャの科学とローマの技術 2.中世からルネッサンスへ 3.土木工学の成立…フランスにおける土木事業と基礎理論の発展 4.産業革命と鉄道の発展…イギリスにおける土木技術の発展 5.大規模土木事業の展開…アメリカの近代土木事業 6.近世から明治初頭への日本の国土整備 7.近代社会資本の基礎固め…19世紀後半より20世紀前半へ 8.現代のインフラストラクチャー整備	同上
3	構造物の強さ	1.土木構造物 2.構造物に作用する力のつりあい 3.構造物の内部に生じる力 4.構造用材料の力学的性質 5.構造物の形と応力の分布	三木千寿 （東京工業大学助教授）
4	構造物に作用する外力	1.荷重の種類 2.荷重の性質 3.荷重の組み合わせ	同上
5	構造物の設計・工事・管理	1.設計のプロセス 2.構造物の限界状態と安全性の評価 3.工事 4.管理	同上
6	土と基礎	1.土とはどういうものか 2.建設材料としての土 3.構造物を支える基礎	今井五郎 （横浜国立大学教授）
7	地下空間の利用	1.開削による地下空間の創造 2.トンネル空間の創造 3.大深度地下空間の創造	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	地盤と災害	1.広域地盤沈下 2.降雨による斜面崩壊 3.地震による砂地盤の液状化	今井五郎
9	海岸の自然・利用・保全	1.海岸の利用と災害 2.沿岸の波と流れ 3.漂砂と海浜変形 4.海岸の保全と利用	渡辺晃 （東京大学教授）
10	河川の現象と制御	1.河川の利用と治水 2.河川の流れ 3.流砂と河川地形 4.治水と親水	同上
11	交通施設と運用	1.交通の研究 2.交通流分析 3.幾何設計 4.交通運用 5.交通計画 6.新しい交通システム	森地茂 （東京工業大学教授）
12	都市計画と都市施設	1.都市計画の変遷 2.法定都市計画の内容 3.都市計画の実現 4.都市計画の研究	同上
13	水の循環	1.気象・水文学 2.流域からの流出 3.水資源とダム 4.浄水場と水道 5.雨水汚水の排除 6.地盤地下と地下水汚染	松井三郎 （京都大学教授）
14	都市廃棄物の管理	1.ゴミの発生量と収集 2.焼却方法 3.産業廃棄物処理処分 4.埋立方法 5.跡地利用 6.し尿処理 7.下水処理 8.下水汚泥の処理と処分	同上
15	都市環境の改善	1.大気環境の改善 2.騒音と振動 3.都市景観と緑 4.河川水質とウォーターフロント開発 5.富栄養化と湖、湾、瀬戸内海 6.地球環境問題	同上

＝経営と創造性＝（R）

〔主任講師：穐山貞登（芝浦工業大学教授）〕

全体のねらい

創造性の研究が、今日期待されもし、さすがに重要な問題に迫りつつあることを示しながら、そこで扱われている諸問題を解説する。これが、個人の心理的過程、最近の組織の変革、技術開発をはじめとする諸条件の変化にともなう社会生活の変動を視野に入れての研究活動であることを、とくに心がけたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	創造性研究のはじまり	ギリシャ時代にも発端があり、前世紀末にもロンブローゾの天才病理説が第1の波を生み、1930年頃からはウエルトハイマーの生産的思考の心理学が第2の波となり、1950年以降はギルフォードの拡散的思考の因子分析を中心に極めて広い第3の動向が世界中にひろがった。 第1の波には「無意識」の問題、第2の波には「問題解決」の過程、第3の波には計量的な「尺度構成」や「能力開発」、「マネジメント」の技法にわたる諸問題への広がりがあり、ユタ会議に代表されるような創造性研究の集大成に向かってきた。「創造工学」という言葉や考え方は、この第3の波の中に生まれて、今日、改めて考え直されるところがある。今日もう1度生まれる波を見定める時にきている。	穐山貞登（芝浦工業大学教授）	穐山貞登（芝浦工業大学教授）
2	無意識のエピソード	ポアンカレ、キュレル、メンデレーエフほか、「無意識」の存在、「意識下」からのラッシュ、夢の中での発見といわれるようなエピソードがすくなくない。 「インスピレーション」、「ひらめき」についての研究に見通しがもたれてきた。 他方では－その裏側では－－、類推、ヒューリスティックス（発見法）、発想の論理というような理論的研究も進んできた（この部分は後の章でとり上げる）。	同　上	同　上
3	問題解決の技法	ブレインストーミングはよく知られている。 ＫＪ法も広まった。 技法についての関心が高まったことと、プロジェクト・チームの活動のような実績が生まれたことが、新しい時代をつくっている。	同　上	同　上
4	集団思考の自覚	集団思考とはどういう活動であるかという考え方のなかに、さまざまな人間観、能力観、実際的な功罪の指摘、教育・訓練、心理学者の実験的な研究のあり方など、現代の問題が実に多く含まれている。 集団思考のソロ（独奏）という考え方をとり上げて、問題の要点を検討することができる。	同　上	同　上
5	めざましい実用化	液晶をはじめ、日本で実用化した工業技術はめざましい。 今日、「実用化」という問題解決プロセスが注目される。 しかし、根本の基礎原理は日本で発見されてはいない、といわれる。 日本人の習慣や日本の社会的な条件を検討することも大切であるが、人間の能力とか、生き方はどういうものかを反省する必要がある。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
6	「勘」と試み	「“運がよかった”、“ラッキーだった”ということの実際と理論」といえば、いかにも軽口をたたく表題であるが、発見偶然説から、果報は寝て待ての諺まで、一通りの理論がある。 「試行錯誤」をどう考えるかは、能力の鍵でもある。 「コンピテンス」という概念には注目される。これは「自分にできそうな感じ」をもつことに相当する。	穐山貞登	穐山貞登 黒沢一清(放送大学教授) (対談予定)
7	いかなることの「けはい」を感じ取るのか?	いいあらわしにくいことがらが、古くから少なくない。「意地」、「センスのよさ」、「洞察」、「思いつき」などがそれである。 コストが少なくてすむならば開発するという技術もあれば、コストがどうあろうと開発しなければならない技術もある。後者であることを感じ取るのは、非合理的な思考過程であるとはいえない。 他方、「新しい」とはどういうことかを定義をしようとする研究があり、思考過程での操作を分析する研究もある。	同上	穐山貞登
8	拡散的思考の啓発	流ちょうさ、柔軟さ、あいまいさにたいするトレランス、エラボレーションなどの構成要素が見出されている。 学習の学習、発見学習などの改まった教育の研究が行われている。 創造性テストと呼ばれるものがつくられている。	同上	同上
9	創造性の評価	評価しようとすること自体が創造性を疎外するという考え方がある。 問題解決の成功予測ができそうであるという研究もある。 創造活動を考えるというだけで、従来の「知能」、「業績」、「評価」、「組織」などの理論に変化がもたらされている。	同上	同上
10	創造的な仕事をする組織	プロジェクト・チームのマネジメントは、最近の実績であり、文化的な経験であるといえる。 新しい型の組織が生まれようとしている。 しかし、創造的な仕事は、さらにマネジメントの及ばないところにあるという考えを否定することができない。	同上	同上
11	創造活動には一貫性がない	今日までの創造活動を批判することも必要であり、社会生活に迷惑をかけてきた点も見逃せない。 大ぜいの人びとに「無理を強いる」ような活動を、美化してすすめることはまちがいであろう。	同上	同上
12	人間的な要因への関心	工業化社会での生産工程の研究が進む時、人間的な要因への関心もたかまってきた。個人差、動機づけ、パーソナリティー、役割分化などは、心理学の問題であるだけではない。とはいいながら、さまざまな専門的活動を総合する試みは、まだ未熟である。 それでも、技術革新の実績と人間的な要因に対する高い関心が、「創造工学」というような造語を通用させるようになったことは確かである。 芸術論のほうは飛躍的な変化をしていないようである。	同上	穐山貞登 黒沢一清 (対談予定)

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
13	創作過程の見えやすさ	創造的な仕事の過程（広く創作過程といってみるとして）は、秘められている向きがあり、当事者にも説明しにくく、子細に観察することができないできた。これをあからさまにしようとする動きがないではない。 創作過程は、けっして一様ではなく、多様化している。	穐山貞登	穐山貞登
14	日常の創意	社会的な活動の変わり様が、創造性の考え方や日常の生活様式にも影響を及ぼすにちがいない。むろん、よいことばかりが起こるわけではないであろう。 日常のささやかな創意から、知識の体系を動揺させる大発見や、感動を呼ぶ芸術の創作、さらには宗教的な信仰まで、なにを「創造」というのかという議論は絶えない。これが決まらない間は、研究もできないという人さえいる。しかし、広くも、狭くも、問題を見定めるなら、研究はできる。	同上	同上
15	今後の難問題	創造的な問題解決を要する難問題が、今後提起されるにちがいない。技術開発ばかりでなく、深刻な社会問題も起こる。 誰が、どのように対処するか、可能な用意と覚悟をしておかなくてはならない。 「問題を発見する」のではなくて、「問題がさし迫っている」といえる。	同上	同上

＝ 産 業 情 報 論 ＝（Ｒ）

〔主任講師：藤本義治（名古屋市立大学助教授）〕

全体のねらい

現代の産業社会は、情報が決定的に重要な役割を果たす情報化社会である。この情報化を促進させたのは、第一にコンピュータ・情報通信技術であり、ハード・ソフト両面の技術進展は目ざましい。この講義では、情報技術の進展を講じるとともに、情報がいかに産業社会にインパクトを与えるのか論じる。

回	テ ー マ	内　　容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	産業と情報	現代の産業社会は、ますます情報化が進行している。ここでは、情報の意義、特性、および情報化社会の背景などについて述べ、あわせて講義のアウトラインを示す。	藤本義治（名古屋市立大学助教授）	藤本義治（名古屋市立大学助教授）
2	産業の情報化	産業における情報化はいかに達成されているか述べ、産業の情報化指標を用いて情報化の現況を説明し、さらに今後の予測を行なう。	同　上	同　上
3	情報の産業化	情報に関与する情報産業とはいかなるものか説明し、この種の産業が成立する背景を考察する。さらにその現状、およびその将来について論じる。	同　上	同　上
4	情報の伝達 (1)	情報の伝達には、現在、有線と無線の電気通信網が利用されている。その原理を、電話のつながるしくみから始めて、データ伝送、さらに自動車電話等の移動通信および衛星通信まで説明する。次に、それらを支える国内、国際制度について説明する。	横山光雄（郵政省通信総合研究所部長）	横山光雄（郵政省通信総合研究所部長）
5	情報の伝達 (2)	現在のＩＳＤＮの中身を詳しく説明し、次に将来の広帯域ＩＳＤＮ、さらに21世紀に実現が期待されているＵＩＣＮ（統合知的通信網）について説明する。通信と放送の融合、およびそれにともなう社会生活の変化等を説明する。	同　上	同　上
6	オフィスオートメーション (1)	オフィスオートメーション（ＯＡ）の目的、対象および影響について述べ、時代とともにどのように変遷してきたか論ずる。そして効果的なＯＡを実現するためのアプローチを示す。	魚田勝臣（専修大学教授）	魚田勝臣（専修大学教授）
7	オフィスオートメーション (2)	コンピュータ、ワードプロセッサなどの単体機器および電子会議、電子メイルなどの複合システムについて概説し、技術および応用面における今後の展望を試みる。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	人工知能 (1)	人工知能（ＡＩ）とは何かについて、その特徴、考え方、手法、対象領域および歴史的発展過程などを通して論ずる。さらに問題解決を行うときの代表的なＡＩアプローチについて、その概要と特徴を説明する。	伊藤謙治（東京工業大学助手）	伊藤謙治（東京工業大学助手）
9	人工知能 (2)	現在産業界でＡＩアプローチを利用した現実システムとして最も適用の多いエキスパート・システムについて、システムの構造とこれによる問題解決のメカニズムを説明する。さらにエキスパート・システムの構築方法とそこでの問題点を示す。	同上	同上
10	情報システム論 (1)	これからの新しい時代を支えるための情報技術活用の新展開として、ＳＩＳ（戦略情報システム）の基本的フレームワークとその要件、さらに構築方法を概説する。	佐藤正春（㈱富士通システム総研・シニアマネジングコンサルタント）	佐藤正春（㈱富士通システム総研・シニアマネジングコンサルタント）
11	情報システム論 (2)	今後、企業には長期的ビジョンに基づき、情報を有効に活用した迅速、かつ的確な意思決定が要請される。そのための意思決定支援システムのフレームワークと要件を概説する。	同上	同上
12	情報と立地 (1)	経済活動の立地には、労働費、輸送費などの立地因子のみならず、情報要因も強く関与する。ここでは情報産業を対象とし、その立地を情報要因との関連で考察する。	藤本義治	藤本義治
13	情報と立地 (2)	企業内のＲ＆Ｄ部門の立地に影響を与える要因は種々のものがあるが、そのなかでも情報要因は特に強い影響力を持つ。Ｒ＆Ｄ部門の立地を情報要因の枠組みのなかでとらえ、考察する。	同上	同上
14	情報ネットワーク　産業社会論 (1)	情報ネットワーク産業社会とはいかなるものか、それと情報の技術的側面との対応を考慮しながらどのような視点が可能であるのかを論じ、あわせてその動向について説明する。	同上	同上
15	情報ネットワーク　産業社会論 (2)	情報ネットワーク産業社会において発揮される範囲（スコープ）の経済、連結の経済について、主として産業立地論における集積利益のとらえ方に基づき論じる。	同上	同上

＝情報管理学＝（ＴＶ）

〔主任講師：高橋三雄（筑波大学教授）〕

全体のねらい

パソコンの普及によってコンピュータが身近な存在になった。コンピュータはオフィスの日常的なツールであるとともに、やがては企業の管理者にとっても意思決定活動のツールとして活用されるだろう。意思決定活動は、当面する問題の所在を認識し、問題解決のための代替案を探索し、代替案を評価し、代替案の中から特定の案を選択するといった活動を含む。本講義ではこの意思決定活動の各段階でコンピュータがどのような役割を果たす可能性があるかを検討する。講義を具体的にするために、実際のパソコンソフトを題材にする。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	意思決定のフレームワーク	講義全体の導入部として、意思決定活動のフレームワークを検討し、その中で情報の役割を議論する。意思決定にとって情報が基本的に重要であることを理解し、情報の大きな部分がコンピュータに依存する時代になっていることを示す。さらに企業における意思決定の特徴をリストアップし、そこでの情報の必要性とコンピュータ利用の可能性について検討する。人間が持つ知識や経験が重要であることを認識しながら、今回の講義ではもっぱら、意思決定におけるコンピュータ利用の可能性を学ぶこととし、次回以降、具体的なソフトのデモを含めた講義を行って行く。	高橋三雄（筑波大学教授）	高橋三雄（筑波大学教授）
2	シミュレーション分析（その１）	企業ではメインフレーム、オフコン、ワークステーションそしてパソコンがそれぞれの役割を果たしている。本講義ではデモ用のために、コンピュータの具体例としてパソコンおよびパソコンソフトを使うことを説明する。そして最初の例として、表計算ソフトを紹介するとともに、簡単な利益計画を作成し、What if 分析を行う。	同上	同上
3	シミュレーション分析（その２）	目標実現のための条件を求める目標計画法について述べる。さらに、不確実性のもとでのシミュレーション分析について、具体的なモデルを構築し、分析してみる。分析から得られるリスクプロフィールについて説明する。	同上	同上
4	本格的なモデリングツール	シミュレーション分析のための表計算ソフトの問題点を指摘し、本格的なモデリングソフトを紹介する。できれば部分的にでもワークステーション用のソフトを取り上げたい。	同上	同上
5	システムダイナミックス	企業の問題を一つのシステムとして分析しようとするシミュレーションにシステムダイナミックスがある。ここではこのシステムダイナミックスの考え方について、具体的なソフトを使ったモデル構築にもとづいて、説明する。	同上	同上
6	情報の収集と利用（その１）	カード型データベースを紹介し、簡単な販売ファイルを構築してみる。また、売れ筋商品を検索してみる。	同上	同上 鈴木久敏（筑波大学助教授）
7	情報の収集と利用（その２）	リレーショナル型データベースソフトを紹介し、顧客ファイルと販売ファイルをリンクしてみる。また、フリーフォーマット（自由形式）な情報の収集、維持の重要性を指摘し、そのためのソフトを具体的に紹介する。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	情報の収集と利用（その3）	オンラインデータベース、CD－ROMデータベースにもとづいて、外部情報の収集、検索を行ってみる。	高橋三雄	高橋三雄
9	アイデア創出のためのコンピュータ支援	問題解決のための代替案を検索することは意思決定者の知識や経験、直感に頼るところが大きい。しかし、莫としたアイデアを具体的なイメージにあらわし、関係者の議論の中でさらに練り上げていくことが有効である。ここではこうしたアイデア表現のためのアプローチとソフトを取り上げる。	同上	同上
10	グループ文書作成支援	グループによる意思決定において、特定の代替案をあらわす文書に対して、さまざまな関係者が手を加えていくことだろう。このようなグループによる文書作成をコンピュータがどのような形で支援できるか、具体的なソフトを検討する。	同上	同上
11	グループウェアの可能性	グループ文書作成をはじめ、グループによる意思決定を支援するコンピュータ活用はCSCW(Computer Supported Corporative Works)とかグループウエアとよばれる。ここではグループウエアについて概説するとともに、コンピュータネットワークの重要性を述べる。また、遠隔地の間で同一の画面を共有して分析を行うことを可能とするリモートコントロールソフトを紹介する。	同上	同上
12	代替案の評価	設備投資を具体例にしながら、表計算ソフトの上での代替案の評価方法について紹介する。	同上	同上
13	代替案からの選択（その1）	代替案からの選択は経営科学の大きな課題である。ここでは制約条件のもとでの最適化手法として線形計画法をとりあげ、その分析のためのコンピュータソフトを紹介する。	同上	同上 鈴木久敏
14	代替案からの選択（その2）	複数の関係者が複数の代替案の中からさまざまな評価基準にもとづいて特定の案を選択していくことになるが、この選択の過程はAHP（Anaiytic Hierachical Process）とよばれるフレームワークにあらわすことができる。ここではこのAHPにもとずく代替案選択のためのコンピュータソフトを紹介する。	同上	同上
15	経営者支援システム（EIS）	経営トップにとって、コンピュータ支援はどこまで可能だろうか。最近、EISとよばれるシステムが話題になっている。EISのねらいとその現状について、Systemw, Commander EIS などの具体例にもとづいて検討する。	同上	高橋三雄

＝現代中小企業論＝（Ｒ）

〔主任講師：瀧澤菊太郎（中京大学教授）〕

全体のねらい

中小企業に対する関心は、1970年代以降、世界的に高まっている。また、日本での中小企業観や中小企業問題も近年大きく変わりつつある。専門科目の水準を保持しつつ、できるだけ平易に、現代の中小企業を、学際的・総合的に明らかにすることが、この「現代中小企業論」の担いである。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	中小企業とは何か	1. 世界的な中小企業関心の高まり (1) 国際中小企業会議の発展 (2) 世界各地での中小企業関心の高まり 2. 世界各国での「中小企業」の表現と定義 (1) 世界各国での「中小企業」の表現 (2) 世界各国での「中小企業」の定義と範囲 3. 日本での中小企業本質論の展開 (1) 第2次大戦前における展開 (2) 第2次大戦後における展開 4. 認識意義型中小企業本質論 (1) 中小企業認識の必要性 (2) 認識意義型中小企業本質論の分類	瀧澤菊太郎（中京大学教授）	瀧澤菊太郎（中京大学教授）
2	問題型中小企業認識論	1. 問題型中小企業認識論の特色と分類 2. 淘汰問題型中小企業認識論 3. 残存問題型中小企業認識論 (1) 残存問題型中小企業認識論の特色 (2) 生物学的説明　(3) 不完全競争的説明 (4) 適度規模的説明　(5) 非経済合理的説明 4. 格差問題型中小企業認識論 (1) 格差問題型中小企業認識論の特色 (2) 格差問題と日本の中小企業問題	同上	同上
3	日本での中小企業問題の推移	1. 明治・大正期の先駆的中小企業問題 (1) 明治期の在来産業問題　(2) 大正期の小工業問題 2. 第2次大戦前と戦時中の中小商工業問題 (1) 中小工業問題の発生　(2) 中小商業問題の発生 (3) 戦時中の中小商工業問題 3. 第2次大戦後の中小企業問題 (1) 戦後復興期の中小企業問題 (2) 高度経済成長と中小企業問題 (3) 高度経済成長と規模間格差 (4) 高度経済成長後の中小企業問題	同上	同上
4	貢献型中小企業認識論	1. 貢献型中小企業認識論の特色と分類 2. 開発貢献型中小企業認識論 (1) 開発貢献型中小企業認識論の背景 (2) 開発貢献型中小企業認識論の特色 3. 需要貢献型中小企業認識論 (1) 需要貢献型中小企業認識論の背景 (2) 需要貢献型中小企業認識論の特色 4. 競争貢献型中小企業認識論 (1) 競争貢献型中小企業認識論の背景 (2) 競争貢献型中小企業認識論の特色 5. 苗床貢献型中小企業認識論 (1) 苗床貢献型中小企業認識論の背景 (2) 苗床貢献型中小企業認識論の特色	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
5	日本中小企業の地位と存立分野	1. 日本産業に占める中小企業の地位 (1) 産業全体でみた中小企業の推移 (2) 産業別にみた中小企業の推移 (3) 先進国での中小企業の推移 2. 中小企業の産業別構成 (1) 事業所数でみた産業別構成 (2) 従業者数でみた産業別構成 3. 大企業との規模間格差の推移 (1) 製造業での規模間格差の推移 (2) 卸・小売業での規模間格差の推移 4. 金融面での中小企業の地位	瀧澤菊太郎(中京大学教授)	瀧澤菊太郎(中京大学教授)
6	国際化と中小企業	1. 日本経済の国際化、世界化 (1) 「消極的国際化」と「積極的国際化」 (2) 重化学工業化・高加工度化と貿易黒字拡大 2. 国際化と中小企業 (1) 国際化が中小企業に与えた影響 (2) 中小企業での生産・輸出入構造の変化 (3) 国際化への中小企業の対応と施策 3. 中小企業の海外進出 (1) 中小企業海外進出の増大とその背景 (2) 中小企業海外進出の実態 (3) 中小企業海外進出の問題点と対応 (4) 中小企業の技術移転	瀧澤菊太郎	瀧澤菊太郎
7	技術革新、情報化と中小企業	1. 技術革新と先端技術 (1) 技術進歩と第3次技術革新 (2) 先端技術の意味と内容 2. 先端技術と中小企業 (1) 先端技術の発展と中小企業への影響 (2) 中小企業での先端技術の利用、開発、生産 (3) 中小企業への先端技術導入の問題点と対策 3. 情報化の進展と高度情報社会 (1) 情報の内容と情報化の意味 (2) 戦後の日本における情報化の意味 4. 情報化の進展と中小企業 (1) 中小企業での情報化の進展 (2) 中小企業情報化の問題点と対策	同上	同上
8	消費、流通の変化と中小企業	1. 消費の変化と中小製造業 (1) 消費変化の特色と背景 (2) 消費変化への中小製造業の対応 2. 消費、流通の変化と中小卸売業 (1) 流通活動・機能の内容と変化 (2) 日本における卸売業の特色 (3) 消費・流通変化への中小卸売業の対応 3. 消費、流通の変化と中小小売業 (1) スーパーの発展と「大店法」 (2) 消費・流通変化と多様な小売業態の出現 (3) 消費・流通変化への中小小売業の対応	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
9	サービス経済化、金融自由化と中小企業	1. サービス経済化の進展とその背景 (1) サービス経済化の進展 (2) サービス業の特色と分類 (3) サービス経済化進展の背景 2. サービス経済化の進展と中小企業 (1) 中小サービス業の増大と比重減少 (2) 低成長中小企業型サービス業 (3) 大・中小企業併存成長型サービス業 (4) 高成長中小企業型サービス業 3. 金融自由化と中小企業 (1) 金融自由化の進展とその背景 (2) 金融自由化の進展と中小企業	瀧澤菊太郎	瀧澤菊太郎
10	下請分業構造と中小企業	1. 戦前の日本での下請分業構造 (1) 日本の下請分業構造の特色 (2) 戦前の日本での下請分業構成の生成 2. 戦後の日本での下請分業構造 (1) 下請分業構造の復活と展開 (2) 下請中小企業の推移と現状 (3) 下請分業構造変化の傾向 3. 日本での下請分業構造の見方 (1) 「問題性重視型」下請分業構造論 (2) 「効率性重視型」下請分業構造論 4. 下請中小企業施策の展開	同上	同上
11	地域経済社会と中小企業	1. 地域での中小企業の役割と地域間格差 (1) 地域経済社会での中小企業の役割 (2) 地域間格差の推移 2. 地域経済社会と中小工業 (1) 三大圏と地方圏の中小工業 (2) 産地中小企業の実態と役割 (3) 産地中小企業の動向と施策 3. 地域経済社会と商店街 (1) 地域経済社会と近隣型商店街 (2) 近隣型商店街の問題点と対応の方向	同上	同上
12	中小企業での雇用と労働条件	1. 中小企業従業者の特色 (1) 自営業主と家族従業者の就業 (2) 中小企業従業者の年令別構成の特色 (3) 中小企業での女子従業者の特色 (4) 中小企業従業者の学歴と勤続年数 2. 中小企業労働者の労働条件 (1) 中小企業労働者の賃金 (2) 中小企業労働者の労働時間等の労働条件 3. 労働力需給と中小企業 (1) 労働力需給と中小企業の人手不足 (2) 人材問題への中小企業の対応	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
13	中小企業の開・廃業と成長・衰退	1. 中小企業の開業 (1) 中小企業の開・廃業についての見方の変遷 (2) 中小企業の開業率と創業者 (3) 中小企業の開業率低下と創業促進施策 2. 中小企業の衰退・消滅 (1) 中小企業の廃業 (2) 中小企業の倒産 3. 中小企業の成長 (1) 中小企業の成長についての見方 (2) 高度成長後における中小企業の成長 (3) ベンチャービジネス	瀧澤菊太郎	瀧澤菊太郎
14	中小企業の組織化	1. 中小企業組織化の意義・必要性と効果 (1) 中小企業組織化の意義と必要性 (2) 中小企業組織化の効果 2. 「中小企業等協同組合法」による組織 (1) 中小企業組織の分類 (2) 事業協同組合 (3) 企業組合その他 3. 「中小企業団体組織法」による組織 (1) 商工組合と商工組合連合会 (2) 協業組合 4. その他の組合組織と組合以外の組織 (1) 「商店街振興組合法」による組織 (2) 組合以外の中小企業組織 5. 中小企業組織の問題点と対応の方向 (1) 中小企業組織の問題点 (2) 中小企業組織の今後の方向	同上	同上
15	中小企業政策の体系と方向	1. 中小企業庁の設置と中小企業基本法の制定 (1) 中小企業庁の設置 (2) 中小企業基本法制定の趣旨 2. 中小企業基本法の体系と施策の体系 (1) 中小企業基本法の体系 (2) 中小企業施策の体系と変遷 3. 中小企業観と中小企業政策観の変遷 (1) 昭和44年意見具申 (2) 昭和47年意見具申 (3) 昭和55年意見具申 4. 90年代中小企業ビジョンと今後の課題	同上	同上

＝生活のための工学＝（ＴＶ）

〔主任講師：野呂影勇（早稲田大学教授）〕

全体のねらい

産業に関心を持つ受講生を対象とする。産業に生活起点の発想を生かすための方法や実例を学ぶ。いままでの、理学工学のカリキュラムでは欠けている、生活を観察してここから問題を抽出したり、解析したり、設計に結び付けるための知識や方法をここでは、具体例を含めて教育する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	生活起点の工学	生活から工学（ものを作る技術）へ　そして再び生活へ　生活起点の工学（コンセプト）：生活の様々なシーンから発想する工学・製品を扱う。生活で使う工学・製品を扱う。	野呂影勇（早稲田大学教授）	野呂影勇（早稲田大学教授）
2	人を測る	立った人をはかる、座った人をはかる。生活の原点としての人間のサイズあれこれの知識	同上	中野　広（ワコール 生産統括部長） 大野禎康（商品研究開発センター）
3	人と物の関係について	マン・マシン・リレーション、ヒューマン・インタフェース、エルゴノミクス　視軸のモデル（オフィスの中の人間と周囲環境のモデル）エンジニアリングワークステーションへの応用 立つ人間が生活のなかでどのような状態になっているか→姿勢という概念の導入	八巻良和（東京大学助教授）	八巻良和（東京大学助教授）
4	座ることと立つことの比較	立つことと座ることは、どっちが得か。（座ることがいつもらくとは言えない）以上の前置きの上、生活のなかの様々な椅子と人間　椅子の歴史といろいろな椅子の紹介。事務用椅子の構造と機能　座位姿勢と腰椎の湾曲　デンマークの小学校マンダル型の学校椅子　スツール。　座りやすい椅子を考える	下出真法（社会保険中央総合病院整形外科医長） 宮本博幸（千葉工業大学助教授）	下出真法（社会保険中央総合病院整形外科医長） 宮本博幸（千葉工業大学助教授）
5	表現の方法を学ぶ	基本的な人体とものの関係を図にすることに始まり、使いやすさを図に描いて第三者に理解してもらうための表現の方法を学ぶ。	安達幸四郎（日立製作所デザイン研究所）	安達幸四郎（日立製作所デザイン研究所） 渥美浩章（製品科学研究所）
6	感覚について（官能と感性）	人間の五感を物差しとして対象を計る方法の紹介と人間の感情に訴えかける要素を製品のなかに作り込むためのデザイン支援技術の解説。感性のコンセプトを紹介する。また人間の方のタイプが幾つかに分かれることについても言及する。	野呂影勇	同左
7	人の気持ちを測る色々な方法	ことばの重要性について、まず、強調する。アンケートと官能検査の行ない方。微妙な感覚の扱い方の例として、ヨークルトのやり方を紹介。計算の方法を紹介する。ことばを計る（数値化）－対比較法　ＳＤ法　プロトコール解析、経次範疇法	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	視覚エルゴノミクス	視覚機能から見えやすさや読みやすさを解説する。	野呂影勇	野呂影勇 斉藤進 (労働省産業医学研究所)
9	触覚と情報処理	触覚に関わる情報処理の様子を解説する。スイッチとキー操作の感覚の善し悪しがどのようにデザインされ評価されるかまず紹介する。次いで、人間の肌の感じを手指でセンスするときの仕組みを解説する。	杉浦精一(トヨタ自動車㈱第一車両実験部室長) 飯田一郎(㈱小林コーセー研究所副主査)	杉浦精一(トヨタ自動車㈱第一車両実験部室長) 飯田一郎(㈱小林コーセー研究所副主査)
10	生活の中の災害と安全	まず最初に家庭内の安全がいかに問題になっているのかということを幾つかの例で示す。例えば階段の転落事故、家庭内における転倒、お風呂場における災害時について例を示す。この例は是非NHK等のビデオを拝借する。この中で特に高齢者に焦点を絞り家庭内の安全、特に手すりの付け方について人間の行動や人間の寸法といかに関係しているのかということをここで紹介する。この場合TOTO等に資料の提出を以来する。(問題は割合トライ&トライ等で紹介されていることとちょっと似てくることが考えられて、あるいは見る人に新鮮さを与えないかもしれない。)ついで自動車の安全について、緊急ブレーキ時の反応速度についての実演を行なう。(小諸自動車教習所)反応時間については学会の論文を紹介。特に居眠りをどうやって予告するの研究例を紹介する。現在、車の事故が大きいという統計を示し、その後筑波の自動車研究所のコースで車両を用いた居眠りの実験の様子をビデオで撮影する。このような情報を測定した結果、車の居眠り防止装置を作っていくことを紹介する。この所は日産自動車車両研究所の飯塚晴彦氏にお願いする。	飯塚晴彦(日産自動車㈱中央研究所車両研究部第二研室主任研究員)	飯塚晴彦(日産自動車㈱中央研究所車両研究部第二研室主任研究員)
11	ソフトウェアエルゴノミクス	生活のなかでのソフトについて述べる。次に、認知科学に係わる側面について紹介する。認知科学の応用と具体的な方法を解説する。	山本敏雄(㈱リコー総合デザインセンター) 落合勲(信州短期大学専任講師)	山本敏雄(㈱リコー総合デザインセンター) 落合勲(信州短期大学専任講師)
12	生活指向のデザイン		野呂影勇	野呂影勇
13	デザイン計画のまとめかた	マクロエルゴノミクス、すなわち素人が参加できるエルゴノミクスの考え方を紹介する。次に紹介するのは実際の計画のまとめ方の上で利用できるイメージマップについてである。話題は二つある。	長沢伸也(亜細亜大学講師)	長沢伸也(亜細亜大学講師)

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
14	生活とファジィそして看護	ファジィの方法の解析、ニューロの紹介（長沢先生）デモ（子供の椅子選び）北九州の小学校　渡辺先生、桧原先生次いで、生活の場としての病院看護について紹介する。	野呂影勇	野呂影勇
15	人と人のコミュニケーションの未来	1980年代は人はコンピュータとの間のコミュニケーションについての改善がはかられた時代であった。その様子はどのような具合にはかられたかを画面のデザイン、ソフトウェアのデザイン、あるいはワークステーションのデザインの改善について紹介を行う。また照明などの改善の結果についても紹介を行う。ここは簡単なＶＤＴに関する研究と改善結果の要約で良いと思う。またここで新たなオフィスのデザインが色々と行われていることについても言及する。次いで1980年代に大きく普及された人とコンピュータとの間のコミュニケーションが段々形態的に変化してくる可能性があることを、例えば銀行の端末の利用のされ方、そこにお客さんと行員とそれからその間にコンピュータを介在させて行われるコミュニケーションのやり方、あるいは研究所における二人の人がコンピュータを使いながら行う方法について紹介をする。さらに人と人のコミュニケーションにコンピュータを介在することが例えば、今後多地点テレビ会議のように発展していくこと。またこの発展が今後近くはっきりされる世界的なＩＳＤＮの制定によっても大きく影響されることを述べた上で実際のテレビ会議が今後どのようにデザインが変えられていくのかについてここで紹介する。ここについては三菱電機デザイン研究所の和田さんなどにお願いする。そして残りの半分位の時間をかけて90年代の展望としてさらに未来指向型の技術ということで立体映像と仮想現実感がどのような仕組みで行われるのかという紹介を行う。ここは大頭先生に概説をしていただいてその後で大頭先生と私が対談をすることでまとめたい。また最後の番組だから最後にまとめ言葉を付け、全体を共通した結論を示して締めくくる。	野呂影勇	野呂影勇

＝計測・制御工学＝（ＴＶ）

〔主任講師：森　　政弘（東京工業大学名誉教授）〕
〔主任講師：森田矢次郎（拓　殖　大　学　教　授）〕

全体のねらい

希望通りの結果を得ようと対象になる系を動かすことを制御という。このために系の現状や制御の結果を知る必要があるので計測なしに制御は成立しない。本講義では、社会における計測と制御の学問・技術の活躍状況の解説を背景に、計測と制御の工学に最小限必要な基礎事項を説明し、産業における顕著な応用例を紹介する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	計測・制御の役割	計測と制御は車の両輪のごとく、どちらか一方が欠けても工業という車は走らない。また、両方とも工業を越えた広く深い意味を持つ。ここでは、これから学ぶ計測と制御という学問を概観し、いかに計測・制御工学が産業と技術の各分野に関係するかを考えてゆく。	森　政弘（東京工業大学名誉教授） 小川鑛一（東京電機大学教授）	森　政弘 森田矢次郎 小川鑛一 高瀬国克
2	計測とは	人類誕生以来今日まで、ものを測るということは、その内容、手段、規模を次第に豊富に拡大しながら行われている。ここでは、計測に関する基本原理、応用されている分野、基礎事項、方法、使用される機器やシステムの形態、問題点などの概要について述べる。	森田矢次郎（拓殖大学教授）	森田矢次郎（拓殖大学教授）
3	はかられる対象とセンサ	計測の対象となるものは、人間あるいは機械にとって処理しやすく感知可能な量として変換される必要がある。センサとはこのような物理量、化学量などの間の変換を行う機能を持つ要素である。センサで得られる情報が真に求めたいものである必要を説く。	同　上	同　上
4	計測技術	センサの種類、またその使い方は多種多様である。このようなセンサを使った物理量の計測例を取り上げ、はかりにくいものをはかる工夫、応用の広い測定方法の紹介、制御工学とのつながり、計測技術の最近の話題などについて触れる。	同　上	同　上 小川鑛一
5	制御のすばらしさ	フィードバック制御の原理を人の行動と制御、教育と制御、心の制御、部屋の温度制御などを例に挙げ解説する。制御の二大基本方式であるフィードバック制御とフィードフォワード制御についてその基本原理について詳しく学習する。	森　政弘 小川鑛一	森　政弘
6	プロセス制御とは	制御にはプロセス制御という一分野がある。これは「工業プロセスの状態に関する諸量、例えば温度、流量、圧力、液位、組成、品質、効率などの制御」である。ここではこうした工業プロセスの状態量を制御するための特徴について説明する。	森　政弘 小川鑛一	同　上
7	プロセス制御の応用	石油精製や溶鉱炉のような工業プロセスの状態（石油、高温空気、燃料など）の制御を実際の工業プロセスで実施している様子について学習する。	森　政弘 小川鑛一	同　上 小川鑛一

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	サーボ機構とは	機械量を制御する方式の一つにサーボ機構がある。これは「物体の位置、方位、姿勢などを制御量とし、目標値の任意の変化に追従するように構成された制御系」という意味がある。ここでは機械量の特徴とその制御、つまりサーボ機構について説明する。	森　政弘 小川鑛一	小川鑛一
9	サーボ機構の応用	身近でよく知られているサーボ機構の応用例にロボット、NC工作機械、船舶・航空機などの乗物、宇宙・海洋開発用のロケットやロボット、回転精度が要求されるビデオ、CDなどの音響機器などが挙げられる。ここでは、こうしたサーボ機構応用の一端について述べる。	森　政弘 小川鑛一	森　政弘 小川鑛一
10	シーケンス制御とは	ものの生産には順序が大切である。この順序は英語でシーケンスと言う。シーケンス制御というのは「あらかじめ定められた順序に従って制御の各段階を逐次進めていく制御」という意味である。ここではこのシーケンス制御の基礎について述べる。	森　政弘 小川鑛一	森　政弘 小川鑛一
11	シーケンス制御の応用	ものを生産する工場では大なり小なりシーケンス制御が必ず取り入れられている。ここでは、製造工場を例にそこで実施されているいくつかの典型的なシーケンス制御の実際について学習する。	森　政弘 小川鑛一	森　政弘 小川鑛一
12	ロボットとは	現在ロボットは製造業のみならず、窓拭き、トンネル工事などの人間にとって危険な作業を行うために広く使用されていることはよく知られている。ここでは、こうした作業を行うロボットをはじめ、宇宙や海洋開発で活躍する未来型ロボットなどロボット一般について解説する。	高瀬国克 (電子技術総合研究所知能システム部長)	高瀬国克 森　政弘
13	ロボットと計測	ロボットは人間の五感と同様なセンサを備え、ロボット自身、ロボットが置かれた環境の計測を行いはじめて巧みな動作が実現できる。ここではこうしたロボットにとっての計測や認識、使用するセンサなどについて考察する。	同　上	高瀬国克 森　政弘
14	ロボットと制御	ロボットはこれまでに学習した計測・制御技術を導入した賢い機械といえる。計測・制御技術なくして人間の動きに似たロボットの運動は実現出来ない。ここでは、ロボットの制御技術を軸としてその頭脳ともいえるコンピュータ、制御要素などロボットの構成技術についても学習する。	同　上	高瀬国克 森　政弘
15	まとめ	ここでは、これまで15回にわたり講義した内容についてのまとめを述べる。	森　政弘 小川鑛一	森　政弘 森田矢次郎 小川鑛一 高瀬国克

＝都市計画の基礎＝（TV）

〔主任講師：阪本一郎（東京工業大学助教授）〕

全体のねらい
現代都市計画の課題、課題解決の方法とその有効性、そしてそれらと日本の社会的背景との関わりを学ぶとともに、都市そのものの認識を深めることが本講義のねらいである。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	我が国近代都市計画のあゆみと課題	明治から現代にいたる日本の大都市の状況を概観し、都市計画の課題及びそれへの対応の変遷を大づかみに示す。	堀江興（東京都水道局西部建設事務所長）	堀江興（東京都水道局西部建設事務所長） 坂本一郎
2	都市の構成要素	市街地の構成要素である、敷地、建物、道路、空地等の都市計画的意味を説明し、都市計画を学ぶための基礎知識を学習する。	深海隆恒（東京工業大学教授）	深海隆恒（東京工業大学教授）
3	都市計画のシステム	都市活動を支える交通施設や公園等の都市計画対象のシステムについて、基礎的学習を行う。	同上	同左
4	土地利用のしくみ	都市の土地利用パターンと付け値地代を用いた原理的な説明を行い、自然状態での土地利用の決まるしくみを学習する。	阪本一郎（東京工業大学助教授）	阪本一郎（東京工業大学助教授）
5	都市の変化と市街地の移り変わり	市街地の移り変わりのしくみとその結果もたらされる市街地の様相について述べるとともに、都市のマクロな変化を説明する。	同上	同上
6	土地の価格と需給のコントロール	土地価格形成のしくみを説明するとともに、土地の需給に関する代表的な論点を整理する。	同上	同上
7	宅地開発と社会資本の負担	宅地開発にともなう社会資本整備の費用負担について、区画整理事業や宅地開発要綱等をとりあげながら、問題点やあり方を示す。	小泉允圀（筑波大学助教授）	小泉允圀（筑波大学助教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	市街地整備と再開発規制	市街地形成の規制的手法について国際的な比較を行い、日本の規制手法の特徴と背景を示す。	阪本一郎	阪本一郎
9	市街地誘導の原理と方法	市街地の誘導的手法について考え方や有効性を示し、その中で市街地整備のあり方にも言及する。	同上	同上
10	市街地再生の基本	都市計画の基本的考え方を市街地再生の局面で論じる。	同上	同上
11	都市居住の現代的課題	現代の都市居住の諸問題、すなわち都心居住問題、定住問題、住宅団地の建て替え問題等について論じる。	石原舜介(明海大学教授)	石原舜介(明海大学教授)
12	中心商業地区の変化と魅力づくり	近年の中心商業地区の不振の実態や原因を示し、これまでの方策の展開と新しい魅力づくりについて述べる。	同上	同上
13	都市災害と街づくり	都市災害と対策の歴史を概観し、現代の都市災害の特徴と街づくり上の課題を述べる。	梶秀樹(筑波大学教授)	梶秀樹(筑波大学教授)
14	魅力ある都市の空間づくり	魅力ある都市空間とはどのようなものか、それをいかに創り上げるかを論じる。	深海隆恒	深海隆恒
15	経済社会の発展と都市計画	発展途上国から経済先進国までの都市計画課題の多様性と類似性の把握を通じて、経済社会の発展段階と都市計画の関連を示すとともに、日本の都市計画の将来を考える。	阪本一郎	阪本一郎

＝西洋古代中世哲学史＝（R）

〔主任講師：K．リーゼンフーバー（上智大学教授）〕

全体のねらい

本講義では西洋哲学全体の起源であり、その基盤であり続ける古代哲学と、近世・近代思想の背景を成す中世哲学の基本的理解をめざす。各時代の社会的精神的状況をふまえた上で重要な哲学者を中心に、各思想家に固有な問題提起とその解決の試みの諸特徴を、その思想史的連続性において解明してゆきたい。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	古代哲学の誕生	ヘシオドス イオニア学派　タレス　アナクシマンドロス アナクシメネス ピュタゴラスとその学派 クセノファネス ヘラクレイトス	K．リーゼンフーバー（上智大学教授）
2	ソクラテス以前の哲学	エレア学派 パルメニデス ゼノン 後期自然哲学者 エンペドクレス アナクサゴラス 原子論者 デモクリトス	同上
3	ソフィストとソクラテス	ソフィスト ソクラテス	同上
4	プラトンの哲学	生涯 作品 認識の諸段階とイデア論 分有 学の構造 善への上昇 想起説と魂の不滅 神と世界創造 徳と国家	同上
5	アリストテレスの理論哲学	生涯 作品 方法 認識 存在者の諸原理 変化の原理 不動の動者	同上
6	アリストテレスの実践哲学	学としての倫理学 善と生の目的 徳 知慮 自由選択 友愛と共同体 観想的生	同上
7	ストア学派	ストア学派の発展 学問論と基本原理 論理学 自然学 倫理学	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	新プラトン主義	プロティノス　魂 生　涯　魂の還帰 源泉と中心的意図 世界秩序の諸段階 一者、つまり善 知　性	K. リーゼンフーバー
9	キリスト教哲学の起源	アレクサンドリアのフィロン　二世紀の護教家達 ユスティノス　グノーシス主義 アレクサンドリア学派　アレクサンドリアのクレメンス オリゲネス　カッパドキア教父 大バシレイオス　ナジアゾスのグレゴリオス ニュッサのグレゴリオス　アウダスティヌスの生涯	同　上
10	アウグスティヌスの思想	真理の問題と自己認識　愛と自由 永遠なるものを求めて　時間 神認識と照明説　無からの創造 精神の三一的構造　歴史と社会 内的な言葉　ボエティウス ディオニュシオス・アレオパギテス	同　上
11	十二世紀の初期スコラ学	カロリング・ルネサンス　ヨハネス・スコトゥス・エリウゲナ　十二世紀ルネサンスと初期スコラ学 カンタベリーのアンセルムス　ペトルス・アベラルドゥスと普遍論争　シャルトル学派の自然哲学 クレルヴォーのベルナルドゥス サン＝ヴィクトル学派の学問論	同　上
12	十三世紀のスコラ学とアリストテレスの受容	大学の成立　アラブ哲学とアリストテレス受容 オックスフォード学派　ロバート・グロステスト ロジャー・ベーコン　ボナヴェントゥラ アルベルトゥス・マグヌス 世界の永遠性についての論争と、哲学と神学の関係	同　上
13	トマス・アクィナスの哲学	生涯と著作　人　間 認識論　倫理学 存在者　後世への影響 存在そのもの 神、および人間の神認識 創造、そして神と世界の関係	同　上
14	十四世紀の後期スコラ学	十四世紀の精神的状況　自由、愛、道徳律 ヨハネ・ドゥンス・スコトゥス　ウィリアム・オッカム 生　涯　生　涯 存在と認識　論理と認識 神の絶対的力と倫理 近代自然科学成立の準備	同　上
15	中世の神秘思想と近代への移行	キリスト教神秘主義の歴史　マイスター・エックハルト 生涯　存在理解と類比論　離脱、そして神への突破 魂の根底における神の誕生　影響 ニコラウス・クザーヌス　生涯　知ある無知 対立物の一致　神の「展開」としての世界 小宇宙として、神の似姿としての人間　近代への移行	同　上

＝西洋近代哲学史＝（R）

〔主任講師：中埜　肇（放送大学教授）〕

全体のねらい

ルネサンスから19世紀までの西洋哲学の流れを、代表的な哲学者たちの中心的な問題意識（とくに自然観と人間像と知識論）に重点を置いて論述する。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	ルネサンス	ルネサンス期の哲学思想を決定する「開かれた宇宙像」と「新しい人間観」について考察し、それとの関連で当時の自然科学・自然哲学・人文主義・神秘思想の意味を問う。	中埜　肇（放送大学教授）
2	フランシス・ベーコン	「経験」にもとづいて新しい学問のありかたを提示しようとしたフランシス・ベーコンが描く「知」の構造の近代的な意味とその限界を考える。	同　上
3	デカルト	広範で深遠な問題意識によって「近代思想の父」と称せられるデカルトの哲学的思考を支える「方法」と、それにもとづいて構想された彼の形而上学的世界像を考察し、併せて現代にまで及ぶその射程を眺める。	同　上
4	ホッブズ	唯物論と機械論の視点から演繹的な方法を用いて、物理的自然よりもむしろ社会的人間の考察に重点を置いたホッブズが、社会契約の必然性と国家権力の絶対性を主張したプロセスをさぐる。	同　上
5	スピノザ	哲学の模範と讃えられるほど首尾一貫した汎神論を展開したスピノザの思想が、実は絶対無限な唯一の実体である神に対する信仰からの論理的帰結であったことを明らかにする。	同　上
6	ライプニッツ	17世紀の哲学者のなかで、そのスケールにおいてぬきんでていたライプニッツが構想した総合的・調和的な世界像の基礎にある「モナド論」や「連続律」などの意味を考える。	同　上
7	ロックと英国の啓蒙思想	人間の知識や学問の基礎に批判的な吟味を向けて、17世紀の独断的な理性論の哲学に対抗し、経験論の哲学を定礎することによって哲蒙思想の先頭に立ったロックの思想について述べる。	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	バークリと同時代の思想家たち	ロックによって定められた方向をさらに進めて、「在る」を「知られる」に還元して「物」の実在性を否定したバークリ僧正の考え方を述べ併せて同時代の思想家たちについて概観する。	中埜肇
9	ヒューム	ロック、バークリと続いた経験論の哲学を徹底して懐疑論にまで至ったヒュームの思索のプロセスと、それが持つ深い歴史的な意味とを、とくに因果性の問題などを手がかりにして考察する。	同上
10	フランスの啓蒙思想とルソー	英国に生れた啓蒙思想がフランスに入って唯物論と無神論の方向へラジカルに進む過程と、啓蒙思想とある点で鋭く対立したルソーの思想について考える。	同上
11	ドイツの啓蒙思想とカント	ドイツに入った啓蒙思想のありかたをフリードリヒ大王やヴォルフをめぐる思想状況のなかで概観し、啓蒙の精神を根本のところで継承しながら、これをもっと深めることによって批判哲学を樹立したカントの問題意識を『純粋理性批判』にもとづいて考える。	同上
12	カント（つづき）	その後カントの思想がどのように展開したかを、『実践理性批判』、『判断力批判』、『宗教哲学』などを通して、一貫性において考察する。	同上
13	ドイツ観念論の哲学者たち	カントの哲学には深い謎が含まれていた。この謎を解きながら、カントを受容し批判することによって哲学に新しい展開を与えようとしたフィヒテ、シェリングらの思想的営為について考える。	同上
14	ヘーゲル	ドイツ観念論哲学の頂点であり、近代哲学の総決算であると言われるヘーゲルの、「絶対精神」の哲学およびそれの方法として「弁証法」について述べ、彼の哲学の歴史的意義について考察する。	同上
15	現代思想の先駆者たち	ヘーゲル哲学を根本において、かつ徹底的に批判し、全く新しい哲学的地平を切開いて近代から現代への橋渡しを果したショーペンハウアー、キルケゴール、フォイエルバッハ、マルクス・エンゲルス、ニーチェ、英国功利主義などの思想について考える。	同上

＝ 現 代 哲 学 ＝（R）

〔主任講師：渡辺二郎（東京大学教授）〕

全体のねらい

二十世紀の哲学は、英独仏にまたがって広汎かつ多様な姿で展開されている。しかし何よりも重要なのは、英語圏の分析哲学と、ヨーロッパ大陸の独仏の現象学的存在論の哲学との、積年にわたる対立状況である。今日の私たちは、この対立を乗り越える努力をしなければならない。そうした角度からるず英米哲学を検討してみる。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	現代哲学への視点	哲学とは何か、現代とは何か、そして現代哲学とはいかなる特徴を持つのか、まずこれらの点について序論的説明を行う。現代哲学の特徴は、近代の科学革命を引き継いだ今日において、科学に依拠する英米哲学と、人間的生を省みるヨーロッパ哲学との分裂にある。	渡辺二郎（東京大学教授）	渡辺二郎（東京大学教授）
2	英語圏の哲学とヨーロッパ大陸の哲学との分裂	この分裂状況の具体的提言として、アメリカの哲学者ローティの論述を紹介する。第二次世界大戦後、論理実証主義の流入から始まったアメリカ哲学は、ヨーロッパ伝来の哲学を軽視した。今日この状況は変わりつつある。そのあるべき乗り越えの方向を探ってみる。	同上	同上
3	哲学史的研究の方法態度	現代哲学の考察は、或る意味で、哲学史の研究の一部である。したがって、哲学史をどのように扱うかという基本態度の再確認が重要になる。哲学史的研究はヘーゲルから始まる。ヘーゲルを顧み、メルロ＝ポンティやハイデッガーの哲学史観を辿り直してみる。	同上	同上
4	言語論的転回の前提とその基本態度	さて、現代の英語圏の哲学は、「リンギスティック・ターン（言語論的転回）」を果たした点にその意義が存すると屢々語られる。それで、「言語論的転回」を論じたローティの論述に従い、まず言語論的転回とはいかなることなのか、その前提と基本態度を論ずる。	同上	同上
5	言語論的転回の成果と哲学の可能性	引き続きローティの議論を追って、言語論的転回によって果たして哲学的分析は成功したのかどうかの点を論ずる。そしてその根本に「方法論的唯名論」の態度が伏在することが明らかにされ、ここからさらに、今後のあるべき哲学の可能性が種々議論されてゆく。	同上	同上
6	観念論論駁	言語論的転回という現代英米哲学の一般的特徴を省みたあとは、いよいよ歴史的に主要な英語圏の分析哲学の成果を個別に検討してゆく。まず二十世紀初頭のイギリスのムーアから始め、彼の反ヘーゲル的な、著名な「観念論論駁」の論議の意義を明確に捉え直す。	同上	同上
7	常識の擁護	さらにムーアのもう一つの著名な主張である「常識の擁護」の立場をも把握し直し、正しく評定しうる視点を確立するよう努力する。ムーアは一般に、哲学的分析の創始者であるが、同時にそこには、単なる分析哲学に尽きない現象学的な見方が生きており重要である。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	パラドックスと階型理論	ムーアとほぼ同年輩のイギリスのラッセルが二十世紀の初めに確立したいくつかの重要な見方が、その後永く英米の科学哲学と分析哲学の基礎を形作った。まず何よりも、数理哲学から出発したラッセルは、パラドックスを発見し、階型理論によってこれを解決した。	渡辺二郎	渡辺二郎
9	記述の理論	ラッセルのその階型理論の確立の基礎を提供したのが、ラッセルのもう一つの有名な「記述の理論」である。ここでは、その根本思想を明晰に把握するよう努めた。そして不確定記述と確定記述の双方にわたり、詳細な考察を施し、またラッセルを批判的に吟味した。	同上	同上
10	論理的原子論	ラッセルは、パラドックス・階型理論・記述理論を打ち樹て、それらに通ずる哲学的な根本思想を、「論理的原子論」として展開した。ここにラッセルのいわゆる「事実の存在論」が開陳された。このラッセルの考え方の基本を明確に摑み、捉えるよう努力する。	同上	同上
11	論理実証主義の成立と崩壊	1920年代から30年代にかけてウィーンで「論理実証主義」の運動が起こった。その主要メンバーは後に殆どみなアメリカに亡命し、現代英米哲学の基礎を形作った。とりわけカルナップの形而上学批判は重要で、これを詳細に吟味し、またこの運動の破綻も見る。	同上	同上
12	経験と概念的組織	論理実証主義の狭い経験論は、やがてそれ自身の中で崩壊してゆくが、それを提言するかのように、第二次世界大戦後のアメリカで、クワインが「経験論の二つのドグマ」を批判した。そこに登場した「経験」と「概念的組織」の考え方の意義と射程を捉え直してみる。	同上	同上
13	存在論的関与	クワインは、カルナップの嫌った「存在論」の語を復活させる。そしてラッセルの記述理論をさらに徹底させて、「束縛変項」という考え方でもって、存在論的関与を説く。それがどのようなものであり、真の存在論の復活であるか否かを、詳密に吟味検討してみる。	同上	同上
14	意味と使用と指示	第二次世界大戦後イギリスで、ストローソンは、日常言語の使用法に鋭く着目して、ラッセルの記述理論を批判した。そこには、言語の日常的用法の重要性に着眼する新しい言語分析の台頭が見られる。ストローソンの主張を追いながら、その言語観を吟味してみる。	同上	同上
15	言語行為	同じくイギリスで、新しい言語分析の方向を切り拓いたのが、オースティンである。ここに至れば、命題や陳述に定位していた古い言語論的哲学は乗り越えられ、広く「言語行為」そのものが主題化される。その経緯と主張を顧みて、言語行為論の意義を見極める。	同上	同上

＝社会思想史＝(R)

〔主任講師：城塚　登（共立女子大学教授）〕

全体のねらい

近代の民主主義国家・社会、資本主義社会を形成してきた人たちの社会思想、またそうした国家・社会のはらんでいる深刻な諸問題と対決し、その解決をめざした人たちの社会思想を考察し、現代の高度に発展した社会に生活するわれわれが、人間らしいあり方を確保するためには、どのような国家・社会をめざすべきかを考える。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	近代的人間の登場	近代的な国家・社会は、資本主義経済の発展（産業革命）と市民革命を通じて出現したが、それを担った合理主義的人間はルネサンス期に登場した。マキァヴェリの社会思想を考察することによって、そうした合理主義的人間の社会観を見る。	城塚　登（共立女子大学教授）
2	個人の自立と自由	宗教改革の指導者ルターの宗教思想のなかには、内面的信仰を通じて神と結びつく個人の自立と自由、職業労働の意義が確認されるなど、近代社会を担う人間のあり方が示されている。それはカルヴィニズム、ピュウリタニズムに引継れる。	同　上
3	民主主義思想の成立(I)	ピュウリタン革命に出合ったホッブスは、個人の自然権から出発し、諸個人が社会契約によって国家・社会をつくったという民主主義思想の基礎がある。その問題を考える。	同　上
4	民主主義思想の成立(II)	「王政復古」から「名誉革命」にいたるイギリスにおいてロックは社会契約について考えを進め、「主権在民」の考え方を確立する。	同　上
5	啓蒙思想の展開とロマン主義	ロックの思想は、モンテスキュー、ヴォルテール、ルソー、カントなどの思想家に受けとめられ、啓蒙思想として展開。反動としてシュレーゲル兄弟らのロマン主義が現われる。	同　上
6	「市民社会」への反省	自由と平等を掲げたフランス革命は、流血と専制をもたらした。ヘーゲルは、スミスが解明した「市民社会」のあり方に反省を加え、国家が「市民社会」の活動を制御すべきだとする。	同　上
7	初期社会主義思想	イギリスのオウエンは労働者の生活改善に努め、協同生活・協同労働の村を開いて社会主義を説き、フランスでは科学者と産業者が社会の主導権をもつべきだとサン・シモンが主張した。	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	マルクスの人間解放思想	ヘーゲル哲学から出発したマルクスは、国家は幻想の共同体であるとし、市民社会の自己変革をめざした。そして人間の自己疎外克服を人間解放の課題とする。	城塚　登
9	マルクスの共産主義思想	唯物史観に立つマルクスとエンゲルスは、資本主義が生産力の発展の妨げとなっているとし、生産手段の社会化を中心とする共産主義革命を説く、資本主義の経済学的解明をおこなう。	同　上
10	フェビアニズムと社会民主主義	イギリスの「フェビアン協会」は社会的善の実現をめざし、土地や資本の公有、社会福祉・保障の充実をめざす。ドイツ社会民主党は議会活動による労働者の権利拡大という路線を提出した。	同　上
11	マルクス主義思想の展開	ロシアでマルクス主義を受けとめたレーニンは、資本主義が帝国主義の段階に達したとし、革命を指導し実現した。西欧では、ルカーチ労働者階級の主体的自覚の形成が課題とした。	同　上
12	合理化と官僚制の問題	社会の近代化を合理化の過程としてとらえたヴェーバーは、会社などの集団が官僚制の特徴を示すようになるとし、人間はそれと対決しなければならないと説く。	同　上
13	大衆社会の問題	20世紀、資本主義社会は産業的合理化を進めたが、同時に非合理的行動や激情に走る傾向をもつ大衆が発言力をもった。その病理を指摘したマンハイム、リースマンを見る。	同　上
14	管理社会の問題	情報化社会の人びとの生活全体を制御しているのは、国家と法人大企業の複合機構であるとするガルブレイス、組織された資本主義の新しい問題を指摘したハーバーマスをとりあげる。	同　上
15	人間らしい社会をめざして	近代日本における社会思想の展開を概観し、日本の社会の現状を考える。民主主義、官僚制、大衆化、管理社会化などが日本の特殊性とからみながら引き起す問題にどう対処していくか。	同　上

＝宗教学を学ぶ＝（R）

〔主任講師：阿部美哉（愛知学院大学教授）〕

全体のねらい

宗教の世界は音によって満たされているともいえる。聖なる世界からのメッセージを媒介するものが音である。本講義においては、ラジオのメディアとしての特性を最大限に生かすために、放送講義の中心となる部分を宗教にまつわる音を使った録音構成によるものとする。印刷教材は、その音を問題提起として受けとめ、学生自らが考えていく学習の手引とする。15回の流れは、宗教の原初形態から近代宗教への宗教史的展開を追うものとし、それぞれの回において宗教に関する基本的な理論を紹介する。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	夜明け	講座を開始するに当たって、この科目の基本的な枠組を理解し、今後の学習に対処するための学習態度、特に、ラジオ番組の聞き方についての身構えを作る。 この講では、宗教学の性格およびその対象と方法について、基本的に理解し、初期の宗教学が、なぜ「宗教の起源」という問題を考察の対象としたかについて考え、さらに、「アニミズム」および「ヌミノーゼ」という概念について学習する。	阿部美哉（愛知学院大学教授）
2	祈り	第1回の講義において、我々の宗教的な感覚の基礎に、自然を恐れると同時にそれに引かれるという感情のあることを見てきた。今回は、そういった理解を踏まえて、最も基本的な宗教行為と考えられる「祈り」に焦点を当てる。 祈りが成立するためには、祈りの対象となる「聖なるもの」の観得が不可欠である。「聖と俗」という宗教的世界における基本的な二分法について理解する。	同上
3	呪術	祈りが、聖なるものへの祈願的な働きかけであるとするなら、「呪術」は、聖なるものへの操作的な働きかけだと見ることができる。超自然的な力を利用して、世界をコントロールしようとする手立てとしての呪術について理解する。 呪術の世界を感覚的にとらえるとともに、呪術と科学、呪術と宗教の関係および呪術の類型、えらびに呪術の現代的な現れ方について考える。	同上
4	集団的沸騰	シャーマン等に見られる呪術的な神がかりが、個人の次元において、日常的な意識の状態から脱するための試みであるのに対して、集団的な神がかりの状態が存在する。そういった状態は「集団的沸騰」と呼ばれる。それは、集団全体が日常的な意識を超えて、聖なる世界に近付く機会である。この集団的沸騰という考え方について理解するとともに、その具体的な現れである「祭り」について理解する。	同上
5	儀礼	人間が円滑な日常生活を送るためには、俗なる世界を超越した聖なるものをコントロールしていかなければならない。そのための手段が「儀礼」であり、儀礼が宗教の本質的な部分を構成していることを理解する。 さらに、儀礼の様々な形態について学び、それぞれの目的や特徴について考える。儀礼が頻繁に営まれるのは、世界の秩序を維持するためであり、危機を克服するための行為であることを理解したい。	同上
6	神話	儀礼の背後には、その儀礼の意味を語る「神話」が存在することを理解する。神話は、あらゆることの起源を語る聖なる物語であり、そこでは世界の誕生、人間の誕生、死の起源、穀物の起源等が説明される。また、善と悪との闘争について語る神話も多く、善の勝利と悪の敗退についての神話が人々の行動のモデルとして作用すること、また、神話は権力の歴史的な根拠を証明するためにも使われることを理解する。	同上
7	終末論とユートピア	神話と儀礼によって、カオスの上にコスモスを打ち立ててきた人間には、世界が再び元のカオスへと崩壊していくことへの恐怖が存在する。その恐怖から生まれてきた、世界の終わりへの信仰に「終末論」がある。終末論	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	メディエーターと教祖	聖なる世界からのメッセージを伝達するためには、その媒介者である「メディエーター」を必要とする。メディエーターは、「他界」からの死者のメッセージを伝達する場合もあるし、神霊のメッセージを伝達する場合もある。そういったメディエーターの多様な形態と、機能を理解するとともに、メディエーターの一つの形態であり現実の世界に新たな秩序を打ち立てようとする「教祖」という存在について理解する。	阿部美哉
9	物語と信仰	教祖を初めとする宗教者の生涯が、その死後、聖なる価値を有する「物語」として定着化され、信者の間に伝承されていくことを理解する。この聖なる物語は、信者たちにとっては人間の生き方、信仰生活のモデルであり、少しでもこの物語に示された生き方に近づくことが、目標とされる。「信仰」という行為に対して、こういった宗教者の人生の物語が深い影響を与え、具体的な指示を与える点について理解する。	同上
10	文化と社会	一つの源から始まった各宗教は、その勢力を拡大し、様々な「文化」や「社会」の間に広がっていくにつれて、土着・既成の宗教的世界の影響を受け、その形態を変化させていく。そこに成立するのが、各種の「教団」であり、教団は各地域や各民族の「宗教的世界」との融合・対立の上に展開する。したがって、既成の宗教的世界と対立し、その変革を志向する場合もでてくることになる。ここでは、宗教集団と文化・社会の関係を理解する。	同上
11	聖地と巡礼	宗教的な世界においては、空間は均質ではない。最も聖なる価値を帯びた空間が「聖地」であり、聖地は時に世界の中心として考えられる。「巡礼」は、聖なるものを求める行為の一つであり、その形態は様々である。聖地と巡礼との関係、巡礼と通過儀礼の類似性と異質性、そして巡礼における体験の特徴などについて理解する。	同上
12	教会と社会制度	宗教の発展とともに、聖なる世界にふれるための場が日常の世界で重要な位置を占めるようになる。「教会」の誕生である。教会は、神の存在を知らしめることによって、日常の生活に秩序を与える機能を果たす。そこに様々な儀礼、儀式が生まれ、制度が形成されていく。 教会の制度について考えるとともに、その社会制度との関係や発展の歴史について理解をすすめたい。	同上
13	セクトと世俗化	社会制度の変化は、宗教の世界にも大きな影響を与える。社会分業の進展は、宗教制度の多様化に結びつく。教義や儀礼の合理化が押し進められ、脱神話化がはかられる。生活の領域においても、俗なる世界が聖なる世界から独立し、聖なるものによる社会の公的領域の統合力は弱まってくる。様々な「セクト」が発生し、「世俗化」が進行する。セクトの発生と世俗化が、社会生活に及ぼす影響について理解する。	同上
14	神秘主義と内面化	宗教的な世界においては、様々な音がその世界を満たしていると同時に、すべての音が断ち切られた「沈黙」の状態が重視されている。沈黙は、すべての世俗的な音が排除された状態であり、その沈黙の中での祈りや、人と人、人と神との交りが宗教行為の目的とされる。超越的な聖なるものへ世俗のことばによって到達することは不可能であり、沈黙の中へかすかに聞こえてくる聖なる音はまさに「福音」に他ならない。この福音について理解する。	同上
15	家とアイデンティティー	これまでの学習を三点にしぼって振りかえってみる。	同上

＝構　造　と　解　釈＝(TV)

〔主任講師：渡辺二郎（東京大学教授）〕

全体のねらい

最初に現代の「構造主義」の考え方を追い、その特徴と限界を指摘する。次に、その前提となっている「近代科学」の背景と意義と射程を論ずる。こうして最後に、「解釈学」的哲学の持つ重要な意味について論究する。結局、全体としては、「構造」を取り出す考え方の解釈学的前提を明らかにし、逆に「解釈」の構造を解明する。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	「構造と解釈」への問い	1. 普遍的なもの 2. 「構造と解釈」一般 3. 構造・解釈と存在了解	渡辺二郎（東京大学教授）
2	構造主義の登場	1. 構造主義とレヴィ＝ストロース 2. 構造主義における三つの前提	同　上
3	構造主義における構造	1. 構造の概念 2. 構造の一般的例示 3. レヴィ＝ストロースにおける例示	同　上
4	構造分析の実例とその帰結	1. 母方のおじと親族構造 2. 構造分析の拡大とトーテミズム批判 3. 野生の思考 4. その帰結－ブリコラージュと歴史批判	同　上
5	構造主義への批判	1. リクールによる批判 2. 主体性と客体性の交錯	同　上
6	近代科学の背景	1. 科学と人間の抗争 2. アリストテレスの存在観と自然観 3. 近代科学の登場	同　上
7	近代的知の射程	1. 思考法の革命 2. 世界統握の時代	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	ラッセル批判	1. 存在概念の問題 2. 命題関数の性質としての存在 3. ラッセル批判	渡辺二郎
9	ディルタイと解釈学	1. 精神科学の基礎づけ 2. 了解と解釈	同上
10	ハイデッガーの解釈学的現象学	1. 現存在の実存論的分析論 2. 解釈学的現象学の方法	同上
11	了解と解釈と陳述	1. 存在可能の企投 2. 了解と解釈 3. 解釈の派生的様態としての陳述	同上
12	語りと言葉	1. 存在の真実の露呈 2. 語りの世界 3. 言葉は存在の家である	同上
13	詩人と芸術	1. 言葉の成るところ 2. 存在の真実の稔るところ 3. 詩人の使命	同上
14	ガダマーの解釈学（その1）	1. ガダマー解釈学登場の背景 2. 主題と方法と立場 3. 『真理と方法』第一部の内容 4. 『真理と方法』第二部の内容（前半）	同上
15	ガダマーの解釈学（その2）	1. 『真理と方法』第二部の内容（後半） 2. 『真理と方法』第三部の内容 3. 終わりに	同上

＝哲　学　的　人　間　学＝（TV）

〔主任講師：中　埜　　肇（放送大学教授）〕

全体のねらい

さまざまな面で人間のありかたが深く問われている現代において、人間存在の本質を根本において、また全体として明らかにすることはきわめて重要な意味を持つ。哲学的人間学はこの課題を果たすことを目的とする。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	哲学的人間学の課題	哲学的人間学の目ざすもの、人間学と人類学との差異、哲学的人間学の視点と方法およびそれの簡単な歴史について述べる。	中　埜　　肇 （放送大学教授）
2	人間の独自性	宇宙における人間の独自な位置について考え、人間の独自性を不安定性、自覚性、両義性などの面について考察する。	同　　上
3	身体について	人間の身体が持つ意味およびそれの人間的な特殊性を哲学の問題として考える。	同　　上
4	心について	心とは何か、心は在るのか、心の働きはいかなるものか、意識と無意識などについて考察する。	同　　上
5	心身関係について	デカルト以来現代にいたるまで、単に哲学だけでなく、ひろく文化上の大問題である心と身体の関係について考える。	同　　上
6	生　と　死	人間にとって生と死は他の生物の場合と根本的に違う。この人間独特の生と死のあり方について論ずる。	同　　上
7	社会性について	人間の基本的な特質と言われる社会性の基礎にあるもの、社会秩序の本質、代表的な社会集団の人間学的意味について述べる。	同　　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	歴史性について	歴史意識の本質と生成、歴史と社会との関係、歴史観のあり方、世界史の問題などについて考察する。	中埜　肇
9	個体性について	神の死の前に立ったとき、明らかになる孤独性、それと人格や実存との関係、自我の問題などについて考える。	同　上
10	自然について	人間にとって自然とはなにか、自然に対して人間はどのように関わるか、その関わりが人間に何をもたらすかなどについて論ずる。	同　上
11	労働について	人間にとって労働はいかなる意味を持つか、労働はどのように進化するか、という問題を哲学的な視点から考察する。	同　上
12	技術について	人間は人間であるかぎり技術を用いる。そういう根源的な技術と現代のテクノロジーとの間にどのような発展があるかを哲学的に考え、また現代テクノロジーの人間学的意味を論ずる。	同　上
13	知識と情報	人間の文化の基礎にある言語の意味、それと思考との関係、さらに知識や学問などの知的な営みの本質について考える。	同　上
14	意味と価値	人間は事実よりももっと広大な意味の領域に生き、また価値によって定位されている。このことの持つ根源的な意義について論ずる。	同　上
15	文化と文明	文化と文明はどう違うか。それを人間の欲望充足のレベルの問題として考え、現代文明の本質に関する見解を述べる。	同　上

＝日本の言語文化＝（R）

〔主任講師：古田東朔（鶴見大学教授）〕

全体のねらい

日本の近代語自体を対象とし、それがどう作品とかかわりあいながら、言葉を形成してきたかの過程にそってながめていく。文学作品はもちろん、それ以外の論説・翻訳・小学読本なども取上げ、話し言葉・書き言葉における問題点について考える。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	日本の言語文化	全体の序説 言語生活の変化に応じて、明治期における話しことば（標準語・方言）、書きことば（漢文訓読調・和文調）、言文一致等の問題が、どのように意識され、実際の作品を通して具体化されていったかについて、大きく見ておく。	古田東朔（鶴見大学教授）
2	古代語と近代語	まず、日本語の歴史について概観する。日本語の史的変遷からすれば、大きく古代語と近代語に分けることができるが、それぞれどのような特色が指摘できるか。その主要な点について取りあげる。	築島裕（中央大学教授） 山口明穂（東京大学教授）
3	上方語と江戸語	江戸時代のことばのうち、前期は上方を中心とする上方語、後期になってからは、江戸を中心とする江戸語が特に取りあげられる。どきような違いが認められるかについてながめる。	坂梨隆三（東京大学教授） 小松寿雄（埼玉大学教授）
4	東京語へ	後期の江戸語から東京語への過程において、階層等によることばの違いが、明治以後においては次第に均一化されてくる。どこに基準を置いて考えるようになったかについて見る。	古田東朔
5	「国語」意識の成立	日本の近代国家としての成立は、「国語」という意識を確立させることになった。そのとき、どのようなことが解決を要すべき問題として考えられたか。それらの数々について考察する。	同上
6	方言と標準語・共通語	明治以後、全国に共通して理解される標準的な話しことばは、どう考えられたか。まず、文法的な面においてその統一が考えられたが、それらについてふれる。	同上
7	口語と文語	「口語」といい、「文語」というが、実際には、その術語でもって内容を規定していったところがある。加えて、外国語との接触による日本文法の枠組みの再構成がかかわってくる。その過程について説明する。	同上

回	テーマ	内容	担当講師 （所属・氏名）
8	新聞・雑誌のことば	明治以後、新聞・雑誌などが多く刊行され、人々の言語生活に影響を与えてきた。それらは、どのようなことばで書かれ、どう発達してきたか。それらについて概観する。	清水康行 （日本女子大学助教授）
9	言文一致の動き(1)	書きことばと話しことばを一致させようとする「言文一致」の運動は、明治になって盛んになる。しかし、その萌芽は既に幕末期からあった。その主張や試みはどうであったか。	古田東朔
10	言文一致の動き(2)	「言文一致」といえば、これまでは小説に関して取りあげられるのが普通であった。しかし、明治期にあってはそれだけではなかった。小学読本の談話体の文章、講演の速記なども加えながら、その全般の動きについて考える。	同上
11	文語調の位置(1)	文語調の文章は、長く書きことばにおいて正式のものとされてきた。明治初期の漢文訓読調の文章で書かれた小説・論説・翻訳などについて見ながら、そこでの漢語の役割についても考察する。	同上
12	文語調の位置(2)	前回のあとを受け、明治期の和文調の文章について見ていくほか、漢文訓読調と和文調の統一を考えた文章など、実際の作品について見ていき、当時の文語調の文章が占めていた位置と、言文一致の文章の意義などについて考える。	同上
13	訳語による新しい世界	西欧の学術の理解のため、訳語を通しての努力がなされてきた。室町期・江戸期・明治前期において、和語や漢語による訳語がどう用いられ、新しい世界がどう紹介され、理解されていったかの過程について見る。	古田東朔 鈴木英夫 （茨城大学教授） 進藤咲子 （東京女子大学教授）
14	言語の登録	近代を切り開いていった言葉の数々は、後にどう伝えられていくか。新しい訳語も含めた和語や漢語が、どういう観点からまとめられていったか。幕末からの代表的な辞書を取りあげ、その編集の苦心のあとをたどる。	古田東朔
15	近代の敬語	明治以降における政治・社会上の変革が、ことばの上にどう反映されてきたか。敬語表現は身分・地位に即したものから、人格の尊重という点へ変わってきた。その主張と実際の使用はどうなのか。	同上

＝上代日本文学＝（R）

〔主任講師：稲岡耕二（上智大学教授）〕

全体のねらい

万葉集は現存最古の歌集で、歌詞を母体に文字による創作歌が生み出され、律令制度の確立とともに中国文化の刺激により文学的な洗練を加えていった100年余りの期間の、清新な抒情歌を多数収録する。そうした万葉歌の形成・展開のすがたを、個々の歌人や作品に即して跡づけたい。今回は額田王・柿本人麻呂とその前後を扱う。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	初期万葉歌の特徴 ―雑歌の場合―	万葉集の編纂年代 うたの記定 香具山の国見 宇智野の狩	稲岡耕二 （上智大学教授）
2	相聞歌の源流	歌垣の求婚問答　風土記に見る歌垣 天智朝以前の相聞歌とその特徴 初期万葉の相聞歌　磐姫皇后作歌について 初期相聞歌の特徴　天智天皇と鏡王女	同上
3	額田王（一）	＜歌人の誕生＞　額田王の作品 宇治の宮処を回想するうた　旅立ちのうた 異伝をめぐって　共有・代作 抒情のゆくえ　近江遷都と額田王 近江遷都をめぐる状況　三輪山惜別のうた うたの＜場＞	身崎壽 （北海道大学助教授）
4	額田王（二）	新しい役割　漢詩文の隆盛と額田王 蒲生野遊猟のおりのうた　相聞の演技 春秋競憐のうた　遊宴の花 額田王をめぐるなぞ　額田王に関する史料 鏡王・額田王の出自　額田王伝説 晩年	同上
5	天智・天武天皇の歌とその挽歌	皇室歌人の条件　天智と天武　天智天皇の作歌　三山歌　立ちて見に来し　一五番歌のよみ　三山歌の構想　鏡王女との贈答 天武天皇の作品　吉野のうた　伝誦歌と創作歌　吉野の頌　藤原夫人との雪問答 天智・天武崩後の挽歌　女の挽歌　天智挽歌群　「天皇」への挽歌　天武挽歌	同上
6	柿本人麻呂の生涯と作品	大武９年の七夕歌　吉備津妥女の挽歌 北山説と妥女の挽歌　人麻呂の長歌の性格 人麻呂の死　臨死歌　鴨山と依羅娘子 海のイメージ、山のイメージ　人麻呂の死地	稲岡耕二
7	人麻呂歌集（一） ―略体歌の性格―	二類の別 旋頭歌について 旋頭歌の創造 略体短歌について 新鮮な個の抒情	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	人麻呂歌集(二) —非略体歌について—	非略体歌の位置づけ ＜個の歌＞への離陸 人麻呂調の形成 七夕歌の意義 二首の長歌	神野志　隆　光 （東京大学助教授）
9	近江荒都歌と日並皇子挽歌	人麻呂作家の出発 人麻呂作歌の異伝 近江荒都歌の主題 日並皇子挽歌の思想 日並皇子挽歌の新しさ	同　　上
10	石見相聞歌	石見相聞歌への視点 異伝と推敲過程 石見相聞歌の作品的完成と133歌 構成体としての構造と方法的意義 晩年作説をめぐって	同　　上
11	泣血哀慟歌 —人麻呂の連作長歌—	亡妻挽歌の制作時期 人麻呂の妻たち 第1長歌 — 軽の妻の死 2首の短歌 第2長歌の構成	稲岡耕二
12	天智・天武の皇子女たち(一)	1 — 大伯皇女と大津皇子 — 大津皇子の謀叛事件　大伯皇女の悲傷　大津皇子と石川郎女　大津皇子の辞世歌 2 — 但馬皇女と穂積皇子 — 但馬皇女の悲恋　万葉集の「朝川」　穂積皇子による挽歌	同　　上
13	高市黒人 —旅の歌人—	黒人の経歴 黒人の荒都歌 第三の旅の歌 黒人の鶴と赤人の鶴 八十湊の鵠	同　　上
14	天智・天武の皇子女たち(二)	1 — 志貴皇子 — 神吹きかへす　連体形の用法　難波行幸時の歌　懽の御歌 2 — 長皇子 — 佐紀宮の宴歌　参河行幸時の歌　「あられ松原」と「早見浜風」 3 — 弓削皇子・紀皇女 — 三船の山の雲　紀皇女との恋	同　　上
15	宴とみやび —長意吉麻呂と石川郎女	巻16の物名歌 意吉麻呂の応詔歌 三輪の崎の雨 石川郎女と田主との贈報歌	同　　上

＝中古日本文学＝　（R）

〔主任講師：秋山　虔（東京女子大学教授）〕

全体のねらい

平安遷都から鎌倉幕府の開設までの400年間、平安時代の文学を一般には中古文学と呼ぶ。主たる担い手は貴族たちであるが、彼らによって創出された多彩な文学の達成は後世に規範的な意義をもちつづけ、日本的な美意識の源流をなした。この中古文学の展開の姿を史的に追求する。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	古文学の始発	桓武天皇による平安遷都にはじまるこの時代の文化は、勅撰漢詩（文）集に象徴されるように、まず大々的な唐風文化に特徴づけられる。その様相と歴史的意義を探り、やがてその唐風がしだいに和様化していく過程を説く。	秋山　虔（東京女子大学教授）
2	『古今集』とその時代	漢文学の全盛時代に和歌は貴族たちの表立った文学とは目されなかったけれども、万葉時代以来の伝統が絶えたのではない。その様相を追跡し、やがて『古今集』の成立に至る経過を説述するとともに、この最初の勅撰和歌集の世界の特質について論ずる。	久保田　淳（東京大学教授）
3	物語文学の誕生 —『竹取物語』と『伊勢物語』—	本来は口誦の文芸であったモノガタリが、この時代に固有の意義を担いつつ仮名散文の虚構文学として発達する事情、およびいわゆる歌物語が成立する経緯を探って、物語文学の本質は何かを考える。	秋山　虔
4	日記文学の成立と展開 —『土佐日記』と『蜻蛉日記』—	物語文学と並んで仮名散文の日記文学の成立していく事情を、記録としての日記や和歌との関わりその他の要因から考えてみる。また日記文学によって、いかに人間の内面世界が掘り起こされるに至ったかを明らかにする。	同上
5	虚構物語の成熟と基盤 —『うつほ物語』と『落窪物語』—	当時の物語が貴族社会の女性の消閑の具として無数に作られていた実状を説明し、それらのなかで特異な作品であるがゆえに現存する『うつほ物語』や『落窪物語』について、その成立の意義を考える。	同上
6	『後撰集』・『拾遺集』の位置	漢詩に代わって公的な文学の座を獲得した和歌は、貴族たちの私的な生活感情を託す表現手段として日常生活に根づいた。そうした和歌の機能、歌物語との関わり、また後代に及ぼした影響などについて考察する。	久保田　淳
7	清少納言と『枕草子』	日本人の美意識の伝統に規範的意義をもつ『枕草子』の特質やその成立事情を、作者清少納言の個性やその生活的背景との関わりにおいて考える。	秋山　虔

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	紫式部と『源氏物語』の世界(一)	『源氏物語』の作者紫式部の人生を家集や『紫式部日記』等によって考察し、物語執筆の経緯を推定し、主人公光源氏の栄華を語る『源氏物語』の第Ⅰ部の世界の主題・構造を説明する。	秋山　虔
9	紫式部と『源氏物語』の世界(二)	『源氏物語』の第Ⅱ・Ⅲ部の世界の推移・主題の展開の様相を追跡し、物語文学史のうえに抜きんでた独自の達成について考える。	同　上
10	『源氏物語』以後	『源氏物語』が以後の文学に対してどのような影響力をもちつづけたか。『更級日記』の作者菅原孝標女の源氏物語観をはじめ、長短編の物語群の様相を概観する。	同　上
11	女流歌人と『後拾遺集』	一条天皇朝、和泉式部・赤染衛門など女流歌人が輩出した後宮文化の最盛期を受けて、『後拾遺集』が撰集されたが、その時代背景はいかなるものであったかを考察し、同集の成立が王朝和歌史の屈折点に位置する理由を明らかにする。	久保田　淳
12	和歌文学の革新 —　詞花　の 時代—	王朝期文化とは矛盾する性格をはらむ院政朝文化の性格と浄土思想が和歌文学にいかなる影響を及ぼしたか、歌人層の変化、詠歌の場の変質などの諸相を追求する。	同　上
13	歴史物語の諸相 —『栄花物語』 と『大鏡』—	歴史的事実を素材とする、いわゆる歴史物語、『栄花物語』・『大鏡』などの成立の意義を考え、それぞれに描き出される世界について説明を加える。	多田一臣 （千葉大学助教授）
14	説話文学の誕生 —『日本霊 異記』—	説話文学の世界は、貴族を中心とする王朝文学のいわば周縁に位置している。最古の説話集である『日本霊異記』を取り上げながら、説話文学誕生の意義を考える。	同　上
15	『今昔物語集』 の世界	『今昔物語集』の厖大な説話群を統一するものは何であったのか。説話内容の分析を通じて、その世界認識のありかたについて考える。	同　上

＝中世日本文学＝（Ｒ）

〔主任講師：久保田　淳（東京大学教授）〕

全体のねらい

文学史的観点から、具体的な作品や作家に即して、多様多彩な中世日本文学の展開の跡を辿り、そのおもしろさを見直し、中世的な物の考え方や感じ方が日本の文学や文化に深く浸透していることを明らかにしようとする。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	中世文学概観	内乱と平安京－新都市鎌倉の出現　中世文学の始発 中世の展開と終焉 中世文化・文学の風土と作者・享受者 「梁塵秘抄」の成立と後白河院　「梁塵秘抄」の世界 「今鏡」の乱世に対する意識 「水鏡」の意味するもの	久保田　淳 （東京大学教授）
2	新古今時代	俊成・西行とその周辺 九条家歌壇と新進歌人 「新古今和歌集」と後鳥羽院歌壇　「新古今集」の歌人 建保期の和歌 源実朝と「金槐和歌集」 承久の乱後の歌壇と「新勅撰和歌集」	田仲洋己 （岡山大学助教授）
3	数奇と信仰	数奇　明恵 長明の人となり　日蓮・一遍 「方丈記」の内実 長明のその後 法然と親鸞 栄西と道元	三木紀人 （お茶の水女子大学教授）
4	説話の時代	説話の盛行 「古事談」と「宇治拾遺物語」 初期の仏教説話集 その後の貴族説話集 「沙石集」など 説話文学の行方	同上
5	歴史への関心	転換期の到来と公卿日記 歴史物語「水鏡」の成立 慈円と「愚管抄」 承久の乱と「六代勝事記」 「五代帝王物語」	栃木孝惟 （千葉大学教授）
6	前期軍記物語	軍記物語の成立とその前史　軍記物語の特質 「保元物語」の特質とその世界 「平治物語」の特質とその世界 「平家物語」の成立と特質 「平家物語」の諸本と成立時期　悪行者清盛の形象 勇将と生と死－義仲と義経　「承久記」の位置	同上
7	中世の日記・紀行	中世の宮廷社会と女房日記　「弁内侍日記」 「中務内侍日記」　「とはずがたり」 「竹向が記」　京・鎌倉の旅の盛行 「海道記」　「東関紀行」 「十六夜日記」　「うたたね」 飛鳥井雅有の日記　中世紀行と芭蕉　まとめ	久保田　淳

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	物語の変貌	中世の物語の概観　中世物語の始発 「無名草子」と院政期の物語　「松浦宮物語」 「風葉集」と鎌倉期の物語 「石清水物語」と「我が身にたどる姫君」 改作の物語　「住吉物語」 「風葉集」以後の中世物語	三角洋一 （東京大学助教授）
9	和歌と随筆	藤原為家と反御子左派の活動　歌の家の分裂 京極為兼と「玉葉和歌集」 「風雅和歌集」と「新葉和歌集」 室町時代の和歌 兼好の生涯と「徒然草」の成立 「徒然草」の周辺	田仲洋己
10	連歌と禅林の文学	初期連歌　二条良基と「菟玖波集」 連歌中興の時代　宗祇とその門流 鎌倉初期の漢詩文　五山の漢詩文 義堂周信と絶海中津 後期五山文学と一休宗純	同上
11	後期軍記物語	南北朝の動乱　「太平記」の構成 「太平記」の成立　「太平記」の視点 「太平記」と「平家物語」　「神皇正統記」 「梅松論」　室町軍記 時衆の関与	橋本朝生 （山梨大学助教授）
12	物語草子の世界	物語草子という名称　中世物語から物語草子へ 物語草子の特色　公家物の物語草子 宗教物　武家物 「曽我物語」と「義経記」　庶民物 外国物と異類物	三角洋一
13	中世の芸能	中世芸能　能・狂言の成立　能の形成 能の作品　能作の流れ　花と幽玄 狂言の形成　狂言の作品 狂言の素材　共感の哄笑 曲舞・幸若舞曲　舞曲とその素材 古浄瑠璃・説経　小歌	橋本朝生
14	中世の文学と表現	はじめに－中世語の特徴　活用形の意味 古代語の活用 「まほし」から「たし」へ－活用形の意味の消滅 時の意識の転換－語尾から語中へ 格の意識－主格　口語体の発生 まとめ	山口明穂
15	中世から近世へ	戦国乱世から家康の天下統一まで 文化の地方伝播と地方都市の形成 欣求浄土から生の肯定へ 俳諧の連歌 狂歌の成立と展開 歌謡・芸能における近世への移行	久保田淳

＝ 和 文 古 典 Ⅳ ＝（R）

－ 近 世 の 文 学 －

〔主任講師：村松友次（東洋大学短期大学教授）
主任講師：清登典子（筑波大学助教授）〕

全体のねらい

徳川幕藩体制のもと、商品経済の発達と識字層の増大に支えられて花開いた近世文学。その形成と展開の種々相を、中心的な作家・作品を取り上げながら検討してゆく。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	近世文学の胎動と仮名草子	1 近世文学の胎動 揺れる歌枕／憂世から浮世へ／出版ジャーナリズムの誕生 2 仮名草子の世界 パロディの文学／中世風の物語と新しい風／仮名草子の作者たち／浅井了意	篠原 進（青山学院大学助教授）
2	浮世草子と西鶴(1)	1 西鶴浮世草子の誕生と展開 俳諧のアバンギャルド／俳諧師西鶴／世之助の誕生／流行作家への道／疾走する西鶴／求心化する主題／西鶴工房	同 上
3	浮世草子と西鶴(2)	1 西鶴晩年の世界 桜影かなし－沈潜の季節／冬の西鶴－晩年の世界 2 西鶴の同時代人と西鶴以後の作者たち 西鶴の残香－本屋作者たち／マイナーの季節／やつしの世紀－一風と其蹟／八文字屋の光と影－抗争へ／享保の其蹟／八文字屋の落日／気質物の復活	同 上
4	近世初期俳諧	1 近世俳諧の源流 俳諧の連歌／俳諧の始祖 2 貞門俳諧 松永貞徳／近世俳書の出版／貞徳の俳諧観 3 談林俳諧 反貞門俳諧の台頭／西山宗因／談林の俳風／談林俳諧の史的意義	清登典子（筑波大学助教授）
5	芭蕉の世界(1)	1 芭蕉の出発 2 新風の旗手として 3 深川退隠 4 蕉風確立－『冬の日』時代 5 旅の芸術化－野ざらし紀行絵巻 6 『おくのほそ道』旅中、旅後の思索	村松友次（東洋大学短期大学教授）
6	芭蕉の世界(2)	1 蕉風円熟－『猿蓑』時代 2 軽み－『炭俵』時代 3 虚構の作品『おくのほそ道』 4 芭蕉の終焉	同 上
7	文人の時代 －文人の成立と徂徠学－	文人成立の背景／文人とは／徂徠学の登場／徂徠学の文学観／成立期文人の典型／文人精神の余波	揖斐 高（成蹊大学教授）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	近世和歌と国学	古今伝授と堂上歌壇の成立／堂上和歌と地下歌人／反堂上派の気運／国学の成立と万葉風の提唱／本居宣長の「もののあはれ」論／京都歌壇の新風／幕末の個性的な歌人たち	揖斐　高
9	前期読本と秋成	読本成立の背景／都賀庭鍾と『英草紙』／建部綾足の読本／上田秋成／『雨月物語』／『春雨物語』／前期読本の特色	長島弘明（名古屋大学助教授）
10	俳諧中興期と蕪村	1　蕉風中興運動 芭蕉没後の俳諧／蕉風中興運動／運動の担い手たち／運動の終焉 2　蕪村の人と芸術 蕪村の生涯／夜半亭継承／蕪村の立場／蕪村の創作意識／蕪村俳諧の世界／蕪村と芭蕉／発句中心の時代	清登典子
11	化政期俳諧と一茶	遊俳と業俳／我と来て遊べや親のない雀／西国行脚と『父の終焉日記』／化政期俳諧と一茶調／『七番日記』『おらが春』／一茶の評価	村松友次
12	狂歌・川柳	1　狂歌 近世以前の狂歌／近世初期の狂歌／狂歌と落首／貞門俳人の活躍／狂歌と他のジャンルの関係／貞柳とその一門／天明狂歌／天明狂歌以後 2　川柳 川柳の名称／柄井川柳／『誹風柳多留』の刊行と「川柳の成立」／「川柳」の世界	長島弘明 清登典子
13	戯作の世界(1)	戯作とは／文運東漸／談義本／酒落本／赤本・黒本・青本／黄表紙	板坂則子（群馬大学助教授）
14	戯作の世界(2)	寛政の改革／戯作の変化／後期黄表紙／合巻／人情本／天保の改革／滑稽本	同上
15	後期読本と馬琴	後期読本の形成／京伝の読本／馬琴の読本／その他の読本／読本の衰退	同上

＝近　代　文　芸　Ⅰ　＝(R)

〔主任講師：紅野敏郎（早稲田大学教授）〕

全体のねらい

日本の近代文学における成熟期－１９１０年代－の作家（漱石・鷗外・荷風・谷崎・志賀・有島・藤村・秋声・芥川・啄木ら）と時代との関連、主要作品の構造と分析を行なう。１９１０年代の自然主義・反自然主義との対応、作家の芸術と実生活のかかわりを把握。また「白樺」「早稲田文学」「新思潮」「青鞜」など主要雑誌の検討

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	「白樺」の出発 －大正文学の－ 発　端　(1)	武者小路実篤・志賀直哉・有島武郎らの「白樺」の前史と「白樺」初期の特色の究明。明治の「公」に対する大正の「私」の意識。文学と美術との接点。志賀の初期の日記・ノートなどの検討。「お目出たき人」と「かんかん虫」と「網走まで」の作品分析。	紅野敏郎（早稲田大学教授）
2	「三田文学」をめぐって －大正文学の 発　端　(2)	「三田文学」創刊号における永井荷風の「紅茶の後」の魅力と荷風の文学意識の検討。大逆事件における荷風を中心とする「三田文学」「スバル」関係者（佐藤春夫ら）の反応。「早稲田文学」との対比。パンの会の動向（これも美術と文学とが関連）。	同　上
3	谷崎潤一郎の出現 －大正文学の－ 発　端　(3)	谷崎潤一郎の最初期の戯曲と小説の分析。「刺青」と「秘密」などが中心。潤一郎と漱石とのかかわりーとくに「門」をめぐってー。「白樺」との差（「白樺」の場合は漱石では「それから」が軸となる）	同　上
4	啄木と大逆事件 －明治の終焉－	啄木の代表的日記「ローマ字日記」の分析。「九月の夜の不平」から「呼子と口笛」に至る啄木の大逆事件への反応の点検。白秋の「思ひ出」との比較。鷗外の大逆事件への反応との比較。啄木と現代（寺山修司などを含めて）。	同　上
5	漱石文学の魅力 －「夢十夜」「それから」「門」を中心に－	１９１０年前後の中期の漱石の作品分析。とくに「夢十夜」における作品の意味づけ。漱石とその門下生及び後進の文学者との関連、漱石の初期作品（「吾輩は猫である」や「草枕」など）と中期作品の内容と文体の相違。	同　上
6	漱石文学の魅力 －「道草」と「明暗」を中心に－	漱石の晩年の二つの長編小説をこまかに分析し、一般によく知られている他の初期・中期の作品よりさらに意味があることに力点をおく。	同　上
7	「暗夜行路」の検討－志賀文学の特色－	「暗夜行路」のプラスの評価とマイナスの評価をめぐって、作品の魅力をさらに精細に検討する。最初は「序詞」と前篇の構造、伏線、文体の面からはじめる。その前身である草稿の類（私小説「時任謙作」といわれているもの）も検討の材料に用いる。	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	「暗夜行路」の検討－志賀文学の特色－	後篇の展開と「大山」体験の意味をさぐる。数多くの志賀研究史とつきあわせ、この作品の影響と受容の歴史もあわせて考える。	紅野敏郎
9	「或る女」の検討－有島文学の特色－	「暗夜行路」と対比しつつ、有島の「或る女」の構造を分析する。前後篇をあわせて行ない、この作品の時代背学となった明治３０年代についても考えていく。また「白樺」に連載した前篇にあたる「或る女のグリングス」との対比も行なう。	同　上
10	藤村と秋声－「家」と「あらくれ」をめぐって	第二次「早稲田文学」の特色を検討しつつ、「家」の構造と「あらくれ」（「新世帯」など他の作品も含む）の構造を比較検討する。自然主義文学の特質、とくにその執拗なねばり強い人生とのかかわりに力点をおく。	同　上
11	花袋と白鳥－「田舎教師」と「何処へ」をめぐって	花袋における人生の苦悩と「田舎教師」との関連。回想集「東京の三十年」も材料に用いる。白鳥の人生観と「何処へ」との関連。明治３０年代の青年と４０年代の青年の意識の差に注目。白鳥の回想集「自然主義文学盛衰史」も材料に用いる。	同　上
12	文学史における大正５年（1916）の意味－近代と現代の接点－	鷗外の晩年の歴史小説の検討。ついで宮嶋資夫の「坑夫」、中條百合子の「貧しき人々の群」をあわせ眺め、白樺派、耽美派の全盛、自然主義文学者の執拗な奮闘をも視野に入れ、漱石の死（１２月９日）でしめくくられる大正５年の多層的な位置づけを行なう。	同　上
13	「青鞜」「奇蹟」「近代思想」の問題点－冬の時代と女性運動－	平塚雷鳥らの「青鞜」の出発と展開。広津和郎らの「奇蹟」の出発と特質。大杉栄、荒畑寒村らの「近代思想」の冬の時代における仕事の意味。堺利彦の「へちまの花」、土岐哀果（善麿）の「生活と芸術」にも言及。	同　上
14	芥川文学の特質－短編小説－の問題点	独歩や直哉を経て芥川において短編小説の魅力が発揮され、梶井基次郎・井伏鱒二らに引きつがれていく。初期の作品群を中心にする。第三次・第四次「新思潮」の検討もあわせ行ない、菊池寛・久米正雄・豊島与志雄らとの比較も考える。	同　上
15	「赤い鳥」「新しき村」「種蒔く人」の対比－ユートピアとプロレタリア文学－	鈴木三重吉の「赤い鳥」の運動、武者小路の「新しき村」の運動は同じ１９１８（大正７）年。この二つの根底にあったものをさぐり、ついで１９２１（大正１０）年よりはじまる「種蒔く人」の意味を探究する。	同　上

＝近　代　文　芸　Ⅱ＝(R)

〔主任講師：紅野敏郎（早稲田大学教授）〕

全体のねらい

「近代文芸Ⅰ」で扱えなかった近代文学創出期の文学者坪内逍遙・二葉亭四迷・森鷗外・北村透谷・樋口一葉・国木田独歩からはじまる近代の短編小説の系譜、正岡子規・与謝野晶子・島崎藤村・北原白秋・斉藤茂吉・萩原朔太郎ら近代の詩歌を中心に活躍した人を作品の特質を追求する。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	近代文学の出発 1 逍遙と二葉亭	逍遙の文学論「小説神髄」と実作「当世書生気質」との関連と、逍遙の影響を受けた二葉亭の文学論「小説総論」と実作「浮雲」との関係を対照的に把握し、近代文学創出に際しての二人の文学者の同質と差異を探索する。	紅野敏郎（早稲田大学教授）
2	近代文学の出発 2 森鷗外	ドイツより帰国した森鷗外のドイツ土産三部作の一つの「舞姫」をとりあげ、その作品構造を分析するとともに、官僚としての森鷗外と文学者としての森鷗外の心理の二重性をさぐる。	同上
3	近代文学の出発 3 北村透谷	自由民権運動に参加し、やがて離脱、政治から文学への道を歩いた透谷のペンによる活動を検討する。とくに透谷の評論活動は「文学者」というものの基本姿勢を如実に示す。近代の文学者のなかで理想と現実の矛盾に悩み、自殺した最初の人。	同上
4	近代の短編小説 1 樋口一葉	一葉の「たけくらべ」「にごりえ」「十三夜」などをとりあげ、短編小説の切れ味の鋭さ、その魅力について言及。一葉の場合、西鶴の影響を受けた、テンポの早い雅文脈の文体、その物語性の展開について考察する。一葉の日記にも触れる。	同上
5	近代の短編小説 2 国木田独歩	詩から散文に移った独歩の資質、日記「欺かざるの記」と佐々木信子との恋愛、そのあと展開する短編小説「武蔵野」「忘れ得ぬ人々」「非凡なる凡人」「号外」「竹の木戸」などをとりあげ、独歩の短編の特質を検討する。	同上
6	近代の短編小説 3 正宗白鳥	読売新聞記者より作家に転じた正宗白鳥の初期の短編－「玉突屋」「塵埃」「五月幟」－などをとりあげ、自然主義文学者の皮肉な眼で見た人生の断片、それを描くつき放した手法について考察する。	同上
7	近代の短編小説 4 志賀直哉	「或る朝」のような日常生活のなかの不快から快へ切りかわる心理、「清兵衛と瓢箪」に見られる子供の豊かな肉眼による美の発見とそれを圧殺する大人たち、その他「祖母のために」「正義派」「范の犯罪」「城の崎にて」「真鶴」など簡潔無比な表現の技法について考察する。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	近代の短編小説 5 井伏鱒二	処女作といわれている「山椒魚」や早稲田時代の友人とのかかわりを描いた「鯉」、また「屋根の上のサワン」はじめ、ユーモラスでかつ諷刺の利いた詩情を含んだ井伏作品の特質を考察する。	紅野敏郎
9	近代の短編小説 梶井基次郎	「青空」創刊号に載せた「檸檬」を中心に若くして亡くなった梶井の名作を分析、昭和の文学者たちにその短編の心象風景は大きな影響を与えた。	同上
10	近代の詩歌 1 正岡子規	俳句と短歌の本質的な改革を行なった子規の病床生活の実体とその実作を検討、あわせて子規のエッセイの持つ写生文の力について考察する。	同上
11	近代の詩歌 2 与謝野晶子	「明星」の史的位置づけと、晶子の「みだれ髪」を中心に、歌人としてのわくをはずれた豊かな才能や女性としての生きかたの迫力などにも言及する。「明星」のなかから、啄木も高村光太郎も北原白秋も木下奎太郎も生まれてくる。	同上
12	近代の詩歌 3 島崎藤村	北村透谷のあとを受け、自殺せずに泥にまみれながらも生きつづけた藤村の初期の詩集について考察する。とくに「若菜集」から「落梅集」に至る四つの詩集を吟味する。	同上
13	近代の詩歌 4 北原白秋	詩人と歌人を兼備、さらに童謡や散文活動など多面な才能を発揮した白秋の初期の詩集「邪宗門」「思ひ出」と、歌集「桐の花」をあわせて考察する。郷土柳河とのかかわりで、文学と郷里（出身地）との関連もここで考える。	同上
14	近代の詩歌 5 若山牧水と斉藤茂吉	子規や伊藤左千夫のあとを受け、「アララギ」の発展につとめ、処女歌集「赤光」をまとめた茂吉の生きかたとアララギ的写実の方法と、九州日向より上京し、旅と酒を愛した若山牧水の流れるような自然のリズムを対比させる。	同上
15	近代の詩歌 6 高村光太郎と萩原朔太郎	光太郎の処女詩集「道程」の分析、また白秋の影響より出発した朔太郎の初期の歌集「ソライロノハナ」及び作表作「月に吠える」の検討。	同上

＝漢　文　古　典　Ⅰ＝(TV)

― 江戸時代後期の儒学 ―

〔主任講師：頼　惟勤（千葉経済大学教授）〕

全体のねらい

日本において作られた漢詩・漢文について、江戸後半期を取り上げて諸作品を講読し、関連事項に及ぶ。これによって、日本漢学の日本文化において占める役割りが若干なりとも解明できることを目指すものである。各回とも講義の糸口を原則として頼春水『師友志』から取り、兼ねてその人の諸作品と関連分野とに及ぶ。

回	テ　ー　マ	内　容	担当講師（所属・氏名）
1	柴野栗山と赤壁会	柴野栗山（1736 － 1807）江戸昌平黌の儒官。寛政の学制改革に当った。享和2年10月の赤壁会の盛事を紹介する。	頼　惟勤（千葉経済大学教授）
2	尾藤二洲と白楽天の詩	尾藤二洲（1747 － 1813）昌平黌の儒官。晩年に白楽天の詩を好み、同僚の古賀精里との間で応酬した。その間の経緯を概観する。	同　上
3	古賀精里と通信使	古賀精里（1750 － 1817）昌平黌の儒官、肥前・佐賀の出身。曽て林述斎に従い、対島に赴き、朝鮮通信使に応接した。	同　上
4	岡田寒泉と実学の実践	岡田寒泉（1740 － 1816）昌平黌の儒官。のち関東の諸郡に出て代官となった。実学とは本来、実践躬行の学問の意味で、矢子学がその代表である。寒泉の学問がすなわちそれである。	同　上
5	服部栗齋と江戸市井の漢学	服部栗齋（1736 － 1800）江戸の麹漫書院の主。麹漫書院そのものは純粋に市井の漢学塾ではないが、そのような塾での基本的な教養がどのようなものであったかを取り上げる。	同　上
6	若槻幾齋と京儒	若槻幾齋（1744 － 1826）京の聖護院村に住み、その学行が幕府当局に認められて表彰されたこともあったという。	同　上
7	中井竹山と懐徳堂	中井竹山（1730 － 1804）大坂の懐徳堂の主。弟の履軒も著名な学者で、この兄弟の学問は広般な影響を世に与えた。	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	葛子琴と混沌詩社	葛子琴（1739 － 1784）大坂の医にして且つ詩人。片山北海が主催する混純詩社の中で、その才名を称せられた。	頼　　惟　勤
9	趙陶齋と黄檗僧	趙陶　（1713 － 1786）長崎に生れる。父は唐人。黄檗僧となり、還俗後、江戸・大坂・堺に転住。兼ねて全国を旅行した。僧侶の漢学に対する寄与は甚だ大きい。また道教的なものも案外に日本文化の中に侵透しているといわれる。	同　　上
10	飯岡義齋と家庭教育	飯岡義齋（1716 － 1789）大坂の儒医。曽て石門心学（大坂の尊性堂）を修めた。その子女に対する教訓は極めて熱心であった。	同　　上
11	菅茶山とその周辺	菅茶山（1748 － 1827）備後・神辺の詩人。京あるいは江戸において儒者文人と広く交った。詩人であると同時に、『福山志料』の纂修に関予し、随筆の分野でも著名である。	同　　上
12	高芙蓉と書画篆刻	高芙蓉（1722 － 1784）江戸時代の篆刻を芸術的水準にまで高めた。このころ漢の金印が出土したこともあって、漢の方寸印に倣った印が作られた。	同　　上
13	平賀中南と赤穂義士	平賀中南（1722 － 1792）安芸出身の儒者。大潮に学び、のち京坂に住んだ。『天野屋利兵衛伝』の刊行にも言及する。	同　　上
14	長久保赤水と地理天文	長久保赤水（1717 － 1801）水戸藩彰考館の学者。『大日本史』の地理志を纂修した。そのころの天文・地理・医学にも触れる。	同　　上
15	樺島石梁と親藩の学問	樺島石梁（1754～1827）久留米藩儒。細井平洲の門人・平洲は尾張藩に属する。紀州藩には礼制の研究者、あるいは文献学者が出た。	同　　上

＝漢　文　古　典　Ⅱ　＝（R）

――中国小説史への視点――

〔主任講師：大塚秀高（埼玉大学助教授）〕

全体のねらい

中国は三千年に及ぶ悠久の歴史を持っており、小説の歴史もこれに応じて長い。しかし同じ漢字を使いながら、小説という言葉の意味内容は時に応じて違いを見せる。この小説概念の変遷を、小説がそれに立脚した物語の伝統に目配りしつつ、春秋戦国の時代から清代まで追跡し、かつ中国小説の日本への影響についても触れたい。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	小説と物語 史家と方士たち	萬言と小説　小説と小説家　史官と方士　史記と漢書　鴻門の会　陸賈と楚漢春秋　史書と演義小説　春秋と国語　方士の語った小説	大塚秀高 （埼玉大学助教授）
2	志怪から伝奇へ 史家と読者に於ける変化	志怪と五行・讖緯思想　類書と古小説鈎沈　捜神記と干宝　曹丕と劉義慶　サロン文人と物語の伝統　伝奇の誕生　古鏡記と遊仙窟　物語の場	同　上
3	仏教と説教 応験記と遊行僧	応験記の成立　応験記的性格の志怪　金剛経応験記の流行　唐臨と冥報記　宋・明に於ける金剛経応験記　洪邁と夷堅志　鬼国母　文芸の担い手としての僧侶　転変と転経　説経と文芸	同　上
4	二都の夢 新たな「小説」の誕生	志怪にみる仏教の影響　六朝貴族社会の崩壊　俗講と市人小説　汴京と臨安　東京夢華録と夢粱録　瓦子と勾欄　説話四家　講史書と「小説」　緑　新話と醉翁談録	同　上
5	神話の没落 から五通へ	霊怪の門庭　汀州と山魈　独足の山魈　山海経と山海経図　夔一足　獾・梟陽・贛巨人　山都と猿　畢方・木客・その他　淫神五通　財神五通	同　上
6	類書から通俗類書へ 伝奇小説の変遷 そ　の　一	種本と話本　煙粉・伝奇と女鬼　文言の伝奇と白話の伝奇　宋代の小説集　二つの醉翁談録　鴛鴦灯と紅梅密約　張生負李氏娘　類書と通俗類書　明代後期の通俗類書　伝奇小説の長編化	同　上
7	短篇小説だった水滸伝 長篇小説の育たぬわけ	水滸伝成立史　梁山泊と百八人の好漢　宣和遺事　水滸の盗賊たち　好漢の銘々伝　水滸伝と「小説」　梁山にのぼれなかった好漢たち　白話小説と作者	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	法家と小説家の間 公案概念の変遷	醉翁談録の公案　明末の公案小説集　判決から捜査へ　疑獄集と折獄亀鑑　棠院比事と棠院比事物語　事件簿と余象斗　名判官物語　万歴時代	大塚秀高
9	包龍図の登場 講唱文芸のとりで	民衆に愛された包公　包公の実像と虚像　包公を巡る民間信仰　包公説話と「小説」　有名無名の判官たち、宝をめぐる物語　説唱詞話から説書へ　公案小説から俠義小説へ	同上
10	幽霊さまざま 伝奇小説の変遷 そ の 二	元末明初　剪灯二話いとしい幽霊　祟る幽霊　王慜負心と灰骨匣　自刎と怨念　彷徨える幽霊　取殺す論理と取り締まる論理　鴛湖誌余雪窓談異と幽怪詩譚	同上
11	話本から小説へ 輯佚と創作	洪楩の清平山堂　熊龍峯四種小説と通俗類書　発跡変泰話本と紅白蜘蛛記　三言百二十篇の素性　馮夢龍　柳七官人像の変化	同上
12	伝奇から小説へ 礼教と女性の運命	劉小官雌雄兄弟　男装の目的　女性の孝と貞　劉方三義伝　梁山伯と祝英台　心堅金石伝　霞箋記に於ける改悪　嫌疑と恥辱	同上
13	白蛇伝の登場 民衆のはぐくむもの	馮夢龍の白蛇伝　西湖の怪の話　三怪の話　白蛇の話　嫉妬と蛇　白蛇伝の成立　白娘子の解放	同上
14	金瓶梅から紅楼夢へ 才子佳人小説と佳人の男装	中国小説史上の才子佳人小説　長篇伝奇との関係　才子佳人小説と金瓶梅　金瓶梅と四大奇書　万暦の気風　春秋配と呉江雪　佳人の男装　さまざまな試み　風流配と鴛鴦譜　紅楼夢　文康の児女英雄伝	同上
15	さまざまな小説 清末小説に至る流れ	杜騙新書　照世杯　応挙を題材とする小説　受験百態　儒林外史　李宝嘉の官場現形記　劉鶚の老残遊記　清官を批判する小説　李漁小説の多様性	同上

＝西洋古典学＝ (R)

〔主任講師：久保正彰（東京大学名誉教授）〕

全体のねらい

西洋古典とは、古代ギリシャ・ラテンの文物の漠然とした総称であるが、今回は、“古典”という規範を設けた古代ローマの修辞学の要請を出発点として、修辞とは弱者の立場擁護を主眼とすることを明らかにし、古典文学の中でも古典であるギリシア文学の中に、ヒューマニズムの母体ともいうべき修辞論の展開を具体的に辿ってみたい。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	序論 ― 西洋古典と西洋古典学	1. 西洋古典とは何か ギリシア・ラテン学事始め　ケーベル博士と弟子たち　西洋古典とは何をさすのか　西洋における「古典」概念の淵源　近世以降の西洋古典学の変貌 ― 古代学研究へ　付記 ― 作品伝承について 2. 西洋古典学とはどのような学問であるのか 2つの古代言語の関係　ギリシア文学とラテン文学は表裏一体　新喜劇はローマ喜劇の中から　ホメーロスとウェルギリウス … 古典古代における文化交流　西洋古典学と古典文献学　古伝文献学における客観性と主観性　ローマの寒夜の月明について　エピローグ　〔参考文献〕	久保正彰（東京大学名誉教授）
2 3	ホメーロス叙事詩の構造 ― 『イーリアス』を中心として	はじめに 1. ホメーロスの時代と作品 ヘーロドトスの証言　ホメーロスの年代　ホメーロスの生地　ホメーロスの作品伝承　初期の作品伝承　ヴェネチア本　ホメーロス詩のリズム　サルペードーンの言葉 2. ホメーロス叙事詩に映しだされた背景と神々 ホメーロス以前の文学　ホメーロスの言語に刻まれた歴史的過程　偉大な終わりと始まり　ホメーロスの神々　なぜオリュムポス山上に　祭祀神の場合　叙事詩の神々と祭祀神たちとの間の隔たり　神々の役割と限界　詩人ホメーロスの分身 3. ホメーロス叙事詩の演劇的技法 人間的動機のせめぎあいが、神々に会議を開かせる　繰り人形ではない人間たち　筋と性格　パトロクロスの場合　登場人物の選択（性格）選択から展開する筋 … ホメーロス叙事詩の特色　劇詩人ホメーロス　『イーリアス』第24巻　神々の最後の会議　第1巻との対称性　嘆願　プリアモスとアキレウス　アルファからオメガをつらぬく訴え 4. ホメーロスの聴衆 ― 「アキレウスの盾」を中心に 聴き手たちはホメーロスの中にいる　比喩　王たちと民衆 ― サルペードーンの言葉　アキレウスの盾の世界　平和と戦争　生産の営み　牧畜　初期都市国家の世界　映されていない反面　盾の絵は何を伝えようとしているのか　〔参考文献〕	同上
4 5	ヘーシオドス ― 思想への道	1. 詩人誕生 詩の女神たちとの出会い　自らを語る詩人ヘーシオドス　ヘーシオドスの言語とホメーロスの言語　真実を歌う　詩人ヘーシオドスの位置づけ　叙事詩人としての職業的訓練　ヘリコーン山における祭祀　詩女神たちの叱責　新しい詩人の自覚　ホメーロスとの違い … “真実の歌” 2. 思想への道 神々の道と人間の道　『神々の誕生』 ― 最初の神々　第2世代の神神 ― ティターン族　クロノス、ティターン族の王の位を奪われる　第3世代 ― ゼウスの支配　プロメーテウスの罪と罰　新旧世代の争い　ゼウス、妻をのみこむ　太古の神々 ― かれらの断片的記憶と伝承　系譜的発想に基づく整理　神々の世代　神々の王権交替 ― オリエント伝説との類似　ギリシアの神々、ギリシアの神話の誕生　『大地』女神の位置づけ　空間と世代との統一的枠組み ― 『大地』　『大地』のみが真の神 … 弱者の守り　『大地』女神の働きを歌う 3. 『農と暦』 ― 人間の道 “私”が語る物語　“私”から“あなた”へのメッセージ　『農と暦』作品の“時と場所”　2つの『い』の女神たち　ヘーシオドスの選択　人間のうける災禍と選択とのかかわり　人間の退歩 ― 『5つの種族』　鉄の時代　鉄の時代の構造　追いつめられた人間の群　侵略か、植民か　第3の道 … 内からの出発　正義は大自然のリズムのなかに　ギリシアの歴史とヘーシオドスの教え　〔参考文献〕	同上
6 7	情詩人の再発見 ― その1	1. 『サッポーの手紙』 ギリシア情詩の特色 ― リズム構造　言語的特色　情詩人の作品伝承　作品詩巻の亡滅　サッポーの姿を求めて　『サッポーの手紙』の発見　ルネサンス人文学者たちのサッポー探究　カルデリーニ、サッポー断片を発見　メルラの文体的着眼　情詩人の断片探究　情詩の言語とリズムの復原を求めて　アーレンス、ヘルマン、ベルク 2. 情詩人たちの世界 パピルス詩巻に　情詩人の作品再発見される　西暦2世紀編の　情詩人作品集　最古の　情詩人アルクマーン　アルクマーンの天地創造神話　情詩人の思想的広がり　サッポーとアルカイオス　古代文献の中に伝わったサッポーの作品と名　パピルス詩巻からのサッポーの世界　叙事風の歌も　アルカイオス ― 内乱の詩　パピルス詩巻が映しだすアルカイオス像　アルカイオスの政治活動　ピッタコスのこと　アルカイオスの政治詩の特色　内乱の詩の語らぬ半面　貴族・民衆・僭主　内乱の別角度からの観察　ソローンの詩 ― 内乱に直面して　『大地』女神の証言を求めて　神話と政治とは別ものではない　〔参考文献〕	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8 9	情詩人の再発見 ── その２	1. ステーシコロス誕生 ステーシコロス、名のみの大詩人　作品壊滅…影響といわれるもののみ　題名つきの作品13篇　叙事詩とのかかわり　『ヘレナー・悔悟の歌』　『オレステイアー』の残影　パピルス詩巻 ―『英雄帰郷』発見　『オデュッセイアー』のエピソードをもとに　ステーシコロスの場面処理　ホメーロス叙事詩を合唱　情詩へ　合唱英雄詩『ガーリュオナーイス』　パピルス断片以前 ― ヘーラクレース伝説の１エピソード　リズム構成　神々の集合 ― 筋書きの指示(?)　夢の島への場面移動　母親の嘆願　ゲーリュオーンの決意のことば ― サルペードーンとの類似性　作戦の方針　死の比喩 ― ３度ホメーロス叙事詩を手本に　小叙事詩『ガーリュオーンの歌』　直接話法部分の重要性　“劇詩”と“演劇詩”との違い　能曲との比較　能曲における叙事詩の演劇詩化　『実盛』の言葉　叙事詩から演劇詩への中途点へ　ステーシコロス・能曲・ギリシア演劇詩 2. バッキュリデースと　情詩の演劇的展開 バッキュリデース詩集、パピルス書巻の中から現る　バッキュリデースについての伝承　ディテュラムボスの詩人、バッキュリデース　規模、形式上の特色　『若者たち』の物語　修飾性の大きい言語　船上の出来事　テーセウスの警告　ミーノース王の挑戦　テーセウス、挑戦に応じる　詩人の語りによる場面展開 ― 船上の真意　詩人の語り　海底への場面展開　生きている枕言葉の表現性　重なりあう情景 ―『イーリアス』第１巻　叙事詩的言語の変容と活性化　発を恐れる英雄 ― バッキュリデースの審美眼　悲劇詩との構造的比較　『テーセウス』の場合 ― 特異な対話構成　アテーナイ王アイゲウス対質問者　アイゲウス王の答え ― 怪しい男の出現　怪しい男についての問い　怪しい男の装束、風態　判じものの形で明かされていくテーセウス伝説のエピソード　演劇的対話技法の応用　構造的差異　作品目的の差異　ステーシコロスからの１つの発展と完成　ディテュランボスと悲劇詩は双生児的関係　パピルス写本に現れる古代の校訂家たちの姿　〔参考文献〕	久保正彰
10 11	ギリシア悲劇の基本構造 ― アイスキュロスの『ペルシアの人々』	1. 悲劇の誕生 ゼウスの頌より　ステーシコロスからギリシア悲劇へ　アイスキュロス悲劇の規模　悲劇合唱隊の誕生　吟唱者から演技者へ　自らが作りだす演劇の場　演劇のリズム・合唱隊のリズムの相互補完　役者登場　視覚的要素の出現　演劇仮面の機能　タイプと組み合わせ　仮面と科白　演劇科白の言語とリズム　２つの文化・２つの伝統　２つの流れの合流・融合　演劇活動を支える力　悲劇・喜劇の製作・上演は社会的現象　国家の行事としての演劇祭　アテーナイ民主政治の申し子 2. 『ペルシアの人々』の基本構造 唯一の歴史事件をテーマとしたギリシア悲劇　題材となったペルシア戦争の概要　サラミースの海戦　サラミース海戦から７年余りのち　プリューニコスの『ポイニーキアーの女たち』　悲劇の場はペルシアの王宮　合唱隊の配役　使者の報告　報告場面の設定　基本的合致点はただ１つ ― 敗者の体験として　アイスキュロスの使者場面　最も重要な違い　凹と凸に映る勝敗の原因　誇張されねばならなかった真の理由　ダーレイオスの亡霊場面の背後には　エレトリアの劇場のせり上げ　人間でありながら大自然を支配しようとする愚挙　ダーレイオスの目に映じる真実の相　歴史・人間・大自然の摂理　ダーレイオスの言葉はギリシア世界をも包みこむ　ひとりの人間 ― クセルクセースの悲嘆　悲劇と歴史記述の最初の接点　〔参考文献〕	同上
12 13	ギリシア演劇詩の完成 ― その１	1. 『オレステイアー』 ― アイスキュロス悲劇の完成 三部作構成を打ちだす　演劇の規模・観客の規模　ステーシコロスの『オレステイアー』　アイスキュロスの『オレステイアー』三部作　『アガメムノーン』 ― コロスの目を通じて　使者　原因分析 ― ダーレイオスの言葉　アガメムノーン登場　クリュタイメーストラー、王をあざむく　カッサンドラーの哀れな願い　人間とは…　アガメムノーン、断末魔の声　クリュタイメーストラーの言い分　『アガメムノーン』のリズムを支えている合唱隊　『コエーポロイ』の合唱隊　かの女たちは何もの　カッサンドラーの予言成就を見守る仲間たち　『エウメニデス』の合唱隊　クリュタイメーストラーと合唱隊は一体となっている　合唱隊は連鎖的に演劇の中心部へ　合唱隊の変容＝三部作の終結　演劇的手法の巧さ　三部作構成でなくては表現できなかったもの　合唱隊の仮面・装束から生じた必然的結果　『オレステイアー』における“完成”の意味 2. ソポクレース『エーレクトラー』 ― 「性格悲劇」の作劇法の完成 主人公たちはどうなったのか　古代演劇と現代の心理劇との違いはあるが　登場人物によせられた観客の好奇心　悲劇詩人ソポクレースの登場　三部作構想からの離脱　演劇仮面と登場人物の性格　『アンティゴネー』における実験　『エーレクトラー』とアイスキュロス　合唱隊は中枢的機能を失う　性格の対比　変形された『コエーポロイ』のモティーフ　筋の展開は“性格”によって　だまされる側におかれたエーレクトラー　ソポクレースの“アイロニー” ― 嘘と真の取り違え　『アンティゴネー』冒頭場面の再来　オレステースの骨壺　余話 ― 名優ポーロスの『エーレクトラー』演技　仮面対仮面～魂対魂　仮面こそ、まことの心の映すもの　エピローグ　〔参考文献〕	同上
14 15	ギリシア演劇詩の完成 ― その２	1. エウリーピデースの『タウリスのイーピゲネイアー』 オレステースはどうなったのか　かれだけを苦しめるもの　「恥」と「穢れ」、そしてそれよりも深いもの　清めの儀式　単純な分類は問題の本質を見落とす　オレステースを扱うエウリーピデースの三篇　『エーレクトラー』のオレステース　エウリーピデースの問題指摘　オレステースのためらい　母親処刑にひるむ　そして、悔悟　『オレステース』 ― 死に瀕したオレステース　死から生へ　アレオパゴスへ ― 解決に至らぬままに　アレオパゴスの法廷は救いにはならず　『タウリスのイーピゲネイアー』　出会い　オレステースへの手紙、その場で…　発見と逆転、そして脱出計画　エウリーピデースの演劇的手法　“けがれ”は“救い”に　幕引きの神アテーネー登場　アテーネー、祭祀確立を命じる　ハライの祭祀　ブラウローンの祭祀　２つの祭祀を１つに結びつけている理由は　すべては終わり、記憶のみが　アラウローン祭祀の意味　さらに解釈を進めれば 2. アリストパネースの古喜劇 ホメーロスの笑い　ホメーロス喜劇の観客たち　ヘーパイストスの悲喜劇　アポローンとヘルメース　ポセイドーンとヘーパイストス　喜劇創作の痕跡、消滅　アテーナイにおける喜劇上演　古きにさかのぼる喜劇の合唱隊　喜劇役者の扮装　喜劇の表現の自由　喜劇創作のむずかしさ　新しい喜劇の出発点　問題の提示と解決　『アカルナイの住民たち』　ディカイオポリスの名案 ― 劇的対立とせめぎあい　ディカイオポリスの平和　悲劇のパロディーとしての喜劇　喜劇の科白　平和と反戦のテーマ　『雲』 ― 教育過熱と“鉄の時代”　ストレプシアデースの悲劇　筋の統一・一貫性をめざして　笑いの質　人間みな同じ ― 違いは視点の高さ　雲の上、大空のかなたからの笑い　〔参考文献〕	同上

＝日本語教授法＝（TV）

主任講師：宮地　裕（帝塚山学院長）
主任講師：田中　望（日本語教育研究所）

全体のねらい

外国人に対する日本語教育の振興は、社会的要請になってきたといってよいが、まだ日本語教育に関する知識は中等教育における英語教育あるいは一般に外国教育を反省するための契機となる。この講座では、日本語教育の方法とその裏付けとなる理論について、日本語教育を志望する学習者（実習生）視点に立って、具体的に解説する。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	日本語教育とは何か	実際の日本語教育の現場を見学することを手がかりとして、日本語教育に関する概括的な解説を行う。日本語教育の種類、国内・海外の現状、その抱える問題点などをとりあげる。	宮地　裕（帝塚山学院長） 田中　望（日本語教育研究所）
2	コースデザインとは何か	教育の準備から終了にいたるまでの計画を作成することをコースデザインという。学習者のニーズを出発点にして、「何を」「どう」教えるかの計画の全体について考えていく。	同上
3	初級のコースデザイン	初級のコースデザインにおけるニーズ分析からシラバス、教授法の決定までを、われわれの実習コースについて具体的に考えてみる。	同上
4	初級の教室活動	シラバスや教授法は、実際の教室活動において実現される。主に初級のための各種の教室活動を概観し、われわれの実習コースに適切な教室活動を考える。	同上
5	初級のシラバス分析	シラバスから実際の教材作成や授業計画をたてる際に、学習項目の分析が欠かせない。ここではわれわれの実習コースの学習項目について、いくつかの観点からの分析を試みる。	同上
6	初級の教材作成	教室活動とそこで教えるべき具体的な学習項目に基づいて、次に教材を作成することになる。われわれの実習コースの具体的な教材をあげ、とくに教室活動との関連を考える。	同上
7	実際の授業のはこび方 ―教室内コミュニケーション	外国語教育の授業はすべて学習者や教員という参加者間のコミュニケーションでなりたっている。ここでは授業計画と、教室内コミュニケーションの質について考察する。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	日本語教育の多様性 ― 中国からの帰国者に対する日本語教育と海外の日本語教育	ここでは日本語教育の多様性、ことに第2言語としての日本語教育と海外での日本語教育について、コースデザインという観点から考えてみる。	宮地　裕 田中　望
9	中・上級のコースデザイン	中・上級のためのコースデザインを行う場合、初級との違いはどこにあるか。中・上級教育の特徴と、どのようなシラバス構成の観点にたつべきかを考察する。	同上
10	中・上級の教室活動	中・上級の教育では「なめらかさ教育」の比率が高くなると同時に、いくつかの活動を有機的に組み合わせた「教室活動複合」のかたちが望ましい。そのための教室活動の具体的な形態について考えていく。	同上
11	中・上級のシラバス分析(1) ― 談話型の分析	学習項目の分析は教材作成や授業計画作りに欠かせない。ここでは読解のための学習項目分析として、「談話」という言語単位をいくつかの観点から具体的に分析する。	同上
12	中・上級のシラバス分析(2) ―読解過程の分析	ここで学習項目と考える読解は、「読解を含むコミュニケーション活動」である。現実に学習者に必要な読解能力とは何であり、それはどのような過程なのか考察する。	同上
13	中・上級の教材作成	教室活動と学習項目の分析に基づいて、次に教材を作成することになる。われわれの実習コースの具体的な教材と教室活動をあげ、これまでの考察を総合して授業計画を組む。	同上
14	教育の評価	評価という行動が教育のなかでもつ意味は何か、なぜ評価という行動が必要なのかを考えていく。コース内での評価行動、テストによる評価行動などを具体的に概観する。	同上
15	日本語教育の将来	日本語教育はいま大きな曲り角にさしかかっており、量的にも質的にも変わらざるを得ない時期にある。ここではそうした日本語教育の現状、問題点、今後の課題について考える。	同上

＝歴　史　の　理　論＝　(R)

〔主任講師：阿部玄治（千葉大学名誉教授）〕

全体のねらい

昔から多くの歴史書が書かれてきた。それらが示す歴史の特徴は何んであったかを探ることにより、今日歴史が問題とされている点を考えてみようとするものである。西洋の歴史を中心にして、歴史哲学よりは、歴史書の方により多く重点の貢をさくことにした。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	歴史の語義	歴史という用語は中国の「史」からでており史官の記述したものの意味だった。明治以後ヒストリの訳語として用いられ、広狭様々の意味で使われている。	阿部玄治（千葉大学名誉教授）
2	神話的段階の歴史	文字の発明以前には口頭の歴史というべき神話、伝説、歌謡などがあった。天地創造神話は人間の起源の歴史的説明と言える。	同　上
3	歴史と文学	ホメロス叙事詩は文学でもあり歴史でもある。歴史として、ヴィコはこれを「神の時代」に次ぐ「英雄の時代」と規定した。	同　上
4	歴史の誕生ヘロドトスの物語風歴史	ギリシアにおける歴史の誕生はイオニアのログラフォイに始まり、ヘロドトスにおいて「物語風歴史」の頂点に達する。	同　上
5	教訓的（実用的）歴史	トゥキュディデスとポリュビオスは史料批判に基づく正確な歴史を示すことによって読者に教訓を与えようとした。	同　上
6	世界史の成立	世界史は世界を一体として考察しうるようになったとき成立する。世界史が成立すると統一的紀年法の必要が生ずる。	同　上
7	キリスト教の歴史観	キリスト教が歴史の中にもちこんだ摂理の思想と時代区分の考えは、その後のヨーロッパの歴史に長く影響することとなる。	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	アラブの歴史学	西洋古典文明を継承したアラブの文明は哲学・神学・科学の分野でめざましい発展を遂げ、その総合性の上にアラブの歴史学が成立した。	福島保夫 （埼玉大学教授）
9	史料批判と史料の蒐集 ―学問への第一歩	ルネサンス、宗教改革、印刷術の進歩と関連し、サン・モール学派やボランディストの史料蒐集は史料の外的批判を大いに進歩させた。	阿部玄治
10	史料の内的批判への道 ―啓蒙主義の時代	キリスト教の歴史観から解放されねば史料の学問的な内的批判には進めない。17―18 世紀は教会の支配からの自由を求めた時期であり、啓蒙の名のもとにそれが行われた。	同　上
11	歴史における進歩	啓蒙時代に入ると人類は歴史の中で進歩するという思想が強くうち出された。しかしフランス革命に失望した人々は中世をみなおし、ロマン主義歴史学が現われる。	同　上
12	ランケとヘーゲル ― 文献的歴史学と歴史哲学	19世紀前半には史料の内的批判によって真なる事実を採り出して叙述しようとするランケ史学が史学界に大きく影響する。他方歴史哲学はヘーゲルにおいて歴史発展の大構想を示す。	同　上
13	マルクス歴史学	マルクスの歴史学は摂理の社会主義版と言える。マルクスにとって社会法則は自然法則と同じような必然性をもつのである。	同　上
14	マルクス死後のマルクス歴史学	マルクス理論のマルクス自身における曖昧さは、その死後の社会の推移と相まって様々の修正理論を生み出し、一貫性に欠けるものとなった。	同　上
15	歴史家の方法論	自然科学と歴史学との違いを十分採り出して、歴史的認識のもつ内的矛盾を把握することが、歴史により貢献することになろう。	同　上

＝日本文化史＝（TV）

〔主任講師：笠原一男（元放送大学教授）〕

全体のねらい

日本文化史にふくまれる文化は無数といえるほど考えられる。本講では、第一、日本古代の民間宗教ともいえる観音菩薩、地蔵菩薩、弥勒菩薩、阿弥陀如来、第二、連歌・俳諧、第三、民衆と政治権力と民衆宗教などを通じて、日本の社会に生まれ、育った文化をとりあげ、それぞれの歴史的背景のなかで日本文化の特色を考えたい。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	日本文化史のねらい	1. 3つの問題点 2. 各回の概要	笠原一男 （元放送大学教授）
2	現当二世の利益 —観音菩薩—	1. 観音と現世の利益 2. 観音と来世の救い 3. 観音霊場と巡礼	速水侑 （東海大学教授）
3	地獄からの救い —地蔵菩薩—	1. 地獄の救済者 2. 身代り地蔵 3. 十王信仰	同上
4	末法の救世主 —弥勒菩薩—	1. 兜率天上への願い 2. 末法到来と弥勒下生 3. 鎌倉仏教の出現と弥勒信仰 4. ミロクの世	同上
5	極楽浄土へのいざない —阿弥陀如来—	1. 祖霊追善と来世欣求 2. 『往生要集』と阿弥陀堂 3. 聖と往生伝の世界	同上
6	連歌から俳諧へ —その流れと担い手たち—	1. 和歌の流れ　2. 連歌の発生 3. 連歌の展開　4. 連歌の作り手たち 5. 連歌はどのように作られたか 6. 連歌と宗教　7. 連歌師の役割 8. 連歌の変質　9. 連歌から俳諧へ 10. 俳諧の目指したもの	奥田勲 （聖心女子大学教授）
7	連歌師 —職業としての文学—	1. 連歌に熱中する人々 2. 連歌の詠み方と規則　3. 連歌会の運営 4. 連歌の専門家の登場　5. 鎌倉時代の連歌師 6. 南北朝時代の連歌師　7. 救済と周阿 8. 室町時代の連歌師　9. 宗祇と宗長 10. 中世末期・江戸時代の連歌師	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	地方文化と連歌	1. 染田天神連歌 2. 大山祇神社連歌 3. 白山万句 4. 地方武士と連歌	奥田　勲
9	宗祇から芭蕉へ —白河への旅—	1. 宗祇 2. 芭蕉 3. 宗祇と芭蕉の旅のあり方	同　上
10	芭蕉と旅 —奥の細道—	1. 『奥の細道』への出立 2. 室の八島から日光へ 3. 白河の関の彼方　4. 平泉 5. 最上川　6. 出羽三山 7. 越路・北陸・旅の終り	同　上
11	転換期の時代と民衆宗教	1. 政治の行きづまりと新しい時代 2. 複数で生まれる民衆宗教 3. 鎌倉仏教と古代仏教 4. 鎌倉仏教の救いの条件	小栗純子 （中央学術研究所講師）
12	鎌倉幕府と農民と親鸞	1. 鎌倉幕府の成立 2. 租税をめぐる領家・地頭と百姓 3. 関東の農民と親鸞 4. 信仰をめぐる領家・地頭と百姓	笠原一男
13	室町幕府と農民と連知	1. 室町幕府と守護大名 2. 惣村の農民 3. 土一揆する農民 4. 戦国大名と土一揆 5. 一向一揆	同　上
14	江戸幕府と農民と本願寺	1. 政治権力と民衆と宗教 2. 幕藩と真宗と民衆 3. 御文を利用して、一揆を押える	小栗純子
15	日本文化史の回顧と展望	14回にわたって論じられて来た日本文化史をふまえて、もう一度日本文化の特色を座談の形でふりかえって見る。あわせて将来の日本文化形成の基本的精神とはなにかを語りあっていただく。	笠原一男

＝近現代の東南アジア＝（TV）

〔主任講師：和田正彦（放送大学客員助教授）〕

全体のねらい

アジア論Ⅱ－東南アジア諸民族の歴史－に続いて、東南アジア諸国の近現代史を扱うが、東南アジアには、イスラム教を国教とする国や小乗仏教を受け入れた国のほかに、日本と同じく中国を中心とする漢字文化圏に属し、大乗仏教や儒教を受け入れた国もある。それらの国々について特に日本との関係に重点をおいて考えていく。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	東南アジと日本	東南アジアとは 東南アジアの自然 東南アジアの言語 東南アジアの宗教 東南アジアと日本との関係（16世紀以前）	和田正彦 （放送大学客員助教授）
2	東南アジアの日本人町 (1)	日本人町の位置 日本町成立の背景 マニラ（フィリピン）の日本町 カンボジアの日本町	同上
3	東南アジアの日本人町 (2)	中部ベトナムの日本町 アユタヤ（タイ）の日本町 バタビア（インドネシア）の日本町 日本人町の衰退	同上
4	東南アジアと朱印船貿易	朱印船の起源と渡航地　末吉孫左衛門 輸出入品と朱印船貿易家　西村太郎右衛門 荒木宗太郎 船本弥七郎 角倉了以・与一父子 茶屋四郎次郎	同上
5	漂流民と漂着民	東南アジアへの漂流 安南（ベトナム）へ漂着した日本人 呂宋（ルソン）等へ漂着した日本人 日本へ漂着した東南アジアの人々	同上
6	長崎華僑と唐通事	唐船と東南アジア 長崎在住華僑 唐寺と唐人屋敷 唐通事唐方と唐通事会所 広義の唐通事	同上
7	異国通事	東京（とんきん）通事 邏羅（しゃむろ）通事 もうる通事 呂宋（ろそん）通事 異国通事と東南アジア諸語の学習	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	16～18世紀の東南アジア	東南アジア大陸部の諸国 東南アジア島嶼部の諸国 ベトナムと西欧との接触－キリスト教の布教	和田正彦
9	西欧との対立	西欧列強の東南アジアへの進出の要因　西欧列強の東南アジア島嶼部への進出　オランダによる東南アジア島嶼部の支配　イギリスによる東南アジア島嶼部の支配　オランダ領東インドの成立　ベトナムにおけるキリスト教禁令　フランスによるベトナム侵略 フランスによるインドシナの植民地化	同上
10	イギリス・オランダによる植民地支配	イギリスによるビルマの植民地化－第1次イギリス＝ビルマ戦争　ビルマ王国の滅亡－第2次・第3次イギリス＝ビルマ戦争　イギリスによるビルマの植民地支配 オランダによる植民地支配(1)－輸出用作物の栽培　オランダによる植民地支配(2)－強制栽培制度　オランダによる植民地支配(3)－プランテーション	同上
11	フランス・スペインによる植民地支配	カンボジア・ラオスへの侵略とフランス領インドシナ連邦の成立 フランスによるインドシナ支配 スペインによるフィリピンの植民地支配 日本の南進	同上
12	タイの近代化とお雇い日本人	タイと西欧列強との接触 タイ政府お雇い日本人 政尾藤吉 安井てつ 外山亀太郎と日本人養蚕技師	同上
13	民族独立運動 (1) ベトナムとビルマ	文紳（ヴァン・タン）の蜂起 潘佩珠（ファン・ボイ・チャウ）と東遊（ドン・ズー）運動 潘周禎（ファン・チュー・チン）と維新（ズイ・タン）運動 ビルマの民族独立運動	同上
14	民族独立運動 (2) フィリピン・ インドネシア	フィリピンにおける民族主義運動 フィリピン革命 アメリカのフィリピン支配 インドネシアにおける民族主義運動	同上
15	世界大戦と独立	ホー・チ・ミンとベトナムの独立　カンボジアの独立 ラオスの独立 タイ－立憲革命から第2次世界大戦終結まで ビルマの独立 マラヤからマレーシア（ブルネイを含む） インドネシアの独立　フィリピンの独立	同上

＝ アジア論 Ⅲ ＝（R）

〔主任講師：浜口允子（放送大学教授）〕

全体のねらい

本講では１０世紀以降２０世紀初頭に至るまでの中国の歴史をとりあつかう。この時期の中国社会は、社会のしくみ、経済、文化、対対関係など様々な面でそれ以前の社会と大きく異なるものであった。それは、中国が１９世紀中葉に西欧諸国と本格的に出会った時の姿でもある。この時期の歴史を学ぶことは、その後の近代中国がかかえた諸問題を由来に遡って理解することにほかならない。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	宋代の歴史的位置	唐宋間が画期であることを述べ、本講全体を通して宋以降の歴史をどのような側面からみていくのか説明する。その初めとして宋の社会の基本的あり方について述べる。	浜口允子（放送大学教授）
2	南宋の政治と社会	南宋の時代は、南宋が金およびモンゴルと対峙しつづけたことによって性格づけられた。初期の秦檜の政策の基調と、それがその後どのような経緯をたどったかについて概観する。	同上
3	元の成立	元は中国全体を統治した最初の北方民族の王朝である。征服王朝とはなにか。遼・金の歴史をふりかえりながら、元の成立にいたる過程とそこでの問題点について考える。	同上
4	元の中国支配	元にとって最大の課題は、いかにしてモンゴル主導の統治を行うかであった。元の支配の特質を明らかにし、だがその特質ゆえに安定的な支配が継続しえなかった経緯について述べる。	同上
5	明の成立とその体制	明は征服王朝・元に否定して「漢民族の復興」を旗幟に建国した。その基盤となったものは何か。明の基本的体制である里甲制に焦点をあて、その仕組みについて考える。	同上
6	明の社会の変貌	１５世紀から１６世紀にかけて明の社会は変貌した。里甲制が崩壊し、税制は一条鞭法となった。この変動の過程をあとづけ、郷紳の存在に注目する。	同上
7	清の建国と中国統治	清は満州族の王朝であり征服王朝であるが、明の制度をおおむね引き継ぎ、要所をおさえて支配体制を確立した。その要点は何であったか。地丁銀制、郷紳支配などを説明する。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	清の盛期と衰退	１８世紀の乾隆帝の時代は、対内的にも対外的にも際だった盛期であった。だがその中で醸成されていた諸矛盾は、１８世紀末から急速に顕われてくる。それは何であったか。近代前夜の状況を明らかにする。	浜口允子
9	経済発展の諸相 (1) 農業と農村	農業生産にとっても宋代は画期であった。農具、品種、作物分布、そして農業のあり方のうえでも近代に連なる様相が現れてきた。先ずそれをおさえ、ついでその後の変化を概観する。	同上
10	経済発展の諸相 (2) 商業と都市	中国において商業の歴史は古い。だが、これもまた、宋の時代を境に大きく変化する。国の統制は後退し、私的経済活動が活発となり、商業が隆盛となった。そのもたらしたものを考える。	同上
11	経済発展の諸相 (3) 手工業	われわれが現在目にする歴史の精巧な手工業製品はどのような体制の中で生み出されたものなのか。それは近代工業につながりえたのか。この疑問に対して近代以前の手工業を概観する。	同上
12	人々のつながり (1)	中国の歴史を通して、人と人とのつながりの中で、最も基底的なものは家族であり宗族であった。その特徴と歴史的な変化の過程を概観する。	同上
13	人々のつながり (2)	農村においても、都市においても、人々は再生産の維持や、生活の保証や、営業の利益のために相互に結び合っていた。各時代の地縁的なつながりや同業者間の結合について考える。	同上
14	近代の始まり	中国の近代は、アヘン戦争にはじまる「外圧」と太平天国による「内乱」の中ではじまった。この危機に対し、ではどのような対応がなされたのか。１９世紀後半の動きを概観する。	同上
15	近代の歩み	1912年、辛亥革命によって２千年にわたる王朝体制は終わりをつげ、アジアで初の共和国が成立した。２０世紀初頭の、ここに至る過程をたどりつつ、それが何であったかを考える。	同上

＝アジア論Ⅳ＝（R）

〔主任講師：武田幸男（東京大学教授）〕

全体のねらい

朝鮮は私たちに最も近く、緊密な国であった。そこに住む朝鮮人は今までも、そしてこれからも大切な隣人である。隣人が長い間に築き、育ててきた朝鮮の歴史を理解することは重要であり、また興味のあることである。その朝鮮の歴史について、国際的な広い視野からとらえ直し、その複雑で多様な流れを一貫して追究してみたい。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	朝鮮半島と朝鮮歴史の流れ	朝鮮半島は、朝鮮の歴史が展開した主要な舞台であった。そこで、次回からの具体的な講義の前に、まず、歴史の舞台としての朝鮮半島の特色を理解し、そのうえで、時期を追って認められる歴史上の変化・発展をたどり、朝鮮歴史の流れの特質について考えてみたい。	武田幸男（東京大学教授）
2	朝鮮史のあけぼの	朝鮮半島に人類がはじめて足跡をしるしたのは、今から数十万年前のことであった。やがて人々は農業を発展させ、金属器の使用をおぼえて　各地ではそれぞれ首長層を中心とする政治・宗教的な社会が成立した。考古学の成果によって、この過程をあとづけてみたい。	木村誠（東京都立大学助教授）
3	古代国家と三国の形成	朝鮮半島における国家形成は、たえず周辺諸民族との関連のもとで、長く複雑な経過をたどった。古朝鮮の興亡から、中国の郡県支配をへて、高句麗・百済・新羅などの成立に至る歴史の流れを概観し、朝鮮における国家形成の特質を考えてみたい。	同上
4	三国の抗争と新羅の統一	6世紀初め、新羅は高句麗のくびきを脱すると、南部の加羅諸国を圧迫し、やがて併呑して、朝鮮半島は文字どおり三国時代を迎える。三国間の抗争は、中国・日本をまきこみ複雑に推移するが、この新羅の台頭を軸に、百済・高句麗の滅亡に至る政治過程を述べる。	季成市（早稲田大学非常勤講師）
5	統一新羅と渤海	新羅は7世紀後半の国際的な激動期をきりぬけ、三国統一を達成する。いっぽう北部の高句麗の旧地は放棄されたが、しばらく後に、ここに高句麗遺民を糾合して、　海が建てられた。約二百年間、南北に並存した新羅と　海の社会及び文化について述べる。	同上
6	高麗の成立と展開	１０世紀初めに建国し、後三国を統一した高麗は、主に唐・宋の制度を模範として諸制度をととのえ、１１世紀ころ最盛期を迎えた。しかし１２世紀には地方の農民の動きが活発となり、中央の政情も不安定となった。高麗前期の興起とそのかげりとを概観してみたい。	浜中昇（神田外語大学教授）
7	武臣政権の成立とモンゴルの支配	１２世紀後半に武臣が政権を握り、以後百年続いたが、この時期はまた民衆反乱の時代でもあって、高麗の支配体制は大きく変化した。その後、高麗はモンゴルの嵐にまきこまれ、その支配をうけるが、やがて新興層の台頭がみられた。高麗後期の激動ぶりを概観したい。	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	朝鮮王朝の成立と発展	１４世紀の末、朝鮮王朝が成立した。王朝は新興の士大夫層とともに、朱子学を統治理念として導入し、新しい中央集権的な国家体制を整えた。その支配と社会のシステムに力点をおきながら、王朝の成立やその後の政治史の展開過程、文化の発展について概観してみたい。	山内弘一 （上智大学 専任講師）
9	朝鮮王朝後期の社会と文化	朝鮮王朝の社会体制は、１６世紀末の豊臣秀吉による侵略を契機として大きく変化し、１８世紀には新しい様相を帯びるようになった。そこで、社会や文化に現われた新傾向に力点をおきながら、欧米など外国勢力が進出してくるまでの政治史の過程を概観してみたい。	同　上
10	開国と近代的改革運動	１９世紀後半における朝鮮の開国は、国内体制の不備と不平等条約によって、国内的・対外的矛盾を激化させていた。開国を進める開化派は近代的改革を断行して、危機の克服をはかったが、改革は挫折した。その挫折の要因をめぐって、多角的に検討してみたい。	朴　宗根 （熊本商科大学 教授）
11	植民地への転落過程	朝鮮が近代的改革の挫折で混迷していたのに対し、日本は軍国主義体制を整え、日清戦争と日露戦争によって清とロシアを排除するとともに、朝鮮人の抗日運動を抑圧して、ついに1910年、植民地にした。そこで、朝鮮の植民地化過程とその特徴を考えてみたい。	同　上
12	武断統治と三・一運動	1910年に朝鮮は名実ともに日本の植民地になった。朝鮮総督のもとに憲兵警察が猛威をふるい、生殺与奪の権を握った。しかしそれは朝鮮人の抵抗の力を内にむかわせ、それが１９年の三・一運動となって爆発した。三・一運動を中心に、１０年代の朝鮮について考えたい。	宮田節子 （早稲田大学 非常勤講師）
13	支配政策の転換と民族運動の展開	三・一運動の後、日本は支配の基本方針として同化政策を強化しながら、支配政策の手直しをおこなった。その一環として民族新聞の発刊が許され、朝鮮人はこれを武器として多彩な民族運動を展開する。２０年代の支配と抵抗の緊張関係を軸に、話を進めてみたい。	同　上
14	朝鮮民衆と皇民化政策	１５年戦争がはじまると、朝鮮も日本の大陸兵站基地として再編された。しかし朝鮮民衆にとって、戦争は地国同士の争いにすぎない。このような醒めた民衆の存在が、日本を狂気じみた皇民化政策にかりたてた。その矛盾に焦点をあて、植民地支配の本質を考えたい。	同　上
15	朝鮮歴史の流れと国際関係	前回までの講義によって、朝鮮歴史の長い流れをたどってきた。そこで最後にふりかえってみると、流れをつらぬいて歴史の発展が認められるとともに、またその時々における周辺諸民族、諸国家との密接な交流が確かめられる。朝鮮の歴史と国際関係を考えてみたい。	武田幸男

＝ヨーロッパ論Ⅰ＝（ＴＶ）

〔主任講師：阿部玄治（千葉大学名誉教授）〕

全体のねらい

ロシア史を中心に、ロシアに影響を及ぼした東西勢力と関連した諸事件をとりあげる。歴史学の講義として、歴史の理論ともまた史料の内的批判、外的批判とも関連させたものとする。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	東ヨーロッパとロシア	東ヨーロッパの範囲　ロシアとヨーロッパ 小さなヨーロッパ ヨーロッパとアジア 東洋と西洋 東と西 西ローマ帝国の復興とヨーロッパ	阿部玄治 （千葉大学名誉教授）
2	２つの祖国戦争 その１	国民への呼び掛け－ スターリンの場合 皇帝アレクサーンドル１世の呼び掛け 国民の反応　大祖国戦争の場合 ナポレオン戦争の場合　パルチザン部隊 ロシアの風土とロシア人の頑強さ	同上
3	２つの祖国戦争 その２	アレクサーンドルの感謝状　スターリンの国民への感謝 功績のひとりじめ　勝利の象徴 軍隊の強化　戦争の理論 ポーランド分割とナポレオン アレクサーンドル１世とポーランド王国 アレクサーンドルの個性とその歴史的役割	同上
4	デカブリスト	祖国戦争と革命　エリートのデカブリスト デカブリストの献身性　デカブリストの流刑 デカブリストの妻たち アーンネコヴァ（ポーリン・ゲーブル）の場合 ムラヴィヨーヴァの死 殉教の聖女	同上
5	第１次大戦とロマーノフ朝の終焉	クレオパトラの鼻 第１次世界大戦の必然性と２月革命 ニコラーイ２世の人柄 無慈悲な皇帝 専制君主制の維持と議会政治の否定 ポペドノースツェフの理論　敗戦の必然性	同上
6	２月革命	岐路　２月28日 ２月革命の自然発生性　３月１日 ２月革命の予想　臨時政府の成立 街頭デモの突発 ２月26日 ２月27日	同上
7	10月革命とボリシェヴィキー	戦争の経済的破綻　インターナショナルと戦争　レーニンの敗戦主義　レーニンの議会政治の否定　レーニンの党の性格　ケーレンスキーと戦争　ソヴェートの世界人民への呼び掛け　臨時政府の戦争終結宣言　レーニンの帰国　レーニンの臨時政府攻撃　防衛主義の破綻　10月革命　ブレーストの講和	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	「原初年代記」過ぎし歳月の物語	史料の外的批判　重要な写本 ラヴレーンティー本とイバーティー本の差異 年代記中に現われる第1人称 1097念の事件とヴァシーリー　ネーストル 年代記集成としての「過ぎし歳月の物語」 ネーストル、シリヴェーストルらの編纂	阿部玄治
9	ノルマン説と反ノルマン説 その1	ノルマン説　反ノルマン説 歴史的真実と政治的視点 ヴァリャーギ招致の年代記への挿入 「過ぎし歳月の物語」の史料価値 ヴァリャーギの海　ヴァリャーギの人種的帰属 ハーラル・ホルドローデ　ルーシとロース	同上
10	ノルマン説と反ノルマン説 その2	ベルタン年代記（Annales Bertiniani） ルーシのコンスタンティノープル襲撃 帝国統治論	同上
11	ノルマン説と反ノルマン説 その3 ヴァリャーギの役割	アラブ史料　アラブ史料のルスとスラヴの区別 アル・ヤアクービーの報道 イブン・フルダーズベーの記述　ルーシという用語の フィンランド起源 ルーシの南方起源　ルーシの北方起源　史料批判の性格 ヴァリャーギの歴史的役割　政治的変化と反ノルマン説	同上
12	ノルマン侵入の東と西　その1 西ヨーロッパ	タキトゥスの描くゲルマン人の従士制 12世紀の西欧文学にみる主従関係 封建主従間の義務の双務性　助言と援助 ノルマン人の従士制　ロロの従士たち 封建的反抗権 マグナ・カルタ記念碑	同上
13	ノルマン侵入の東と西　その2 ロシア	スラヴ人の従士制　エギルのサガ　ヴァリャーギ 従士制の東スラヴへの影響　主従間の理想像 主従間の現実像　傭兵としてのヴァリャーギ キリスト教の採用　ドミナートゥス制　キリスト教皇 帝コンスタンティヌス　皇帝教皇主義　皇帝の戴冠式 宮廷儀式　ロシア正教の政治性	同上
14	東方遊牧民とロシア　その1	ヨーロッパ・ロシアの地理 ステップに現われた遊牧民　キンメルとスキタイ サルマート　フンの侵入 アヴァールとブルガール　ハザール汗国 ペチェネーグ（ペチェネーギ） ポーロヴェツ（ポーロフツィ）	同上
15	東方遊牧民とロシア　その2 モンゴルとロシア	カールカ河の戦い　1237－1238年の北ロシア侵入 南ロシアへの侵入　モンゴル侵入の影響 ロシア史料の傾向性　教会とモンゴルの支配 ツァーリたる汗　汗の宮廷の模倣 アレクサーンドル・ネーフスキー伝 影響の錯綜　モノマーフの冠	同上

＝アメリカ論Ⅱ＝（ＴＶ）

〔主任講師：恒川恵市（東京大学教授）〕

全体のねらい

一方では人々の感動を誘う古代文明の遺跡や混血文化、他方では安定を妨げる債務問題や政治危機－日本人にとって一見わかりにくい中南米という地域の特徴を、そこに住む人々がどのような歴史や文化をもち、またどのような社会的・経済的生活を送ってきたかを検討することを通じて明らかにする。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	中南米のきのうと今日	中南米という地域の概要 共有する歴史 本書の内容の概要	恒川恵市 （東京大学教授）
2	風土と人間	風土とは　中南米の自然 メソアメリカ：メキシコ中央高原 メソアメリカ南部　中央アンデス 混血の問題　熱帯低地 南アメリカ南部：チリとアルゼンティン まとめ	大貫良夫 （東京大学教授）
3	新大陸文明	新大陸文明 メソアメリカ文明－採集狩猟から農耕へ／オルメカ文化／古典期／マヤ文明／後古典期 アンデス文明－採集狩猟から農耕へ／神殿の発達／地方発展期／ワリ期／地方王国期／インカ帝国 まとめ	同上
4	植民地時代	大西洋横断航路の開設と新大陸の軍事的制圧 スペイン領植民地の成立と統治機構の確立 スペイン領植民地の経済と社会 ブラジルとカリブ海の砂糖経済 スペイン・ブルボン朝の植民地組織替えと周縁部の発展	高橋均 （立正大学助教授）
5	中南米諸国の独立	ブルボン改革　中南米諸国の独立の性格 下層大衆の反乱 自治政府の樹立と崩壊 独立戦争 メキシコの独立 ブラジルの独立	恒川恵市
6	自由主義経済と寡頭政治	独立後の混乱　土着主義の芽 カウディーリョの時代 輸出経済の発展 寡頭政治の安定 外国資本の浸透 移民、先住民、奴隷	同上
7	人民主義の光と影	都市の発達と中間層　人民主義の矛盾 工業化と労働運動 人民主義の特徴 先駆としてのメキシコ革命 ヴァルガスとペロン その他の国の人民主義	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	軍事政権の盛衰	権威主義体制の3類型 「人民主義以後」の権威主義体制 人民主義を担った権威主義体制 「人民主義以前」の権威主義体制 軍事政権にならなかった国々 権威主義体制の限界	恒川恵市
9	累積債務と民主主義	累積債務下の民政移管 累積債務危機の原因 IMFコンディショナリティ 民主主義を揺るがす債務危機 脱人民主義 人権、麻薬、環境	同上
10	中南米をめぐる国際関係	中南米とアメリカ合衆国 キューバ革命 中米紛争 中南米の地域協力 日本と中南米	同上
11	中南米の現代文化 ーその均質性と多様性	中南米とラテンアメリカ ラテンアメリカ文化の多様性の背景 ラテンアメリカ文化の均質性：「征服の遺産」 国家と文化：国民文化とアイデンティティの育成 過去の総和としての現代文化	落合一泰 （帝京大学助教授）
12	アンデス諸国 ー海と山と密林と	自然環境 征服以前の文化 征服と植民地時代 独立から現代へ 共通の問題	同上
13	メキシコ ー伝統と変革	風土と古代文明 人間と文化の混血化 革命における伝統と変革 工業化と革命の後退 石油と債務危機 メキシコの将来	恒川恵市
14	ブラジル ー多様性の国	地形と気候 植民地時代における開発 独立後の開発 ブラジル社会の多様性 ブラジル政治の特色 ブラジルの将来	同上
15	アルゼンティン ー苦悩する大国	豊さの中の停滞 パンパ農牧畜業の発展 変化への胎動 ペロニズム 統合なき社会 国民的合意を求めて	同上

＝文芸史と文芸理論＝（R）

〔主任講師：轡田　收（学習院大学教授）〕

全体のねらい

ヨーロッパの古典古代から近代にいたる文学の生産とそれに対する理論ないし学的反省との関係を史的に捉えてゆく。このような視点をとると、文学の実践と理論とは、時代により、国あるいは言語圏により、独特な相互関係をもっていることが明らかになるであろう。ひとつの国の文学史のみを目にしたのでは気がつかないような、さまざまな言語文化の共通性、そして特異性を考察してみたい。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	古典古代 (1) ギリシア	1. ギリシア悲劇 2. アリストテレスの『詩』	岡　道男（京都大学教授）
2	古典古代 (2) ラテン	1. ラテン文学における模倣と創造 2. ホラティウスの『詩論』ー『創作技術』 3. クインティリアーヌスの『弁論家の教育』	同上
3	中世 (1) ―ラテン的世界としての中世	1. 「ラテン中世」とは何かー歴史的複合体としてのヨーロッパ 2. カール大帝の偉業ー学業改革と文化運動 3. 学校教材用の著作学の選択ー文芸作品についての「正典」の形成 4. 詩作品の解釈の枠組みーヨーロッパにおける文学教育の歴史 5. 人文主義者にたる「12世紀のルネサンス」ー「自国語」文学の多彩な様相とラテン文学の復興	南大路　振一（姫路独協大学教授）
4	中世 (2) フランス	1. 現存するテクストの性格ー筆写され口誦された作品 2. 北フランスのトルヴェール 3. 南フランスのトルバドゥール 4. 「非抒情詩」とフランソワ・ヴィヨン 5. ロマン（物語）の誕生	新倉俊一（東京大学教授）
5	中世 (3) ドイツ	1. ドイツ中世文学の三つのジャンル 2. 形式芸術としてのドイツ中世文学 3. ドイツ中世文学の内容的特色	中島悠爾（独協大学教授）
6	中世 (4) イギリス	1. 二つの中世イギリス文学 2. 中世文化の国際性 3. 古英語文学における文化的二重性と普遍性 4. 中英語文学の国際性	高田康成（東京大学助教授）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
7	俗語文学の栄光 イタリア	1. 俗語文学の誕生 2. 清新体派とダンテ 3. 『神曲』の構造 4. ペトラルカとボッカッチョ	河島英昭 （東京外国語大学教授）
8	近代文学への道(1) スペイン	1. ＜黄金世紀＞概観 2. 新たな小説に向けて－『ドン・キホーテ』 3. 国民劇＜コメディア＞の創始－ローペ・デ・ベーガ 4. スペイン・バロックの三様の表現 －ゴンドラ・ケベード・カルデロン－	牛島信明 （東京外国語大学教授）
9	近代文学への道(2) フランス	1.ルネサンス期における知と宗教と道徳の革命 2.『フランス語の擁護と顕揚』－文芸理論の誕生　3.古典的抒情よりバロックへ　4.マレルブの批判と彼への反抗　5.アカデミー・フランセーズと文芸理論の基礎固め－シャプランの書 6.古典主義の精髄－ラシーヌ	成瀬駒男 （国学院大学教授）
10	近代文学への道(3) イギリス―― エリザベス朝 イギリスとシドニーの「詩の擁護」	1. ルネサンスと宗教改革の流れ 2. 詩の擁護はなぜ必要だったか 3. 民衆の娯楽・文芸と国民性の形成 4. シドニーの批評論と詩の本質 5. 近代イギリス文学の成立	児玉久雄 （学習院大学教授）
11	近代文学への道(4) ドイツ	1.遅咲きの近代文学　2.オーピツのドイツ詩改革　3.新しい文学制作は翻訳から　4.言語育成と言語協会　5.文学活動と地域の特色　6.理論と実践との関係　7.新興の文学ジャンル－小説 8.ドイツ語の文芸書と読者	轡田収 （学習院大学教授）
12	小説の興隆	1.「小説」の登場　2.小説の3系統　3.騎士冒険小説から英雄恋愛宮廷小説へ　4.牧人小説 5.悪者（ピカロ）小説　6.小説の理論　7.小説の変貌と展開	同上
13	文学と天才	1.天才の時代　2.市民階級の台頭と古典美学への批判　3.天才と自然　4.ドイツにおける天才思想の開花　5.天才の神格化－ヘルダーとゲーテ　6.天才の芸術と市民社会　7.（天才）と（趣味）	大貫敦子 （学習院大学助教授）
14	文学と国民意識 ――ドイツを例に	1.「国民」という概念　2.国民運動と国民意識 3. 解放戦争と『ニーベルンゲンの歌』　4.国民意識と文学の歴史　5.「ドイツ学」の成立 6.精神科学と国民意識	轡田収
15	社会と文学と自律性	1. 近代と芸術の自律性 2. 理性の自己分化と芸術 3. 市民社会の代償としての芸術 4. 芸術の自律性とアヴァンギャルド 5. 芸術の自律性の動揺－反省の深化	三島憲一 （大阪大学教授）

＝美術史と美術理論＝（TV）

〔主任講師：友部　直（共立女子大学教授）〕

全体のねらい

今日、精神的な豊かさを求めて、美術への関心が高まっている。この番組では、単なる美術の通史ではなく、トピックを含めて、映像的な魅力を通して、学習者を美術の世界へひきこむようにしたい。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	美術とは	1. 色と形の役割 2. 表現の様式 3. それぞれの立場 4. 能力の問題	友部　直 （共立女子大学教授）
2	日本 ～彫刻(1)天平彫刻～	1. はじめに 2. 飛鳥・白凰の彫刻 3. 天平初期の彫刻 4. 天平盛期の彫刻 5. 天平後期の彫刻 6. 肖像彫刻 7. 結び	宮　次男 （実践女子大学教授）
3	日本 ～彫刻(2)鎌倉彫刻～	1. 鎌倉美術の特色　2. 南都復興 3. 東大・興福二大寺の造仏　4. 運慶 5. 快慶　6. その他の慶派仏師たち 7. 慶派以外の仏師集団　8. 関東彫刻 9. 肖像彫刻　10. 裸体像 11. 結び	同　上
4	日本 ～絵画(1)仏画～	1. 仏画とは 2. 奈良時代の仏画 3. 平安前期の仏画 4. 平安後期・11世紀の仏画 5. 平安後期・12世紀の仏画 6. 鎌倉時代の仏画 7. 結び	同　上
5	日本 ～絵画(2)絵巻物～	1. 絵巻とは 2. 絵巻の発生 3. 源氏物語絵巻 4. 信貴山縁起 5. 伴大納言絵詞 6. 鳥獣戯画 7. 結び－平安絵巻の性格	同　上
6	中国（1） ～皇帝の墓陵～	1. 中国美術のあけぼの　2. 新石器時代の彩陶　3. 仰韶文化の彩陶　4. 馬家窯文化の彩陶 5. 大汶口文化の彩陶と龍山文化の黒陶 6. 河姆渡文化　7. 夏・殷時代の社会と文化 8. 殷王朝の青銅器　9. 最盛期の青銅器 10. 俑の出現　11. 秦始皇帝の兵馬俑	東山健吾 （成城大学教授）
7	中国（2） ～石窟寺院～	1. 仏教と仏教文化 2. 石窟寺院 3. 五胡十六国時代の涼州 4. 炳霊寺石窟 5. 敦煌莫高窟 6. 莫高窟初期の壁画 7. 雲岡石窟	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	中　　国　(3) ～水墨画と陶磁器～	水墨画 1. 山水画の成立　2. 荊浩とその後継者たち 3. 郭熙と三遠　4. 宋画院の山水画 5. 江南の山水画家　6. 南宗画 陶磁器 1. 最初の陶器　2. 青磁　3. 黒釉　4. 白磁 5. 磁州窯　6. 青花（染付け）	東　山　健　吾
9	西　　洋 ～王墓と神殿～	1. エジプト美術の特性 2. ピラミッド － 巨大な王墓 3. 神々の住まい － 神殿	友　部　　直
10	西　　洋 ～神殿と劇場～	1. 神々と人間 2. 時代と様式 3. パルテノンとアクロポリス 4. 官能的な女神たち	同　　上
11	西　　洋 ヨーロッパ中世 ～街と大聖堂～	1. 神の栄光のために 2. 大聖堂の時代 3. 都市と城	同　　上
12	西　　洋 ルネサンス美術(1) ～人間の世紀～	1. ルネサンスとは 2. 古代美術の復活 3. ルネサンス美術の開花 4. マサッチォなど	同　　上
13	西　　洋 ルネサンス美術(2) ～絵画の黄金時代～	1. レオナルド・ダ・ヴィンチ 2. ミケランジェロ 3. ラファエロ、ティツィアーノなど	同　　上
14	西　　洋 ヨーロッパ近世 ～王侯の芸術～	1. 時代の転換 2. 宮廷を彩る 3. アルプスの北で 4. ヴェルサイユ宮殿 5. ロココの成立 6. 雅びなる宴に	同　　上
15	新　し　い　視　覚 ～19・20 世紀の ヨーロッパ美術～	1. 凋落に向う貴族社会 2. ロマン主義と古典主義 3. 現実を直視する 4. マネと印象主義 5. セザンヌと後期印象派 6. 視覚の冒険	同　　上

＝演劇史と演劇理論＝（TV）

［主任講師：毛利三彌（成城大学教授）］
［主任講師：西　一祥（日本大学教授）］

全体のねらい

日本演劇の特質は、ジャンルの並存性と生きた伝承性にある。本講座は各専門ジャンルの講師の分担講義により、古代から現代への演劇史の流れに沿いつつ、各ジャンルごとの演劇の展開を重層的にみていく。また随時アジア芸能や西洋演劇との比較・対比を通して日本演劇の環境や本質をグローバルな視点から多角的に考究する。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	演劇の源流	原始芸能 古代歌舞の種々相 伎楽の伝来	高山　茂 （早稲田大学講師）
2	中世芸能の胎動	舞楽の受容と定着 散楽の展開と演技 神楽	同上
3	中世芸能の諸相	田楽の成立と展開 猿楽の発展 延年の能 雑芸の種々相	同上
4	猿楽・民衆から貴族へ	大和猿楽と観阿弥 観阿弥の猿楽改革 世阿弥と足利義満 世阿弥と二条良基 世阿弥と足利義持	西　一祥 （日本大学教授）
5	花と幽玄	世阿弥の能ー「井筒」を例としてー 世阿弥芸術論の“花”と“幽玄” 世阿弥以後の能 豊臣秀吉と能	同上
6	能のあゆんだ道	徳川幕府と能 民衆と謡 岩倉具視と能 能の海外公演	同上
7	“おかし”の精神	狂言の成立 猿楽座の“おかし” 狂言の分類と例 “おかし”の底にあるもの	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	語りの系譜	語りものの歴史的な流れ 『浄瑠璃姫物語』と義太夫節の創始 竹本義太夫と近松門左衛門	藤波隆之 （国立劇場芸能部長）
9	歌舞伎の誕生	歌舞伎発生の環境 阿国歌舞伎の構成と展開 「物真似狂言尽し」へ	同上
10	爛熟の美	歌舞伎史の時代区分 市井の写実劇 南北の劇作術 天保改革と三座の移転	同上
11	伝統と変容	幕末から明治初期の歌舞伎界 明治維新と歌舞伎界の変容 散切狂言と活歴劇の登場 演劇改良会と天覧劇	同上
12	西洋演劇の潮流	ドラマの歴史における最初の大きな山 演劇の新しい芽－中世の宗教劇－ ドラマの歴史の二つ目の山 18世紀の演劇熱狂	毛利三彌 （成城大学教授）
13	演劇近代化の試み	近代演劇の露払い リアリズム演劇の始まり 近代劇の確立者、イプセン 舞台の近代化 日本の演劇近代化 自由劇場と文芸協会	同上
14	新劇の時代	新劇生成期 近代戯曲の成立 築地小劇場 プロレタリア演劇の盛衰 戦中・戦後の新劇	同上
15	現代演劇の行方	20世紀前半のヨーロッパ演劇 ブレヒトとアルトー 不条理演劇 アンダーグラウン演劇＝60～70年代の前衛演劇 現代演劇の行方	同上

＝音楽史と音楽論＝（TV）

－日本の音楽に世界の音楽を投影する－

〔主任講師：柴田南雄（元放送大学教授）〕

全体のねらい

ＴＶの特性を生かし、教室で教科書をなぞるようにでなく、縄文・弥生の石笛や琴にはじまり、古典音楽から現代音楽まで、各地の遺跡のロケや邦楽・洋楽の実演もとりまぜ、しかも東西音楽の通史となるよう話を進める。同じ時代に、日本と中国、日本と西洋でどのような音楽が行なわれていたか。つねにそれらを比較考察しながら話をすすめる。

回	テ　ー　マ	内　容	担当講師（所属・氏名）
1	外来音楽と日本人	『日本』へのヒトの渡来と音楽的祖先―『日本』をとりまく環境、『日本』にはいつからヒトが住んだか、言語から見た『日本』へのヒトの渡来、音楽史に特有の構造について―外来音楽と日本人、西洋音楽史の時代区分について	柴田南雄（元放送大学教授）
2	音楽文化の深層を探る	縄文時代の日本の楽器―各地出土の石笛、宗教音楽の純粋な形、石笛と能管との類似、各種の土笛、骨笛と貝笛、木製の楽器、諸外国の古代の楽器―中国の楽器、ヨーロッパの最古の楽器、オリエントの楽器、旧約聖書に現れる楽器、ギリシャの楽器、北欧の金管楽器、インドの楽器、少ない日本の楽器の出土品、音楽の始原に関する諸説	同　上
3	祭祀の音楽	弥生・古墳時代の日本の楽器―“弥生の笛”損は西日本から出土、土師器の笛など、もっとも原始的な弓、琴・和琴・箏、各地の遺跡から出土した琴、ずんぐり型の琴、琴を持つ埴輪、金銅の雛形琴、楽器としての銅鐸、銅鐸以外の打楽器、木製の横笛、同時代の中国の音楽、馬王堆漢墓の楽器、２つの音楽論、雲崗石窟の楽器演奏人物像、同時代の西洋の音楽、ギリシャの楽譜と初期キリスト教の音楽、いろいろな音楽論	同　上
4	制度化と学習	大陸からの音楽の輸入と雅楽寮の設立―朝鮮３国からの音楽、雅楽寮の発足、この時代の主な楽器―唐楽の楽器と楽譜、三韓楽の楽器、雅楽と声明の伝来―宴楽が主体の雅楽、声明は寺院の儀礼の唱礼、西洋における聖歌の集大成と聖歌学校の創設―グレゴリウス法王の聖歌集大成	同　上
5	芸術音楽の胎動期	平安時代の日本の音楽―雅楽の楽制改革、「左方」と「右方」、催馬楽、朗詠、神楽と声明、ユニークな今様、田楽と猿楽、文献に見られる演奏場面、西洋の単旋律聖歌・世俗歌と、多声音楽の発生―単旋律聖歌と典礼劇、世俗歌の変遷、複旋律の歌唱法オルガヌムの登場	同　上
6	諸国を行脚する音楽	鎌倉・南北朝時代の日本の音楽―平曲（平家琵琶）、早歌、猿楽から能楽へ、雅楽の衰退、普化尺八、西洋のさまざまな声楽曲種と記譜法の成立―世俗歌曲の隆盛、ドイツのミンネザンク、スペインのカンティガなど、多声音楽のモテトゥス、新記譜法と「アルス・ノヴァ」	同　上
7	ルネサンス	室町、戦国、安土・桃山時代の音楽―能楽の大成、一節切の輸入、薩摩琵琶の起こり、三味線の渡来、西洋ルネサンス音楽の開花、ＴＤＳの機能和声法の確立、記譜法の整理、フランドル楽派、ドイツ・プロテスタント音楽の誕生、ヴェネツィア楽派、ラッススのマドリガーレ、パレストリーナのミサ曲、モンテヴェルディとオペラの誕生、ヌオーヴェ・ムジケ（新音楽）、フランスとイギリスの音楽、スペインの音楽、西洋と日本の相違	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	キリシタン音楽	布教時期の区分、ザビエルの来日とキリシタン音楽の初期―西洋音楽との最初の出会い、クラボ、チャラメラとフラウタ、聖歌集、最初の音楽教育、セミナリヨの創設と天正の少年使節―セミナリヨの教科とオルガンの輸入、少年使節の演奏、布教に効果あった音楽、キリシタン音楽の日本音楽への影響―薩摩琵琶への影響、筑紫箏への影響、段物への影響、今も歌いつがれる隠れキリシタンの〈オラショ〉―生月の歌オラショ、	柴　田　南　雄
9	東と西のバロック音楽	東西の共通性、彼我の決定的相違点、上方芸能優勢の江戸時代前半―平調子の成立、三味線の地歌、箏曲の組歌、浄瑠璃・義太夫節、歌舞伎、西洋バロック音楽の盛期―声楽曲が主流	同　上
10	古典派・ロマン派	元文以後、江戸時代後半の邦楽―常磐津、清元、新内、長唄、箏曲、三味線、胡弓、東西の音楽のあり方の相違―作曲家の輩出	同　上
11	隆盛の絶頂と無からの出発	西洋音楽は創造活動の絶頂期―この時期の音楽の特徴、〈無〉の状態からの吸収・模倣―明治以前からあった軍楽隊、讃美歌、音楽取調掛、東京音楽学校、作曲科設置のおくれ、伝統邦楽の衰退	同　上
12	両大戦間の状況	西洋音楽は新古典主義の時代―ノイエ・ムジーク、シェーンベルクの12音技法、日本の洋楽―その演奏と創作活動―邦楽はさらに後退、洋楽演奏の充実、作曲活動の開始	同　上
13	第2次大戦後の作曲界	(A)音列音楽（ミュジック・セリエル）、(B)初期の電子音楽、(C)ミュジック・コンクレート、(D)偶然性の音楽、(E)諸民族の音楽語法の借用、(F)ミニマル・ミュージック、(G)ロマン主義の復興	同　上
14	第2次大戦後の演奏界	作曲の時代様式との平行関係、録音による演奏の比較―ロマン主義・表現主義の演奏家、新即物（新古典）主義の演奏家、第2次大戦後の演奏家、時代の音楽様式を決定するもの―基準となりやすい“旧美学”、パトロンの影響と聴衆の好み	同　上
15	未来の展望	ヒトの年齢、世界の諸文明の年齢、諸芸術連鎖説、西洋音楽史におけるサイクル現象について、気候変化と半音階様式の相関関係、音楽史のリズム論について、ヴィオラの「世界音楽史―4つの時代区分」、未来の音楽はどのような形をとるか―新様式への旅立ち、西洋音楽の等質化と世界音楽の誕生	同　上

＝民　族　音　楽　学＝(R)

〔主任講師：徳丸吉彦（お茶の水女子大学教授）〕

全体のねらい

民族音楽学は人間と音楽との関係を考える学問で、歴史的な考察を中心とする音楽史と相補的な関係にある。今回の講義では、この比較的新しい学問が生まれてきた理由を出発点に、人間と音楽との複雑で不可分な結びつきを地域を限定せずに明らかにし、あわせて従来は民族音楽学の方法で扱われなかった音楽様式も考察する。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	民族音楽学の歴史	異文化への関心から始まった民族音楽学の発想をふりかえる。19世紀後半から20世紀前半は比較音楽学と呼ばれていたこの学問の歴史を概観する。	徳丸吉彦（お茶の水女子大学教授）
2	民族音楽学の考え方	現代の民族音楽学の基本概念を提示する。とくに、音楽に関する人間の行動や社会的な文脈における音楽のありかたなど、次回以降で個別的に扱う問題の相互関係が説明される。	同　上
3	音楽におけるシステム	音楽を構成している音響的な側面がシステムとしてどのように機能しているかを見る。音の高さ、音の長さ、音色などの側面が中心的な課題である。(協力：金子敦子、放送大学非常勤講師他)。	同　上
4	ハードウェアとしての楽器	楽器とは何か、という問題を、まず楽器のハードウェアとしての面を焦点に扱う。材料や作りかた、作り手の意識なども論じる。(協力：山中正夫氏（箏の作り手）他)。 （箏製作者の他、糸を作る人にインタヴューを行い、糸の違いも奏いて示す。）	同　上
5	楽器のソフトウェア	楽器をどう演奏するか、が楽器のソフトウェアである。楽器に対する人間の儀礼から、人間と楽器の相互関係が論じられる。(協力：米川裕枝（生田流箏曲家）他)。	同　上
6	声　と　身　体	声は楽器と同様に音楽における不可欠の要因である。それぞれの文化が声の特質を形成してきたことを考え、また声と楽器の関係を扱う。（協力：高橋大海・東京芸術大学教授、富山清隆・お茶の水女子大学講師他）	同　上
7	パフォーマンス	音楽を実際に演奏する行為は、時間・空間の他、人間同士の相互関係等、複雑な問題があり、この理解が音楽全体の理解にとっても鍵となる。（協力：マイク・プライス（アメリカのジャズ演奏家）他）	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	伝承	音楽の伝統が今日まで生きているのは、それが伝承されたからである。しかし、伝承方法は音楽様式によって異なり、楽譜によるものだけでなく、口頭伝承も大きな役割を果たしている。（協力：渡辺順生（チェンバロ））他にバロック・ヴァイオリン、チェロ奏者の必要あり。上記の富山・米川のどちらかにも頼む。）	徳丸吉彦
9	変化と固定	音楽のありかたを、変化と固定という対立概念から見るのがこの回の目的で、ここでは、異文化の受容による変化や様式的な安定の双方が扱われる。（協力：箏曲家数名）（13弦、17弦、20弦の箏を奏いてもらう）	同上
10	個人と集団	音楽の創作でも演奏でも、文化によって個人と集団の役割が異なっている。また、特定の集団にとって大きな意味をもっている音楽もある。	同上
11	音楽の概念化	音楽は単に鳴り響く音の連続ではなく、文化による音楽の概念化から独立できない。異文化の音楽の理解には、この点を無視することは危険である。	同上
12	音楽の場	音楽はさまざまな社会・文化的な文脈と結び付いている。このため、音楽をそれに固有の場から切り離した状態だけで考えてはならない。（協力：東大寺の僧侶）	同上
13	民俗音楽とポピュラー音楽	民族音楽やポピュラー音楽と呼ばれるジャンルも今日の音楽生活で大きな意義をもっている。これを民族音楽学の立場から考察する。（協力：三井徹・金沢大学教授、金子敦子）	同上
14	ベートーヴェンの民族音楽学	民族音楽学の可能性を示す例として、西洋古典音楽の典型であり、また『第九交響曲』で日本でも人気のあるベートーヴェンを取り上げ、今まで述べた民族音楽学の考え方が彼の音楽の理解にも不可欠であることを示す。（協力：柴田南雄・放送大学客員教授）	同上
15	歴史的民族音楽学	民族音楽学は主として現代の音楽活動を扱っているが、現代が過去と連携している以上、歴史とも無縁ではない。これを明白にして『音楽史と音楽論』との関係づける。（協力：山口修・大阪大助教授）	同上

＝文　化　人　類　学　＝（TV）

〔主任講師：祖父江孝男（放送大学教授）〕

全体のねらい

文化人類学という学問を一言で定義すれば、世界の諸民族のもつ文化や社会について比較研究する学問だと言える。それらの特色を具体的・実証的にとらえていくところに特徴がある。本講においては文化人類学の諸分野における今までの成果を概観し、日本人、日本文化の問題や国際理解など、身近な課題にも眼をむけていきたい。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	文化人類学とはどんな学問か？	フィールド・ワークの学問　アメリカにおける区分法　英国における区分法　ドイツ、オーストリアにおける区分法　日本における区分法　民俗学と民族学　欧米におけるこの分野の歴史　日本における歴史　人種と民族	祖父江　孝　男（放送大学教授）
2	文化：人間の特質	人間の特質としての言語能力　動物の鳴き声　人間の言語の特色　言語の役割(1)コミュニケーション　言語の役割(2)記憶と複雑な思考　人間だけがもつ文化　文化はいつ生まれたか？	同　上
3	文化の進化、文化の伝播	19世紀の文化進化論　モルガンの社会進化論　進化論にかわって登場した伝播論　イースター島の問題　タバコの伝播	同　上
4	生　業　と　経　済	狩猟と採集が最初の段階　狩猟の規模によって生活形態が異なる　不安定な狩猟採集民の経済　農耕とその起源　穀物農耕により人間の生活はどう変わったか　日本の場合を考える　牧畜の起源	同　上
5	衣・食・住を考える	衣類の種類と系統　衣服の起源　身体装飾　食物の基本型：主食の獲得と利用　日本における米食の慣習　調理の基本型　住居の基本型	同　上
6	言語とコミュニケーション(1)	音声学　音楽　構造言語学とエティックの立場、エミックの立場　言語の系統―比較言語学	同　上
7	言語とコミュニケーション(2)	言語の分類(1)文字のある言語、ない言語　言語の分類(2)形態による分け方　サピア・ウォーフの仮説　非言語的コミュニケーション	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	家族と親族(1)	原始乱婚制説をめぐって　モルガンの方法における誤り　一夫一婦制と一夫多妻制　一妻多夫制家族　婚姻後の居住場所の分類	祖父江　孝　男
9	家族と親族(2)	父系制と母系制　母系制　リネージと民族　日本の同族　イトコ婚をめぐるレヴィ・ストロースの学説　レヴィレート婚、ソロレート婚　冗談関係と忌避　配偶者選択における自主制	同　上
10	超自然観と宗教	アニミズムとアニマティズム　宗教と呪術　呪術の分類　妖術（ウィッチクラフト）　シャーマニズム　日本のシャーマニズム	同　上
11	民族芸術と音楽・芸能	民族芸術　民族音楽学からみた日本の音楽　芸能	同　上
12	文化と心理・民族性	民族性・国民性は文化によって作られる　マーガレット・ミードによるニューギニア研究　日本文化と日本人の心理、国民性　重要な因子としての歴史と風土　県民性を例にとって考える　風土ということばの意味　家族関係としつけの様式	同　上
13	文化変化と文化変容	文化変容（アカルチュレーション）　文化変容の種類　ハワイの場合、北米インディアンの場合　相対主義　カルチャー・ショック　反文化変容運動　文化変容をどう評価するか　戦後日本の文化変化	同　上
14	国際理解と国際交流	村垣淡路守のこと　エスノセントリズムと相対主義　異なった背景に異なった慣習　日本人の対外感覚	同　上
15	エ　ピ　ロ　ー　グ	触れ残した諸領域　認識人類学　医療・映像・教育人類学　都市人類学　象徴人類学・女性の人類学　90年代への人類学　フィールド・ワークの方法と倫理	同　上

＝ 博 物 館 学 Ⅰ ＝ （ＴＶ）

〔主任講師：大塚和義（国立民族学博物館助教授）〕

全体のねらい

現在、日本に限っても、じつに多様な、しかも膨大な数の＜博物館＞が存在する。これらをいくつかのタイプにまとめ、現代の博物館像を把握することが主眼である。そのうえに立って、現代社会に機能する文化的装置として博物館とこれを理論づける博物館学とはどのようなものかを学びとる。

回	テ ー マ	内 容	放送教材担当者（所属・氏名）	印刷教材執筆担当者（所属・氏名）
1	博物館の誕生	1960年代にブームとなった都道府県レベルの大規模博物館の構想と実現は、今日的な総合博物館のひとつの型とつくりあげた。ブームの先頭をきった北海道開拓記念館をとりあげて、現代における文化的装置としての博物館の存在を問う。	大塚和義（国立民族学博物館助教授）	大塚和義（国立民族学博物館助教授）
2	地域と文化の展示	日本の南端に位置する沖縄の県立博物館に例をとり、その風土に育まれた新しい視点にもとづく歴史と文化の地域的特性の展示をみる。	同 上	同 上
3	建物の移設による博物館	北海道開拓の村と野外民族博物館リトルワールドの二つをとおして、移設された建物群とそれが生み出す擬似空間における時間と文化を超えた体験の場のもつ意味を考える。	同 上	同 上
4	博物館と資料	三浦半島の城ケ島における磯漁と、半島全域における漁撈用具を収蔵する横須賀市自然・人文博物館を訪ね、民具資料の収集と展示の具体的なあり方をみる。	同 上	同 上
5	アイヌ民族文化	日本のなかの先住・少数民族であるアイヌの伝統文化の現在とその展示を、北海道の二風谷アイヌ文化資料館と白老のアイヌ民族博物館において学ぶ。	同 上	同 上
6	多様な民族文化	世界のさまざまな民族文化を＜もの＞をとおして展示することの技術的なアプローチの方法を国立民族学博物館における実践例で学習する。	同 上	同 上
7	美術館の世界	さまざまな美術作品をとおして、感性やその表現手法の多様性を世田谷美術館と国立国際美術館においてみる。	同 上	同 上

回	テーマ	内容	放送教材担当者（所属・氏名）	印刷教材執筆担当者（所属・氏名）
8	科学技術とその展示	文化を創造し、発展させていく道具である科学や技術の歴史と現在を東京の科学技術館において考える。	矢島國雄（明治大学助教授）	大塚和義
9	自然との共生	自然と人間との共生をめぐる博物館施設について、東京都多摩動物公園昆虫館と、大阪市立自然史博物館を対象にその問題点をさぐる。	同上	同上
10	大学の博物館	大学における教育と研究のために収集された資料をもとにする博物館活動を、明治大学の刑事博物館と考古学博物館の二つをとおしてみる。	同上	同上
11	個人コレクションの展示	個人の眼をとおして収集されたふたつの性格の異なるコレクションが展示される彌永北海道歴史館と、東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館を訪ねる。	大塚和義	同上
12	企業の博物館	最近、企業が自社の宣伝を主眼としながらも社会的な文化活動の一翼を荷なう役目も果たすいわゆる企業の博物館が急増している。そのあり方を、カメラ博物館ペンタックスギャラリーと、サントリーウイスキー博物館・東芝科学館にみる。	同上	同上
13	博物館のネットワーク	一定の行政区域内に多種類の博物館施設を分散して設け、これらを有機的に結ぶネットワークの姿を埼玉県を例にとって学習する。	同上	同上
14	博物館の仕事	博物館における資料の収集から保存までのプロセスの実際を見学し、さらに資料を〈もの〉としてだけでなく、情報処理によるデータ化などの問題を国立民族学博物館にみる。	同上	同上
15	博物館史とまとめ	博物館が今日にいたるまでの歴史的歩みを跡づけ、さらに現在の多様な博物館のあり方とその問題点を提示し、博物館の未来像を考える。	同上	同上

＝博　物　館　学　Ⅱ＝（TV）

〔主任講師：大塚和義（国立民族学博物館助教授）
主任講師：矢島國雄（明治大学助教授）〕

全体のねらい

博物館は、市民や地域社会にとって、現在どのような役割になっているか。さらに、未来にむけてどうあるべきなのかを考えたい。

また、学芸員と資料・展示のあり方について、具体的な技術論を展開する。

回	テ　ー　マ	内　　容	放送教材担当者（所属・氏名）	印刷教材執筆担当者（所属・氏名）
1	歴史体験の共有と博物館	戦争によってひきおこさる悲劇をくりかえさぬためにも、それを歴史体験として、忘れることなく共有していくことの大切さを学びとる役割を果たす博物館活動をみる。	大塚和義（国立民族学博物館助教授）	大塚和義（国立民族学博物館助教授）
2	地域社会と博物館のありかた	地域社会の文化拠点として博物館を捉え、各種の文化施設をこれに集中させる試みがいくつかなされはじめた。この実際を紹介する。	同　上	同　上
3	博物館のあゆみ	日本における博物館は、およそ120年の歴史をもつ。それぞれの時代状況によって、博物館の性格や役割も変化してきた。その歴史的なあゆみをたどる。	矢島國雄（明治大学助教授）	矢島國雄（明治大学助教授）
4	博物館の伝統と革新―国立自然史博物館＜イギリス＞	近代博物館の発祥の地であるイギリスに自然史博物館を訪ね、18世紀以来の博物館の質的な変遷と、これに伴う博物館の諸活動の発展、とくに、展示の革新について学ぶ。	同　上	同　上
5	博物館資料の保存と補修　Ⅰ	資料を長く伝えていかねばならない使命をいかに達成するか。ことにカビや害虫や劣化などからいかに守っていくか。そのための保存科学の現在の技術と考え方について学習する。	大塚和義	三輪嘉六（東京国立文化財研究所修復技術部長）
6	博物館資料の保存と補修　Ⅱ	博物館における資料は、木、紙、布、金属など材質的にみて多様である。それらは、いずれも時間の経過とともに、なんらかの補修が必要となる。最新の補修技術を紹介する。	同　上	沢田正昭（奈良国立文化財研究所、埋蔵文化財センター、研究指導部遺物処理研究室長）
7	レプリカ資料と博物館	収集のできない資料や展示することに保存上問題のある資料は、実物の忠実なレプリカによらざるを得ない。最新のすぐれたレプリカ技術の現場を訪ね、その作業工程を見学するとともに、博物館におけるレプリカ資料をめぐる問題点について考える。	同　上	大塚和義

回	テーマ	内容	放送教材担当者（所属・氏名）	印刷教材執筆担当者（所属・氏名）
8	史跡整備と博物館	歴史的な文化遺産である史跡は、歳月によって土中に埋もれてしまったり破損しているものが大部分である。これを整備して周囲の環境とともに歴史的直体験の場として活用するありさまをみる。	大塚和義	大塚和義
9	野外博物館の原点 ースカンセン ＜スウェーデン＞	世界初の野外博物館である北欧・スカンセンの民族村を訪ねる。ここで「移設」による博物館のコンセプトと、そこに展開されている見せ方の技術、プレゼンテーションの精神について学ぶ。	矢島國雄	矢島國雄
10	展示技術論 (I) シナリオ	博物館における展示のよしあしは、展示される＜もの＞自体よりも、どのようなストーリー構成で展示をおこなうかがポイントである。そのためのシナリオをどのように作成すべきか、実際の作業の一端をみながら、学びとる。	大塚和義	大塚和義
11	展示技術論 (II) ディスプレイ	展示シナリオを、いかに効果的に実現させるか。めざましく改善されてきたディスプレイ方法、つまり見せかたの技術の理論と実際を学ぶ。	同上	同上
12	教育と博物館	博物館法によれば博物館は社会教育機関である。この法律のもつ意味を解説し、実際に博物館でどのような教育活動が展開されているのか、そして、それが学校教育や社会教育などとどのように関係しているのかを考える。	矢島國雄	矢島國雄
13	博物館と学芸員	博物館の専門職員とされる学芸員とは、どのような任務と役割をもつものであるのかを考える。また、日本の博物館における実際の学芸員の仕事や考え方、また学芸員の養成などの現状と、諸外国のそれとを比較する。	同上	同上
14	子どもと博物館 ボストン子ども博物館 ＜アメリカ＞	博物館は成人だけのものではない。学齢前の幼児のためにも博物館は有効な教育機関として機能している。とくに、子ども博物館の発達しているアメリカにおいて、その実感をボストンの子ども博物館に見る。	同上	同上
15	博物館の未来像	博物館は、いまや、文化情報の発信基地として重要な役割をはたしているが、さらによりよいものにしていくためには、どのような問題があるのかを検証し、未来を切り開く博物館像を求める。	大塚和義	大塚和義

＝イギリスの言語文化Ⅰ＝（TV）

〔主任講師：橋口　稔（鶴見大学教授）〕

全体のねらい

ルネサンスの時代から２０世紀の現代まで、イギリスの言語文化の諸相を、社会との関連に触れながら、歴史的に辿ってみようと思う。主として文学作品をとおして考察することになるので、作品を読んでもらうことを課題にするつもりである。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	英語の歴史	イギリスについて考える場合に、まず基本的に知っておく必要のあること一応解説した上で、英語の変遷の歴史を説明する。	橋口　稔（鶴見大学教授）
2	シェイクスピアⅠ	イギリスのルネサンスを時代的背景のもとに考察し、シェイクスピアを生みだすにいたるエリザベス朝演劇の特質を考える。	同上
3	シェイクスピアⅡ	シェイクスピアの生涯を分っている範囲で説明し、その上でシェイクスピアの作品の本質について考えてみる。	同上
4	欽定訳聖書	1611年に刊行された「欽定訳聖書」について考えながら、併せてイギリスの宗教について考察を加える。	同上
5	ミルトン	ミルトンの生涯について考えながら、ピューリタンの精神がイギリスの文化において持つ意味について考察する。	同上
6	ロビンソン・クルーソウ	イギリスの海外進出という背景を考慮にいれた上で、デフォーの『ロビンソン・クルーソウ』について考えてみる。	同上
7	近代小説に見る生活Ⅰ	主としてオースティンの『高慢と偏見』に描かれた、カントリー・ハウスの生活をとおして、ジェントリー階級に対する考察を行なう。	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	ロマンティシズム	１８世紀末から１９世紀初頭にかけてのロマンティシズムの動向を、当時の社会的背景と関連させて考えてみる。	橋口　稔
9	近代小説に見る生活Ⅱ	ジェントリー階級の子弟が学ぶパブリック・スクールのことを、ヒューズの『トム・ブラウンの学校生活』によって考えてみた上で、貧しい階級の子供たちのことも、ディケンズの小説をとおして考えてみる。	同　上
10	ヴィクトリアニズム	ヴィクトリア朝の風潮を、テニソンの詩などによって考えた上で、ヴィクトリアニズムに対する批判も取り上げて考察する。	同　上
11	ブルームズベリー・グループ	ストレイチー、ウルフ、ケインズ等をメンバーとする私的な集まりであったブルームズベリー・グループをとおして、1900年代から1920年頃までのイギリスの文化の変化について考察する。	同　上
12	T. S. エリオットとD. H.ロレンス	アメリカに生れてイギリスに帰化したエリオットと、炭坑夫の子として生まれたロレンスを取り上げて、イギリス文化の問題を考えてみる。	同　上
13	オーデン世代	W．H．オーデンを中心とする1930年代に活躍した詩人、作家たちの世代を取り上げて、第一次世界大戦後から第二次大戦にかけてのイギリスの文化の動向を考える。	同　上
14	第二次世界大戦後Ⅰ	第二次世界大戦後のイギリス文化の執しい動向を、1950年代に登場してきた作家たちによって考えてみる。	同　上
15	第二次世界大戦後Ⅱ	同じ第二次世界大戦後の動向をさらに考察し、現代イギリス文化を展望する。最後に、日本とイギリスの関係を取り上げて、結びにする。	同　上

＝イギリスの言語文化Ⅱ＝（R）

主任講師：川西　進（東京大学教授）
主任講師：山内久明（東京大学教授）

全体のねらい

ヨーロッパの政治的・経済的統合の機運が高まる中で、イギリスの文化と社会は、広い間口と深い奥行きのある固有のアィデンティティを保ち続けている。イギリスを知ることは、それ自体としての価値があるだけでなく、世界的視野の確立のためにも不可欠である。イギリスを形作る構成要素を、多角的・総合的に考察したい。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	イギリスの自然と社会	自然環境としてのイギリスの地理と気候、それらがイギリス社会の発展過程とどのように関わって来たか。	川西　進（東京大学教授） 山内久明（東京大学教授）
2	イギリスの田舎と都会	イギリスの田舎と都会の分岐と交流、またそれらが、人々の想像力の中でどう捉えられ表現されてきたか。	山内久明 G. E. H. Hughes（東京大学外国人教師）
3	イギリスの民族的成り立ち	ケルト、アングロ・サクソン、デーン、ノルマンなどの征服、服従、対立、融和の歴史としてのイギリスの民族的成り立ち、さらには「新しいイギリス人」と呼ばれる有色移民の問題。	山内久明 Craham Law（東泉女学園大学助教授）
4	イギリス英語の多様性	いわゆるクウィーンズ・イングリッシュ、BBCイングリッシュのような標準英語のほかにイギリスには細かく分岐した多様な方言がある。地域差に加えて、さらには階級差もあって、イギリス英語は複雑極まりない。こうした問題を考える。	川西　進 A. P Collins（東京大学外国人教師）
5	イギリスの政治	議会政治、政党、政治思想の長い歴史を持つイギリスの政治の特質を考える。	河合秀和（学習院大学教授）
6	イギリスの経済	産業改命、資本主義、帝国主義、社会福祉など、近代経済の典型を示し、数多くの秀れた経済学者を輩出したイギリスの経済の特質を考える。	早坂　忠（学習院大学教授）
7	イギリスの社会―階級の問題	階級制度に立脚した質の高いエリート文化と、他方にある労働者階級との分極化。それがイギリスの文化と社会の形成にどのように関わって来たか。	川西　進 Graham Law

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	イギリスの教育(1) — 学校	公立と私立のほか、それぞれの中でも多様性を持った複線方式の学校制度が、イギリスの文化と社会にどう関わって来たか。	川西 進 山内久明 Graham Law
9	イギリスの教育(2) — 大学	中世に起源を持つオクスフォードおよびケンブリッジの両大学をはじめとして、近代の諸大学、新興大学など、異なる背景を持つ大学と、イギリスの文化と社会との関わり合い。	山内久明 G.E.H. Hughes
10	イギリスの宗教	ローマ・カトリック教会から離反して成立した英国国教。さらに英国国教から離反し対立するノン・コンフォーミズム。宗教がイギリスの文化と社会にどう関わって来たか、考察する。	川西 進 A.J. Pinnington （早稲田大学 専任講師）
11	イギリスの思想	ニュートンの科学思想の基盤となった経験主義哲学の伝統を持つイギリスの哲学をはじめとして、近代における社会思想なども含めて考察する。	杖下隆英 （東京大学教授） 塚本明子 （東京大学助教授）
12	イギリスの文学	シェイクスピア、ミルトン、ディケンズなど大作家を輩出したイギリス文学の特質は何かを考える。	川西 進 山内久明 Anthony Thwaite （詩人、批評家） A.P. Collins
13	イギリスの芸術	建築、絵画、音楽など、イギリスの芸術について考える。	川西 進 Clair Hughes （津田塾大学助教授）
14	イギリスの国民性	国民性は、ある意味で文化と社会の真随であるとも言えるが、安易に概括化し単純化することは禁物である。イギリス人自身が、また外国人が、イギリスの国民性をどう考えて来たか。	山内久明 A.P. Collins
15	イギリスと世界	ヨーロッパ、英連邦、アメリカ、日本などと、イギリスはどう関わろうとしているのかを考えることにしたい。	川西 進 山内久明 Carmen Blacker Joseph Moran （筑波大学 外国人講師）

＝アメリカの言語文化Ⅰ＝（TV）

〔主任講師：比嘉正範（放送大学教授）〕

全体のねらい

この科目は、Introduction to American Culture という副題が示しているように、アメリカを国家、国民、文化として紹介することを目的としている。講義は主にハワイ大学のアメリカ研究科の教授によってすべて英語で行われる。受講生はすでに「中級」以上の英語を習得していることが必要である。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	The American City	ピューリタンによる“a city on the hill”の建設に始まったアメリカは、その後、摩天楼のそびえる近代都市を築いた。アメリカの都市の歴史、特徴、問題点を説明する。	James Mccutheon professor university of Hawaii（ハワイ大学教授）
2	American Ideas of Nature	アメリカ人は広大な国土を開拓して近代産業国家を築いてきたが、近年、アメリカ人の自然に対する考え方は大きく変化し、開拓よりも保存と保護を重視するようになってきた。	Robert Weyeneth Associate professor University of Hawaii（ハワイ大学准教授）
3	American Political and Economic Institutions	民主主義国としてのアメリカの政治制度と、資本主義国家としてのアメリカ経済制度を紹介し、アメリカ政府がどのような機能を果たしているかを説明する。	Harry H.L. Kitano professor university of california, Los Angeles（カルホルニア大学教授）
4	The American Family	多民族国家であるアメリカには、典型的な、あるいは標準的な家族はない。近年、アメリカで目立つ現象は、独身主義者と働く母親が増えてきていることである。	同上
5	The American Media	まず、多民族国家であるアメリカのマスメディアの全体的な特徴を説明し、次に、アメリカにおける多様な種類のマスメディアの受容状況を述べる。	同上
6	Popular Culture in America	今日のアメリカの大衆文化はテレビに大きな影響を受けるようになったので、テレビ番組を通してアメリカ人の好みや価値観を探ることができる。	Floyd Matson professor University of Hawaii（ハワイ大学教授）
7	Movies in American Culture	アメリカで起きた映画産業は今日でも多くの人に娯楽を提供している。メロドラマや西部劇、サイエンス・フィクション、喜劇はアメリカ映画の不動のジャンルである。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	Sports in America	アメリカ人の闘争的で野心的な性格は、アメリカ人のスポーツに反映している。今日では多くのスポーツが職業化し、優れた選手はアメリカンドリームの象徴と見なされている。	Seymour Lutzky professor University of Hawaii（ハワイ大学教授）
9	Regional Patterns of American Culture	アメリカにも特色のある文化をもった地域がある。この章では、ニューイングランド、ニューヨーク、南部、西部、カリフォルニアの地方文化を紹介する。	David E. Berte-lson Associate professor Unive-rsity of Hawaii（ハワイ大学准教授）
10	Women in American Culture	1960年に始まったアメリカにおける女性運動の動機と成果を紹介し、現在アメリカの女性が社会と家庭で直面している新しい問題を取り上げる。	Judith Hughes Associate profe-ssor University of Hawaii（ハワイ大学准教授）
11	American Culture and Society The American Writier in the twentith Century	今世紀のアメリカの代表的な作家であるドライサー、ヘミングウェイ、スタインベック、ライト、モリソン、アップダイクがアメリカをどうとらえていたかを論じる。	Judith Hughes Associate profe-ssor University of Hawaii（ハワイ大学准教授）
12	"Ereryone Came from Somewhcre Else" The U.S. as a Nation of Nations	多くの民族が移住してきた今日のアメリカを築き上げたが、これらの民族が経験した新しい生活と社会への適応とアメリカ人としてのアイデンディティを高めた過程を説明する。	Mark Helbling Associate profe-ssor University of Hawaii（ハワイ大学准教授）
13	"We and They": Dominant Croups and Efhnic Minorities	多民族国家であるアメリカには、多数民族が少数民族や有色人種を支配したり差別したりするという歴史があった。現在、民族問題がどのように解決されているかを説明する。	peter Rose professor Smith College（スミス大学教授）
14	" In Many One" The Character of American Democracy	アメリカは世界で最初の近代民主主義国家である。アメリカ人が理想とする民主国家、アメリカ人の民主的な生き方、アメリカ人の流動性などを紹介する。	同上
15	Americas World Role	二つの世界大戦を経てアメリカは世界で指導的な役割を演じるようになったが、同時に、多くの外交問題と果てしない軍事力拡張競争に巻き込まれることにもなった。	同上

＝アメリカの言語文化 Ⅱ＝(R)

〔主任講師：比嘉正範（放送大学教授）
主任講師：Nicholas J. Teele（同志社女子大学教授）〕

全体のねらい

この科目は、アメリカで使われている英語、いわゆる「アメリカ英語」（American English）の社会的・文化的背景を説明し、受講生がアメリカ英語の性質と多様性をよりよく理解し、アメリカ英語をより効果的に使えるようになることを目的としている。受講生はすでに「中級」以上の英語を習得していることが望ましい。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	アメリカ英語の多様性	この科目の全体的な紹介を兼ねてアメリカ英語にはどのような多様性があるのか、言葉の多様性と社会的および文化的要素とどのような関係があるのかを概観する。	比嘉正範（放送大学教授）
2	黒人英語	アメリカの人口の10パーセント以上を占めている黒人の間で使われているいわゆるBlack Englishの特徴を具体的に説明し、アメリカ英語の一方言としてのBlack Englishに対する理解を深める。	田中幸子（椙山女学園大学教授）
3	アメリカ英語の男女差	アメリカ英語の男性語と女性語の特徴を具体的に説明し、両者の差を明らかにする。	井出祥子（日本女子大学教授）
4	アメリカ英語の敬語	アメリカ英語にも敬語があることは意外に知られていない。日本語の敬語と比較対照しながら、アメリカ英語の敬語の特徴と使用状況を具体的に説明する。	同上
5	アメリカ英語の比喩	アメリカ英語で使われている比喩の言語的構造と内容的特徴を具体的に説明し、比喩を比較文化的に考察する。	平賀正子（放送大学助教授）
6	アメリカ英語のオノマトペ	どの民族の言語にも特有の擬声語（onomatopoeia）があるが、本章では日本語の擬声語と比較対照しながらアメリカ英語の擬声語を紹介する。	筧寿雄（神戸大学教授）
7	アメリカにおける広告の言葉	アメリカは広告と広報活動の盛んな国である。アメリカにおける広告の言葉の特徴を発想と表面の面からとらえて比較文化的に説明する。講義は英語で行う。	Vance E. Johnson（明治大学助教授）

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
8	アメリカの初等および中等教育における英語教育	日本における国語教育に匹敵するアメリカにおける英語教育が小学校と中学校でどのように実施されているかを説明する。講義は英語で行う。	Nicholas J. Teele（同志社女子大学教授）
9	アメリカの大学における英語教育	アメリカにおける国語教育である英語教育が大学の一般教養課程の一部としてどのように行われているかを説明する。講義は英語で行う。	同　上
10	アメリカにおける外国語教育	英語が国際語になっているのは事実だが、アメリカの高校や大学で外国語教育が行われているのも事実である。アメリカにおける外国語教育の現状、特徴、問題点などを報告する。	牧野高吉（北海道教育大学教授）
11	アメリカにおけるピジン英語	一般にピジン英語は単なる不完全な英語と見なされがちだが、アメリカで使われているピジン英語の特徴、造語力、表現力などを説明する。	比嘉正範
12	アメリカにおけるバイリンガリズム	アメリカは多民族、多文化、多言語の国といわれている。このような国におけるバイリンガリズム（二言語使用）あるいはマルティリンガリズム（多言語使用）の現状、問題点、これに対する政府の政策などを紹介する。	本名信行（青山学院大学教授）
13	アメリカ英語の「人間・社会関係文」	人間関係を作ったり、保ったり、壊したり、修復したりするときに使われる表現を「人間社会関係文」、略して「関係文」と呼んでいるが、アメリカ英語の関係文の特徴を比較文化的に説明する。	比嘉正範
14	アメリカ英語の民主化	民主主義や民主化は政治に限られたことではない。多くの社会で言語が人間差別や社会階級意識維持の手段として使われてきた歴史があるが、アメリカではどのようにして言語の民主化が行われてきたか、あるいは行われつつあるかを論じる。	同　上
15	国際語としてのアメリカ英語	英語が国際語になっているといわれても、英語にはイギリス英語、アメリカ英語、オーストラリア英語などがあり、それぞれの国際性は必ずしも同一でない。この章では国際語としてのアメリカ英語の現状と今後の発展を論じる。	比嘉正範 Niholas J. Teele

＝ドイツの言語文化Ⅰ＝（ＴＶ）

（主任講師：辻　　理（東京大学名誉教授）
主任講師：三島憲一（大阪大学教授））

全体のねらい

日本におけるドイツ像の成立をふりかえり、その歪みやずれを考えた上で、ドイツ文化がアイデンティティを獲得したとされる18世紀後半から19世紀初頭（カント、ゲーテ、ヘーゲル、ベートーベンの時代）に目を向け、そうした高度な文化がやがて自己崩壊していく19世紀を見る。最後に20世紀の激動と悲惨と、そして希望のなかのドイツに照明を与える。また、放送教材のなかでは、日本に残されているドイツ人の文化的足跡を適宜紹介していく。また、生活史的側面へのスポットを増やし、例えば「19世紀と婦人の生活」などといったコーナーを設けたい。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	日本のなかのドイツ、ドイツのなかの日本	この講義の意図　失われていく差異の意義 さまざまなドイツ像・日本像　ようやく始まる理解 森鷗外と姉崎嘲風 憧憬の対象と粗暴な自己正当化 そのつどそのつどのドイツ 変わらないドイツ像・いぶかるドイツ人	三島憲一（大阪大学教授）
2	ベルリンに見るドイツ史	容易ならざること、ドイツ人／でも個々の文化は、理屈ぬきに語りかける／立場をもう一度まとめてみれば／ドイツ史年表(1)30年戦争まで／6つの部族と王・太公・聖職者／神聖ローマ帝国－教皇と皇帝の叙任権闘争／シュタウフェン王朝／割拠の進展と都市／宗教改革／30年戦争とバロック文化／ドイツ史年表(2)啓蒙の時代以後／ベルリンの歴史／漁村から居城都市へ／絶対主義の時代／シュプレーのアテネから工業都市へ／帝国の首都ベルリンの裏と表／ドイツ革命からナチスへ／二つのベルリン／壁の開放	辻　理（東京大学名誉教授） 大貫敦子（学習院大学助教授）
3	啓蒙の時代　Ⅰ－フリードリヒの世紀	啓蒙主義と脱魔術化 啓蒙主義と市民階級 批判の精神 公共の場での啓蒙	三島憲一
4	啓蒙の時代　Ⅱカントと批判精神	ドイツ啓蒙主義の特性　単子論 ゴットフリート・ヴィルヘルム・ライプニッツ その後のドイツ思想の特質／クリスチャン・ヴォルフ イマヌエル・カント／カントの問い／「純粋理性批判」 「実践理性批判」と「判断力批判」	木田元（中央大学教授）
5	感性の解放「若きヴェルターの悩み」を中心に	啓蒙主義と芸術 新しい時代の到来を告げる文学 個人と社会慣習とのはざま 身分制社会－貴族と市民 小説「ヴェルター」の反響 解放か逃避か　作品解釈と時代	轡田収（学習院大学教授）
6	フランス革命とドイツ観念論	政治と哲学 政治と芸術 古代と美と自由 ドイツ観念論 ヘーゲル－精神現象学と人類の「教養」 理念と現実	木田元 三島憲一
7	ロマン派の夢－市民社会と芸術	初期ロマン派とフランス革命 政治革命から「美的革命」へ 市民社会批判としての合理主義批判 世界の＜ロマン化＞ ロマン的イロニー 後期ロマン派　ロマン主義の広がり	大貫敦子

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	芸術から社会の現実へ ハイネを手がかりに	ハインリヒ・ハイネ　パリのハイネ「フランスの状態」 「芸術時代の終焉」　3月前期の文学史 市民階級の理想　7月革命とハイネ 7月革命期のドイツとフランス 解放戦争前後の国民意識　「ドイツ冬物語」より 時代に呼びかける詩「ドイツ冬物語」	轡田　収
9	歴史と科学の世紀 －記念碑と発明家	市民社会と歴史 芸術は過去のもの 歴史と国民意識との結びつき 歴史志向の帰結－芸術の馴致 精神科学の制度化 記念碑その他	三島憲一
10	ドイツ帝国の時代 －文化批判と社会運動	教養俗物への批判 「悲劇の誕生」とヴァーグナー アポロ的とディオニュソス的 ソクラテスと芸術の解体 ヴァーグナーとの不和 近代批判と未来への期待　二つの文化	同上
11	終りか始まりか －世紀末とカフカ	ニーチェとそれに続く時代　作家たち 世紀末　凋落 解放か？　終りか始まりか アール・ヌーボー（ユーゲント・シュティール） ミュンヘン　フランツ・カフカ 文芸誌と画家　書くこと生きること	辻理
12	帝国の瓦解とワイマール時代	帝国の矛盾と表現主義 第一次大戦の敗北と共和国の誕生 共和国の苦難 黄金のワイマール文化 建築と映画 大衆文化の開花　共和国の終焉	山本尤 （京都府立医科大学教授）
13	30年代とナチズム	ヒトラーの政権掌握 文化統制と亡命 大衆の熱狂と反ユダヤ主義 知識人のナチズムへの期待 第三帝国の崩壊	同上
14	分裂から統一へ	敗戦と東西の分裂 47年グループとハイデガー フランクフルト学派など 学生叛乱 分裂の認定と平和的な共存 統一のドラマ	三島憲一
15	現代のなかのドイツ	だれのための統一か／トーマス・マンの呼びかけ／なぜまたもやプロイセン・ドイツなのか／日本とドイツの近似性／日本とドイツの対照性／ヴァイツゼッカー大統領の講演／統一以前の東西の対話／文化によるアイデンティティ／歴史家論争／ナショナリズムから異文化との共存へ／かき消された声／統一ドイツのかかえる問題	辻理 大貫敦子

＝ドイツの言語文化Ⅱ＝（TV）

〔主任講師：辻　　理（東京大学名誉教授）
主任講師：三島憲一（大阪大学教授）〕

全体のねらい

「言語文化１」では啓蒙主義以後のドイツの激動の歴史と反省的な文化のあり方を扱ったのを承けて、「言語文化Ⅱ」では現代のドイツ語圏、それも主としてドイツ連邦共和国（西ドイツ）の社会と文化の様々な側面に光をあててみたい。地方ごとの特色、家庭や女性の問題、政治の仕組みや労働組合のあり方、また現代の芸術や文学などをときには日本の状況と比較しながら紹介し、考えてみたい。同時に生きたドイツ語にもできるだけ触れるようにするつもりである。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	ドイツ語圏の地方歴史と自然	ドイツ語圏には四つの国があり、個々の国の地方も領邦国家であった歴史を持つ。その歴史と自然条件、生活と産業を概観する。	轡田　収（学習院大学教授）
2	連邦制 ― ドイツの方言・連邦制	多種多様なドイツ語の方言は生活と伝統の反映である。方言と標準語の中間に地域の通用語がある反面、言語障壁も生じている。また、ラントと連邦との関係を任務と権限、立法範囲などから見る。	同　上
3	政治の仕組	西ドイツを中心に基本的な政治の仕組や制度、重要政党の傾向、政治倫理、一般市民のもつ民主主義についての理解などを扱う。	三島憲一（大阪大学教授）
4	労働と余暇	ドイツ人の職業生活、職業観はどのようなものであろうか。また労働者の共同決定、労働組合のあり方なども見ていく。さらに余暇の過ごし方を述べる。	同　上
5	西ドイツ社会の家庭	ドイツの家族のあり方も、価値観の激しい変動の影響を強く受けている。伝統的な市民階級の家族像から、60年代後半の反権威主義運動を経て、新しい家庭観へ移っていく課程を見る。	大貫敦子（学習院大学助教授）
6	西ドイツ社会の女性	家族、そして社会全体の変化に大きく寄与したのが女性の意識の高まりである。女性運動のさまざまな新しい動きを見る。また、そのような変化の文学的表現も扱う。	同　上
7	教育と社会	ドイツ連邦共和国の教育制度は複雑に見える。また平等主義的な教育制度も定着しなかった。これを歴史的な背景から見ていく。	エンゲルハルト・ヴァイグル（東京大学外国人講師）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	職業教育と大学	ドイツ独特の職業教育とはどのようなものであるかを見る。さらに大学内の制度や授業のあり方などを日本の場合とも対比しつつ明らかにしていく。	エンゲルハルト・ヴァイグル
9	都市と住宅(1)	日本との対比を出発点として、特に西ドイツの都市の現状と歴史的な変遷を見ていく。城壁と城門に守られていた都市も、19世紀には人口の増加、工業化、交通の発達などにともなって大きな変貌を遂げる。	辻　　理（東京大学名誉教授）
10	都市と住宅(2)	第二次大戦で、大都市が壊滅的な打撃を受けた西ドイツの復興はめざましかった。しかし1970年代後半からは乱立する高層住宅群に対する反省と後悔が出始め、都市計画への住民参加もなお、一層強められていく。	同　　上
11	過去の傷(1)	第二次大戦の侵略国でありながら、過去の国家的犯罪に対する態度は日本とドイツではかなり異っている。西ドイツにおける過去克服の試みを抵抗運動の位置づけや制度面などから見る。	三島憲一
12	過去の傷(2)	過去の問題が知識人や作家、そして公共の世論で、どのように論じられているかを、いくつかの逸話などによって構成し、日本の状況とも比較して考える。	同　　上
13	ドイツの文学・芸術(1)	60年代、70年代を中心に、ベルをはじめ現代作家の業績や芸術家のグループの活動を概観する。東ドイツの文学、芸術にも触れる。	岩淵達治（学習院大学教授）
14	ドイツの文学・芸術(2)	70年代の内面化傾向、女流文学の動き、演劇、映画の傾向をさぐり、80年代の文学を考察する。	同　　上
15	新しい社会運動	現在の社会制度や文化にかろるものを見つけようとする「アルタナティーヴェ」のさまざまな局面、「カウンター・カルチャー」や「緑の人々（緑の党）」などを通して、現代産業社会の問題点と新しい社会運動の行方を考える。	大貫敦子

＝フランスの言語文化Ⅰ＝（ＴＶ）

（主任講師：福井芳男（東京大学名誉教授）
主任講師：西澤文昭（青山学院大学助教授））

全体のねらい

広く世界にあって、またヨーロッパという歴史的文化的共同体の中にあって、フランスがフランスである所以はどこにあるのか。フランス語の成立と発展を縦軸とし、現代世界におけるフランス文化の独自性の解明を横軸として、フランスの言語文化の在り様にアプローチする。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	フランスという国	フランスはどういう国であり、フランス文化の独自性はどこにあるか。フランスに関して人の持つイメージに触れながら、フランスの地理と歴史について基礎的な事柄を学ぶ。	福井芳男（東京大学名誉教授）
2	フランス語の現状	フランス本国以外では世界のどんな地域でフランス語が話されているか。ベルギー・スイス・カナダ・アフリカにおける公用語としての現況。また国内にあって、標準フランス語と方言との関係はどのようなものか。	西澤文昭（青山学院大学助教授）
3	ヨーロッパの成立・フランスの成立	ヨーロッパという概念はいつ、どのような形で、またフランス国家・フランス人という意識はどのようにして明確になり成立してきたか。ローマ帝国の崩壊、キリスト教の成立と発展、アラブ文化などを視座に入れ、探る。	同　上
4	フランス語の誕生	ラテン文化の継承。南仏文化と北仏文化。フランス語が一民族の、一国家の言葉として意識され確立するまでを概観する。	同　上
5	ルネサンス期のヨーロッパとフランス	先進国イタリアとフランスの関係。ユマニスムとは何か。古典研究がフランス語の発展にどのような影響を与えたかを見る。	同　上
6	ヨーロッパの公用語	ヨーロッパ宮廷文化におけるフランス語の地位の向上。十七・十八世紀のフランス語論。伝統と革新。アカデミー・フランセーズの成立とその役割。	同　上
7	啓蒙思想とフランス革命	啓蒙思想は、フランスとヨーロッパ諸国の間にどのような関係を生み出したか。ルソーを中心に18世紀の思想の特色を探る。	永見文雄（中央大学助教授）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	食の文化史	葡萄酒はいつから飲まれるようになったか。香辛料はどこから来たか。フランス料理の原点を探る。	西澤文昭
9	衣の文化史	中世からルネッサンスの衣服を中心に服飾の文化を通観する。	同上
10	住の文化史	都市の成立と市民階級の誕生に焦点をあて、フランス文化を見る。	同上
11	小説について	フランス近代小説は19世紀とともに始まる。小説の読者層、科学と文学の関連などを、バルザックを具体例として見る。ロマン派の成立とその言語観について、その後の様々な主義主張を見据えながら、考察する。	石井晴一（青山学院大学教授）
12	詩について	ヨーロッパにおける比較言語学の成立と象徴派詩人ステファヌ・マラルメの活動に焦点をあて、19世紀後半の文学について学ぶ。	竹内信夫（東京大学助教授）
13	フランス語と外来語	現代技術の進展につれ目立つようになった英語の流入。すでにはるか以前から外国語はフランス語に取り入れられてきた。借用語の歴史からフランス文化がどのようにして外国文化を受容してきたかを見る。	西澤文昭
14	マス・メディアとジャーナリズム	現代のフランスのマスコミはどのような状況にあるか。テレビを中心として、ジャーナリズムの現場からのリポート。	福井芳男
15	フランスと日本	日本人のフランス文化、フランス語受容の流れを辿り、日仏文化交流の草創期について考える。	井戸桂子（元放送大学助教授）

＝フランスの言語文化Ⅱ＝　（TV）

〔主任講師：福井芳男（東京大学名誉教授）〕

全体のねらい

フランスの文化を作りあげたものは、長年にわたる作家、思想家、芸術家、それらを支えた民衆たちであった。現代のフランス精神に大きな跡を残している。各世紀の重要な文化事業（文化作品を中心とする）を選び、その証明を通じて、フランス文化の現在を浮き上らせていく。毎回短かいフランス語の文を読む。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	序論	フランス文化を支えるもの　文学と映像　文学研究とは	福井芳男（東京大学名誉教授）
2	フランスのルネサンス	ルネサンスとは　フランソワ・ラブレ	同上
3	ユマニストの文字と思想―ロンサールとモンテーニュ―	プレイアード派　ロンサール　モンテーニュ　モンテーニュについて（インタビュー）	福井芳男 塩川徹也（東京大学助教授）
4	世界像の転換と人間―デカルトとパスカル―	天文学の発展と世界観の変革　デカルトとパスカル	福井芳男
5	古典の美とは	Classicisme　コルネイユ、ラシーヌ、モリエール、ラ・フォンテーヌ	同上
6	雅びな宴 Fete galante	社交界での男と女の恋のかけひき　恋の分析そして快楽の追求	同上
7	啓蒙の光	新しい時代の精神とフィロゾフたち　社交性の開花　『百科全書』の世界　『百科全書』と現代	福井芳男 鷲見洋一（慶應大学教授）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	革命の火	フランス革命　カルナヴァレ博物館長に聞く（インタビュー）　革命学群像	福井芳男
9	ロマン派の革命	スタール夫人とシャトーブリアン　ヴィクトル・ユゴー　ロマン主義とは何か	福井芳男 井戸佳子 （元放送大学助教授）
10	あるジャンルの運命 －運命－	小説の大衆化　バルザック、スタンダール　ゾラ	福井芳男 宮原信 （東京大学教授）
11	ブルジョワ社会における知性	1857年、ボードレール、フロベールの2つの裁判で、知識人とブルジョワ社会との関係が極度に緊張した。 －ボードレール、ヴェルレーヌ、呪われた詩人たち	福井芳男 井戸佳子 モーリス・パンゲ(故) （東京大学講師）
12	詩的言語の革命	詩的言語の変革　ロートレアモン、ランボー、ジェルマン・ヌーヴォー、マラルメ、ヴェルレーヌ、クロ、コルビェール　象徴主義の終わり	福井芳男 菅野昭正 （東京大学教授）
13	世界観の革新	「NRF」とアンドレ・ジッド　アンドル・ジッド　マルセル・プルースト	福井芳男 岩崎力 （東京外国語大学教授）
14	人間存在への問いかけ	実存主義から構造主義へ　カミュ・サルトル	福井芳男 モーリス・パンゲ(故)
15	文化の交流	フランス文学と日本　フランスにおける日本学について　フランスにおける日本文学の紹介の現状　フランスにおける日本文学の翻訳、及びその中の新しい動きについて	福井芳男 井戸佳子

＝ロシアの言語文化Ⅰ＝（TV）

〔主任講師：川端香男里（東京大学教授）〕

全体のねらい

ロシアの言語、文学、思想、芸術を、具体的なテーマに即しながら、しかし同時に常に歴史的な視点・枠組を忘れずに展望し、ロシア文化をいかに理解すべきかということを解説する。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	ロシア文化の地理的・歴史的背景	ロシア — 果てしなく続く広大な平原のイメージ。そのロシア文化を生み出したロシアの自然と、その歴史を概観する。全体の導入部をなす。	外川継男（上智大学外国語学部教授）
2	ロシアと日本 — 初期の交渉史	ロシアは、むかしから日本の北にある隣国であった。18世紀の後半から始まる日本とロシアの交渉の歴史を、その原点にさかのぼって考える。	同上
3	聖なるロシア — キリスト教の受容	ヨーロッパで最も若いキリスト教国ロシア。東方正教への改宗によって、ロシアは国家的統一を果たし、ヨーロッパ古典文化の世界の仲間入りをする。	栗原成郎（東京大学助教授）
4	遊牧民とのたたかい —『イーゴリ軍記』の世界	ロシア中世文学の最高傑作『イーゴリ軍記』は南方から侵入する遊牧民とたたかわざるを得なかったロシア人の歴史の貴重な記録でもある。『イーゴリ軍記』をとおして、ロシア人と遊牧民とのたたかいを見てゆく。	同上
5	フォークロアに現れた民衆の心 —むかし話を中心に	イワンの馬鹿は、なぜ民衆のアイドルだったか、イワン王子はなぜ民衆の理想的君主像だったか — むかし話からロシア人の心理を考える。	中村喜和（一橋大学教授）
6	ロシアの美的世界Ⅰ — 古きロシアをたずねて	ロシア芸術はその根元においてイラン系民族スキタイ、サルマティアとのふれあい、ビザンディン文化・ギリシア正教の影響も強くうけた。中世における芸術・文化の発展と中世に深い根をもつ民衆芸術について考える。	川端香男里（東京大学教授）
7	西欧への窓 —ペテルブルクの建設	「ヨーロッパへの窓」として建設された都市ペテルブルクの歴史は、そのまま近代ロシアの歴史でもある。都市建設の文化的政治的背景について述べ、レニングラードと改名された今日のこの都市の運命について考える。	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	母なる都モスクワ ―いまとむかし	東ヨーロッパの平原の中心に位置し、首都としてロシアの歴史と最も深く結びついてきたソビエト最もの都市のめまぐるしい変貌ぶりを概観する。	中村喜和
9	ロシアの「村」 ―文学にみる農村問題	ロシアの社会・文化の根幹をなす農民・農村の実像と、それが文学にどのように描かれているかを、18世紀から今日のソ連まで歴史的にたどってみる。	島田陽 （東京大学教養学部助教授）
10	ロシアの美的世界Ⅱ ―音楽と絵画	18世紀は、ロシアが西欧からもっぱら学びとる時代であったが、すぐにロシア的な、ロシア独自の文化を生む素地をつくった時代でもある。この18世紀から19世紀の「自立」の時代までを音楽と絵画の面から見てゆく。	川端香男里
11	ロシア文学の黄金時代Ⅰ ―プーシキンとゴーゴリ	ロシア・ロマン主義の時代は「詩」の黄金時代であったが、ロシア文化自立の時代でもあった。ロマン主義の歴史的意義を考え、代表的作家としてプーシキン、ゴーゴリ、レールモントフ、チュッチェフをとりあげる。	同上
12	ロシア文学の黄金時代Ⅱ ―ドフトエフスキ―とトルストイ	ドフトエフスキイとトルストイによって代表される19世紀ロシア文学は、1880年代以降世界中にロシア文学ブームをまき起す。ロシア文学ブームの実像をさぐり、ドフトエフスキイとトルストイを比較しつつ両作家の個性と歴史的意義を考える。	同上
13	ロシア演劇の魅力	演劇はロシアが最も大きな影響を外国に与えた分野である。18世紀からモスクワ芸術座、革命前後の前衛劇、今日のソビエト演劇までを歴史的に展望する。	島田陽
14	ロシアの美的世界Ⅲ ―銀の時代からアヴァンギャルドへ	19世紀末の無気力と沈滞の時代から「銀の時代」がどのように生まれたかを考え、20世紀のアヴァンギャルドに至るロシア芸術の発展のあとをたどってみる。	川端香男里
15	ソビエト時代の社会と文化	ロシアは20世紀初頭に文学・芸術と政治の両面で世界をリードしたが、スターリン時代を経て社会・文化のあらゆる面で数多く困難に直面している。その問題を歴史的に考えてみる。	同上

＝ロシアの言語文化Ⅱ＝ （R）

〔主任講師：川端香男里（東京大学教授）〕

全体のねらい

ロシア文学を中心にロシア的なるもの、ロシアの伝統を考えることを意図した「ロシアの言語文化Ⅰ」を受けて、名文章、名語句、成句、諺等、ロシア語の具体的表現例をもとにして、ロシア文化の多様な側面をとりあげ、ロシア文化の特質をさぐる。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	序論 —ロシア的なるものとは	ロシアの風土と自然を概観し、また、プーシキン、チュッチェフの文章をもとに、ロシアという国のイメージを探りつつ、ロシア史を貫く特質について考える。	川端香男里 （東京大学教授）
2	ロシア語について	自分の母国のことば－ロシア語を自分の生命のごとく愛したトゥルゲーネフの散文詩『ロシア語』を軸に、ロシア語の歴史、特徴、さらにプーシキン、ロモノーソフのロシア語とのかかわりについて述べる。	栗原成郎 （東京大学名誉教授）
3	ロシアの民衆文化Ⅰ —異教の神々とキリスト教の聖者たち	民間信仰の多様な世界と、その後にはいってきたキリスト教との結びつきを解明しながら、ロシアの国の大多数を占めた農民の精神世界について考える。	同上
4	ロシサの民衆文化Ⅱ —民間歴による年中行事と民衆の歌	ロシアにおいて重要な役割を果たしてきた口承文芸を、儀礼歌、とくに農耕儀礼歌を中心にすえて、春夏秋冬の移り変わりの中でとらえてゆく。	同上
5	ロシアの民衆文化Ⅲ —諺・諺的成向・名句名言	ロシア民衆の体験から発した、生活の智慧の凝縮的表現である簡潔な諺、諺的成句を通して、ロシア人の日常生活、習俗、ものの考え方を明らかにする。	同上
6	ロシアの民衆文化Ⅳ —諺にみる民衆の生活文化	農耕・牧畜・漁業などの経済活動とのかかわりの深い諺を、その寓意を通して考え、ロシア人の民族的心性について考察する。	同上
7	ロシアの自然Ⅰ —「祖国」と自然	「プラストール」「タスカー」などのロシア語の概念を理解しながら、ロシアの詩人がいかに自然を見つめてきたか、そこに光をあてて文学と自然、「祖国」と自然とのかかわり合いを考える。	川端香男里

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	ロシアの自然 Ⅱ —ロシアの詩に見る「秋」の感情	ロシアにおける秋の情感を、プーシキンの詩『秋』を読みながら理解する。そしてロシアの詩人の多くが、感情や感受性だけでなく、「思想」をこめてロシアの自然を歌っていることを考察してゆく。	川端　香男里
9	ロシアの自然 Ⅲ —ロシアの森と河	ロシアの自然風土の中で、人間と動物とのかかわり合いを生活史的に見てゆくと同時に、プーシキンの韻文小説『エヴゲーニイ・オネーギン』に見られるフォークロアの世界にもふれてゆく。	同上
10	ロシアの大地 —ロシア人はどのように旅をしたか	プーシキンの詩『冬の道』を援用して、ロシア人の旅について考える。自然の営みと、そこに生活し、行き交う人々の姿を通しての農業・交通の歴史的考察。	同上
11	都市と農村 Ⅰ —ロシアの都市の成り立ち	18世紀以降のロシア近代化の中で、ペテルブルクという近代都市が成立するが、これは古いロシアの伝統の中にまったく新しい要素を生み出した。都市がロシア近代史に提起した問題を考える。	同上
12	都市と農民 Ⅱ 農村と農民	近代化が進む中で、農村および農民は社会の矛盾を最も深刻に味わわせられることになる。今日のソ連をも含めてロシア文学の最も重要なテーマである「農村」について考察する。	同上
13	民族 Ⅰ	百を越える民族、百を越える言語を話すロシア—ソ連、その中にあって国家構成員であるドイツ人、ユダヤ人はいかに生きているか。さらに、時にはロシアの歴史の主役を担ってきたコサックについても考察してゆく。	同上
14	民族 Ⅱ	今日のソ連を構成する諸民族の中で、最大の人口をもつ東スラヴ族のロシア人、次いでウクライナ人の歴史と現状を考える。一方、非スラヴ系民族はいかに生きてきたか、その苦難の歴史を考察する。	同上
15	ロシアとソ連 —連続と変化	1917年の革命による国家としての名称と体制の一大変革は、それまでのロシア的なものにどのような変化をもたらしたか、あるいは変化せずにどのように生き続けているのか、功罪両面にわたって考察してゆく。	同上

＝ 科 学 哲 学 ＝ （R）

〔主任講師：伊藤公一（放送大学助教授）〕

全体のねらい

現代において、科学とくに自然科学は学問の典型とみなされ、一定の信頼をかちえている。しかし科学を人間の営為として見れば、そこにはやはり人間が知を獲得するということ自体に伴う逆理がさまざまに含まれている。そのように「科学的」な知識を「一皮剝げば」現れる問題をなるべく誠実に捉えてみたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	科学的な哲学と科学の哲学	「科学哲学」の二つの意味についてその異同を述べるとともに、とくに前世紀から今世紀にかけての二つの流れを概観する。	伊藤公一（放送大学助教授）	伊藤公一（放送大学助教授）
2	科学的な哲学の一例 －論理実証主義	「哲学を科学化する」ことを目標に今世紀前半に現れた論理実証主義の運動と歴史を概観する。そして彼らの科学観の大要を述べ、以下の講義の見取り図を与える。	同上	同上
3	論理実証主義の科学観の検討(1)	科学の言葉、とくに理論語はどのような意味をもち、どのように形成されるかを論理実証主義に即して検討する。なおここで、分析命題と経験命題の対比を述べる。	同上	同上
4	論理実証主義の科学観の検討(2)	①科学における法則は何を言明しているのか、②科学における法則はいかにして作られるかについて、論理実証主義に即して検討する。なおここで、帰納推論の問題も取り上げる。	同上	同上
5	論理実証主義の科学観の検討(3)	科学的な命題の真偽はいかにして判定されるか。いわゆる検証の問題を論理実証主義に即して検討する。	同上	同上
6	論理実証主義の科学観の検討(4)	論理実証主義における科学的説明の理論について述べる。とくに説明によって何が分かるのかをテーマとし、ヘンペル、カルナップらに即してそれを検討する。	同上	同上
7	論理実証主義の科学観の検討(5)	論理実証主義の基礎をなしていた考え方をまとめ、批判的に検討する。そして彼らにおいては、「事実」および「論理」という概念がきわめて特殊だったことを述べる。なおここで、前期ウィトゲンシュタインの影響についても触れる。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	論理実証主義に異を唱えた人びと	論理実証主義運動が最盛期を迎えたころに、彼らと重要な点で見解を異にしていた思想家に注目し、どこが分岐点であったかを検討する。主としてピエール・デュエム、カール・ポパー、ウィラード・クワインなどを取り上げ、科学革命論と接点を求めておく。	伊藤公一	伊藤公一
9	科学革命論の概観	トマス・クーンによって提唱された科学革命論を概観し、論理実証主義の科学観との差をおおづかみに述べる。	同上	同上
10	科学革命論の検討 (1)	ノーウッド・ハンソンの観測理論と論理実証主義の検証理論の比較を通して、「科学的な事実」とは何かを再検討する。	同上	同上
11	科学革命論の検討 (2)	クーンの言う通常科学と科学革命はどのような関係にあるかを検討し、2種類の知識発展を示唆する。なおここで、ポパーの反証理論との接点を探ると同時に、科学革命を意識的に起こそうとするいわゆるニューサイエンスの立場を検討する。	同上	同上
12	科学革命論の検討 (3)	パラダイム論をめぐるラカトシュらとの論争の要点を述べるとともに、クーンの科学革命論の基礎をなした後期ウィトゲンシュタインの「言語ゲーム」の考えを叙述する。	同上	同上
13	科学と技術	これまでの2種類の科学論を比較しなおし、論理実証主義の科学観はむしろ技術観であったことを指摘する。そして科学と技術に共通の知識構造を指摘したものとしてマイケル・ポラニーの暗黙知論をとりあげ、以下のより一般的な問題提起に連続させる。	同上	同上
14	知ることのパラドクス	相対主義の問題をとりあげ、科学理論がもつ「個人的」な性格を述べるとともに、理論は「問い」に対する答えであることを指摘し、学問にとって「問い」とは何かを検討する。	同上	同上
15	科学以外の知はあるか	科学という知の特徴はどこにあったかを総括的に述べ、哲学の立場との差を述べる。なおここで、論理実証主義運動とたもとを分かったウィトゲンシュタインの主張を検討する。	同上	同上

＝ 比 較 宗 教 学 ＝（R）

〔主任講師：阿部美哉（愛知学院大学教授）〕

全体のねらい

さまざまな宗教現象や宗教にかんする情報は、ちまたにあふれている。しかし、これらを人間のいとなみとして理解するための道標は、十分ではない。この講義は、多様な宗教の世界を比較可能な指標を設けて検討し、個々の宗教に固有な特徴と諸宗教に共通する諸要素を理解するための学問的な枠組みを提示することを目的としている。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	比較の視点	みずからの信仰の課題としてではなく、学問の対象として宗教を研究する立場は、自己と対象との間に距離を置くことを要求し、諸宗教の比較をその視点の中心に据えることを求める。宗教研究の学説史を概観して、比較の視点を検証する。	阿部美哉（愛知学院大学教授）	阿部美哉（愛知学院大学教授）
2	研究主題としての宗教	学問的な研究の主題として宗教をとりあげるときには、宗教行為や宗教現象は、永遠の真理のサンプルとか、奇習、珍習の集積としてではなく、記録され、分析され、理解されるべきものとしてアプローチする。	同上	阿部美哉 島薗進（東京大学助教授）
3	宗教の世界	さまざまな宗教は、各々さまざまな世界を構築している。これらさまざまな宗教の世界は、それぞれに聖なるものを表象し、聖なるものによって規定されている。さまざまな世界の中に聖なるものがどのように現れているかを、展望する。	同上	同上
4	個別と普遍	宗教の内容は、諸々の世界の内容が異なるのにつれて、異なっている。宗教は、その世界の諸々のことがらをとりあつかい、ある世界にとって、その中心となるイメージを掘り下げる。しかし、それらの中には共通普遍の要素が含まれている。	同上	同上
5	神話	神話の言語は、その最も根源的な機能として、世界のよって成り立つ基盤を物語る。それは、世界を創りだし、支配する諸々の力と原則が何であり、どうしたのかを語るのである。	同上	阿部美哉 島田裕巳（日女大助教授）
6	儀礼	神話が世界の根源を言葉とイメージで表すように、儀礼は、世界の根源を演出し、演劇化する。世界は、表象ばかりでなく、行為によって形作られる。宗教のシステムは、神話言語とともに、儀礼の執行によって成り立つのである。	同上	同上
7	空間と時間	世界の成り立ちの儀礼的表出は、時間と空間に構造的な関係を持つ。人々が、その世界にどうかかわるか。長くても、短くても、広くても、狭くても、繰り返しでも、一回でも、固定されていても、移動しても、いずれでも聖なるシステムに構造化されうるのである。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	超越性	宗教的な世界は、超越性をその原理とし、超越的なものによって支配されているとの前提に立つ。原始的な精霊にたいする信仰でも、洗練された超越的絶対者にたいする信仰でも、合理的な原理を超えた聖なるものの支配が、宗教の世界の普遍的特徴として把握される。	阿部美哉	阿部美哉
9	神々	神ないし神々は、宗教の世界を研究するさいには、中心的な主題の一つである。神々は、神話、儀礼に登場するばかりでなく、宗教的な世界の中核的な構成要素であり、宗教経験における最も重要な類型として検討すべき概念である。	同上	阿部美哉 薗田稔(京都大学教授)
10	浄化	宗教は、聖なるものにふさわしいものと、ふさわしくないものの間に一線を画す。浄い行いと浄くない行い、正しい行いと正しくない行い、適切な行いと適切でない行いとを峻別する。浄化のシステムは、これら否定さるべき要素を除去するシステムとして作用する。	同上	同上
11	まつり	まつりは、神話と儀礼、聖なる空間と時間が総合的に表出される社会的な行為であり、それは、集団的沸騰によって日常性を超克する。宗教の社会的起源を観察するために、まつりは、最も重要な現象の一つである。	同上	同上
12	僧と俗	近代社会の機能分化は、宗教的な世界にも及び、僧侶と俗人の機能分化が明確化した。今日、わが国においても、諸外国においても、僧侶の理想と俗人の実感の乖離が顕著になっている。宗教的な世界おける指導者の一般信徒からの突出の得失を検討する。	同上	阿部美哉 星野英紀(大正大学助教授)
13	禁欲	人間が神の道具になって地上にその御業を証しせんとするプロテスタントの信仰は、いわゆる世俗内禁欲をもたらし、近代社会の人々を行動に煽りたててきた。近代の合理性の中に、かけがえのない人生を道具にしてしまう非合理性が潜むことを検証する。	同上	同上
14	寂静	欲望を禁圧するとその故に活動のエネルギーが高まるからこれを善用するという近代の発想を超えて、このエネルギーを含めて鎮めてしまうという発想があらわれている。あるがままの尊重し、人間のあるがままを大切にする立場が見直されている状況を検討する。	同上	同上
15	人間の営みとして	宗教現象を人間の営みとして、人々の織りなすいくつかの世界として認識する。さまざまな宗教現象に共感を保ちつつ、しかし理性的に、一歩距離をおいて研究する。比較宗教学は、信仰を深めるための手段ではなく、宗教を理解するための学問であるにとどまる。	同上	阿部美哉

＝哲学的人間学＝（TV）

〔主任講師：坂本百大（青山学院大学教授）〕

全体のねらい

哲学を人間のあらゆる知的営みの根源の学として把え、その中心課題である「人間とは何か」という問題について広く、徹底的に考える。現代を近代の総決算の時代として把え、近代科学の成果を精査し、また、近代社会、近代思想の展開を分析することによって、近代を越えて二十一世紀を望む新しい人間観、世界観、価値観の独立を目指す。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	哲学的人間学とは	本講座の由来 哲学的人間学とは何か 現代における哲学的人間学の課題 －近代の総決算（近代科学の発展の歴史と成果、近代社会の変革の過程を辿る） 哲学とはいかなる学問か	坂本百大（青山学院大学教授）	坂本百大（青山学院大学教授）
2	人間のからだ －構造と遺伝	解剖学的特性と人間の能力 生理学的特性と本能的欲求 分子生物学的特性と遺伝の意味 進化論について	同上	坂本百大 養老孟司（東京大学教授）
3	人間のこころ －理性と感情	心とは何か、アニミズムからデカルトの二元論へ カントの理性主義 イギリス経験論の伝統と現代的な「こころの概念」 感情の言語分析と科学的説明	同上	同左
4	人間の行動 －本能と進化	人類の起源、考古学、化石学、古神経学 直立歩行と各種能力の獲得 本能行動の進化 人間的行動の特質 －動物行動とどこが違うか	同上	坂本百大 日高敏隆（京都大学教授）
5	近代的人間観 －二元論と近代科学	近代科学の前夜とニュートン物理学の誕生 近代的自然観と近代的人間観 近代科学の成功と実証主義のパラドックス	同上	坂本百大 村上陽一郎（東京大学教授）
6	心身問題 －生命現象と精神現象を物質現象に還元することは可能か	生命現象の物質現象への還元 精神現象の物質現象への還元 「知覚の因果説」批判と心身問題の現在	同上	坂本百大
7	人間機械論の可能性と限界	人間機械の先駆者 エピクロス、ドラメトリー、ウィーナー 人工臓器の現状と可能性 人工知能と人間のこころ 人間はどこまで機械と考えられるか	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	人間の知識 －その源泉と限界	カントのアプリオリ説の現代的解釈 「理性」とは何か 人間の知識の限界	坂本百大	坂本百大
9	人間の文化 －言語と記号	動物言語の記号性 動物言語から人間言語へ －言語起源論の課題 文化記号論とは何か	同上	同上
10	人間の社会 －法と経済	集団生活と慣習の成立 社会統制の手段としての法 富の社会的蓄積と公正な配分 －経済の発展と人間の生活	同上	同上
11	人間の自由	自由、平等と基本的人権 自由の規約認定説 自由と正義 －人間性のパラドックス	同上	同上
12	人間の創造性と芸術	創造性の神秘主義と世俗主義 コンピュータ芸術 人間にとって美とは何か	同上	同上
13	善と悪 －倫理の本質	倫理の本質に関する二つの見方 社会調整技術としての倫理 何をなすべきか －善と悪	同上	同上
14	生と死 －生命倫理の課題	生命の尊厳とヒューマニズムの危機 末期医療と死に関する生命倫理 －安楽死、脳死、臓器移植 出生と遺伝に関する生命倫理 －体外受精、遺伝子操作、ヒト・ゲノム解析	同上	同上
15	新しい哲学的人間学への道	将来文明と人間 宇宙の中の人間 人間の価値	同上	同上

＝上代日本文学＝（R）

〔主任講師：稲岡耕二（上智大学教授）〕

全体のねらい

文字によって書かれる歌へと変った万葉集の歌は、平城遷都後どのようにその新しい沃野を開いただろうか。山上憶良・大伴旅人・山部赤人・高橋虫麻呂・坂上郎女・笠女郎・大伴家持などの作品を通して探る。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	後期万葉へ	平城遷都後、律令制度の整備とともに、海彼の文化の影響はいっそう人々の間に浸透し、さまざまな歌人の個性的表現が見られるようになる。その特色を前期と比較しつつ概観する。	稲岡耕二（上智大学教授）	稲岡耕二（上智大学教授）
2	山上憶良（その一）	憶良の履歴および大伴旅人との邂逅の意義を理解し、漢文序を持つその作品の特徴について考える。	同上	同上
3	山上憶良（その二）	仏教思想および中国思想等に憶良がどのように対応したか、その作品を読みつつ考える。	同上	同上
4	大伴旅人（その一）	大伴旅人の諸作品を、中国文学との関係を通して読みなおす。	芳賀紀雄（筑波大学助教授）	芳賀紀雄（筑波大学助教授）
5	大伴旅人（その二）	同上。	同上	同上
6	山部赤人（その一）	山部赤人の叙景的な作品および観念的な風流詠等の特徴と意義を探る。	神野志隆光（東京大学助教授）	神野志隆光（東京大学助教授）
7	山部赤人（その二）	同上。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	高橋虫麻呂(その1)	虫麻呂の、いわゆる伝説歌に見られる叙事への志向と、その表現の特徴を、作品を読みつつ考える。	神野志隆光	神野志隆光
9	高橋虫麻呂(その2)	同上。	同上	同上
10	後期万葉の女流歌人(その一)	後期の女流歌人の中、もっとも多くの作品を残した坂上郎女の歌の特徴を探る。	阿蘇瑞枝(日本女子大学教授)	阿蘇瑞枝(日本女子大学教授)
11	後期万葉の女流歌人(その二)	家持に多くの恋歌を贈った笠女郎、中臣宅守との烈しい恋で知られる狭野茅上娘子などの作品を通して、後期万葉の女歌の特徴について考える。	同上	同上
12	大伴家持(その一)	天平四・五年の処女作から、万葉集の最後の歌と言われる天平宝字三年正月の作まで、どのように歌人としての道を歩んだのか。主要な作品を読みつつ考える。	小野寛(駒沢大学教授)	小野寛(駒沢大学教授)
13	大伴家持(その二)	同上。	同上	同上
14	防人歌・東歌	天平勝宝八年の防人歌と、東国地方で採集されたとされる東歌について、その問題点を探る。	同上	同上
15	万葉から古今へ	漢字で書かれた万葉集の歌から、ひらがなの古今集の歌へという和歌史の流れは、詩の表現の上にどのような変化をもたらしたかを探り、そこから万葉集の特徴をとらえなおす。	稲岡耕二	稲岡耕二

＝近世日本文学＝（R）

〔主任講師：堤　精二（お茶の水女子大学教授）〕
〔主任講師：清登典子（筑波大学助教授）〕

全体のねらい

徳川幕府の時代となって、貨幣経済の発達普及、印刷術の急速な進歩等により、前時代とは異なった新しい文化が開花するのだが、その成生・展開の軌跡を、主要な作家・作品を取り上げながら検討してゆく。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	近世文学の誕生	日本近世文学成立の時代的背景について述べる。すなわち、出版文化・思想的基盤・美意識の変遷等である。	堤　精二（お茶の水女子大学教授）	堤　精二（お茶の水女子大学教授）
2	近世初期の小説	中世から近世への小説史の展開、近世初頭の小説“仮名草子”の通史的概要と、小説史に一時期を画した『好色一代男』の出現を述べ、併せて井原西鶴の伝統的事項について説明する。	同　上	同　上
3	浮世草子の展開	西鶴によって作られた浮世草子について概説を述べ、さらに西鶴周辺の作家・作品と、後期浮世草子である八文字屋本の展開について解説を加える。	同　上	同　上
4	俳諧文学の成立	俳諧の起源から、近世初期の貞門・談林の俳諧の史的展開を略述しながら、主要な作家・作品について解説を行う。なお、時期的下限は芭蕉の登場あたりまでとする。	清登典子（筑波大学助教授）	清登典子（筑波大学助教授）
5	蕉風俳諧	まず、芭蕉の伝記的事項を述べ、ついで、芭蕉俳諧の諸作品について、紀行・俳文・連句等の諸分野に亘り考察を加え、蕉風俳諧の本質を追求する。なお、芭蕉没後の俳壇についても略述する。	同　上	同　上
6	近松門左衛門	浄瑠璃の史的展開を近松門左衛門を中心にして述べる。すなわち、浄瑠璃芸の発成・成立から古浄瑠璃について略述し、近松門左衛門の人と作品について考察を加え、さらに、近松以後の浄瑠璃の展開について述べる。	原　道生（明治大学教授）	原　道生（明治大学教授）
7	学問の時代－徂徠学と文人	近世儒学の本流であった朱子学と、それへの批判から生まれた古義学や徂徠学との相異。そして、そうした儒学思想の変遷を背景に登場した文人と呼ばれる人々の文学と生き方について概観する。	揖斐　高（成蹊大学教授）	揖斐　高（成蹊大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	国学と和歌	堂上派から古学派、そして江戸派・桂園派の時代、さらに幕末期の個性的な歌人たちの登場へと展開してゆく、近世和歌の大きな流れをおさえ、そうした「歌」をどう考えるかということと深く結びついて成立・展開していった国学の問題点を併せて解説する。	揖斐　高	揖斐　高
9	上田秋成の文学	都賀庭鐘・建部綾足らの諸作品、秋成の『雨月物語』『春雨物語』等にふれながら、前期読本の成立・展開の諸相を検討し、その本質を考える。	長島弘明(名古屋大学助教授)	長島弘明(名古屋大学助教授)
10	中興期俳諧と蕪村	芭蕉以降の俳諧の一つの高まりである中興期の俳壇を概観し、その中心的存在である与謝蕪村の人と作品について検証する。	清登典子	清登典子
11	江戸末期の俳文学	俳諧の大衆化に伴って盛行を見た月並俳諧につき検討を加える。とくに、この時期に人間味豊かな独自の作風を示した小林一茶の人と作品について解説を加える。なお、近世後期に大流行を見た川柳についても概説を行う。	同上	同上
12	笑いの文芸	近世文学の特色の一つとして「笑い」ということを指摘し得るが、近世初期からの笑話・狂歌の流れを概観し、とくに江戸後期の笑いの文芸について詳述する。なお、江戸の小説の一ジャンルである滑稽本についてはここで述べる。	延広真治(東京大学助教授)	延広真治(東京大学助教授)
13	江戸の小説(1)	山東京伝・曲亭馬琴の作品を中心に、江戸読本の流れを考察する。上方読本のあとを承けながら、長篇化する過程を『南総里見八犬伝』を焦点にして論述する。	板坂則子(群馬大学助教授)	板坂則子(群馬大学助教授)
14	江戸の小説(2)	遊里を題材として発達した洒落本と、その展開として成立した人情本の流れを追求する。また、草雙紙と総称される赤本・黒・青本・黄表紙・合巻の展開の諸相を述べながら、文学の大衆化について考える。	山本陽史(山形大学専任講師)	山本陽史(山形大学専任講師)
15	南北と黙阿彌	近世の演劇として成立した歌舞伎の展開を略述し、とくに、江戸歌舞伎の代表的作者である南北と黙阿彌について、作者・代表作品、およびそれらの作品を生んだ時代背景を視野に入れながら解説する。	服部幸雄(千葉大学教授)	服部幸雄(千葉大学教授)

＝中国の説話と古小説＝（R）

〔主任講師：竹田　晃（東京女子大学教授）〕

全体のねらい

日本人の中には、中国の小説といえば、『水滸伝』『西遊記』などを思い浮かべる人が多いだろう。また、近・現代の作家や作品に関心をもつ人もあろう。ところで、そのような作品を含む「中国小説史」の源流はどこに求められるか。この講義では、中国の説話や古小説を中国小説史の中に位置づけようと試みるものである。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	中国小説史の中の説話と古小説	中国において小説らしい小説が個人の創作として書かれるようになったのは、かなりのちの世のことである。それまでのいわば小説前史ともいえる時期に、神話・伝説、および中国で古小説と呼ばれるジャンルを据えて、中国小説史の源流を考えてみたい。	竹田　晃（東京女子教授）	竹田　晃（東京女子教授）
2	中国小説史構成上の問題点	中国小説史を構成する場合には、(1)「小説」というコトバの概念の変遷と、(2)小説に発展してゆく可能性を内含する古来の諸ジャンルに及ぶ資料の追求、という二つの問題点をあらかじめ抑えておく必要がある。	同　上	同　上
3	神話・伝説　(1)（天上の秩序）	中国には、日本の『古事記』や『日本書紀』のように、神話・古代説話を体系的に記した書が存在しない。さまざまな分野にわたる資料の中から、まず天地創造を始めとする、天上の秩序形成に関する神話・伝説を拾い出してみる。	同　上	同　上
4	神話・伝説　(2)（地上の秩序・英雄の登場）	広大な空間を有し、強大な自然の力に立向った中国民族の祖先たちの中には、その営為を民族的な英雄の功業として讃えられているものがある。治水事業を成しとげた禹はその代表的な例である。	同　上	同　上
5	寓　話　(1)（知恵の結晶）	先秦時代の思想家の文章には、寓話が多く見られる。自説を他人に対して説き明かす手法として用いた寓話は、まさに乱世に生きる人間の知恵の結晶であった。	同　上	同　上
6	寓　話　(2)（王道か覇道か）	寓話はたんに一思想家の思想や学説を述べるために用いられただけでなく、天下国家のゆくえを示す指針としての役割を負った。虚構を借りてみずからの言わんとするところを述べる手法は、後世の小説の発展と無縁ではないのではなかろうか。	同　上	同　上
7	史　伝　(1)（その小説的展開）	「史」とは元来「記録」という意味である。記録には、事実を事実として伝える厳密さが要求される。しかし、文章に綴られた「史」は、けっして無味乾燥な事実の羅列ではない。中国の「史」には、この傾向がとくに顕著に現れていると言えるのではなかろうか。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	史伝 (2)（世界を創る人間の記録）	『史記』はすぐれた史書としての定評がある。それと同時にこの書は「歴史文学」としての評価も受けている。世界を創る人間の「真実」を伝え得たところに、『史記』の真価があるのだと思われる。このことは『史記』を小説史の中に位置づける理由となるであろう。	竹田　晃	竹田　晃
9	漢賦（漢賦における小説的な要素）	漢代を代表する文学のジャンルは「賦」である。賦は漢字文学の粋ともいうべきもので、漢の宮廷文学として光彩を放った。その賦には、虚構を用いて物語を展開する手法が見られる。この点を小説史の問題として取り上げてみたい。	同　上	同　上
10	六朝志怪 (1)（怪異を語る伝統）	孔子は「怪力乱神を語ろうとしなかった」と言われる。現実性・合理性を重んじる孔子の教えをたてまえとする中国古代の知識人の中には、その一方で「怪異を語る」風潮が根強く存在していた。そしてそれが、中国の古典小説史の中の一つの柱となったのである。	同　上	同　上
11	六朝志怪 (2)（人間と幽霊・精怪との交渉）	政治的には混乱の時代であった六朝時代は、思想・文芸の面では大いに発展した時期であった。その時代に知識人の中で盛行した「志怪」というジャンルの特徴を、人間と幽霊や精怪たちの交渉という切り口からとらえて考えてみたい。	同　上	同　上
12	六朝志怪 (3)（仏教の影響）	中国文化にとっての初めての外来文化と言える仏教は、六朝時代になって十分に中国文化の中に根づいた。「志怪」にも仏教の影響が次第に色濃く現れ、中国小説史の中にも仏教的世界観を植えつけたものであった。	同　上	同　上
13	志人小説（人間を見る眼の確かさとユーモア）	六朝宋の劉義慶の著『世説新話』は、実在した知識人の言動を記した書であるが、著者の人間を見る眼の確かさと、巧みなユーモアは、この書を小説と呼ぶにふさわしい味わいを与えている。	同　上	同　上
14	唐代伝奇（個人の創作）	唐代になって、中国小説史上に初めて小説らしい小説、つまり個人の創作と言える作品が登場する。これらの作品群を「伝奇」と称する。ここでは、伝奇発生の背景と、その特徴を述べる。	同　上	同　上
15	唐代伝奇（怪異からの脱却）	唐代の伝奇は、その多くがやはり超自然的な不可思議な題材にもとづいてストーリーが展開されている。しかしそれらの中に、そのような怪異の要素から完全に脱却した作品も見られる。これは、中国小説史上まことに画期的なことであった。	同　上	同　上

＝日本古代史＝（TV）

〔主任講師：青木和夫（お茶の水女子大学教授）〕

全体のねらい

① 日本文化―すなわち日本列島に成立した文化の特質と日本の国家のわくぐみとを、原始時代から平安時代末までの歴史を通して明らかにする。
② 全体の流れは時間軸に従うが、東アジアの中の日本を重視し、各時代を概説することにはこだわらない。
③ 歴史上の新発見があれば微修正をする。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	列島の誕生	① 沖積世における日本列島の形成。 ② 東アジアにおける地理的位置と気候。 ③ 人種と民族。三つの文化圏（北海道、本州、沖縄）の各々における時期区分。	青木和夫（お茶の水女子大学教授）	青木和夫（お茶の水女子大学教授）
2	文化の芽生え	① 旧石器文化の出現―日本列島に人類が登場したのはいつか。最初の住民の文化は世界的にみて如何なる位置にあるか。 ② 土器文化の成立―東アジアにおける土器の発生と縄文文化との関係。 ③ 縄文文化の特質―縄文文化が東アジアの中では独自に発達したこと。	岡田茂弘（国立歴史民俗博物館教授）	岡田茂弘（国立歴史民俗博物館教授）
3	農耕のはじまり	① 稲作農耕の開始―紀元前3世紀に列島に伝播した水稲耕作文化の内容。 ② 背の高い渡来人―最初に列島に稲作技術をもたらした人々と、その人々が渡来した背景となった東アジアの情勢。 ③ 弥生文化の諸相―その後の日本文化の基層となった弥生文化の特色の説明。	同上	同上
4	古墳とヤマト政権	① ムラからクニへ―弥生時代のムラの連合・征服を通じて階級がめばえ各地にそれぞれ地域的特色をもつ墳丘墓が営まれたこと。 ② 発生期の古墳と初期ヤマト政権―発生期の前方後円墳に見られる墳形・埴輪・埋葬施設や副葬品などを通した畿内・吉備・北九州連合の成立。 ③ 中期古墳とヤマト政権―4世紀末から5世紀に築造された巨大古墳に見られる政治連合の盟主権の様相。	同上	同上
5	東アジアの激動	大陸・朝鮮半島の動きとその日本への影響。 ① 冊封体制への参加と離脱 ② 隋唐大帝国の出現 ③ 朝鮮三国の動揺	青木和夫	青木和夫
6	飛鳥文化と仏教	① 聖徳太子と蘇我大臣家。 ② 仏教伝来。 ③ 飛鳥の寺院。	同上	同上
7	大化改新と壬申の乱	① 大化の改新。 ② 吉野の宮・飛鳥浄御原宮・藤原の宮 ③ 万葉集	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	律令国家	律令制度の説明、その実情 ① 律令とは。 ② 官僚の養成。 ③ 全国支配の構造。	青木和夫	青木和夫
9	奈良の都	奈良時代の政治と社会。 ① 皇親政治と藤原家の登場。 ② 権臣の交代。 ③ 藤原京から平城京へ。 ④ 庶民の生活	同上	同上
10	天平文化	奈良時代の文化。 ① 文字の普及。 ② 遣唐使。 ③ 東大寺と国分寺。 ④ 正倉院宝庫。	同上	同上
11	藤原政権の確立	① 平安初期政治史。 ② 平安初期の文化。	梅村恵子(川村学園女子大学助教授)	梅村恵子(川村学園女子大学助教授)
12	平安貴族	① 摂政・関白 ② 平安貴族の生活 ③ 蜻蛉日記や源氏物語の活用	同上	同上
13	荘園の時代	① 荘園制をわかりやすく。 ② 絵巻物の活用。	五味文彦(東京大学助教授)	五味文彦(東京大学助教授)
14	源氏と平氏	① 平氏政権の基盤。 ② 日本の“英雄時代”叙事詩としての平家物語。 ③ 中国や朝鮮にない“武家政権”	同上	同上
15	日本古代史の特質	① 古代・中世・近世・近現代という時代区分の特殊性。 ② 古代史がその後の歴史に及ぼした影響。	青木和夫	青木和夫

＝日本近代史＝（R）

〔主任講師：鳥海　靖（東京大学教授）〕

全体のねらい

明治政府の成立から第２次世界大戦の敗戦に至る日本の歩みについて、政治・国際関係・経済および国民生活を中心に講義する。なるべく網羅的概説にならないよう、各テーマごとに重点的問題を設定し、国際社会における日本という視点を重視して、多角的にそれを取りあげ、日本近代史の特色と問題点を明らかにしたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	日本近代史をどう見るか	日本の近代化についての理解と評価が戦後の学界においてどのように変ったか、その変遷をたどるとともに、あわせて、日本の近代化の国内的・国際的条件とその目標が何であったか、また、その特色をどのように捉えたら良いか、などについて考えてみたい。	鳥海　靖（東京大学教授）	鳥海　靖（東京大学教授）
2	明治国家の発足	欧米先進列強と並立する国家の建設をめざす明治初年の諸改革とその過程に生じたさまざまな国内の軋轢・紛争がどのように解決されたか、を解明する。	同　上	同　上
3	立憲政治実現への模索	明治初年の政府による立憲体制の構想、民撰議院設立建白、民権派による国会開設運動の展開などを通じて、政府と民権派の競合の形で立憲政治実現をめざす動きが進んで行く過程を、明治14年政変のころまで、取りあげる。	同　上	同　上
4	明治立憲制の確立	大日本帝国憲法（明治憲法）の制定過程、憲法体制の構造的特色、およびその運用の実際の考察を通じて、議会における明治政府と民党の対立と妥協の理由とその実態を明らかにする。	同　上	同　上
5	「脱亜」の歩み	条約改正問題、朝鮮問題と日清戦争を通じて日本の外交の目標が何であったかを考察し、あわせて、戦後経営の問題を考える。	同　上	同　上
6	産業革命の進展	近代産業の育成による工業化の推進と資本主義的経済制度の形成を、軽工業・重工業部門それぞれについて考察し、あわせて、社会問題・労働問題にも言及する。	同　上	同　上
7	日露戦争と国際政局	20世紀初頭の国際社会の動きの中で、日露戦争が遂行されたことを考え、その世界史的背景をさぐるとともに、日本の勝利がもたらした国際社会への衝撃を考察する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	東と西の狭間で	第1次世界大戦と日本のかかわり合いを通じて、戦後のパリ講和会議に5大国の1国として参加しながら、急速に大国化したが故に、欧米諸国からも東アジア諸国からも反発と警戒の目を向けられる日本の困難な国際的立場を考察する。	鳥海　靖	鳥海　靖
9	ワシントン体制下の協調外交	1920～30年代初めの国際協調の外交路線と軍縮政策について、ワシントン体制の形成とそのもとでの外交政策の展開を具体的に検討しその特色と問題点を明らかにする。	同　上	同　上
10	政党政治の定着	大正末期～昭和初期の政党政治の実態を明らかにするとともに、明治憲法下の政党政治成立の条件をさぐり、あわせてその問題性・弱体性をも解明する。	同　上	同　上
11	明治・大正期の文化と国民生活	明治中期（1880年代から）～昭和初期（1930年前後まで）の国民生活や文化の変容を、都市化の流れの中で考察する。	同　上	同　上
12	経済危機の到来とそれへの対応	いわゆる昭和恐慌、とりわけ農村恐慌と、それへの対応について井上財政・高橋財政を中心に考察し、あわせて、その政治的影響について考える。	同　上	同　上
13	満洲事変と軍部の台頭	1930年代初頭の対外危機の深化の中で勃発した満洲事変の国際的反響と国内的影響を考察し、国際的な日本の孤立化と国内における政党政治の没落・軍の政治的台頭について明らかにする。	同　上	同　上
14	国家総動員体制の形成	日中戦争の勃発、その長期化とともに具体化された「東亜新秩序」構想と国家総動員法を軸とした戦時経済体制への動きから、1940年の新体制運動と日独伊三国同盟に至る過程を考察する。	同　上	同　上
15	太平洋戦争	日米交渉の具体的経過をたどりながら、日本の南進政策、「大東亜新秩序」（「大東亜共栄圏」）構想と、アメリカの東アジア政策の衝突をさぐり、日本の対米開戦決定過程を明らかにする。	同　上	同　上

＝アメリカ論Ⅰ（北米）＝（ＴＶ）

〔主任講師：有賀　貞（一橋大学教授）〕

全体のねらい

北アメリカの二つの国、アメリカ合衆国とカナダの政治、経済、社会、文化の特徴をそれぞれの歴史と結びつけて綜合的に解説する。両国とも民族的に多様な国であることにとくに注目したい。世界における影響力の大きさを考慮し、アメリカに大部分の時間をあてるが、カナダについても、アメリカと比較しつつ、特色を述べる。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	新しい共和国の誕生	全体のねらい、構成の説明の後、北アメリカの地理の特色をまとめ、次にヨーロッパ人到来時の先住民族、英仏西の植民地争い、アフリカ人奴隷制度の導入、イギリス植民地の発展と13植民地の独立、革命の理念と連邦共和国の成立等を述べ、11回までアメリカを扱う。	有賀　貞（一橋大学教授）	有賀　貞（一橋大学教授）
2	西部の発展と南北戦争	19世紀の間に西方に向ってアメリカが急速に発展したこと、フロンティア社会の性格、先住民族の運命について述べた後、奴隷制度の西方への拡大、南北対立と南北戦争、奴隷制度廃止後の人種差別体制の成立について述べ、20世紀後半にそれが崩壊することに言及。	同　上	同　上
3	移民の流入と多様化	20世紀初頭まで、移民の流入が次第に増大したこと、その間移民の供給国が変化したことおよびそれらの理由を説明。移民流入に伴う社会摩擦や移民の「アメリカ化」過程について述べ、移民制限政策の始まりとアジア系移民禁止、「メルティング・ポット」説にも言及。	同　上	同　上
4	資本主義の発展	アメリカ経済発展の諸要因を述べた後、大企業の成立と経営者革命、工業化、都市化と高等教育の発達、労働者と労働運動、工業化時代の農業と農民、革新主義と社会主義、ニューディールと混合経済、ポスト・産業社会の到来。	同　上	同　上
5	20世紀世界の大国	ヨーロッパからの孤立など対外政策の伝統を説明した後、二つの大戦への参戦を通じて孤立主義を放棄し、第２次大戦後はソ連・共産圏の封じこめと西側諸国に対する開放的経済政策によって「パクス・アメリカーナ」を維持してきたことを述べ、ベトナム戦争に至る。	同　上	同　上
6	現代アメリカ経済の問題	「アメリカの衰退」が盛んに議論されてきたように、近年のアメリカ経済は多くの面でかつての力を失った。アメリカの産業競争力が衰えたのはなぜか、アメリカ経済はこのまま衰退するのか、再興のための処方箋は何か、などの疑問に答える。	嘉治文郎（放送大学副学長）	嘉治文郎（放送大学副学長）
7	民主政治の伝統と現状	アメリカ経済の問題に政治がどのように対応しようとしてきたかということから始めて、アメリカの民主政治の伝統と現状について述べる。連邦制、三権分立制の特色「大きい政府」論の後退、二大政党制の特色と「政党の衰退」現象などに言及する。	有賀　貞	有賀　貞

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	人種差別撤廃の成果と限界	人種差別撤廃を求めた公民権運動と公民権法の成立、政府による「アファーマティヴ・アクション」の奨励、非白人マイノリティーズの社会的上昇の進展と停滞、マイノリティーの中の階級分化、「逆差別」反対運動と保守派のまき返しについて述べる。	有賀　貞	有賀　貞
9	女性の地位と家庭の変化	60年代以降、人種差別撤廃運動とともに、性差別撤廃運動が展開され、成果を挙げた。エリート女性の社会的活躍が目立つ反面、母子家庭が貧困層の大きな部分を占めることなどを述べ、性的分業の観念の衰退が家庭生活に及ぼした影響を論じる。	有賀夏紀(埼玉大学教授)	有賀夏紀(埼玉大学教授)
10	変化する民族構成	1965年移民法の改定後、アジア、ラテンアメリカからの移民が増大した。アメリカの人口動態の変化により、将来白人人口は半数以下になることが予想される。現在急速に増加しつつあるヒスパニクスとアジア系アメリカ人について述べ、新たな社会摩擦に言及。	能登路雅子(武蔵大学助教授)	能登路雅子(武蔵大学助教授)
11	消費と娯楽の文化	多民族・多宗教の国であるアメリカでは、「アメリカ的生活様式」という言葉が示すように一つのアメリカ文化があると考えられてきた。しかしまた非白人マイノリティーの中から多元文化主義の主張もでている。アメリカ文化についてどのように考えるべきか。	同　上	同　上
12	連邦国家カナダの形成	アメリカ合衆国として独立した植民地以来のイギリス領北アメリカがどのような経過を経て自治領となり、連邦国家として「独立」を達成するに至ったかを概観し、イギリスとの関係、連邦制の特色、ケベック問題、アメリカとの経済的結びつきなどを述べる。	有賀　貞	有賀　貞
13	多様性の国カナダ	先住民族との関係、フランス系カナダ人の自己主張、最近の移民受容政策を述べ、カナダの二言語主義、多様文化主義について説明する。連邦国家としてカナダが存続するかどうかは必ずしも確実ではないことに言及する。	同　上	同　上
14	日米・日加関係の展開	主として日米関係を歴史的に概観するが、日加関係についても言及する。二国間関係とともに、世界の状況と関連させながら日米関係・日加関係を考察する。日米関係における人種的要求にも言及する。	同　上	同　上
15	アメリカとカナダ ー動向と展望ー	これは両国の現在の状況の特徴をまとめ、直面する主要な問題を挙げ、将来を展望する結びの部分である。放送される5年間に両国とも新たな進展があると予想されるので、この結びの部分の内容を必要に応じて改めることで対応したい。	同　上	同　上

＝美と芸術の理論＝（ＴＶ）

〔主任講師：青山昌文（放送大学助教授）〕

全体のねらい

世界には、様々な美と、多くの芸術がある。この講義では、古代・近代・現代の代表的な＜美の哲学＞と＜芸術の理論＞を前半で採り上げて、これらの大事な問題を、古今の哲学者や思想家がどのように考えてきたかを振り返り、後半ではそれを受けて、美術・音楽・映画・建築等の諸芸術に通底している現代的諸状況を通覧してゆくことにしたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	序章 芸術と美学	＜美の哲学＞と＜芸術の理論＞の歴史である美学史には、いくつかの通時的・主導的テーマがある。そのなかで、本講義の導きの糸として、＜ミーメーシス＞芸術理論に着目してみたい。なぜならば、それこそが、古典芸術と現代芸術の根本的共通問題だからである。	青山昌文 (放送大学助教授)	青山昌文 (放送大学助教授)
2	古典美学 その1 プラトン	プラトンの美学は、一般には「詩人追放論」を唱える芸術否定論と見なされることが多いが、本当は、より豊かな内容をもったミーメーシス美学である。それは、近代的芸術観を超えて、むしろ現代において示唆するところの大きい美学なのである。	同上	同上
3	古典美学 その2 アリストテレス	アリストテレスの美学は、西洋芸術理論の偉大な礎である。それは、芸術作品の創造理論としてのミーメーシス理論の古典であり、具体的な作品に即してそこで展開される原理的分析は、現代においてもいささかも古びていない優れたものである。	同上	同上
4	近代美学 その1 ディドロ	ディドロの美学は、ギリシャ以来の長い歴史をもつミーメーシス美学史のひとまずの終結点に位置している。彼自身の一貫した哲学によって支えられているその美学・芸術理論は、近代的芸術観を原理的に乗り越えているものであって、正に現代的意識をもっている。	同上	同上
5	近代美学 その2 バウムガルデン・カント・ゲーテ	近代ドイツの美学は、近代的芸術観を代表する、大きな影響力をもっていた美学理論である。芸術における主観性を重んじるその立場は、バウムガルデンによって準備されカントによって確立されたが、他方ドイツには、ゲーテのような別の立場に立つ美学理論も存在していた。	同上	同上
6	現代美学 その1 哲学的考察	ルカーチ・ベンヤミン・アドルノ達の美学は、現代における芸術の哲学的解明として、代表的なものである。＜複製技術時代＞の芸術作品についてのベンヤミンの先駆的考察等をはじめとして、彼らの美学は、現代社会を見据えたミーメーシス美学理論なのである。	同上	同上
7	現代美学 その2 批評的考察	現代芸術は、複雑な現代文明に対して高度に自覚的であり、それゆえ難解である。批評家や作家自身が、ある作品に即してその意味を言葉でもって的確に深く述べる時、現代芸術の普遍的一般的意味が明らかにされることがある。そのような例を探ってみたい。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	芸術の古典と現代　その1 絵画・平面・写真	絵画・平面芸術の古典としてミケランジェロ等を、現代としてウォーホル等を採り上げて、両者の差異を、歴史的・社会的・芸術思想的に考察する。また現代において大きな意味をもっている写真についても、メイプルソープ等を例として考察する。ゲスト対談者あり。	青山昌文	青山昌文
9	芸術の古典と現代　その2 彫刻・立体	彫刻・立体芸術の古典として同じくミケランジェロ等を、現代としてハーケ等を採り上げて、両者の差異を、歴史的・社会的・芸術思想的に考察する。またシミュレーショニズムを、現代におけるミーメーシス理論として考察する。ゲスト対談者あり。	同上	同上
10	芸術の古典と現代　その3 音楽	音楽芸術の古典としてウィーン古典派等を、現代として環境音楽や電子音楽等を採り上げて、両者の差異を、歴史的・社会的・芸術思想的に考察する。また音楽におけるミーメーシス理論を、歴史的にたどり直してみる。ゲスト対談者あり。	同上	同上
11	芸術の古典と現代　その4 文学	文学芸術の古典としてダンテや源氏物語等を、現代として20世紀ラテンアメリカ小説や東欧小説等を採り上げて、両者の差異を、歴史的・社会的・芸術思想的に考察する。また詩における古典的ミーメーシス理論等についても考察する。ゲスト対談者あり。	同上	同上
12	芸術の古典と現代　その5 演劇・舞踊	演劇・舞踊芸術の古典としてモリエールやシェイクスピア等を、現代として太陽劇団の活動等を採り上げて、両者の差異を、歴史的・社会的・芸術思想的に考察する。また演技論や演出論を、歴史的にたどり直してみる。ゲスト対談者あり。	同上	同上
13	芸術の古典と現代　その6 映画・ヴィデオ	映画芸術の古典としてロッセリーニ等を、現代としてヴェンダースやタルコフスキー等を採り上げて、両者の差異を、歴史的・社会的・芸術思想的に考察する。また映画論・映画美学を、歴史的にたどり直してみる。ゲスト対談者あり。	同上	同上
14	芸術の古典と現代　その7 建築	建築芸術の古典としてル・コルビュジェやグロピウス等を、現代としてポスト・モダニズムの建築等を採り上げて、両者の差異を、歴史的・社会的・芸術思想的に考察する。またポスト・モダンの「引用」をミーメーシス理論として考察する。ゲスト対談者あり。	同上	同上
15	終章 芸術の力 一つの具体例に即して	クリストの芸術は、常識的に見ればほとんど理解不能なものであるが、実は、現代社会の姿を鋭く明らかにする意味をもっている。日本とアメリカで遂行される＜アンブレラ・プロジェクト＞を実際に見ながら、現代芸術のもっている意味と力を考えてみたい。クリストとのインタビューあり。	同上	同上

＝美術史と美術理論＝（ＴＶ）

〔主任講師：木村三郎（日本大学助教授）〕

全体のねらい

前半（第Ⅰ章、1回－7回）は、美術史と美術理論に関する研究史を祖述し、一方で、実際の講義では、美術史通史としての性格も補充できるように、可能な範囲でイメージ資料を多用する。第8回以降は、第Ⅱ章として、具体的な美術史研究法を述べる。いわゆるリサーチ・ガイドである。ねらいとしては、美術作品に触れた人の視覚的感動を中心に置き、それをきっかけに美術史を調べ始めるための初歩の方法を述べる。一般教養レヴェルと専門過程の最初段階を対象とする。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	美術史を学ぶ楽しみ	「受胎告知」を描いた2点の作品を並列して見せ、西洋美術史において代表的な作品の比較を行なう。そこから、受講生の感覚による自主的な判断を尊重しつつ、帰納的方法で美術作品の美しさの秘密を考える。一方で、美術史通史としての、副読本の指定を行なう。国立西洋美術館の作品にも触れる。	木村三郎（日本大学助教授）	木村三郎（日本大学助教授）
2	16～19世紀の美術史学	① 画家伝としての美術史（ヴァザーリ・ベローリ・フェリビアン） ② ヴィンケルマンによる美術史 ③ 文化史としての美術史、ブルクハルト をそれぞれ祖述する。同時に、古代、ルネサンスからバロックにかけての主要な美術作品を見せる。	同上	同上
3	20世紀の美術史学	① 様式史としての美術史－リーグル、ヴェルフリン、フォシオンの方法に触れ、形態の比較法（「受胎告知」論）を試みる。（日本の例も触れる） ② 精神史としての美術史－ドヴォルジャック・パノフスキーに触れ、意味論とイコノグラフィーの基礎を学ぶ、中世美術の作品を多く見せる。	同上	同上
4	戦後美術史学の方法	① フランス学派（実証主義美術史・カタログ美術史） ② アメリカ美術史学、プリンストン学派 ③ セミオロジー美術解釈学 ④ 社会史と美術史 といった、戦後大きく展開する美術史学のありかたを概観する。	同上	木村三郎 谷川渥（検討中）
5	わが国における西洋美術史学の展開	① 戦前からの展開を祖述する。 ② わが国の一特徴である、東西交渉史・ジャンポニスム研究について概観する。	同上	木村三郎
6	美術とジャンル	① 絵画（素描・版画）・彫刻・建築・工芸 ② 絵画のなかのジャンル ③ 現代美術におけるジャンルの否定 ④ そうした絵画上の、一ジャンルである「歴史画」評価の発展、没落と再評価について考える。	同上	同上
7	図像解釈学と人文諸科学の位置	前述のパノフスキーのイコノロジー研究は、戦後大きな影響力を与えた。それは、この方法が美術史学だけにとどまらず、関連領域の人文科学諸領域に深く係わるからである。ここでは、ニコラ・プッサンに関する彼の論考を中心にその問題に触れてみる。	同上	木村三郎 西野氏（検討中）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	美術史と美術批評	美術史は本来美術批評の発展した形であるが、その歴史とそれぞれの学問的・社会的な意味を考える。現代美術のある部分にふれながら、年代決定論、アトリビューション論などに触れつつ、実証主義歴史学と批評とのはざまを考える。	木村三郎	木村三郎 千葉成夫(検討中)
9	美術史とイメージ資料	この項目以下は、具体的な美術史研究法を述べる。いわゆるリサーチ・ガイドである。ここでは特に、人文科学の他領域と若干異なる。絵はがき、レーザーディスク、スライド等のイメージ資料のあり方を述べる。	同上	木村三郎
10	研究旅行と写真撮影	前項の展開として、美術史研究においては、研究旅行のありかたが重要となる。また、イメージ資料の収集としてカメラ撮影も極めて重要である。ここでは、日本美術研究の場合を参考としながら、初歩の技術を考えたい。	同上	木村三郎 日沖氏 高野氏(検討中)
11	研究所と美術図書館	西欧における美術史学は、整備された美術図書館を中心に行なわれている。それはまた、展示機関であるとともに研究所でもある美術館学芸員室・資料室で実現される部分も大きい。ここではそれらのありようと、わが国の現状、また今後期待されるあり方を考える。日本東洋美術史系研究所にも触れる。	同上	米倉氏 波多野氏(検討中)
12	美術館と学芸員	近年、日本全国で美術館が急速にその数を増やしている。世界的な傾向としても、美術史学を支えるのは、そこで研究を続ける多くの学芸員である。博物館学の視点から、そのあり方と社会的使命を考える。	同上	木村三郎
13	展覧会とカタログ・レゾネ	最近のわが国では、無数の展覧会が催される。そのありかたと、ここでは、近世絵画研究法の一つとして、展覧会カタログ、あるいはより専門的な意味で、カタログ・レゾネ作成法（a．カード型資料管理、b．参考文献執筆法、c．パソコンによるデータ・ベース作成）を考える。	同上	同上
14	美術文献検索法	基礎資料の探し方を述べ、美術書誌学に触れる。（a．商業データ・ベースの利用、b．パソコン通信による海外データ・ベースの利用、c．美術史参考図書の紹介等を行なう）	同上	木村三郎 水谷氏(検討中)
15	参考文献	西洋美術史学における初歩段階の和書文献（参考図書、雑誌、モノグラフ、展覧会カタログ）を記述する。欧文図書としては、原則として、ペーパー・バックで入手可能で平易で基礎的な英文図書を記述する。	同上	木村三郎

＝音楽の歴史と音楽観＝（ＴＶ）

〔主任講師：笠原　潔（放送大学助教授）〕

全体のねらい

15回の講義を通して、音楽の歴史を動かしてきた歴史状況や、西洋と東アジア（中国・日本）の音楽文化を生み出してきた基本的な観念を探る。前半８回は西洋の音楽文化にあて、後半７回は中国（３回）と日本（４回）にあてる。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	西洋の時代区分と時代様式の変遷	最初に15回の講義全体にわたるガイダンスをした後、西洋音楽史の各時代（中世、ルネサンス、バロック、古典・ロマン派、現代）の音楽様式上の特徴を述べる。	笠原　潔（放送大学助教授）	笠原　潔（放送大学助教授）
2	古代ギリシアの音楽観 ムーシケー（一）	西洋の「音楽」という概念の根底にある古代ギリシアの「ムーシケー」の観念を取り上げ、古代ギリシアにおいては音楽と言葉が切り離せないものと捉えられていたこと、その理由などについて述べる。	同　上	同　上
3	古代ギリシアの音楽観 ムーシケー（二）	音楽を司るアポローシ神の神格の分析を通じて、「ムーシケー」が古代ギリシアにおいては人間に＜人間としての分在＞を教える術と捉えられていたことを明らかにする。	同　上	同　上
4	キリスト教音楽の成立 ユダヤ教の遺産	ユダヤ教からキリスト教に引き継がれた文化要素について述べ、それが西洋の音楽文化に今なお大きな枠組みを与えていることを述べる。	同　上	同　上
5	キリスト教聖歌の誕生と展開	今日の西洋音楽文化の出発点となったキリスト教聖歌の誕生とその後の展開について述べ、西洋中世の音楽史を概観する。	同　上	同　上
6	世俗音楽の隆盛	西洋中世後半の時代における世俗音楽の隆盛について述べ、それを生み出した西洋中世後半という時代について語る。	同　上	同　上
7	十四世紀からルネサンスへ	中世末期の十四世紀から西洋音楽史上の＜ルネサンス様式＞の確立までの過程を追いながら、それぞれの時代の歴史状況について語る。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	盛期ルネサンスの音楽	ルネサンス時代の音楽史を追いながら、特にこの時代における音楽と言葉の関係に対する問題関心にスポットをあてる。	笠原　潔	笠原　潔
9	古代中国の音楽思想　(一)「楽」の字をめぐって	東アジアの音楽観の根底にある観念を、「楽」の字をめぐる考察を通じて明らかにする。	同　上	同　上
10	古代中国の音楽思想　(二)孔子の音楽論	『論語』の中の音楽に関する章句を手掛かりに孔子の音楽思想を復元し、その根底にある観念を明らかにする。	同　上	同　上
11	古代中国の音楽思想　(三)荘子と「楽記」	春秋戦国時代から漢代にかけての音楽論を追いながら、特にユニークな音楽論を展開した荘子と『礼記』楽記篇の思想を紹介する。	同　上	同　上
12	人類と音楽	人類の歴史の中での音楽の起源の問題を、ユーラシア大陸における音楽考古学的遺物の紹介を通じて論じる（第13～15回の講義の序章にあたる）。	同　上	同　上
13	縄文時代の楽器	縄文時代の遺跡から出土する楽器の遺物を手掛かりに、縄文時代の音文化について考察するとともに、それが後の日本音楽の展開に与えた影響について考察する。	同　上	同　上
14	弥生・古墳時代の楽器	弥生・古墳時代の遺跡から出土する音楽資料を紹介し、後の時代の文献との対照を交じえて、当時の音文化について考察する。	同　上	同　上
15	古代の歌	記紀・万葉集・風土記など古代の文献に収められた歌謡と東アジアの照葉樹林帯に今なお残る音楽文化とを対照しながら、古代の歌の文化について考察する。	同　上	同　上

＝ベクトル解析＝（R）

〔主任講師：小畠守生（慶應義塾大学教授）〕

全体のねらい

微分・積分学および線型代数学に引続いて、ベクトル関数の解析学、すなわち、ベクトル場の微分、積分法とその応用を学ぶ。ベクトル解析は力学の一部と考えられるくらい物理学とのかかわりが深いが、本講では、ガウスの発散定理とストークスの定理を目標とする。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	ベクトル	ベクトルの定義を与え、線形代数学の簡単な復習をする。	小畠守生（慶應義塾大学教授）
2	スカラー積（内積）	ベクトルのスカラー積（または内積）を用いて、ベクトルの計量的性質を調べる。	同上
3	ベクトル積（外積）	3次元内積空間に特有のベクトル積（または外積）を定義する。	同上
4	ベクトルの微分	ベクトル関数の微分法を、1変数だけでなく多変数の場合にも取り扱う。	同上
5	曲線の微分幾何	ベクトル解析の応用として、空間曲線に関する基本的事項を考える。弧長、接線、曲率、捩率等の関係を記述するフルネーセレーの公式を求める。	同上
6	スカラー場の勾配	空間に点の関数ースカラー場ーが与えられたとき、その変化率を調べる。そのためにスカラー場の方向微分係数、勾配を考える。	同上
7	座標変換	直交座標系を別の直交座標系に変換する際のベクトルの成分の変換法則を求める。直交変換、直交行列の復習でもある。そしてこれは次章で定義するベクトル場の発散、回転の座標変換での不変性への準備でもある。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	ベクトル場の発散と回転	ベクトル場の発散、回転を定義し、勾配との関係等も考える。	小畠守生
9	線積分	前章までは微分を考えるだけであったが、本章から積分に入る。線積分は定積分の自然な一般化である。曲線に沿って定義された関数の積分を考える。	同上
10	2重積分と線積分	平面内の有界閉領域上での2重積分と、領域の境界曲線上の線積分に関するグリーンの定理を証明する。普通の定積分が原始関数の境界での値の差に等しいことの一般化である。	同上
11	曲面の微分幾何	空間内の曲面を位置ベクトルで表示し、接平面、曲面上の曲線の弧長、曲面分の面積等を考察する。	同上
12	面積分	曲面内の領域上で関数を積分する。これは2重積分の概念の一般化である。曲面の向きが問題になる。	同上
13	ガウスの発散定理	ベクトル場が空間内の有界閉領域のまわりで与えられたとき、ベクトル場の発散の領域内での積分と、境界面上でのベクトル場の法線成分の積分が等しいというガウスの発散定理を証明する。平面上のグリーンの定理の一般化である。	同上
14	ストークスの定理	平面上のグリーンの定理を、曲面上の対応する定理－ストークスの定理－に拡張する。	同上
15	完全微分	線積分は一般には積分路に関係するが、それが関係しない特別な場合の特性を考察する。	同上

＝解　析　学＝（R）

〔主任講師：長坂建二（法政大学教授）〕

全体のねらい

基礎数学Ⅰの実数変数の微分・積分学に引き続いて、複素変数の微分・積分学（関数論）について述べる。コーシーの定理を中心に、定積分の計算に役立つ留数計算に習熟する。更に、微分方程式論において基本的な解の存在定理、線形微分方程式の解法、級数による解法などを述べ、応用性を高める。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	複素数の導入とその性質	複素数を、実数の対として導入し、極形式による表示、加減乗除の幾何学的意味を考え、その性質に言及する。	長坂建二（法政大学教授）
2	複素数の初等関数	一次変換の定義と性質についてまず述べる。ついで、実数変数の初等関数の知識を用いて、複素変数の初等関数　代数関数、指数関数、三角関数、対数関数、巾乗関数、逆三角関数を導入し、複素関数特有の多価性についての注意を述べる。	同上
3	正則関数	複素関数の連続性・微分可能性について述べ、微分可能な複素関数（正則関数）がコーシー・リーマンの微分方程式をみたすことを示すと共に、基本的な性質について述べる。	同上
4	正則関数の性質	複素微分に関する諸定理と共に、複素微分の例を与える。また、正則でない関数の例を述べると共に、正則関数がみたす性質を、実数関数の場合と対比しつつ言及する。	同上
5	複素関数の積分	実数関数の積分の概念を復習し、その自然な拡張となるように、複素関数の積分を正則弧上の複素積分として定義し、その基本的な性質を示す。	同上
6	コーシーの定理	複素関数論において、最も重要なコーシーの定理を紹介し、証明の概略を述べる。また、単連結な領域の説明と例を与える。	同上
7	コーシーの積分公式とその応用	複素積分の例として、円周積分を計算するついでコーシーの定理から、正則関数に対するコーシーの積分公式を導くと共に、リウヴィルの定理より代数学の基本定理を証明する。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	留数計算	複数関数のゼロ点や極等の特異点を定義し、実数の微分・積分学の範囲では、求めることが困難であった定積分の値を複素積分、特に留数計算によって求められることを示すと共に、複素関数のローラン展開について述べた。	長坂建二
9	有名な微分方程式	微分方程式論の誕生と微分方程式論の内容を概観し、求積法で解が求められる、変数分離形、同次形、一階線形微分方程式の解法と共に、一階の微分方程式として有名な、ベルヌーイの微分方程式、リッカチの微分方程式の解法について述べる。	同上
10	存在定理	ダランベール（ラグランジュ）、クレローの微分方程式の解法と解の性質について述べる。ついで、一階常微分方程式が、リプシッツの条件をみたす時、初期値を満足する唯一の解が存在するという存在定理を遂次近似法により証明する。	同上
11	ルジャンドルの微分方程式	応用上きわめて重要な2階線形微分方程式のうち、巾級数を利用して解を求められるジャンドルの微分方程式、およびベッセルの微分方程式の解法を概説する。	同上
12	線形微分方程式	n階線形微分方程式の解の性質を、ロンスキー行列式との関係と共に説明し、一般解の求め方を与え、定数係数の場合には特性方程式を解くことにより解が求められることを例と共に示す。	同上
13	連立線形微分方程式Ⅰ	連立線形微分方程式を行列表現し、定数係数の場合には、係数行列の指数関数を考えることにより、解が求められることを示す。また、行列の指数関数の性質にも触れる。	同上
14	連立線形微分方程式Ⅱ	前章に引き続いて、連立線形微分方程式の解法についてのべる。定数係数行列の固有値と固有ベクトルとスペクトル分解との関連を説明し、計算法を与える。	同上
15	実社会と微分方程式	自然現象や、社会現象を記述する目的で生れた数々の微分方程式やその解釈について述べ、数学と社会との関連を考える。	同上

＝ 応 用 数 学 ＝（R）

〔主任講師：藤田　宏（明治大学教授）〕

全体のねらい

応用解析の視点から応用数学の基本的な発想法、概念および方法を解説する。素材はできるだけ平易なものに限り、また、証明主義にこだわらない納得による理解によって展開していく。情報化社会における応用数学は知性的であると共に大衆的でもあるべきであると考えるからである。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	増殖の数理	変化と関数 変化率 変化の法則 増殖率が一定な変化 非線形方程式に従う増殖	藤田　宏 （明治大学教授）
2	振動の数理	はじめに　減衰振動 単振動 ニュートンの力学の法則 簡単な例 調和振動子 特性根の方法	同上
3	競合の数理	一方的な影響がある場合 互いに影響がある場合 軍拡競争のモデル	同上
4 5	惑星の運動の数理	惑星運動とニュートン 惑星の運動方程式 保存量 円軌道の場合 一般の場合の解析 証明のための補足	同上
6	弦のつり合いの数理	弦のつり合い 弦の境界値問題の解法 弦の境界値問題のグリーン関数 弦の境界値問題における安定性 補足；一般の場合	同上
7〜9			

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
7・8・9	熱伝導と波動の数理	はじめに フーリエ級数とフーリエ係数 フーリエ展開可能性の問題 針金の熱伝導 弦の振動 弦を伝わる波動 複素フーリエ級数	藤田　宏
10・11	フーリエ級数からフーリエ変換へ	任意な区間でのフーリエ級数 フーリエ変換への移行 フーリエ変換の性質 フーリエ変換の応用 補足；L^2 および多次元におけるフーリエ変換	同上
12・13	変分法； 出合いから応用へ	1. 微分法から変分法へ (1) 微分法と最大・最小 (2) 変分法と汎関数 (3) 補足；条件付きの変分問題 2. オイラーの方程式 (1) 弦のつり合い (2) 一般の場合 (3) 補足；自然境界条件 3. 多変数の問題 (1) ディリクレ問題と変分法 (2) 補足；多次元での自然境界 4. 変分法にもとづく近似解法 (1) リッツーガレルキン法の原理 (1) 注意と補足	同上
14・15	超関数； 出合いから応用へ	1. デルタ関数 (1) 1点に集中する分布 (2) 加重平均とデルタ関数 2. 不連続関数の導関数 (1) 運動量の変化と撃力 (2) 超関数的導関数 3. 超関数の定義と例 (1) 超関数の定義 (2) 超関数の例 4. 超関数の極限と微分 (1) 超関数の極限 (2) 超関数の微分	同上

＝ 相 対 論 ＝（R）

〔主任講師：戸田盛和（東京教育大学名誉教授）〕

全体のねらい

相対性理論は、よく知られているように、量子論とともに現代物理学の柱となる理論であり、今世紀はじめにA．アインシュタインの独創的な考察と研究により発展された。ここでは、ニュートンにはじまる古典力学とマクスウェルの電磁場の考え方から出発して、1905年に発表された特殊相対性理論について、考え方や推論の道筋を学ぶ。後半では、1915年頃に発表された重力の理論である一般相対性理論について学び、太陽を回る惑星の運動や、宇宙論への応用についても勉強する。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	ガリレイとニュートン	地動説 慣性の法則 ガリレイの相対性原理	戸田盛和 （東京教育大学名誉教授）
2	重力の歴史	歴史の中から 相対性理論とは	同 上
3	光と時空の歴史	光の速さ 光の波 弾性体とテンソル	同 上
4	電磁場と電磁波の歴史	電気と磁気 電磁気学 光の圧力	同 上
5	特殊相対論の成立 アインシュタイン登場	アインシュタインの生い立ち 好奇心と着想 勉学時代のアインシュタイン	同 上
6	特殊相対論の時空 長さの相対性	アインシュタインの論文 相対性原理と光速度不変の原理 同時刻の定義 長さの相対性	同 上
7	相対論と常識 時間の相対性	時間の相対性 ミューオンの寿命 双子のパラドックス ジェット機による検証 ローレンツ変換 速度の合成則	同 上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	相対論的力学 速くなると質量が増す	加速される運動	戸田盛和
9	質量エネルギー $E=mc^2$	エネルギーと質量 質量エネルギー	同上
10	等価原理 一般相対論の出発点	重力質量と慣性質量 生涯で最も素晴らしい考え	同上
11	光の湾曲 有名になったアインシュタイン	重力が光線を曲げる 一般相対性理論への道 その後のアインシュタイン	同上
12	重力と時空 重力は力でない	光の湾曲 重力は時間をひずませる 重力は空間をひずませる	同上
13	重力場の方程式 重力は幾何学	曲面論 4次元時空 重力場の方程式	同上
14	一般相対論の検証 素晴らしい理論	惑星の運動 一般相対性理論の検証	同上
15	宇宙 相対論と宇宙論	宇宙は無限か 膨張宇宙 ブラックホール 唯一つの宇宙	同上

＝歴史から見た代数学＝（R）

〔主任講師：足立恒雄（早稲田大学教授）〕

全体のねらい

数体系、代数系が歴史的に見てどういう発達をしてきたかをたどりながら、自然な形で導入していく。同時に初等整数論などへの応用を通じて代数系の理解を深める。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	整数の起源	正負の整数の起源をたどり、その歴史的・文化史的意義を知る。特に負の整数は受け入れられるまでに長い歴史を必要とした。	足立恒雄（早稲田大学教授）
2	無理数などの起源	乗法・除法・小数の起源をたずねる。さらに実数論へ進み、その厳密な構成の必要性を知る。最後に複素数が導入されて、数体系がここに完結する。	同上
3	記号法の歴史	どのようにして数学に文字が使われるようになったか。未知数、既知数を表す文字の歴史をたずねる。	同上
4	現代の記号法の起源	現代の記号法の基本はほぼデカルトによって確立した。さらに論理にまで文字を導入したのはライプニツである。オイラーは三角関数の記号等数多くの記号を作り出した。この３人の業績を紹介する。	同上
5	ニュートンのりんご	息抜きとして、ニュートンがりんごの落ちるのを見て万有引力を考えるきっかけを得たという逸話の真偽をたずねる。微積分学の創始者ニュートンの意外な横顔を知ることができる。	同上
6	ピタゴラス数	直角三角形の３辺を構成する自然数の三つ組をピタゴラス数という。ピタゴラス数を求める一般的方法は紀元前2000年近い前には既に知られていた。その歴史とともに、ピタゴラス数を決定するいくつかの手法を紹介し、現代数学への導入とする。	同上
7	フェルマー予想の歴史	$X^n+Y^n=Z^n$ （$n \geqq 3$）をフェルマー方程式という。この方程式は自然数解を持たないというのがフェルマー予想である。この予想をめぐる最近の研究を概括的に紹介する。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	環という概念	現代代数学の基本概念である環の概念を導入する。代数系として外に群、体、ベクトル空間等があるが、環の概念を修得することによって、ほぼ全貌を知ることができるようになる。	足立恒雄
9	整数論への応用	環という考え方を導入するだけで初等整数論の問題がいかに統一的に、明解に論じられるようになるかを見る。最後に整数論に貢献した女性数学者ソフィ・ジェルマンの生涯を紹介する。	同上
10	クンマーの業績	フェルマー予想というのがその見かけと違って、どんなに難しい問題であるかということを、素因数分解、単数の障害を例に説明する。	同上
11	作図不能問題	立方倍積問題、角の3等分問題、円積問題という古来有名な作図問題がなぜ不能であるのか、その理由を代数的に解明する。かくして現代代数学の威力を目のあたりにすることができる。	同上
12	公理主義	古典的な数学と20世紀の数学とを明白に区別するのは公理主義である。公理主義とはどういうものか、その意味と意義を知る。	同上
13	方程式の可解性	現代代数学の威力を示すもう一つの例として、5次方程式が代数的に解けないことを概略的に説明する。	同上
14	抽象の方法	現代数学を特徴付けるその抽象性について、その方法、意義を紹介する。とくに類別という手法を詳しく知る。	同上
15	抽象の方法の実例	類別という方法を用いて新しい対象を作り出す実例を数体系の中に見る。整数、有理数、実数、複素数はすべて類別によって作り出されるのである。この一つの抽象化の方法で統一的に厳密に数体系を構成することができるということを知るのが本書の眼目である。	同上

＝数学基礎論＝（R）

〔主任講師：前原昭二（放送大学教授）〕

全体のねらい

数学基礎論という研究分野の起こりを簡単に説明したあと、公理的集合論、ゲーテルの不完全性定理、無矛盾性証明、などを話題の中心にして、数学基礎論の概要について解説する。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	数学における集合論的方法	数学における集合論的方法の必要性と、集合論のパラドックスとを説明し、数学基礎論の発端について述べる。	前原昭二（放送大学教授）
2	集合論の公理	集合論のパラドックスの一応の解決策としての公理的集合論を、記号論理の方法を用いずに説明する。	同上
3	数学的命題の形式化	公理的集合論の論理式を例にとり、論理式の概念を説明する。	同上
4	数学的推論の形式化	述語論理の推論を、自然な論理計算の形で説明する。	同上
5	数学的証明の形式化	命題論理や述語論理、ならびに集合論における基本的な性質のいくつかの証明を与える。	同上
6	ゲーデル数	ゲーデル数について説明する。	同上
7	不完全性定理	ゲーデルの不完全性定理と、それから得られる無矛盾性に関する結果について述べる。	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	自然数論の形式化	ゼクェンツの形式を用い、１階の自然数論の形式化を与える。	前原昭二
9	自然数論に対する無矛盾性証明の必要性	有限の立場における考え方を説明し、自然数論の無矛盾性証明の必要性についてのゲンツェンの見解を紹介する。	同　上
10	自然数論の無矛盾性証明のアイディア	自然数論に対するゲンツェンの無矛盾性証明の、初期のアイディアについて述べる。	同　上
11	直観論理	直観論理の基本的な立場を説明し、その基本的な論理法則についてのべる。	竹内外史 （イリノイ大学教授）
12	ファジー論理	ファジーの概念を説明し、直観論理の特殊な場合としてファジー論理をとらえ、その論理体系についてのべる。	同　上
13	計算論	計算可能な関数の論理を概説する。又種々の分野との関係について言及する。	同　上
14	集合論の課題	現代集合論の課題並びに成果について解説する。更に将来の展望を行う。	同　上
15	基礎論の将来	現在の基礎論の種々の方向について解説する更に情報科学との接近などについて言及する。	同　上

＝標本抽出の計画と方法＝（Ｒ）

（主任講師：鈴木達三（統計数理研究所教授）
主任講師：高橋宏一（筑波大学教授））

全体のねらい

統計調査や世論調査などの各種の調査に広く利用されている「標本抽出の方法」について、前半では、基礎となる考え方および標準的な各種の方法に関する理論をのべる。後半では、これらの方法を実際の問題に適用する場合を考え、それぞれの方法を実例にそって具体的に説明し、標本抽出の計画と方法を理論と実際の両面から理解させる。

回	テーマ及び内容	担当講師（所属・氏名）
1	数学的準備 母集団とサンプル 単純ランダムサンプリング	高橋宏一 （筑波大学教授）
2	標本平均 確率変数 確率変数が独立とは	同上
3	確率変数の期待値と標準偏差 単純ランダムサンプルの標本平均の期待値と標準偏差	同上
4	比率の推定 必要な標本の大きさ 分散の推定	同上
5	層別ランダムサンプリング カードのモデル 比例割当とネイマン割当	同上
6	2段サンプリング(1) 2段サンプリング(2)－第1次抽出単位の大きさが異なる場合	同上
7	層別2段サンプリング 比推定法	同上

回	テ　ー　マ　及　び　内　容	担　当　講　師 （所属・氏名）
8	回帰推定法 母平均の推定量の分散の推定	高　橋　宏　一
9	標本抽出の計画と実際の調査	鈴　木　達　三 （統計数理研究所 教授）
10	単純ランダムサンプリングの実際	同　　上
11	層別サンプリングの実際	同　　上
12	層別2段サンプリングの実際	同　　上
13	層別2段サンプリングの実施例とサンプリングの誤差等のプリングの誤差等の計算例	同　　上
14	他の標本抽出計画－日本の標本調査計画とアメリリの標本画とアメリリの標本調査計画、電話調査	同　　上
15	標本企画と対象者抽出に関連する問題点の検討　　点の検討	同　　上

＝データ解析法の基本＝(TV)

〔主任講師：林　知己夫（統計数理研究所名誉教授）〕

全体のねらい

データによる現象解析法をデータ解析法と名付ける。どのようにデータをとり、どのようにデータを解析して情報を取り出すかの方法を言う。これには、現象をどう取扱うかのフィロソフィーが重要で、この上に立って必要に応じ数理的・統計的方法が開発されるものである。まずデータ解析をする上での基本となる考え方・方法を述べる。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	データとは何か	データとデータ解析　対象をいかに把握するか　標識づけについて　データによる現象解析の順序	林　知己夫（統計数理研究所名誉教授）
2	グラフ化の重要性	グラフ化の意義　いくつかの数値例とその効用	同　上
3	データにおける質と量		同　上
4	データの性格・Ⅰ―測定誤差・測定値変動の分析上の意味―	はじめに　測定値が数量である場合	同　上
5	データの性格・Ⅱ―測定誤差・測定値変動の分析上の意味―	実例　偏りの出方について　誤差を考慮して正しい結論を導き出す方法　その1－単純集計の場合　誤差を考慮して正しい結論を導き出す方法　その2－関連分析の場合　回答確率の推定　回答確率推定の実例	同　上
6	多次元空間における分散	基本概念と一般化分散　多次元のチェビシェフ不等式と集中楕円・一般化分散	同　上
7	判別の尺度・Ⅰ	判別の基本概念　相関比　多次元の場合の相関比	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
8	判別の尺度・Ⅱ	判断成功率　判断成功率と相関比 η^2 との関係　多次元の場合	林　　知己夫
9	距離と一般化分散と線型判別関数	距離と分散　線型判別関数	同　　上
10	多次元データ解析の重要性	集団表章と個人表章　多次元的推理の重要性　考えの筋道　推論の陥穽	同　　上
11	因子分析法と主成分分析	因子分析法　スピアマンの2因子法、ホルツィンガーのバイファクター法、サーストンの多因子法、ガットマンのラデックス法、タッカーの3相因子分析法　主成分分析法　主成分分析法と多因子分析法、多因子分析法の妥当性の検討　適用上の注意	同　　上
12	データ解析における数量化	その発生　数量化の意義と根本思想	同　　上
13	数量化の基本概念	数量化の二つの立場　データ表現の基本　数量化の諸方法の位置づけ　反応確率を求める一方法	同　　上
14	外的基準がある場合・Ⅰ ― それが数量である場合 ―	モデル　計算　制約条件のあるとき	同　　上
15	外的基準がある場合・Ⅱ ― それが数量でない場合 ―	モデル　計算　外的基準Tの個数による算式の違い　要因が量質まざりあっている場合　多次元の場合　判別の方法　外的基準が1次元でなく要因の線型和を考えない場合　7の実例	同　　上

＝データ解析法の進歩＝（TV）

〔主任講師：林　知己夫（統計数理研究所名誉教授）〕

全体のねらい

データ解析の基本を習得した上で、さらに学ぶべき必要のある重要な方法について述べる。基本だけでは、実際の現象を有効に取扱って情報をとり出すことは出来ないので、より進んだ方法を説明する。これらの方法は「基本」のフィロソフィーの上に立つものである。ここでは質的データを解析するための数量化の諸方法を中心に話をすすめる。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	要約 — データ解析法の基本		林　知己夫（統計数理研究所名誉教授）
2	外的基準がある場合のデータ処理	始めのデータ　外的基準が数量である場合の計算例　外的基準が数量でない場合の計算例	同　上
3	外的基準がない場合の数量化・Ⅰ — パタン分類の数量化・その1	モデル　計算　多次元の場合　相関表の関連性をみるための方法	同　上
4	— パタン分類の数量化・その2 —	表の書き直し　人工データーもとのデーターデータ構造の直観的把握　パタン分類による計算　計算例	同　上
5	— パタン分類の数量化・その3 — — 応用例	日本人の考えの筋道　日本人における「日本的近代ー伝統」の思想　自然観に対する日独仏比較	同　上
6	外的基準のない場合の数量化・Ⅱ — eij型の数量化 その1 —	説明　モデルおよび計算　実例	同　上
7	— eij型の数量化 その2 —	二つのものの間の関係Rijに基づく諸方法　K－L型数量化　K－L型数量化の実例	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
8	一対比較法の数量化・Ⅰ一ガットマンの一対比較表 一	問題の発生　モデルと計算式	林　　知己夫
9	一対比較法の数量化・Ⅱ一一対比較法における矛盾と数量化 一	問題に対する考え方　二つのモデルⅠとⅡ　モデルⅠの解法　数値例　最小2乗法による解　応用上の注意	同　　上
10	多次元尺度解析法・Ⅰ　一　原理と応用	問題の発生　モデルの構造　問題の展開と適用方法　実例　例題	同　　上
11	多次元尺度解析法・Ⅱ　一MDA−ORの理論	基本的考え方　1次元の場合のモデル　S次元空間において解くための方法一階層的次元作成法（hierarchical construction method）	同　　上
12	多次元尺度解析法・Ⅲ一MDA−ORの実例とMDA−UO一	MDA−ORの実例　MDA−UOの考え方　モデルと計算式　理論理解のための例示	同　　上
13	多次元尺度解析法・Ⅳ　一　続MDA−UOとMDA−ORとの比較	欠測値がある場合のモデルと計算　異なった要因間の関係を取り扱う考え方　MDA−ORとMDA−UOの比較	同　　上
14	三つの要素の間の関係に基づく数量化	個人差ある場合のMDS（INDSCAL）　Tucker（タッカー）の三相因子分析法　eijk型数量化　Harshman（ハーシュマン）のPARAFAC	同　　上
15	分類とクラスター化	はじめに　分類の基本概念　分類の諸方法　その他の考察	同　　上

＝時系列論＝（R）

〔主任講師：尾崎　統（統計数理研究所教授）〕

全体のねらい

時間の経過と共に不規則な変動を示す現象の統計的解析法を論じる。必要な基礎的概念の説明をはじめに行い、ついで一般的に良く知られている線形時系列モデルについて解説しその利用法を論じる。非線形時系列モデルあるいは事象の発生時点の系列の特徴を解析するための点過程モデル等の新しい話題についても概説する。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	序論	1.時系列とは何か　2.時系列解析と確率過程　3.予測と時系列　4.状態空間表現　5.点過程　6.むすび	赤池弘次（統計数理研究所所長）
2	確率論的な基礎	1.はじめに　2.偶然事象と確率　3.確率空間　4.確率変数、確率分布および期待値　5.主な確率分布とその乱数	尾崎良彦（統計数理研究所助教授）
3	確率過程の基礎概念	1.確率過程　2.定常性　3.自己共分散関数　4.Rxx(s)とPxx(s)の性質　5.相互共分散関数　6.推定	尾崎　統（統計数理研究所教授）
4	線形システムとフーリエ解析	1.スペクトル　2.フーリェ級数　3.フーリェ積分　4.確率過程スペクトル　5.時系列のスペクトル　6.白色雑音のパワースペクトル　7.線形システム　8.多入力システムのスペクトル解析	同上
5	スペクトルの推定	1.ピリオドグラム解析　2.ピリオドグラムのスムージング	同上
6	予測とARモデル	1.時系列解析と予測　2.自己回帰モデル　3.自己回帰モデルのあてはめ　4.AR過程のシミュレーション	石黒真木夫（統計数理研究所助教授）
7	ARMAモデルとスペクトル	1.AR過程のパワースペクトル　2.線形システムのインパルス応答関数とMAモデル　3.ARMAモデルとARMA過程のパワースペクトル　4.ARMAモデルのあてはめ　5.特性多項式	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	統計的モデル構成とAIC	1.パワースペクトルの推定とモデル選択 2.パラメータの推定誤差とFPE 3.情報量規準AIC	石黒 真木夫
9	カルマンフィルター	1.システムの状態 2.状態空間表現 3.状態空間表現の例：ARモデルとARMAモデル 4.状態推定の問題—予測、ろ波、平滑化 5.カルマンフィルター 6.平滑化 7.カルマンフィルターの応用	北川 源四郎（統計数理研究所 助教授）
10	多変量時系列モデル	1.多変量時系列 2.多変量自己回帰モデル 3.自己回帰モデルの推定 4.多変量時系列の予測 5.多変量時系列のスペクトル解析	同上
11	フィードバックシステムの解析	1.問題点 2.フィードバックシステムの時系列モデル 3.システムの解析、ノイズ寄与率 4.一般の場合 5.解析例	同上
12	統計的制御	1.統計的制御の必要性 2.制御システムの状態空間表現 3.モデルの推定 4.準備 5.最適制御入力 6.シミュレーションによる検討 7.制御系設計の実例	同上
13	ベイズモデル—非定常モデル—	1.非定常時系列とベイズモデル 2.季節調整法 3.地球潮汐データ解析 4.コウホート分析	石黒 真木夫
14	非線形モデル	1. Lynx データ 2.リミットサイクル 3.非線形時系列モデル 4.推定	尾崎 統
15	点過程モデル	1.線分の長さはよる表記法 2.区間に含まれる点の個数による表記法 3.条件つき危険度関数（Conditional intensity function） 4.点過程のシミュレーション法 5.点過程の 度と最 法 6.線形回帰型モデル 7.統計モデルの選択 8.線形因果モデルと地震活動の地域的関連性	尾形 良彦

＝統計的データ解析とソフトウエア＝　（TV）

〔主任講師：大隅　昇（統計数理研究所教授）〕

全体のねらい

現象解析を進める場合に、データの収集・獲得に始まり、それを分析に適した形に表現し、それらのデータから意味のある情報を引出すまでの過程で必要となる数理的な方法がデータ解析法である。とくに観測特性や個体が多数の場合の多次元データの解析は、諸現象に潜む複雑な情報を理解の容易な形に要約する手段として有効である。講義ではまず，データ解析で考えるデータとは何かについて述べる。次に、データ解析の情報探索ならびにその視覚化の基本操作であるグラフィカル表現法について概観する。さらに多次元データ情報を縮約化するための主な手法（主成分分析、パターン分類法など）を解説する。続いて、データを分類し、そこに内在する類似性や差異性を洞察するための方法である分類法（自動分類法、クラスター法）の主な方法について解説する。また、これらの多次元データ解析法を活用するためには、コンピュータと統計ソフトウェアの支援が不可欠である。そこで、統計ソフトウェアの歴史、考え方、その役割を述べるとともに、実際にそれらがどのようにデータ解析の諸場面で役立つかを、統計ソフトウェアの紹介や分析事例を交えて解説する。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	多次元データ解析	多次元データとは データの測定と収集 データ解析の処理の流れ データ解析におけるコンピュータの役割 データ解析と統計ソフトウェア	大隅　昇 （統計数理研究所教授）
2	データの性質	データの種類 データ表の形式 データの規模 データ表を表わす記号	同　上
3	データの視覚化 ―グラフの活用とその効用	グラフを用いる目的 グラフと統計手法の関連 グラフの表わす情報とグラフの利用法 探索的なグラフィカル手法 グラフィカル表現の効用とグラフ作成上の注意	同　上
4	データの縮約化	データの縮約化とは何か 位置を表わす主な縮約値 ばらつきをみる縮約値 平均値や平方和を用いる理由 その他の縮約値 ボックスプロット図（箱ひげ図）の作り方	同　上
5	多変量データの縮約化	2変量データの要約 積和と共分散 簡単な実験と例 多変量データの縮約	同　上
6	量的データの合成指標化 ―主成分分析法―	合成指標化の目的とその意味 合成指標の作り方 4変量データの合成指標化 主成分の主な性質 主成分分析の適用上の留意点 補足 ― 主成分の求め方 ―	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
7	質的データの合成指標化 — 関連分析法 —	問題の背景 分析対象となるデータ表とその意味 プロフィルと重心座標 成績データの分析例	大隅　昇
8	関連分析法の数理	2元クロス表の関連分析法 関連分析法の主な性質 追加処理	同　上
9	多重クロス表の関連分析法	A表の関連分析 バート表の関連分析 2項目の場合の関連分析	同　上
10	分類法の基礎	分類とデータ解析 分類が関連する研究分野 データ解析における分類手法の概要	同　上
11	類似と差異	類似性と非類似性 量的データの類似度と非類似度 質的データの類似度と非類似度 多値型データの類似度・非類似度 類似度や非類似度にみられる性質	同　上
12	非階層的分類法	分割の総数 分割最適化型の手法 — k・means 法 — 数値例による検討	同　上
13	階層的分類法	凝集型手法とは 凝集型分類法の基本的な考え方 クラスター間の距離 組み合わせ的手法	同　上

＝計量生物学・行動計量学＝　（TV）

〔主任講師：林知己夫（統計数理研究所名誉教授）
主任講師：水野欽司（大学入試センター教授）〕

全体のねらい

統計学の体系化に二つの行き方がある。本学では方法論的立場から講義の体系を組み立てきた。今回は、もう一つの行き方、対象今野を区分けし、それぞれの分野での生きた統計的方法論という立場からフィールドと理論と一体化した講義を組み立てる。生物学、医学・生態学の分野における計量生物学と行動医学の分野における行動計量学についての講義を行う。履修には、微分積分学、線形代数学、確率論、統計学の基礎知識を必要とする。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
第1部　計量生物学（その1）			
1	医学・生物統計学 －1－ 実験計画法	生物等のバラツキが不可避な対象に対して、その存在を認めた上で客観的なデータを得るための実験技術が実験計画法である実験計画法が創始された農事試験から初め、臨床試験や動物実験に実験計画法がどのように用いられているか、その基礎概念の解説と共に概観する。	大橋靖雄（東京大学教授）
2	医学・生物統計学 －2－ リスクの評価	マウスやラットなどの小動物、培養細胞、細菌などを用い、化学物質の安全性を評価するための膨大な実験研究が行なわれている。莫大なデータとスケジュール管理に用いられているコンピュータシステムの紹介を含め、実験の品質管理とヒストリカル・コントロールの利用（データベースの構築）、統計解析の問題（dose-response や多重性）、新しい実験系の評価の問題等について概説する。	同上
3	医学・生物統計学 －3－ 臨床試験	患者を対象とした臨床試験のうちとくに第3相を取り上げ、患者の割り付け、データ収集と管理、解析という一連の研究過程を追う。臨床試験の登録やメタアナリシス、統計解析（生存時間解析など）、コンピュータネットワークの利用などの話題にも触れる。	同上
4	医学・生物統計学 －4－ 疫学的研究	疫学的研究の例として、放射線影響研究所で最近行われた受動喫煙と肺　の関連の研究を紹介する。利用したデータの紹介に絡め、同研究所の設立からこれまでの貢献にも簡単に触れる。疫学的研究方法とくにケースコントロール研究の意義と限界にも言及する。	同上
5	計量医学 －1－ 健康予測 ―臨床医学への適用―	外的基準のない多変量解析のうち最も代表的な主成分分析を解説する。さらに応用として、ヒトの心機能に関する生体情報を利用して、心機能評価の方法の一例を具体的に説明する。更に、薬剤等病気の治療後の計量的機能改善評価の表現応用も説明する。	駒澤勉（統計数理研究所教授）
6	計量医学 －2－ 健康予測 ―集団医学への適用―	外的基準のない数量化理論第Ⅲ類（パターン分類）の質的データ分析を解説する。さらに応用事例に動脈硬化性疾患の早期発見のための集団健康検診の全国的規模の大量データを利用して、健康の計量的予測法について説明する。	同上
第2部　行動計量学			
7	行動計量学 －1－ 順序づけと分類	ソシオメトリーにおける人間関係の図式化、自由連想実験による被験者の分類、嗜好検査や官能検査にもとづく人とものの分類等からいくつか具体的なデータを取り上げて、順序づけと分類のために統計的方法（クラスター分析、多次元尺度解析、数量化3千類、主成分分析、因子分析等）をどのように利用し、その結果をどのように解釈するか具体的に示す。	岩坪秀一（大学入試センター教授）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	行動計量学 —2— 予測と判別	テレビ番組の視聴率の予測、スポーツにおける過去の記録をもとにした勝負の結果の予測、文体からみた本物と偽物との判別、パターン認識における自動識別等の分野からいくつかの具体的なデータを取り上げて、それらに対して予測と判別のための統計的手法（重回帰分析、数量化1類、判別分析、数量化2類等）をいかに適用し、結果の信頼性をどのように評価するか具体的に説明する。	岩坪秀一
9	行動計量学 —3— 社会調査の実際	一般市民の意識、態度、価値観などを調べる際に必要な統計的方法の応用を紹介する。実例として、昭和28年から5年置きに継続8回行って来た日本人の国民性調査を取り上げ、標本抽出（サンプリング）を始めとする調査法の実際、および分析の進め方などを、わかり易く講述する。	水野欽司 (大学入試センター教授)
10	行動計量学 —4— 実験設計の特色	行動科学的な“実験”は、理工学の実験とは種々の面で異なる配慮を必要とする。ここでは、その実験法の統計的特徴について紹介する。例示として、地震防災教育において、どういう教材・訓練が子どもたちに“よい効果”を与えるか、などの実験結果を具体的に検討し、この種の実験の重要な諸問題を述べる。	同上
第3部　計量生物学（その2）			
11	森林の構成	森林は地形・地質・土壌・気候・樹種などによる自然環境とその森林の育成にかかわる住民の意識・利用目的・造林技術などの人為的環境によってさまざまな形態をしめす。その様子を日・独・仏・フィンランドの森林の比較によって説明する。	菅原聰 （信州大学教授）
12	森林の成長	森林が自然及び人為的ないろいろの条件のもとに成長していく過程を統計的に解析してこれをモデル化し、コンピューターシミュレーションによって条件の変化が林相に及ぼす影響を検討しながら森林の将来予測と保全についての考察を行う。	同上
13	野生動物の生息数推定	野生動物の生息数を知るための統計学でよく知られている捕獲—再捕獲法について解説する。さらに、積雪上の足跡を利用して、ノウサギの生息数を推定する方法を具体的に説明する。これには生態学・統計学・コンピュータの学際的研究の不可欠のことを示す。	林知己夫 （統計数理研究所名誉教授）
14		積雪上の足跡を利用する仕物り法（少面積地区において有効）、ヘリコプターによるピュッフォン　の原理を基礎におく方法（大面積地区において有効）について具体的に説明する。ヘリコプター法は、ノウサギのほか、キタキツネ、カモシカへの応用も可能で、その方法を解説する。	同上
15		足跡を用いずに推定する被害法あるいは投人・除去法と言われる事について説明する。カモシカについてこの方法とヘリコプターによる方法との併用について具体的に説明する。最後に動物の生態に適した諸統計的方法についてまとめ、野生動物生息管理の問題に言及する。	同上

＝ 量 子 論 ＝ （TV）

［主任講師：野田春彦（創価大学教授）］
［主任講師：阿部龍蔵（放送大学教授）］

全体のねらい

原子や分子の行動は量子論にしたがっている。従って、化学や物理学の基礎的理解には量子論が必要である。放送大学の化学や物理学の講義の中には量子論を使わなくてもなんとか理解できるものもあるが、量子論を理解していなくてはわからないものもある。量子論をまともに学ぶためには数学的な基礎が必要であるが、この講義ではそれほど予備知識がなくてもなんとか重要なことは理解できるようになるようにと考えてある。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	量子論はなぜ必要か	1. 古典物理学の破綻 2. ラザフォードの原子模型の欠点 3. 水素原子のスペクトル 4. 光電効果	阿 部 龍 蔵 （放送大学教授）
2	波と粒子の二重性	1. アインシュタインの関係 2. ド・ブロイ波 3. ボーアの水素原子模型	同 上
3	シュレーディンガー方程式	1. 古典的な波動方程式 2. シュレーディンガー方程式	同 上
4	シュレーディンガー方程式の簡単な例	1. 波動関数 2. シュレーディンガー方程式の例	同 上
5	一次元調和振動子	1. 一次元調和振動子 2. エネルギー固有値 3. エルミート多項式	同 上
6	量子力学と古典力学	1. エーレンフェストの定理 2. 量子力学の一般原理 3. 不確定性原理	同 上
7	水 素 原 子	1. シュレーディンガー方程式 2. 球面調和関数 3. 水素原子のエネルギー	同 上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	スピンと量子統計	1. 角運動量 2. スピン 3. 量子統計 4. スピンと磁気モーメント	阿部龍蔵
9	原子の構造	1. 水素原子の原子軌道 2. 原子の大きさは何で決まるか 3. ヘリウムの変分法 4. リチウム原子とイオン化電圧 5. 構成原理と元素の周期律 6. 希ガスの安定性とオクテット	細矢治夫 （お茶の水女子大学教授）
10	二原子分子	1. 2個の水素原子についての思考実験 2. 調和の振動子とモース曲線 3. ハトイラーとロンドンの説明 4. 精密な理論計算 5. 共有結合の2通りの理解の仕方（VBとMO）	同上
11	多原子分子の構造と性質（Ⅰ） 飽和化合物	1. 不対電子同士の結合 2. 結合の間の角度 3. 軌道の混成 4. 原子価 5. 飽和炭化水素	同上
12	多原子分子の構造と性質（Ⅱ） 不飽和化合物	1. エチレンとアセチレン 2. δ結合とπ結合 3. ブタジエンからポリアセチレンまで 4. ヒュッケル分子軌道法 5. ポリエンの電子スペクトル 6. ベンゼンと芳香族炭化水素 7. その他の不飽和化合物	同上
13	分子の振動と回転	1. 分光学の基礎 2. 分子の振動 3. 分子の回転 4. 分子内回転 5. まとめ	下沢隆 （埼玉大学教授）
14	分子の電気的・磁気的性質	1. 電気的性質 2. 磁気的性質 3. 常磁性共鳴吸収（電子スピン共鳴：ESR） 4. 核磁気共鳴（NMR）	同上
15	化学反応の電子論	1. 水素分子の生成 2. 活性化エネルギー 3. 重水素の交換反応 4. 芳香族化合物の置換反応 5. ウッドワード・ホフマン則 6. HOMO-LUMO相互作用理論 7. 夢のある分子の設計	同上

＝現代物理学１＝（R）

〔主任講師：江沢　洋（学習院大学教授）〕

全体のねらい

物理学20.世紀のはじめの30.年間に大きく変った。それまでの、ニュートンの力学とマクスウェルの電磁気学を二本の大黒柱とした古典物理学が、相対性理論と量子力学に席をゆずったのである。この講義では、その必然性をしらべ、変革の深さを測って、現在の物理学の動きを見定めたい。探究は依然つづいているのだから。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	力学的世界観	古典物理学の二本の大黒柱の一方をなしたニュートン力学の構造を復習する。それは、初期条件と力の法則、運動方程式の三つ組を骨として未来を決定論的に予言する。一時は、これによって宇宙の万象を運動に還元して捉えきることができるとさえ思われたのだが？	江沢　洋（学習院大学教授）
2	電磁場と光	第1回に引きつづき、古典物理学のもう一方の大黒柱であったマクスウェルの電磁気学の構造を復習する。ここでは、力学の主役であった粒子にかわって「場」が登場するが、初期条件と運動方程式から未来を決定するという論理は変らない。光も場の伝播である。	同　上
3	相対性理論（1）	光が伝わるのは、電場の変動が磁場を生み、その磁場の変動が電場を生み……という連鎖による、でも、光と並んで光の速さで走ったら、光は変動のない静止した電磁場に見えるだろう。いや、それはあり得ない。アインシュタインはこの疑問を追及して相対性理論に到達した。	同　上
4	相対性理論（2）	光の本性の追及から時間と空間の概念の根本的な再検討が必要になり、相対性理論が生みだされた。それは同時にマクスウェルの電磁場の法則に潜んでいた美しい対称性をあらわにすることであり、それを力学にも及ぼすとニュートンの法則を変革することにもなった。	同　上
5	原子論の発展	どんな物質も極微の粒子 ー原子ー の集まりだという考えは遠くギリシャの昔からあった。なぜ、人はその考えに誘われたのか？どのようにして、人は、その目にも見えず触ってもわからない微粒子の存在を、長い歴史の間に確信するようになったのか？	同　上
6	電子とその役割	物質の普遍的な構成要素として最初に発見された微粒子は電子である。もちろん、極微の粒子が直接に見えたわけではない、粒子と仮定し力学と電磁気学で予想を立てて実験した結果が決して予想と違わなかったのだ。その延長線上で物質の熱的・光学的性質も解明できそうで？	同　上
7	放射能の発見と原子核	放射能の新しさは3つある：不変と信じられてきた元素の壊変を伴う、真空放電や化学反応に比べエネルギーが桁違いに高い、偶然事象だ。放射能のもたらす高エネルギー粒子と物質の相互作用の研究が原子核の発見に結実したが、これは原子が安定に存在し得ないことを意味した。	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	量子の発見	物質が光を放出したり吸収したりする現象においても古典物理学は窮地に追いこまれていた。プランクは熱した物体のだす光の色の問題で光はエネルギーの定まった塊であると考えざるを得なくなり、マクスウェル理論との折り合いに悩んだ。光は粒子なのだろうか？	江沢　洋
9	量子力学の世界	原子や分子の内部に入るとニュートンの力学は破綻する。その世界の基本法則として1926年に量子力学が発見された。ここでは電子はとびとびのエネルギーしかとれないが、しかし状態を連続的に変える。この不連続と連続のオ盾を止揚するのが重ね合わせの原理である。	同　上
10	量子力学の構造	重ね合わせの原理の一つの数学的表現が物質の波動性である。波はさまざまの形をとり得るが、原子のとびとびのエネルギーは定常波に対応する。そして、初期条件に応じたそれらの重ね合わせが実験し、重ね合わせの位相が時間とともに連続的・因果的に変化してゆく。	同　上
11	量子力学的観測とアインシュタインのパラダイス	電子は、状態変化こそ波動で表現されるが、個々に観測すれば粒子として立ち現われる。その集積は、しかし、状態変化の波動性を反映して干渉や回折の模様を示す。こうした波動と粒子の二重性を媒介するのが確率解釈である。その含意を追うと奇妙なパラドクスに出合う。	同　上
12	角運動量の量子力学	原子構造の探究への準備、角運動量とは、太陽系の惑星の運動で基本的だったケプラーの法則に現われる面積速度に相当する。原子ひ小さな太陽系なので、そこで惑星に当る電子の運動を調べてゆく上で角運動量が基本的に重要である。量子力学でも、このことに変りはない。	同　上
13	原子の構造	量子力学によって、原子の構造は歯車仕掛けの機械などと同じように精密に計算できるようになり、周期律をはじめとして諸性質の謎が解けた。原子たちが互いに結合して分子を作る仕組みもわかり、化学は物理学の翼下に入った。いまや分子の設計も可能である。	同　上
14	エネルギー準位と物質の性質	電子と原子核が多数あつまった系の物理的な振舞いも量子力学で計算し予言することができる。そのとき、系のエネルギー準位は一般に極めて密に並ぶが、ところどころに隙間ができることがある。こうした準位の並び方と、その上への電子の分布のしかたで物質の特性がきまる。	同　上
15	素　粒　子	原子・分子・固体の構造を解明した量子力学も原子核の内部には適用できないのではないかと疑われた時期がある。ての　も中性子の発見と中性微子の仮説で解けた、湯川秀樹は原子核をひとかたまりに結び合わせている力の特質から新粒子の存在を予言し素粒子論の扉を開いた。	同　上

＝現代物理学Ⅱ＝（ＴＶ）

〔主任講師：江沢　洋（学習院大学教授）〕

全体のねらい

現代物理学Ⅰで得た量子力学的世界に対する理解を、実験などヴィジュアルな題材を通して一層ふかめる。最先端の研究をしている研究室を訪問して“現代”に触れるようにしたい。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	結晶	物資は粒子の集まりだという認識が現代物理学の出発点である。それらの粒子は、原子なら直径にして百億分の一メートル、原子核ならその十万分の一、そんなに小さい粒子たちのことがどうしてわかったのか？　雪の結晶からはじめて考えを進めてみよう。	江沢　洋（学習院大学教授）
2	電子と原子核の発見	電子も原子核も、机の上にのる小さな手づくりの実験装置で発見された。しかも古典物理学をあやつって！　どんな実験とどんな論理がつかわれたのか振りかえって、これからの勉強の足場を固めよう。	同上
3	光の本性 (1)	光は波であるといわれ、また粒子であるといわれて、歴史上に争いが続いてきた。それを現代の眼で見たらどうなるか？　実験をしながら考える。まず、光の波動性から、それは何を意味するか？　証拠は？	同上
4	光の本性 (2)	光には、もう一つの顔がある。粒子性である。それは何を意味するのか？　どうすれば、その顔は見られるのか？　粒子の顔をもちながら波動としても立ち現われて干渉や回折を示すということが、どうして可能なのか？　現代の技術でその実態をあばく。	同上
5	電子に見る粒子性と波動性	電子も、しかるべく舞台を設定すれば波のような振舞いを見せてくれる。では、そのとき粒子らしさはなくなってしまうのか？　最近、技波がつくれるようになったので、それを利用して美事な実験をお目にかける。	同上
6	量子力学の発見	電子の、そして極微の世界の他の粒子についても、粒子性と波動性をひとつかみに統一して捉えるのが量子力学である。これが、原子や分子の内部ではニュートンの力学にとって代るのだ。しかし、まったく縁が切れるわけではなく、ニュートン力学も新力学発見への道案内になる。	同上
7	量子力学的な運動とは	原子のなかでの電子の様子を表わすと称して雲のような絵がよく描いてあるが、少しも電子が運動しているように見えない。量子力学の世界にも運動があらわになる現象もある。この世界のいろいろの運動をコンピューター・アニメーションでお目にかけよう。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	定常状態とエネルギーの不連続性	電子力学的粒子の運動を波動で表わすと、限られた空間に閉じこめられた運動は特定のとびとびのエネルギー値しかとれないことが導かれる。この命題こそ、原子が光を特定の波長でのみ出す理由であり、原子の安定性と個性の根元である。この重要な命題はどう導かれるのか？	江沢　洋
9	原子と分子	原子の構造と化学結合の仕組みを明らかにしたことは量子力学の大きな成果の一つである。原子や分子のなかをX線や電子線で見るというのは、どうすることか、そこに見える姿は何をわれわれに語るか。	同上
10	温度と物性	温度というものは、原子の世界のざわめきの指標である。温度を下げてゆきながら原子たちのざわめきの変化を聴いてみよう。そのとき電気抵抗などの物性はどう変ってゆくか？　極低温に達すると電気抵抗がストンと0になる。これは超伝導状態への相転移である。	同上
11	固定の中の電子	現代のエレクトロニクスは半導体の量子力学的な特質をフルに利用している。特に、強い電場をかけてその表面に電子たちを押しつけた系（MOS素子）は、電子の密度を人が意のままに制御することのできる理想的な「実験室」である。その基礎物理から応用まで。	同上
12	極低温	極低温で液体ヘリウムが相転移をおこし粘性を失なう現象。そのとき、流体の常識に反するさまざまの振舞が見られる。これらも、しかし、ちゃんと量子力学の法則にしたがい、起るべくして起っていることなのである。そうわかるまでには何十年もかかったが。	同上
13	相転移	固定や液体は、温度をゆっくり変えてゆくと体積や電気伝導度などの性質がなだらかに変化する。しかし、水が氷になるときのように、特別の温度では性質がガラッと変わる。これが相転移である。そのとき原子の世界では何が起っているのか？　アニメーションを混えて。	同上
14	高エネルギー物理(1)	素粒子の内部構造や相互作用を研究するには、それらを高いエネルギーで衝突させて反応を見る。エネルギーが高いほど微細な世界が見えるというのが物資の波動性の帰結である。そのため年々、加速器が巨大化する。最近完成した電子と陽電子の衝突型大加速器を見る。	同上
15	高エネルギー物理(2)	物質の究極的構成要素の研究はどこまで進んだか。これから何を問題提起し、どう自然に迫ってゆくか、新しい加速器による実験の出発のときに、歴史的展望に立つ研究の抱負をきく。	同上

＝物質の科学・化学基礎＝（TV）

主任講師：田丸謙二（東京理科大学教授）
主任講師：平川暁子（放送大学教授）

全体のねらい

この世に存在する物質は千差万別である。ハイテクに使われる新素材も、生物もすべて物質である。いろいろの原子、分子が作る気体、液体、固体がどのような性質を示し、どのように調べられ、それがどのような基本的なものとして理解されるかについて、系統的に取扱いながら組立てられたものがこのコースである。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	化学の面白さ	化学は物質の反応・構造・物性を知る分野であり、化学を物質の科学と呼ぶ所以である。地球も宇宙も、動物も植物も物質であり、その種類は1,000万種余、ナイロンも、シリコン半導体も物質の一つに過ぎず、これからの発展は無限である。ここに化学の面白さがある。	井口洋夫（分子科学研究所長）
2	気体の巨視的性質	われわれがよく知っている熱気球の上昇、風、雨、音の伝播、オーロラ等の諸現象が、気体の温度や圧力の違いによる膨張や密度の変化、気体の凝縮、気体分子が運動をしていること、また励起した分子の発光などによることなど説明をする。	正畠宏祐（分子科学研究所助教授）
3	気体分子の運動論	気体中の分子の運動を気体分子運動論を用いて説明する。分子の速度分布を測定する実験を行ない、分子線や質量分析装置などを紹介する。原子・分子の立場からみた気体の巨視的性質がどのように説明されるか、気体の凝縮現象などについても検討する。	近藤保（東京大学教授）
4	原子・分子の世界	原子・分子の大きさ、重さについて基本的な理解を与え、それらの振舞が古典力学とは本質的に異る量子力学の法則に従うこと。その具体的現れとして波動性と粒子性の2面性、ボーズ粒子とフェルミ粒子の区別、さらにトンネル効果などにふれる。	廣田栄治（総合研究大学院大学副学長） 平川暁子（放送大学教授）
5	原子の構造・分子の構造1	原子の中の電子の配置、とくに原子軌道、エネルギー準位の概念を詳しく説明する。スピンの役割にもみれる。分子形成に重要な混成軌道の概念を導入する。これら原子についての基礎の上に分子の中の化学結合を概観する。共有結合とイオン結合、一重結合と多重結合等を説明する。さらにベンゼン等について非局在軌道をも紹介する。次いで分子の振動、回転運動をとりあげる。さらに分光学的あるいは回折法による分子構造の決定を論ずる。	同上
6	原子の構造・分子の構造2		
7	活躍する分子	4～6回の基礎の上に、分子に関する最近のトピックスをいくつかとりあげる。例えば化学反応中間体の分子構造、大気汚染の原因となる分子、量間分子、プラズマの中の分子、生体中で活動する分子などである。	廣田栄治 斎藤修二（名古屋大学教授） 北川禎三（分子科学研究所教授） 平川暁子

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	原子・分子の衝突と反応	化学反応の分子ダイナミックスの基本を解説する。反応速度定数と反応断面積の定義、化学反応はどの位早く進むか、活性化エネルギー、反応の遷移状態、反応のポテンシャル曲面、その上でのダイナミックス、化学反応の統計性について説明する。	土屋荘次 （東京大学教授）
9	化学変化とエネルギー (1) 自由エネルギー	ある化学反応の式を書いたとき、変化がどちらの方向へ自発的に進みうるかは、左辺の物質群と右辺の物質群との間の自由エネルギーの差で決まる。ただしその変化が現実に進むかどうかは速度論の問題である。この事情について解説を加える。	渡辺　啓 （東京大学教授）
10	(2) エネルギーの変換	電気エネルギーと化学エネルギー、あるいは光エネルギーと化学エネルギーとの相互変換はさまざまな場面で必要になる。電池など人工的な系、また生体内反応や光合成など天然の系から身近な例をいくつか選んで、その仕組みと原理を解説する。	渡辺　正 （東京大学助教授）
11	相平衡と相転移	気・液・固体の3態と3重点および臨界点を示し相律を説明する。Clausius-Clapeyronの式を導き1次相転移を理解する。2次相転移も説明する。水・炭素・ヘリウムなどの相図を例示し、水の3重点セル、液体ヘリウムのλ転移などを見せる。超臨界状態もふれる。	阿竹　徹 （東京工業大学 助教授）
12	液体と中間相	1成分液体を、構造モデル、分子間ポテンシャルなどに基づいて説明する。気体および固体との類似点と相違点を指摘する。固体と液体の中間相的性質を持つ液晶と柔粘性結晶について分子間力と分子運動の点から理解する。種々の実験、測定法などを紹介する。	同　上
13	水と溶液	前2章の典型的な物質と較べて特異な性質を示す水と氷の構造と物性を説明する。ついで2成分液体における溶解現象の熱力学を理解する。極性・無極性、理想溶液と実在溶液、溶媒和、電解質溶液、沸点上昇と凝固点降下などについて考える。臨界混合溶液もふれる。	同　上
14	固体の化学　(1)	今日、技術の世界で材料と呼ばれるものの多くは固体である。原子・分子の理解のうえにたって固体を見てみよう。その第1回は化学結合を通してみた固体である。特徴のあるいくつかの代表的な固体をとりあげてその結合の性質、構造などを概観する。	小谷正博 （学習院大学教授）
15	固体の化学　(2)	固体の第2回は固体のいろいろな性質に注目して、それらがどのようにして発現してくるのかを考えることにする。色や屈折率などの光学的性質、絶縁物と電導体といった電気的な性質などが固体を構成する原子、分子の性質とどう関連しているのかを考える。	田丸謙二 小谷正博

＝物質の科学・反応と構造＝（ＴＶ）

主任講師：田丸謙二（東京理科大学教授）
主任講師：平川暁子（放送大学教授）

全体のねらい

ものを作る反応というものはどのようにして起こるものか、欲しい構造をもったものはどのようにして作ることが出来るのか、無機、有機物質から生体物質にわたって、それらの物質の持つ構造と反応性の相関について基本的問題について具体的例をあげながら説明をする。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	物質の面白さ	いろいろの物質は各種の構造をもっている。そしてその構造であるが故にさまざまの物性を示すことになる。物質の安定性、平衡、非平衡、相変態など、構造から見た物質の面白さについて、金属中の水素や超伝導性金属酸化物などを例にとり、考える。	田丸謙二（東京理科大学教授） 深井有（中央大学教授）
2	化学反応の機構	化学反応の速度は早い、遅いいろいろあるがそれらはどのように測定されるか、反応温度についての依存性（活性化エネルギー）、素反応、複合反応、反応中間体、連鎖反応、律速段階、ダイナミックな系の特徴、溶液反応の特性などについて説明する。	土屋荘次（東京大学教授）
3	われわれの周辺の化学反応	われわれの周辺で起こる化学反応の例をいくつかとり上げて、反応の起こり方について説明する。ものは何故燃えるのか、燃焼と爆発とはどう異なるのか、排気ガス（NOx, SOxなど）、大気汚染などの環境問題からさらに高層大気の化学反応、オゾン問題を説明する。	土屋荘次 御園生誠（東京大学　教授）
4	金属錯体の構造と反応性	金属が各種の配位子と錯体を作ると、その構造によって、極めて特徴的な反応性を示す。この分野の基本的説明をし、これらの化合物の工業的応用や生体内で重要な役割りを果たしている金属錯体、酵素や、光合成のクロロフィルなどについて述べる。	干鯛眞信（東京大学教授）
5	固体触媒作用	表面のない固体はないが、表面はバルクと異なった性質を示す。各種表面の構造と反応性の相関などについて説明し、固体表面での化学反応から生まれる触媒作用が、化学工業はもとより、エネルギー・資源や環境など人類の将来にも重要な役割を担っている。	田丸謙二 岩沢康裕（東京大学教授） 御園生誠
6	炭素化合物の多様性	炭素－炭素結合の安定性、炭素－炭素結合のあり方。有機化合物の表現のしかた。炭素と炭素以外の元素との結合。有機化合物の名前の付け方。以上の項目について初歩的に平易に述べる。	丸山和博（京都大学教授）
7	有機化合物の変化	概説。石油の化学組成。燃焼。反応の型。有機化合物の構造と反応性。光による有機化合物の励起。 以上について、かなり詳しく述べ、有機化合物の示す諸性質の初歩的な理解が得られるようにする。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	炭素－炭素結合の作り方	炭素と炭素とをつなぐ方法。官能基化合物を作る方法。 以上の二つの項目に分けて有機合成の初歩に必要な基本的な諸反応を述べる。	山本嘉則 （東北大学教授）
9	有機化合物のデザインと生体構成物質	前半と後半に分けて、前半を有機化合物のデザイン、後半を生体を構成する有機化合物として述べる。前半で実際の標的化合物の合成反応の組み立て方を述べる。後半では生体を構成する有機化合物の構造について簡単に触れる。	山本嘉則 丸山和博
10	高分子の合成	高分子化合物は自然界の中で生命活動の本質を担うとともに、多様な材料としてわれわれの生活に不可欠のものとなっている。ここでは高分子にはどんなものがあるかを概観し、高分子がどのような反応によって生成するか、その特徴について述べる。	井上祥平 （東京大学教授）
11	高分子の構造	高分子は、そのモノマー単位の構造、その連結の仕方で生じる立体規則性等による一次構造からはじまって、二次構造、三次構造、高次構造と複雑な構造を形成し、それらが巨視的性質と深く関係している。分子構造モデル、各種顕微鏡を使って具体的に説明する。	西敏夫 （東京大学助教授）
12	高分子物性 (1)	高分子鎖の形態は分子の内部回転のためにある温度以上では統計的な性質を持っている。これに基づいて、分子鎖の形態、エントロピー、ゴム弾性、ゲルの物性などを分子論的に解明することができる。簡単なゴム弾性、ゲルの相転移の実験も予定している。	同上
13	高分子物性 (2)	高分子に現われる顕著な物性に粘弾性がある。その現象論と分子論について説明する。一方、最近は機能性高分子、高性能高分子が注目されてきているので、超高強度高分子、耐衝撃性高分子、導電性高分子、圧電性高分子などのうちからいくつかを紹介する。	同上
14	生体高分子の特異的な形と相互作用	生体物質は大部分有機化合物であり、高分子のものが多い。その上にその構造は遺伝情報に従って合成され機能するものである。そのために主として構造を保つ機能を示す繊維物質、細胞膜にともなって機能する物質、大部分の酵素などのように遊離の物質として機能するもの、などは特有の構造を示す。	野田春彦 （創価大学教授）
15	生体内の化学反応	酵素反応と抗原抗体反応は非常に狭い特異性を示す。最近では細胞と細胞の相互作用の特異性も関与する物質の性質から説明ができるようになりつつある。これらの特異性と分子の形の関係、酵素反応で反応の活性化エネルギーが下げられる理由などを考える。	同上

＝物質の科学Ⅱ＝（TV）
—ミクロからみた物質—

〔主任講師：上村　洸（東京理科大学教授）〕

全体のねらい

物質の示す様々な巨視的性質をミクロの法則で如何に解明できるかを、量子論の初歩的な段階から出発して、分り易く講義する。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	物質の構成要素 ～ 原子	1. 水素原子、問題の定式化 2. 角運動量と球関数 3. 水素原子のエネルギー	上村　洸 （東京理科大学教授）
2	原子から分子へ	1. 多原子原子、1電子近似の取り扱い 2. 原子構造と元素の周期率 3. 分子の形成－水素分子	同　上
3	原子から結晶へ	1. 結晶構造 2. 結晶中の電子の状態 3. ブロッホ関数	中尾憲司 （筑波大学教授）
4	結晶の中の電子	1. バンド構造 2. バンド構造の別の見方 3. バンド構造と物質の分類	同　上
5	化学結合と結晶の分類	1. 金属の自由電子モデル 2. 化学結合と凝集エネルギー 3. イオン結合 4. 共有結合 5. 金属結合 6. ファンデルワールス結合	上村　洸 中尾憲司
6	半導体	1. 半導体の特徴 2. 正孔 3. 電子と正孔の分布 4. 不純物半導体	中尾憲司
7	固体の伝導現象	1. 電気伝導 2. ホール効果と磁気抵抗効果 3. 強磁場中の電気伝導とエネルギー状態 4. 量子ホール効果	川路紳治 （学習院大学教授）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	光に対する性質	1. 光の性質 2. ローレンツ振動子模型 3. 物質の光学的性質と電子状態	国府田 隆夫 （東京大学教授）
9	半導体素子の基礎	1. 少数キャリアの注入　2. pn接合 3. pnp接合型トランジスター　4. トンネル・ダイオード　5. 金属・半導体接合ダイオード（ショットキー・ダイオード）　6. フォト・セル、太陽電池とフォト・ダイオード　7. 発光ダイオードと半導体レーサー　8. 電界効果トランジスター	川路 紳治
10	磁性の起源	1. 電子の磁気モーメント 2. マクロな磁気モーメント 3. 自由原子・自由イオンの磁気モーメント 4. 閉殻の電子による反磁性 5. 原子の固有磁気モーメントと常磁性 6. 伝導電子による磁性	近 桂一郎 （早稲田大学教授）
11	磁性体	1. 強磁性体の磁化 2. フェライトの自発磁化 3. 中性子回折と磁気構造 4. 交換相互作用 5. 自発磁化の温度変化	同上
12	磁性体と光	1. 磁性イオンの光吸収 2. 結晶場遷移 3. 結晶場と軌道角運動量の消失 4. 強磁性体の光吸収と偏光 5. 磁気光効果 6. 磁気光効果の応用	同上
13	超伝導	1. はじめに 2. 超伝導現象 3. 位相と干渉 4. 粒子数と位相 5. 電子対 6. なぜ対か	小林 俊一 （東京大学教授）
14	固体の表面構造	1. はじめに 2. 表面構造を探る 3. 半導体清浄表面の構造	塚田 捷 （東京大学助教授）
15	表面の電子状態	1. 表面のバンド構造 2. 電子の密度分布と仕事関数 3. 電子分光法 4. 吸着現象	同上

＝ 物 質 の 科 学 Ⅲ ＝（TV）

〔主任講師：野田春彦（創価大学教授）〕

全体のねらい

我々の見る物質は100種に足りない元素の組み合わせであるが、ほとんど無限ともいえる種類のものが発見され、それについての研究が進んでいる。古くから知られている物質の性質について新しい理解ができることもある。これらをできるだけ広範囲に取り入れて、それを基礎的な理解につなげようというのがこの科目の狙いである。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	結晶の成長	1. はじめに　2. 環境相　3. 駆動力 4. 核形成　5. ものの運ばれ方　6. ラフな界面とスムーズな界面　7. 渦巻成長 8. 結晶の形を支配するもの	砂川一郎 （東京大学教授）
2	半導体超格子	1. はじめに 2. ヘテロ構造と選択ドーピング 3. 量子井戸と半導体レーザー 4. 共鳴トンネル効果とその応用 5. まとめ	覧見博義 （日本電気KK光基礎研究部長）
3	金属多層膜	1. はじめに 2. 非平衡物質とは 3. 多層膜（人工格子）の生成 4. Fe－Mg 人工格子 5. 人工格子の利用	新庄輝也 （京都大学教授）
4	アモルファス半導体	1. アモルファス半導体とは 2. アモルファス半導体の種類と製法 3. アモルファス半導体の物理的性質 4. アモルファス半導体の応用	丸山英一 （日立基礎研究所長）
5	高分子鎖の形態と物性	1. 孤立した一個のポリマー分子の形態 2. ポリマー鎖の形態の実験的研究 3. 高分子鎖の屈曲性 4. 高分子鎖の形態と高分子物性	永沢満 （豊田工業大学教授）
6	繊維生体高分子	1. タンパク質繊維 ●ペプチド鎖の寸法　●ペプチド鎖の二次構造　●生体の繊維 2. 糖を含む生体の長鎖状分子 ●核酸　●キチンとセルロースとデンプン	野田春彦 （創価大学教授）
7	粒状生体高分子	1. 粒状タンパク質 ●粒状タンパク質の折り畳み　●活性部位 ●タンパク質の結晶 2. 多糖の粒状分子 3. 膜 ●ミセルと単位膜　●膜とタンパク質	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	機能性高分子	1. 高分子の機能 2. 機能性高分子とは 3. イオン交換樹脂 4. 感光性樹脂 5. 電気的機能 6. 医用高分子	井上祥平 （東京大学教授）
9	コロイド (1)	1. コロイドの定義と特性 2. コロイドの分類 3. ミセルコロイド概論 4. 界面活性剤のはたらき(I)－溶液物性 5. 界面活性剤のはたらき(II)－界面物性	北原文雄 （東京理科大学常務理事）
10	コロイド (2)	1. 粒子コロイドの分類 2. 粒子コロイドの調整 3. 粒子コロイドの特性 4. 粒子コロイドに対する無機電解質の効果－DLVOの理論 5. 粒子コロイドに対する界面活性剤の効果 6. 粒子コロイドに対する高分子の効果	同上
11	膜	1. 界面膜と独立膜 2. 生体膜と膜透過 3. 膜の機能 4. ろ過による物質分離 5. 膜透過と逆透過 6. 電解質の膜透過と膜電位	中垣正幸 （京都大学教授）
12	ゼオライト	1. 骨格構造 2. 分子篩作用とガス吸着 3. イオン交換性 4. 触媒作用	高石哲男 （豊橋技術科学大学教授） 堤和男 （豊橋技術科学大学教授）
13	セラミックス	1. セラミックスの進歩 2. セラミックスの種類 3. セラミックスの強さともろさ 4. セラミックスをつくる 5. セラミックスの微細構造と高温強さ 6. セラミックスはどこまで強くできるか	沢岡昭 （東京工業大学教授）
14	超微粒子	1. 粒子の大きさ　2. 超微粒子と超微粉 3. 超微粒子の製法　4. 不活性ガス中での蒸発 5. バルクとの違い　6. 久保効果 7. クラスターの実験　8. 技術への応用	上田良二 （名城大学客員教授）
15	情報生体高分子	1. 蛋白質と核酸 2. 遺伝子DNAの構造と遺伝情報 3. 遺伝情報の発現 4. 遺伝子操作 5. 蛋白質工学	三浦謹一郎 （東京大学教授）

＝物質とエネルギー＝ (R)

〔主任講師：池上雄作（東北大学教授）〕

全体のねらい

自然界を形づくっている物質エネルギーの科学でもっとも基本的なことがらを学習する。とくに化学熱力学、量子化学、分子分光の基本的な事項を解説し、物質とエネルギーの不可分のかかわり合いを学ぶことによって自然への理解を深める。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	エネルギーの形態	広い視野から“仕事をする能力”としてのエネルギーのいろいろな姿をとらえたあと、物質とエネルギーのかかわり合いを述べ、エネルギー略史を概説する。	池上雄作（東北大学教授）
2	物質の理解	広い自然界にある多様な物質を理解するには、元素、原子、イオン、分子といったミクロの世界に立ち入って物質の構成を知る必要がある。物質と化学式を結んで物質の構成、物質の状態変化、結合の力に関する考え方を簡潔にまとめておこう。	同上
3	熱・仕事・エネルギー	物質とエネルギーとに関する基礎科学の中に化学熱力学とよばれる分野がある。これは、構造論、反応論とともに、化学の理論体系における大きな柱の一つになっている。本章では、化学熱力学の基本として、系の概念、仕事と熱、内部エネルギーと熱力学第一法則から出発し、理想気体の膨張圧縮について可逆過程を説明する。	玉蟲伶太（福島大学教授）
4	熱容量と反応熱	物質の熱的性質として重要な熱容量の概念と、それに関連してエンタルピーとよばれる物理量を導入し、物質の状態変化や化学反応に伴う熱エネルギーの移動やエネルギーの加成性について解説する。	同上
5	物質構造とエンタルピー	物質のさまざまな変化に伴うエンタルピー変化の中で、とくに生成エンタルピーと結合エンタルピーとを取り上げて、化合物の構造や化学結合とエンタルピー値との関連について考察する。また、熱エネルギーを測定する方法の原理を説明する。	同上
6	変化の方向	前章では、系がある変化を行う際に、系と外界との間にやり取りされるエネルギーについて述べた。その取り扱いの中心は、エネルギー保存に関する熱力学第一法則であった。本章では与えられた条件の下で、物質はどのような方向に向かって、どの程度まで変化する可能性をもっているかについて検討する。	同上
7	自由エネルギーと化学平衡	エネルギーとエントロピーからギブス自由エネルギーを導き、化学ポテンシャルまで解説する。つづいて、二、三の化学反応系での反応の進行の可能性を予測するための熱力学量を取り上げ、平衡条件を導く。	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	エネルギー量子の概念	以下4回にわたってミクロの世界のエネルギーと化学構造との結びつきを解説する。第1回目は、プランクの量子仮説、光量子説、ボーアの原子模型、光と電子の粒子性と波動性について順次説明し、エネルギー量子の概念を理解する。	米沢　貞次郎 （近畿大学教授）
9	原子の電子状態	"とびとびのエネルギー値"をもつ電子の運動状態を表す波動方程式について述べ、これから明らかにされた水素型原子の電子状態の特徴、つづいて複雑な原子の電子配置を整理して解説する。	同　　上
10	化学結合と電子状態	化学結合の基本例である水素分子の量子論的な取り扱いと炭素の混成軌道について解説する。つづいてエチレンや共役二重結合をもつ分子のπ電子の分子軌道法による取り扱い方を取り上げる。	同　　上
11	電子構造と化学反応性	分子の電子構造に対する量子論的取り扱いは構造を理解するのに必要であるだけでなく、反応の進み方を解釈するのに極めて有用であり、フロンティア電子理論もその一つである。電子構造と化学反応性について例とともに解説する。	同　　上
12	電磁波とスペクトロスコピー	光と電波で代表される電磁波は宇宙線からラジオ波まで広い周波数範囲にわたり、$E = h\nu$ のエネルギーをもつ。電磁波の性質について、つづいて物質の発光や光の吸収が物質のエネルギー準位と密接な関係があることを説明し、スペクトロコピーを概説する。	池上　雄作
13	紫外・可視光の吸収スペクトル	多くの物質は紫外線や可視光線を吸収してその物質に特有なスペクトルをみせ、可視光の吸収が物質の色をつくりだす。光の吸収や発光と化学構造との関係を代表例とともに解説しておこう。	同　　上
14	赤外吸収スペクトル	可視光線より波長が長く、マイクロ波よりも波長の短い0.75 μmから数mmの波長範囲の光を赤外線とよぶ。赤外線は温度をもつすべての物体から放射される熱放射でもあり、熱作用が大きいために熱線ともいわれる。この領域の光は化学結合の振動や分子の回転と共鳴して多彩なスペクトルをみせるが、とくに2.5 μmから25 μmの波長域の吸収スペクトルは、物質の鑑識や分析、化学構造の解明などに便利に利用されている。	同　　上
15	化学反応とエネルギー まとめ	化学熱力学、量子論、スペトロスコピーの基礎について、物質の科学にとってもっとも基本的な部分を解説してきた。本章では化学反応とエネルギーについて、ややちがった角度から、反応座標と自由エネルギー、および電池のエネルギーを取り上げて補足的に説明し、最後にエネルギーの大きさについて概観してまとめとしたい。	同　　上

＝力とエネルギー＝（TV）

〔主任講師：戸田盛和（東京教育大学名誉教授）〕

全体のねらい

物理学を学ぶには、まず力学を勉強し、ついで電磁気学へ進むのがふつうである。この「力とエネルギー」は力学にあてられる。ニュートンの運動の法則にもとづいて、物体粒子の運動、流体の運動を考え、分子の力学的運動を考慮して熱現象を扱う。回転運動、電子の運動なども取扱う。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	運動の法則	1. ベクトル 2. 運動の法則 3. いろいろの運動 4. 力の単位	戸田盛和（東京教育大学名誉教授）
2	微分・積分	1. 速さと距離 2. 微分と積分 3. 関数の微分 4. 関数の積分	同上
3	運動の積分	1. 運動方程式 2. いろいろの運動	同上
4	惑星の運動	1. ケプラーの法則 2. 万有引力 3. 平面内の極座標 4. ケプラーの法則の導出	同上
5	仕事とエネルギー	1. エネルギーとは 2. エネルギー保存の法則 3. エネルギー積分 4. 仕事の単位	同上
6	熱とエネルギー	1. 物質のもつエネルギー 2. 気体と温度 3. 気体と分子の運動 4. 熱量と仕事 5. 熱力学の第1法則 6. 力学と確率 7. 気体の膨張 8. エントロピー 9. 気体分子運動論と統計力学	同上
7	熱力学	1. 熱現象の基礎法則 2. 熱機関 3. 絶対温度 4. エントロピー	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	力の釣り合い	1. 力の釣り合いの条件 2. 平行な力	戸田盛和
9	流体	1. 静止流体 2. 流体の定常流	同上
10	波動	1. 波動方程式 2. 波の干渉 3. 波のエネルギー	同上
11	地球の回転	1. 回転座標系 2. 地球を基準とする座標系	同上
12	回転運動	1. 回転のエネルギー 2. 角運動量 3. いろいろの回転運動	同上
13	荷電粒子の運動	1. 磁場 2. 一般のローレンツ力 3. 電流が磁場から受ける力 4. 電磁誘導	同上
14	高速粒子の運動	1. 相対論的な質量 2. エネルギーの式 3. 光と圧力と光の粒子 4. 質量エネルギーと光の圧力	同上
15	最近の話題から	1. 力学系の図式解法 2. 非線形振動 3. 増幅される振動 4. 平面内の粒子の運動	同上

＝生命のしくみⅠ＝（TV）

― 生化学のしくみ ―

〔主任講師：木原弘二（慶應義塾大学教授）〕

全体のねらい

生物はさまざまな物質からできている。これらの物質の働きによって、生物の活動が支えられている。この点をいくつかの例によって示し、これらの生体内物質の特徴的な性質と機能を説明し、生化学の基礎的な内容を紹介する。特別な予備知識は必要ではないが、初歩的な化学の用語を理解できることが望ましい。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	生体に含まれる物質	タンパク質、脂質、糖など、生物をつくり上げている物質について紹介し、これら有機化合物の特徴と構造について説明し、とくにタンパク質の構成成分であるアミノ酸をとりあげる。	木原弘二（慶應義塾大学教授）
2	生体の構成成分	生体物質のうち高分子物質であるタンパク質、核酸、多糖などでは、その3次元的な形が機能と密接に関連している。その形が化学構造によってどう定まるかを、原子の大きさと原子間の結合とから考える。	野田春彦（創価大学教授）
3	栄養のとりこみ	食物は消化されて、さまざまな化学変化を受け、身体の成分として利用されたり、エネルギー源として分解されたりしている。これらの説明を通して、酵素の働き方を述べる。	木原弘二
4	代謝 ―遺伝病 (1)―	身体の中で起こっている化学変化は、すべて酵素の作用によって進行しているが、この酵素の欠陥により起こるフェニルケトン尿症・ガラクトース血症など遺伝性の病気について紹介する。	同上
5	タンパク質の構造	酵素の主要成分はタンパク質だが、他にもヘモグロビンなど、酵素ではないタンパク質が重要な働きをしている。ヘモグロビンの分子が遺伝的に異常な鎌型赤血球貧血症について述べる。	同上
6	呼吸のしくみ	生命活動を遂行するエネルギーの源泉は、酵素による反応段階を経て、糖は脂質の酸化的分解によって確保され、その中間産物は、他のいろいろな成分の合成の素材として利用されている。	同上
7	エネルギーの利用	エネルギーはＡＴＰの形をとって、細胞内への物質の吸収、いろいろな物質の合成などのほか筋肉の収縮、神経における情報伝達など、細胞のさまざまな活動のために利用されている。	丸山工作（千葉大学教授）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	タンパク質合成	成長途上の幼い個体では、身体の成分として新しくタンパク質を合成しなければならない。しかし成長した個体でも、毎日タンパク質が合成されている。その反応のしくみについて述べる。	木原弘二
9	調節	身体の各器官は、それぞれの独自の機能を果たしているが、つねに相互の活動状況が個体の維持に都合のよいように調整されている。主として、タンパク質合成の制御について述べる。	同上
10	脂質 —遺伝病 (2)—	細胞が合成する成分には、身体や細胞の構造に関係した、糖や脂質に属する物質がある。その物質の正常な分解に支障がある遺伝病として、粘液多糖類蓄積症、糖脂質蓄積症を紹介する。	同上
11	生物界における元素の循環	すべての生物界の物質は、太陽の光のエネルギーを、植物が利用して、二酸化炭素を糖に変える光合成反応にもとづいてつくり出されたものである。この反応と窒素化合物の生物界での利用、分類の過程について述べる。	同上
12	細胞と細胞膜	細胞には、いくつかの構造体が含まれ、それぞれ機能を分担しているが、その成分の７０％は水である。水の特別な性質、細胞の膜との関係を紹介し、改めて細胞の働きについて整理する。	長野敬 （自治医科大教授）
13	ＤＮＡの複製	タンパク質の構造を指定しているDNAは、細胞の分裂とともに、娘細胞に同一分子が均等に伝えられなければならない。DNA分子の合成のしくみについて解説する。	木原弘二
14	遺伝子工学	最近話題となっている遺伝子工学の現状を紹介して、特定の遺伝子を確認できた例を説明する。また、この技術を利用して、ヒトの遺伝病の原因となる欠陥遺伝子を明らかにして、胎児診断に応用されていることを述べる。	同上
15	物質系としての生命	全体のまとめとして、生命現象は、生物特有のタンパク質、DNAなどの物質の存在なしには考えられないこと、その機能の遂行に必要なエネルギー、および情報の役割について述べる。	木原弘二 長野敬 野田春彦 丸山工作

＝生命のしくみⅡ＝（TV）

〔主任講師：木原弘二（慶應義塾大学教授）〕

全体のねらい

“生命のしくみ ― 化学の立場Ⅰ”で一通り学んだ点を基礎知識として、これらの知識の根拠を改めて確かめ、また、補充発展させることを目的としている。主に、個々の独立した問題を取り上げて、基礎的な紹介では触れることのできなかった点を検討し、現代の生化学が直面している問題を二・三紹介する。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	物質観と生命観	物質についての考え方をギリシャ時代から中世、近代へと辿り、一方、生物については生命に特有な力やしくみが想定されてきたことを紹介し現代の考え方と対比する。	木原弘二（慶應義塾大学教授）
2	有機化学の確立	１８世紀末頃から、有機化合物が多数発見、確認された。その後、化学的な研究の発展にともない無機物質と有機物質の区別が明確化し、生化学研究の基礎となる。	同上
3	トリプトファンの発見	トリプトファンは必須アミノ酸の一つで、他のアミノ酸よりもかなりその発見が遅れた。しかし、このアミノ酸の存在を示す反応は一世紀ほど以前から知られていた。その発見が遅れた理由を示して、物質を確認することの重要さについて述べる。	同上
4	尿酸と痛風	尿酸は、精製され確認された最初の有機化合物の一つである。尿酸の血中濃度が高いと痛風の発作が起こる。ヒトという生物に特有な事情が発作の条件となっている。	同上
5	ビタミンC	私たちの健康な生活の維持には、適量のビタミンを摂取する必要がある。ビタミンCを例にして、生体が必要としている物質の働き、研究法の発展を紹介する。	同上
6	コラーゲン	ビタミンCの欠乏で、影響を受けるのはコラーゲンである。このタンパク質には特殊なアミノ酸が含まれ、標準的なタンパク質とはラセン構造の様子が異なってくる。	同上
7	ＡＢＯ血液型物質	赤血球の表面には、血液型を決定している物質が存在する。ＡＢＯの血液型は1801年に発見されたが、約半世紀後に血液型を決定する糖脂質が確認された。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	組織移植適合性抗原	臓器移植の際の問題に、移植片に対する拒絶反応がある。この免疫現象には白血球の細胞膜表面の抗原が関係している。抗原型にはA，B，C，DRの5群がある。	木原弘二
9	タンパク質の細胞内分解	タンパク質は、細胞全体が分解される以外に、細胞内部で絶えず分解されている。分解の過程で、それぞれのタンパク質は異なった速さで分解され消失していく。	同上
10	アンチ・トリプシン	白血球の働きのためにはタンパク質を加水分解する酵素が必要である。しかし分解の過剰な作用を抑止するタンパク質が血液中に存在し、調節が行われている。	同上
11	コレステロールの代謝	コレステロールは、細胞の膜の重要な成分であり、常に合成されている。しかし、合成と利用の均衡が崩れて、血液中の濃度が高くなると高コレステロール血症として障害を起こす。家族性高コレステロール血症についての最近の研究の成果を述べる。	同上
12	酵素活性の調節	酵素の活性は精妙なしくみで調節されている。肝でのグリコーゲンの分解と合成に関係する酵素系、および大腸菌のグルタミン合成酵素を例として解説する。	同上
13	ホルモン放出因子	ホルモンによる調節において、そのホルモンの産生放出は視床下部から放出される別のペプチドに支配されている。副腎皮質刺激ホルモンの放出因子などを解説する。	同上
14	ヘモグロビン遺伝子	DNA分子を切断し、適切に結合することによって、動物、特にヒトの遺伝子を純粋にし、その構造を究明することが可能となった。ヘモグロビン遺伝子の例を考える。	同上
15	生命と物質	講義全体を振り返り、物質についての研究から生命現象が究明されてきた成果をまとめる。このことを通して、生命とは何かについての考えを整理する。	同上

＝植物の生理＝　（TV）

〔主任講師：増田芳雄（帝塚山短期大学教授）〕

全体のねらい

植物は動物と異なり、特有の構造と機能をもっている。その機能の１つは自栄養、すなわち光合成で、これによって太陽エネルギーを蓄え、地球上の全生物の生命を支えている。植物の形態形成と生理的機能は遺伝子のもつプログラムに従って発現されるが、それは環境要因にも影響される。植物に特徴的な構造・機能の調節を焦点にする。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	植物生理その特性	地球上の全生物の生存を支える緑色高等植物のもつ特別な機能と構造に関する研究分野が植物生理学である。その研究の発展の歴史的展開を概観しながら植物の特性について考察する。	増田芳雄（帝塚山短期大学教授）
2	水分生理と気孔	植物は大量の水を吸収し、蒸散する。高い木のてっぺんまで、水は熱力学の法則により容易に上昇する。水の蒸散の制御は気孔により行われ、環境条件、植物ホルモンにより開閉運動は制御されている。	倉石　晋（広島大学教授）
3	光合成　Ⅰ　明反応	光合成過程の前半の部分、すなわち光の関与する過程（光エネルギーの捕足、電子の伝達、ATPの合成）のしくみ及びこの過程の行われる舞台となっている構造について理解する。	辻　英夫（京都大学教授）
4	光合成　Ⅱ　暗反応	光合成において、前章で述べた変化に引き続いて起こるCO_2固定の過程を理解し、このCO_2固定経路の多様化と環境との関係を考える。光合成産物の細胞内、組織間の移動についても理解する。	同　上
5	窒素固定とタンパク質合成	微生物との共生による窒素固定または土壌窒素の吸収から始まり、窒素の同化、タンパク質の合成、合成以後のタンパク質の会合と細胞内輸送に至るまでの過程を取り扱う。遺伝情報発現調節のしくみについても考える。	同　上
6	植物ホルモンの働き	植物が環境要因の影響を受けるとき、植物ホルモンが仲だちとなって植物の成長・分化を調節している。これら植物ホルモンの作用について概説する。	増田芳雄
7	遺伝的変異と生理的機能	高等植物のもつ遺伝子は形質を発現し、特定の形態を形成し、生理作用を示す。しかし、遺伝的形質は環境により発現し、植物は環境に適応した形態や生理作用を示す。	倉石　晋

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	細胞成長と細胞壁	細胞壁は植物細胞を取り囲む多糖類を主成分とする構造であり、植物の成長・分化にさいして大きな役割をはたしている。ここではとくに細胞の伸長成長における細胞壁の構造や性質の意味について考える。	山本良一（帝塚山短期大学教授）
9	器官相互作用	植物の個体としての調和のとれた成長を可能にする極性と器官相互作用という二つの現象について考える。	神阪盛一郎（大阪市立大学教授）
10	植物の運動	光などの環境刺激に反応して起きる植物の運動は屈性と傾性の二つに大別される。植物が刺激を感受して運動する機構について考える。	同上
11	細織培養と分化全能性	植物組織培養確立の歴史は、植物細胞が分化全能性を持つことの証明の歴史でもあった。その歴史的展開を振り返りつつ、植物における分化全能性について解説する。	原田宏（筑波大学教授）
12	形態形成と遺伝子発現	分化全能性を有する培養細胞・組織で得られた形態形成機構に関する知見について解説する。また、形質転換組織・個体の基礎・応用研究への利用についても述べる。	同上
13	光形態形成とフィトクロム	植物はさまざまな光情報を受けとって環境に適した体制を整える。それらの多くに関与するフィトクロムの働きを中心として、植物に対する光の作用機構を考える。	滝本敦（京都大学名誉教授）
14	生物時計と花芽の形成	植物は生物時計を利用して日の長さを測定し、適当な季節に花を咲かせる。生物時計の概略を説明した後、光周反応による花芽形成の機構を考える。	同上
15	植物と環境ストレス	植物は高温、低温、水不足、塩ストレスなどにより影響を受ける。植物はやや弱いストレスにより耐性となり、ストレスを受けないと耐性を失う。	倉石晋

＝ 生 態 学 概 論 ＝ （R）

〔主任講師：岩城英夫（筑波大学教授）〕

全体のねらい

個体 ― 個体群 ― 群集の各レベルにおける無機的環境、生物と生物との関わり合いを具体的事例をあげて説明し、生物的自然の構造と機能、生物群集や生態系の多様性、全体性およびその動的平衡についての理解を深める。講義を通じて生態学の基本的原理と概念を理解させる。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	生態学とは ― 序 論 ―	生態学とは何か。この講義の導入部として、生態学の対象、方法、生物と環境との関係、生態系概念などについて述べる。	岩 城 英 夫 （筑波大学教授）
2	陸の環境、海の環境	生物は海で発生し、やがて陸に進出した。生物の生存の場としての陸地と水界の環境の特徴を比較し、様々な生物がその生育地の環境に適応するために、どのような形態と機能を発達させたかについて述べる。	同 上
3	生 物 と 土 壌	陸地の生物の生存は土壌に依存している。土壌は植物に必要な水分と栄養塩類を供給すること、また植物や土壌生物の存在は土壌の形成に大きな役割を果していることなどについて説明する。	同 上
4	気候と植生の分布	気候（温度と降水）条件の変化に応じて地球上には様々なタイプの植物群系が分布している。また局地的な環境の違いによっても生物の分布は変化することを述べる。過去の気候変化に伴う植生の変遷についても触れる。	同 上
5	個体群の 成長と調節	生物の集団（個体群）の個体数は有限の環境においては無限に増加することは不可能であり、いつかは過密状態に達する。このような状況下での生物の対応の仕方についてまず理論的に述べ、ついで実例（主に動物）を見ながら論じる。	藤 井 宏 一 （筑波大学教授）
6	種間競争と “すみわけ”	同じ資源を利用する異なった生物種間には種間競争が存在しうる。種間競争とは何か。その機構についてまず理論的に取り扱い、ついで観察例を用いて説明する。また種間競争の結果として起こる“すみわけ”についても論じる。	同 上
7	植物間相互作用	植物の種内競争と種間競争の仕組みについて述べる。まず同種の植物間で起こる競争密度効果と自然間引きについて述べ、次に異種の植物間の競争の機構について説明する。	岩 城 英 夫

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	捕食関係	食うものと食われるものの関係（捕食関係）の動態に関する理論について述べ、次に実例を用いて自然界での捕食関係のはたす役割、特に生物群集の安定性への捕食関係の役割について論じる。	藤井宏一
9	植物の繁殖戦略	植物には様々な生活形があり、それぞれ特徴的な成長・繁殖様式をもっている。異なった環境下でこれらの生活様式がどのような生態的意義をもつかについて説明する。	岩城英夫
10	動物の生存戦略	動物の種（そして個体）はより多くの子孫を残すために、限られたエネルギーをいかにうまく利用し、その目的を達成するか。理論で予想されること、実際に動物がやっていることを対比し、生物の進化を絡めて論じる。	藤井宏一
11	物質生産	生態系のエネルギーの流れにおいて植物（生産者）がはたしている役割を論じ、植物群落の生産構造と光合成の関係、各種生態系の一次生産量と環境要因との関係などについて説明する。	岩城英夫
12	食物連鎖とエネルギーの流れ	生物群集における食物連鎖と栄養段階から見た群集構造、食物連鎖を通じてのエネルギーの流れとその効率、生食連鎖と腐食連鎖などについて基本的な法則性と実例を説明する。	同上
13	物質循環	生物体を構成する元素は生物と環境の間を繰り返し循環して使われる。地球的規模で循環する炭素、窒素、水の動きと、生態系内および生態系間での栄養塩類の循環について説明する。	同上
14	遷移と生態系の発達	植物群落の種組成や構造が時間と共に変化発達する遷移の系列と遷移の最終段階である極相について具体例をあげて述べ、次いで遷移の機構、遷移の進行に伴う生態系の特性の変化について説明する。	同上
15	人間活動と生態系	自然の生態系は人間活動によって改変され、農業生態系や都市生態系がつくられる。人間活動に伴う生態系の変化について具体的に説明し、自然と人間活動の調和について論じる。	同上

＝集団遺伝学＝（R）

― 遺伝子はどのように進化するか ―

〔主任講師：石和貞男（お茶の水女子大学教授）〕

全体のねらい

集団遺伝学は、個体の集まりである集団を対象として、その遺伝的構成がどのような法則に支配され、時とともにどのように変化していくかを追求する学問で、究極的には生物の進化機構の解明を目的としている。この学問は現在、高度の数学的理論体系を軸として各種生物集団における観察結果（とくに分子レベルの変異）の解析と理論の検証を行っている。本講義では、放送大学の趣旨にのっとり、集団遺伝学のあらましの一端をできるだけ平易に、そして人間とのかかわりを念頭において、解説してゆきたい。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	遺伝の基礎	遺伝の基礎となる概念 ― 例えば、遺伝子染色体、DNA等 ― を的確に把握させる。特に、有核細胞のDNAにおける遺伝子の一般的構造等、分子レベルの知見を強調する。	石和貞男（お茶の水女子大学教授）
2	任意交配集団と近親交配	遺伝子プールや遺伝子頻度の概念およびハーディ・ワインベルクの法則を理解させる。また、個体間或いは遺伝子間の遺伝的近さを測る近交係数を紹介する。	同上
3	量的形質の遺伝	わかりやすい実例を示しながら、量的形質とはどんな形質かを理解させ、それに寄与するポリジーンの意味を把握させる。また、量的形質の遺伝率等にも言及する。	同上
4	突然変異	突然変異が遺伝的変異を起こす最も基本的な機構であることを理解させ、いろいろなタイプの突然変異があることを紹介する。特に、DNAレベルでの最近の知見も示す。	五條堀孝（国立遺伝学研究所助教授）
5	自然淘汰	適応度の定義を理解させ、形質レベルにおいて如何に自然淘汰が働いているなかを、工業暗化等の例をあげて説明する。また、有名な淘汰モデル ― 超優性モデルや頻度依存型淘汰モデル ― を紹介し、その現実性を議論する。	同上
6	集団の変異 Ⅰ ―形態レベル蛋白質レベル―	集団内変異の保有機構をめぐるフィッシャー・ライト論争、そしてタンパク質多型現象をめぐる中立説論争を紹介し、多型現象の生物的・進化的意味合いを議論する。	石和貞男
7	集団の変異 Ⅱ ― DNAレベル ―	組み換えDNA技術等の進歩により、遺伝的変異が直接DNAレベルでみられることを理解させる。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	集団の変異性 Ⅲ —ヒト（人類）集団—	人類集団における形態・タンパク質・DNAレベルのいろいろな変異を紹介する。特に、日本人の蒙古系人種としての遺伝的特徴や国際結婚の増加等に注目しながら、日本人集団における遺伝的構成の将来を議論する。	石和貞男
9	分子進化 Ⅰ —タンパク質分子からみた進化—	1960年代に始まった分子進化の研究が、タンパク質のアミノ酸配列データの集積によって成功し、分子時計という有用な概念が出されて来た過程を紹介する。	五條堀　孝
10	分子進化 Ⅱ —DNA配列からみた進化—	DNA配列決定の改善により、DNA配列データが爆発的に増加した現実を踏まえ、アミノ酸配列データからではわからなかった新しい分子進化学的知見を紹介する。特に、多重遺伝子族の進化の重要性を示す。	同上
11	分子進化 Ⅲ —分子進化と分子生物学—	分子生物学上の最近の発見 — 例えば、偽似遺伝子や可動遺伝子など — の進化的意義を考察する。また、遺伝子変換と協調的進化の関係といった最近の知見も紹介する。	同上
12	分子進化 Ⅳ —ウイルス遺伝子の進化—	ウィルス遺伝子の進化と起源を調べることは、ウィルス病の治療や予防に役立つだけでなく、ウィルス自身の進化を知るうえでも重要である。ここでは、がんウィルスやエイズウィルスの遺伝子を中心にして、その進化速度やウィルス系統間の進化的関係などを議論する。	同上
13	人種の起源と分化	ヒトの皮膚色等の例をあげながら、人種というのがどのように分化し、そしてその分化がいつ頃起こったかを議論する。その際、タンパク質多型のデータを利用した根井の遺伝的距離という量の有用性を紹介する。また、その分化と適応の関係も考察する。	同上
14	集団遺伝子におけるこれからの問題	組み換えDNA技術やDNA配列決定法のさらなる発展が予想される現在、集団遺伝学的に興味ある問題のうち、どれが解決可能で、どれが解決不可能かを広範囲に議論する。	同上
15	遺伝学からみた人類の未来	現代医療技術が目ざましい発達により、悪い遺伝子をもつ個体が生き残る。つまり「個体としての利益と生物種としての利益の矛盾」が今、人類集団に問われている。遺伝学的知見が、この原理的矛盾にどのような解決を与えることができるかを、いろいろな角度から検討する。	石和貞男

＝動物の進化＝（TV）

〔主任講師：丸山工作（千葉大学教授）〕

全体のねらい

この地球上で、いつ、どのようにして生命は誕生して今日みられる種々さまざまな生物に進化してきたのであろうか？　この大問題に対する現在の科学の答えをなるべくわかりやすく解説する。動物を主として扱うが、生物全体の進化から展望していく。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	生物の進化	進化とは何について概説する	丸山工作 （千葉大学教授）
2	ガラパゴスの動物相	ダーウィンとガラパゴス ガラパゴスの地質学 ガラパゴス諸島での種分化 ダーウィンの自然選択説と適応	八杉龍一 （科学史家）
3	生命の起源	生命はどこで発生したか 化学進化 最初の生命 化石 まとめ	野田春彦 （創価大学教授）
4・5	分子レベルの進化と中立説	はじめに 遺伝的浮動について 突然変異遺伝子の種内への蓄積過程 分子進化の特徴と中立説 おわりに	木村資生 （国立遺伝学研究所 客員教授）
6	分子進化系統樹と動物の起源	生物系統論の試み　分子進化学と分子時計 分子系統樹　5SrRNAによる生物系統樹 生物界の全体像　後生動物の起源 後生動物の系統“異説” 5SrRNAによる後生動物の系統樹 おわりに	堀寛 （広島大学助教授）
7	動物の系統樹	動物の分類　飼育動物の系統図－（遺伝学） 最初の生物の系統樹　発生学 新ヘッケル派－二枝型の系統樹　比較形態学 化石の資料による系統樹　生態学、生物地理学 生きている化石（living fossils）　単枝型の系統樹 生物を5界に分ける試み、5界の系統樹　むすび	蒲生重男 （横浜国立大学教授）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	細胞器官の起源	ミトコンドリア　　鞭毛と繊毛の起源 DNAとゲノム 遺伝子転写系 タンパク質合成系 タンパク質輸送系 共生説か内生説か	石川　統 （東京大学教授）
9	種の分化	大進化と小進化 種とは何か？ 亜種問題 時間要因と環境要因――つの種系統（lineage)のたどる道 絶滅も進化の一コマ	濱田隆士 （東京大学教授）
10	行動の進化	はじめに カモ類の求愛行動の進化　　二つの問題 転位行動　　儀式化 クジャクの場合　　行動戦略と進化 ESS（進化的に安定な戦略）	日高敏隆 （京都大学教授）
11	原生動物	はじめに 原生動物の分類 私達と原生動物 遺伝子解析から見た原生動物の進化 おわりに	渡辺良雄 （筑波大学副学長）
12	無脊椎動物にみる退行進化	器官の退化していく進化　　鍾乳洞の中の世界 水生の洞窟動物　　陸生の洞窟動物 洞窟動物に共通する特性　　水生洞窟動物の由来 洞窟性脊椎動物にみられる退行進化の証拠 甲虫類にみられる退行進化の段階 陸生洞窟動物の由来　　退行も進化のひとつ	上野俊一 （科学博物館室長）
13	脊椎動物	脊椎動物とはなにか 脊椎動物の基本体制 発生と進化 相同と相似 体制の進化	養老猛司 （東京大学教授）
14	ヒトの進化 (1)	霊長類の進化 人類への進化 猿人段階 原人段階 旧人段階 新人段階	埴原和郎 （国際日本分化研究センター教授）
15	ヒトの進化 (2)	はじめに 分子時計とは ヒトに一番近い類人猿はどれか ヒトが類人猿から分かれたのはいつ頃だったのか	長谷川政美 （統計数理研究所教授）

＝植物と菌の系統と進化＝（TV）

〔主任講師：西田　誠（千葉大学教授）〕

全体のねらい

植物と菌の起源と進化を生活史と比較形態学を通じて考察する。系統分類における形質についてもふれる。植物については、特に陸上植物の進化の方向とその必然性を地質時代の環境との関連において考えようとするものである。本講では菌は動・植物にてい立する第3の生物群として扱う。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	藻類の分類と分類形質	紅藻・褐藻・緑藻は古い時代に分類された呼び名であるが、色が違うと光合成産物や生殖細胞の形態なども異ることがわかり、色による藻類の分類は自然分類と評価されるようになった。藻類の分類形質は植物界全般にも適用できる。	千原光雄（日本赤十字看護大学教授）
2	紅藻と褐色の生活環	藻類の生活環の様式は多様である。紅藻には2世代型と3世代型があり、褐藻には同形世代型、コケ型、シダ型、後世動物型がある。 動物型の生活環をもつホンダワラ類は藻類の中で最も高度に分化した体制をもち、陸上の高等植物に比較できる藻類である。	同上
3	緑藻の系統と生活環	緑藻は、1. 陸上植物に連なる系統群、2. 淡水に分布する緑藻、3. 海に生育する系統群の3つに分類できる。生活環の様式は、1と2では単相型で、これはコケ型、シダ型の始原型と思われる。3には同形世代型、コケ型、シダ型、後生動物型がある。	同上
4	植物の上陸1 緑藻の細胞学	現生植物の細胞構造や細胞器官の複製機構の比較研究（特に細胞分裂、核分裂の微細構造、鞭毛装置構造など）によって浮び上ってきた祖先の植物像を紹介する。また、陸上に生育菌を拡大することができた条件を細胞レベルで解説する。	堀輝三（筑波大学教授）
5	植物の上陸2 緑藻の生理化学	現生の緑色植物にみられる光合成を中心とした物質代謝系の多様化が、それらの植物が出現したと推定される地球上の環境（酸素、二酸化炭素濃度など）の変化に対しどのように適応し、エネルギー獲得様式を進化させてきたかを考察する。	猪川倫好（筑波大学教授）
6	コケとシダ（造卵器植物）	水中で単相で生活する緑藻や車軸藻から進化した緑色植物としてコケとシダをとらえる。水中から陸上へと生活圏をひろげる過程でおける造卵器の形成と退化、機械組織・フラボノイドの発達、水の欠乏に対応する気孔や通道組織の発達などを解説する。	水島うらら（上野学園大学教授）
7	葉の進化	テロム説による葉の進化を解説。ハナヤスリ科（シダ類）の裸葉と実葉が示す葉の立体的構成を大葉進化の中途段階に留るものとして理解し、茎頂と葉の形態形成様式から茎と葉のちがいを論じ、維管束植物の茎頂分裂組織の進化を紹介する。	今市涼子（玉川大学助教授）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	花と種子 1 種子の成立	石炭統の種子化石から、テロムが大胞子のうを包み、珠皮となり、胚珠が成立する過程を推論する。いっぽうシダ植物の前裸子類からソテツ系統と球果類系統へと進化したという推論を材解剖学の上から考察する。	西田　誠 （千葉大学教授）
9	花と種子 2 花の構成	花は短縮したシュートであり、おしべは小胞子葉、めしべは大胞子葉であるとするゲーテの変態論にはじまり、ゴノフィル説による花の器官学的解釈までを紹介する。いっぽう、花の原型を地質時代のソテツ類、針葉樹類に探り、花々二系列のあることを紹介する。	同　上
10	被子性	心皮（大胞子葉）が胚珠包んでめしべを形成するのが被子植物の特徴である。その前ぶれは裸子植物に見られる。被子性は種子の保護と散布に役立つ。いっぽう、心皮説では説明困難なめしべの解釈についてはゴノフィル説がある。	田村道夫 （神戸大学教授）
11	重複受精	被子植物の生殖細胞の行動の特徴は、1. 精核（精子）が花粉管により胚珠まで送られること。2. 2個の尤核のうち、1つは卵核と合体して胚をつくり、他は極核と合体して内胚乳をつくることである。これらの発生学的性質を裸子植物と対比させて説明する。	山下貴司 （お茶の水女子大学助教授）
12	被子植物の起源	被子植物が、いつ、どこで、どのような環境のもとで、何から起源したのかを、化石記録をもとに考察し、あわせて、心皮説、ゴノフィル説などを古植物学的に検証する。	西田治文 （国際武道大学講師）
13	菌の形質と分類(1)	菌は動物界・植物界に対応する菌界の生物である。これは生物群の系統進化の考察の結果であるが、その考察は後に行うことにしてここではまず、菌界に二つの亜界ー原核菌亜界（細菌の仲間）と真核菌亜界（かび・きのこの仲間）があることを述べる。	寺川博典 （東京医科歯科大学名誉教授）
14	菌の形質と分類(2)	次に、原核菌亜界の分類上重要な形質と分類群5門について述べ、従来の一般的分類法との比較を行う。さらに、真核菌亜界に含まれる菌の重要な形質と分類9門について述べ、それぞれの特徴に基づいて、従来の系統進化の考え方との比較を行う。	同　上
15	菌の系統進化	従来、菌は下等植物とされるか、または真核菌類を動物界・植物界に対する菌類界として原核菌類は別界に含められた。しかし菌の起源と進化を考察すると、原核菌類と真核菌類とは一界をなすものであり、生物界は動・植・菌の三界からなる（生物三元論）	同　上

＝動物の行動と社会＝（TV）

〔主任講師：日高敏隆（京都大学教授）〕

全体のねらい

動物の行動をさまざまな面から眺めてみて、そのしくみ、生存にとっての意味、社会とのかかわり、学習、進化などを理解し、人間の場合についても新しい視点を開く。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	動物行動学―エソロジーとは	動物行動学（エソロジー）とは、いったい何をどのように研究する学問なのか。その概念と研究内容を概説する。	日高敏隆（京都大学教授）
2	行動のおこるしくみ	われわれのまわりにはさまざまな動物たちがいる。その多様な行動の背後にある行動をおこすしくみ―生得的解発機構に焦点をあててみたい。	山下恵子（都留文科大文学部非常勤講師）
3	探索と定位	動物は種によって、主に使っている感覚器が異なっている。各々の動物がどのような感覚で環境を探索し対象を定位しているのか、具体例をあげながら考察する。	同上
4	コミュニケーション	動物たちの社会的な生活はリリーサー（解発因）という信号のやりとり、すなわちコミュニケーション（情報の伝達）によって成り立っている。その具体例をみてみよう。	新妻昭夫（立正大学非常勤講師）
5	適応度とは	動物は繁殖のために、驚くほど多大な努力を払っている。この努力や精巧に組みたてられた行動のしくみは、いったい何のためのものなのか。	日高敏隆
6	適応のための戦略	動物たちは適応度を高めるために、どのような戦略を採用しているのか。具体例にそくして、それを検討してみたい。	山下恵子
7	社会構造－1―群れとなわばり	動物は社会的な存在である。個体と個体の関係、すなわち社会関係について、「群れ」と「なわばり」という観点から、そのメカニズムを考察する。	新妻昭夫

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	社会構造－2－配偶システム	動物の配偶関係のかたちは、一夫一妻、一夫多妻、ハレムなどじつに多様である。じっさいにどのような形態があり、それがどのように決定されるのか、具体的に考えてみよう。	日高敏隆
9	社会構造－3－真社会性	共同育児、繁殖と労働の分業、世代の重なり、という社会的特徴をもつアリ、ハチ、シロアリは、真社会性の動物とよばれている。その行動と社会を、具体例をあげながら詳述する。	山下恵子
10	利他行動と包括適応度	動物の世界には、一般に「利他行動」とよばれている行動がたくさんみられる。これは、適応度という考え方では説明できない。そこで括適応度という概念が提出された。	日高敏隆
11	最適戦略とＥＳＳ	動物たちは、自分の適応度を高めるために、いろいろな戦術や戦略をとっている。最適戦略（もっとも効率的な戦略）とＥＳＳ（進化的に安定な戦略）についてみてみよう。	同上
12	行動の進化	化石になることのない「行動」や「社会」の進化は、どのようにして調べることができるのか。比較行動学の基本概念、遺伝的変異と自然淘汰、そして近年の性淘汰の理論を検討する。	新妻昭夫
13	共進化	２つ以上の種がたがいに密接な影響をおよぼしあいながら、相互に進化していくことを共進化という。一方だけではほとんど生存できない相互依存の関係が成立するような場合もある。具体的にその例をみながら、先進化の仕組みを考察する。	山下恵子
14	行動の発達－プログラムと学習－	動物の行動の発達には、生得的な部分と学習される部分があり、両者が複雑にからみあっている。そのプログラムについて、具体例をみながら検討してみる。	新妻昭夫
15	動物の行動からみた世界	本講義をまとめるにあたって、動物の環境世界について考察を加え、さらにエソロジーという観点から人間そのものをみてみたい。	日高敏隆

＝ 脳 と 行 動 ＝（ＴＶ）

〔主任講師：伊藤正男（東京大学名誉教授）〕

全体のねらい

脳は心の座であり、その構造と働きについて正確な知識をもつことは、人間を理解する上に重要である。この講義においては神経細胞の性質や脳の解剖的構造の基礎知識に始まり、感覚、運動、感情、記憶、意識などの脳の基本的な働きの仕組みを解説する。近代的な脳の研究の現状についての理解を深めるよう努める。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	脳の構造と機能	脳の構造のあらまし 脳の進化 脳の機能局在と階層構造 脳研究の歴史 脳の研究法 脳研究の意義	伊藤正男 （東京大学名誉教授）
2	ニューロン	ニューロンの構造 インパルス信号 シナプス伝達 シナプス修飾と可塑性 ニューロンの化学機構	同上
3	反射	単純な反射 複雑な反射 制御系としての反射 神経系の統合作用	同上
4	姿勢と歩行の中枢	姿勢と歩行についての観察 姿勢のメカニズム 姿勢における脊髄下降路の働き 歩行のリズム発生器 歩行における脊髄下降路の働き 随伴発射	同上
5	小脳	小脳の働き 小脳神経回路 小脳の神経回路網モデル 小脳のシステム構造	同上
6	大脳基底核	大脳基底核の働き 大脳基底核の神経回路 ドーパミン作動性ニューロン 大脳基底核は何をしているか	同上
7	視床	視床の区分 感覚・運動信号の中継 感覚誘発電位 脳波と視床 意識と視床 皮質下トリオとしての視床	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	視床下部	視床下部の構造 視床下部と不快情動 視床下部と快情動 温感冷感と体温保持行動 情動と行動の関係 視床下部の神経機構	伊藤正男
9	大脳辺縁系	構造のあらまし 扁桃核とその働き 海馬とその働き 自己刺激と報酬系・罰系 情動・行動のメカニズム	同上
10	睡眠と覚醒	概日リズム 生物時計 睡眠・覚醒のリズム レム睡眠 睡眠の神経機構 睡眠の意義	同上
11	大脳と感覚	大脳皮質の一次感覚野 一次視覚野の特徴抽出機構 視覚連合野 視覚情報処理機構の発達 視覚情報処理のモデル	同上
12	大脳と運動	大脳皮質の運動関連領域 随意運動のテスト 手指の器用さの進化 運動系全体の構成	同上
13	記憶と学習	記憶装置としてのシナプス可塑性 手続き記憶（運動記憶） 認知記憶（陳述記憶）	同上
14	大脳連合野	認識の座 言語野 高次行動の中枢 注意と期待 思考活動 優位脳と劣位脳	同上
15	脳と行動	脳の進化 脳の構造－機能連関 脳と機械 脳と心 脳研究の将来	同上

＝太陽系の科学＝（TV）

［主任講師：小尾信彌（放送大学副学長）］
［主任講師：吉岡一男（放送大学助教授）］

全体のねらい

惑星や小惑星、衛星、彗星など非常に多数の天体が太陽の重力を受けて集団をなしているのが、われわれの太陽系である。本科目では、惑星などの運動や、個々の天体の性質等について、最近の惑星探査などによる研究成果をふまえて講義し、現代の太陽系像を習得する。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	研究の歴史	古代やギリシア時代から太陽系天文学の発展の歴史を概観し、最近の探査機による太陽系研究にいたる。現代の宇宙観形成までにおける太陽系天文学の果たした意義も考える。全15回の講義の展開についても述べる。	小尾信彌（放送大学副学長）
2	太陽系の概観	太陽系の全体像について述べる。太陽を中心とした諸天体の配位や分布、運動等の特徴について述べ、太陽系に見られる全般的特徴を学び、太陽系の起源に及ぶ。	同上
3	地球と月の運動	地球の自転や公転および歳差や極運動などの運動のようすを学ぶとともに、それらの運動がどのような観測を根拠に推定されるに至ったかについても学ぶ。さらに、月の運動についても学ぶ。	吉岡一男（放送大学助教授）
4	天球座標と時間の決定	天体の天球上での位置を表わす天球座標および時刻・時間は、地球の自転や公転と深く関わっている。ここでは、これらが自転や公転をもとにどのようにして決定されているかについて学ぶ。	同上
5	日・月食と惑星現象	月や惑星に見られる諸現象は、古くから天文学が発展し、太陽系のモデルを形成するのに大きな役割を果たしてきた。ここではこれらについて学び、さらに日食や月食についても学ぶ。	同上
6	惑星運動の法則	16世紀後半のチコ・プラーエの惑星位置の観測をもとに、17世紀初めにケプラーが惑星運動に関する3法則（ケプラーの法則）を発見した。ここでは、観測結果から法則が導かれたいきさつや手順について学ぶ。	堀源一郎（東京大学名誉教授）
7	面積速度の法則	17世紀後半にニュートンは万有引力の法則を発見し、それに基づいてケプラーの3法則は理論的に導かれた。ここでは面積速度の法則（第2法則）について、3の諸側面を学ぶ。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	楕円運動の性質	万有引力の法則からは、2体の運動の軌道として楕円、放物線、双曲線が得られる。ここでは、太陽系でふつうに実現している楕円運動について学ぶ。	堀　源一郎
9	第3法則と万有引力	万有引力の法則からは、2体の運動について公転の平均距離と公転周期のあいだに、いわゆる第3法則が導かれる。ここでは3の導き方を通じて2体運動を考え、また天文学における第3法則の応用等も学ぶ。	同　上
10	惑星以外の天体の運動	地球をまわる月、一般には惑星をまわる衛星の運動も2体の運動として考えることができる。ここでは衛星の運動などや、さらに彗星のような小天体の運動について述べる。	同　上
11	摂動	現実の太陽系においては、惑星や衛星等の運動を論ずる場合に2体運動は理想化されたものにすぎない。小惑星の運動をはじめ現実の太陽系の力学を論ずるため18世紀以降発展した摂動について学ぶ。	同　上
12	地球型惑星	水星、金星、地球、火星、さらに月など地球型の諸天体について、地球からの観測や最近の直接探査で得られた結果をもとに、それらの地形的特徴や物理学的な性質を学ぶ。	村山定男（前国立科学博物館理工学研究部長）
13	木星型惑星	木星、土星、天王星等についての知識は、最近の直接探査の成果によって格段に進んだ。ここでは、それらの成果をふまえて、これら大型の惑星の諸性質を学ぶ。木星型惑星に属する衛星について学ぶ。	同　上
14	隕石と彗星	彗星に関する物理化学的な知識、構造等に関する知識も、1985～86年のハレー彗星の観測を通じて大きく進んだ。ここでは彗星やそれに伴なう流星等について学ぶ。また、隕石についての諸研究の成果についても学ぶ。	同　上
15	これからの太陽系	太陽系についての研究がこれからどのように進展していくかについて、さまざまな側面から理論的な研究や観測、探査等の進展と可能性について話し合う。	小尾信彌

＝恒星天文学＝　（TV）

〔主任講師：吉岡一男（放送大学助教授）〕

全体のねらい

恒星に関する基礎知識を得るとともに、それらの知識を観測あるいは理論をもとに得る過程について理解することを目的とする。そのために、恒星の運動、連星の解析、ＨＲの図、恒星の大気および内部構造を例に取り、それらの知識を得る方法を具体的に、演習形式も交えて学ぶ。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	年周視差と距離	1. 恒星の定義 2. 恒星の重要性 3. 講義の展開 4. 恒星の名前 5. 年周視差と距離 6. 年周視差の測定 7. 年周視差測定の歴史	吉岡一男 （放送大学助教授）
2	固有運動と太陽運動	1. 固有運動とその測定 2. 視線速度とその測定 3. 太陽運動と特有運動 4. 銀河系の回転とオールト定数	同上
3	永年視差・統計視差と運動星団の方法	1. 天体の距離の重要性とその測定 2. 永年視差とその測定原理 3. 統計視差とその測定原理 4. 運動星団の方法とその原理	同上
4	実視連星の解析	1. ２重星と連星 2. 連星の種類 3. 連星の軌道要素 4. 伴星の位置の表示と実視連星の判別 5. 実視連星の解析	同上
5	視線速度曲線の解析	1. 連星の頻度 2. 分光連星の解析 3. 分光連星の特徴	同上
6	光度曲線の解析	1. 食連星の特徴 2. 食連星の分類 3. 光度曲線の解析 4. 力学視差の決定	同上
7	等級と光度	1. 等級の定義とポグソンの式 2. 見かけの等級と絶対等級 3. 実視等級と写真等級 4. 放射等級と放射補正 5. 等級の測定	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	スペクトル型と色指数	1. 星のスペクトルとスペクトル型 2. 連続スペクトルによる表面温度の決定 3. 色指数と表面温度	吉岡一男
9	HR図と恒星の分類	1. ＨＲ図の歴史 2. ＨＲ図と恒星の分類 3. 恒星の光度階級と分光視差 4. ＨＲ図の特質 5. ２色図	同　上
	恒星大気を決める基礎法則	1. ボルツマンの式とサハの式 2. バルマー線強度と表面温度 3. 放射強度と放射流束	同　上
11	恒星大気の物理量の決定	1. 吸収係数と光学的深さ 2. 静水圧平衡の方程式 3.放射輸送の方程式と放射平衡 4. 温度分布の理論計算 5. 大気物理量の理論計算	同　上
12	恒星大気の化学組成の決定	1. 周辺減光と温度分布 2. スペクトル線の輪郭と等価幅 3. ファイン・アナリシスとコース・アナリシス 4. 星の種族と化学組成	同　上
13	恒星のエネルギー源	1. 太陽エネルギー源 2. 水素燃焼反応 3. その他の熱核反応	同　上
14	主系列星の構造と質量光度関係	1. 内部構造を決める式 2. 内部構造の計算 3. 質量光度関係 4. ホモローグ星	同　上
15	脈動変光星と周期光度関係	1. ピリアルの定理と星の進化 2. 脈動変光星と周期光度関係 3. 周期光度関係の導出 4. おわりに	同　上

＝宇宙の構造と進化＝（TV）

〔主任講師：小尾信彌（放送大学副学長）〕

全体のねらい

太陽系、銀河系、銀河宇宙と階層化し、多様化している現在の宇宙と3の天体について、3の特徴や構造、また誕生や進化について、できるだけ具体的に理解を深める。専門部野の講師により、それぞれの分野の基礎とともに、最前線の研究にもふれる。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	現代の宇宙論	1. 宇宙と宇宙論 2. 現代の宇宙論 3. 本科目の学習にあたって	小尾信彌 （放送大学副学長）
2	宇宙探究の歴史Ⅰ	1. 宇宙論とは 2. 「閉じた有限宇宙」からの脱却 3. 開かれた無限宇宙	佐藤文隆 （京都大学教授）
3	宇宙探究の歴史Ⅱ	1. 宇宙のモデル 2. 星の進化と元素の起源 3. 新しい観測手段 4. 進化する天体と宇宙 5. ビックバンの発見 6. 時空・物質・構造の起源 7. 宇宙と人間	同上
4	宇宙の現状Ⅰ	1. 電磁放射 2. 天体が放つ放射とその情報 3. 原子のエネルギー状態 4. 原子のスペクトル 5. スペクトル線の幅	小尾信彌
5	宇宙の現状Ⅱ	1. 現在の宇宙の特徴 2. 宇宙の階層構造 3. 超銀河団と銀河団 4. 銀河 5. 恒星 6. 冷たい天体	同上
6	光学天文台Ⅰ	1. 望遠鏡 2. 位置観測 3. 撮像観測 4. 測光観測	小平桂一 （国立天文台教授）
7	光学天文台Ⅱ	1. 分光器 2. 低分散分光観測 3. 高分散分光観測 4. 干渉計観測	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	相対論的宇宙論 I	1. 時間と空間 2. 光の速度 3. 特殊相対論 4. ローレンツ変換 5. 特殊相対論の実験的裏付け	江里口 良治 （東京大学助教授）
9	相対論的宇宙論 II	1. 加速度運動と慣性力 2. 一般相対性原理と等価原理 3. 重力理論としての一般相対論 4. 一般相対論の検証	同上
10	相対論的宇宙論 III	1. ニュートン的宇宙論 2. 宇宙原理 3. 膨張宇宙 4. 宇宙の地平線 5. 膨張宇宙における密度と温度	同上
11	相対論的宇宙論 IV	1. 重力の強さと時空の歪み 2. シュワルツシルド時空中の運動 3. 事象の地平面とブラックホール 4. ブラックホールの候補 5. ブラックホールの蒸発	同上
12	宇宙の初期進化 I	1. 自然の物質階層と宇宙 2. ビックバン宇宙 3. 物質の相変化と宇宙のインフレーション 4. 反物質宇宙は存在するのか	池内 了 （国立天文台教授）
13	宇宙の初期進化 II	1. 自然界の4つの力 2. 力の統一と分化 3. 弱い力と強い力の物質化 4. 宇宙黒体幅射 5. 天体の階層へ	同上
14	宇宙の初期進化 III	1. 宇宙の大規模構造 2. 銀河形成の2つのシナリオ 3. 暗黒物質は何か 4. 宇宙の涯を求めて	同上
15	電波天文学 I 宇宙電波とその観測法	1. 宇宙からの電波 2. 電波と可視光 3. 電波望遠鏡 4. 野辺山宇宙電波観測所をみる 5. まとめ	海部宣男 （国立天文台教授）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
16	電波天文学Ⅱ —電波でみた宇宙	1. 宇宙電波の発生のしくみ 2. 暗黒星雲と星の誕生 3. 星の誕生と宇宙物質の循環 4. まとめ	海部宣男
17	恒星の誕生	1. 恒星進化と元素の起源の理論 2. 星間ガス雲 3. 恒星誕生のダイナミックス 4. 星間塵と星間分子 5. 星の誕生の現場 6. 主系列星への収縮	杉本大一郎 （東京大学教授）
18	恒星のエネルギー源と主系列星の寿命	1. 恒星のエネルギー源は何か 2. 原子核融合のエネルギー 3. 恒星の内部構造 4. HR図と主系列 5. 主系列星の寿命	同上
19	巨星への進化と死	1. 巨星への進化 2. その後の進化と元素の起源 3. 恒星の死	同上
20	星の進化のエピソード	1. 融合する球状星団 2. ニュートリノで太陽の中心を見る 3. 星の表面の核爆発	同上
21	恒星進化の残骸Ⅰ	1. 超新星とは 2. 大マゼラン雲に現われた超新星1987A 3. 超新星となった星 4. 大質量星の進化、爆発、元素合成 5. 超新星の観測 6. ニュートリノ・バーストの観測	野本憲一 （東京大学助教授）
22	恒星進化の残骸Ⅱ	1. 超新星1987 Aの光度曲線 2. 超新星の輝きのエネルギー源 3. 超新星からのX線とγ線 4. 超新星での元素合成をみる 5. 赤外線の増光と固体微粒子の形成 6. パルサー？ 7. 超新星内部での対流不安定の成長と混合 8. 超新星の周囲 9. おわりに	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
23	大気の外からみる宇宙－X線天文学	1. 大気の壁 2. X線の空 3. X線星の正体 4. つぶれた星－中性子星とブラックホール 5. X線パルサーとX線バースト 6. 人工衛星「ぎんが」 7. マジュラン星雲の超新星 8. かに星雲 9. 銀河系外のX線源	小田　稔 （理化学研究所理事長）
24	銀河の進化と元素Ⅰ	1. 銀河のいろいろなタイプ 2. 銀河進化の基本的物理過程 3. 星間物質の物理状態 4. 分子雲からの星生成 5. 巨大バルブの形成 6. 円盤部とハーローのガスの交換	池内　了
25	銀河の進化と元素Ⅱ	1. 星生成の基本データ 2. 星の進化のデータ 3. 放出されたガスの混合過程 4. 銀河の進化と重元素 5. 星生成と銀河のタイプ	同上
26	太陽系の構造と起源Ⅰ	1. 太陽系の構造 2. これまでの太陽系起源論	中沢　清 （東京工業大学教授）
27	太陽系の構造と起源Ⅱ	1. 惑星の形成過程 2. 木星型惑星の形成 3. 地球の形成・進化 4. 太陽系内小天体の起源	同上
28	生命のはじまりと惑星の進化	1. 生命と物質 2. 生命の起源 3. パンスペルミア 4. 生命の歴史 5. 恐竜の絶滅 6. 生命構成物質の合成 7. 惑星環境と生命	大島泰郎 （東京工業大学教授）
29	地球外生命を探る	1. 宇宙と生命 2. 太陽系に生命を探る 3. 太陽系外の生命 4. 銀河系内における文明社会 5. 地球外文明探査 6. 地球外文明への送信 7. 宇宙基地	同上
30	まとめとこれからの学習	1. さらに勉強したい人に 2. 自分でいろいろ考える	小尾信彌

＝宇 宙 像 の 変 遷＝（TV）

〔主任講師：村上陽一郎（東京大学教授）〕

全体のねらい

人類は、自分を取り巻く世界全体をどのように把握しようとしてきたのか、またとくに西欧において、そうした試みが、どのように科学的な宇宙観の形成へと繋がって行ったのか、という点を、歴史的に振り返り、科学の理解の深化に対する一助とするとともに、併せて人間が世界を把握することの面白さを伝えたい。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	宇宙とは・宇宙観とは	人類はなぜ宇宙を考えるのか、自分の知識の届かない範囲まで知ろうとするのか。宇宙という概念の成り立ちや、それを捉える人間の視点について考えてみる。	村 上 陽一郎（東京大学教授）
2	神話的宇宙論	日本、中国、あるいは北欧の宇宙神話を通して、古代の人びとが、どのような体系化された説明を、宇宙の成立や、その構造に与えていたかを探る。	同 上
3	古代ギリシアの宇宙観 そのⅠ	古代ギリシアの宇宙観にも、神話的な側面も含めて、種々あるが、ここでは、その全体像とプラトン、アリストテレスなどの宇宙論を紹介する。	同 上
4	古代ギリシアの宇宙観 そのⅡ	古代ギリシアにおいて特異な地位を占めるデモクリトスの原子論的宇宙観を中心に紹介する。原子論は、近代に大きな影響力を持ったからである。	同 上
5	ユダヤ・キリスト教の宇宙論	後の西欧世界を決定付けた重要な宇宙観は、それなりに特異な形をしている。他の神話的な宇宙観に比べて、著しい特徴をなすのは、唯一の人格神による世界創造の問題である。それを中心に考える。	同 上
6	天文学的モデル プトレマイオス	ギリシア・ローマ時代を飾る最初の本格的な天体運動論は、アレクサンドリアのプトレマイオスの手になるものであった。彼の著作『アルマゲスト』の内容から、当時の「天動説」を理解してみよう。	同 上
7	西欧世界の成立	アラビアを経由したギリシア・ローマの学問は、12世紀になると、西欧世界に流入する。そしてスコラ学の形成を見る。学問の体系化はここにおいて、新しい段階を迎えた。スコラ学の宇宙論を探ろう。	同 上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	ルネサンスの宇宙像	15・6世紀は、西欧世界にとって、もう一度訪れた世界観の変革期がルネサンスである。ここで起こった新しい要素は、しかし一般に信じられているほど「近代的」なものではない。その知的変革が何であったか、という点を振り返る。	村　上　陽一郎
9	コペルニクスの登場	そうしたルネサンス運動のなかで、コペルニクスが登場する。彼の「地動説」の本質を明らかにし、ルネサンス思想家としての彼の宇宙観も併せて考えよう。	同　　上
10	ケプラーの宇宙像	もう一人のルネサンス人たるケプラーは、占星術にも長じていたが、独特の考え方に基づいて、興味ある宇宙像を作りあげた。神の作品としての宇宙には、合理的な天体の奏でる音楽が鳴り響いている。という彼の発想は、近代天文学の父とさえ言われるケプラーの、ルネサンス的性格を明確に物語っている。	同　　上
11	ガリレオと望遠鏡	望遠鏡はガリレオが発明したわけではないがガリレオが天体観測に望遠鏡を利用したことは当時の宇宙観にとって大きな意味があった。望遠鏡は、宇宙観にどのような働きをしたかを考え、同時に望遠鏡のその後を簡単に振り返る。	同　　上
12	デカルトとニュートン	近代の生んだ最大の巨人である二人は、どんな宇宙観を持っていたのか、比較しながら考えるとともに、そこから、近代的な宇宙観が導き出される可能性を探る。	同　　上
13	コスモスの崩壊と力学的宇宙像	啓蒙時代を迎えて、前代までのキリスト教神学を中心にしたコスモロジーは崩壊する。一方で、それは近代的な都市構造などにも影響を与えたが、新しい「科学的」な宇宙像として、古典力学という理論体系が整えられた。そこには原子論の復活も大きな影響を与えたが、近代科学の宇宙像を学ぼう。	同　　上
14	地　球　を　測　る	15世紀末に始まった大航海時代以降、地球についての知識は、次第に拡大されかつ正確になったが、ここではそうした地球についての理解が、どこまで到達したか、という点を考えよう。	同　　上
15	現代天文学とその宇宙観	現代では、古典力学から相対性力学へ、そして量子力学へと、運動力学の転換があり、さらに望遠鏡も、電波望遠鏡やX線望遠鏡などの開発があり、さらには人工衛星による宇宙の探索など、急激で革新的な事態が起こっている。そうした現代の科学的宇宙観の一端に触れ、その考え方への転換の様子を学ぼう。	同　　上

＝固　体　地　球＝(TV)

〔主任講師：奈須紀幸（放送大学教授）〕

全体のねらい

地球は固体地球・水圏・気圏の３つの大きな層圏からなる。そのうちの固体地球について解説する。とくに固体地球の表層の本質と、その動態ならびに変遷については、ここ数十年の間に著るしい研究の進展があった。それらの内容について重点的に説明する。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	固体地球の層圏	固体地球は球状の層圏から構成される。地表から地心へ向って、地球表層、マントル、外核、内核から構成される。地球表層としては、かっては地殻がそれに当ると考えられていたが、最近ではマントルの最上層部も含めてプレートという岩石圏がそれに当ると考えられている。	奈須紀幸（放送大学　教授）
2	地球の物理的性質	地球は重力および地磁気を有するが、そのほとんどは固体地球内部の性質に起因する。この重力と地磁気の性質について説明する。また固体地球内部の諸々の物理量について述べる。さらに他の天体との関係についても言及する。	同　上
3	内因的作用による地表の変化	地球内部の諸要因によって生じる変化が、地表まで達して諸々の変化を与えることがある。それらの主なものは火山であり、地震によって生じる断層であり、また隆起や沈降である。これらの事項について学ぶ。	同　上
4	外因的作用による地表の変化	地表は大気の温度変化を受けたり、結氷・融氷による膨張・収縮の作用を受けて風化する。また流水の作用によって侵食されて堆積物を生じる。また大陸氷河の消長によって海水準は変動し、相対的な隆起・沈降、海進・海退が起る。これらの事項を学ぶ。	同　上
5	火　成　岩	地球表層の内部およびマントルの内部では固相の物質の一部がとけてマグマとなっている。マグマが冷却固結したものが火成岩である。火成岩には深成岩、火山岩、およびその中間の岩石がある。また酸性岩、中性岩、塩基性岩、超塩基性岩の別がある。これらのことを学ぶ。	同　上
6	堆　積　岩	地表とくに海底に堆積した堆積物は、長年月の間に続成作用を受けて堆積岩になる。礫・砂・泥が固化した砕屑岩、生物起源の生物岩、化学的に沈澱した化学的堆積岩、さらに火山起源の火山性堆積岩がある。これらについて説明する。	同　上
7	変　成　岩	火成岩、堆積岩が地下深所で、ある条件下での圧力・温度のもとにおかれると固相を保ったままで内部の原子配列が変化し、別種の岩石となることがある。これを変成岩という。変成岩もまた別種の変成岩となることがある。こうした変成岩の形成過程ならびにその種類について学ぶ。	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	相対年代と絶対年代	地層中には化石が含まれることが多い。それらの中には生存期間の限られた示準化石といわれるものがある。地質時代はまずこれら示準化石をもととして区分された。ついで放射性同位体を用いて岩石の年代を測定する方法が発見され、絶対年代を知ることができるようになった。これらについて学ぶ。	奈須紀幸
9	地質調査と地質図	地球表層の岩石分布や構造は地質調査によって解明される。地質調査には、地表の調査、ボーリング調査、空中からの調査がある。こうした調査の結果は地質図にまとめられる。地質調査の方法および地質図の読み方も含めてこれらの事項について学ぶ。	同上
10	プレートの動態	1966～67年にかけて地球表層の固い部分は従来考えられていたより厚いことが判明しプレートと名づけられた。プレートは中央海嶺系の軸部で生産され大洋底拡大の形をとって絶えず更新される。これらプレートの動態について学ぶ。	同上
11	沈み込み帯	ひとつのプレートが隣り合う他のプレートの下へ潜没して地球内部へとけこむ場所では潜没帯が形成される。潜没帯は海溝やトラフを地形的に形成し、地震帯、火山帯をともなう。潜没帯の形成過程と、それにともなう諸々の現象について学ぶ。	同上
12	古生物の進化	地球表層に生物が芽生えたのは、海洋が形成されてからある期間を経た頃のことであった。先カンブリア時代の終り頃から骨格をもった生物が増加し、化石として数多く残るようになった。古生物は進化しつつ変化してきた。その変化のあり方について学ぶ。	同上
13	造山帯	隣り合う二つのプレートが押し合う場合、潜没帯あるいは衝突帯が形成される。このような場所は変動帯となる。これを造山帯という。造山帯は主として圧縮の場である。造山帯についても、プレートの考えが導入されてからその在り方について解釈が大きく変った。これらのことについて学ぶ。	同上
14	地球表層の変遷	地球表層は、その形成の初期から核にある部分を中心として、その周囲で造山運動をくり返しながら伸張してきた。その結果、大陸の部分は拡張してきた。一方、大陸は、大洋底拡大の影響を受けて分裂・移動をくり返してきた。こうした地球表層の変遷について学ぶ。	同上
15	地下資源の利用	地球表層には金属資源や石油・天然ガスなどの地下資源が賦存する。また地下水も地下資源のひとつである。これら地下資源の在り方について学ぶとともに、その開発利用の在り方についても学ぶ。	同上

＝日本列島の地球科学＝（ＴＶ）

〔主任講師：奈須紀幸（放送大学教授）
主任講師：濱田隆士（東京大学教授）〕

全体のねらい

日本列島について地球科学的な視点からその本質を追究する。日本列島は太平洋とアジア大陸の境に位置する弧状列島で、環太平洋変動帯の一部である。

日本列島は典型的な変動帯で、火山帯、地震帯を伴い、地史的にも多くの変動を経験してきた。これらのことについて学ぶ。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	日本列島の特徴	日本列島は本州を中心とし、南北方向に長くのびた大小の島々よりなり、アジア大陸の東端に位置し、太平洋およびフィリピン海に面する。環太平洋変動帯の一部を占める。温帯の部分が大きな面積を占める。	奈須紀幸（放送大学　教授）
2	日本の地質	日本列島は幾つかのプレートが接し、せめぎ合う場所となっている。そのため地質は複雑である。そのような複雑な日本列島の岩石の分布のあり方と地質構造の大勢について学ぶ。	同上 濱田隆士（東京大学教授）
3	日本の気象	日本列島の多くの部分は中緯度に位置し、偏西風帯に入る。四季の別があり、大洋の西岸気候の特徴を示す。台風もしばしば来襲する。これらの事象について学ぶ。	奈須紀幸
4	日本をめぐる海	日本列島は四面を海に囲まれている。西日本の南岸沿いには黒潮が東流し、東日本の東岸沿いには親潮が南下する。黒潮の分岐は九州西岸から対馬海峡を経て日本海に入り、北上する。こうした日本周辺の海の状況について学ぶ。	同上
5	日本列島とプレートの動き	従来日本列島はユーラシアプレートの東端と解されていたが、最近、西日本はユーラシアプレートの上に、東日本は北アメリカプレートの西端の上に位置するという解釈が生じた。日本列島をめぐる太平洋プレート、フィリピン海プレートとの関係を述べる。	同上
6	日本周辺の海底	日本列島の周辺には太平洋、フィリピン海、東シナ海、日本海、オホーツク海などの外洋、縁海が分布する。これらの海底にはさまざまな特徴がみられる。また堆積物や基盤の岩石についても多くの知見が得られている。これらの事項について学ぶ。	同上
7	日本の地震	日本列島は潜没帯である。そのため地震帯を形成する。すなわち和達ーベニオフ帯がよく発達している。またこれに伴なって局地的な地震も多く発生する。これら地震の発生の機構や、特徴について学ぶ。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属：氏名）
8	日本の火山	東日本の下へ潜没する太平洋プレートは東日本火山帯を形成せしめ、西日本の下へ潜没するフィリピン海プレートは西日本火山帯を形成する。このような火山帯の形成の機構と火山それぞれの特徴について学ぶ。	奈須紀幸
9	日本の古生代	日本列島最古の含化石層は約4億6千万年前のオルドビス紀中期である。シルル紀中・後期には内外帯ともにサンゴ礁が発達する。古地磁気から復元された古緯度は北半球の低緯度を示し、サンゴの成長様式もそれを支持している。シルル紀後半ーデボン紀には酸性火山活動が盛んであり、石炭紀前半にはそれが玄武岩質活動に変った。石炭紀後半から二畳紀にかけては、それら火山島上にサンゴ礁が発達し、フズリナ石灰岩が厚く堆積した。	濱田隆士
10	日本の中生代	日本列島の中古生代には、チャートや砂泥互層を主とする地層が、大規模な海底地辷りの結果形成場所から移動してしまい、複雑に入り混って見掛け上区別しにくくなった一群が発達した。三畳紀には礁性石灰岩が少ないという特色があるが、ジュラ紀には海岸に大サンゴ礁列、内陸に恐竜の棲む湖畔の森林が出現した。白亜紀にもサンゴ礁はあるが部分的で、むしろアンモナイトの多く棲む海が広がっていた。	同上
11	日本の新生代	日本の新生代前半は石炭形成期と呼べる。気候はやゝ寒冷で、多くの湖沼ができていた。北海道、常磐、北九州各炭田のほとんどが、この時期に集中して形成された。中新世に入ると黒潮の前身の暖海流が岸を洗うようになり、所によってサンゴ礁やマングローブ林が発達する亜熱帯環境が出現する。第三紀後期から第四期前半は世界的に寒冷期がくりかえし訪れてくる時代であったが、完新世に入ってから一時的に中部日本を中心にしたサンゴ礁城も出現した。	同上
12	日本の地下資源	日本列島はモザイクを集めたような複雑な地質構造を有する。そのため広大な面積を占める地下資源の分布は見られぬ。各種の金属・非金属資源がスポット的に分布する。とくに黒鉱は注目される。これらの事項について学ぶ。	奈須紀幸
13	日本の海陸境界	日本の海陸境界には岩石海岸、砂浜海岸、および内湾の遠浅の干潟がある。海岸は過去数十万年の間、氷期・間氷期の海水準変動に伴なって内陸への侵入、外海への後退をくり返した。そのため、大陸棚をはじめ、数々の特徴的な地形を海陸境界に形成した。	同上
14	日本における地球科学の進展	日本が西欧の科学を全面的に受容しはじめてから百有余年である。地球科学の分野においても事情は同じであった。この一世紀余りの間に日本の地球科学は急速な進歩を果した。その間の経緯について述べる。	同上
15	日本列島と人間生活	今日、環境問題は人類の重要な関心事となっている。地球科学的見地からみた場合の日本列島の特性とそこに住む人々の生活の関係について考察を進める。	同上

＝ 大 気 と 海 洋 ＝（TV）

〔主任講師：奈須紀幸（放送大学教授）〕

全体のねらい

固体地球表面の約3割は陸地で占められ約7割は海洋でおおわれている。さらに陸地と海洋の上を大気の層が厚くおおっている。これら大気と海料に関する本質の解明は近年大きな進展をみた。それらの内容について、いろいろの専門の角度から学ぶ。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	大気の構造	気圧・気温・湿度・風向・風速などは絶えず変化している。とりわけ、高さにともなう変化は大きく、例えば数千kmの高低緯度間の気温差は僅か10kmの高度差によって体験できる。地球規模でみた大気の平均構造の実態を把握し、以下の数章の理解に役立てる。	浅井富雄（東京大学教授）
2	大気の熱収支	大気運動エネルギー源は太陽である。地球に降り注ぐ太陽放射エネルギーが大気中を伝達される道筋をたどる。一方、地球も宇宙空間に向けて熱エネルギーを放出して、大気・地球系のエネルギーの収支が成り立っている。大気の熱平衡について考察する。	同上
3	雲と降水	水蒸気の凝結や昇華、水滴の凍結などによって微細な水滴や氷晶が空気中に形成される。それらの粒子は併合過程を経て、雲粒から水滴へと成長する。雲や降水の形成にいたる微視的物理過程について述べ、さらに、雲と降水の巨視的動態にも触れる。	同上
4	大気の運動	大気は地球とともに自転しているが、地球上から見ると、地表面に相対的な運動（風）が存在する。その仕組について考える。気圧傾度力を生み出す原因、気圧と風の関係、コリオリの力、大気循環の種類、地上付近の風と上空の風の違いなどについて学ぶ。	木村龍治（東京大学助教授）
5	気象の変化	四季に応じてさまざまに変化する大気の仕組について考える。冬の北西季節風は日本海側に豪雪、太平洋側にカラカラ天気をもたらす。初夏は梅雨、夏から秋にかけて台風が天気を特徴づける。	同上
6	気候の変動	地球上に大気が生成して以来、気候は絶えず変動をくり返しながら今日にいたっている。気候変動のしくみについては不明な点が多いが、これまでの気候変動の実態とその原因、とりわけ海洋の果している役割について述べ、人間活動の影響についても触れる。	浅井富雄
7	大気研究の歴史	日常身近かな天気の変化から地球規模の大気大循環にいたるまで、気象についての我々の知識や考え方がどのようにして養なわれ育ってきたかを、その発展の節目に重点をおいてふりかえり、国際協力のもとで維持・展開されている世界の気象観測や予報の現状を示す。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	海洋探究の歴史	人は海に住人ではいないが、海とは極めて深いかかわりを持っている。生きてゆく上での必要性からだけでなく、海の未知を探るという夢を秘めて、古来続けられてきた探究の過程を振りかえり、海洋の科学へいざなうよすがとする。	寺本俊彦（神奈川大学教授） 奈須紀幸（放送大学教授）
9	海洋大循環	海洋における諸々の過程の中でももっとも顕著なもののひとつであり、他の過程にも大きな影響を及ぼしている大循環を採りあげ、その成因、構造および機構などがどのように調べられ、どこまで明らかにされたかを述べるとともに、今後の研究を展望する。	寺本俊彦
10	波と潮汐	海岸に打ち寄せる波は、沖に風が吹いて発生した風浪がうねりに変化したものも多い。風の作用で水面にどのような波が立つのか説明する。海洋の内部に発生する内部波についても述べる。次に、潮汐のメカニズムを考察する。タイダル・ボアについても触れる。	木村龍治
11	海洋の物質循環	生物の活動を通じて、いろいろな元素が循環している。酸素、炭素、窒素に注目して、海の中に残された生物活動の軌跡をたどることによって、その動き、特徴などについて探る。生物生産や沿岸の富栄養化の問題との関係についても触れる。	服部明彦（神奈川大学教授）
12	海洋の生態系	海洋の生物は大小の部分生態系に分れ、200m以浅の浅海系には植物の光合成活動があるが、深海系では微生物と動物のみとなる。沿岸域と外洋域とでは種類も生物量も異なるが、近年、内湾の有機汚濁が外洋にはみ出す傾向が見られる。	堀越増興（千葉大学非常勤講師）
13	海底の生いたち	深海底は中央海嶺で生れ、横に数cm／年の速さで移動しながらしだいに深さを増してゆく。海底が生れる場所には多数の割れ目があり、熱水が噴出している重金属を折出させたり、溶岩が露出している所もある。マリナナイライフなど島弧の背後（陸側）にも小規模ながら海底が生れつつある海域がある。	小林和男（東京大学教授）
14	深海底の沈み込み	海溝は世界中でもっとも深い場所であるが海洋のへりに細長く並んでいる。深海底はここから斜めに陸の下に沈み込んでいる。その形は深発地震や地震の波の伝わり方から確認されている。海溝の地形や沈み込みの様子は地域によって異なっていて、地震の起こり方や火山活動の歴史にも関係を持っている。	同上
15	大陸棚の生いたち	大陸や島弧の周辺には海底傾斜のゆるやかな大陸棚がひろがっている。その外縁の水深は、ほぼ120～140m程度である。このような海底地形を生じたのは氷期・間氷期のくり返しに対応した海水準変動が原因であることが判明してきた。その経緯について述べる。	奈須紀幸

＝ 現 代 資 源 論 ＝ （TV）

〔主任講師：山口梅太郎（東京大学名誉教授）〕

全体のねらい

資源問題が論議されている割りには、鉱物資源について、例えば、鉱物資源と人間とのかかわり合いや、資源の分布や資源量の問題、資源を獲得し、利用するための技術、更に、わが国としてどう対応すべきかといったことがあまりにも知られていない。このセミナーでは鉱物資源の諸問題を、その開発と利用を中心に、技術的側面から概説する。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	鉱物資源と文明	フリントや黒曜石など石器時代を象徴する資源をはじめとして、青銅器時代、鉄器時代、現代に至る文明にかかわる資源の役割りを概説し、さらに、資源の浪費は文明の破滅へ導くとしたローマクラブの「成長の限界」などについて論ずる。	山 口 梅太郎（東京大学名誉教授）
2	資源の確保とその方策	鉱物資源は、堀りとすればいずれは無くなってしまうこと、また、その存在が世界的に偏りがあること、その開発には多くの困難を伴うことなどを述べた後、こうした鉱物資源を如何に確保するか、とくにわが国の状況について概説する。	同 上
3	金属鉱物資源	鉄、銅、コバルトなどの金属資源について、その鉱床、分布、埋蔵量など、いくつかの金属を例にとって解説し、その問題点を論ずる。	武 内 寿久禰（東京大学教授）
4	非金属鉱物資源	石炭石、硫黄、燐鉱石など非金属鉱物もまた地下から得られる重要な鉱物資源であるが、それぞれ特長のある資源問題をかかえている。	同 上
5	レアメタル先端技術に必要な金属資源	超伝導技術をはじめとした最近の科学技術の進歩は希土類やレアメタルと呼ばれる従来なじみの薄かった元素や金属に光を当てた。これら新しい元素や金属の資源の動要性、存在の状況、開発の技術などを概説し、将来を展望する。	同 上
6	核燃料鉱物資源	7回以下のエネルギー鉱物資源と関連して、ウラン、トリウムなどの核燃料鉱物資源について解説する。併せて、リチウムやジルコニウムなど原子炉材料として重要な資源についても触れる。	同 上
7	エネルギー資源とその利用	地熱、太陽、水素など新しいエネルギー資源を含めて、将来のエネルギー供給のバランスを展望し、その中における石油や石炭などの化石燃料資源の占める重要さを論ずる。	同 上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	石油・天然ガス	石油、天然ガスなどはエネルギー資源であるばかりでなく、重要な工業原料である。これらの利用の歴史、その化学、将来を展望する。	富永博夫 （埼玉工業大学教授）
9	石炭・オイルサンド・オイルシェール	石油の代替資源といわれるオイルサンド、オイルシェールとはどんなものか、その他の代替資源はあるのか等、石油代替資源の特性と開発の可能性を探る。	同　　上
10	鉱山とその開発(Ⅰ)	鉱物資源の供給源である鉱山の開発はまず鉱床の発見からはじまる。鉱床の性質、鉱床探査の技術、発見した鉱床の評価、開発の可能性の検討などをまとめる。	武内寿久禰
11	鉱山とその開発(Ⅱ)	鉱床をどのように開発し、鉱石を採　する技術について述べる。露天掘、抗内採掘、砂鉱床の採掘、あるいはインプレースリーチングなど、いろいろな採取方法が行われる。	山口梅太郎
12	鉱山とその開発(Ⅲ)	鉱山から掘り出された鉱石は、多くの場合、そのままでは利用できない。鉱石の中の不用な部分を取除き、品位を高める選鉱の技術、鉱石から金属を取出す製錬の技術について述べる。	井上外志雄
13	海から得られる鉱物資源	海水に溶けている各種の塩類も重要な鉱物資源であり、最近はウランを採取することも試みられている。海岸や浅い海に堆積している砂利や砂、錫やチタンなど。さらには深海底に知られるマンガン団魂など、海には多くの資源がある。	山口梅太郎
14	未利用資源とリサイクル	マンガン団魂やオイルシェールなどのほかにも、まだ十分に利用されていない資源は多い。これらの未利用資源の有効利用を考え、また、利用された後捨てられる資源をもつ一度活用するリサイクルの問題を考える。	井上外志雄
15	資源開発と環境問題	鉱山をはじめとして、鉱物資源の開発は、どうしても自然環境の破壊を伴うことになる。資源の確保と自然環境の保護をどのように調和させたらよいか、破壊された環境をどうしたら回復できるのか等を考える。	山口梅太郎

解 析 学（R）－関数論と微分方程式－

〔主任講師：長坂建二（法政大学教授）〕

全体のねらい

複素数の微分積分学である関数論と、数学を応用する際に最も使われる微分方程式について述べる。コーシーの定理、留数計算を、関数論の目標とする。微分方程式は、1階、2階の求積法による解法、線形微分方程式の解の構造と解法、級数解の性質を述べ、合わせて存在定理を示し、その意義を考える。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	複素数の導入と複素平面	複素数を実数の対として導入し、虚数単位を実数の演算と矛盾しない形で公理的に定義できることを示す。また、複素平面により複素数体が実数体上2次元ベクトル空間であることを理解させ、極形式による表示とともに加減乗除の幾何学的意味を明らかにする。	長坂建二（法政大学教授）	長坂建二（法政大学教授）
2	複素変数の初等関数	複素数を変数とする関数のうち、代数関数、指数関数、三角関数、対数関数、巾乗関数、逆三角関数を、実変数の初等関数の性質より導入し、複素変数の初等関数の性質について述べる。また、関数の多価性とリーマン面、一次変換の性質にも言及する。	同　上	同　上
3	正則関数	複素関数の微分可能性の定義を考え、コーシー・リーマンの微分方程式をみたすことを説明し、微分法の公式を示す。また、正則関数（微分可能な複素関数）の性質として重要な等角写像にも触れる。	同　上	同　上
4	微分方程式の諸概念と求積法	微分方程式論を展開するために必要な諸概念を導入する。また、求積法で解を求めることができる1階微分方程式について、実際に解を求める解法を、変数分離形・同次形・完全微分方程式・線形・ベルヌーイ形について説明する。	同　上	同　上
5	2階線形微分方程式	特異解が特有の性質を持つクロレーの微分方程式、及びラグランジュ（ダランベール）の微分方程式の解法を述べる。ついで、定数係数2階線形微分方程式の一般解が、同次微分方程式の一般解に特殊解を加えたものであるという解の構造を理解する。	同　上	同　上
6	n階線形微分方程式	n階線形微分方程式の解の構造が、2階線形微分方程式の場合と同じであることをまず示す。ついで、定数係数の場合について、演算子法・ラプラス変換による解法の概略を述べる。さらに、連立線形微分方程式との関連、定数変化法にも言及する。	同　上	同　上
7	複素関数の積分	実数を変数とする関数の定積分を復習し、その類似として、正則弧上の複素線積分を定義し、基本的な性質を示す。さらに、置換積分として表されること、したがって、原始関数を持つ場合には実関数と同じように微分積分学の基本定理が成立することに触れる。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	コーシーの定理	置換積分として複素数積分を計算できる例を与え、微分可能でない関数や微分可能でない点がある場合には、積分路の影響があることに着目する。次いで、関数論における最も重要なコーシーの定理を紹介し、微分積分学の基本定理に対応することを説明し、証明の概略を与える。	長坂建二	長坂建二
9	コーシーの積分公式とその応用	コーシーの定理より、正則関数に対するコーシーの積分公式を導き、正則関数は巾級数展開可能な解析関数になること、及び一致の定理を示す。また、リウヴィルの定理より代数学の基本定理を示し、関数論の数学における重要性を強調する。	同上	同上
10	級数論	巾級数に関する概念を述べ、収束判定条件、一様収束と項別微分・項別積分可能性の関係を紹介する。次いで、テイラー展開との関連、及び複素解析関数の性質を述べる。	同上	同上
11	ローラン展開と留数定理	巾級数に負巾の項を付け加えたローラン級数を導入し、複素変数の関数のローラン展開と留数定理との関連を明らかにする。また、留数定理の応用として、様々な積分の計算例を示す。さらに、偏角の原理と解析接続の概念を導入し、その応用について述べる。	同上	同上
12	巾級数による微分方程式の解法	2階線形同次微分方程式を、確定特異点を利用して巾級数により解く。例として、ガウスの微分方程式・フックス型の微分方程式を取り扱う。	同上	同上
13	不確定特異点を持つ微分方程式	不確定特異点を利用しての、微分方程式の巾級数による解法、およびその性質について言及する。また、その例とベッセルの微分方程式、ベッセル関数について述べる。	同上	同上
14	複素変数の微分方程式	フックス型の微分方程式は、複素変数の微分方程式として考察可能であることについて述べ、複素関数としての特殊関数について触れる。	同上	同上
15	存在定理	1階常微分方程式が、リプシッツの条件を満たすとき、初期値を満たす唯一つの解が存在するという存在定理を、逐次近似法により示し、その意味を考える。	同上	同上

＝データとデータ解析＝（Ｒ）

〔主任講師：浅野長一郎（創価大学教授）〕

全体のねらい

情報化社会と呼ばれる現在、多くの洞察はデータに基づいて効果的に行われる。官・学・産も、また個人も、この意味でデータ・ベースの構築やデータの収集は極めて盛んである。データがなくては、何の考察も方策も意味を失うといっても過言ではない。さらに、このような情報化の環境でデータを入手しても、そこから何を如何に推測するかが重要な課題となる。

データ解析は、このようにデータから何が探索できるか・何が検証できるかを、客観的・科学的な解法と処理によって、現象の本質に迫って解明する不可欠な方法論である。とくに、近年の計算機の発展と普及はそのような複雑な高度の解析をも可能にし、益々データ解析の重要性を高めている。本講は、このような方法論と現象の本質へ接近する方法を平易に解説し、受講者に実力をつけることを意図している。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	現像とデータの意味	1. データ解析の目的と接近法 2. データ尺度の種類 3. 現像の多変量データ観測 4. データの管理とデータ・ファイル 5. データ・マネッジメント	浅野長一郎（創価大学教授）	浅野長一郎（創価大学教授）
2	図式表現	1. データの様相 2. グラフ表現の形	同上	同上
3	分布型	1. 正規分布、指数分布、二項分布、ポアソン分布 2. 多次元正規分布、多次元指数分布	同上	同上
4	統計的推測論	1. 推定論　2. 点推定・区間推定 3. 最小自乗推定法　4. 最尤推定法 5. 積率法　6. 推定量の性質（よい推定とは） 7. 検定論 8. 仮説（帰無・対立）と統計的検定（２種の過誤） 9. 最強力検定・不偏検定・etc.（よい検定とは）	同上	同上
5	離散データの推測	1. メヂアン検定、マンウィットニ検定、アンツリ・ブラッドレイ検定 2. クラタカル・クラス検定	同上	同上
6	相関分析	1. 単相関 2. 重相関 3. 偏相関 4. コンピュータ・プログラム	同上	同上
7	分割表	1. ２×２分割表 2. m×n分割表	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	回帰分析 (1)	1. 多重回帰分析 2. 性質	浅野長一郎	浅野長一郎
9	回帰分析 (2)	制約付回帰分析 一般化回帰分析 2段階回帰分析	同上	同上
10	実験データの採り方 (1)	各種標本調査法 ランダム法・層別法・ネイマン法・デミング法・多段階法	同上	同上
11	実験データの採り方 (2)	各種実験計画法 1元配置・2元配置・ラテン方格法・グレコラテン方格法	同上	同上
12	実験データの採り方 (3)	2^n 型・3^n 型・山登り法	同上	同上
13	多次元データの推測・主成分分析		同上	同上
14	判別分析・正準分析		同上	同上
15	因子分析・正準相関分析		同上	同上

＝数量化理論＝（TV）

〔主任講師：駒澤　勉（統計数理研究所教授）〕

全体のねらい

質的データを現象の特性情報として観測して得たとき、現象を予測分析、判別分析、成分分析などの問題として捉えデータ解析を行う「林の数量化理論」について講義する。特に、数量化理論の諸方法論を基本から応用まで、事前・事後分析のノウハウを中心に話を進める。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	基本的分析法	数量化理論の開発された生立ちの順序に、数量化の基本的方法論（外的基準のある場合、ない場合）について概説する。また、方法論で利用する数学の道具立てについても講義する。	駒澤　勉（統計数理研究所教授）	駒澤　勉（統計数理研究所教授）
2	判別・予測のための数量化（数量化Ⅱ類）	最初に開発された判別・予測分析のための数量化について、「データ解析」のフィロソフィーも含めて講義する。	同　上	同　上
3	判別の良さの尺度	判別分析に用いられる評価に関する統計量の判別成功率、相関比などとそれら統計量間の関係について講義する。	同　上	同　上
4	判別・予測の良さの尺度	予測分析の基本となる回帰分析に、予測の良さを表現する統計量である重相関係数、偏相関係数などの相関関係について、いろいろな角度からその意味を講義する。	同　上	同　上
5	事前データ分析―ｱｲﾃﾑ選択・分割表の分析―	質的データの多次元解析の外的基準（目的変量）がある解析法ではアイテム（項目）間の分割表（クロス集計表）の独立性を調べておく必要がある。それらを調べる方法を新しい統計量ＡＩＣなども用いて、説明アイテムの選択法について講義する。	同　上	同　上
6	事後データ分析・その１―相関行列での分析―	数量化の方法論で得られた説明アイテム・カテゴリーの数量を利用して、相関行列を求めて、次に重相関係数、偏相関係数を求めて行く計算手順、および事後分析について講義する。	同　上	同　上
7	事後データ分析・その２―ループ化による分析―	質問に対する回答のパターンのような多次元の質的データを用いて数量を予測するときの予測式の構成法、予測式の評価法について講義する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	予測のための数量化(数量化Ⅰ類)・その1	予測のための数量化法、数量化Ⅰ類の応用に際して生ずる、説明変数の選択法、説明変数が数量である場合の取扱い法、予測式の解釈の仕方等について講義する。	馬場康雄(統計数理研究所助教授)	馬場康雄(統計数理研究所助教授)
9	予測のための数量化(数量化Ⅰ類)・その2		同上	同上
10	グラフを用いた予測法	個体や変数の特徴を把握し、探索的にデータ解析を行うためにグラフが有用である。回答パターンを連結ベクトル表現によって視覚化し、それを用いてグラフィカルに数量を予測する方法について講義する。	同上	同上
11	親近性に基づく分析法(数量化Ⅳ類)	個体相互の位置関係を求めるのに親近性が一つの尺度となる。ここでは、親近性という尺度の種々の構成法を示し、親近法に基づいて個体を空間に配置する方法の一つである数量化Ⅳ類について講義する。	同上	同上
12	親近性に基づく分析法の応用	親近性から得られた個体の空間配置を基に、個体の分類、個体グループの特徴づけ等、数量化Ⅳ類の結果から得られる種々のクラスター分析法と関連づけて講義する。	同上	同上
13	パターン分類のための数量化(数量化Ⅲ類)その1	質的データの外的基準のない代表的分析法である分類、データ構造、および成分分析のための数量化の方法論について講義する。(特に、アイテム・カテゴリー・データの解析処理法について、主成分分析と対比しながら講義する。)	同上	同上
14	データ構造の探索的分析	質的データに順序構造がある場合、得られたカテゴリーの数量を散布図に描いたときの性質を典型的人工データと実際のデータを用いて話を進める。	同上	同上
15	成分的分析を利用した判別・予測分析	予測分析、判別分析などの外的基準のある場合の解析法では、説明アイテムの選択に当ってアイテム間に従属関係があるときには、数学的に同時にアイテムを選択することができない。この解決策を成分的分析の応用としてデータ解析して行く方法について講義する。	同上	同上

＝統計的決定＝（Ｒ）

〔主任講師：松原　望（東京大学教授）〕

全体のねらい

ベイズの定理を基礎とした、ベイズ統計学、ベイズ決定の基礎と、いろいろな方面への応用。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	ベイズの定理	ベイズの定理の紹介と、基礎的意味づけ。	松原　望（東京大学教授）	松原　望（東京大学教授）
2	社会的リスクと決定	ベイズの定理を、確信の形成プロセスと考えて、いくつかの応用を通して、ベイズの定理の意味の理解を深める。	同　上	同　上
3	安全と社会的決定	確信形成のプロセスを、社会的決定に応用する。原子力発展の安全性を題材とする。	同　上	同　上
4	事後分布と統計的決定	ベイズ決定の最も基礎的部分の解説。	同　上	同　上
5	通信とベイズ決定	通信モデルを、ベイズ決定の典型と考えて、信号検出理論を理解する。	同　上	同　上
6	医学とベイズ決定	病名と症状の関係を、ベイズの定理でとらえて、ベイズ決定の理論を応用する。	同　上	同　上
7	医薬とベイズ統計学	新薬開発の採否の問題を、ベイズ統計学の立場から検討する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	ベイズ推定	推定をベイズ統計学の立場から考える。特に線型回帰の問題、多変量の場合を扱う。	松原　望	松原　望
9	カルマン・フィルターとベイズ統計学	動的制御では不可欠のカルマン・フィルターを、ベイズ統計学の立場からとらえなおす。	同　上	同　上
10	イメージ・プロセシングとベイズ推定	ベイズの定理のもつ、事前予想のとり込み機能を、くずれたイメーシの雑音除去に用いる。	同　上	同　上
11	パターン認識とベイズ推定	図形の判定を、ベイズ決定（推定）として行なう。従来から試みられている方法。	同　上	同　上
12	情報検索とベイズ決定	あまり触れられないが、情報を検索すべきか、どのカテゴリーに入れるかを、ベイズ決定として扱う。	同　上	同　上
13	信頼性とベイズ統計学	確率分布から確率を求めるプロセスで、ベイズの定理を用いる方法を考える。	同　上	同　上
14	経験的ベイズ決定	ベイズ統計学の変型として、しばしば提案される経験的ベイズ法の、紹介を行なう。	同　上	同　上
15	まとめ	ベイズ決定の応用の将来の可能性について、その問題点を検討する。	同　上	同　上

＝カオスとフラクタル入門＝（ＴＶ）

〔主任講師：山口昌哉（龍谷大学教授）〕

全体のねらい

最近の数学では、従来は、とても数学の対象としては考えられなかったような微妙な現象が簡単な法則によって記述できることが発見された。これは一つにはコンピュータの異常な発達によって、視覚化されることにも起因している。この講義ではカオスとフラクタルについてその初等的な結果を、その応用も含めて述べる。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	この講義について	この章では、この講義全体の特徴と、第２章と第３章の数学的準備をどういう目的でするのか？というこうが示してある。直観的な意味での自己相似の説明もする。この講義の科学や技術における位置づけがわかるであろう。	山口昌哉（龍谷大学教授）	山口昌哉（龍谷大学教授） 畑　政義
2	数と関数 集合と写像	この講義でしきりに用いる概念について復習と用意をする。写像の合成について記号を述べる。２進法についても復習しておく。	同　上	山口昌哉
3	不動点と完備距離空間	縮小写像の定義と性質について述べ、この写像は不動点がただ一つあることを示す。その後でいくつかの不動点が異なる写像を合成すればどんな写像ができるかについて述べる。	同　上	同　上
4	自己相似性と自己相似集合	自己相似集合の定義と、証明、ここでは新しい距離を用いる。ここでは線分が自己相似性をもつことからはじめる。２進法の新しい意味である。	同　上	同　上
5	自己相似集合の例	自己相似集合の例を具体的にあげる。ニュートンの見方との相違点を述べる。	同　上	同　上
6	ハウスドルフ次元	ここでは、普通の次元と、その一般化であるハウスドルフ次元について述べ、具体的にそれをいくつかの自己相似集合について計算する。	同　上	同　上
7	離散力学系	離散力学系とその軌道について述べる。決定論と統計論、馬蹄力学系。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	カオスとフラクタル	カオスとなる力学系の例について述べる。そのあとで、カオスとフラクタルがどう関係しているかを述べる。	山口昌哉	山口昌哉
9	非線型微分方程式系	1次元、2次元の微分方程式系について述べ3次元ではその軌道は複雑であることについて説明する。	同上	同上
10	連続力学系のカオス	ローレンツの力学系をはじめ、いくつかの微分方程式系について述べる。	同上	同上
11	電子回路でカオスを見る	実際の電子回路で、微分方程式系をつくり、カオスの振動を見せる。場合によって音もきかせる。	松本隆(早稲田大学教授)	松本隆(早稲田大学教授)
12	フラクタルの応用	フラクタルはどのように、工学や社会科学に用いられるだろうか?	山口昌哉	山口昌哉
13	フラクタルの形について	フラクタルの位相数学的見方について述べる。	畑政義(京都大学助教授)	畑政義(京都大学助教授)
14	複素力学系	複素変数での離散力学系について簡単なものから説明する。	宇敷重広(京都大学助教授)	宇敷重広(京都大学助教授)
15	ジュリヤ集合とマンデルブロー集合	ジュリヤ集合と、マンデルブロー集合を見せる。	同上	同上

＝物質の科学－物理編＝（ＴＶ）

〔主任講師：上村　洸（東京理科大学教授）〕

全体のねらい

物質の示す様々な巨視的性質をミクロの法則で如何に解明できるかを、量子論の初歩的な段階から出発して、分かり易く講義する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	物質の構成要素－原子	物質の構成要素である原子の電子状態について、最も簡単な原子である水素原子を例にとって、そのミクロな特徴を解説する。特にミクロな世界を支配する量子力学の復習に力点をおく。これを基にして原子の周期律表を統一的に説明する。	上村　洸（東京理科大学教授）	上村　洸（東京理科大学教授）
2	原子から分子へ	自然界には、原子が単独として存在するよりは、分子あるいはその凝集体として存在するものが多い。なぜ分子ができるかの原因を最も簡単な水素分子を例にとって説明する。	同　上	同　上
3	原子から結晶へ	日常我々が対象とする物質の多くは結晶状になっている。まずいろいろなタイプの結晶がなぜできるのかを考察する。次に原子が規則正しく配列している結晶の特徴について、並進対称性と逆格子の概念を説明し、結晶によるＸ線回析や格子振動について説明する。	中尾憲司（筑波大学教授）	中尾憲司（筑波大学教授）
4	結晶の中の電子	結晶中の電子の基本的性質（ブロッホの定理）を説明し、それに由来するエネルギーバンド構造を、殆ど自由な電子の近似で議論し、その特徴を説明する。バンド構造による金属と絶縁体の違いを明らかにする。	同　上	同　上
5	金　属	金属中の伝導電子は、フェルミ統計に従う互いに独立な粒子として振舞う。この考え方に基づいて、電子比熱、パウリ帯磁率、フェルミ面の形状等、金属中の伝導電子の示す重要な性質について説明する。さらにフエルミ面を実験的に決定する手段としてサイクロトロン共鳴、ド・ハース　ファン・アルフェン効果等磁場中の伝導電子の振舞いについて、そのエネルギー準位（ランダウ準位）に基づいて説明をする。	上村　洸	上村　洸
6	半　導　体	代表的な半導体のシリコン、GaAs等のエネルギーバンドの特徴を概観する。特にエネルギーギャップと有効質量の重要性、不純物の導入による浅い不純物準位の存在を指摘して・半導体中の伝導電子の特徴、絶縁体との違いを説明する。	中尾憲司	中尾憲司
7	固体の伝導現象	電気伝導とホール効果について説明する。次に金属と半導体の伝導現象について、その特徴の違いを議論する。	川路紳治（学習院大学教授）	川路紳治（学習院大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	光に対する性質	固体の光に対する性質の特徴を考察する。たとえば、金属についてはなぜ光沢があるか、半導体と絶縁体についてはなぜ透明かなど、固体での光の吸収、反射発光現象とその電子論的メカニズムを説明する。	国府田隆夫(東京大学教授)	国府田隆夫(東京大学教授)
9	磁性体とは	巨視的な物質は、反磁性体、常磁性体、強磁性体である。これらの磁性をになうものは、その構成要素である電子の磁気モーメントである。巨視的な物質に磁場を加えると、どのようにして磁化が発生するかを、ミクロなメカニズムに立って説明する。	近桂一郎(早稲田大学教授)	近桂一郎(早稲田大学教授)
10	磁性のミクロな起源	強磁性体、反強磁性体では、ミクロな磁気モーメントが自発的に整列した秩序状態ができ上がっている。このことを示す実験事実を紹介する。さらに、モーメントの整列を引き起こす力の原因について説明し、特に種々の強磁性物質を紹介する。	同上	同上
11	磁性体と光	ルビー、サファイアなどの宝石はなぜ美しい色を示すか、鉄族イオンを含む常磁性体を例にとって、その光物性の特徴を説明する。	同上	三須明(東京理科大学教授)
12	超伝導	量子効果の最も目ざましい巨視的発現である超伝導の本質をできるかぎり平易に解説する。	小林俊一(東京大学教授)	小林俊一(東京大学教授)
13	半導体素子の基礎	pn接合の構造と整流特性を説明し、これを利用したトランジスタ作用を解説する。	川路紳治	川路紳治
14	固体表面の電子	表面の電子状態は結晶内部の状態とは異なる。表面で起こるいろいろな現象を理解するには、表面の電子状態を知ることが重要である。表面にとらえられた電子の状態、仕事関数の成立ち、化学吸着のメカニズムについて述べる。さらに表面の励起機構や、電子分光法の原理について説明する。	塚田捷(東京大学助教授)	塚田捷(東京大学助教授)
15	固体の表面構造	固体の表面は結晶内部とは異なる原子構造をとっている。いくつかの特徴的な例を示し、その原因について考える。表面に特有な秩序状態や表面上の原子の振動や拡散についても紹介する。	同上	同上

＝光と電磁場＝（TV）

〔主任講師：阿部龍蔵（放送大学教授）〕

全体のねらい

光は、私達の日常生活と密接な関係をもつだけでなく、大は宇宙から小は原子・分子にいたるまで、物理学上の重要な対象である。本講義では、光が電磁波というとにかく波であるとの前提に立ち、その性質を調べるとともに、光の基盤ともいうべき電磁場を支配する基本的な物理法則について述べる。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	光と光線	1. 光線 2. 光の反射・屈折 3. 光の分散 4. レンズと光学器械 5. 幾何光学と波動光学	阿部龍蔵(放送大学教授)	阿部龍蔵(放送大学教授)
2	波の性質 (1)	1. 進行波 2. 正弦波 3. 波動方程式 4. ホイヘンスの原理	同上	同上
3	波の性質 (2)	1. 反射の法則 2. 屈折の法則 3. 干渉と回折 4. 光の干渉	同上	同上
4	光と電磁波	1. 振動電流と電磁波 2. 偏光 3. 電磁波の分類 4. 原子の出す光 5. レーザー	同上	同上
5	電流	1. 電流のキャリヤー 2. オームの法則 3. 電流密度 4. ジュール熱	同上	同上
6	電荷と電場	1. クーロンの法則 2. 電場 3. ガウスの法則 4. ガウスの法則の応用	同上	同上
7	電位	1. 電位 2. 電位と仕事 3. 導体 4. コンデンサー	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	誘電体中の電場	1. 誘電体 2. 電気双極子 3. 電気分極 4. 電束密度	阿部龍蔵	阿部龍蔵
9	ベクトル解析	1. ベクトル積 2. 発散と回転 3. ガウスの定理 4. ストークスの定理	同上	同上
10	磁石と磁場	1. 磁石と磁荷 2. 磁気双極子 3. 磁化 4. 磁束密度	同上	同上
11	電流と磁場	1. 電流が磁場から受ける力 2. 電流が作る磁場 3. 小さな長方形回路の作る磁場 4. アンペールの法則	同上	同上
12	時間変化する電磁場	1. 電磁誘導 2. ファラデーの法則 3. マクスウェル・アンペールの法則 4. 変位電流	同上	同上
13	電磁場の基礎方程式	1. 積分形の諸法則 2. マクスウェルの方程式 3. 電場に対する境界条件 4. 磁場に対する境界条件	同上	同上
14	電磁波の性質	1. マクスウェルの方程式の特別な場合 2. 1次元の電磁波 3. 電磁波の反射と屈折 4. 光学的な疎密と位相変化	同上	同上
15	電磁場のエネルギー	1. 電場のエネルギー 2. 磁場のエネルギー 3. エネルギー保存則 4. ポインティングベクトル	同上	同上

＝生物有機化学＝（ＴＶ）

〔主任講師：井上祥平（東京大学教授）〕

全体のねらい

生物有機化学は、生命現象に関連した有機化学の分野であり、解析的な面と合成的な面の双方をその目的として持っている。生化学反応の特徴を理解するにはその原理に相当するより単純なアナログの設定が有効である。これは同時に生体系を模倣した有用な人工系の構築につながる。この分野の基礎とトピックスを解説する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	生体物質の化学	生体の構造の形成、物質とエネルギーの変換、これらのための情報の保持・伝達、そして以上すべて関する調節・制御が、生物の主要な機能である。ここでは生体を構成する物質にはどのようなものがあり、それらが上記の機能にどのように関わっているか概説する。	井上祥平（東京大学教授）	井上祥平（東京大学教授）
2	酵素のはたらき	蛋白質には種々の役割を持ったものがある。その中で、特に、他の化合物を取込み化学反応を触媒する作用を持つ酵素は、どのような仕掛けを利用してこれらの働きを行っているのか。モデルやグラフィックスを利用しながら化学の基本反応を基にこれらを解説する。	大野惇吉（京都大学化学研究所教授）	大野惇吉（京都大学化学研究所教授）
3	生体の分子認識	他の化合物を取込む作用を持つ蛋白質は酵素だけではなく、抗体とか輸送蛋白、あるいはレセプターと呼ばれる蛋白などがある。これらの受容体蛋白は酵素とどこが違うのか。生物体内でどのような仕事をしているのか。モデルやグラフィックスを利用して解説する。	同上	同上
4	補酵素のはたらき	補酵素はポリペプチドであるアポ酵素と結合して酵素活性を発現するが、それ自身でも酵素類似の反応活性を示す。このため、酵素反応のメカニズムを分子論的に探る上で好都合である。補酵素の構造と反応性の相関性について説明する。	新海征治（九州大学教授）	新海征治（九州大学教授）
5	人工のホスト系	生体分子は、数多くの化合物の中から特定な化合物のみを見つけ出して、選択的に結合したり、あるいは触媒作用をする。ここでは、このような生体の分子認識を模倣した人工物（ホスト）を分子設計ならびに合成する手法と、選択的分子認識能について説明する。	小宮山真（東京大学教授）	小宮山真（東京大学教授）
6	人工酵素	酵素は基質結合部位と触媒部位より構成されており、驚くべき高選択性と高活性を実現している。本講義では、選択的な基質結合能を持つ人工ホスト化合物（第５回参照）に、触媒活性部位を導入することにより、人工酵素を構築する手法について説明する。	同上	同上
7	酸素の運搬体	呼吸で取り入れた酸素を動物のからだの隅々まで運ぶヘモグロビンという生体物質がどのような仕組みをもっているのか？　酸素と金属錯体の化学、金属蛋白質の機能、そのモデル化合物を、分子レベルでやさしく解説する。	生越久靖（京都大学工学部教授）	生越久靖（京都大学工学部教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	窒素の固定	生体内では鉄、モリグデン、銅、亜鉛など多くの金属を含む酵素が生体内反応で重要な働きをしている。ここでは、窒素の固定を中心に、金属が果たす役割に焦点をあて、工業的空中窒素固定法（ハーバー・ボッシュ法）との比較。人工酵素系の構築などにも言及する。	干鯛眞信（東京大学工学部教授）	干鯛眞信（東京大学工学部教授）
9	生体膜をまねる	生体膜は脂質二分子膜、たんぱく質、糖鎖から成っている。最初に生体膜の構造と機能を簡単に紹介する。続いて人工系で脂質に分子膜を作る方法、その機能などについて解説する。さらに脂質膜にたんぱく分子を埋め込んだ人工細胞膜の可能性についてふれる。	岡畑恵雄（東工大生命理工助教授）	岡畑恵雄（東工大生命理工助教授）
10	人工光合成をめざして	人間の生存・生産活動は大半が光合成に支えられている。また光合成プロセスは超高効率のナノデバイスでもある。光合成機構を最新の知見も交えてわかりやすく解説し、これを模倣した人工系の提案、その将来性などについて論じる。	渡辺正（東京大学助教授）	渡辺正（東京大学助教授）
11	筋肉をまねる	筋肉は食物を分解して得た化学エネルギーを有効に力学エネルギーに変換している。高分子ハイドロゲルは網目状高分子の中に多量の水あ含んだ「ソフトマテリアル」である。このゲルに外部刺激を加えて力や運動を生み出せるようになった。その原理と仕組みを実際例を用いて示したい。	長田義仁（茨城大学教授）	長田義仁（茨城大学教授）
12	感覚をまねる	私達の感覚の実体は、受容器に接続する神経で発生した電気的インパルスである。神経インパルスは脳に伝播し、神経細胞のネットワーク（ニューラルネット）でもって情報処理される。このような機能をもつ素子を、人工的に作るための指針を解説したい。	中田聡（奈良教育大学助手） 吉川研一（名古屋大学助教授）	中田聡（奈良教育大学助手） 吉川研一（名古屋大学助教授）
13	核酸のはたらき	核酸はわれわれの体の中で、遺伝情報の伝達や、タンパク質合成に際してそれを構成する各種アミノ酸の配列を決める重要な知的高分子である。同じ高分子でありながら、どうしてこんなすばらしい機能が発揮できるのか、核酸分子の材料、種類、はたらきを解説する。	竹本喜一（阪大教授） 稲木良昭（大阪大学助教授）	竹本喜一（阪大教授） 稲木良昭（大阪大学助教授）
14	核酸をまねる	上にのべたように、核酸の情報伝達の活性は分子認識の機能につながる。核酸は複雑な構造をもつ高分子であるが、機能にあずかる核酸塩基を分子設計によって、低分子や高分子に組みこむことはむつかしくない。このような合成核酸の化学とその応用についてのべる。	同上	同上
15	生命の起源を探る	生命はいつ、どこで、どのようにして誕生したのだろうか。近年の宇宙、地球についての知識の飛躍的増大や分子生物学の進歩によって、この謎に実証的に迫ることが可能になった。本講座では最新の研究成果をふまえて、生命誕生のシナリオをわかり易く説明する。	柳川弘志（三菱化成生命科学研究所主任研究員）	柳川弘志（三菱化成生命科学研究所主任研究員）

＝植物生理学＝（TV）

〔主任講師：増田芳雄（帝塚山短期大学教授）〕

全体のねらい

植物は特有の構造と機能をもっている。光合成、チッ素固定などの重要な働きに地球上の全生物の生存が依存している。また、植物の成長、分化、とくに分化全能性は近年のバイオテクノロジーに広く利用されている。本講義では、植物の栄養、代謝、成長などにつき、基礎的な面に焦点をおいて解説したい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	植物の生理とその特性	植物学の一分野としての植物生理学は十九世紀に確立された。植物のもつ特有の構造と機能に関する基礎研究はその場とくにヨーロッパにおいて発展の端緒が見出される。その歴史的発展と、現況、その目標について概説し、第2回以降の講義についても紹介したい。	増田芳雄（帝塚山短期大学教授）	増田芳雄（帝塚山短期大学教授）
2	植物と水および環境ストレス	高等植物は水不足・過剰、高温、低温、大気汚染などの環境ストレスを受けるが、一方耐性を獲得して生き残る。ストレスに対する反応および植物体内の水移動の機作について述べる。	倉石　晋（広島大学教授）	倉石　晋（広島大学教授）
3	植物体における物質の吸収と移動	根で無機窒素、リン、カリウム、マグネシウムをはじめ多くのイオンが能動的に吸収され、植物体内を特定方向に移動する。また葉などで合成された光合成産物や根で合成されたアミノ酸などの移動なども特定方向であり、その理由と機作について述べる。	同　上	同　上
4	植物細胞における物質の輸出	細胞膜を通っての外界と細胞との間の水やイオンの動きと、それをひき起こす力、細胞内での物質の移動に関与する現象としての原形質流動、細胞間での物質の移動における細胞間連絡の役割などについて述べる。	菊山宗弘（放送大学助教授）	菊山宗弘（放送大学助教授）
5	光合成　I 明反応	光合成のoverall 反応＝光の吸収、ガスの出入り、明反応と暗反応、光エネルギーの捕捉＝色素、量子収率、エマーソン効果；光がひき起こす電子の流れと光リン酸化；酸素の放出；光合成の構造と機能＝葉緑体（分子の世界から細胞まで）；葉緑体の自己増殖	辻　英夫（京都大学教授）	辻　英夫（京都大学教授）
6	光合成　II 炭酸固定	大気CO_2の植物への取込み；カルビン回路＝回路のしくみ、明反応との関係、回路の調節；C_4植物とCAM植物＝回路のしくみ、葉緑体構造の分化、環境への適応；光吸収＝3種のオルガネラの共同作業；光合成産物の転流＝source-sink 関係。	同　上	同　上
7	窒素固定とタンパク質合成	大気中の窒素の固定＝根粒菌の共生、窒素固定の反応系；土壌中の窒素とその植物による取込み；植物体内での硝酸の還元；アミノ酸の合成；タンパク質の合成・プロセッシング・会合の調節；タンパク質の分解と窒素化合物の体内移動＝発芽時、老化時の変化	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	成長相関と植物ホルモンの働き	植物体のある部分がシグナルを出すことによって他の部分の成長に影響をおよぼす現象を相関という。頂芽優勢、重力屈性、光屈性などの相関現象でシグナルとして働くのは植物ホルモンである。植物ホルモンの生理作用、合成および代謝について概説する。	神阪盛一郎(大阪市立大学教授)	神阪盛一郎(大阪市立大学教授)
9	細胞成長と細胞壁	植物細胞の吸水生長は液胞の浸透圧と細胞壁の伸びやすさのバランスによって決まる。細胞壁がゆるむことによって吸水生長が起こる。このことを理解させるために、浸透圧の働き、細胞壁の力学的性質、化学的性質および細胞壁の構築について解説する。	山本良一(帝塚山短期大学教授)	山本良一(帝塚山期大学教授)
10	植物の運動	植物の器官が、環境からの刺激に反応して運動する傾性という現象がある。傾性運動は生長や膨圧変化による細胞の容積変化による器官の構造変化によって起きる。巻き髭のコイリング、葉の就眠運動、食虫植物の捕虫葉の運動などの傾性現象について概説する。	神阪盛一郎	神阪盛一郎
11	遺伝的変異と生理的機能	突然変異した作物を利用して人類は農業を発展させ、この狭い地球に50億もの人類を養うことができた。DNA上で生じた変化が植物ホルモンや細胞壁に変化を及ぼすことを、わい性突然変異を例にとりながら説明し、さらに環境と遺伝子発現についても説明する。	倉石　晋	倉石　晋
12	分化と全能性 I	主として高等植物のイン・ビトロ培養系を例として、細胞・組織・器官・不定胚の分化、形態形成のメカニズムについて解説する。Iにおいては特に前世紀末以来の先人の考え方、実験、研究の歴史的展開を軸として講義を進める。	原田　宏(筑波大学教授)	原田　宏(筑波大学教授)
13	分化と全能性 II	Iの講義をふまえて、分化について具体的なケースを例示しながら講義を進める。特に全能性の発現と関係深い不定芽・不定根・不定胚分化、童貞生殖、花芽分化を取り上げる。なお関連して、細胞融合、外来遺伝子の導入等による形質転換についても概説する。	同　上	同　上
14	光形態形成とフィトクロム	種子発芽、伸長、葉の展開など、植物の成長や分化の過程か光によってどのように制御されるかを説明する。とくに、これら諸反応の光受容体であるフィトクロムが発見された経緯、フィトクロムの化学的性質、作用様式などを、具体例を挙げながら解説する。	滝本　敦(京都大学名誉教授)	滝本　敦(京都大学名誉教授)
15	生物時計と花芽の形成	生物時計発見の歴史、その性質、しくみ、生理学的意義などを簡単に説明した後、光周期による花芽形成制御の機構を解説する。とくに、光周反応におけるフィトクロムと生物時計の役割に重点を置き、それらと花成ホルモンとの関係にも言及する。	同　上	同　上

＝動物の行動と社会＝（ＴＶ）

〔主任講師：日高敏隆（京都大学教授）〕

全体のねらい

動物の行動をさまざまな面から眺めてみて、そのしくみ、生存にとっての意味、社会とのかかわり、学習、進化などを理解し、人間の場合についても新しい視点を開く。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	動物行動学とは	@未分化状態から“生物学”的側面の重視、and/or他の部分の切捨て @本能に込められた視点：（固定的動作パターン：歴史としての）、行動目録 @いわゆる“４本の柱”	日高敏隆（京都大学教授）	日高敏隆（京都大学教授）
2	生得的解発機構	行動の発現機構1) @解発因　くちばしつつきetc @生得的解発機構；想定された行動を引き起こす機構。おもに神経系並びに内分泌系などの側面の実証されたこと。 eg. 神経系；メンフクロウの定位、ヒキガエルの捕食定位 内分泌と動機づけ	同上	同上
3	環境世界と外界認識	＜動物達はどの様に彼らの住んでいる世界を分節化して組み立てているのだろうか。＞ @生活空間への定位 @時間の区分 @同種の他固体（あるいは配偶者）の認知 @血縁者の認知	桜井一彦（京都大学教養部非常勤講師）	桜井一彦（京都大学教養部非常勤講師）
4	情報伝達・コミュニケーション	＜動物達が自己の持つ情報を他個体にどの様にして伝達しているかをみる。＞ @誇示・社会的信号 @信号の進化 種を超えた信号の共有 ？信号にみる物理的制約？ @偽りの発信	同上	同上
5	行動の発達と学習（1）	＜個体発生の中で行動がいかにして発達・確立するかをみる。＞ @発達の過程の具体例 @成熟と学習 @学習の類型	同上	同上
6	行動の発達と学習（2）	＜？種固有の行動様式と学習の入り組んだ関連＞ @刷り込み @囀りの発達 @文化	同上	同上
7	行動の進化と遺伝	動物の行動は形態的特徴と同じ様に自然淘汰によって進化してきたと考えられる。この考えの基本となる行動の遺伝と自然淘汰についてみてみよう。	近　雅博（京都大学教養部非常勤講師）	近　雅博（京都大学教養部非常勤講師）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	適応度とは	動物は繁殖のため、多大な努力を払っている。この努力や精巧に組み立てられた行動の仕組みは、一体なんのためのものなのか。	近　雅博	近　雅博
9	最適戦略とESS	動物達は、自分の適応度を高めるためにいろいろな戦略をとっている。最適戦略（もっとも効率のよい戦略）とESS（進化的に安定な戦略）についてみてみよう。	同　上	同　上
10	代替戦略と共進化	ESSの考え方では一つの戦略（行動）だけが安定とは限らない。各個体に固有の条件やその場の状況に合わせていく通りかの行動をとることがある。そのいくつかの例をみてみよう。また行動は他種とのかかわり方で大きく変化する。これについても考えてみる。	中島康裕（京都大学教養部非常勤講師）	中島康裕（京都大学教養部非常勤講師）
11	社会構造(1)群れとなわばり	動物の中にはそれぞれが離れて暮らすものもいれば、群れて暮らすものもいる。群れを作ることの損得、なわばりを持つことの損得について考えてみる。	同　上	同　上
12	社会構造(2)配偶システム	一夫一妻、一夫多妻といった配偶システムはどのようにして決まり、またシステムの可塑性はどの程度のものなのか考えてみよう。	同　上	同　上
13	性　淘　汰	自然淘汰だけで考えると明らかに不利な形質を持つ動物はたくさんいる。そうした“奇妙”な形質は性淘汰によって生じていると考えられる。	同　上	同　上
14	利他行動と包括適応度	動物の世界には、一般的に利他的な行動がたくさん見られる。これは自己の適応度を高めるという考え方では説明できない。そこで包括適応度という概念が提出された。	近　雅博	近　雅博
15	動物の行動からみた世界	本講義をまとめるにあたって、動物の環境世界について考察を加え、さらにエソロジーという観点から人間そのものをみてみたい。	日高敏隆	日高敏隆

＝ 生 活 と 環 境 ＝　（R）

〔主任講師：矢部章彦（お茶の水女子大学名誉教授）
主任講師：仲村優一（放送大学教授）〕

全体のねらい

「生活と福祉」専攻の柱となっている個別の専門別の具体的な主題を、環境との関わりあいという共通の視点からとらえて分析検討し、専門間の境界領域の問題を探る中から、本専攻の共通課題を明らかにすることを目的とする。学生にとっては、卒業研究のテーマ設定に手がかりを与える機会にもなることが期待される。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	生活と環境 ―序論―	“生活と福祉”専攻の担当者を中心に主題に関する境界領域の問題を探り、新たな研究の進展に役立てたい。主要な柱は、生活技術を源流とする衣食住の課題、社会的ないし文化的視点からの生活福祉、これに生涯健康科学という新しい視点を加えて所論を展開する。	矢部章彦 （お茶の水女子大学名誉教授）
2	住生活(1) 高齢化社会と住環境	主として統計資料を中心として欧米には殆ど例を見ない三世代居住がわが国に多く見られる理由が何か、また今後高齢化社会の到来が予想される中で三世代居住がどの様に変わっていくのかその動向について考える。また老人特有の生理的、心理的な特性を明らかにする。	本間博文 （放送大学教授）
3	住生活(2) 高齢者の住宅事情	高齢者世帯の住宅事情を各種の統計資料に基づいて考察する。中でも三世代同居世帯に着目し、平均的な住宅条件、並びに住空間の使われ方の実態を調査結果に基づいて明らかにし、三世代同居の現代的な意義並びに住宅に関する現状の問題点と改善の指針を探る。	同上
4	住生活(3) 高齢者世帯の家族関係	三世代同居世帯の住計画を行うに当たって、その家族生活の実態を知る必要がある。時間と空間の座標軸の上に投影された家族生活をもとに望ましい三世代同居世帯の家族関係を考え、このような家族関係を実現するための住計画の基本方針を明らかにする。	同上
5	衣生活(1) 生活文化史へのアプローチ	フランスにおける生活文化の調査に関し、これまでの成果と近年アナール派が提唱する新しい方法と課題について、衣生活の問題を中心に述べる。	徳井淑子 （お茶の水女子大学助教授）
6	衣生活(2) 衣の歴史と環境	生活文化史の新しいテーマの一つとして注目されている清潔感の歴史を衣生活とのかかわりの中で、西欧に	同上
7	衣生活(3) 生活の中の色	ニュートンとゲーテに始まる色についての論争を原点に、新たに生活を受皿として色を考えてみる。東西の色についての認識について、重ね色目と紋章の色を例に配色についての問題提起を試みる。	矢部章彦 徳井淑子

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	衣生活(4) 白さの意識革命	色の一つである白を特にとりあげ、民族固有の白によせる思い、宗教と結びついた白の戒律、などが科学技術のもたらした新しい白の出現によって、どの様に変貌しつつあるかを、新しい技術社会への反省をこめて、論じてゆきたい。	矢部章彦
9	衣生活(5) 洗剤と環境	洗濯をはじめとする“洗う”という営みに関連して、古来からの石けんと合成洗剤とが出会って以来の、さまざまなアツレキを通して、ヒトにとって便利さとは何か、地球環境の生態系を乱しているヒトのあり方とは、などについて考えてみる。	同上
10	食生活(1) 食と社会環境	食は基本的な生活の領域であるが、社会環境の影響を強く受ける。ここでは社会環境を人口学の立場から捉え、社会の年齢構造、世帯類型、都市の規模、地域環境の区分によって主食パターン分布の分析を試みる。	宮崎基嘉（元放送大学教授）
11	食生活(2) 食と家族	生活の基本単位である家族は、食の営みに深いかかわりをもっている。食と家族とのかかわりを知る一つの方法として、家族が欠けたり加わったりすることが食のどのような変化につながるかについて考えてみたい。	同上
12	食生活(3) 食の生態学	人が「食べること」のしくみを、人間、食物、環境の三つを要素として、これらのつながりを捉えようとするが食の生態学である。この学問はまだ若いが、体系化の手がかりを三つの事例を中心に考えてみる。	同上
13	健康と生活(1) 健康と衣服	室内、戸外を問わず、大気の温度、湿度、気圧に対し生体は相応の生体反応をおこす。衣服は、外界の直接刺激に対する緩解作用を重要な機能の一つとしている。また衣服自体が刺激となることも多い。衣服に対する生体反応のしくみを考える。	本間日臣（元放送大学教授）
14	健康と生活(2) 健康と食生活	成人病の多くがライフスタイル病と呼ばれる状況下で、食習慣は最も大きな影響因子の一つである。健康保持のためには、栄養物の選択のみでなくその摂取の方法も重要である。食生活と健康問題を消化管の反応を中心に具体的に考える。	同上
15	健康と生活(3) 健康と住生活	住居内の空気の汚染度、温度、湿度をはじめ、住居の構造、音響など健康に直接関与する因子が多い。例えば入浴一つをとっても浴場の構造、湯の温度、カビの発生など問題とすべき点がある。住生活と密接に関連する病態のしくみを考える。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
16	健やかな子を生むために―新しい感染症の視点から(1)	人間の誕生から生涯にわたるからだと心の精緻なはたらきは、これらを微妙に安定させ活動させている維持機構によって支えられているが、これは天与の生命現象である健康な子を生むには母親となる女性の健康が基盤である。特に妊娠から出産、授乳、保育などの過程で子供の将来の健康に密切に関係する性行為感染症など新しい感染症がクローズアップしてきた。クラミジア、トキリプラフマ、HB、肝炎ウィルスなどについて述する。	古谷　博（放送大学教授）
17	母と子のつながり―新しい感染症の視点から(2)	母と子のつながりにおけるウィルス感染症として最近注目されている成人　細胞白血病ウィルス、ヘルペスウィルス、ヒト乳頭腫ウィルスなどについて述べた。これらのウィルスの基礎的研究とその検査・疫学・臨床の発展は、そのまま母子健康科学における重要な部門の一つを占めるに至っている。母と子の密切なつながりのもとにある周産期が特に濃厚な潜伏的継代感染をおこす時期であるという事実を強調したい。	同上
18	女性のライフスパンと健康	出生と乳児死亡の減少、平均寿命の延長、それに高学歴化と社会進出の増加は、女性の生涯のすごし方、健康観に次第に変革し、結婚、家庭、育児などの考え方にも変化がみられている。社会環境との不断の相互関係のもとにある。女性の長いライスパンにおける健康の意義について考えたい。	同上
19	生活の心理学 (1) 食の心理学	食事とそれに付随する行動について、心理学の視角から考える。すぐれて現代的な疾病である神経性無食欲症を出発点とし、文化の発達とともに　離した身体と食物、さらには象徴性を失った現代の食卓状況に関して検討する。	織田尚生（甲南大学教授）
20	生活の心理学 (2) 衣服の心理学	衣服は着る人の自己表現の手段になると同時に、自我と社会あるいは自我と深層とを媒介する装置としての機能をもつ。この点について、文化人類学や民話学の知見を採用しながら考察を進める。	同上
21	生活の心理学 (3) 心の健康と社会福祉	本章は、心理学と社会福祉の接点にかかわる。心の健康を損なうことによって生活上の困難を生じた人々に対して、PSWがどのような形で、援助を行うか、その構造と実際について学ぶ。	同上
22	福祉と余暇 (1) 人間の社会生活と環境(1)	人間の生活は、人間をとりまく社会環境との相互作用のなかではじめて成り立つものである。言いかえれば、人間は環境と関わりあうなかで、はじめて人間としての生活を営むことが可能となる。かかる意味での人間の社会生活の成り立ちと機序を明らかにする。	仲村優一（放送大学教授）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
23	福祉と余暇(2) 人間の社会生活と環境(2)	人間の生活にとって社会的・文化的環境のもつ意味の重要性を明らかにした上で、人間の社会生活をさまたげる環境要因について吟味してみる。その上で、生活上の社会問題解決の方途を、人間の社会環境に照明をあてつつ考えてみる。	仲村優一
24	福祉と余暇(3) 環境とその対策	環境問題とは何か、および、その顕在化と社会的対応策が講じられるに至ったプロセスを吟味する。特に公害対策基本法と関連法、および、国連人間環境宣言等を中心にその意義を検討してみる。	同上
25	福祉と余暇(4) 保健医療と国際協力	国際化の意味を明らかにした上で、国際的にみた保健医療状況を点検してみる。特に、開発途上地域の恵まれない状況に対する先進開発国の援助のあるべき方向をさぐってみる。	同上
26	福祉と余暇(5) 環境問題と国際協力	国連人間環境宣言やナイロビ宣言の中から環境問題をめぐる国際協力のあり方をめぐってみる。その上で、わが国の開発途上国援助の現状と問題点を明らかにする。	同上
27	福祉と余暇(6) 労働時間と余暇	生活時間のなかで、とくに働いている人は、労働時間の占める割合が高く、その他の生活の在り方を律する。またそれは、家族生活にも影響がある。その関係について、現在の労働時間短縮問題を焦点におきながら、今後の生活のあり方との関連を述べる。	一番ケ瀬　康子 （日本女子大学教授）
28	福祉と余暇(7) 余暇と生活空間	学歴の向上、高齢化、労働ち短縮などの諸状況のもとで、余暇時間がふえてきている現代において、その余暇が、どのようにつかわれるかは、人生の在り方に大きな意味をもつ。その在り方を規制するものとして、生活空間の状況を考察してみる必要がある。	同上
29	福祉と余暇(8) ボランティア活動と生活文化	余暇時間の中で積極的な創造性を持つボランティア活動は、福祉のみならずさまざまな生活場面の文化を創造していく意味を持つ。環境を生活者の例からのりこえていく活動の在り方を、ボランティア活動を通じてとらえる。	同上
30	まとめ 分化と総合	29回に及ぶこれまでの講義の内容を復習整理した上で、「全体のねらい」、及び、1の序論で提起された目標に照らして、全体のまとめの検討をする。その上で、それぞれの学問の広がりから新たな学問の展開の可能性を追求してみる。	仲村優一

＝心理と教育＝（TV）

―社会化―

〔主任講師：中川大倫（信州大学名誉教授）
主任講師：深谷昌志（静岡大学教授）〕

全体のねらい

社会化は個人の行動と社会の要請との間の持続的な相互作用を大きく含む。従来は主として児童期頃までに実現される過程と考えられていた。しかし、現代は社会的構造の大きな変動下にある故、本書では、この問題を人の長いライフサイクルの過程においてとらえ、可能なかぎり方法論に視点をおいて講述をする。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	社会化についての概要	社会化とはどんなことか。学習、適応、自己統制、文化の内面化などとのかかわりはどうか。そして、その社会化が歴史的にどのように考えられてきたか。現代の社会化の特色はどうか、その範囲はどうか、これらの問題について論述する。	小口忠彦（お茶の水女子大学名誉教授）
2	社会化研究の歩み―方法論を中心に―	遊びの研究を素材としながらアンケート調査を中心とした量的な調査の進め方を概観する。特に、コンピューターを利用した調査の基本を紹介し、あわせて、事例調査の進め方にも付言していきたい。	深谷昌志（静岡大学教授）
3	縦断的方法と横断的方法	乳児期から老年期まで、異なった年齢における人間の行動についての観察や測定などの結果を、成長の順序に従って、タテに関連づけようとする研究方法を中心にして説明する。	小口忠彦
4	母子相互作用	母子間のやりとり（turn-taklng）を中心にして微笑反応の出現、人見知りの発生などを研究する際の方法について考察する。	新井邦二郎（埼玉大学助教授）
5	言語の発達	社会化と言う視点から言語発達をとらえる。具体的には、(1)言語発達の流れ、(2)言語発達の個人差、(3)言語発達と思考との関連などについて考えることにする。	岩立志津夫（信州大学講師）
6	マザリングをめぐって	乳幼児期の親子関係、特に母子関係のあり方は、近年大きく変わってきた。ここでは、比較文化的な視点から、わが国の「母子一体化」の内実を、マザリングの概念を用いて国際比較調査などによって明らかにする。	中川大倫（信州大学名誉教授）
7	子やらいの世界	子供のしつけ方の日本的な源流を江戸時代に戻る形で考えていく。この回では、日本の古い雑誌や本の利用の仕方を考えていく。あわせて聞き取り調査の進め方の基本についても紹介していく。	深谷昌志

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	「エミール」を手がかりとして	「エミール」を手がかりとして、西欧の子どものしつけ方のルーツを探っていく。あわせて欧米の原著や雑誌などを利用しての研究の進め方についての基本を紹介する。	志村鏡一郎（静岡大学教授）
9	学校文化	学校制度がどう形成され、それが子どもの人間形成にいかにかかわっているかを考察する。教育史の研究の進め方について、主として、明治以降の資料の扱い方を紹介していく。	深谷昌志
10	ひとの振り見て習う―モデリング―	「朱に交われば赤くなる」と言うことわざのとおり、社会的行動の発達に対してモデリングは大きな役割を果たしている。このモデリングに関する実験的研究を紹介しながら、実験的研究法の目的や手続きについて考えていく。	肥田野直（東京大学名誉教授） 山口勧（東京大学助教授）
11	学級	学級集団は、子供が学校の中で生活していく場であり、そうした集団を通して、子供たちはさまざまなものを学んでいく。学級集団は40人前後なので、質量ともに分析しにくい側面をもつ。そうした小規模サイズのデータ処理を考えていく。	深谷昌志
12	父親らしさの変貌	父親の姿が変わってきたといわれる。たのもしいが、しかし、やさしさも持った父親が増加している。そうした父親の姿をとらえるのにどうしたらよいのか。アンケート調査を中心として、その手続きを紹介していきたい。	同上
13	国際化社会に育つ	海外に勤務する両親とともに幼年期・少年期を外国で過した後に帰国した、いわゆる海外子女・帰国子女たちの異文化間体験と、その人格形成へのかかわりについて考察し、国際化社会に育つ子どものもつ諸問題を理解する。	小林哲也（京都大学教授）
14	適応と逸脱	社会化というと、適応にイメージを置きやすいが、逸脱のアングルも社会化研究の重要な側面を形成している。ここでは、逸脱現象を研究レベルでどうとらえていったらよいのか、そうした方法論を深めていく。	麦島文夫（帝京大学教授）
15	からだとの出会い―性の問題―	身体的成熟、とくに第二次性徴の発見が、青年の心理面に、どのような影響を及ぼすのか。性的成熟を通して青年がどのような問題に直面し解決していかねばならないのか、といった諸問題を研究する際の方法について考える。	福富護（東京学芸大学助教授） 宮川知彰（東北大学名誉教授）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
16	学力をとらえる	学力という用語は、日本独特のものだといわれる。一般には、人間の能力のうち、学業によって達成・評価された「特殊な力」（成績）と定義される。ここでは我が国の学力観をふまえ、学力の内容と形成の過程（プロセス）を、具体的なデータによって分析する。	岡崎友典（放送大学助教授）
17	アイデンティティと自立	青年期には、おとな社会に適応できる一個人の人格としての自立、アイデンティティの成立が期待されるが、この問題について考えるさいの方法について考える。	久世敏雄（名古屋大学教授）
18	青年期における性役割の社会化	男も女も人間である。ただ、性による社会的分業がなされる社会（男と女が区別される）では、「性差」がどのように形成されるかが、その社会的背景とかかわって教育上の問題とされる。ここでは、性的社会化について各種の調査データをもとに学習する。	神田道子（東洋大学教授）
19	青雲の志し	近代日本社会の成立期（変革期）に、重要な役割を果たした青年たちの、人生の軌跡を文献資料によって分析する。明治・大正時代の「青年の志し」の形成過程を、人材輩出ルート（政・財・官界別）と社会発展と対応させて考察する。	深谷昌志
20	現代の進路選択	子どもから大人へ。青年期の進路選択は、彼らの社会人としての「成人役割」を決定する。上級学校進学者も、最終的には「就職」の関門を超えなければならない。ここでは、「職業的社会化」と職業選択との関連を、各種の調査データを用いて分析する。	岡崎友典
21	青年の適応と逸脱	青年期には精神内界の均衡を保ちながら大人社会に適応できる人格を形成していくことが期待されるが、身体の急激な変化や生活条件が作用して非適応状態や逸脱行動を招くことがある。この問題を研究するさいの方法について考察する。	秋葉英則（大阪教育大学教授）
22	青年のサブ・カルチャー	学校は教育目的・内容によって類別されているが、同種の学校間にもその特性により学校差が形成される。中でも非制度的（インフォーマル）な文化としてのスクールカラー（学校文化）が、学校の性格を規定することがある。ここでは、中・高等教育機関を中心にスクールカラーの調査データをもとに「仕学青年」の文化の諸特徴について学ぶ。	耳塚寛明（国立教育研究所）
23	職業生活への適応	社会化の問題を人生の長いライフサイクルの中で捉えると、学業を終了し、職業生活に入ることは、新たな社会化の問題に直面することになる。本講は高度成長と技術革新を伴った経済社会の激しい変動の中に生きる働く者の諸問題を取り上げて講述する。	越河六郎（労働科学研究所研究員）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
24	働く母親の問題 —マターナル・デプリベイション—	親になることは、生物学的には容易でも心理的にはそれほど簡単でない。そこで、親になる心構えの形成を子どもの人間形成に関連させて深めていく。併せて、質的なデータを量的に処理していく方法論を深めていく。	深谷和子 （東京学芸大学教授）
25	技術革新の中での適応 —ＯＡ化社会の中で生きる—	現在、我々が直面する技術革新のテンポは極めて速い。本講はこの技術革新の激しい流れの中に生きる者の適応問題に焦点をあてる。即ち技術革新が生んだ高度のＯＡ化と働く者との関係を中心に、技術革新と人間疎外の克服等現代の成人が直面する問題にふれる。	椎名新一 （杉野女子大学講師） 中川大倫
26	地域生活と余暇活動	成人の行動様式は情報化の到来につれて変容をとげつつある。かつての地域に変わって、心理的な空間は広がりを見せ始めている。そうした行動のパターンを追う方法を調査の形を辿りながら深めていきたい。	岡崎友典
27	老年期における心的硬さ —老年期と適応	人生の各ステージには、それぞれ特有の問題があり、固有の研究法が必要となる。老年期における心理学的研究は、いまだ確立された段階ではないが、そこでの研究法を、特に臨床的手法を中心にながめてみたい。	荒井保夫 （横浜市立大学講師）
28	老人と家庭	老年期をライフステージにより類型化する。類型別に家族関係、役割の特徴を整理し、老人が達成すべき課題を明らかにする。特に変動する社会にあって、老人が社会に適応するには多くの困難が伴う。調査資料をもとに社会的課題についても学ぶ。	袖井孝子 （お茶の水女子大学助教授）
29	老化に対する適応 —再社会化—	老年期の入口で大半の人々は、子供の自立、定年退職等でこれまで自分が持っていた役割を失う。そのことで社会との接触を断たれてしまう人もあるが、社会の中で老人として新たに、その役割を見いだす人もある。老年期の生きがいの問題を考えてみる。	村瀬孝雄 （東京大学教授） 下中順子 （東京都老人総合研究所研究員）
30	エピローグ	講義の全般を概観し、検討し、残された課題を整理して述べる。	中川大倫 深谷昌志

＝ 都 市 の 研 究 ＝ （ＴＶ）

〔主任講師：加藤秀俊（放送教育開発センター所長）
主任講師：菊竹清訓（建築設計事務所長）〕

全体のねらい

都市化現象は20世紀から21世紀にかけての、人類共通のおおきな課題のひとつであろとおもわれる。この総合科目では、この都市のさまざまな側面について、学際的な接近をこころみ、たんに社会科学のみならず、人文、自然にまたがる都市の総合的研究の成果とこんごにのこされた問題点をあきらかにするとともに、この主題の周辺に卒業研究をもとめる学生に刺激と方向をあたえるように講義内容を配慮した。また、受講者の便宜をはかり、問題別に整理をはかるため、４単位科目30本の番組を５本ずつ６つのサブ・ユニットにわけて、担当講師もおおむねそのサブ・ユニットに対応してふりわけることとした。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	都市現象の考察	「都市化」ということばはよく使われるが、この講義では「都市化現象」という視覚からとらえることにする。その背景はなんだろうか。	菊竹清訓（建築設計事務所長）
2	都市とはなにか	都市ということばや概念をわれわれは日常的に使っているが、都市の定義はむずかしい。その諸説をふまえて都市の本質をさぐる。	加藤秀俊（放送教育開発センター所長）
3	近世都市の類型	日本の近世は全国に都市が噴出し、本格化した時代であった。ここでは、都市が形成されるにいたった三つのパターンを考察する。	同上
4	首都の成立と変化	日本で十世紀以上にわたって首都でありつづけた京都は、その歴史とともに大きく変化してきた。首都とはいったいどんな性格を特徴としているのだろうか。	同上
5	都市のシンボル	都市にはかならず象徴機能がともなう。それぞれの都市が、いったいなにをそのシンボルとしているのかをさぐってみる。	同上
6	経済構造の変化と都市化	都市は経済の中心である。都市のなかで経済はどんな構造とはたらきをもっているのか、それを吟味する。	高橋潤二郎（慶應大学教授）
7	都市化の一般過程	都市、とりわけ大都市が形成されてゆくプロセスを理論的、現実的にとらえておくことは、現代のわれわれにとっての急務だ。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	都市システムの研究	都市は雑然としていて、とらえどころがないようにさえみえる。だが、そこには、あきらかにシステムがある。その本質をさぐってみよう。	高橋　潤二郎
9	アーバン・ゲーム	都市の人間たちは、それぞれに利害をもっている。その利害が葛藤を生み、また問題解決の糸口にもなる。利害をゲームとしてこの問題をとりあつかう。	同　上
10	都市の経済誌	都市経済は複雑で、しかも高度の相互依存性をもっている。ひとつの商品のなかにもその混み入ったプロセスが結晶していることを実証する。	同　上
11	人類・村落・都市	人間の居住形態は歴史とともに進化してきた。ここでは、人類史の視点から、都市という居住形態の特徴をとらえて、現代を再検討する。	米山　俊直（京都大学教授）
12	都市のパースナリティ	都市環境は、そこに生活する人びとに独特の影響をあたえ、いわゆる「都会人」をつくる。社会・文化をパースナリティ＝都市のかわから考察する。	同　上
13	都市のエスニシティ	都市が世界的にひろがれば、都市はことなった民族的背景をもった多くの人びとの雑居の場となる。そうして雑居性がもたらす問題点をさぐる。	同　上
14	御成街道盛衰記	むかしからある都市は、時の流れとともに変貌してゆく。そうして都市の新陳代謝もひとつの実例に照らしてとらえなおしてみよう。	同　上
15	都市と都市文化	文化とは「生活様式」のことだ。都市に生きる人たちには、特有の生活様式がある。それはいったい、どのような性質のものであるのか、をかんがえる。	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
16	都市政策の課題	都市には行政機能が不可決だ。とりわけ現代という時代を考えれば、行政のもつ役割は大きい。どのようなことがらが、行政上の問題なのであろうか。	田村　明（法政大学教授）
17	都市経営と自治	都市は行政のがわからみれば、経営の対象でもあろう、そして、そこでは、自治体としての責任と義務が問われる。自治体のあり方を検討する。	同上
18	都市の拡大と都市分散	首都圏、近畿圏などにみられるように、都市の圏域はどんどん拡大してゆく。一千万をこえる人口をもつ都市もめずらしくはなくなった。そこで考えるべき課題のひとつは分散化であろう。	同上
19	市民参加と「まちづくり」	住みやすい都市環境をつくってゆく力は行政機関だけではない。むしろそれよりもたいじなのはその都市に住む住民の力であろう。その実例をとりあげる。	同上
20	都市のルールと都市のデザイン	都市生活は自由だが、同時に、おたがいが快適に生きるためにはルールが必要であろう。そのルールは、計画やデザインの面にも反映されてくる。	同上
21	都市と建築	都市は、せまい空間にたくさんの人が生活する、という特徴をもっている。その多くの人口を収容するためには都市型の建築が必要だろう建築が都市にたいしてもつ役割を考察する。	菊竹清訓
22	臨海都市	都市の立地はさまざまでありうるが、とりわけ海と都市とは密切な関係をもってきた。それを現代の時点で、ふたたび見直してみたい。	同上
23	都心都市	多くの都市では、その都心部がビジネスセンターとなって、中核的な機能をもつようになった。その都心部での都市現象を検討する。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
24	人工土地	土地が足りない、と多くの人がいう。しかし、その解決策のひとつとして、土地を人工的につくる、という方法もあるだろう。その実例をしめしながらかんがえる。	菊竹清訓
25	海上都市	人工土地のほかに、人間が海面上を利用して生活し、しごとをすることも技術的に可能になってきた。将来の都市像のひとつとして海上都市をとりあげる。	同上
26	都市と情報	現代の都市では、多くの情報が集積し、処理されている。しかしその原型はふるい時代から用意されていた、ここでは、	加藤秀俊
27	非都市のゆくえ	日本の国土は都市現象におおわれているが、そのなかで、都市から離れている過疎の地域もすくなくない。そうして「非都市」の現状と将来をかんがえる。	同上
28	都市の景観	都市は美しくあってほしい。たんに機能だけでうごくのではなく、人間にとってたのしく美しい景観が都市には必要だ。景観論の立場から都市を再検討する。	菊竹清訓
29	未来都市	都市は歴史の産物である。そして、もしも未来をいうのか、将来に予想される歴史であるとするなら都市がこれからどうなってゆくのかをかんがえることも重要であろう。	同上
30	都市の未来	未来をつくってゆくのは、しょせん人間の努力というものであろう。全講義をふりかえりながら、こんごにのこされた諸問題を論ずる。	加藤秀俊

＝ 情報化時代の産業・技術 ＝ （ＴＶ）

〔主任講師：磯部浩一（聖学院大学教授）
主任講師：加瀬滋男（放送大学教授）〕

全体のねらい

この印刷教材は「産業と技術」専攻の専任教授の全員と客員教授により分担執筆される。

各分担者は、すでに大きな変化が予想されながら進行しつつある高度情報化と、各自の専門分野の学問研究との相互関連や、研究の進展状況、研究課題等を明らかにし、履修生の卒業研究のテーマの選択、指導の助けとする。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	高度情報化の進展 ―実態と意義―	1970年代以降、世界の経済は大きな変動期に入り、その要因、内容、期間、進行方向について議論がなされている。変動の波は国際化、成熟化、高齢化等があり、とくに技術革新の波のうち、高度情報化は進展が早い。ここでは高度情報化の進展の実態と意義を明らかにし、経済・社会・産業への影響を検討したい。	磯部浩一 （聖学院大学教授）
2	情報化の進展と産業構造	産業構造の変化発展の方向は、生産の迂回化、工業化、重工業化、重化学工業化、省資源化、さらに、サービス化、情報化と次々に変化してきた。産業の空洞化現象も心配されている。情報化が産業構造にどのような影響を当えるかを考える。	植草益 （東京大学教授）
3	情報化の進展 ―企業と政府―	情報化の進展はアメリカにおいてＡＴＴの分割、日本では、ＮＴＴの民営化を進めた。ＡＴＴの分割は多様化による大量生産の少量生産への転換が、生産や企業の基盤にまで影響を与えたといわれる。その根底には多様化があり、高度情報化も同じ脈絡で考えられる。これらの点について、企業と政府の役割を考える。	同上
4	情報化社会の労働 ―量と質の変化	コンピュータは人間の単純労働や肉体労働を代替する。労働の現場では、情報時代の新しい労働環境に適合しにくい労働者が出てきたり、テクノストレスを訴える者が増えている。ここでは、ＭＥを中心とする技術革新や情報化の進展が雇用や失業、労働の中身や転務内容にどんな影響を与えるかを検討する。	古郡鞆子 （明海大学教授）
5	情報化と流通機構(Ⅰ)	生産と消費・産業用使用の懸隔を架橋する流通機能においては情報伝達は不可欠の機能である。それがなぜ不可欠であるかを理解し、伝達されるべき内容と伝達する手段の多様性を整理する。そして情報伝達機能を遂行する。	鈴木安昭 （青山学院大学教授）
6	情報化と流通機構(Ⅱ)	このような情報伝達機能の遂行にコンピュータが導入され、企業内と企業間の伝達に情報化が進展した。ＰＯＳやＶＡＮなど現在進行中の情報化を中心とした流通システムの現状と問題点をとり上げる。	同上
7	情報化と地域の活性化 ―情報交流の場づくり	情報化の進展は地域社会に様々な波紋を投じているが、これを地域振興整備の手段の１つとして積極的に活用しようとする動きが活発である。実例を紹介しながら、その問題点と可能性を検討す。	熊田禎宣 （東京工業大学教授） 阪本一郎 （東京工業大学助教授）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	情報化と地域の計画づくり ―知恵の集約と合意形成	計画の役割が大きくなりつつある現代社会では、計画の合理性・妥当性が強く要求されている。利害対立の調整が重要な課題となる「まちづくり」においては、計画策定に際して新しい情報システムの開発と利用が期待されている。このことを説明する。	熊田禎宣 阪本一郎
9	情報と機械	電気・光・音・温度などの物理量は、物の生産や工場の自動化、放送や電話あるいは緊急時など社会情報の伝達に不可欠な情報媒体である。これら物理量の情報伝達と処理を技術的立場より、その特徴について考察し、情報と自動化との関わりについて述べる。	小川鑛一 （東京電機大学教授）
10	情報伝達と処理	身近に見られる自動販売機、自動車、カメラなどをはじめ、ＮＣ工作機械、ロボット、自動搬送機など生産現場における最近の機械には、エレクトロニクスが組み込まれ、知能化を一歩進めた機械となっている。これらの機械と情報との関係について説明する。	同上
11	情報技術の歴史をたどる	情報技術の革新は常に社会を変革してきた。情報技術が社会をどのように変えて来たのか。そしてこれからの高度情報化社会を支えるマイクロエレクトロニクスは私たちにどのような社会をもたらしてくれるのかを見る。	東千秋 （放送大学助教授）
12	情報化時代の産業のコメ―ＬＳＩ	情報化時代の産業の米といわれる、マイクロエレクトロニクスの代表、小さなＩＣチップは、大規模集積回路（ＬＳＩ）で構成される中身のよく分からないブラックボックスである。ＬＳＩとはなにか、それはどのように作られ、将来はどうなるのか述べる。	同上
13	情報化と生産技術 ―生産の自動化をめざして	情報技術が広く浸透してきた今日の高度情報社会の中にあって、情報の活用に先駆的役割を果たしてきた工業における、従来主軸あったハードウェア技術と、今日ますます重要な位置を占めてきたソフトウェア技術の発展について述べる。	町田周郎 （群馬大学名誉教授）
14	情報化社会と生産技術展望 ―生産無人化の行方	高度情報化時代の生産の場においては、広汎多種の情報蒐集と迅速な情報処理によって最適条件の設計、加工生産また評価・管理などを行う技術が浸透してきている。ここではいくつかの例について現状を述べるとともに将来を展望する。	同上
15	プロジェクト管理の高度手法 ―ＧＥＲＴ―	PERTタイプのネットワーク計画法をより一般化したGERT（Graphical Evaluation and Review Technique）の初歩的事項を概説し、広くプロジェクト管理への関心の高揚に資したい。	加瀬滋男 （放送大学教授）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
16	構造化技法によるシステム設計 ーデータ中心への接近	最近企業が頭を悩ましているシステムのバックログ問題の打開策として、システムの構築に構造化技法の採用が期待されている。その考え方、ツール、技法のあらましを展望し、伝統的手順との差異を明らかにしたい。	味村重臣 （産業能率大学教授）
17	エントロピー・モデルによる市場構造分析 ー新銘柄進出の市場分析と価格選定	消費者の購買行動における銘柄選択の問題を、市場情報の有効利用の観点から、エントロピー・モデルにより分析する手法について解説する。あわせて、既存の市場に新銘柄が進出してきた場合の市場構造分析と新銘柄の価格選定についても講述する。	太田宏 （大阪府立大学教授）
18	経営戦略と前提 ー環境予測企業目標能力評価	経営戦略の設定は、未来の多くの環境予測情報に依存する。そこで社会・経済、技術、市場、資源政府規制等の因子を中心に、企業をめぐる環境予測の内容を説明する。	小林靖雄 （元放送大学副学長）
19	経営戦略の設定	環境予測にもとづいて、企業がとりうる戦略の諸代案のうち一つを選択する意思決定は、フォーマルな手法をもちえない。ここではその基本的前提と、若干の接近方法について述べる。	同上
20	情報化時代の生産システム —ファクトリー・オートメーション—	近年、FA、すなわち機械加工および組立の高度な自動化が進められている。本講義では、より柔軟性のある自動生産システムとして注目されるFMS（フレキシブル生産システム）の概要を説明するとともに、これからの生産システムのあり方について解説する。	横山雅夫 （福島大学助教授）
21	情報化時代の生産管理 —スケジューリングの手法—	より高度な生産システムの発展のためには生産管理システムの開発が不可欠である。本講義では、多品種少量生産を行う生産システムにとって重要な、負荷配分や加工のスケジューリングを中心として、問題のとらえ方と計画手法について解説する。	同上
22	情報化とマーケティング(1) —マーケティング革新の背景—	消費市場は、「分(少)衆化」「個別化」した市場へと変質してきた。大衆ではなく「個」の市場をいかにつかむかが、マーケティングの最大の課題である。情報化の進展に支えられ、個々のニーズを掌握するというマーケティング上の革新が起こりつつある。	伊藤公一 （千葉商科大学教授）
23	情報化とマーケティング(2) —新たなマーケティングの始動—	このマーケティング革新とは、川下発想（メーカー・卸）、付加価値提供志向(卸)、生活者の欲求への適合（小売）である。革新を支え、促す情報化として、①情報ネットワーク（VAN他）、②顧客データベース化、③POSシステム、④ニューメディア、を取り上げる。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
24	企業内容の開示制度	現在、わが国の株式会社は証券取引法と商法の定めによって、その事業内容を、いわゆる財務情報として開示しなければならないことになっている。本講では、有価証券報告書の制度、および、貸借対照表などの公告の制度につき、現状をあきらかにする。	江村　稔 （東京大学名誉教授）
25	財務情報と情報革命	投資家などに開示すべき会計情報について近年、会計学者による研究が進んでいる。とくにW.H.ビーバーの「財務報告革命」は注目さるべき業績である。本講では、この書物をとりあげて論じてみよう。	伊藤邦雄 （一橋大学助教授）
26	情報化の進展と企業の資金部門の変貌	コンピュータを始めとする情報機器の発展は、高度成長期にみられた銀行との話し合いをもとにした資金の調達と資金繰りから、より多くの情報を収集し、迅速に対応した資金の管理を促してきた。ここでは、その変貌の跡を辿り、これからの課題を考える。	古川浩一 （東京工業大学助教授）
27	情報化が経営財務に及ぼす影響の諸側面	企業の資金調達力は、その企業に対する資本市場の評価と密接に関連する。企業は自らの経営成績を会計報告書という形で利害関係者に報告している。この報告書によって与えられる会計情報が企業の評価とどのように関連しているかを検討する。	同上
28	ＯＡの基礎 －ＯＡと歴史と狙い	ＯＡを理解するために、まず、「ＯＡの歴史と背景」を考察し、その本質を見極める。そして、「ＯＡの狙い」は、一体、何であるのか、その狙いに到達するためには、如何なる「ＯＡ化のステップ」を必要とするのかを、考察する。	中村光男 ㈱岡村製作所 経営情報システム研究所 研究開発室長
29	ＯＡの実践 －ＯＡの現状・動向・課題	昭和55年前後から注目されたＯＡも今や定着しつつある。そこで「ＯＡ化の現状」を把握し、次に、今後のリード・ソフト・通信・環境整備・情報管理技術の向上と共に「高度情報化社会におけるＯＡの動向」につき、若干の考察を行い、「今後の課題」を提起する。	同上
30	総括	本講義に対する補遺や敷衍を試み、全体的なまとめを行う。あわせて来るべき時代の産業および技術の動向を展望し、今後の勉学の便に供する。	江村　稔 磯部浩一 町田周郎 加瀬滋男

＝科学と宗教＝（R）

主任講師：大森荘蔵（東京大学名誉教授）
主任講師：橋本典子（青山学院女子短期大学助教授）
主任講師：伊藤公一（放送大学助教授）

全体のねらい

科学と宗教というテーマは大きく、且つ単なる教条的理解や道聴塗説に止まってならぬ面を持っている。本講座は総合講座として、学説の記憶というより、学生諸君がこのテーマについて自分の意見を形成することを狙いにしている。それ故教材は記憶すべき玉条集でなく、諸君が意見形成する際の対話相手と考えてほしい。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	序論 －科学信仰の源流	科学の確かさはどこに由来するのかをテーマとし、科学記述の世界と日常世界のかかわりを検討する。	大森荘蔵 （東京大学名誉教授）
2	関係の原初形態 －古代は過ぎ去った影と過ぎ去らない基礎との共在する場である－	古代ギリシアのソークラテース以前の哲学に於いて、科学と宗教がどのように関係していたかを論定する。代表的学者を取り上げ、祖型に分類した。	今道友信 （清泉女子大学教授）
3	科学と宗教 －科学者として、宗教者として	科学者であり同時に宗教家である立場から、この問題を論じ、自然現象の科学的把握も神のメッセージを含むこと、その意味では、宗教も科学も一つであることを説明し、また、すべての文化的営みが一つの方向を持っていることを論じている。	柳瀬睦男 （上智大学教授）
4	神はどこに住むのか、人間はどこに住んでいるのか	人間の王国を建設するところに科学の仕事があるが、それは神の国の土台の上に据えられなくてはならないことを、人間の在るべき場所を求める哲学的考察によって明らかにしている。	加藤信朗 （東京都立大学教授）
5	「物理学者にとって神とは？」	ガリレイからニュートンを経て十九世紀に至る宗教観と、ハイゼンベルクの眼を通して見た現代物理学の創始者たちの宗教観との対比により、それらの類似と相異が汲みとられるようにした。現代科学者による問題の展開が簡明に論じられる。	小田稔 （理化学研究所理事長）
6	心の本質をめぐる科学と宗教	心、特に「わたし」の扱いを中心として、科学的世界観と宗教的世界観の特徴と限界を明らかにする。それらは二つの相異なる原語によって語られるから、直ちには結びつかない。宗教言語に習熟するためには自己革新が必要である。	稲垣良典 （九州大学教授）
7	宗教的言語が拓く地平と科学的世界	頌歌を材料に取り、宗教的言語がいかなる働きをもち、いかなる世界を拓くか、またそれは科学言語の拓く世界といかに異なるかを検討する。	宮本久雄 （東京大学助教授）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	科学的真理と形而上学的真理	現代の日本を代表する哲学者として西田幾多郎と松本正夫を取り上げ、両者に於ける科学論と宗教論とを基にして、標題のテーマを考察している。西田は自力宗教と述語論語、松本は啓示宗教と主語論理というように、相互に尖鋭な対立がある。	橋本典子（青山学院女子短期大学助教授）
9	存在と意味	科学言語と日常言語を比較し、存在に目を向ける前者と意味を求める後者を対比し、科学言語が作る科学的世界の強さと弱さを検討する。	大森荘蔵
10	科学の問いと宗教の問い ー技術・科学・宗教	技術・科学・宗教はそれぞれ何を求める活動なのか。それらの答えるべき「問」によって三者の区別を試みる。	伊藤笏康（公一）（放送大学助教授）
11	「賢者ナータン」	十八世紀ドイツ啓豪思潮の代表的文人レッシングの「賢者ナータン」を材料として、宗教間の対立、それを超える人間的真情の交流の重要性を述べる。理神論、啓蒙主義、科学的合理主義等の本質を考察し、道徳教説に於ける人間的一致の重要性を説いている。	坂部恵（東京大学教授）
12	科学時代に似合った宗教心を求めて	現代人は、科学者を含めて、倫理的責任が問題になる時、良心に訴えるか、宗教に頼ることを止める傾向が強い。その原因の一つは、宗教の側の言語表現の不適切性にありその改善が望まれる。	ルードウィッヒ・アルムブルスター（上智大学教授）
13	科学と宗教、その架け橋 ーリクールとオリベッティ	リクールとオリベッティーとの筆者の直接対話を基にして、科学と宗教の結びつきの可能性を問う。リクールを介して、詩的言語の解釈が、オリベッティーを介して、倫理がそれぞれ媒介となることを明らかにした。	橋本典子
14	科学と宗教、そして人間 ー知ることと生きること	科学は客観を、宗教は主体を問題とし、衝突はないはずであるが、知識の強情と信念の偏執が原因となって両者の関係は複雑となる。科学が自然を問題にするように、人間は宗教に関し、自己の安心立命のみならず、社会の歴史の行方に責任を持つべきである。	山本信（東京女小大学教授）
15	生命哲学と宗教 ーアンリ・ベルクソン	科学と宗教の接点の一つは生命と死の問題である。この問題に関しては、ベルクソンを介して、独自の考察を求めることも一つの方法である。科学と宗教を直接に関係づけず、科学と哲学の比較を通じて、道徳や宗教を論じる。	橋本典子

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
16	宇宙論	現代の天文学者として科学と宗教について論じる。そのため、人間が何故ここにいるのか、という問い、私が今何故ここにいるのかという問いを出発点として宇宙の構造と進化の面からそれについて考える。	小尾信彌（放送大学副学長）
17	科学理論と宗教「理論」	求めるものに応じて理論は異なる力動的構造を取る。その面から科学と宗教と技術の活動としての差は何か、また三者を連続的につなぐものは何かを検討する。	伊藤笏康（公一）
18	科学・宗教・合理化	科学と宗教を統一的に見る視点を、マックス・ウェーバーの「人間の生の合理化」に求め、両者が合理化の過程の中で緊張関係に立つことを明らかにした。近代以後、科学が生の全面に合理化を果したので、宗教は非合理の中に閉じ込められた。	濱井修（東京大学教授）
19	死	死は科学の超克出来ない現象であり宗教の基本的課題なのである。その視点からディー教授の宗教観を直接対話で尋ね、ジャンケレヴィッチを介して死の瞬間の意味を探り、死が原罪に基づくとされるところから悪の問題を考えた。	橋本典子
20	科学と禅 ー漱石の世界より	近代科学との出会いを経験した漱石の世界に於いて、科学的精神と宗教の相異を考察するため、『門』と『行人』の二作品の解釈を行った。禅を『坐』とし科学を『走』と規定した。	大橋良介（京都工芸繊維大学教授）
21	科学と宗教の基本的関係 ー二つとも古くから別々の明るさを求めている	両者の異同、混同、劇的調和という意味論的＝価値論的問題を縦軸とし、過去、現在、未来を横軸として、両者の基本的関係を論じている。	今道友信
22	言語の働きとしての科学と宗教	科学も宗教も、＜こころ＞言語の働きによって生成する地平であり、ともに「全体を求める」性格をもつ。「全体を求める」＜こころ＞言語の機構としての「縮重」を中心にし、両者の異同を検討する。	井上忠（日本大学教授）
23	技術文明と宗教 ーガブリエル・マルセル	技術が世界を支配し始めた時代から思索の生活に入ったマルセルは、技術社会に於ける人間性喪失の危険に気付いた最初の人々に属する。宗教による希望が単なる欲求と異なり、人間を新生に導くことを明らかにした。	橋本典子

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
24	愛と死	科学者として信仰をもつ自己の経験を手がかりにして、先ず、個人に於ける両者の関係を論じ、次に体制として自己変革を経た宗教に対しそれを経験しない科学に向けて、科学のあるべき姿を価値論的に提案している。	垣花秀武（上智大学教授）
25	良寛・道元ウィトゲンシュタイン	「論理」を広い意味での探究原理と考えるとき、良寛や道元の得た論理は何であったか。また近年、そのいみでの論理を重視した哲学者にウィトゲンシュタインがいる。三者の論理を中心にして考察する。	黒崎宏（成城大学教授）
26	科学・倫理・宗教―エマニュエルレヴィナス	存在を限度とする形而上学に飽き足らず、存在の彼方を志向して、倫理学を第一哲学とする現代哲学者レヴィナスの思索を通じて宗教を論じる。「顔」に於いて「汝殺すなかれ」という神の命令を読むのは周知の特色である。	橋本典子
27	将来の問題―これは省察であって予言ではない。しかし，推理と決意とは想像とともに時を先駆ける―	科学と宗教が現実を解釈する二つの目であることを明らかにし、将来に於ける宗教の必然性とその存立条件を、エゴ・エティカとの連関に於いて考察している。	今道友信
28	悪について―それは時間の非充足である。	悪の本質を時間の非充足ないし非充実と見る新しい見地から、宗教・科学・科学技術と悪の関わり合いを考察した上で、災悪と罪悪とに於ける宗教の役割を論じている。	同上
29	科学と宗教―死の問題を例として	人間の死の問題を例として、両者の関係について哲学的思索を展開する。宗教は自己の中に科学技術を受け入れてあまりあるもの、すなわちそれによって侵されない大きな力であることを、生死が無生死であり、無生死が生死することの体得を通して明らかにする	辻村公一（京都大学名誉教授）
30	知識と意見	『科学と宗教』の講義は、教養学部の最も教養らしい教養として提示されているものである。このような問題については知識よりも多くの卓れを意見に接することが大切でる。これを「受ける」のみではなく、これに「反応」して考えるべきである。	大森荘蔵

＝ 生　命　論 ＝（TV）

〔主任講師：野田春彦（創価大学教授）〕

全体のねらい

生命は歴史を通じて人類の強い関心を集めてきた。十九世紀以来生物学、生物化学の新しい展開にともない生命の考え方は大きく変わり、分子生物学の出現で物質を基礎とする考え方は確実なものとなった。この考え方と従来の考え方とを比較考察する。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	序　　論	この講義全体の編成の方針を概略説明し、ここで採用した考え方以外の考え方をも考慮した上で、全体的視野の下で勉学の指針を与える。	野田春彦（創価大学教授）
2	歴史宗教哲学と生命	人類の有史以来の生命に対する考え方を総説する。特に宗教書や哲学書に現れた世界観など古代以来の生命に対する考え方の変遷を現代の知識と関連させて見直す。	伊藤笏康（放送大学助教授）
3	生気論と機械論	生物学が物質的基礎を持たなかった時代には、物理学や化学で理解できない未知な原理が働いて初めて生命現象が起こるという考え方をせざるを得なかった。それが今でも本当かどうかを考える。	大森荘蔵（東京大学名誉教授）
4	生命の最小単位	地球上の生物全部に共通の部分があればそれは生命にとって必須の部分であろう。さらに必須でない部分があればそれを除く。最少の部品で構成される生物はどんなものかを探ってみる。	野田春彦
5	筋　収　縮	生物の細胞の基本的運動能力を考察する。細胞分裂に際しての細胞内の動き、鞭毛の運動、繊毛の運動、筋肉の運動などの構成や運動機構の異同についても考察する。	江橋節郎（岡崎国立共同研究機構生理学研究所所長）
6	増殖と分化	単細胞の生物は細胞分裂によって増殖し、多細胞生物は細胞分裂によって成長し、さらに増殖する。基本となる細胞分裂の機構とその生物種による微細な差を考察して、生命機構全体との関係を考察する。	平本幸男（放送大学教授）
7	構造形成	単細胞生物でも、多細胞生物でも、タンパク質分子が集合して形成する構造は個々のタンパク質に固有の化学構造にもとづいて自動的に作られる。多細胞生物では細胞の集合の方式も生物の形を決定する。これらに内在する原理を考察する。	野田春彦

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	酵素	生物体内の化学反応で共有結合が形成されるときにはほとんどの場合に酵素が関与している。この酵素の物質としての性質、作用機構と構造との関係などが、どこまで物理化学的に理解できているかを考察する。	野田春彦
9	ホメオスタシス	生物体内では条件を一定に保とうとする傾向がある。その中で特に物質代謝系に関係する物質の濃度を一定に保持する機構については研究が進んでいるので、それを説明する。	同上
10	太陽と地球と生物	現在の地球上では生物界への炭素化合物の取り込みは殆ど全部植物の光合成によっている。光合成の産物が食物連鎖を通じて動物や菌類を養っている。その全体像を地球的規模で考察する。	同上
11	物質代謝とエネルギー代謝	生命現象の特徴の一つは材料物質が常に流れていることである。流れを作るためにはエネルギーが必要である。それらの流れの相互関係と、その機構を考察する。	同上
12	遺伝	遺伝現象の基礎となる分子生物学的機構は全部解明されているわけではない。染色体とDNAの関係などをも含めて、分子レベルの考え方をできるだけ現象に結び付ける試みをする。	同上
13	タンパク質の生合成	遺伝子の構造として保持されている遺伝情報の具体的発現はいろいろあるが、その中でよく研究されているのはタンパク質の生合成である。その機構の細目を検討してみる。	同上
14	分子の進化機構	永い年月にわたる遺伝子の変化が進化の基本であるが、DNAの具体的な構造とその変化の可能性を実際の遺伝子の構造と関連させて考察する。	宮田隆（九州大学教授）
15	核酸の構造と機構	1. 核酸の所在 2. 核酸の立体構造 3. 染色体とDNA 4. 核酸のヌクレオチド配列　の分析	野田春彦

回	テーマ	内容	担当講師 （所属・氏名）
16	個人差と人種	1. 遺伝的多型 2. 遺伝子の多様性と人種 3. タンパクからDNAへ	尾本恵市 （東京大学教授）
17	中枢神経系	多細胞生物の多数の細胞の行動を統制する方法の一つは神経によるものである。生物が進化して、その神経の中に中枢神経系が現れて全体をまとめるようになると生物の行動は複雑になる。人間は言葉を使うことによって更に新しい行動様式を開発した。	久保田競 （京都大学霊長類研究所教授）
18	記憶について	知能は記憶の基礎の上で働くものであるが、その記憶というものの本質を考え直す試みをする。	大森荘蔵
19	精神と生命	人間の立場から生命を考えると、精神の働きが常に念頭にある。山川草木に生命を感ずるのは、人間の側から感情その他を移入する結果である。その他日常の多くの場合について色々の面からの考察を試みる。	香月秀雄 （元放送大学長） 大森荘蔵 野田春彦 伊藤公一
20	自然知能と人工知能	計算機は脳の能力の一部を遂行するものであるが、最近の計算機では人工知能と呼ぶこともできるような能力を備えるものがある。両者の比較から脳の能力に対して新しい見方も現れるかもしれない。	甘利俊一 （東京大学教授）
21	免疫	鳥類と哺乳類は侵入する外敵に対抗するために、特別な細胞群を用意している。これらの細胞群が多種類の外敵に対して対抗できることの原理、その際に合成されるタンパク質などについて最近の進歩を考察する。	大沢利昭 （東京大学教授）
22	消化と吸収	我々の日常生活では、食事の消化と吸収は意識されないことが多い。もし意識されるようになると異常が存在する。平常の場合にはどのように進行しているか、異常になると何がおかしいのかを考察する。	橘正道 （千葉大学教授）
23	考える脳のメカニズム	1. 思考時の大脳連合軸の活動 2. 大脳の神経回路網 3. 意識と注意 4. と幻覚 5. 記憶の2型	伊藤正男 （東京大学名誉教授）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
24	病気	体の部分について意識するようになると、そこに何かの異常があることが多い。しかし異常がないのに意識が先行することもある。何を正常と呼び、何を異常と呼ぶかについて考察してみる。	香月秀雄
25	抗生物質とその効き方	薬の中で抗生物質は効力の原理が明らかなものである。細菌が如何にして抗生物質を生産するか、抗生物質が相手の細菌の生理作用のどこを阻害するかを調べてゆくと、生きるということの分子生物学的な基礎と深く関係していることが多い。	大村智（北里研究所副所長）
26	老化と寿命	多細胞生物の個体は必ず老化する。加齢による器官の変化、死亡率など老化の基本データを供覧し、老化に関して今までに提出された仮説を説明し、老化と栄養の関係や寿命の予測など現在ではまだ答えのできていない問題についても考察する。	松村外志張（明治乳業ヘルスサイエンス研究所 研究員）
27	臓器移植	医療の手段の一つとして故障のある臓器を摘出して他人から正常な臓器を移植したり、人工の臓器を取り付けたりすることが行われる。実際の方法、功罪、将来の見通しなどを論ずる。	香月秀雄
28	生と死	人間の意識の中で、自己の死というものは特異な地位を占める。歴史的な思い込みを取り去って、虚心胆懐に考察を試みる。	大森荘蔵
29	物質と生命	地球上の生命の物質的基礎は相当程度明らかになってしまった。しかし宇宙のどこかで生命を構成するときに、現在地球上にみられる生命と同じものだけを考えるので十分かどうかは確かではない。	野田春彦
30	生命とはなにか、改めて考える	各方面から考察した生命の本質を再び復習し、考察の足りなかったところを補い、将来研究すべき点について論ずる。	同上

＝ 文 学 の 東 西 ＝ （R）

［主任講師：辻　　瑆（東京大学名誉教授）
主任講師：芳賀　徹（東京大学教授）］

全体のねらい

「文学」や「東西」の意味、日本文学の特質などを検討したのち、主に芳賀講師によっていくつかの主題に則し、日本と諸外国間の関連と影響関係を比較文学の成果として解明する。後半は西欧諸国・中国と日本との間において、対照比較、受容の問題等を論じ、全体として日本文化のアイデンティーを求める試みとしたい。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	「文学の東西」をめぐる環境(1) “文学”および“東西”の概念	国文学研究のためのさまざまな機関　“国文学”研究の変遷　比較文学比較文化という学問　“東西”の意味	芳賀　徹（東京大学教授） 三好行雄（大妻女子大教授） 小山弘志（国文学研究資料館々長） 辻　瑆（東京大学名誉教授）
2	「文学の東西」をめぐる環境(2) 日本語の特性と文学への影響	日本語の特殊性　叙述についての先人たちの苦心　日本語に規定される日本文学　文学から日本語への影響	三好行雄 小山弘志 古田東朔（鶴見大学教授） 辻　瑆
3	「文学の東西」をめぐる環境(3) 比較と日本文学	比較の可能性と不可能性　米大学で日本文学を講義して　比較文学比較文化研究の実際　文学として謡曲を“読む”	芳賀　徹 小山弘志 佐伯彰一（中央大学教授） 辻　瑆
4	比較文学の歴史「駒場学派」の観点から	「若くて美しい学問」　フランス派比較文学　比較文学「日本派」の形成	芳賀　徹
5	桃源郷の系譜 (1) 陶淵明の桃源郷	東アジア比較文学　「桃源郷」の源流　桃源郷へのアプローチ	同　上
6	桃源郷の系譜 (2) 東アジアの理想郷	桃源郷の景観　平和と幸福の小共同体	同　上
7	桃源郷の系譜 (3) 日本における桃源郷	桃源の詩人、與謝蕪村	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	きりしたんとクリスチャン　(1) 西欧キリスト教文学と日本	ヨーロッパの思想的状況 きりしたん版－『ぎやどべかどる』と『こんてむつすむん地』	加納孝代 （青山女子短期大学助教授）
9	きりしたんとクリスチャン　(2) 明治時代の聖書と讃美歌の日本語訳	「主の祈り」の翻訳文のいろいろ　ブラウンとヘボン　新訳聖書の翻訳　旧訳聖書の翻訳　明治訳旧約聖書の文化　讃美歌の翻訳	同　上
10	蘭学事始（一） －杉田玄白	「何となく」－知的開国への時代の動き　学問の初心－好奇心、驚きと素直さ　勉学第一歩－視覚理解の重要さ　昭和八年（一七七一）辛卯の春 『解体新書』の成立と洋学の確立	大久保喬樹 （東京女子大学助教授）
11	蘭学事始（二） 新井白石と渡辺華山	新井白石の『西洋紀聞』 渡辺華山の『鴃舌小説、鴃舌或問』	同　上
12	ヴィクトリア朝英国と日本人　(一) －三つの滞英体験	はじめに 大英帝国の成立と水晶宮 福沢諭吉のイギリス 久米邦武のイギリス	川西　進 （東京大学教授）
13	ヴィクトリア朝英国と日本人　(二) －岩倉使節団から夏目漱石へ	岩倉視節団の英国像 夏目漱石のロンドン留学	芳賀　徹
14	住まいの詩（一） 住まいの夢想史	はじめに 蟲の宿 日本詩歌のなかの住まい	同　上
15	住まいの詩（二） 英米詩と住まい	住まいの「人柄」　母のいる場所－D・H・ロレンス　住まいの風景－W・C・ウィリアムズ 都会の憂鬱－T・S・エリオット	川本皓嗣 （東京大学助教授）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
16	中国と日本(1) 平安朝における漢文学受容の一側面	わが国における『毛詩』大序の受容 わが国における白楽天の受容	竹田晃 （東京女子大学教授）
17	中国と日本(2) 中国小説の流れ	中国の神話　六朝の小説　志人と志怪 唐宋の伝奇　宋以後の小説	尾上兼英 （東京大学教授）
18	ロシアと日本(1) ロシア文学の近代日本文学への影響	ロシアとソ連 ロシア文学受容のはじまり トルストイからドストエフスキイへ	川端香男里 （東京大学教授）
19	ロシアと日本(2) ロシア文学と日本文学 ― 対比的考察	日露両文学の誕生 ロシアと日本の「近代化」 文壇とジャーナリズム	同上
20	フランスと日本(1) フランス演劇と日本演劇	問題の所在 日本におけるフランス演劇の受容－概観 翻案から翻訳へ－近代化の歴史の成層 「人生の一断片」－日常生活の心理と言語 大いなる不在－クローデルのこと	渡辺守章 （東京大学教授）
21	フランスと日本(2) フランスと日本の散文詩	シャルル・ボードレール　蒲原有明 萩原朔太郎　「韻文」と「散文」 フランスの散文詩　日本の散文詩	阿部良雄 （東京大学教授） 井戸桂子 （元 放送大学助教授）
22	イギリスと日本(1) ソネットの受容	ソネットの成立 イギリス式ソネット イタリア式ソネット ソネットの創作と翻訳 立原道造の場合	川西進
23	イギリスと日本(2) 二つの自然観 ― ワーズワスと芭蕉	ワーズワスと日本人の感性－その相似点 ワーズワスと芭蕉との相違 「ネイチャー」と「自然」との差異 ワーズワスの場合　芭蕉の場合 「愛する」と「好き」との違い 西欧的自然観と東洋的自然観	上島建吉 （東京大学教授）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
24	アメリカと日本(1) 日米の自然観	ピューリタンの自然観 十八世紀の自然観 アメリカン・ルネサンス 十九世紀末の自然観 自然の運命	島田太郎 （東京大学助教授）
25	アメリカと日本(2) ―楽園と荒野― アメリカの自然をめぐって	文明と自然の根元的な対立 アメリカ独自の自然体験 歴史のドラマを描いた小説家クーパー	渡辺利雄 （東京大学助教授）
26	ドイツと日本(1) ―ゲーテ― 『若きウェルターの悩み』	ゲーテの重荷　ハイネの彗眼　カフカのゲーテ観　ゲーテとドイツ・新渡戸稲造 古典の永遠性　スキャンダルとも言える影響 翻訳の功罪	辻　瑆
27	ドイツと日本(2) ―フランツ・カフカ―三つの冒頭	終末か発端か　生い立ちと作品　プラハの町とユダヤ人　書くことと女性　父の圏外での死　文体上の問題　作品『変身』 語り手とは　作品『審判』　作品『城』	同　上
28	スペインと日本 『ドン・キホーテ』と近代小説の誕生	小説の読者 十六世紀の小説 『ドン・キホーテ』 ドン・キホーテと読むこと 『ドン・キホーテ』はどう読まれてきたか	桑名一博 （東京外語大教授）
29	中南米と日本 現代のラテン・アメリカ文学	小説の隆盛 フワン・ルルフォの『ペドロ・パラモ』 ガルシア・マルケスの『百年の孤独』 カルペンティエールの『失われた足跡』とバルガス・リョサの『緑の家』	同　上
30	アラブと日本 ―文学作品にみる相互イメージ	アラブ・イスラム世界と日本 日本近代史とアラブ文学 説話文学への関心	杉田英明

＝高齢化社会の生活と福祉＝（R）

〔主任講師：鬼頭昭三（放送大学教授）〕
〔主任講師：本間博文（放送大学教授）〕

全体のねらい

高齢社会の到来を目前にして我が国の社会全体が大きな変革を迫られている。本講義は来るべき高齢社会の厳しい現実を把握すると共に、高齢者の個人生活に関する諸問題、家族の生活様式の変化、ついで社会構造の変遷について総合的に論じ、高齢化社会に対応した生活設計を考える。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	執筆担当講師名（所属・職名）
1	来るべき高齢社会	人口の高齢化がかつてないスピードで進みつつあるのに伴って、社会全体が大きな変革を迫られている。本講義は来るべき高齢社会の厳しい現実を把握すると共に、高齢者の個人生活に関する諸問題、家族の生活様式の変化、ついで社会構造の変遷について総合的に論ずる。合理化された高齢社会を設計しようとするとき、日本の伝統的慣習に由来する人の情動機構との間にジレンマが起こるであろう。高齢社会における生活設計を考え、問題を提起する。第1章では高齢化社会に適応するための前提としての個人的、社会的要因を中心に述べることとする。	鬼頭昭三（放送大学教授）	鬼頭昭三（放送大学教授）
2	社会構造の変化	諸外国に例を見ない速度で高齢者人口の比率が増大する結果、我が国の社会構造全体が大きな変革を迫られている。各種の統計資料をもとに予想される地域社会や家族構成の変化、各種の疾病や障害の増大について解説する。	大久保孝治（放送大学助教授）	大久保孝治（放送大学助教授）
3	経済構造の変化	高齢者が増加するに従って個人、家族、社会等のレベルにわたって様々な費用負担の増加が予想される。これらの負担が生産、消費、分配などの経済構造にどのような影響を与えるかを考察する。	坂井素思（放送大学助教授）	坂井素思（放送大学助教授）
4	高齢化社会における福祉環境	高齢社会に於ては、人びとの生活状況、生活意識及び、特に高齢者をめぐる家族構造の変化が予想される。その変化の実態を探り、そこに生ずる福祉課題に取り組む福祉政策、行政の現状分析とともに、人びとの生活を取りまく福祉環境の問題点を探る。	仲村優一（放送大学教授）	仲村優一（放送大学教授）
5	心理的特性	老年期の生理的、身体的特徴、知的機能、情動および性格などについての最近の研究を概観し、老年期という時代の特徴を、そこに至までの経過を踏まえつつ考えてみる。	星薫（放送大学助教授）	星薫（放送大学助教授）
6	精神的特性	臨床心理の面から高齢者の一般的な心理特性を解説し、2、3の臨床事例をもとに高齢者に固有の精神構造を考察し、終末を迎えた高齢者の新たなる出発としての心の安定について考える。	織田尚生（甲南大学教授）	織田尚生（甲南大学教授）
7	身体特性と健康管理	高齢者の身体的特徴は、言うまでもなく、肉体的老化、殊に外見的老化であるが、20歳からの継続的な老化プロセスの延長上にあるもので特別のメカニズムがあるわけではない。一方、高齢者の自立のための第一要件は健康であり、老後の健康は青年期、成人期からの生活習慣によるところが多い。健康診断では40歳以降、なんらかの異常値を示すことが多くなり、老年期に入って以上を示す項目の数が急激に増える。健やかな老後のための若い時代からの生活習慣について述べると共に健康管理のあり方について考える。	鬼頭昭三	鬼頭昭三

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	執筆担当講師名(所属・職名)
8	高齢者の疾病	高齢者と成人との間には生物学的な境界は無く、社会的分類に過ぎない。従って高齢者に特有な疾病は存在しないが、癌、虚血性心疾患、脳血管障害、アルツハイマー型老人痴呆は先進国における四大死因である。これらの疾病は治癒しにくいことのみでなく、特に後二者はいわゆるSlowly Dying Diseases として周囲に与える影響も大きい。他にパーキンソン病も中年以降の疾病として高い頻度を占めている。また高齢者ではいくつもの疾病を同時に持っていることが多い。	鬼頭昭三	鬼頭昭三
9	身体障害と介護(1)—身体障害の特性—	加齢と身体障害とは不可分の関係にあるといえる。事実、身体障害者人口の約60%は、60歳以上の高齢者で占められている。加齢に伴う様々な身体症状、身体障害の状況、特性について考察するとともに、身体障害者の老化についても検討する。	三ッ木任一(放送大学教授)	三ッ木任一(放送大学教授)
10	身体障害と介護(2)—介護と福祉機器—	身体障害を持つ高齢者の生活、人生の質を向上させるためには、個々のニーズに基づいた援助の手立てが必要である。家庭、あるいは福祉施設における生活上の配慮と介護のあり方を考察するとともに、自助具、介護用具の効果的な利用についても検討する。	同上	同上
11	衣生活(1)着衣の快適性	服装の快・不快の要因を、加齢による体温調節機能や運動機能などの変化を考慮にいれながら、衣服の品質、着装法などの面から考察する。	酒井豊子	酒井豊子
12	衣生活(1)寝床の快適性	近年、寝具の種類が著しく多用化している。快適な睡眠と休息を確保するための寝床の条件とその管理法について考察する。病床や万年床についても考えて見たい。	同上	同上
13	高齢者の食生活(1) 栄養と献立	加齢に伴う老化現象の進展や寿命は、食生活と密接な関係があると言われている。高齢者の食事について、必要とされる栄養と、何をどれだけ食べたらよいかを中心に解説する。また、老人に多い疾患に対する食事面での対策についても触れたい。	今井悦子(放送大学助教授)	今井悦子(放送大学助教授)
14	高齢者の食生活(2) 調理と食事介護	老化に伴い、身体機能が低下するだけでなく、種々の障害を持つ人も多くなる。高齢者の食事の調理および介護について、一般的な留意点を解説すると同時に、障害を持つ人々に対する特別な配慮という面からも述べる。また、高齢者の食生活を、家族との係わりという観点からも考えてみたい。	同上	同上
15	家族の変動	高齢社会に向かう社会変動の中での家族・世帯構造の推移と変化の様相を明らかにする。特に、家族関係と家庭内役割構造の変化が、高齢社会における家族の生活にどのような影響をもたらしたかについて、重点的に究明する。	大久保孝治	大久保孝治

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	執筆担当講師名(所属・職名)
16	形成期の家族	我が国の急激な出生数の減少は、出産年齢の女子人口の減少、晩婚化、出産と就労の両立、住宅事情、結婚観の変化などの影響とされている。出生数減少の背景と、子ども、家庭、地域、あるいは高齢者への影響を分析する。	古谷博(放送大学教授)	古谷博(放送大学教授)
17	増大期の家族	子どもの養育、老人の介護に関する家庭機能の弱体化は、現在の核家族、小家族には必至である。長寿社会における子どもの健全育成、家庭生活への支援、生き甲斐のある生活の質の向上のための地域づくりが急務である。	同上	同上
18	減少期の家族	この時期の世帯主は社会の中核として活動し、家族との交流を持つ時間が少なくなる傾向が強い。その結果単身赴任やマルチハビテーションと言った言葉に代表されるように子供が巣立つ以前に家族の分解が加速されている。減少期の家族を中心に現在我が国の家族に見られる病理的な現象を取り上げる。	大久保孝治	大久保孝治
19	消滅期の家族	高齢社会を迎える中で伝統的に我が国に多く見られる三世代世帯は今後とも主要な家族形態として残って行くものと思われる。しかしながらその内容は生活様式の変化に対応して変わりつつあり、新たなる家族像の確立が求められている。三世代同居を中心に高齢者世帯における家族のあり方について考える。	本間博文	本間博文
20	介護と福祉	高齢者の福祉を巡る過去・現在・未来について述べる。高齢者の介護の状況は子供の数の減少、女性の社会進出など様々な社会的背景のもと変化してきている。なにがどう変わったか、そして今後高齢者の介護はどのような局面を迎えようとしているのか、様々な調査資料を手掛かりに探る。	山田知子(放送大学講師)	山田知子(放送大学講師)
21	住宅事情	我が国の高齢者問題は一面で住宅問題である。大都市における住宅難と農山村地域での過疎化の進展は社会的弱者である高齢者に一層深刻な問題をを投げかけている。高齢者の住宅事情と、それに対する公的な取り組みについて概括する。	同上	同上
22	住生活の現状将来	我が国の住宅は高齢者にとって決して住みやすいものではない。すまいがどのような障害を高齢者にもたらしているか、住生活の現状を居住形態別に概括し、高齢社会を迎えてこれからの高齢者のすまいはいかにあるべきかを考える。	本間博文	本間博文
23	社会関係	高齢社会における人びとの社会生活の変化がコミュニティの社会関係にどのような変化をもたらすか。特に、増大する高齢者世帯、ひとり暮らしの高齢・障害者等がコミュニティの社会関係を保って地域で自立的に生きる生活システムをどう構築するかを考察する。	大久保孝治	大久保孝治

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	執筆担当講師名(所属・職名)
24	経済構造	高齢者の増加は経済問題のうちとりわけ分配問題に深刻な影響を与えると考えられる。社会的な負担増を誰が担うのかという問題である。この章では高齢化社会のあるべき経済システムについて考えたい。	坂井素思	坂井素思
25	福祉政策・福祉行政	第一部で見た人びとの社会生活における諸変化に伴う福祉ニーズの増大、複雑多様化に対応する福祉政策・福祉行政の課題を探る。特に、福祉関係法制の変化と国・地方自治体の福祉課題への取り組みにおける問題点を明らかにし、そのあるべき方向を追究する。	仲村優一	仲村優一
26	福祉環境	高齢者の生活の諸側面に発生している様々な生活問題、たとえば介護の問題や生活保障の問題、住宅問題、家族・社会関係における高齢者の孤立、孤独の問題などを取り上げ、厳しい環境におかれている実態を紹介する。そしてそれらが高齢期だけの問題にとどまらないことを明らかにする。	山田知子	山田知子
27	福祉施設とまちづくり	高齢者を対象とした福祉施設は、各種老人ホーム、老人福祉センター、老人保護施設など多種多様で、高齢化に伴って増加の一途を辿っている。福祉のまちづくりも、全国各地で推進されつつある。高齢者を配慮した社会的な生活空間の現状、あり方について考察する。	三ッ木任一	三ッ木任一
28	福祉サービス	社会福祉のサービスとして高齢者の生活を支えるものにどの様なものがあるかを概観する。施設福祉と在宅福祉を対置概念としてとらえるのではなく、また保健医療との連携の中で新しい意味のサービスのあり方を考える。その際民間団体の実態にもふれ、社会福祉の公私関係を検討する。	山田知子	山田知子
29	余暇活動	高齢化社会における自由時間の構造的変化を概観する。現在の高齢者の余暇活動の実態とその問題点を明らかにする。高齢期の余暇活動の規定する要因は何かを探り、創造的で充実した高齢期を迎えるための条件を社会とのつながりの中で考える。	一番ケ瀬康子(日本女子大学教授)	一番ケ瀬康子(日本女子大学教授)
30	高齢社会の生活設計	高齢社会における生活上の諸問題は単に高齢者の問題に限定されるものではなく、出生率の低下、労働力の高齢化など我が国の産業基盤や、社会環境全般に関わっており、家族のライフステージの各段階において新たなる生活像の確立が要求される。本章においては各章において個別に述べられた問題を高齢社会における生活設計という視点で総合的に捉え、問題解決の指針を探る。	本間博文	本間博文

＝子供の世界＝（ＴＶ）

〔主任講師：宮澤康人（放送大学教授）
〔主任講師：星　　薫（放送大学助教授）

全体のねらい

子供の内部世界と外部環境の両面にわたって、様々な方法論によってアプローチする。子供の世界を既知のものとしてとらえるのでなく、探求の対象として設定する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	子供の世界への探検	全体への導入、子供を理解することの難しさ	宮澤康人（放送大学教授）	宮澤康人（放送大学教授）
2	子供研究の歩み	子供へのまなざしの成立とその後、児童心理学研究史、身体面への注目、子供をとりまく環境の重視、発達のエコロジー	宮澤康人 星　薫（放送大学助教授）	宮澤康人 星　薫（放送大学助教授）
3	動物の子供とその世界(1)	動物にとって子供とはどういう存在か 動物の子供は環境をどのように認知し、どう行動するか	今福道夫（京都大学助手）	今福道夫（京都大学助手）
4	動物の子供とその世界(2)	哺乳類の子供の行動様式	同上	同上
5	母胎という世界	母胎は子供にとってどういう環境なのか、誕生後の環境とどう違うのか	古谷博（放送大学教授）	古谷博（放送大学教授）
6	子供の身体	子供の身体とそれをとりまく物理的環境（光空気、水、栄養など）	同上	同上
7	母子関係の中の子供	子供にとって母とはどういう存在か、母にとって子供とは何か、両者の相互作用	三宅和夫（川村学園女子大学教授）	三宅和夫（川村学園女子大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	父子関係の中の子供	子供にとって父とはどういう存在か、父にとって子供とは何か、両者の相互作用	三宅和夫	三宅和夫
9	子供の欲望と感情	大人とはちがう子供の欲望や感情とその発達	同上	同上
10	子供の情緒的障害	子供の欲望や感情における正常と逸脱とは何か	同上	同上
11	子供の論理と思考方法	大人とはちがう子供独特の思考方法とは何かとその発達	野呂正(宮城教育大学教授)	野呂正(宮城教育大学教授)
12	子供の知的障害	子供の思考における正常と逸脱とは何か	同上	同上
13	家族という世界	母と父だけでなく兄弟姉妹もふくめて、一つのシステムとしての家族が子供にとってもつ意味	磯貝芳郎(東京学芸大学教授)	磯貝芳郎(東京学芸大学教授)
14	保育所・幼稚園という世界	幼児にとって家族の外の人間関係がもつ意味	野呂正	野呂正
15	学校という世界	家族とはちがう学校の人間関係、教師とは子供にとってどういう存在か、学校が提供する文化財が子供にとってもつ意味	磯貝芳郎	磯貝芳郎

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
16	仲間集団と子供	家族の外の人間関係が子供の発達にとってもつ意味	住田正樹(九州大学助教授)	住田正樹(九州大学助教授)
17	子供の生態系	家族、学校、地域社会、友人・仲間関係などを全体として生態系としてとらえる視点の必要性とその方法	磯貝芳郎	磯貝芳郎
18	子供の性差と異性意識	思春期以前の子供にとって性差とはなにか、子供はどのようにして異性イメージを形成するか	高橋たまき(日本女子大学教授)	高橋たまき(日本女子大学教授)
19	仕事の世界と子供	児童労働が普通だった社会と消滅しつつある社会、高度消費社会における子供にとって仕事の意味、ハイテク技術革新時代において労働を教えること	宮澤康人 岡崎友典(放送大学助教授)	宮澤康人 岡崎友典(放送大学助教授)
20	遊びの世界と子供Ⅰ	子供の遊びの心理	高橋たまき	高橋たまき
21	遊びの世界と子供Ⅱ	子供の遊び文化	住田正樹	住田正樹
22	本の世界と子供	活字文化の世界に子供はどう入っていくか、その世界がもつ意味	本田和子(お茶の水女子大学教授)	本田和子(お茶の水女子大学教授)
23	映像文化と子供	活字文化と対比して映像文化が子供にもつ意味	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
24	大都会の中の子供	過疎化社会などとの対比のなかで大都会という環境が子供にもつ意味	岡崎友典	岡崎友典
25	子供の異文化接触	外国に行くこと、帰ること、外国人と接する体験が子供に与える影響	藤田真理子(相愛大学助教授)	藤田真理子(相愛大学助教授)
26	原初社会の子供	現代日本の子供の生活と対比して原初社会の子供はどういう生活をしているか	同上	同上
27	子供をめぐる法的環境	子供の権利をはじめ、子供に関する法的環境は子供に何をもたらすか	森田明(お茶の水女子大学助教授)	森田明(お茶の水女子大学助教授)
28	子供の福祉の実態	子供に対する種々な福祉施設等は子供にとってどういう環境を提供しているか	同上	同上
29	人口動態と子供	日本と世界の人口動態の中で大人と子供の世代間関係はどうなるのか。地球環境危機の中で生きる未来世代	宮澤康人 岡崎友典	宮澤康人 岡崎友典
30	子供の世界の展望	全体のまとめ、様々なアプローチの方法論の確認	宮澤康人 星薫	宮澤康人 星薫

＝現代社会と産業・技術＝（ＴＶ）

〔主任講師：黒澤一清（放送大学教授）〕

全体のねらい

産業・技術が現代社会の諸問題と密接に関わっていることをいくつかのテーマによって示し、その諸問題に対して産業・技術がいかなる対応と展望を有しているか、あるいは検討すべきかについて科目横断的に論じる。またそこで提起された問題の考察を通じて、専攻特論のテーマに役立てる。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	現代産業・技術の光と影	技術の本質・形態及びその運用をいかに考えるか、産業と企業の在り方をいかに考え、その改築と経営をどのように展開することができるか。これらをめぐる関連諸科学の境界領域の構造を考える	黒澤一清（放送大学教授）	黒澤一清（放送大学教授）
2	科学技術協力の諸問題	政府の国際開発協力の一環として行われている先端科学と工業・農業・保健医療など社会開発における技術協力の現状を述べ、今や世界第一位の援助国となった我国の協力体制の問題点と課題について検討する。	海田能宏（京都大学教授）	海田能宏（京都大学教授）
3	日本の国際化とアジアー西太平洋の時代	西太平洋地域の高い経済成長の背景はなにか、政策、経済、産業、技術など一般的実情について講義をする。	渡辺利夫（東京工業大学教授）	渡辺利夫（東京工業大学教授）
4	産業・技術の国際問題	地球環境保全は国際的産業・技術の問題である。その対応について材料技術の面から考える。さらに製品の安全性については製造物責任への認識が重要であり、それへの諸外国の現状について講義する。	東千秋（放送大学助教授）	東千秋（放送大学助教授）
5	適正技術とは何か	先進国から発展途上国にもたらされる先端技術がどのような結果をまねき、その反省として、どのような経緯のもとに適正技術という考え方が提唱されるようになったのか、その起源をたどる。また適正技術をめぐるいくつかの異なった考え方を紹介する。	新津晃一（国際基督教大学教授）	新津晃一（国際基督教大学教授）
6	適正技術導入の諸領域と導入をめぐる諸問題	適正技術という考え方はさまざまな技術領域に導入されている。ここでは主として発展途上国における導入状況とその効果につき考察するが、同時に先進国における導入例などについても概観する。	同上	同上
7	適正技術と自然力ボート	開発途上国において、太陽熱、河川のエネルギーなどの自然エネルギーを使い、そこに住む住民が自ら運営、管理、修理ができ、しかも自然破壊のないような技術は適正技術の一例である。ここでは、ネパールの川の流れを使用して川を渡ったり溯のぼる自然力ボートの開発について述べる。	小川鑛一（東京電機大学教授）	小川鑛一（東京電機大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	技術革新の目標	多方面に拡大しつつある科学技術の現状と、開発途上国や共産圏が大きく変わりつつある社会的現状を基礎にして、巨視的に眺めた時の技術革新の目標を考える。それに沿って技術の各分野の相互関係を整理する。	滝口利夫(放送大学教授) 大谷杉郎(東海大学教授)	滝口利夫(放送大学教授) 大谷杉郎(東海大学教授)
9	研究の社会的分業と協力	個性的萌芽的研究を大学で、実用化研究を企業で、長い期間や大きな資金を要する基礎的な技術開発を国の力で行うのが分業で、それらの協力がいかに順調に実現できるかが問題である。また学問に国境はないが、技術には国籍がある。国際的協力は国籍のある技術を軸に動く。その中での個人の役割を考える。	大谷杉郎	大谷杉郎
10	技術教育のあり方	創造的な技術者教育は三つの要素かある。専門分野での簡素で夢のある童話を書ける能力、体系的な知識、職人芸的な手腕、これら三要素を兼ねた人が一流、いずれか二つなら二流、一つは三流で、何もなければプロではない。これらを養成するためには、成功と失敗の経験をいかに踏ませるか、人間への興味をいかに深めさせるかが重要になる。	同上	同上
11	産業構造の変化と企業活動	サービス経済化、技術融合化、情報化は互いに結合しながら、あらたに業際化など産業構造を大きく変化させている。需要面の多様化は需要・生活・社会の構造的変化へと波及し、生産面ではFMSなど生産・立地構造・企業組織や企業間組織の変革が見られる。	磯部浩一(聖学院大学教授)	磯部浩一(聖学院大学教授)
12	情報と本社立地	本社立地に影響を与える要因は種々のものがあるが、そのなかでも情報要因は特に強い影響を与える。この情報要因を企業内部的なもの、外部的なものに分け、本社の立地的性格について論じる。	藤本義治(名古屋市立大学助教授)	藤本義治(名古屋市立大学助教授)
13	情報と工場立地	工場立地には労働費、輸送費などの立地因子のみならず情報要因も強く関与するが、この情報要因と工場立地との関連について述べる。	同上	同上
14	都市開発におけるパートナーシップの形成	都市再開発プロジェクトの成否の鍵を握るのは、参加メンバー相互の協力関係(パートナーシップ)の形成である。パートナーシップの形成のための参加メンバーの役割分担、費用負担、成果分配、合意形成などについて、具体的事例をもとに考察する。	深海隆恒(東京工業大学教授) 高辻秀興(放送大学助教授)	深海隆恒(東京工業大学教授) 高辻秀興(放送大学助教授)
15	住民参加によるまちづくり	計画案への単なる投票機能としての住民参加ではなく、目的形成、計画作成、実施過程に関わりを持つ創造型住民参加が必要になってきている。その必要性の背景、参加形態、「場」づくり、プランニングの専門家の役割などについて、可能性と問題点を考察する。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
16	地域開発と協力ゲームの理論	複数の地域集団が一つの地域開発プロジェクトを共同で実施する時、相互の協力関係が成立するための可能性の必要条件を「協力ゲームの理論」の立場から考察する。単に理論の応用ではなく、具体的事例をもとに理論の組み立ての発展をも促す。	林　亜夫(筑波大学講師) 高辻秀興(放送大学助教授)	林　亜夫(筑波大学講師) 高辻秀興(放送大学助教授)
17	現代産業社会における農業の役割	農業には、単に食料の供給という役割だけでなく、国民経済や地域経済の安定的発展という経済的役割、生態系および生活環境の保全という役割、社会的・文化的役割など、きわめて多面的役割が期待される。	祖田　修(京都大学教授) 渡部忠世(放送大学教授)	祖田　修(京都大学教授) 渡部忠世(放送大学教授)
18	現代における農業経営の諸相	国際的にみた日本の農業経営の特徴を明らかにすると共に、最近における日本の農業経営の変貌を、農業従事者の動向、規模拡大の動向、新たな経営形態の登場と組織化の動向に焦点をあてて考察し、家族農業経営の時代は終焉したのかどうか、を考える。	藤谷築次(京都大学教授) 渡部忠世	藤谷築次(京都大学教授) 渡部忠世
19	農業技術の発展と課題	伝統農業の中核をなす技術（表土保全、輪作、地力維持）について生態学的考察を行い、その発展段階を論じる。さらに、工業技術に依存した現代農業（稲作、養液栽培、組織培養、果樹栽培）の生産性と安定性を検討し、永続的な生産技術のあり方を問う。	津野幸人(鳥取大学教授) 渡部忠世	津野幸人(鳥取大学教授) 渡部忠世
20	ファジィ理論の考え方と方法	ファジィ理論は、人間の概括的な知的情報処理過程を表現する一つのモデルを与えているが、このようなファジィ理論の考え方や方法を説明し、併せて例題による演習を加えて理解を深め、さらに応用への手かがりを示す。	浅居喜代治(大阪工業大学教授)	浅居喜代治(大阪工業大学教授)
21	ファジィ理論の人間・社会・自然への応用	ファジィ理論による人間の知能のモデルが、人間の行動、経営や生産の計画・管理、社会の意識調査、気象・地震の予測、植物の成長などの諸問題に応用できることを説明し、これらについての研究の現場を紹介する。	同　上	同　上
22	ファジィ理論の制御および情報への応用	ファジィ理論による論理、特に推論のモデルが、自動制御や情報などの分野に利用できることを説明し、家電製品・カメラ・クーラー・自動車・列車・各種エキスパートシステムなどの実用化例を紹介する。	同　上	同　上
23	エントロピーと管理技術　(1)	少ない市場情報を最大限有効に利用し、市場の内部構造を分析するのにエントロピー・モデルによる手法がある。このモデルに基づく消費者の購買行動とサービス窓口での窓口選択行動の分析法について講述する。	太田　宏(大阪府立大学教授)	太田　宏(大阪府立大学教授)

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
24	エントロピーと管理技術 (2)	エントロピーの拡張概念にKullback-Leibler(K-L) 情報量がある。ここでは、このK-L 情報量に基づく製品の品質検査のための抜き取り検査法と作業者の作業熟練度を評価するための判別法について解説する。	太田 宏	太田 宏
25	コンピュータによる自動生産システム (1) ハードウエア	工場で行なわれているオートメーションの実情を説明する。まず機械とエレクトロニクスとの融合技術の発達の歴史を講述し、数値制御の機械や無人運搬者などの自動化機器、それらを統合した自動化生産システムを解説する。	橋本文雄（大阪工業大学教授）	橋本文雄（大阪工業大学教授）
26	コンピュータによる自動生産システム (2) ソフトウエア	生産活動における情報処理について説明する。コンピュータ遠洋説係・生産や自動化された生産設備がどのように管理され、運営さているかなど、製品を生産するための最近の情報技術の進歩を解説する。	同 上	同 上
27	日本的経営の課題 組織的性格とその改革 (1)	日本的経営の在り方のうちから、現代マネジメントの原理と実践の基本方針を探る。まずは日本の産業の近代的発達の史的課程において、日本文化が果たしてきたその役割を画時代的に浮き彫りにしてみる。	黒澤一清	黒澤一清
28	日本的経営の課題 組織的性格とその改革 (2)	日本的経営の諸特徴の積極面と消極面とを、経営組織の構造と機能の解明によって明らかにし、これの将来への実践課題を提起する。現代マネジメントの原理とその実践への、日本の経験からする一つの提案である。	同 上	同 上
29	日本の工業経営の発展と将来(1)	世界の工業経営の進歩；テーラーシステム、フォードシステム、品質・コスト・時間管理の進歩、加工と管理の自動化進歩。工業の変化；工業品の国際ライフサイクル、製品の市場期による変化。	熊谷智徳（放送大学教授）	熊谷智徳（放送大学教授）
30	日本の工業経営の発展と将来(2)	日本の生産経営の世界的進歩；TQC, JIT, TPM への発展。日本的特質と背景；全員参加、精練技術、実践技術。日本の生産行動特質のルーツ。将来課題；高位文明社会への工業経営の課題、第三次性能の構造と思想。	同 上	同 上

＝人間を考える＝（R）

〔主任講師：祖父江孝男（放送大学教授）〕

全体のねらい

「人間の探求」の専攻領域は、通常、人文科学と呼ばれるが、この領域は更に哲学、美学、史学、文学、文化人類学等々の諸分野に分かれている。これらの異なった分野がそれぞれの立場から真善美、創造、自然、超越者、コミュニケーション、技術・情報といった諸問題をとりあげ、学際的なアプローチを通して、人間および人間社会・文化を考えてみようというのがこの講義のねらいである。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	はじめに	人間についてのさまざまな基本的問題を人文科学諸分野の立場から学際的にとりあげるにあたり、まず人文科学のなかはどのように分類されているのか、各分野の特色とその相互関係および歴史的背景について概観する。	祖父江孝男（放送大学教授）	祖父江孝男（放送大学教授）
2	真・善・美（その1；美の基準） 美と真	芸術の真理（真実）と言われるが、その際、真理という語でどのようなことが理解されているかを考察しつつ問題点を明らかにしたい。また美と真の関係などを、アリストテレスの所説など紹介しながら考える。	青山昌文（放送大学助教授） 久保光志（東京女子大学教授）	青山昌文（放送大学助教授） 久保光志（東京女子大学教授）
3	同上 文化と美	一方では美学の立場から、美の多様性と普遍性の問題をヴォルテールやマルローなどの所説を紹介しながら考え、他方では文化人類学の立場から、民族により時代により、美の規準が如何に大きく変わるかについてとりあげる。	祖父江孝男 青山昌文	祖父江孝男 青山昌文
4	同上 現代芸術と古典芸術；歴史的視点から	現代芸術は、単に新しい様式を生み出したばかりではない。それは、従来の芸術創造観とは別な観点に立脚し、新たな「創造」の可能性を追及する知的冒険でもある。	篠原資明（東京芸術大学講師） 庄野進（国立音楽大学助教授）	篠原資明（東京芸術大学講師） 庄野進（国立音楽大学助教授）
5	同上 婆娑羅を中心として	婆娑羅（ばさら）とは室町時代に流行したことばで、遠慮なく振舞う、派手に飾り立てる、しどけなく乱れるなどの意味を持つが、この観念を中世文学の立場から、および美学の立場からとりあげる。	松岡心平（東京大学助教授） 青木孝夫（広島大学助教授）	松岡心平（東京大学助教授） 青木孝夫（広島大学助教授）
6	真・善・美（その2；善と悪） 善悪と美	美と善の関係の問題などを、プラトンやアリストテレスの所説などを紹介しながら考え、また善と美を根拠付ける概念（ジャンケレヴィッチ）としての「シャルム（魅惑）」とは何かについても考える。	戸沢義夫（群馬県立女子大学教授） 青山昌文	戸沢義夫（群馬県立女子大学教授） 青山昌文
7	同上 善悪の基準	善悪とは黒白のように対立して存在するのか、善自体が存在しうるのか、といったことから考えていく。また善悪の規準は民族によりさまざまに異なるが、その問題を文化人類学ではどう考えているか、歴史的に概説する。	祖父江孝男 浜田恂子（関東学院大学教授）	祖父江孝男 浜田恂子（関東学院大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	真・善・美(その2；善と悪) 生命倫理をめぐって	医学が進展した現状を前提にして、人間がいかにあるべきかという問題を改めて根本的にとりあげる。また文化・社会が異なるとともに生命倫理の考え方が異なってくる事実についても医療人類学の立場からとりあげる。	浜田恂子 浜平恵美子(九州芸術工科大学教授)	浜田恂子 浜平恵美子(九州芸術工科大学教授)
9	同上 ドストエフキーを中心に	神の問題を論じながら人間の通俗性を描くことにも腐心し続けたドストエフスキイの深い洞察力に触れる。またペトラシェフスキー事件により逮捕され、死刑の宣告を受けた彼の状況について考察する。	金沢美知子(放送大学助教授) 阿部玄治(千葉大学名誉教授)	金沢美知子(放送大学助教授) 阿部玄治(千葉大学名誉教授)
10	創造と人間 ギリシャ古典を中心に	古典ギリシャ思想、文学が、ソフィストの活躍する時様相を一変した状況を、歴史記述の態度の変化にみる。また相対主義者・プロタゴラスの人間理解のうちに、規準としての善の考えのある点に注目し、その意味を考える。	柳沼重剛(筑波大学名誉教授) 広川洋一(筑波大学教授)	柳沼重剛(筑波大学名誉教授) 広川洋一(筑波大学教授)
11	同上 創造の現場から	作曲は実際にどう行なわれるのかを、自らの創作過程を例に説明する。また口語自由律詩の創作にたずさわる立場から、俳句や短歌と異なり伝統の浅いこの詩型が現在直面している困難を解説し、その未来を展望する。	近藤譲(エリザベト音楽大学教授) 松浦寿輝(東京大学助教授)	近藤譲(エリザベト音楽大学教授) 松浦寿輝(東京大学助教授)
12	同上 歌を共通テーマとして	「うた」という大和言葉の語源の問題から出発し、規範のなかでの「無からの創造」という問題を考える。また日本の歌謡史のながれを辿ることで、人間と歌とのかかわりについて考察する。	笠原潔(放送大学助教授) 田仲洋己(岡山大学助教授)	笠原潔(放送大学助教授) 田仲洋己(岡山大学助教授)
13	同上 近代絵画と文学	明治期の日本において近代的な表現がいかに獲得達成されて行ったのかについて、絵画と文学という二つのジャンルを取り上げ、その相互の間の関係について注意を払いながら考察していく。	青山昌文(放送大学助教授) 島内裕子(放送大学助教授)	青山昌文(放送大学助教授) 島内裕子(放送大学助教授)
14	自然と人間 自然の描写と自然観	「音楽と自然」というと音楽による自然描写の問題がすぐに頭に浮かぶが、音楽と自然とのもっと根源的な交点を荘子の思想に基づいて考える。また自然のミーメーシスの美学の諸問題をディドロやバトゥーの説から考える。	笠原潔 青山昌文	笠原潔 青山昌文
15	同上 歴史と自然	芸術における自然表現の諸問題を、クラークの所説などを紹介しながら、風景画の歴史をたどって考える。他方、西欧の歴史的世界で自然がいかに理論的、感情的に理解されたかの問題と、自然利用の発想のあり方を考える。	樺山紘一(放送教育開発センター教授) 青山昌文	樺山紘一(放送教育開発センター教授) 青山昌文

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
16	同上 風土論をめぐって	風土と民族性との関係は和辻哲郎以来、注目されて日本人論にも影響を与えたが、因果関係を具体的に検討する。また京都や東京という都市の季節感と住民の生活を文学作品のなかに探ってみたい。	祖父江孝男 島内景二(電気通信大学助教授)	祖父江孝男 島内景二(電気通信大学助教授)
17	同上 東洋思想と能	中世文学の立場から能を分析し、また怨霊や幽霊の登場する夢幻能は仏教と神道がいりまじって出来上がっているが、その思想的背景について哲学の立場から考える。	松岡心平 湯浅泰雄(桜美林大学教授)	松岡心平 湯浅泰雄(桜美林大学教授)
18	超越者と人間 天の思想	「天」はヨーロッパの神に比類される東アジア独特の観念で、特に最も古い、中国の「天」について考える。日本の場合には中国、インド、日本土着などの「天」が超越者としてまざっており、これについても考える。	溝口雄三(東京大学教授) 黒住真(東京理科大学助教授)	溝口雄三(東京大学教授) 黒住真(東京理科大学助教授)
19	同上 上代文学・言魂などをテーマとして	上代日本文学に登場する言魂をとりあげ、更に民俗学の立場から折口信夫、柳田国男の言魂信仰に関する論叢を紹介し、人と自然とのかかわりあいや草木虫魚のことばを人間がどう理解したかなどの問題について考える。	稲岡耕二(上智大学教授) 宮田登(筑波大学教授)	稲岡耕二(上智大学教授) 宮田登(筑波大学教授)
20	同上 音楽と芸術	音楽と超越者との交わり方には二型がある。音楽を通じて超越者と交わるものと、音を通じて超越者と直接交わるものである。他方、芸能については人間が人間以上のものを意識して交信する手続きだという側面から捉える。	笠原潔 大橋力(放送教育開発センター教授)	笠原潔 大橋力(放送教育開発センター教授)
21	同上 東洋におけるキリスト教の受容	宗教的熱狂とは無縁と言われる中国人を惹きつけた、太平天国運動の上帝信仰をとりあげる。また北京のイエズス会士による朝鮮キリスト教は伝統儒教との摩擦から弾圧へと発展したが、この点についても考察する。	小島晋治(神奈川大学教授) 姜在彦(花園大学教授)	小島晋治(神奈川大学教授) 姜在彦(花園大学教授)
22	コミュニケーションと人間 非言語的コミュニケーション	non-verbal communication, ボディランゲージ等とよばれる身振り、ジェスチャーなどについて国語学の立場からとりあげ、更にこれらが民族によってどう異なるかについて文化人類学の立場から比較考察する。	林四郎(明海大学教授) 野村雅一(国立民族学博物館助教授)	林四郎(明海大学教授) 野村雅一(国立民族学博物館助教授)
23	同上 交通について	人間は社会的動物なので、交通は人間にとり本質的意味を持つ。また文明の進歩につれ複雑化した人間の欲求が、交通を多様化し拡大したことを歴史は示しているが、人間と交通との関わりを本質と歴史の両面から考察する。	中埜肇(放送大学教授) 浜口允子(放送大学教授)	中埜肇(放送大学教授) 浜口允子(放送大学教授)

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
24	同上 東日本と西日本の交流	東日本と西日本は先史以来、長期にわたり二つの異なる文化圏だったが、次第に交流が起こり、現在にいたる。この過程を歴史的に概観するか特に徒然草などに記されている当時の東西交流の状況についても検討する。	祖父江孝男 久保田淳(東京大学教授)	祖父江孝男 久保田淳(東京大学教授)
25	同上 近代語の成立	日本語における近代語には種々とらえ方があるが、明治以後では国家意識との関連は否定できず、この点を考える。印欧語の場合はゲルマン語やスラヴ語が更に分化し、近代民族の成立と関連して近代語を生む過程を考える。	吉田東朔(鶴見大学教授) 阿部玄治	吉田東朔(鶴見大学教授) 阿部玄治
26	技術・情報と人間 技術の歴史	技術はすべての民族にとっての文化の基礎であり、技術の原点には人間の技(わざ)と思想がある。なお思想が技術に大きな影響を及ぼした例として、太平洋戦争中の日本の兵器のアンバランスをとりあげてみたい。	祖父江孝男 飯田賢一(東京工科大学教授)	祖父江孝男 飯田賢一(東京工科大学教授)
27	同上 建築を中心に	建築と哲学の関係の問題をゴシック建築などを例として、パノフスキーの所説などを紹介しながら考える。また地方、伝統とはあまりにかけはなれた建築が多いために起こる伝統的技術喪失の問題などについても触れたい。	青山昌文 本間博文(放送大学教授)	青山昌文 本間博文(放送大学教授)
28	同上 情報となるもの・ならないもの	情報化されるものと、自体は情報化されないが、情報化そのものを可能にするものと両者間の相違を考える。また情報化社会は省時間化を求めるが、情報処理の枠組みを造るためには時間が重要な役割を果たすという点を考える。	木田元(中央大学教授) 笠原潔	木田元(中.大学教授) 笠原潔
29	同上 情報、そして人間の未来	情報化の歴史と現状、現在の人工頭脳の可能性と限界を明確にし、人間と情報との関連性を論ずる。また人間の心の働きをコンピューターの作動との類比日で明確にできるとしたら、その条件は何で、限界はどこかを考察する。	伊藤公一(放送大学助教授) 杉田繁治(国立民族学博物館教授)	伊藤公一(放送大学助教授) 杉田繁治(国立民族学博物館教授)
30	まとめ	人間についてのさまざまな基本的問題を人文科学の諸分野の立場から学際的にとりあげてきたが、この章では全体を振返って総括し、更にいろいろ補足的解説をつけ加え、諸分野の相互関係についても改めて概観する。	祖父江孝男	祖父江孝男